

# 八幡原A・B 上 滝 元島名A

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第3集—

1981

群馬県教育委員会  
群馬県埋蔵文化財調査事業団



八幡原A・B、上滝、元島名A正誤表

訂正箇所		訂正内容 (誤→正)	訂正箇所		訂正内容 (誤→正)
P12	下から9行目	浅間山の爆裂→浅間山の噴火	69図	6号、7号溝(図中)	17(Ⅳ)→18(Ⅳ)
P28	下から15行目	同上	77図	(図中)	19号溝→10号溝 10号溝→19号溝
7図	54L08トレンチ (図中及び注記中)	3(Ⅱ)→3 3Ⅱ層→3	P139	上から4行目	径40前後→径40cm前後
8図	54I11~K11 トレンチ(図中)	3(Ⅱ)→3	44表	3	蛇紋岩→流紋岩
10図	54J16トレンチ(図中)	6(Ⅲ)→6(Ⅱ)	91図	(図中)	新保中村→新保田中村 勝島村→櫛島村 字貫村→宇貫村
11図	54J-K17 東西トレンチ(図中)	3(Ⅱ)→5(Ⅱ)	P117	上から3行目	引安8年→弘安8年
10表	柱 表下	元禄2年水張→元禄2年水帳 水張巾→水帳中 (旧歴)→(新暦)	P179	上から16行目	内接部→内折部
P31	上から10行目	元禄2年水張→元禄2年水帳	P193	上から10行目	同上
P35	下から8行目	寛文2年→寛文4年	101図	右上隅	(口縁部の長さを下部の長さで剰した値)→ (口縁部の上部の長さを下部の長さで除した値)
P37	註(4)	角淵八幡宮塚→角淵八幡宮縁起	103図	3e(上)	3e→3d
P37	註(10)	なお利根川の交流→なお利根川の変流	P183	上から14行目 上から19行目	成作意識→製作意識 同上
P45	下から10行目	建等→建物等	P190	上から14行目	2類土器→2群土器
P53	下から7行目	20cm間隔→20m間隔	P197	下から1行目	両側は形態→両例は形態
23図	No.7(注記中)	4Ⅵ層→4Ⅳ層	P202	註(18)	高崎市線貫町→高崎市綿貫町
	No.8(図中)	6Ⅵ→6Ⅳ	P202	註(74)	赤堀村鹿村島遺跡→赤堀村鹿島遺跡
	No.10(図中)	6Ⅵ→6Ⅳ	図版3		堅穴住居址→竪穴住居址
P76	上から10行目	確認図の→確認面の	図版5		井土址→井戸址

資料	財団法人埋蔵文化財 調査事業団保管	01-320
		11
No. 1-2442	平成2年3月31日	6)



# 八幡原A・B 上 滝 元島名A

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第3集一

1981

群馬県教育委員会  
群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序 文

関越自動車地域埋蔵文化財発掘調査は、昭和48年以来、すでに丸8年の長きにわたり、十数遺跡の調査が行なわれてきています。しかし、その整理については、昭和54年度にようやく「下郷」を刊行することができました。

昭和55年度には、関越自動車地域埋蔵文化財発掘調査の事業が、県教育委員会の組織改正により、群馬県埋蔵文化財調査事業団に移管され、整理事業も本格的に開始されることになりました。今年度は、温井遺跡（藤岡市）、上滝・八幡原遺跡（高崎市）の二班体制で整理を進め、関越自動車道地域埋蔵文化財調査報告第二・第三集として公刊できる運びとなりました。

上滝、八幡原遺跡はともに井野川と利根川にはさまれた平坦地にあり、特に井野川左岸段丘崖上にある遺跡で、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世の遺構等、複雑なあり方を示しています。こうした中で、古墳時代の土器を出土する遺構の種類とあり方からみた器形・技法上からみた変化、河川の変遷と合わせた火山泥流の動きと地形の変化、近世の田畑のあり方からの遡及による旧地割、地目の復原、及びその経緯など新しい視点からの研究成果を盛りこんでいます。

その成果は、従来の研究に対して新しい視点を与えるものであり、地域研究の総合化とも言うべきものであります。こうした研究は、単に考古学研究の方法を超えたものであり、地域に真に根ざしたものであることができましよう。

この研究の成果が、広く公刊され、地域史研究の一つのあり方として、みなさまのご批正を受けることによって、真の地域史研究に寄与できれば、本報告書にとって望外の喜びであります。本報告書の完成までに各段階で、いろいろな形でかかわられた各位の労に対し、心より敬意を表するとともに、本書が研究者・一般県民にご活用いただけますようお願いし、序といたします。

昭和56年3月25日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎





## 例 言

1. 本書は関越自動車道新潟線建設工事に伴い事前調査された八幡原A・B遺跡、上滝遺跡、元島名A遺跡の調査報告書である。
2. 調査を実施した年月日はそれぞれ以下のごとくである。

八幡原A、B遺跡	1次調査	昭和49年3月25日～同年7月2日
	2次調査	昭和49年11月18日～50年1月28日
上滝遺跡	1次調査	昭和50年9月22日～51年3月18日
	2次調査	昭和53年4月10日～同年6月15日
元島名A遺跡		昭和51年2月20日～同年3月12日
3. 調査は日本道路公団東京第2建設局の委託を受け群馬県教育委員会が直営事業として実施した。
4. 各遺跡の調査担当者、調査員は次のとおりである。なお下記の所属は昭和55年時点のものである。

八幡原A、B遺跡担当者	平野進一（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
同 上	清水和夫（群馬大学教育学部附属小学校）
同 上	佐藤明人（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
同 上	下城 正（同 上）
調査員	森 尚登（千葉県千葉市立第一真砂中学校）
上滝遺跡 担当者	松本浩一（前橋市教育委員会社会教育課）
同 上	平野進一（前 出）
同 上	巾 隆之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
同 上	佐藤明人（前 出）
調査員	西田建彦（群馬県教育委員会文化財保護課）
元島名A遺跡 担当者	松本浩一（前 出）
同 上	平野進一（前 出）
同 上	佐藤明人（前 出）
5. 本書の執筆者は次のとおりである。文責については文末に姓のみ記す。








松本浩一、平野進一、下城正、巾隆之、佐藤明人、西田建彦、阿久津宗二（群馬県教育委員会県史編纂室）、大江正行（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、山本朋子（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
6. 本書の作成、及び資料整理は次の者が担当した。各々が主に分担した作業内容に従って記す。

遺構図版の作成・狩野えり子、須田恒子（旧姓藤井）、土器図版の作成・新井悦子、土器写真図版作成・長沼久美子、未実測土器の観察計測資料作成、土器復元指導・西田順子（旧姓塚田）、土器復元・高橋順子、中野秀子、平野照美、細井敏子、山田キミ子、生方淳子、土器写真撮影・佐藤元彦
7. 本書の編集は佐藤明人が担当した。
8. 本書の作成にあたり下記の諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

新井房夫、石川正之助、井上定幸、梅沢重昭、大木紳一郎、近藤義雄、都丸十九一、能登健、丸山知良、ふるさとを知る会（小野田成孝、川原嘉久治、栗原清、小池照一、田村力、福田昌弘）
9. 本遺跡の発掘調査においては地元関係者、大勢の発掘調査作業員の協力があつた。深く感謝の意を表したい。



## 凡 例

1. 本書における遺構番号は、住居址については発掘調査時付されたものをそのまま使用し、溝、土塚については1次、2次調査時に付した番号間に若干の欠番、重複が生じたため部分的に整理、変更した。
2. 全体図等を除く各遺構ごとの平面、断面図は原則として1/60に統一した。
3. 各遺構挿図の方向は上方が北になるよう努めたが図幅の関係でこのようにならないものもある。
4. 遺構挿図に見られる表現法、記号は従来のもとの基本的には変わらないが、落ち込みマークについて、急な場合  とし緩い場合は  とした。
5. 遺構挿図中平面図におけるスクリーントーンは次のことを表わす。  
 = 基盤面、または関東ローム層、  
 = 攪乱、  
 = 焼土帯、これ以外については各挿図中に記載しておく。
6. 土器実測図の縮尺は原則として1/3に統一した。
7. 土器実測図における断面の表示は次のことを表わす。  
 = 割れ口が接合面に一致しない。  
 = 割れ口が接合面に一致する。また断面中に割れ口の線を記入したものは確実なものに限っている。
8. 土器の実測図中、ハケメ、暗文状研磨における形状、本数等はできる限り忠実に表現した。
9. 土器、陶磁器等の観察内容はすべて表により記述した。
10. 表中、法量の項目中、高=器形の高さ、口=口縁の直径、頸=頸部の直径、胴=胴部の最大径、底=底部の直径、または脚部下端部の直径を表わす。単位はcm
11. 胎土中の砂粒の大きさについては、おおよそ0.25mm~2.0mmの間を3段階に分け、それぞれ細、中、粗で表わした。
12. 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖に基づいている。
13. 遺存状態の項目中( )内の百分率の数字は口縁部が全周遺存しているものを100とした場合の遺存率である。
14. 表中整形に関する用語において、斜行へら研磨、または放射状へら研磨は、いわゆる暗文状研磨を意味し、それ以外の研磨にはこの用語は使用していない。



# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例

## 本 文 目 次

### 八 幡 原 A 遺 跡

1	発掘調査に至るまでの経過 .....	2
2	発掘調査の経過 .....	2
3	遺跡の立地と環境 .....	5
4	調 査 方 法 .....	5
5	地 層 .....	8
6	検出した遺構・遺物 .....	9
	(1) 竪穴住居址 .....	9
	(2) 掘立柱建築遺構 .....	10
	(3) 土  坂 .....	11
	(4) 井戸址 .....	12
	(5) 溝 .....	12
7	考 察 .....	26
	(1) 溝、及び耕地の変遷 .....	26
	(2) 遺跡に関わる文献史料とその役割 .....	32
	(3) 地籍図利用への指適——地租改正地図—— .....	36

### 八 幡 原 B 遺 跡

1	発掘調査の経過 .....	40
2	遺 跡 の 位 置 .....	41
3	調 査 の 方 法 .....	41
4	検出した遺構・遺物 .....	41
	(1) 環  濠 .....	41
	(2) 井戸状遺構 .....	42
	(3) ビット列 .....	42
	(4) 溝 .....	42
5	考 察 .....	45

## 上 滝 遺 跡

1	発掘調査の経過	48
2	遺跡の立地と環境	50
3	調査の方法	51
4	試掘調査	53
5	地層	54
6	検出した遺構・遺物	55
	(1) 住居址	55
	(2) 掘立柱建築遺構	80
	(3) 土壇	83
	(4) 溝	104
	(5) 井戸址	138
	(6) 包含層出土土器	140
	(7) 石製品	158
	(8) 甕形土器1類(S字状口縁甕形土器) 観察表	160
7	考察	166
	(1) 榛名山二ツ岳の爆裂に伴う氾濫層の規模、及び経路	166
	(2) 遺跡の構成とその変遷	174
	(3) 出土土器の構成	177
	(4) 2群土器をめぐる問題点(1)	190
	(5) 2群土器をめぐる問題点(2)	194
	(6) 上滝遺跡出土の古式須恵器について	195
	(7) 中世陶器	197
	(8) 子持勾玉	198
	(9) 砥石	200
	(10) まとめ	201

## 元 島 名 A 遺 跡

1	発掘調査の経過	208
2	遺跡の位置	208
3	調査の方法	208
4	地層	208
5	遺構・遺物	209
6	まとめ	209

## 挿 図 目 次

### 八 幡 原 A 遺 跡

1 図	周辺の遺跡 1/35,000	4
2 図	遺跡地内近世耕地地割図 1/500	折り込み
3 図	八幡原A遺跡全体図 1/500	折り込み
4 図	竪穴住居址 1/60	9
5 図	掘立柱建築遺構 1/60	10
6 図	井戸址 1/60	11
7 図	2号、9号、10号、12号、30号溝 1/60	17
8 図	2号、3号、4号、9号、11号、13号溝 1/60	18
9 図	4号、5号、6号、8号、12号、13号溝 1/60	折り込み
10 図	13号、14号溝 1/60	19
11 図	15号、16号、17号、19号、25号、26号溝 1/60	20
12 図	18号、20号、21号、22号溝 1/60	21
13 図	竪穴住居址、包含層出土土器、石器 1/2、1/3、1/1	22
14 図	掘立柱建築遺構、包含層出土遺物 1/3	23
15 図	大鼻地区の耕地変遷図 約1/1,800	32
16 図	旧地籍図と現地地形図の対照 約1/1,000	34

### 八 幡 原 B 遺 跡

17 図	八幡原B遺跡全体図 1/600	折り込み
18 図	環濠、包含層出土遺物 1/3	43

### 上 滝 遺 跡

19 図	上滝遺跡全体図 1/1,000	折り込み
20 図	B地区、C地区トレンチ及び5号～9号、20号～23号溝 1/400	折り込み
21 図	D地区トレンチ及び24号～29号溝 1/400	折り込み
22 図	B地区、C地区トレンチ断面図及び7号、20号～23号溝 1/100	折り込み
23 図	C地区、D地区トレンチ断面図及び24号～29号溝 1/100	折り込み
24 図	B地区全体図 1/200	折り込み
25 図	1号住居址 1/60	55
26 図	1号住居址出土土器 1/3	57
27 図	1号住居址床面直上、住居址内土壇出土土器 1/3	59
28 図	2号住居址 1/60	60
29 図	2号住居址貼り床内、床面直上、覆土上部出土土器 1/3	62
30 図	2号住居址覆土中焼土帯出土土器 1/3	64
31 図	3号住居址 1/60	65
32 図	3号住居址床面直上、覆土中出土土器 1/3	66
33 図	5号住居址 1/60	68

34	図	6号住居址	1/60	.....	69
35	図	7号、8号住居址	1/60	.....	70
36	図	6号住居址、7号住居址内床面直上、焼土中、覆土中出土土器	1/3	.....	71
37	図	9号住居址	1/60	.....	72
38	図	10号住居址	1/60	.....	73
39	図	11号住居址	1/60	.....	74
40	図	9号住居址、11号住居址貼り床内、同住居址かまど内焼土中出土土器	1/3	.....	75
41	図	12号住居址	1/60	.....	76
42	図	12号住居址床面直上出土土器	1/3	.....	77
43	図	13号住居址出土土器	1/3	.....	78
44	図	掘立柱建築遺構	1/60	.....	81
45	図	B1区土塚群(1号~39号土塚)	1/120	.....	82
46	図	1号~9号土塚	1/60	.....	83
47	図	10号~36号土塚	1/60	.....	84
48	図	40号、41号土塚	1/30	.....	85
49	図	40号土塚出土土器	1/3	.....	86
50	図	41号土塚出土土器	1/3	.....	88
51	図	42号、43号土塚出土土器	1/3	.....	89
52	図	42号~49号土塚	1/60	.....	90
53	図	50号~59号土塚	1/60	.....	91
54	図	60号~62号土塚	1/60	.....	92
55	図	49号土塚、50号土塚出土土器	1/3	.....	94
56	図	54号土塚、58号土塚、59号土塚出土土器	1/3	.....	97
57	図	60号土塚、61号土塚、36、37B19不定形土塚、9号住居址内小ピット出土土器	1/3	.....	98
58	図	7号住居址床面下不定形土塚、40~41B14不定形土塚、38~40B15~16不定形土塚、 38B18不定形土塚出土土器	1/3	.....	100
59	図	1号溝	1/30、1/60	.....	折り込み
60	図	1号溝出土土器(1)	1/3	.....	105
61	図	同上(2)	1/3	.....	106
62	図	同上(3)	1/3	.....	107
63	図	同上(4)	1/3	.....	108
64	図	同上(5)	1/3	.....	109
65	図	同上(6)	1/3	.....	110
66	図	同上(7)	1/3	.....	111
67	図	2号、3号溝	1/60	.....	119
68	図	4号、5号溝	1/60	.....	120
69	図	5号、6号、7号溝	1/60	.....	121
70	図	2号溝、6号溝出土陶磁器	1/3	.....	122
71	図	6号溝出土陶器	1/3	.....	123
72	図	9号溝付近及び包含層出土土器群	1/60	.....	折り込み
73	図	9号溝付近包含層出土土器(1)	1/3	.....	126
74	図	同上(2)	1/3	.....	127
75	図	同上(3)	1/3	.....	128



76図	9号溝付近包含層出土土器(4) 1/3	129
77図	7号、10号、11号、14号、19号溝 1/60	135
78図	5号、6号、16号、17号溝 1/60	136
79図	11号溝、14号溝出土土器 1/3	137
80図	1号、2号、4号、5号、6号井戸 1/60	139
81図	6号井戸上面出土土器 1/3	140
82図	包含層出土土器(1) 1/3	141
83図	同 上 (2) 1/3	142
84図	同 上 (3) 1/3	143
85図	同 上 (4) 1/3	144
86図	同 上 (5) 1/3	145
87図	同 上 (6) 1/4	146
88図	同 上 (7) 1/3	147
89図	包含層出土縄文土器 1/2	157
90図	1号溝出土子持勾玉、包含層出土石製品 1/2、1/3	159
91図	周辺の遺跡と地形 1/40,000	167
92図	前箱田町、川曲町地域、滝川周辺の地形図及び柱状図 1/10,000	168
93図	上滝遺跡周辺のボーリング調査 1/20,000	171
94図	上滝遺跡周辺のボーリング調査柱状図	172
95図	遺跡の変遷 (1)	175
96図	遺跡の変遷 (2)	176
97図	壺形土器の分類	177
98図	壺形土器1類の肩部文様	178
99図	壺形土器3類の細分	178
100図	S字状口縁甕形土器(甕1類)の肩部ハケメ	179
101図	S字状口縁甕形土器口縁部形状、胴部整形相互関連グラフ	181
102図	卍形土器の分類	183
103図	杯形土器の分類	184
104図	杯形土器の内面整形	185
105図	碗形土器の分類	186
106図	碗形土器の内面整形	186
107図	高杯形土器(杯部)の分類	187
108図	高杯形土器(脚部)の分類	188
109図	高杯形土器(脚部)3類柱状部形状と内面整形	188
110図	器台形土器の分類	189
111図	新保遺跡141号住居址出土S字状口縁甕形土器	193

### 元島名A遺跡

112図	元島名A遺跡全体図 1/1,500	210
113図	元島名A遺跡土層柱状図	211

## 図 版 目 次

### 遺 構

#### 八幡原 A・B 遺跡

- 図版 1 八幡原 A、B 遺跡付近全景 南より
- 図版 2 八幡原 A 遺跡全景 南より 八幡原 B 遺跡全景 南より
- 図版 3 竪穴住居址全景 北より。竪穴住居址土層断面 西より
- 図版 4 掘立柱建築遺構 南より。東微高地区柱穴断面
- 図版 5 井戸址。土塚
- 図版 6 1号溝。同溝土層断面図 東より。4号、13号溝 南より
- 図版 7 6号、17号溝。6号溝。11号溝。14号溝 西より
- 図版 8 14号溝
- 図版 9 14号溝。18号、21号溝交叉部
- 図版10 18号溝 18号、22号溝交叉部。18号、27号溝
- 図版11 19号溝。19号、25号、26号溝。20号、23号溝交叉部。21号溝。22号溝。溝 54K18
- 図版12 環濠南側溝東延長部コーナー 西より。環濠南西コーナー 東より

#### 上 滝 遺 跡

- 図版13 上滝遺跡全景 西南より
- 図版14 上滝遺跡全景 南より。B地区東南部トレンチ調査 南より
- 図版15 54B32～C05トレンチ 南より。50C16～30トレンチ。54C24～30トレンチ。46C24～30トレンチ。20号溝
- 図版16 D地区全景、54C48～54D12トレンチ。54D12～54C48トレンチ。66D34～48トレンチ
- 図版17 B1区全景、土塚群 南より。B2区全景 南より
- 図版18 B3区全景、環濠、住居址群 東より
- 図版19 B2区東南隅土器群。同区中央部土器群。同区土器群全景 北より。同区北部土層断面

南より

- 図版20 1号住居址全景 西より。1号住居址遺物出土状態 北西より
- 図版21 1号住居址遺物出土状態。同住居址内土塚。同住居址掘り方面
- 図版22 2号住居址遺物状態全景 西より。同住居址遺物出土状態。同住居址覆土中焼土帯
- 図版23 3号住居址遺物 南より。同住居址遺物出土状態。同住居址全景。同住居址掘り方面
- 図版24 2号、5号、7号、8号住居址全景 西より。2号、10号住居址全景 西より
- 図版25 7号住居址かまど跡。同住居址床面下不定形土塚。同住居址南辺焼土帯。同住居址床面、及び土塚。6号住居址 南より
- 図版26 11号住居址全景 西より。同住居址かまど跡。12号住居址 西より
- 図版27 12号住居址遺物出土状態全景 北より。同住居址遺物出土状態。13号住居址遺物出土状態
- 図版28 掘立柱建築遺構全景 西より。柱穴
- 図版29 16号、17号土塚25号、26号土塚14号土塚。20号土塚 B1区土塚、11号土塚。同区宋銭出土状態
- 図版30 40号土塚。同土塚遺物出土状態。41号土塚。同土塚遺物出土状態
- 図版31 41号土塚。42号土塚。43号土塚。同土塚土層断面。44号、45号土塚。45号土塚土層断面
- 図版32 46号土塚。同土塚土層断面。49号土塚。同土塚遺物出土状態
- 図版33 12号住居址、50号土塚遺物出土状態。同土塚土層断面。51号土塚。同土塚土層断面
- 図版34 52号土塚。同土塚土層断面。51号～53号土塚（1号ピット群）東より。54号土塚
- 図版35 55号土塚。同土塚土層断面。56号土塚。同土塚土層断面。57号土塚。同土塚土層断面
- 図版36 58号土塚。同土塚遺物出土状態。同土塚土層断面。59号土塚
- 図版37 59号土塚遺物出土状態。60号土塚。同土塚土層断面。同土塚出土木材

- 図版38 60号土壇出土木材。61号土壇。同土壇遺物出土状態。同土壇土層断面
- 図版39 62号土壇。同土壇土層断面。58号～62号土壇北より。1号溝 B1区
- 図版40 1号溝遺物出土状態B1区南より。同溝遺物出土状態B4区南より
- 図版41 1号溝遺物出土状態B1区。同溝子持勾玉出土状態。同溝土層断面。同溝遺物、土層断面、同溝遺物出土状態
- 図版42 環濠(2号溝) 北東コーナー一部。同、南東コーナー一部。同、南西コーナー一部。同、北西コーナー一部。同、東側溝陶器出土状態。同、東側溝土層断面。同、西側溝土層断面。4号、5号溝北西より
- 図版43 4号溝土層断面北より。3号溝北より。5号溝B2区西より。同溝B4区東より。6号溝B2区西より。同溝B2区東より。同溝B4区東より。7号溝B2区南より
- 図版44 7号溝B2区西より。同溝B4区東より。B2区南部。9号、8号溝
- 図版45 10号、19号溝土層断面。12号溝土層断面。12号、13号溝。13号溝土層断面。11号溝西より
- 図版46 14号溝。15号溝北西より。同溝土層断面。16号溝。同溝土層断面。5号、17号溝土層断面
- 図版47 10号、18号、19号溝西より。19号溝西より。同溝土層断面。18号溝西より。同溝遺物出土状態
- 図版48 1号井戸。2号井戸。同井戸礫出土状態。4号井戸
- 図版49 5号井戸。6号井戸

#### 元島名A遺跡・その他

- 図版50 東西通しトレンチ全景。同トレンチ土層近接
- 図版51 元島名A遺跡及び將軍塚古墳北より。遺跡付近滝川右岸土層断面(93図 No.7地点)。川曲付近滝川左岸土層断面(92図 No.3地点)。簡易ボーリング調査スナップ

## 遺 物

### 八幡原A・B遺跡

- 図版52 竪穴住居址、包含層出土土器、石器
- 図版53 包含層出土遺物
- 図版54 環濠、包含層出土遺物

### 上 滝 遺 跡

- 図版55 1号住居址出土土器
- 図版56 同 上
- 図版57 同 上
- 図版58 2号、3号住居址出土土器
- 図版59 2号、6号、7号、9号、11号、13号住居址出土土器
- 図版60 12号住居址、40号土壇出土土器
- 図版61 41号、42号、49号、50号土壇出土土器
- 図版62 49号、50号、54号、58号、59号土壇出土土器
- 図版63 59号、60号、61号、不定形土壇出土土器
- 図版64 不定形土壇、1号溝出土土器
- 図版65 1号溝出土土器
- 図版66 同 上
- 図版67 同 上
- 図版68 同 上
- 図版69 同 上
- 図版70 同 上
- 図版71 2号、6号溝出土陶磁器
- 図版72 6号溝出土陶磁器
- 図版73 同上出土陶磁器、土器
- 図版74 9号溝付近包含層出土土器
- 図版75 同 上
- 図版76 同 上
- 図版77 9号溝付近包含層、14号溝、6号井戸出土土器
- 図版78 包含層出土土器
- 図版79 同 上
- 図版80 同 上
- 図版81 同 上
- 図版82 同 上
- 図版83 1号溝、包含層出土石製品
- 図版84 土器の文様、整形
- 図版85 土器の整形



# I 八幡原 A 遺跡

# I 八幡原 A 遺跡

## 1 発掘調査に至るまでの経過

本遺跡の発掘調査は「関越自動車道新潟線」建設に伴う、事前調査として実施したものである。関越自動車道建設に関連する、埋蔵文化財の発掘調査に関する経緯は、昭和54年度に刊行した「関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集一下郷一」に詳述しており、ここではその概要を記すにとどめる。

関越自動車道の建設に関しては、昭和44年1月に基本計画、同年6月に整備計画決定がなされ、同48年8月に正式路線が発表された。自動車道の通過する地域は、埋蔵文化財も広範に分布するところでもあるが、昭和46年に、群馬県教育委員会が日本道路公団の依頼に基づいて実施した、幅200mにわたる計画路線内の埋蔵文化財分布調査によると、渋川以南だけでも藤岡市の温井遺跡を始め22遺跡の存在が確認された。八幡原A、Bの遺跡もその中の一つである。

これら遺跡の取り扱いについて、群馬県教育委員会は、昭和46年度以後、日本道路公団東京建設局と協議を重ね、昭和48年4月に日本道路公団東京建設局長と、群馬県教育委員会教育長との間で「関越自動車道新潟線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する了解事項」を締結した。この了解事項に基づき、群馬県教育委員会は、昭和48年度から関越自動車道関連の発掘調査を、教育委員会の直営事業として実施することとし、佐波郡玉村町の下郷遺跡から調査を開始した。八幡原A遺跡もそのうちの一つであり、昭和49年度二次にわたって調査したものである。(松本)

## 2 発掘調査の経過

八幡原A遺跡の発掘調査は、昭和49年3月25日より開始した。調査区域が関越道路線内(80×140mの間)の約11,000㎡ほどの範囲に及び、現状から遺跡の性格把握が困難なため、まず発掘計画に基づき、トレンチによる遺構の検出に努めた。B遺跡についても同年4月10日より同様の調査方法で発掘に入った。調査はトレンチ内における遺構の確認、及びその関連性を追求したが、梅雨期に入った6月、両遺跡が低地に立地するために出水の影響を受け、調査継続が困難に至った。このため、水田部分の調査を終了した6月下旬に至り、調査を一時中断し、残された畑地部分の調査を渇水期に入る秋以降に再開することに決定した。すでに水田部分についてはトレンチ調査の後、遺構の拡張を試み、中世～近世にわたる多数の溝、中世を遡る溝、縄文前期の竪穴遺構等を検出した。このため第2次調査においては、畑地部分の平面発掘に入ることにした。

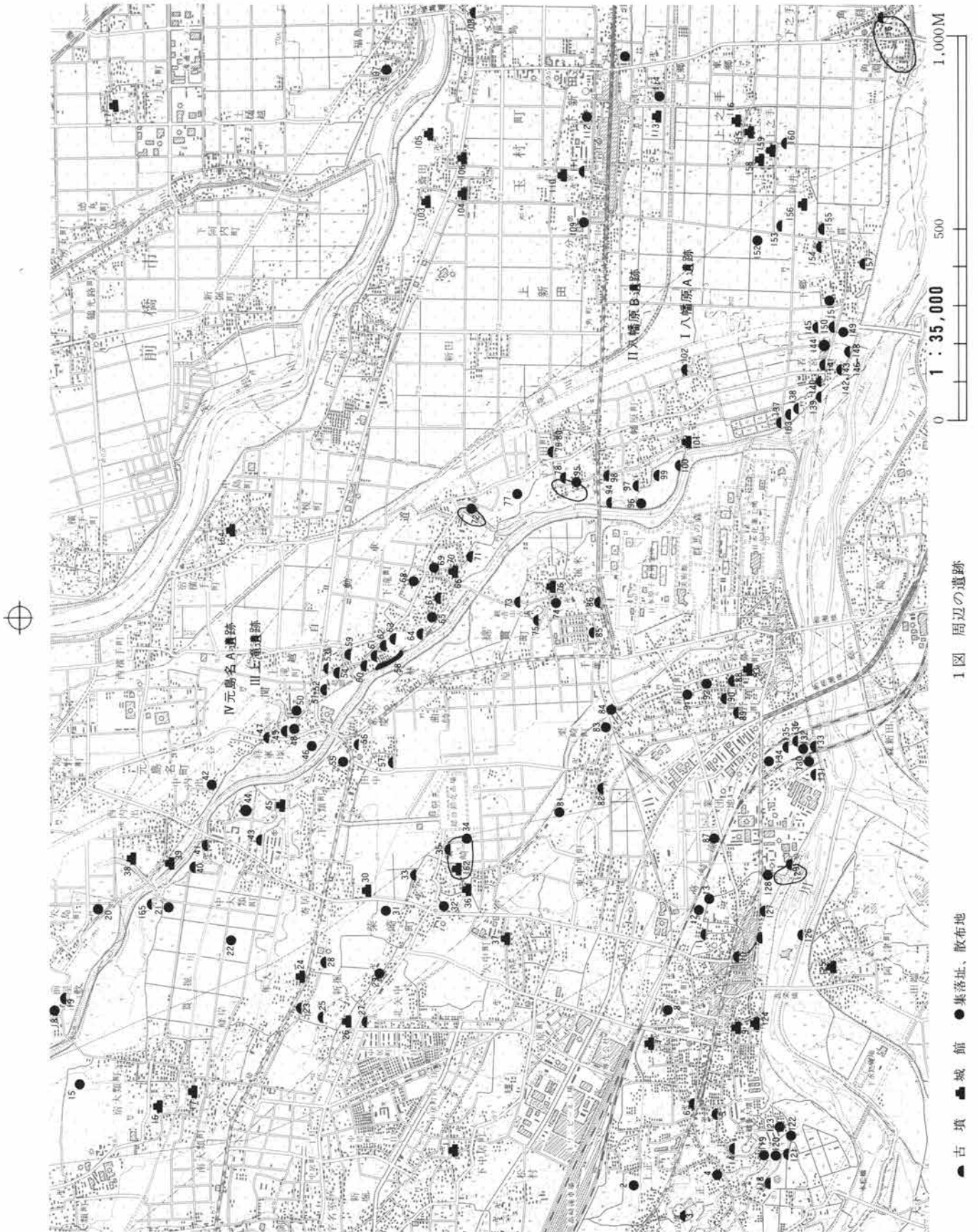
第2次調査は、八幡原A遺跡における第1次調査(昭和49年3月25日～昭和49年7月2日)に引き続き渇水期に入った昭和49年11月18日から昭和50年1月28日にかけての3ヶ月間にわたり発掘調査を実施した。

水田部分はすでに調査を終了しているので、調査区西側、及び東側の畑地部分に建設されている掘立柱建築遺構、土壇、井戸址等を完掘するための平面発掘に入った。調査によって西側畑地部分に土壇、溝、柱穴等、東側畑地部分に掘立柱建築遺構等を検出し、明けて昭和50年1月28日をもって本発掘調査を終了した。調査経過の概要については下記のとおりである。(平野)

1表 作業日誌

月 日	調査内容	備考
昭和49年3月25日(月)	発掘調査器材の運搬。調査区グリッド設定開始。	
3月26日(火)	関越自動車道中心杭を基軸にし、10×10m単位に基本杭を設定する。	
3月28日(木)	グリッド内に1.5×7mの試掘トレンチを南北に設定。発掘作業開始する。	発掘作業の開始。 プレハブ2棟を建設。
4月3日(水)～4日(木)	各トレンチの発掘作業を行なう。	水田部分より多数の溝が検出し始める。
4月6日(土)	各トレンチの発掘作業を行なう。遺構の写真撮影開始。発掘作業を中断し、B遺跡に主力を移す。遺構の写真撮影。	発掘作業を中断。
4月11日(木)～18日(木)	発掘作業を再開する。	発掘作業を再開。
4月19日(金)	基本トレンチ設定終了。トレンチ内土層断面の実測を開始。	
4月22日(月)～26日(金)	トレンチの精査。トレンチ土層断面の実測。	
4月30日(火)	トレンチの精査。トレンチ土層断面の実測。	
5月1日(水)～4日(土)	トレンチ精査。井戸状遺構の発掘。トレンチの拡張を開始する。	溝の方向性を確認
5月8日(水)	トレンチの拡張。集石遺構の拡張調査	
5月13日(月)～18日(土)	東西トレンチの発掘(バックフォーによる)。トレンチの精査。	東西トレンチの発掘。
5月20日(月)～24日(金)	トレンチの拡張。畑地部分のトレンチ発掘及び精査。竪穴住居址の発掘。	縄文時代前期住居址の検出。
5月27日(月)～6月1日(土)	畑地部分の精査。住居址、溝等の平板実測開始する。	溝、柱穴の確認。
6月3日(月)～8日(金)	溝の方向性確認のためのトレンチ設定。畑地部分の精査。遺構の写真撮影。	
6月10日(月)～15日(土)	溝交点の検出のためトレンチを設定。遺構の写真撮影。遺構の平板実測。	
6月17日(月)～20日(木)	ブルドーザーによる遺構の埋め戻し作業。水田部分の整地。畦の補修作業。全作業を終了。	埋め戻し作業開始。 調査を中断する。
11月10日(月)	第2次発掘調査を開始する。器材の搬入。	第2次調査開始。
11月19日(火)～23日(土)	畑地部分の調査を開始。	
12月2日(月)～4日(木)	畑地部分の調査。ブルドーザーによる排土作業。柱穴の検出作業。	
12月5日(金)	柱穴の検出作業。	
12月17日(火)～20日(金)	掘立遺構の平板実測開始。	東側畑地部分の掘立遺構1棟まとまる。
12月23日(日)～25日(火)	東側畑地部分の掘立遺構平板実測。	昭和49年の作業終了。
昭和50年1月8日(水)	畑地部分の精査。	昭和50年の作業開始。 城郭研究家山崎一氏視察。
11日(土)		
1月13日(月)	柱穴群の平板実測。東側畑地の掘立遺構の写真撮影。	
1月18日(土)	埋めもどし	ブル導入

I 八幡原A遺跡



1 図 周辺の遺跡

● 古墳 ■ 城館 ● 集落址、散布地



### 3 遺跡の立地と環境

本遺跡は高崎市八幡原町に所在する。付近一帯は水田地帯が広く展開し、この間に桑園を主とする畑地が微高地状に点在する。この地域一帯は洪積台地面上にあり、前橋台地と呼称されており、洪積層の上部は砂礫質の前橋泥流によって構成されている。<sup>(1)</sup>標高は遺跡地内においておよそ75mであり、北西方向に2.5/1,000の勾配で漸次高くなる。遺跡は西北方面を除く三方を井野川、烏川、利根川という県内でも屈指の大河に取り囲まれた南北1.5km、東西3kmのいわば台地とも言える地域のほぼ中央に位置している。この地域の西方を限る井野川は、榛名山南中腹を水源とし、遺跡の南方向700mで烏川に合流する中級河川であり、烏川との合流付近における河川敷と段丘上の比高差は10mに及ぶ。この井野川左岸、さらに烏川に沿う段丘上は洪積微高地が帯状に発達し、この微高地には、1図に示すように弥生時代以後の遺跡の分布が濃密に見られる。また、中世以前まで溯及できる村落もこの微高地に連なって見られる。遺跡に隣接する村落・八幡原村（現高崎市八幡原町）は、中世以前の姿は不明であるが「上野国群馬郡西部村志」（明治9年）の中に、「天文中文野郡平井城主、上杉憲政之ヲ領ス」との記載があり、さらに西北に隣接する村落、斉田村（現高崎市斉田町）は「万葉集上野国歌及和名抄に知られている鞆田（佐也田）郷」<sup>(2)</sup>に比定されている。

遺跡の北方500mには国道254号線が東西に走る。この道路は、近世（正保4年）以後、例幣使が通う街道として定着するに及び、日光例幣使街道と呼ばれるようになり、さらには「此の街道が中仙道の付属道路として、明和年中、道中奉行の直轄の官道となった」。このことは、近世以前においても「往古の東山道に当るべき道路で」東西交通の要衝としての重要性が増しつつあったと考えられている。<sup>(3)</sup>

日光例幣使街道13宿のうちの1宿、倉賀野はこの道路を西に、おおよそ3.5kmの行程にあり、ここで例幣使街道は中仙道より分岐する。また、東方500mで玉村に入る。この玉村周辺は近世初頭（慶長年間）の天狗岩用水の開削以前は、「平々たる野原」であったと言われ、<sup>(4)</sup>この用水の開削により周辺の新田開発が進み、農民の移入により上新田、下新田として成立した村落であり、その後例幣使街道の13宿の中の1宿として「玉村宿」と呼ばれ発展するに至ったものである。<sup>(5)</sup>

遺跡の北方400mの地点では、広域農業用水天狗岩用水、（滝川）が南東方向から東方へ、その流路を転じている。天狗岩用水はこれより北3.5kmの上滝付近より以南は、この以北とは対象的に直線的に走っており、以北が秋元氏により開削され、越中堀と称されるに対し、以南は関東郡代、伊那備前守忠次により同じ慶長年間に開削されたものであるといわれ、「代官堀」、または、「備前堀」と呼ばれている。<sup>(6)</sup>本遺跡地内の現水田を始め付近一帯の水田はこの用水に依拠している。遺跡はこうした環境の中で、微高地、及び低湿地が入り組んだ地形に占地し、中世以前に及ぶ生産遺構を中心に構成される。（佐藤）

### 4 調査の方法

関越自動車道建設予定区域は幅員約80mを有し、本遺跡をN-21°-Wの方向に貫く。遺跡の南北方向の範囲については、昭和46年度に実施した分布調査に基づき、東方、及び西方から路線予定区域内に伸びる微高地の広がりを中心に、およそ140mを予想し、本発掘調査においてはまずこの南北140m、東西80mの区域に範囲確定、及び遺構確認を目的とする基本トレンチを、あらかじめ設定したグリッドに従って配置した。遺構の広がりに応じてトレンチを追加設定し、また2次調査では、東、西の両微高地区において平面発掘調査を実施

## I 八幡原A遺跡

2表

## 周辺の遺跡

番号	名 称	種 別	時 代	番号	名 称	種 別	時 代
1	下中居環濠宅跡群	城館跡	安土・桃山	49		古 墳(円)	—
2		条里跡	奈良・平安	50		散布地	—
3	浅間山古墳	古 墳	古 墳	51	慈眼寺A号墳	古 墳(円)	古 墳
4	正六古墳群	古墳群(方円アリ)	古 墳	52	慈眼寺大師堂古墳	"	"
5	小鶴巻古墳	古 墳(円)	"	53	慈眼寺C号墳	" (円)	"
6	七仏薬師古墳	" (")	"	54	御伊勢山古墳	" (方円)	"
7	永泉寺の砦跡	砦 跡	室 町	55		散布地	"
8	倉賀野中町遺跡	散布地	古 墳	56		古 墳	"
9	倉賀野町西城跡	城 跡	安土・桃山	57	稲荷塚古墳	"	"
10	綜倉賀野町23・33号墳	古 墳	古 墳	58	下滝遺跡	集落跡	"
11	長賀寺山古墳	" (円)	"	59	三反畑85号墳	古 墳(円)	"
12	諏訪神社遺跡	散布地	"	60	" 82号墳	" (")	"
13	諏訪神社遺跡	"	奈良・平安	61	" 80号墳	" (")	"
14	大鶴巻古墳	古 墳	古 墳	62	下滝町甲78・81号墳	" (")	"
15		散布地	縄 文	63	三反畑乙78号墳	" (")	"
16	大類城跡	城 跡	安土・桃山	64		" (")	"
17	大類館跡	館 跡	鎌倉・室町	65		散布地	"
18		散布地	—	66		古 墳(円)	"
19	薬師塚古墳	古 墳(円)		67	八幡塚古墳	" (")	"
20	鈴ノ宮遺跡	散布地	古 墳	68		散布地	"
21		"	弥 生	69	中道遺跡	集落跡	縄 文
22		"	古 墳	70	中道居館跡	館 跡	室 町
23	諏訪山古墳	古 墳(円)	"	71	中道327の2(番地)古墳	古 墳(円)	古墳
24	隼人屋敷跡	屋敷跡	室 町	72		散布地	—
25		古墳群(円)	古 墳	73	綜岩鼻18号墳	古 墳(円)	"
26	高井屋敷跡	屋敷跡	鎌倉・室町	74	綿貫町堀米遺跡	散布地	"
27	かぐら塚古墳	古 墳(円)	古 墳	75	下斉田遺跡	集落跡	古墳
28	富士塚古墳	"	"	76	堀米屋敷跡	屋敷跡	安土・桃山
29		"	弥 生	77		散布地	—
30	大類寄居跡	城館跡	室 町	78		古墳群	—
31		散布地	古 墳	79	諏訪甲341(番地)古墳	古 墳(円)	古 墳
32		"	"	80	天神山古墳	"	"
33	浅間山古墳	古 墳(円)	"	81	栗崎町宮原・栗崎境遺跡	散布地	古墳・平安
34		散布地	"	82	飯玉山古墳	古 墳(方円)	古 墳
35	イナリ塚古墳	古 墳(円)	"	83	栗崎町原遺跡	散布地	"
36	柴崎屋敷跡	屋敷跡	安土・桃山	84		"	"
37	矢中七騎の遺跡	城館跡	"	85	堀米古墳群	古墳群(円)	古 墳
38	島名城跡	城 跡	室町・桃山	86	不動山古墳	古 墳(方円)	"
39	元島名内出跡	城館跡	安土・桃山	87	倉賀野条里跡	条里跡	奈 良
40		古 墳	古 墳	88	桃山古墳	古 墳	古 墳
41	浅間山古墳	"	"	89		" (円)	"
42	中内出遺跡	散布地	"	90	首切山古墳	"	"
43		古 墳	"	91	岩鼻町延養寺遺跡(台新田町台南遺跡)	散布地	奈良・平安
44		散布地	"	92	岩鼻町延養寺遺跡	"	縄 文
45	降照屋敷跡	屋敷跡	室 町	93	岩鼻陳屋跡	陣屋跡	江戸・明治
46	鍛冶分遺跡	散布地	古 墳	94		墳 墓	—
47	將軍塚古墳	古 墳(方円)	"	95		散布地	—
48		散布地	"				

## 4 調査の方法

番号	名 称	種 別	時 代	番号	名 称	種 別	時 代
96		散布地	—	146	若宮古墳	古 墳(円)	古 墳
97	針塚古墳	古 墳(円)	古 墳?	174	"	" (")	"
98		" (")	—	148	"	" (")	"
99	コンピラ山古墳	" (")	古 墳	149	八幡原遺跡	集落跡	弥 生
100	天王山古墳	" (")	"	150	八幡原古墳群	古墳群	古 墳
101	八幡原館跡	館 跡	鎌 倉	151	八幡原遺跡	散布地	古 墳
102	稲荷山古墳	古 墳(円)	古 墳	152		"	"
103	町田屋敷跡	屋敷跡	戦 国	153		古墳群(円)	"
104	石原屋敷跡	"	"	154	宇貫古墳群	" (")	"
105	田口屋敷跡	"	"	155	上ノ手薬師前古墳	古 墳(")	"
106	田村屋敷跡	"	"	156	新井屋敷跡	屋敷跡	戦 国
107	上福島遺跡	散布地	古 墳	157	宇貫古墳群	古墳群	古 墳
108	天神様古墳	古 墳(円)	"	158	原亀太郎屋敷跡	屋敷跡	戦 国
109	与六遺跡	散布地	"	159	原喜久美屋敷跡	"	"
110	玉村八幡館跡	館 跡	戦 国	160	若王子古墳	古 墳(円)	古 墳
111	玉村八幡古墓	墳 墓	室 町	161	角瀨古墳群	古墳群(円)	"
112	玉村中学校々庭遺跡	散布地	—	162		城館跡	室 町
113	内田屋敷跡	屋敷跡	戦 国	163	前原1052(番地)古墳	古 墳(円)	古 墳
114	上之手遺跡	散布地	古 墳	164	田口屋敷跡	屋敷跡	戦 国
115	重田屋敷跡	屋敷跡	戦 国	165		古 墳(円)	古 墳
116	秋山屋敷跡	"	"	166	萩原城跡	城 跡	安土・桃山
117	力丸城跡	城 跡	"	167	下川瀨3号墳	古 墳	古 墳
118	下佐野古墳群	古墳群	古 墳	168	浅間神社古墳	"	"
119		散布地	—	169	宿阿内城跡	城 跡	"
120	下佐野戸崎遺跡	"	古 墳	170		古 墳(円)	"
121	大山古墳	古 墳(円)	"	171	天神山古墳	古 墳	"
122	倉賀野万福寺遺跡	散布地	"	172	上川瀨97号墳	"	"
123	倉賀野万福寺遺跡	"	縄 文	173	二子山古墳	"	"
124	倉賀野城跡	城 跡	鎌倉・室町 安土・桃山	174	乞食塚古墳	"	"
125	木部北城跡	"	安土・桃山	175	オトウカ山古墳	"	"
126	綜倉賀野町56号墳外12基	古墳群(円)	古 墳	176	ボンゼン塚古墳	"	"
127	綜倉賀野町40号墳	古 墳(")	"	177	亀塚山古墳	"	"
128	倉賀野町下町橋東遺跡	散布地	"	178	上陽24号墳	"	"
129		古墳群(円)	"	179	" 15号墳	"	"
130	倉賀野大道遺跡	散布地	"	180	二子山古墳(金冠塚古墳)	"	古 墳
131	綜倉賀野町75~182号墳	古墳群(円)	"	181	薬師塚古墳	"	"
132	倉賀野大応寺遺跡	散布地	"	182	上陽13号墳	"	"
133	綜倉賀野町132号墳外27基	古墳群(円)	"	183	アミダ山古墳	"	"
134	倉賀野大道南遺跡	散布地	古 墳	184	上陽18号墳	"	"
135	綜倉賀野町189号墳外5基	古墳群(円)	"	185	" 17号墳	"	"
136	大応寺遺跡	古 墳・散布地	"	186	" 12号墳	"	"
137	前原1052(番地)古墳	古 墳(円)	"	187	オーボ山古墳(文珠山古墳)	"	"
138	若宮2133(番地)古墳	" (")	"	188	上陽33号墳	"	"
139	" 2149(番地)古墳	" (")	"	189	角瀨遺跡	散布地	"
140	鈴塚古墳	" (")	"				
141	若宮2040(番地)古墳	" (")	"				
142	若宮古墳	" (")	"				
143	八幡原2019(番地)古墳	" (")	"				
144	若宮遺跡	集落跡	縄 文				
145	若宮古墳	古 墳(円)	古 墳				

## I 八幡原A遺跡

した。

**グリッド設定法** 路線予定区域内には、その中央に20mごと、建設工事用測量杭が設置されており、この杭には国家座標値が取り付けられている。グリッドの設定は、この杭を基準にして行なった。つまりこの杭の中のS T54+00、及び100m北方のS T55+00と称される両杭を結ぶ線をグリッドのx軸方向の中心軸とした。x軸、及びこれに直行するy軸を各々5mごとに分割し、これにより設けられる区画を最小グリッドとした。最小グリッドの呼称法は、x軸はS T54+00から55+00の間100m—20グリッドに00から19の数字、Y軸にはアルファベットを配しS T55+00の間は54 J 16、または54 L10等と呼ぶことにした。

**トレンチの配置法** 第1次調査においては、まず基本トレンチを設定することから始めた。基本トレンチは南北7m、東西1.5mの大きさとし、これを低湿地区では4グリッド(10×10m)ごとに1本、微高地区では2グリッド(10×5m)に1本、総数112本設定した。次いでこの基本トレンチによる発掘調査が進行するに従って、遺構が確認されるに及び、その広がりに応じて要所にトレンチを追加設置し、あるいはグリッドに沿ってトレンチを拡張する等した。溝の調査においては、最終的に東西方向に遺跡を貫く幅1mのトレンチ(東西トレンチ)を20m間隔に設定し、溝の確認漏れを防いだ。

西微高地区 東微高地区においては、第1次調査時の遺構確認に従って、第2次調査時において平面発掘調査を行なった。(佐藤)

## 5 地 層

本遺跡の地層は、B遺跡と同様水田と畑地ではその堆積状態が異なり、その生成においても相違がある。水田部分の地層は、表土層より灰白色シルトの基盤層までI～V層の堆積がみられる。畑地部分の地層は表土層より黄褐色ローム層まで、4層の堆積がみられる。その概要は次のとおりである。

### 低湿地区の地層

- I層 上部は灰褐色土層(15～20cm) 現在の水田耕作土層である。
- II層 褐色土層(15～20cm) 細かい軽石を含む褐色土で、酸化鉄分が薄く数条にわたって帯状をなし、水田耕作土層であることがわかる。場所によっては、最下部に浅間B軽石層の薄い純層が見られる。
- IV層 黒色土層(10～15cm) 微高地区の黒色土層と比べ粘性がある。
- V層 灰白色土層 シルト質であり、ローム層に相当するが、微高地区と比べ還元状態にある。

### 微高地区の地層

- I層 灰褐色土層(70～80cm) 浅間A軽石を主体とする混土層。上部は現畑地の耕作土層である。
- IV層 黒色土層(10～15cm) 低湿地区の黒色粘質土層に相当、遺物包含層である。
- V層 黄褐色土層 ローム層

以上、本遺跡の地層を記した。特に低湿地区のI～II層褐色土層において、土層の成因、検出した多数の溝との関連から、中世から近世にわたる水田耕作土と考えられるものである。また、八幡原A、B両遺跡とも畑地部分の微高地区においては、II層にあたる浅間B軽石を含む土層は削平、消失し、第1層から、第IV層の黒色土層に移っている。なお本遺跡の層序は上滝遺跡との対応を考慮したためIII層を欠く。(平野)



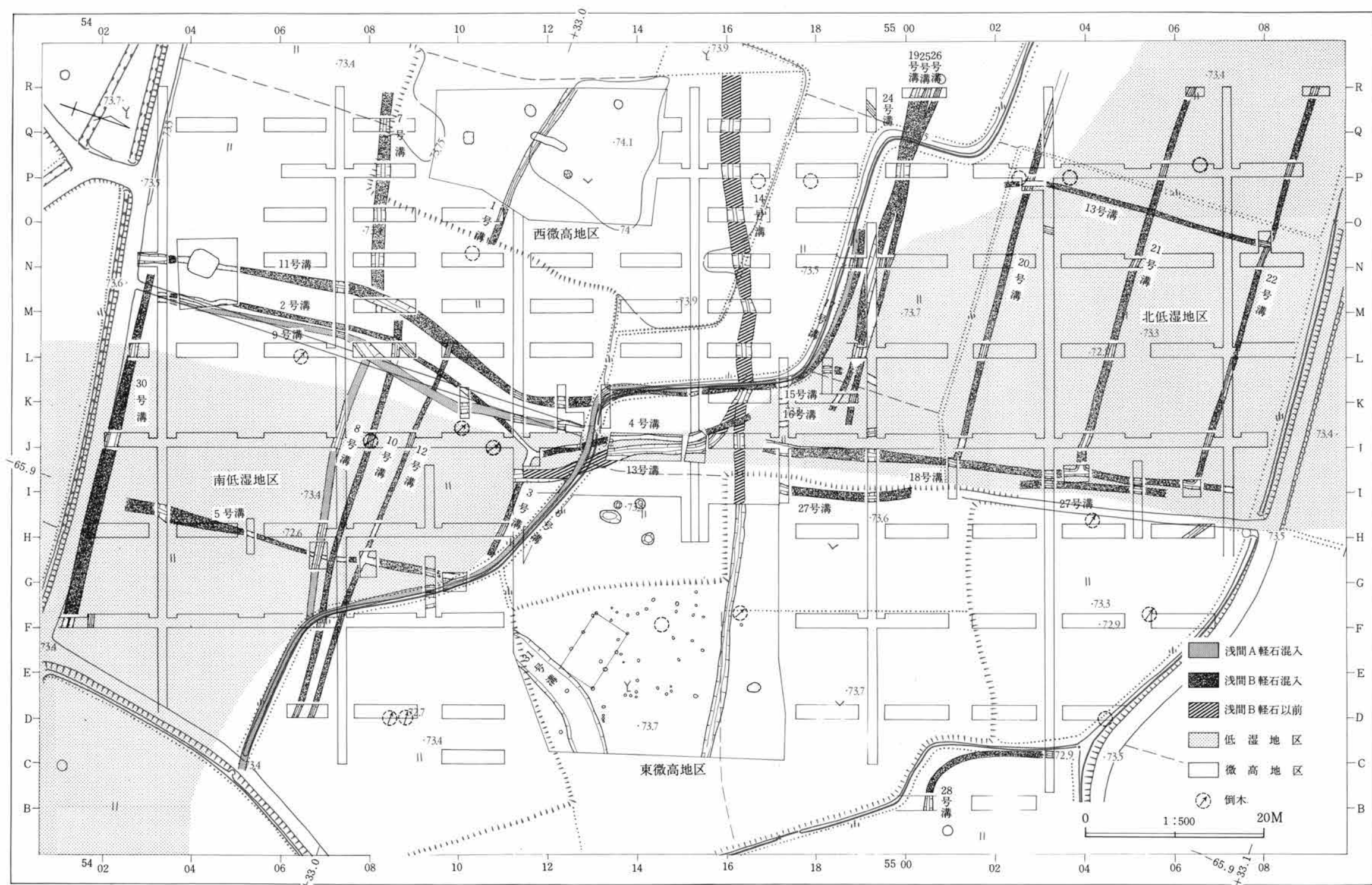
▨ 正保2年以前より水田  
 ● 正保2年～寛文4年の間に畑地開発  
 ⊞ 寛文4年～天和3年の間に畑地開発  
 ※番号は近世、明治の地番

1:500

2 図 遺跡地内近世耕地地割図



图 5 零件的视图



3 図 八幡原A遺跡全体図



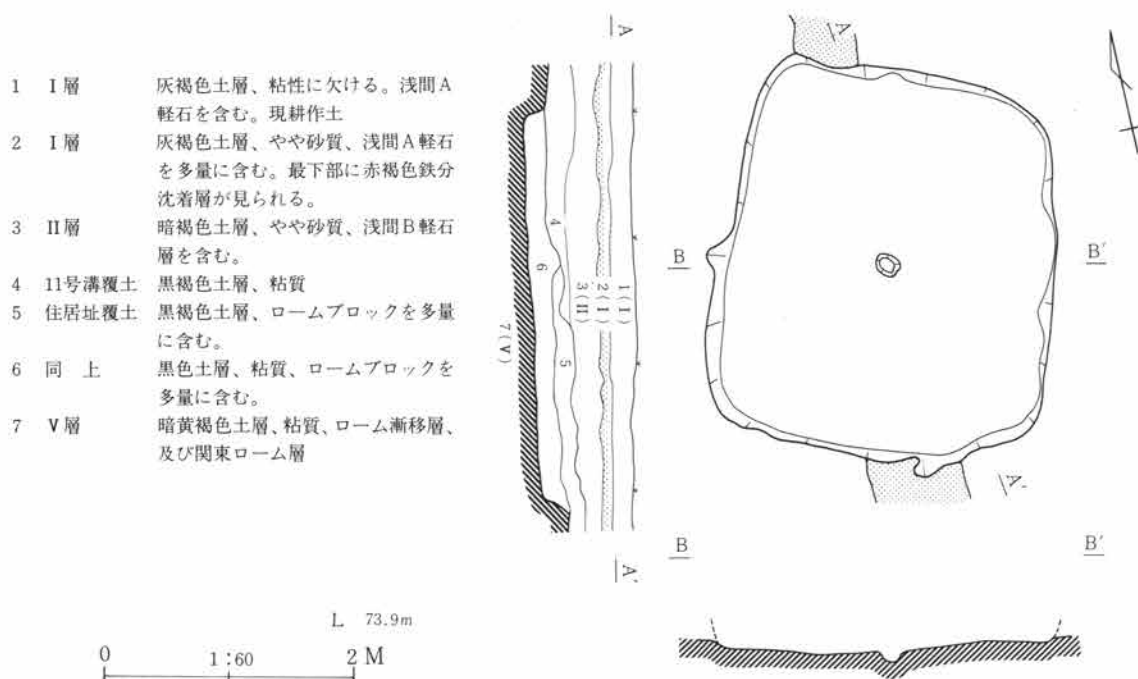


## 6 検出した遺構・遺物

## (1) 竪穴住居址(4図 図版3)

位置 54N4グリッドに位置し、西微高地区東南の東縁辺部に立地している。

平面形・規模 四隅が丸く南壁が北壁より若干長くやや梯形をなし、長軸3.05m、短軸2.58mで長軸方向はN-18°-Eを示す。



4図 竪穴住居址

周壁 上部は旧耕作土によって削平されており、壁はローム漸移層上面から確認され、約20cmの高さでは直立に掘り込まれている。

周溝 なし。

床面 灰白色粘質土上面に構築され、固くしまった面は確認されず平坦であるがやや凹凸が目立つ。

柱穴・炉 丹念に精査したが確認されなかった。

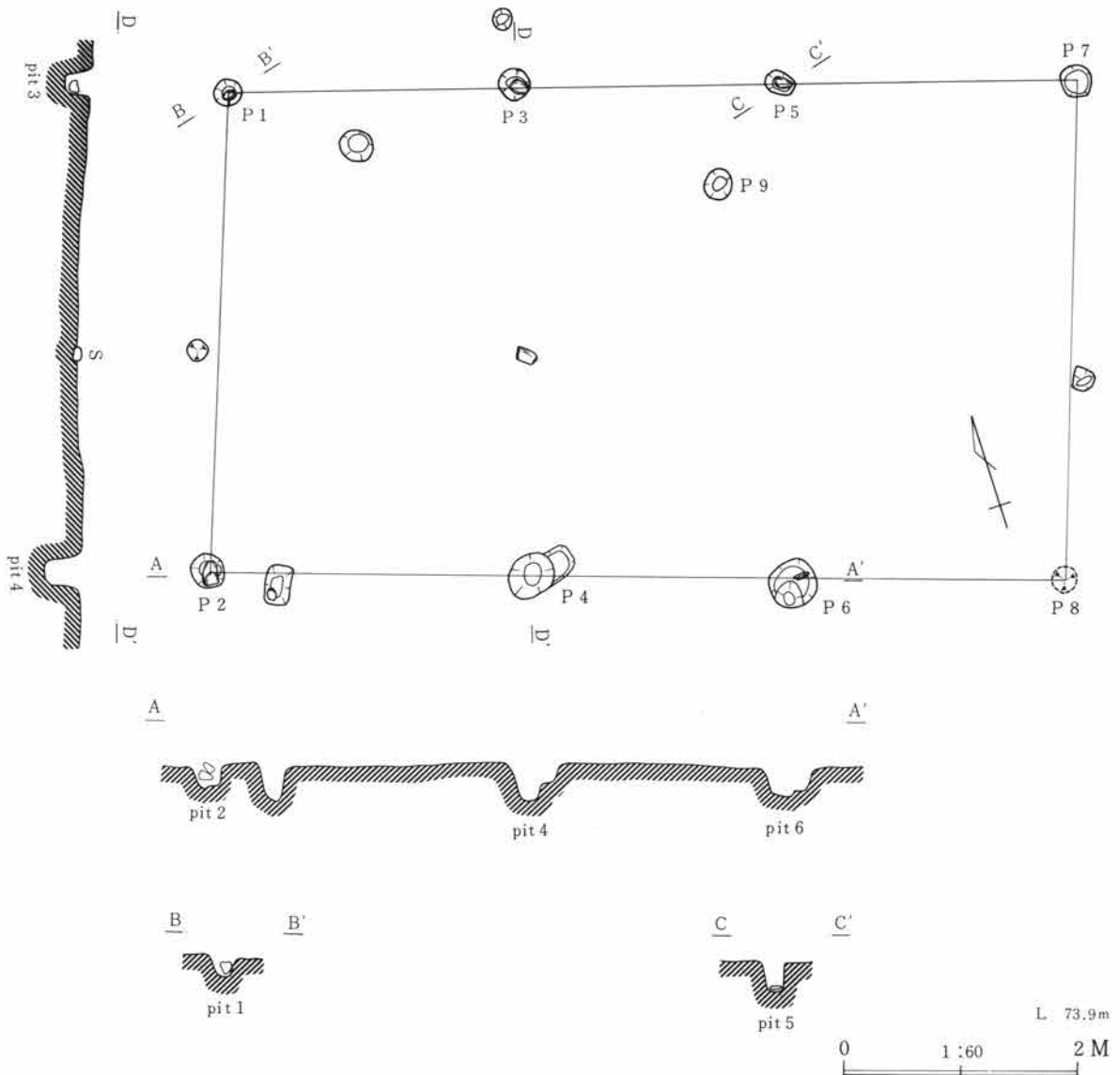
覆土は黒色土中にロームや灰白色粘質土の小ブロックを含む土層で単一に埋没している。住居址中央部には径18cm、深さ12cmの小ピットが確認された。また、住居址上部には11号溝が南北に走っている。

遺物 (13図 図版52) 縄文前期諸磯b式土器片2点と剥片9点が床面およびやや浮いた状態で出土した。本遺跡の縄文時代の遺構としては竪穴住居址1軒だけで他の遺構は確認されなかったが、2ヶ所より縄文前期諸磯b式土器片および石器等が少量ではあるが集中して出土している。1ヶ所は竪穴住居址から西へよった西微高地区南西端の54Q3グリッドを中心とした所で、他の1ヶ所は東微高地区中央の西縁辺部の54H13グリッドを中心とした所で黒色土中よりややまとまった状態で出土している。(下城)

(2) 掘立柱建築遺構 (5図 図版4)

第1次調査におけるトレンチ調査によって、東側畑地部分に柱穴と考えられる多くの小ピットを確認しており、掘立柱建築遺構の存在が確実視されていた。第2次調査では、これらの遺構を明らかにするため、平面発掘を実施した。また西側畑地部分にも、掘立遺構の存在が推定されるため合せて実施した。調査の結果多数の小ピットを検出したが、遺構としてまとまったものは、東側畑地部分の1棟のみであった。なお畑地部分には、柱穴と考えられる小ピットが多数確認されており、複数の掘立遺構が存在していたものと推定される。

掘立柱建築遺構は、東側畑地部分のD～F12、13グリッド間に検出したもので、間口3間、奥行2間の小規模な掘立遺構である。西側奥行柱穴中心間の方位は、N-24°-Eの方向を示す。その規模は桁行柱間(北側東西線)7.25m (P<sub>1</sub>P<sub>3</sub>間2.5m、P<sub>3</sub>P<sub>5</sub>間2.25m、P<sub>5</sub>P<sub>7</sub>間2.5m、梁間柱間(西側南北線)4.05mであり、厳密には一定していない。なお、東南隅の柱穴は、第1次のトレンチ調査によって削平したため、検出し得な



5図 掘立柱建築遺構

かった。柱穴は径15~25cmほどの隅丸方形状を呈し、構築時の地表面に近いものと推定される第Ⅳ層黒色土層から50~60cmほどの深さにあり、褐色ローム面を浅く掘り込んでいる。底部には、10~20cmほどの平らな川原石を1~2石を使用し、柱受けとしている。

掘立遺構の構築時期については、西側奥行柱穴内より出土した13~14世紀代と考えられる小皿(14図)、鋭利な工具を使用したと考えられる細く長い柱穴、柱穴内覆土の軽石粒を含む褐色土等から、中世前半以降という年代をあたえておきたい。

調査における掘立遺構は一棟のみであったが、まとまり得ない多くの柱穴、また関越道路線外畑地部分の広がりを考慮すると、多くの掘立遺構の存在を推定する必要があるものと思われる。(平野)

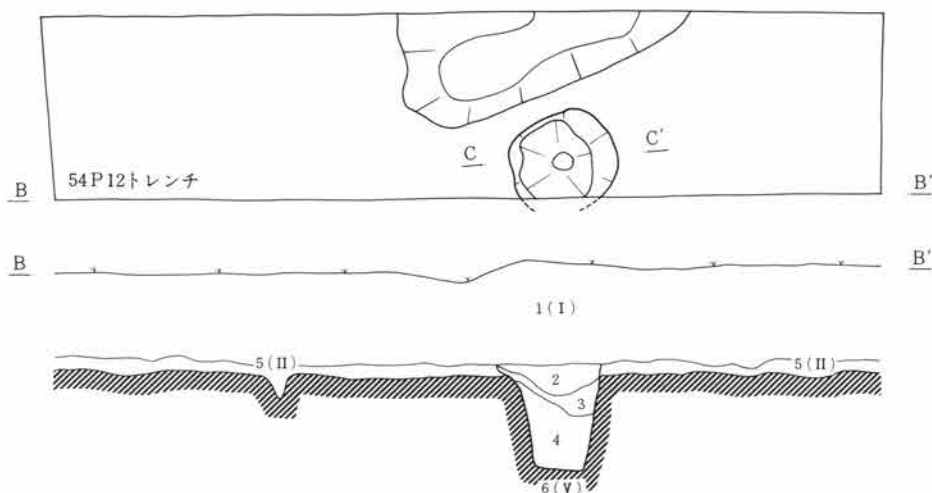
### (3) 土 塚

調査区西微高地部分には、若干の方形、長方形土塚の検出をみている。これらは第Ⅳ層の黒色土層から確認されるが、覆土中に出土遺物をみない。浅間B軽石を多量に含む褐色土、遺跡の性格からみて、中世以降

3表 掘立柱建築遺構計測表

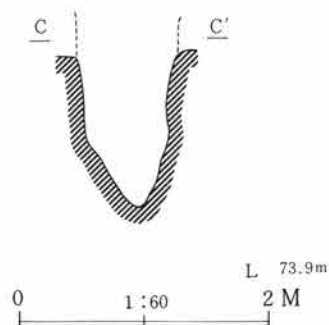
単位 m

梁間柱間	桁行柱間	桁行間
P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> 4.05	P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> 2.5	7.25
P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> 4.10	P <sub>3</sub> -P <sub>5</sub> 2.25	
P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub> 4.17	P <sub>5</sub> -P <sub>7</sub> 2.5	
P <sub>7</sub> -P <sub>8</sub> 4.22	P <sub>2</sub> -P <sub>4</sub> 2.75	7.3
	P <sub>4</sub> -P <sub>6</sub> 2.2	
	P <sub>6</sub> -P <sub>8</sub> 2.35	
平均 4.14	平均 2.43	7.28



## 54P12トレンチ

- 1 I層 灰褐色土層、砂質、浅間A軽石を多量に含む。火山災害復旧時の盛土、及び上部は現耕作土
- 2 井戸覆土 褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
- 3 同上 褐色土層、砂質
- 4 同上 褐色土層、やや砂質、浅間A軽石、淡黄褐色ロームブロックを含む。
- 5 II層 褐色土層、砂質
- 6 V層 黄褐色土層、やや粘質、ローム漸移層



6図 井戸址

## I 八幡原A遺跡

の土壇と考えられているが、その性格は推察の域をでない。

**長方形土壇** 西微高地区の54P11、12グリット内に検出したもので、長さ2.1m、幅40cm程の細長い長方形土壇でコーナー部分は丸味をもつ。その断面はU字形を呈し、第2層の黒色土層から約33cmほどの深さにある。覆土は細かい軽石粒を含み、比較的やわらかな褐色土である。遺物の出土をみないが1号溝を切り込んでおり、その覆土からみて、近世以降比較的時期の新しいものと考えられる。形状からみて農業に伴い掘り込まれたものであろう。

**隅丸方形土壇** 調査区西側畑地部分の、54P10グリットで検出されたもので、長さ70cm、幅64cm程の方形の土壇である。第IV層黒色土層から約23cmほどの深さがあり、底部は丸味をもつ。覆土は浅間B軽石と考えられる砂粒を多量に含み、部分的に炭化物ブロック、ロームブロックがみられる。遺物の出土をみないが、覆土からみて中世以降の土壇と考えられよう。(平野)

### (4) 井 戸 址 (6図 図版5)

西微高地区、54P12トレンチにおいて検出された。平面形状は円形、断面形状は底部が丸く尖り、砲弾形を呈する。規模は上端径90cm、深さはローム面下70cmを測る。覆土は浅間A軽石を含む褐色土である。遺物出土は見られない。時期については軽石との関連を考慮し、近世後期と考えられる。

### (5) 溝

本遺跡は、東西から張り出す洪積微高地区と、それにより南北に分断される低湿地区よりなる。現況は微高地区が畑、低湿地区は水田である。この両様のあり方は、発掘調査により検出された遺構についても同様で、両地区では好対象をなす。発掘調査においては、とくに溝の検出が目立って多かったが、その溝のほとんどは低湿地区を中心に見られた。これらの溝が集中する低湿地区の自然堆積層は、図に示すように水の影響を強く受けた堆積状況を示す。関東ローム層は微高地区で見られるように、淡黄褐色を呈することなく、また、ローム漸移層も存在せず、灰白色粘質で、場所によっては、酸化鉄分の凝集が著しく、そのため固い層をなしている。湧水レベルは、渇水期でも低湿地区では基盤層(第V層)上面にまで達しており、微高地でもローム層上面下20cmに達する。本遺跡にて検出した30条余りの溝のほとんどは低湿地、または微高地縁辺に集中し、規模、形状、相互の溝底面レベル等に共通性が強く、地形に規制され、現地割に合致する傾向を示している。これら諸要素を考慮し、各溝の用途について検討すれば、これらの溝のほとんどは水田経営に関連する用水路であることが想定できる。

これらの溝の時期の認定については、溝内に遺物が伴うことがまったくなく、この方向からの検討資料は持ち得なかったが、幸い古代末、近世後期の浅間山の爆裂に伴う降下軽石層の状態が良好で、溝と軽石層との関連把握により、時期認定はある程度進めることができた。本発掘調査における溝の検出方法は、基本トレンチ、及び溝の走行を予想し、必要な地点に設定した補助トレンチ、最終的には溝の確認漏れを防ぐための東西トレンチにより確認した、溝の各々を上を示した要点に照らし、総合検討し全体の復元を行なった。次に以上を示した視点に沿って各溝ごとに説明を加える。

#### 1号溝(図版6)

西微高地区に位置する。形状は直線状でN-85°-Wの方向を示す。規模は上端幅80cm、下端幅16cm、深さ25cmで断面形状は、比較的単純なV字状をなす。覆土は上部に浅間B軽石層が見られ、下部は黒褐色土である。V層(関東ローム層)下まで掘り下げられており、確認できる深さは25cmになるが、低湿地区において、

東方向への延長を確認することはできなかった。しかし、東方向の延長線上に12号溝が一致してくるが、54N10トレンチにおいて検出できず、両者が一連の溝であったかどうかは不明である。

#### 2号溝(7、8図)

西側微高地区に沿う小規模な溝である。方位はN-10°-Eを示す。規模は上端幅60cm、下端幅36cm、深さ30cmで断面形状はU字状をなす。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。54L09トレンチで10号溝と重複するが、先後関係は土層断面上に明瞭に現れない。10号溝は54L09トレンチ以西への伸びは不明瞭であり、2号溝との合流も一方では考えられる。北方向は3号、4号溝と三叉状に接続する。

#### 3号溝(8図)

南低湿地区東端に沿う。方位はN-85°-Wを示す。規模は上端幅80cm、下端幅50cm、深さ20cmで、覆土は、黒褐色砂質土で浅間B軽石を多量に含む。54H10トレンチ以東の状態は不明である。13号溝と交叉するが3号溝の方が新しいことを確認している。西方向は2号、4号溝に三叉状に接続する。

#### 4号溝(8、9図 図版6)

東、西の微高地区に挟まれた谷地に位置する。方位はおおよそN-35°-Wを示す。規模は上端幅65cm、下端幅24cm、深さ28cmで覆土は、明黒褐色砂質土で浅間B軽石を多量に含む。北方向は15号溝、または16号溝に接続すると見られるが明確ではない。

#### 5号溝(9図)

南低湿地区を南北に走る。形状は直線上でN-5°-Wの方向を示す。規模は、上端幅48cm、下端幅28cm、深さ24cmで、覆土は灰褐色砂質土で浅間B軽石を多量に含む。北は54F10トレンチで6号溝に達するが、相互の関係は不明である。12号溝との重複状態も54G08トレンチで見られるが、関係は不明。8号溝との関係は54G07トレンチ(9図)にて5号溝の方が古いことが確認できた。

#### 6号溝(9図 図版7)

西微高地区の北側、東微高地区の南側の縁辺に沿い、遺跡地を斜めに貫く大規模な溝である。上端幅60cm、下端幅28cm、深さ30cmで、覆土は灰褐色砂質土で溝中に浅間A軽石の純層の堆積を見る。現在の用水路と流路がまったく一致している。現在の用水路よりも、30cm程下位に見られる。

#### 7号溝

西微高地区に位置し、東西方向に走り、比較的規模は大きい。形状は直線状で、N-70°-Eの方向を示す。規模は上端幅1.1m、下端幅32cm、深さ48cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。東方向は11号溝と54L00トレンチで重複するが先後関係は不明である。

#### 8号溝(9図)

南低湿地区に位置し東西に走る小規模な溝である。形状は直線状で、N-80°-Eの方向を示す。規模は上端幅80cm、下端幅32cm、深さ24cm。覆土は暗褐色土、やや砂質で、溝中に浅間A軽石の純層の堆積を見る。西は54M08トレンチで9号溝に達し、以西には見られない。東方は6号溝に達し以東は不明である。

#### 9号溝(7、8図)

西微高地区東縁辺に沿う。方位はおおよそN-10°-Eを示す。規模は上端幅1.4m、下端幅80cm、深さ20cm。覆土は暗褐色砂質土で、浅間B軽石を含む。溝上面に浅間A軽石純層の堆積が見られる。北方は6号溝に達し、以北への伸びは見られない。

#### 10号溝(7図)

南低湿地区に位置し東西に走る。形状は直線状でN-90°-Wの方向を示す。規模は上端幅80cm、下端幅40

## I 八幡原A遺跡

cm、深さ28cm。覆土は暗褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。西方は54L08トレンチで2号溝に達し、以西へさらに伸びるものかどうかは不明である。東方向は5号溝、6号溝と交叉し調査区域外へ抜ける。

### 11号溝(8図 図版7)

西微高地区東縁辺に沿って見られる。方位はおおよそN-10°-Eを示す。規模は上端幅1.2m、下端幅60cm、深さ40cm。覆土は灰黒褐色土で、浅間B軽石を含む。北方は6号溝に重複しながら現用水路に沿って北へ向かう、17号溝に結ぶと思われる。

### 12号溝(7、9図)

南低湿地区に位置し、東西に走る小規模な溝である。形状は直線状でN-85°-Wの方向を示す。規模は上端幅32cm、下端幅12cm、深さ12cm。覆土は灰黒褐色土で、浅間B軽石を含む。54L10トレンチで11号溝に達し、以西への伸びは確認できない。東方向は5号溝、6号溝と交叉し調査区域外へ抜ける。

### 13号溝(8、9、10図 図版6)

東、西微高地区に狭まれた谷地部分を走る比較的大規模な溝。方位はおおよそN-35°-Wを示す。規模は上端幅1m、下端幅20cm、深さ52cm。断面形状は、壁面が段状になり、数回の改修の跡を示す。覆土は暗褐色土、ロームブロックを含む粘質土で、上部が浅間B軽石層に覆われる。

### 14号溝(10図 図版7、8、9)

西微高地区より東微高地区へ、東西方向に直線的に貫く大規模な溝である。方位はN-75°-Eを示す。規模は上端幅1.6m、下端幅30cm、深さ80cm。覆土は黒褐色粘質土で、上部を浅間B軽石純層が覆う。断面形状は、壁面が段状になり、また覆土の状況から、数回の改修の跡が見られる。

### 15号溝(11図)

北低湿地区南隅54H~K17東西トレンチにて見られる小規模な溝である。方位はN-30°-Eを示す。規模は上端幅40cm、下端幅24cm、深さ8cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。周囲の溝に比べレベルが高いのが目立つ。

### 16号溝(11図)

北低湿地区南隅54H~K17東西トレンチにて見られる小規模な溝である。方位はN-30°-Eを示す。規模は上端幅48cm、下端幅20cm、深さ12cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。周囲の溝にくらべレベルが高いのが目立つ。

### 17号溝(11図 図版7)

西側微高地区の北側を6号溝、現代の用水路に沿って位置する。規模は上端幅52cm、下端幅30cm、深さ10cm。覆土は黒色粘質土で、浅間B軽石を少量含む。南方向は6号溝に沿って、これと同じく、東低湿地区縁辺部に沿うと思われるが、明瞭な確認はない。また、南低湿地区北隅で11号溝に結ぶ可能性も高い。

### 18号溝(12図 図版9、10)

北低湿地区の東縁に沿って南北に走る大規模な溝である。形状は直線状で、N-15°-Wの方向を示す。規模は上端幅1.2m、下端幅72cm、深さ20cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。断面形状は単純なナベ底状を示す。南方は、54J06トレンチで明瞭を欠くが、南への伸びは54J14トレンチ内より他に該当する溝は見られない。54Jトレンチ内ではくり返し開削が行なわれた様子があり、また、18号溝方向へ伸びる溝も見られる。

### 19号溝(11図 図版11)

西微高地区北端部のトレンチで東西方向に位置し、比較的大規模である。現用水路の北に数メートル外れ

て、これに沿う。形状は直線状でN—80°—Eの方向を示す。規模は上端幅1.2m、下端幅40cm、深さ40cm。覆土は黒色粘質土で、浅間B軽石を多量に含む。断面形状は壁面が段状になり、数度の改修の跡がある。東は低湿地区内にて小規模に検出される。本溝に重なり、また近接し、これに沿い、25号、26号溝等数本の溝が見られる。東方は直状に、18号溝とT字状に結ぶと思われる。54J18トレンチにおける状態が不明瞭であるが、20号、21号、22号溝と間隔、方向に規則性が認められるのでこの可能性は高い。

#### 20号溝 (12図 図版11)

北低湿地区内を東西に位置する。形状は直線状でN—85°—Eの方向を示す。規模は上端幅60cm、下端幅20cm、深さ20cm。覆土は黒褐色砂質土で浅間B軽石を多量に含む。東方は18号溝にT字状に結ぶ。55O02トレンチ内にて23号溝との交叉が見られ、本溝が先行することが把握できた。

#### 21号溝 (12図 図版9、11)

北低湿地区を東西に位置する。形状は直線状でN—85°—Eの方向を示す。規模は上端幅72cm、下端幅35cm、深さ20cm。覆土は黒褐色土質で、浅間B軽石を多量に含む。東方は18号溝とT字状に結ぶ。

#### 22号溝 (12図 図版10、11)

北低湿地区を東西に位置する。形状は直線状でN—85°—Eの方向を示す。規模は上端幅68cm、下端幅20cm、深さ16cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。東方は18号溝とT字状に結ぶ。部分的に2条の溝が複合して見られる。

#### 23号溝 (図版11)

北低湿地区に南北に位置する。形状は直線状でN—5°—Wを示す。規模は上端幅60cm、下端幅28cm、深さ12cm。覆土は暗灰褐色土で、浅間B軽石を含む。南方は20号溝と交叉し、20号よりも後出を示し、以南は微高地区になるが、先への伸びは不明である。24号溝に結ぶ可能性もある。22号溝との関係は本溝が後出を示す。

#### 25、26号溝 (11図 図版11)

両溝とも19号溝に重複、または近接し、これに沿った位置関係を示す。比較的大規模である。規模は25号溝上端幅80cm、下端幅28cm、深さ16cm。26号溝上端幅90cm、下端幅40cm、深さ12cm。覆土は両溝とも黒褐色砂質土で、浅間B軽石を多量に含む。東方は19号溝と同様、直状に18号溝とT字状に結ぶと思われる。

#### 27号溝 (図版10)

北低湿地区の東縁に沿う。18号溝のさらに東に近接しこれに沿って走る。方位はN—20°—Wを示す。規模は上端幅80cm、下端幅28cm、深さ12cm。覆土は黒褐色砂質土で、浅間B軽石をブロック状に含む。55K00トレンチ内では検出できなかったが、54H19、東西トレンチで検出した溝をこれにつながるものと想定した。

#### 28号溝

調査区内東微高地区東端に位置する。現用水路に沿うと想定し、復元した。規模は上端幅1m、下端幅50cm、深さ30cm。覆土は黒褐色砂質土である。

#### 29号溝

北低湿地区南隅、54K18トレンチに見られる。規模は上端幅56cm、下端幅24cm、深さ12cm。覆土は灰褐色土で、浅間B軽石を含む。西方向は19号、または25、26号溝に結び、東方向は18号溝に結ぶと思われる。

#### 30号溝 (7図)

調査区南端、現農業の北側に近接し、これに沿って位置する。比較的大規模な溝である。形状は直線状で、N—85°—Eの方向をとる。規模は上端幅1.2m、下端幅40cm、深さ20cm。覆土は暗褐色砂質土で、浅間B軽石

I 八幡原A遺跡

を多量に含む。54N02トレンチには攪乱があり11号溝との関係は明瞭に把握できなかった。以西については3ライン東西トレンチには見られないので11号溝に接続する可能性もある。

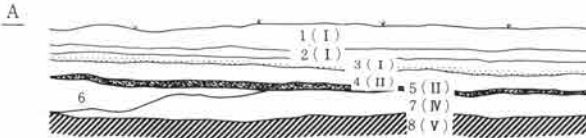
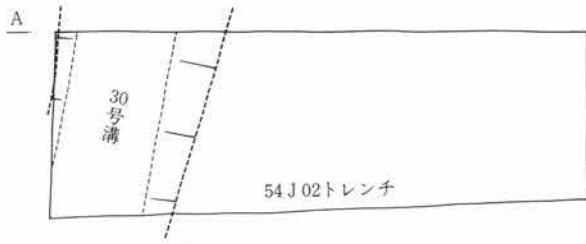
31号溝

東微高地区拡張区東部においてやや弧状をなす幅の広い溝である。微高地区上に位置し、54F10トレンチでは検出できなかった。規模は上端幅4m、下端幅3.5m、深さ40cm。覆土は黒褐色砂質土で浅間B軽石を多量に含む。(佐藤)

4表 溝計測表 (単位 cm)

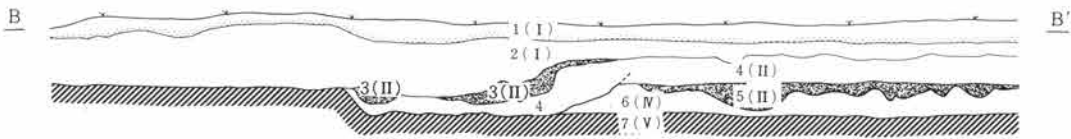
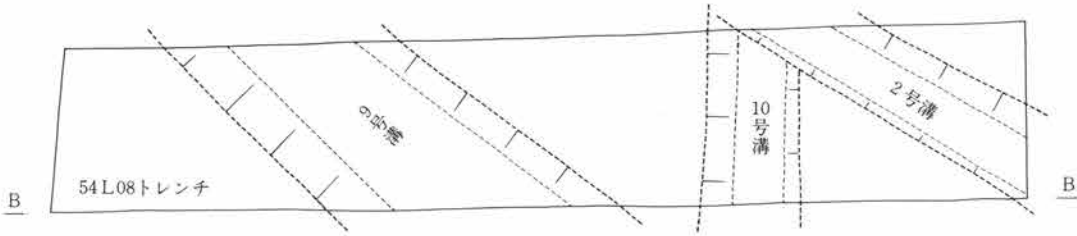
溝番号	上端幅	下端幅	深さ	形状・方向	時期
1	80	16	25	N-85°-W	近世前半以前
2	60	36	30	N-10°-E	近世前半
3	80	50	20	N-85°-W	近世前半
4	65	24	28	N-35°-W	中・近世
5	48	28	24	N-5°-W	近世前半
6	60	28	30	曲線状	近世後半
7	110	32	48	N-70°-E	近世前半以前
8	80	32	24	N-80°-E	近世後半
9	140	80	20	N-0°	近世後半
10	80	40	28	N-90°-W	近世前半
11	120	60	40	N-5°-E	近世前半
12	32	12	12	N-85°-W	近世
13	100	20	52	N-35°-W	古代
14	160	30	80	N-75°-E	古代
15	40	24	8	N-30°-E	中・近世
16	48	20	12	N-30°-E	中・近世
17	33	15	9	曲線状	近世前半
18	120	72	20	N-15°-W	中世
19	120	40	40	N-80°-E	中・近世
20	60	20	20	N-85°-E	中世
21	72	35	20	N-85°-E	中世
22	68	20	16	N-85°-E	中世
23	60	28	12	N-5°-W	近世?
24	80	60	20	N-20°-E	?
25	80	28	16	N-80°-E	中世
26	90	40	12	N-80°-E	中世
27	80	28	12	N-20°-W	中世
28	100	50	30	N-75°-E	近世
29	56	24	12	N-80°-E	中世
30	120	40	20	N-85°-E	近世前半
31	400	350	40	N-40°-E	?





54J02トレンチ

- 1 I層 灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土
- 2 I層 褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
- 3 I層 赤褐色土層、やや砂質、鉄分沈着層
- 4 II層 暗灰色土層、砂質、酸化鉄分の凝集がわずかに見られる。
- 5 II層 暗灰色土層、砂質、浅間B軽石が主体
- 6 30号溝覆土 暗褐色土層、やや砂質
- 7 IV層 黒色土層、粘質
- 8 V層 灰白色土層、粘質、関東ローム層

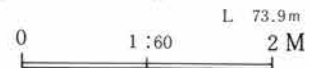
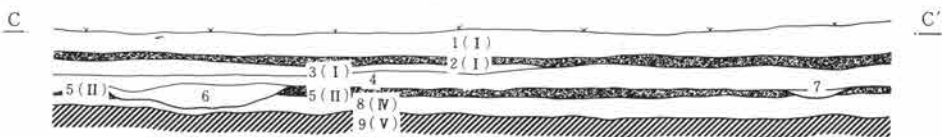
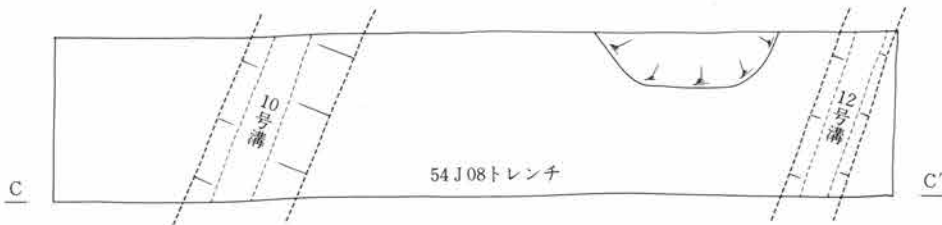


54L08トレンチ

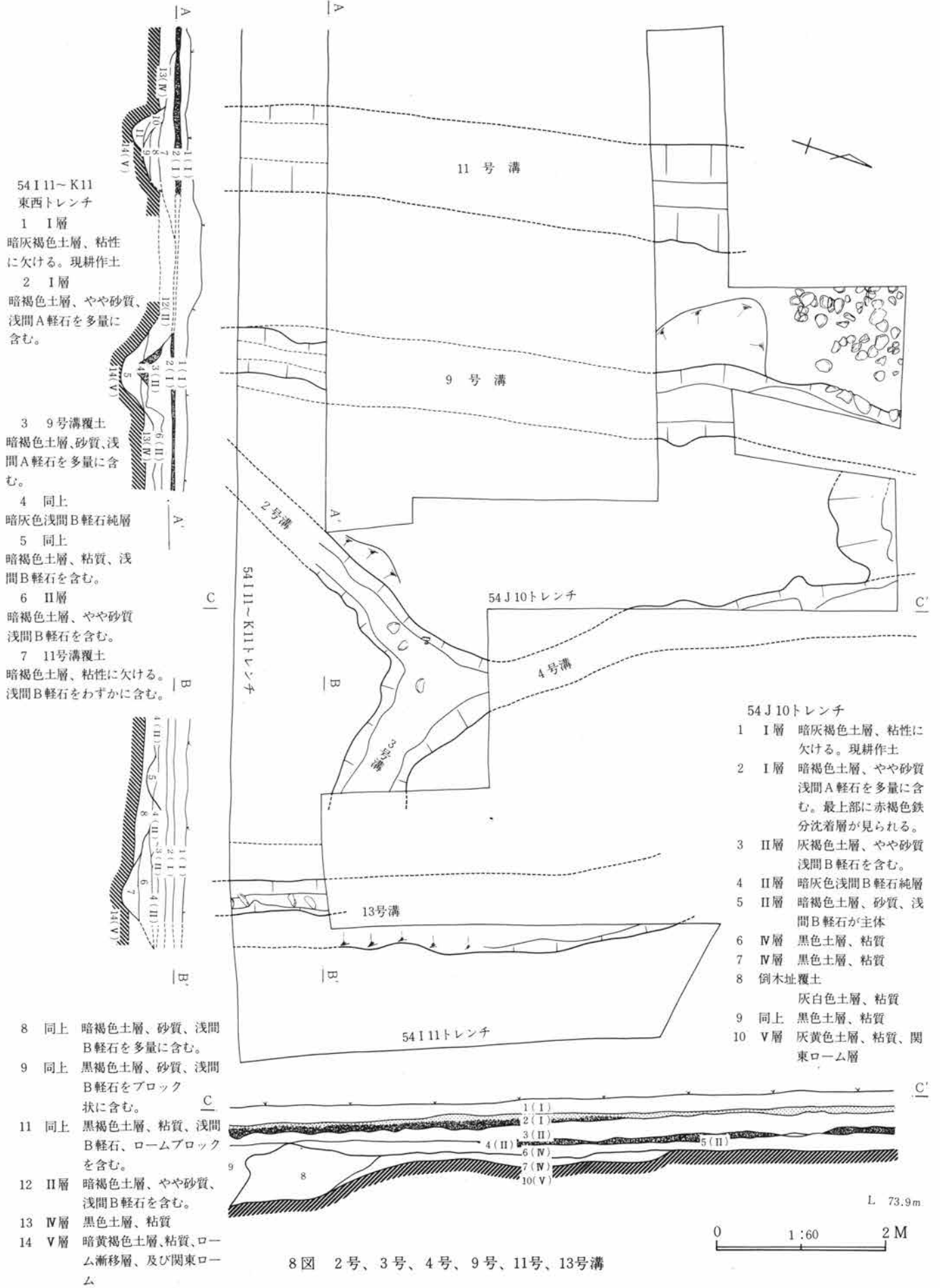
- 1 I層 暗灰褐色土層、粘性に欠ける。最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。現耕作土
- 2 I層 灰褐色土層、やや砂質
- 3 II層、9号 暗灰色土層、砂質、浅間A軽石溝覆土。石ブロック主体
- 4 II層、10号 灰褐色土層、やや砂質、浅間B溝覆土。軽石を含む
- 5 II層 暗褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を多量に含む
- 6 IV層 黒色土層、粘質
- 7 V層 黄褐色土層、粘質、関東ローム層

54J08トレンチ

- 1 I層 灰褐色土層、粘性に欠ける。浅間A軽石を含む。現耕作土
- 2 I層 赤褐色土層、砂質、浅間A軽石が主体
- 3 I層 暗灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
- 4 II層 暗灰褐色土層、砂質、軽石を含む。
- 5 II層 暗灰色土層、浅間B軽石純層
- 6 10号溝覆土 暗灰色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 7 同上
- 8 IV層 黒色土層、強粘質。
- 9 V層 暗灰色土層、粘性が強く固い。関東ローム層



7図 2号、9号、10号、12号、30号溝



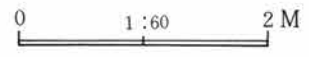
- 54 I 11 ~ K 11  
東西トレンチ
- 1 I層 暗灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土
  - 2 I層 暗褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を多量に含む。
  - 3 9号溝覆土 暗褐色土層、砂質、浅間A軽石を多量に含む。
  - 4 同上 暗灰色浅間B軽石純層
  - 5 同上 暗褐色土層、粘質、浅間B軽石を含む。
  - 6 II層 暗褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
  - 7 11号溝覆土 暗褐色土層、粘性に欠ける。浅間B軽石をわずかに含む。

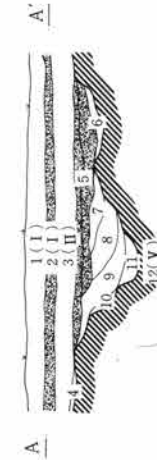
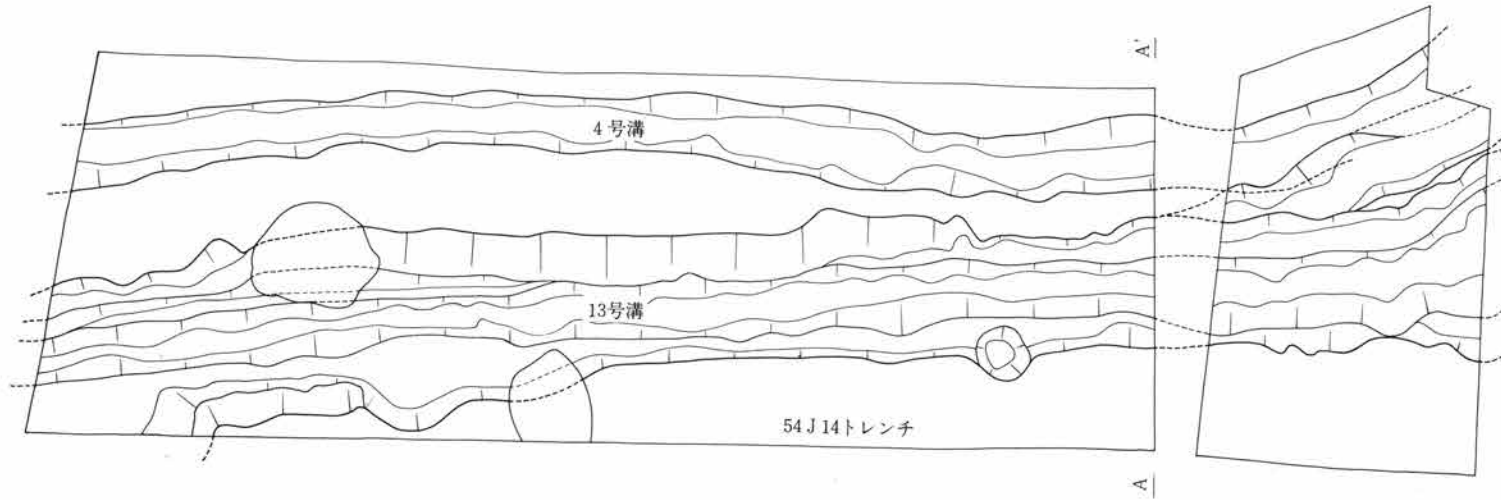
- 8 同上 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 9 同上 黒褐色土層、砂質、浅間B軽石をブロック状に含む。
- 11 同上 黒褐色土層、粘質、浅間B軽石、ロームブロックを含む。
- 12 II層 暗褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
- 13 IV層 黒色土層、粘質
- 14 V層 暗黄褐色土層、粘質、ローム漸移層、及び関東ローム

- 54 J 10 トレンチ
- 1 I層 暗灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土
  - 2 I層 暗褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を多量に含む。最上部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 3 II層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
  - 4 II層 暗灰色浅間B軽石純層
  - 5 II層 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石が主体
  - 6 IV層 黒色土層、粘質
  - 7 IV層 黒色土層、粘質
  - 8 倒木址覆土 灰白色土層、粘質
  - 9 同上 黒色土層、粘質
  - 10 V層 灰黄色土層、粘質、関東ローム層

8図 2号、3号、4号、9号、11号、13号溝

L. 73.9m





54J14トレンチ

- |    |           |                            |
|----|-----------|----------------------------|
| 1  | I層        | 暗灰褐色土層、粘性に欠ける。             |
| 2  | I層        | 灰褐色土層、砂質、浅間A軽石層            |
| 3  | II層       | 暗灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。      |
| 4  | 4号、13号溝覆土 | 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石主体           |
| 5  | 4号、13号溝覆土 | 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石主体           |
| 6  | 4号溝覆土     | 黄褐色土層、粘質、淡黄色ロームを多量に含む。     |
| 7  | 13号溝覆土    | 黒褐色土層、粘質、浅間B軽石を含む。         |
| 8  | 同上        | 暗褐色土層、粘質、ロームブロックを多量に含む。    |
| 9  | 同上        | 暗褐色土層、粘質                   |
| 10 | 同上        | 黒褐色土層、粘質                   |
| 11 | 同上        | 暗褐色土層、粘質、淡黄色ロームブロックを多量に含む。 |
| 12 | V層        | 淡黄色土層、関東ローム層               |



- 54G07トレンチ
- |   |       |                      |
|---|-------|----------------------|
| 1 | I層    | 暗灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土   |
| 2 | I層    | 灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。 |
| 3 | II層   | 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。 |
| 4 | 8号溝覆土 | 暗灰色浅間A軽石純層           |
| 5 | 同上    | 暗褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。 |
| 6 | IV層   | 黒色土層、粘質              |
| 7 | V層    | 灰黄色土層、粘質、関東ローム層      |



54F10東西トレンチ北壁

- |   |           |                            |
|---|-----------|----------------------------|
| 1 | I層        | 灰褐色土層、粘性に欠ける。浅間A軽石を含む。現耕作土 |
| 2 | II層・6号溝覆土 | 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。       |
| 3 | II層       | 暗灰色浅間B軽石純層                 |
| 4 | 5号溝覆土     | 黒褐色土層、粘質、浅間B軽石を含む。         |
| 5 | 6号溝覆土     | 浅間A軽石純層                    |
| 6 | IV層       | 黒色土層、粘質                    |

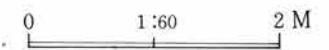


5号溝

6号溝



L 73.9m

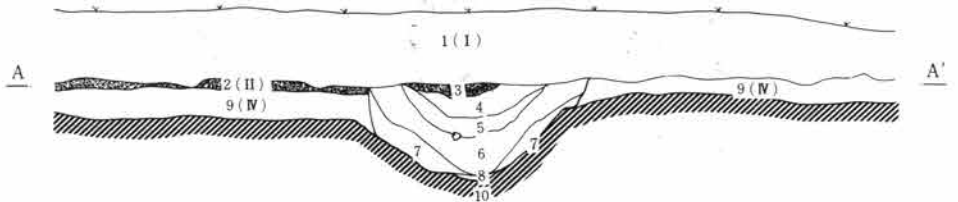
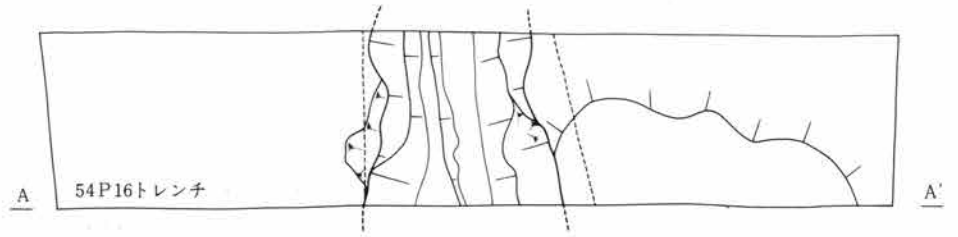


9図 4号、5号、6号、8号、12号、13号溝



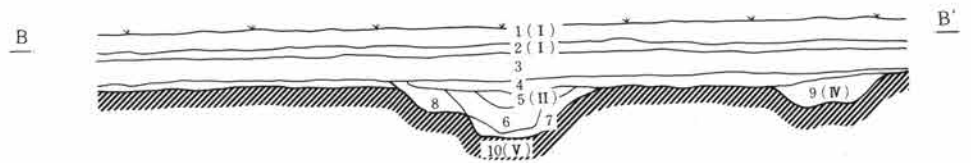
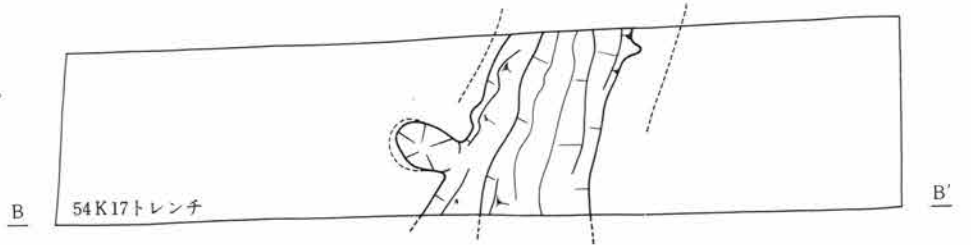
54P16トレンチ

- 1 I層 灰褐色土層、砂質、浅間A軽石を多量に含む。火山災害復旧時の盛土、及び上部は現耕作土。
- 2 II層 褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 3 14号溝覆土 褐色土層、砂質、浅間B軽石主体
- 4 同上 黒色土層、粘質
- 5 同上 褐色土層、粘質
- 6 同上 黄色味を帯びる褐色土層
- 7 同上 褐色土層、粘質、ローム粒子を含む。
- 8 同上 黄褐色土層、粘質、ローム粒子を多量に含む。
- 9 IV層 黒色土層、粘質



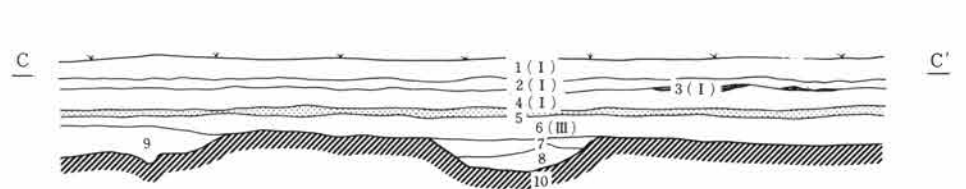
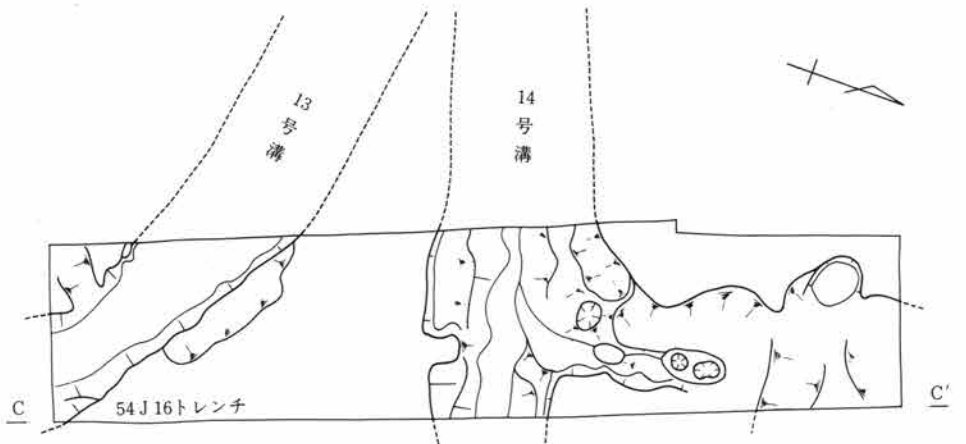
54K17トレンチ

- 1 I層 暗灰褐色土層、粘性を欠く。
- 2 I層 灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
- 3 II層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
- 4 II層 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 5 14号溝覆土 暗褐色土層、粘質
- 6 同上 黒褐色土層、粘質
- 7 同上 黒褐色土層、粘性が強い。ロームブロックを含む。
- 8 13号溝覆土 暗褐色土層、粘質
- 9 性格不明 黒褐色土層、粘質
- 10 V層 黄褐色土層、粘質、関東ローム層

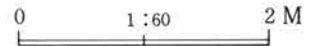


54J16トレンチ

- 1 I層 暗灰褐色土層、粘性を欠く。現耕作土
- 2 I層 灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
- 3 I層 暗灰色土、浅間A軽石純層
- 4 灰褐色土層、やや砂質。
- 5 赤褐色土層、酸化鉄分の沈着層
- 6 II層 暗灰褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 7 14号溝覆土 暗褐色土層、粘質
- 8 同上 暗褐色土層、砂質、細砂ロームの混入が多い。
- 9 性格不明 褐色土層、砂質、ローム、と浅間B軽石を多量に含む。
- 10 V層 灰黄色土層、粘質、関東ローム層

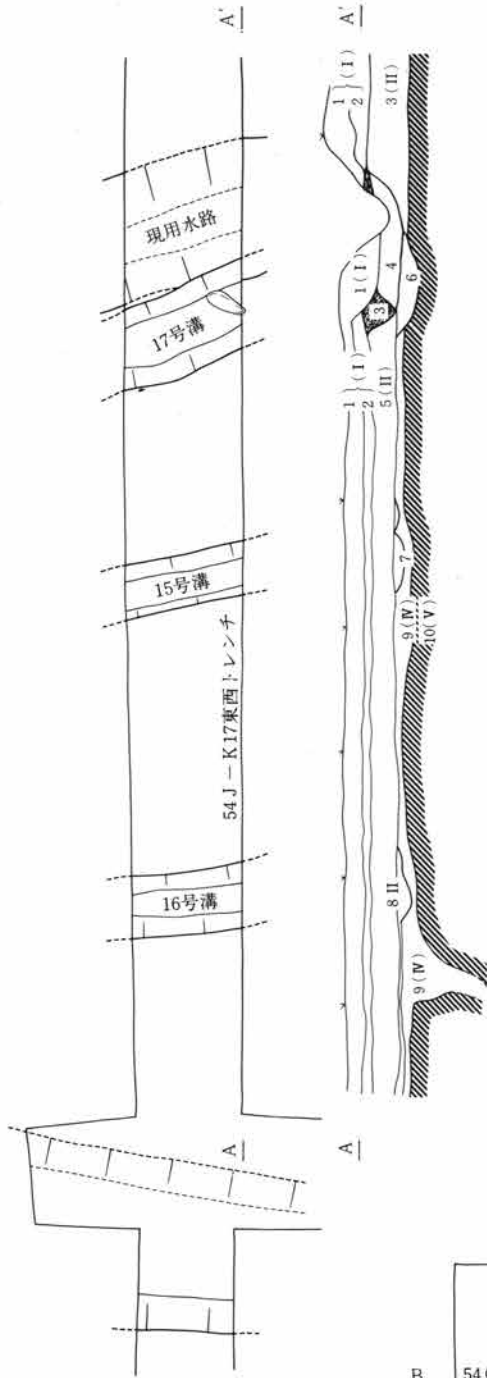


L. 73.9m



10図 13号、14号溝

I 八幡原A遺跡

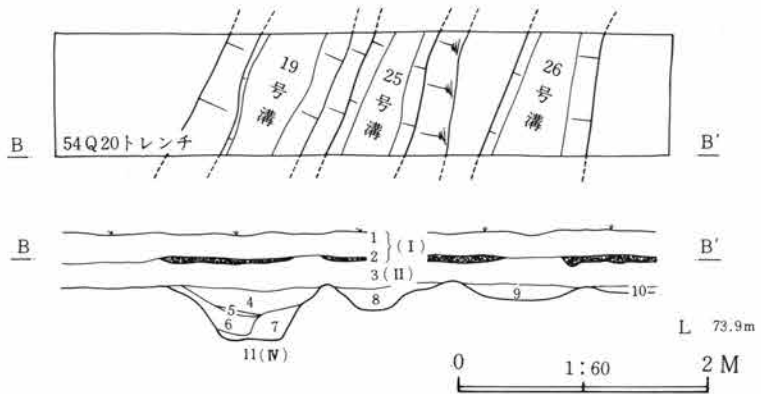


54J-K東西トレンチ

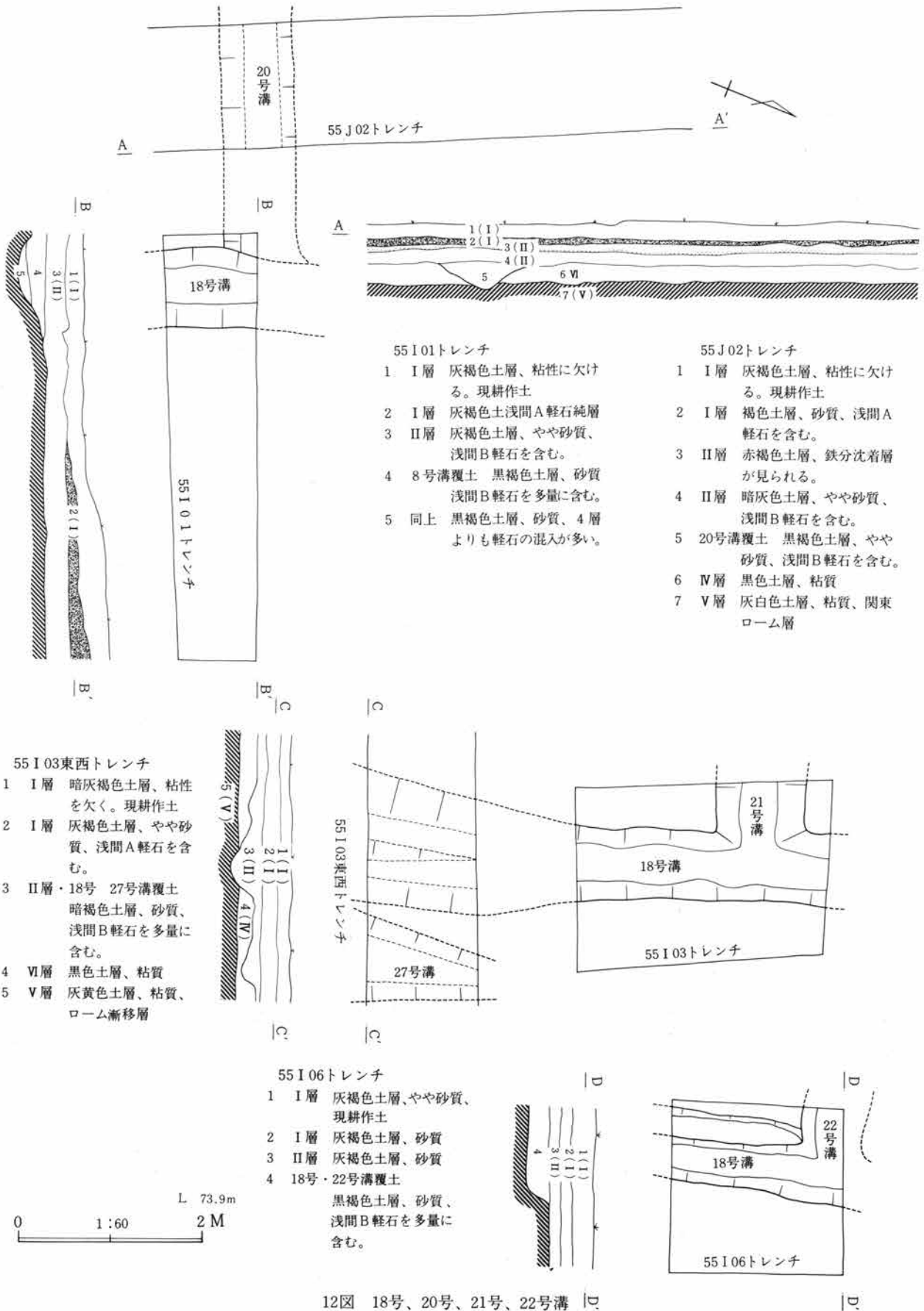
- 1 I層 暗灰色土層、粘性に欠ける現耕作土
- 2 I層 灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を多量に含む。
- 3 6号溝覆土 暗灰色浅間A軽石純層
- 4 同上 灰褐色土層、やや粘質
- 5 II層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 6 11号溝覆土 暗褐色土層、粘質、浅間B軽石を含む。
- 7 15号溝覆土 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 8 16号溝覆土 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- II層
- 9 IV層 黒色土層、粘質
- 10 V層 灰黄褐色土層、粘質、関東ローム層
- 11 倒木址 灰黄褐色土層、粘質、ローム主体

54Q20トレンチ

- 1 I層 灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土
- 2 I層 灰色土層、砂質、浅間A軽石主体
- 3 II層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
- 4 19号溝覆土 暗褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 5 同上 黒色土層、粘質
- 6 同上 黒褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 7 同上 黒色土層、粘質、浅間B軽石をブロック状に含む。
- 8 25号溝覆土 黒褐色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。
- 9 26号溝覆土 同上
- 10 溝覆土 同上
- 11 IV層 黒色土層、粘質

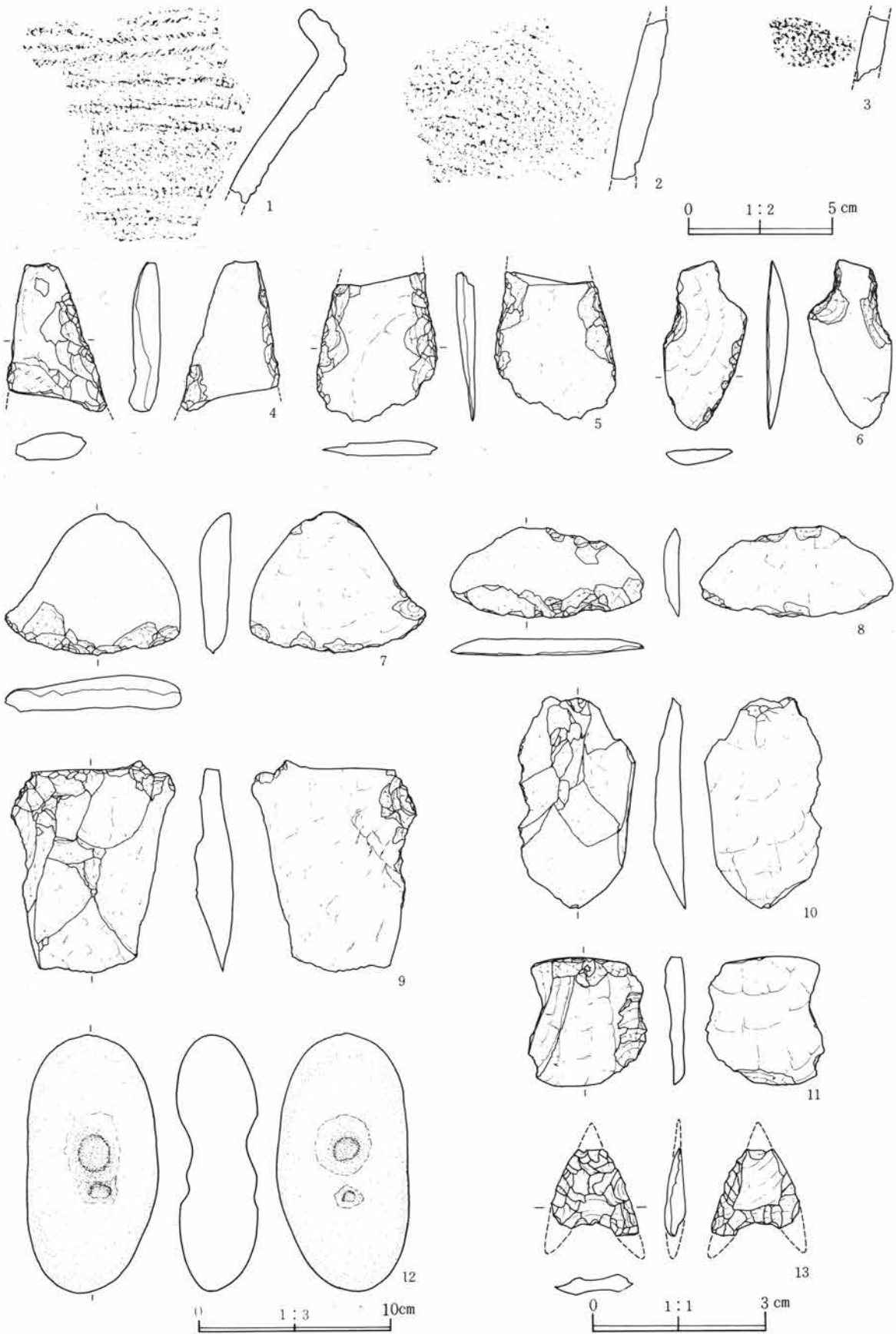


11図 15号、16号、17号、19号、25号、26号溝



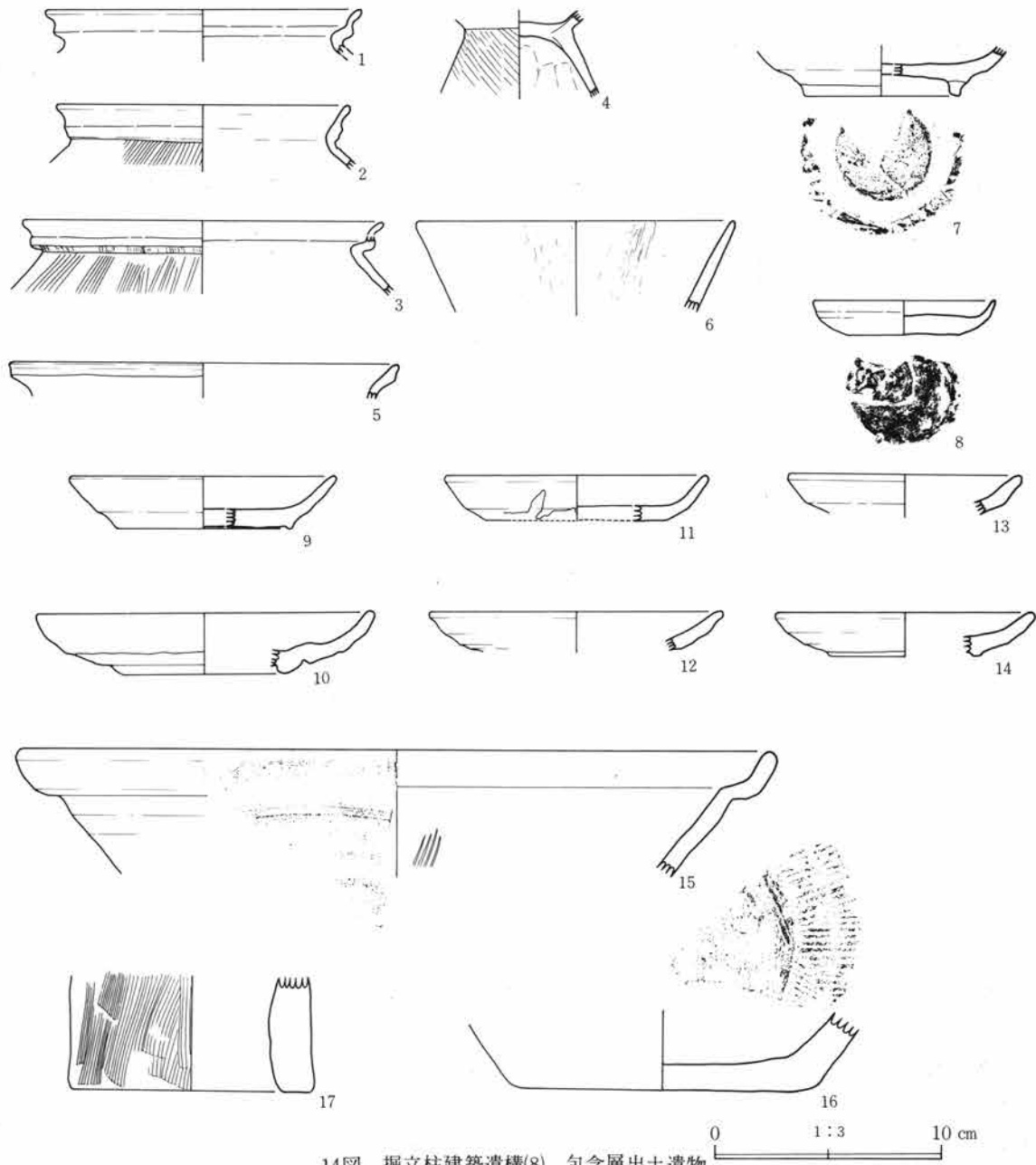
12図 18号、20号、21号、22号溝

I 八幡原A遺跡



13図 竪穴住居址(1、9)包含層出土土器、石器





14図 掘立柱建築遺構(8)、包含層出土遺物

5表 縄文土器観察表 13図 竪穴住居址(1)、包含層

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	文様の特徴	遺存状態・備考
1	深鉢		細砂を多量に含む	鈍い橙色	頸部はやや外反し、口縁部が内傾するキャリパー状をなす。	口縁部には4本の平行浮線文を付し、浮線には刻目を施す。頸部は5本の平行な浮線文を付した後、原体RLの単節線文を施す。	口縁片
2	深鉢		細砂を多量に含む	鈍い橙色		原体単節RLの縄文を施す。	胴部片
3	深鉢		細砂をやや多く含む	鈍い赤褐色		半截竹管による刺突文を平行に施す	胴部片

I 八幡原A遺跡

6表 石器観察表 13図 竪穴住居址(9)、包含層

No	種類	大きさ	形状・調整の特徴	遺存状態・備考
4	打製石斧		短冊形、自然面を残す。	刃部欠損
5	打製石斧	刃部 6.2	薄手の短冊形、表裏とも横方向から大きく調整され側面に細かい調整が加えられている。	基部欠損
6	石 匙	長さ 8.8 刃部 6.5	表面に自然面を残し、つまみ部はやや荒い調整が加えられ、裏面は横方向から大きく調整され刃部は細かく押圧剥離されている。	完形
7	剥片石器	長さ 7.3 刃部 9.1	表面に自然面を残し、裏面は縦方向から大きく調整され刃部は荒く調整されている。	完形
8	剥片石器	長さ 4.7 刃部 10.0	表面に自然面を残し、裏面は縦方向から大きく調整され刃部はやや荒く調整されている。	完形
9	剥 片		表面上端に数箇所の打痕があり、表面は横方向から大きく剥離されている。	
10	剥 片		表面の一部に自然面を残し、裏面は縦方向から大きく剥離されている。	
11	剥 片			
12	凹 石	13.3×6.8 重さ 415g	長楕円形の河原石を使用。表裏に2孔ずつの漏斗状のくぼみを持つ。	完形
13	石 錐	不 明	黒曜石製無茎石錐	先端部、基部を欠損

7表 14図 土器観察表 掘立柱建築遺構(8)、包含層

No	器 形	法 量	胎土・焼成	色 調	器 形 の 特 徴	整 形 の 特 徴	遺存状態・備考
1	甕 形	口 14.0	細砂を含む	鈍い橙色	口縁部は比較的強くS字状に屈曲する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片(12%)
2	甕 形	口 13.1	細砂を含む。堅緻	灰黄色	口縁部は緩くS字状に屈曲する。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ ハケメ線は浅く、細い。	肩部以下欠損(10%)
3	甕 形	頸 14.2	細砂を含む。堅緻	赤褐色		外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ ハケメ線は弱い。ハケメ1単位6本	
4	甕 形		細砂を含む。堅緻	赤褐色		外面 脚台上部ハケメ深く粗い。ハケメの後幅5mm、縦方向のナデによるスリ消しが行なわれる。 内面 底部指押え痕のみ細砂が多量に浮き出ている。脚上部縦方向指頭によるナデ、この後天井部に細砂が多量に含む粘土を補強している。	底部より脚台上部のみ遺存
5	小形甕形	口 17.0	砂粒の混入少ない。堅緻	赤褐色	口縁部外側に浅い凹線を1条めぐらす。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	
6	罎 形	口 14.2	細砂を多量に含む。堅緻	鈍い橙色	口縁部は直状に外傾する。	外面 口縁上部ヨコナデの後緻密な縦方向へラ研磨1mm緻密 内面 口縁上部ヨコナデの後、口縁部全面粗い斜行へラ研磨	口縁上部(10%)

## 6 検出した遺構・遺物

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
7	杯形	底 6.8	砂粒の混入少ない。軟質	灰色	回転糸切りの後、付高台。高台は部分的につぶれている。	外面 胴部ヨコナデ、底部粗いナデ 内面 粗いナデ、余剰粗土の小塊が一部未調整のまま残る。	底部一胴下部破片 ロクロ使用
8	灯明皿	底 5.1	砂粒を含む。やや軟質	鈍い橙色		外面 胴部ヨコナデ、底部左回転、糸切り 内面 ヨコナデ	口縁部欠損、ロクロ使用
9	灯明皿	口高 5.1 1.8	細砂を含む。堅緻	鈍い橙色	底部から口縁にかけては強く折れて、口縁部は直状に外傾する。	外面 口縁部ヨコナデ、底部左回転、糸切り 内面 ヨコナデ	ロクロ使用

8表 陶磁器観察表 14図 掘立柱建築遺構、包含層

No	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
10	小皿	淡灰色でやや硬質	削り出し高台	内、外面に薄い長石釉が施される。	美濃系、江戸初期
11	小皿	灰白色で硬質である。		内面、外面上部に緑茶色の鉄釉がかかる。	美濃系か、安土・桃山
12	小皿	灰褐色で焼締まりがある。	細かく浅い貫入が入る。	緑茶色を呈した鉛釉	瀬戸系、安土・桃山
13	小皿	淡灰色で軟質		肌白色の薄い長石釉が施される。	美濃系、江戸初期
14	小皿	淡灰色でやや軟質		薄い切り高台	美濃系、江戸初期
15	すり鉢	灰白色で硬質である。	内面は荒い楠条痕が底部までみだされる。	濃茶色の光沢のある鉄釉	美濃系、江戸前期
16	すり鉢	淡灰白でやや軟質	縦方向の1条楠目が見られる。	濃茶色で部分的に濃淡がある。くすんだ鉄釉が施される。	美濃系、安土・桃山

9表 埴輪観察表 14図 包含層

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	形状の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
17	円筒埴輪	底径11.0	細砂を多量に含む。	浅黄橙色	基部でわずかに外反が見られる。器壁は下端部が薄い。	外面 ハケメノ1単位幅1.3mm 8本 内面 粗いナデ、基部指押え	基部破片

## 7 考 察

## (1) 溝、及び耕地の変遷

本遺跡において検出した31条余りの溝について、前項にて、その平面、及び断面の形状、覆土の状況、特に軽石のあり方、またトレンチにて検出した溝の接続関係を想定し、調査区内における溝の配置について地形との関連も含めて記述した。ここでは形状及び位置関係の共通性、または類似性に基づき、いくつかの群にまとめ、各群ごとに現用水路や田地割との関連の中で、個々の溝の時期的関係、耕地経営上の意味について考察し、さらには遺跡地を中心とした地域の耕地開発の経緯を考えてみたい。

本遺跡における溝の検出過程で溝との関連を有する遺物の確認はない。このことは、これらの溝が大方耕地内の用水路であることを考慮すれば当然のあり方として納得できることであるが、このため、溝の時期認定の有力な資料を欠くということになった。したがって、調査においては溝の時期認定を他の方法にたよらねばならなかった。遺跡における溝の時期認定の際、とられる方法は、古代末、及び近世後期、浅間山より噴出し、堆積層をなす軽石との関わり方の把握である。これにより、両時期の軽石との関係把握ができた溝については、古代以前、中世より近世前半、近世後期以後というようにおよそ3時期に認定できる。遺跡全体図(3図)においては溝の想定線をスクリーントーンにより軽石のあり方に応じ3種に区別し、表現している。これはそれぞれ次のことを意味する。1、浅間B軽石が覆土上面を覆う。—古代以前に溝は廃棄され、しかも古代末には溝はほとんど埋ってしまっていた。2、浅間B軽石を覆土中に含む。—これは浅間B軽石の降下以後、溝の使用があり、この廃棄、埋没の際、地中に含まれている浅間B軽石が覆土に混入したということの意味する。3、浅間A軽石を覆土中に含む。—これは浅間B軽石を浅間A軽石に置き換えれば、上の説明の意味するところと同様である。ただし、軽石の純層を溝中に多量に含む場合は、耕地が軽石に覆われたことに関連し、軽石降下の時点で溝が廃棄されたと考え得る。溝の時期認定は、以上のような考え方を基本にして進める。また、これに加え、本地域は耕地開発史にあっては、天狗岩用水の開削という大きな画期が近世初頭にあり、これをはさむ以前と以後では耕地の状況は相当に異なると思われる。3図に示されるように、検出した溝は数条の溝が重なるか、または並行して走るといったような、位置関係を共通にする状態が随所に見られる。こうした箇所には多くの場合、浅間A軽石を含む近世後期以後の溝が並行したり、明治以後大規模な耕地整理が行なわれていないことにより、現在使用されている用水路が並行したり、現地割線が重なったりした状態がいたるところで見られる。このような角度からの検討を進める中で、浅間B軽石を含む溝についても、中世以前か、または近世以後天狗岩水系に結ぶものかを推察することが可能である。溝の時期認定については以上の方法を以って進める。本項ではこの他、溝と地割、地目の関係を検討し、あわせてその経緯を考察してみたい。地割、地目については、明治時代初期における地租改正の際の地籍図、近世の水帳を参考にし、近世以後の経緯を把握することに努めた。(文献による地割、地目復元に関しては次項で記述する。)

以上述べた視点に従って考察を進めるにあたり、用水路と考えられ、しかも位置関係を共通にするか、または相互に密接な関係を持つと考えられる溝を次のように4つのグループに分けた。第1群、13号、14号溝、第2群、18号、19号、20号、21号、22号、23号、25号、26号の各溝、第3群、2号、9号、11号の各溝、第4群、8号、10号、12号の各溝。以下このグループに従って記述する。

## 第 1 群 (13号、14号溝)

このグループは、浅間B軽石降下以前に既に廃棄されたと考えられる。14号溝の性格については、形状、及び覆土の状況から用水路であることは疑いなく、それも大規模で、しかも地形に関りなく直状に遺跡地を貫いているところから、遺跡の隣接地区にとどまらず下流のより広域な地域へ用水を供給する任を負った幹線水路であったと思われる。溝の時期については、覆土上面を浅間B軽石が覆うことから古代において使用され、古代末にはすでに廃棄されたと考えられる。他の溝との関係については13号溝が54K16トレンチで南へ分岐する他は関連するものはない。14号溝と位置関係を共通にする溝は、中世以後まったく確認できないが3回以上の改修跡が認められることから、長期にわたって使用されたことが考えられる。また、図に見られるごとく東微高地上で近世前期の新田開発になる地割線との一致が見られ、以後の土地利用のあり方にまで影響を残している。

13号溝は14号溝より分岐し、地形に沿って南の低湿地方向へ伸びることから、近隣の水田に水を供給する任を負っていたと思われる。とくに南低湿地に関与したものであるか否かが興味深い。

## 北低湿地区溝群=第 2 群 (19号~22号溝)

本溝群は北低湿地に間隔を等しく13メートル前後取って、ほぼ東西方向に平行する4条の溝、及びこれらがそれぞれT字状に結ぶ比較的規模の大きい溝(18号溝)から構成される。形状及び重複の所見から、この溝群は同時並存と考えると良いと思われる。溝群の性格については、北低湿地の水田経営に関与したものであることは疑う余地はないが、溝の配置方法に疑問が残る。時期については溝中に純度の高い浅間B軽石の2次堆積が見られ、これらの溝の廃棄が浅間B軽石の降下より長く下らない時点であるとも考えられる。しかし、溝群の配置関係は近世以後の地割に強く反映している。2図に示されるように、北低湿地では、正保期にすでに水田経営が行なわれている。しかもこの時期の地割は現在までほぼ変化なく踏襲されてきており、この地割の中に溝群はびったりとおさまる。慶長年間、天狗岩用水の開削以来この水系に依拠して本地域の水田経営は行なわれており、この北低湿地における水田も例外ではない。北低湿地の地割が天狗岩用水開削時の水田造成になることを認め、本溝群とこの地割の密接な関係に導かれて仮に使用期間を近世まで下げ、天狗岩用水に結びつけ灌水の役割を持つ用水路としたならば、水田一筆におけるこのような密な配置は不自然に思われる。また一方、低湿地区は前述のように湧水位が高く、水ハケが悪いことによる排水の必要から設けられたとするならば、前掲の矛盾は若干解消されるように思えるが、それにしても東西方向に走る溝は23号溝に沿う正保期の地境に関わりなく西に伸びている。やはり、これらの溝は、時期的には中世以前にまで遡及させるのが適当ではないだろうか。この地割と溝の一致のあり方は天狗岩用水の開削にともなう水田造成の際、旧来の耕地の形状をおよそ踏襲し、手なおしを加え、より大きな地割が再編成されたと考えられる。

以上、中世以前の用水路として北低湿地溝群については中世以前、14号溝については古代以前と考えてきた。そこで次に天狗岩用水に先行し、周辺地域の灌漑に供した給水源について考えて見たい。

本地域において、天狗岩用水に先行する広域農業用水路の存在は現在のところ未だ十分解明されていない。現在は烏川、井野川、利根川といった大河川に3方を包囲され、その中央に天狗岩用水(滝川)が南東方向へ貫き、地域一帯の灌漑に供されている。しかし天狗岩用水の開削が手がかけられようとしていた時点のこの地域は、水利の条件が悪く、とくに玉村を中心とした中央部は「未墾地であったか、あるいは荒廃に帰していたのではないか」<sup>(8)</sup>と考えられている。その一方、前掲のごとくこの地域における古墳群、及び古墳時代以後の集落の密度の高さ、またさらに下ったところでは「此の地が玉村御厨として、又円覚寺領としてすでに荘園化されていたこと」利根、烏両川の河岸に沿って、齊田、福島、南玉、下之宮、沼之上、川井、角淵、

## I 八幡原A遺跡

若宮等々発生的に古い聚落が珠数のように一塊づつ連って発達している」こと等を勘案すれば、むしろ古墳時代から中世にかけ、集落立地条件は比較的整っていたのではないかと考えられ、これらの背後には、豊穡な生産基盤の存在が予想される。

この大河川に沿う洪積微高地の背後には北西、南東に長く低湿地域が広域に見られる。本遺跡もこの地域の中央部に位置しているのであるが、この地域は古墳時代以後、各時期にわたって農業生産地として重要な位置を占め、開発が進められてきたと考えられる。この地域における水田経営を支える用水の供給源について、検討して見てまず言えることは、湧水位は高くはあるが、広域を灌漑するに足るだけの水を供給することができるような大規模な留池の存在は、現在はもちろん、過去にあった可能性を示唆する何も確認できない。本地域の給水源は結局のところ、小河川からの用水の導入を考えるより他ない。先に述べたように現在は3方を河床の低い大河川に囲まれた環境にあり、それゆえ用水の導入は、天狗岩用水方向より他考えられないわけである。しかし、遡及すれば、このことに関連し室町時代後期に、この地域の環境を一変させる出来事があった。利根川の変流である。この時期より以前は、利根川は現在の流路になく前橋の北、現在の広瀬川付近にその流路があったと考えられる。<sup>(10)</sup>となると変流以前の状況はどうであったのか。このことについては、後の項で上滝遺跡、及び付近の調査結果にもとずき、くわしくふれるが、結論的には現在の利根川とほぼ流路を同じくして、榛名南麓につながる小河川が存在していた可能性がきわめて高い。また、これとともに天狗岩用水も開削以前は古くから、小規模な自然河川であったことが上滝以北におけるあり方から認められる。中世以前にこのような環境を想定すると、中世以前各時代にわたり、水田経営に際し、この両河川に依拠していたことが思考される。14号溝、及び北低湿地区溝群も、この両河川に結んでいたことが想定できる。後者について今、詳しい時期判定はできないが、角淵八幡宮縁起の中に伊奈備前守忠次が天狗岩用水開削、及び新田開発事業を起すに際し同八幡宮に立願をする下りにある「玉村は平々たる野原有り。……此の野原に新田を望むなり」<sup>(11)</sup>という事情を考慮するなら、その経営時を利根川変流以前の環境の中で考えるのが妥当ではないだろうか。

### 浅間B軽石の降下

遺跡内において、浅間山の爆裂による降下軽石の被害と災害復旧の跡が随所に見られる。前項でも述べたが浅間山は歴史時代に入ってから2回、平安時代後期、及び近世後期<sup>(12)</sup>に大規模な噴火をしている。この際、両度とも、高崎、前橋を中心とする地域一帯に細軽石が多量に降下している。このうち浅間B軽石の場合、本地域周辺では堆積した軽石層の厚さは約15cm前後に達している。<sup>(13)</sup>近年、県内においてこの軽石層に覆われた古代水田址の発掘調査は、昭和48年度調査になる高崎市下小鳥遺跡(上越新幹線地域22地区)を皮切りに、<sup>(14)</sup>10例以上に達している。この種の調査が進む中で、それまで古くから古墳研究の過程で力点が置かれてきた各軽石の火山灰年代学に加え、古代水田に対する被害状況とその復旧、これが及ぼした社会的影響等について注目されるようになってきた。<sup>(15)</sup>北低湿地溝群についても軽石に関わるいくつかの現われがあるので、こういった視点を考慮しながら、これについてふれて見たい。

北低湿地溝群は、その覆土は純度の高い浅間B軽石が主体的である。低湿地区の土層中には、暗灰褐色砂質の浅間B軽石混土層が20cm前後の厚さで全体的に見られ、随所に2～3cmの薄い純堆積層が見られる。こうした状況を見ればこの地区の溝及び耕地経営が浅間B軽石の降下と密接な関連を持ちながら行なわれてきたことを伺わせる。溝群の断面、平面形の調査時における所見では、断面形は大半の溝が単純な逆アーチ形を呈すが、複数の溝が近接、または重なり同方向へ走るといった状況が18号溝、27号溝等に見られ、特に19号溝ではそれが顕著である。また、22号溝では改修の跡がある。このようなことから溝の使用期間を推察すれ

ば、本溝群に関わる耕地は短期間で廃止されたとは言い難い。この点において、南低湿地区の溝群とある程度共通するあり方を示す。

近年の浅間B軽石により覆われた水田の検出例について前述高崎市下小鳥遺跡や、同じ高崎市内の大八木遺跡<sup>(16)</sup>、同道遺跡<sup>(17)</sup>、日高遺跡の例では、あぜ、耕作面、溝の区別なく軽石の純堆積層に覆われている。これらの場合には浅間B軽石の降下により水田が廃棄され、それ以後もこの上に耕作土壌が生成するまで長い間復旧が行なわれなかったと考えられる。本遺跡地内低湿地区にあっては前述のごとくこういった状況はない。浅間B軽石層の周辺地域における状況は遺跡の北西3 km、上滝付近で10cm前後、南方1 kmの下郷付近でもやはり10cm前後、それぞれ中間部に薄いあずき色の灰層をはさんで見られる。本遺跡においても当然これと同じ堆積があったはずであるが、前述のように純堆積層の存在は少ない。こうした状況は以後、スキ込み、または除去といったような、人為的な手が加わったことによるあり方であると思われる。浅間B軽石の降下<sup>(18)</sup>に関し同様な条件下にある遺跡で、高崎市新保遺跡、同上滝遺跡における、低湿地の調査では中世以後の農業経営の跡が見られるが、浅間B軽石の堆積状況が、本遺跡と共通した内容を持っている。

北低湿地の溝群に関わる農業経営は、浅間B軽石降下以前に遡って考える根拠は持たないが、以後軽石層に関わる中で、水田の開発、あるいは再整備が計られたことが推察できる。そして、溝の使用期間については、近世の溝群とは多くの面で様相を異にしていることから、相互にある程度の時間差があったことを考慮して良いとも思える。この溝群の廃棄は、軽石に対する防災対策に徹底を欠いたことによる2次的な影響による水田経営の放棄を意味するか、または利根川の変流による環境の急変に原因するものか、何が廃棄の根本原因になったかについては、ここでは判断を保留するが、浅間B軽石降下後の農地開発、またはこの復旧をめぐる問題は、近年これに関する調査例の増加により研究が緒に就き始めたが、罹災の範囲、被害の大きさ、復旧に要した期間、復旧方法、社会的影響など、現段階では大方不明瞭なうちにある一方、この問題は古代、中世史研究上重要な内容を含んでおり、考古学だけでなく、文献史学も含め今後の重要な課題になると思われる。

#### 南低湿地区溝群

30号溝は、幅も広く大規模なもので3図に示されるように現農道、及びこれを隔てた反対側の用水路に沿っている。大正末期の地籍図によれば、農道の北側に用水路は位置し、本溝と同様の関係が示されている。そこに示されている溝が本溝と同じものとは調査の所見からは考えられないが、位置的な前後は多少あっても、近世初頭から現在までまったく変化なく利用されてきた幹線水路であると考えられる。

6号溝も30号溝と同じく近世初頭から変化なく利用されてきた水路で、とくに北低湿地を灌漑し、調査区よりわずかに東に下った地点で30号溝に合流していたことが地籍図上から想定できる。本溝は、3図に示されるように現水路とほぼ同位置、30cm前後下位に検出される。各トレンチ内で、浅間A軽石の純層堆積が覆土中に検出され、天明3年(1783年)浅間山噴火に伴う降下軽石による罹災の一端が伺える。

第5群、第6群 南低湿地の耕地経営に関わると思われる溝は、西縁辺を走る2号、9号、11号溝(5群)と、8号、10号、12号(6群)、及び5号溝である。第5群は、南で30号溝に、北で6号または17号溝に結びと想定される。時期は覆土中の軽石より判断すれば、9号溝は天明3年時点、あるいは以後までの使用が認められ、2号、11号はそれ以前と考えられるが、これらはいずれも慶長以前に遡及することはないであろう。耕地経営上の機能を同じくするものであり、同時に使用されたものではなく、長期にわたって順次受け継がれてきたと理解できる。溝の位置関係は3者とも、おおよそのところは一致しながらも5 m前後の出入りが

## I 八幡原A遺跡

見られる。これは地割の変動に応じたものであろうと思われるが、近世における農地管理の保守性を勘案すれば、このことは少なからず関心を引くところである。

本溝群の耕地との関わり方であるが、これについては8号、10号、12号溝との関わりの中で検討しなければならないが、旧地籍図や、水帳に照らすと理解が及ばないあり方を示す。3図に示されるごとく、第5溝群は、地割の境に位置していることから耕地との密接な関わりが伺われるが、この南低湿地は、元禄2年の新田水帳によれば、寛文4年(1664年)以前に畑として新田開発がなされたとなっており、以来、明治期までこれが踏襲されてきている。現状は水田となっているが、土壌観察から畑地経営上、用水を補給することが必要な程の乾燥は考えられない。また、この南低湿地は、東微高地とともに正保2年(1645年)以後、寛文4年の間の新田開発に成るものであるが、土壌的には水田適地であり、13号溝や18号溝のこの地区への伸びを考慮すれば古代、中世における水田経営がここにあったとさえ考えることができる。そうでありながらなぜこの地区が慶長年間の開田から漏れ、正保以後まで取り残され、水田としてではなく畑として開発されねばならなかったか。あるいは実際は水田として経営されながらも、水帳には畑として記載されていたのか、そして明治の地籍図までもこれをそのまま受け継ぎ記載したのか、ともかく今後問題の残るところであろう。

### 東微高地

本地区においては掘立柱建築遺構、及び31号溝が検出されている。31号溝は浅く幅広の溝であるが、水路として使用された痕跡もなく、性格は不明である。掘立柱建築遺構は、柱穴の底面に石をすえ、3間×2間の構造を持っている。柱穴径は30cm前後であり、建物自体も小規模である。本遺構の時期は前述のごとく、出土遺物より中世末に位置づけて良いと思われる。東微高地は、南低湿地区と同じく、元禄2年の新田水帳によれば、正保2年から寛文4年の16年間に畑として開発されたことが記載されている。この地区に新田開発が着手される以前に、住居または倉庫として存在したことが考える。

### 西微高地

本地区には東西方向に1号溝、7号溝が走り、第1拡張区においては、井戸址と土壇が3基見られる。この両溝とも形状より見れば、南低湿地区の8号、10号、12号溝いずれかに結ぶ可能性を有しているが、現地割にはもとより、近世の地割にも関連を持っていない。本微高地は、元禄2年の新田水帳の記載及び明治6年の地籍図によれば、寛文4年から天和3年の間畑として新田開発され、以後明治前期までそのまま踏襲されてきている。井戸址は比較的小規模なもので、時期的には軽石層との関連により、近世前期以後と考えられる。畑地経営との関連で考えても、矛盾を生じないと思われる。

本遺跡地内における微高地は、調査における所見においても、水性堆積層が見えないことや、水田土壌特有な酸化鉄分沈着層が確認されないことから、耕地として開発されて以来畑地経営が行なわれてきたと考えられる。本遺跡地においては、北低湿地区が近世初頭天狗岩用水の開削により、直ちに水田として整備されたと考えられる。しかし、これ以外の地区の開発は遅れ、正保期以後に実施されているようである。調査の所見からも微高地の新田開発は畑地として開発されたことは確かである。南低湿地区については、この開発が実際に畑であったのかどうかは調査の所見からは疑問であるが、元禄2年の新田水帳を始めとする記録によれば畑として記載されている。近世初期における新田開発について、本遺跡が所在する大鼻地区を見ると、正保期以後元禄期までの間に、15図に見られるごとく新田開発が行なわれているが、これがすべて畑地である。新田開発が畑に限られたことの理由は何であったか。この問題は新田開発事業が当時の行政との関わりを持っていたであろうから、文献史学からの研究なしには解決は望めないが、ただ根本的理由として



は次のことがあげられるだろう。天狗岩用水の開削を契機として始まった耕地開発が水田に重点がおかれたため、水田の造成に適当でない洪積微高地は開発から取り残されてきた。こういった微高地が近世前期の新田開発の対象地であったのではないだろうか。

#### 浅間A軽石の降下

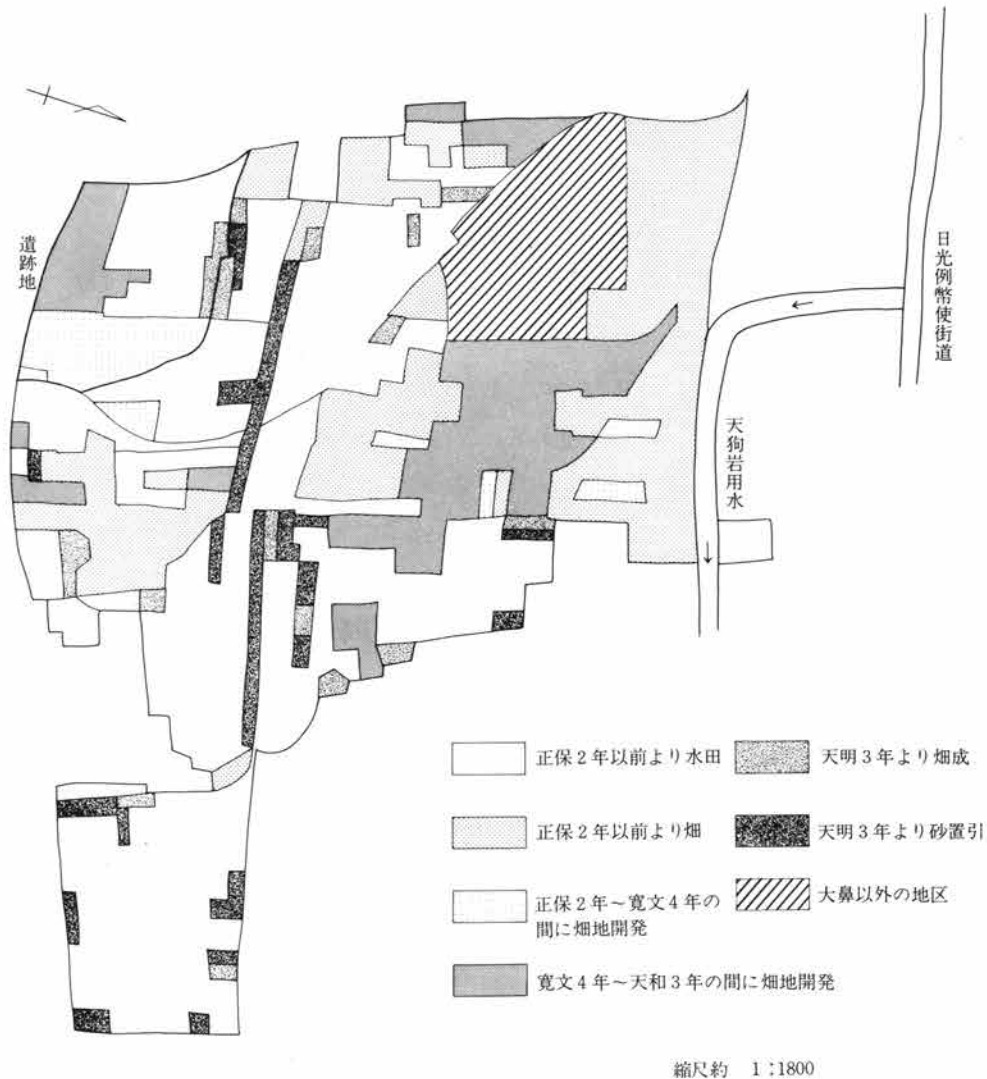
前項において、浅間B軽石とこれに関わる水田経営の問題についてふれたが、天明3年浅間山大噴火の際の降下軽石についても、本遺跡地内において検出した溝や微高地に、この軽石による災害とその復旧の跡を見ることができるので、また浅間B軽石の場合と同様の視点で、この問題を取り上げてみたい。天明3年の浅間山の噴火については多くの記録が残っており、古くから文献史学からの研究が進められてきている<sup>(19)</sup>。大噴火の際の実情を伝える記録の中で、とくにその惨状が伺われるのは、火砕流による被害である。

天明3年8月5日(旧暦)午前10時頃、この年の春、5月9日最初の噴火以来、鳴動、噴火とともに、断続的に軽石、火山灰を降らし続けて来た浅間山は大爆発し、吾妻火砕流に次いで、鎌原火砕流が発生し、この火砕流は、麓の鎌原村を470余名の村民もろとも埋め尽し、吾妻川へ奔走し、午後11時頃には、吾妻溪谷を流下し原町に達し、利根を奔流して、午後3時頃には下流の邑楽郡に押し寄せたという。この際、吾妻川、利根川沿岸の村や田畑を呑み「わずか2時間にして2,000を越える人命を奪い、1,194軒の家を流し、494町3反2畝13歩の田畑を流失泥押しして耕作不能<sup>(20)</sup>」にしたという。

このように大噴火に伴う火砕流が、周辺地域に大きな災害をもたらす一方、前橋、高崎周辺地域でも多量の軽石が降下し、折しも、天明3年は「凶年の絶頂」であり、飢饉の惨状を一層助長することとなった。本遺跡の東に隣接する伊勢崎付近での降灰の有様について『沙降記』<sup>(21)</sup>によれば、7月7日のこととして、「地震太甚矣。屋舎たちまぢまに顛覆せんとするが如し。迅雷霹靂<sup>いなずまひらめ</sup>雷尾閃奔き、沙降ること暴雨<sup>あふだち</sup>の如し」と記されている。また、『文月浅間記』<sup>(22)</sup>には、7月6日のこととして、「黄昏過る頃さらさらとふり出たるハ、雨なるらんとおもふにさもなくして砂ふる事おびただし。空ハむばたまのやミの中より稲妻きらめきわたり、いかずちおどろおどろしく鳴はためきて、浅間の嶽よりもえあがるハ花火の如く、(中略)」「つとめて見ればさきの夜ふりたるよりハあらき白砂高くつもりて、板屋の石もうずもれたり。」と当時の状況が描写されている。また、降下した軽石の量については、「玉村宿、砂の厚さ二寸七分餘、一坪ばかり立候所一石五斗三升餘御座候、但一坪の砂の重さ四貫三百目、田畑降候砂五六寸」、<sup>(23)</sup>とあり、これは玉村に隣接する本遺跡地内、及び周辺の有様として受け取ることができる。本遺跡の北方3km西横手村では「砂降り様子悉焼荒砂降り申候ニ付、作物ハ不残皆無と相見江申候、少々用立茂可仕ハ芋ニ御座候」<sup>(24)</sup>と農作物の被害状況が述べられている。

本遺跡について見ると、西微高地区において浅間A軽石混土層が、微高地全体に厚さ70cm前後表土下に堆積している。一方、現在水田になっている北、及び南低湿地区には軽石を主体とする土層はまったく見あたらず、当時、丹念に掻き集められ、西微高地区を始めとする畑や水田の一画に盛り上げられたことが伺える。西微高地区の堆積層は、全体的に軽石を主体とした混土層で、部分的に純軽石層が介在しており、これが調査区域内の西微高地区全体にわたって堆積している。しかも第8図にも見られるように、軽石混土層の下に当時の表土が見られない場合が多く、このことは軽石を盛り上げるに先立って、当時の表土を削り取ったことが考えられる。ともかく復旧作業は相当の労働力を投入し、徹底して行なわれたことが伺える。『天保13年6月群馬郡八幡原村明細帳』<sup>(25)</sup>には、復旧事業に関連して次のことが記されている。「一、卯年(天明3年)砂降り大變已來困窮有之、夫食拝借并砂除金御救有之候ニ付、相統仕罷在申候」、これに対し、本村に隣接する伊勢崎藩では、「是歳<sup>このとし</sup>の租税<sup>ねんく</sup>を除し、且つ播種<sup>たなかしり</sup>息米<sup>まい</sup>を免ず」<sup>(26)</sup>という処置がとられている。

15図は、復旧の際の軽石を寄せ集めたために耕地として使用できなくなり、課税対象外になった区域(砂



15図 大鼻地区の耕地変遷図

置引)と、水田として使用が出来なくなり、畑地に地目が転換した区域を示したものである。畑地部分についてはつぶれた区域は見られないが、水田部分にあっては砂寄せの状況が良く示されている。前掲の八幡原村明細帳によれば、八幡原村全体で砂置引となった水田は、1町6畝3分と記されている。これに関連した現われとして、検出された溝内における軽石のあり方は、6号溝、8号溝においては、軽石純層のレンズ状堆積が覆土中に見られる。このうち6号溝については以後の改修の跡があり、現在も同じ位置に、30cm程上位に現用水路が沿って見られるが8号にあっては後の改修の跡は見られなかった。このことは、10号、12号溝、8号溝と長期にわたって設けられて来た水路の廃絶が考えられ、15図に示されるような地目の転換、つぶれ地が生じたこと等によって、不必要になった溝も生じたことを示していると思われる。(佐藤)

## (2) 遺跡に関わる文献史料とその役割

前項において、本遺跡地内、及び遺跡が位置する字大鼻地区内の近世耕地の地割、地目についてふれる中で若干の考察を試みた。この作業を進めるに際し、いくつかの史料を援用することとなった。以下、これに

直接関わった史料と、その操作、検討過程を明らかにしておきたい。

- 史料1 明治6年作成 (地租改正時)<sup>(27)</sup>八幡原村地籍図  
 同 2 大正末期作成<sup>(28)</sup> 八幡原村地籍図  
 同 3 正保二年上野国里見領八幡原村御繩打帳 2冊、玉村領八幡原村御繩打帳 2冊  
 同 4 元禄二年上野国群馬郡之内八幡原村水帳 2冊  
 同 5 元禄二年上野国群馬郡之内八幡原村新田水帳  
 同 6 元禄二年上野国群馬郡之内八幡原村(辰より亥まで)<sup>(29)</sup>新田水帳

本遺跡は、現在高崎市八幡原町に所在するが、ここの旧地名は、明治9年に作成された「上野国西部郡村志」及び明治6年(地租改正時)の八幡原村地籍図には、八幡原村字大鼻と記されている。この字名、大鼻は、前掲元禄2年の一連の水帳、正保2年の繩引帳の中に「大鼻」または「大花」あるいは「大はな」と他の字名と共に各地目、反別の頭に記されて見られる。このことにより、まず各繩引帳、水帳より近世前期、大鼻に所在していた田畑を抽出することが

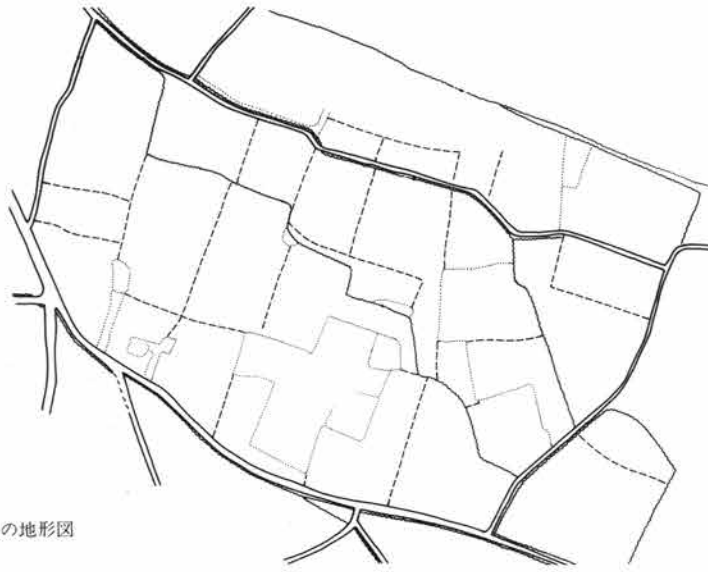
できた。そこで次に、この抽出できた田畑の各々を明治6年の地籍図と対照させた。この地籍図には、耕地の各地割ごとに繩引帳や地目と同様、地目、反別、名義人とともに頭に字名、地番が記されている。これら3史料の対照は、字内の筆数が100を越えていることや、近世の耕地図がないこと等から、当初相当な困難が予想された。しかし幸いにも、元禄2年の一連の水帳に各筆ごとに記された字名の下に番号が付記されており、この番号を明治6年の地籍図の地番に合わせてその地目、反別を比較すると、これがほとんど合致することが判明した。(10表)天保13年八幡原村明細帳<sup>(30)</sup>によれば、元禄期以前の反別(古料、新料合わせ)、28町4反5畝10歩は、以後宝永3年、同8年に新田開発が行なわれたこと(大鼻地区にはない)、天明3年の浅間山噴火に伴う軽石災害による砂置引、畑成(該当地の場所、反別は明治6年の地籍図に示されている。16図)による増減を除けば、近世後期までその石高とともに同じ数字が踏襲されてきている。よって、ここに示される合致は、この経緯を考慮すれば納得できることである。となるとこのことは、

10表 史料対照表

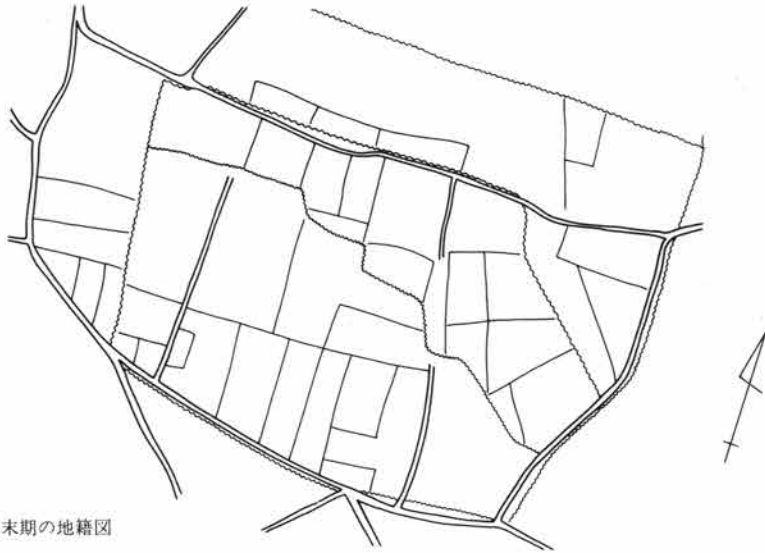
地番	明治6年(地租改正時)地籍図			元禄2年水張 ( )内は 前掲史料番号	正保2年 繩引帳 (地番なし)	
	地目	反	畝			歩
1030	下畑		3	20	(6) 左に同じ	
1031	下畑	1	2		(6) 左に同じ	
1032	下畑	1	6		(6) 左に同じ	
1033	下田		3	27	(4) 左に同じ	左に同じ
1034	下田	2	5	5	(4) 左に同じ	
1035	下田		6	7	(4) 左に同じ	
1036	下田		3	27	(4) 下田4畝12歩	左に同じ
1037	下田		2	27	(4) 左に同じ	
1038	下田			12	(4) 左に同じ	
1039	下田		4	12	(4) 左に同じ	左に同じ
1040	下田		2	24	(4) 左に同じ	左に同じ
1041	下田		8	24	(4) 左に同じ	☆ 左に同じ
1042	下田		2	28	(4) 左に同じ	左に同じ
1043	下畑	1	3	14	(6) 左に同じ	☆
1044	下畑		3			
1045	下畑		8		(5) 左に同じ	
1046	下々畑			8	(6) 左に同じ	
1047	下畑		7	11	(5) 左に同じ	
1048	下畑		6	29	(5) 左に同じ	
1049	下畑		3	4	(5) 左に同じ	
1050	下畑		3	20	(5) 左に同じ	
1051	下畑		3	24	(5) 下畑1畝24歩	

表中☆印、水張巾1044番は下田8畝24歩と記載されており、1041番が欠けている。ここでは一応1041番の誤記と考えた。

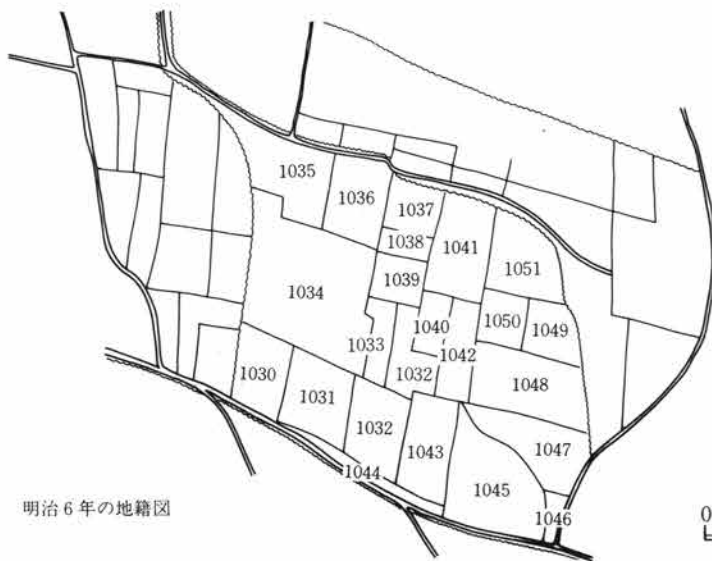
I 八幡原A遺跡



現在の地形図



大正末期の地籍図



明治6年の地籍図

0 約1:1,000 100M

16図 旧地籍図と現地形図の対照

明治6年の地籍図の問題として、地租改正時、改めて田畑の丈量をすることなく、この地籍図は作成されたものであるということになる。

次に、この地籍図と現地割との対照である。この作業は、地籍図の作図が不正確で、現地地形図との対照が困難であった。このため、両者を媒介する役を果たしたのが、大正末期の地籍図である。(15図)これは各筆に新しい地番のみ記したものであるが、近代的な測量方法によって作図されたのであろう。比較的正確であり、現地地形図と容易に対照できる。しかも地割は、明治6年の地籍図と大方変わっていない。これにより、現地割と明治初期の地籍図の対照が可能になり、このことは、この地籍図がその存在が不明である近世の耕地図をそのまま踏襲したか、または簡単な測量を行ない、近世前期の水帳の内容をそのまま書き写したとしても、近世の前期の地割が正確に近い形で、この地籍図、さらに正確には、大正末期の地籍図に示される地割と一致していると考えてさしつかえないだろう。本遺跡地の現況を見ると、南低湿地区を始め近代に入ってから水田化が進んでいるが、耕地整理などの大規模な開発が及んでないため、旧来の地割が、ほとんど現地割に合致するといった状況が見られる。

元禄2年の水帳と、正保2年の縄引帳との対照については、後者には、地番は付記していなかったが、幸い、遺跡地内北低湿地区を中心とする地区の各筆にあっては、地目、反別が両者一連に合致していた。(10表)。このことは、前述のようにして、元禄期まで跡づけられた地割の中でも、北低湿地区に係る部分は、正保2年以前まで遡及するということの意味している。これに関し、元禄2年の水帳の奥書には次のように記されている。「右者上野国群馬郡之内八幡原村水帳正保貳年後関金左衛門神原五郎衛門萩窪市郎右衛門遂検地以後川欠永引等有之付古水帳引合遂吟味水帳写置者也」とあり、この水帳は、正保2年の縄引帳を基にして作成されたことが記されており、この両者の内容が多くの部分で合致するのは当然のことと思われる。

西微高地区に係る部分は、前掲『上野国群馬郡之内八幡原村(辰より亥まで)新田水帳』に記載されている。この水帳の奥書には、「右者上野国群馬郡之内八幡原村跡々新田其以後寛文四辰年5天和三亥年迄新田開発故水帳慥=有之付後百姓方反別書上を以割付引合遂吟味水帳写置者也」とあり、この地区が寛文4年(1664)から、天和3年(1683)の間に新田開発されたことがここに読み取れる。

南低湿地区、東微高地区に係る部分は、前掲元禄2年、『上野国群馬郡之内八幡原村新田水帳』に記載されている。この水帳の奥書には、「右者上野国群馬郡之内八幡原村跡々新田開発故水帳慥=有之=付後百姓方反別書上を以割付引合遂吟味水帳写置者也」とある。この文中注目されるのは、西微高地区に係る水帳の奥書には「跡々新田其以後云々」とあるに対し、この水帳の奥書には「跡々新田云々」とある。このことから、この地区の新田開発は、「其以後」、寛文4年から天和3年に開発された西微高地区に先行して行なわれたことは明らかである。また、この水帳に記載された各地目、反別と同じ記載は、正保2年の縄引帳中には見られない。このことはここに記されている「跡々新田」の意味が正保2年以後、寛文2年以前の新田開発によるものと理解できる。

なお、新田開発について「江戸初期の初検地以後、開発された耕地を新田と呼ぶのが普通」(『郷土史辞典』大塚史学会)とあるが、本地域においては、慶長年間の天狗岩用水の開削に伴う新田開発が盛んに行なわれており、これに伴い開発された耕地は既に「新田」と呼ばれている。そのためこの地域にあっては、近世では初検地と思われる正保2年の検地以後の開発になる耕地がこれと区別するために、「跡々新田」と呼ばれたのではないかと想像される。(文責、佐藤、古文書読解、山本、なお本項の執筆に際し、井上定幸氏より多くの指導・助言を得た。)

### (3) 地籍図利用への指摘——地租改正地図——

考古学界における地図の利用は国土地理院の5万分の1の地形図と原形測量、航測図などが一般的である。地域開発、特に圃場整備事業などによる新図の作成に伴い古い地籍図などが散逸する中で、地籍図の保存と活用は今日の課題である。

地籍図は土地登記簿に付属した地図で、わが国では明治6年(1873)の地租改正法の公布により作成されたものである。それ以前は検地帳や名寄帳が参照され地引約図が作成されたが、地租改正法に基づく字限図の作成にもこれらの旧来の帳簿、村絵図が利用されてきた。〔「地方官心得書」〕

明治15年(1882)に参議兼大蔵卿松方正義の『地租改正報告書の地押丈量』の項によれば地押の方法は、小村は一村通し番、大村は各字単位に一地一筆ごとに番号をつけ、それを十字法または三斜法で測り、畝抗に字、番号、地目、反別、地主姓名などを明記する。

次いでその番号順に一筆ごとの形状を見取図にし、これを連合して一字限図および一村限図を作製し、それを地引帳とともに管轄庁に上進したものである。

地図の作成方法について一定の方式が定められていなかったようで、群馬県下に保存されている地籍図(明治4～9年)のものは、絵師によるもの、不慣れた人民によって作製され、不完全なものが多かったと考えられる。明治20年(1887)に大蔵大臣の内訓で地面の縮尺や測量の方法が統一され、町村図は、3,000分の1、字図は600分の1の縮尺であること、地図は原則として10年ごとに更新することなどが記され、測量器具、測地方法を示している。

#### 地籍図の所在

地籍図が保管されている機関は、地方法務所の各出張所(登記所)市町村の税務課、固定資産税課などの各部課である。前者は固定資産の登記簿とともに、後者は固定資産税のための地籍図(土地台帳)とともに使用されている。県史編さん室に1267枚保管されている。

江戸時代の絵図面、地租改正にあたっての地籍図(公図・地引絵図・字切図・一筆図・分間図など)は旧村の村長宅、区長宅などに私有として保存されている場合が多い。特に土地関係資料は江戸時代の検地帳、名寄帳などとともに、区有のタンスに保存されている例が多い。

#### 地割形態を知るための利用

地籍図には一筆ごとの土地の形状が示されているから、旧地割を知ることでできる唯一の具体的資料であることが多い。

条里遺構の調査、旧河川、道(馬入)の確認、池跡、濠跡の調査など、地籍図の地割形態の利用例が多い。特に本県では既に滅失した古墳の周濠や、古墳の規模も確認できる。

現況による調査のみでは見おとしてしまうことがあるが、地籍図によって墳丘外の形態が再確認できるであろう。

しかしながら、大正時代の耕地整理で遺構が消滅し、新たに地籍図が作られた場合などは、字切図を旧図とあわせ考えることが大切であろう。比較的よく整合する場合もあるが一般的に地籍図の接合は各図葉の相対的位置関係がわかりにくいこと、不正確さのために必ずしも容易でない。字切図となっている旧村の場合には、索引図的な村全図を探す方が位置関係がわかりやすい。

地籍図の不正確さの最大の原因はその測量法にある。地租改正による地券作成にあたっては、古検地帳を参考にするように通達されている。基本的には、古検地と同一レベルの測量であったと思われる。近代的測

量のように、基準となる三角点を使用するのではなく一筆一筆の形状を測量して、一筆ごとの大量図を作成しそれを集成したものである。

そのために誤差が生じやすいが、平坦部の場合、周囲の地筆が接合する関係上誤差が相殺されることもある。また地租に対する思わくから「繩のび」なども考えられる。

畦畔については現状をかえることなくという指示から小径などは変化しないものであろうと推察する。

地籍図は地番と所有者の変化はあっても大きくかわることが少ない。(地押、川欠等の災害による変化は別である。)

水田遺構、河川遺構など、考古学的な調査には、地籍図の活用は欠かすことのできないものであり、地名なども重要な手がかりとなることを指摘したい。(阿久津)

#### 註

- (1) 新井房夫「前橋市の自然地理的環境」『前橋市史』第1巻 1971「表層地質図」『土地分類図No.10(群馬県)』経済企画庁総合開発局 1971
- (2) 都丸九十九「中世に於ける玉村(1) 上毛及上毛人259号 1938
- (3) 引用文は都丸九十九「玉村宿研究の基礎 (1) 上毛及上毛人283号 1940
- (4) 都丸九十九「上野国那波郡玉村府内角淵八幡宮塚(訳文)」『群馬県史料集』第8巻 縁起編1 1973
- (5) 橋田友治「例幣使街道—玉村宿と柴・三宿—」
- (6) 都丸九十九「天狗岩堰開鑿史」 1947
- (7) 尾崎喜左雄氏は「火山噴出物と遺跡—考古学編年上の基準—」『一志茂樹博士喜寿記念論集』1972において浅間Bスコリア(浅間B軽石)に対し「弘安4年の噴火と推定する妥当性が見出せる」とし、その論拠として水沼遺跡の所見、『上野国神明帳』総社本、平田篤胤『古史伝』、宇通廃寺の調査、及びこれに関する吾妻鏡の記事を引いている。

石川正之助氏は「22地区」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報1』1973、群馬県教育委員会の中で水田址を覆う「Bスコリア」の噴出時期について藤原宗忠の日記『中右記』の天仁元年(1108)九月五日の条に見られる浅間山噴火の記事を引き「この水田地帯を壊滅せしめたものに限定して天仁元年噴出と推定して妥当であろうというにとどめたい」としている。そしてこの記事に基づき理由として「噴火直後の同時資料であること」、「『解』の手続によって公的に報告された事実に基づくそれであって、たんなる風聞ではない」こと等をあげている。しかしその一方、「決して一時期に限定しうるものではなく、一連の火山活動によるものと理解される」とし、弘安4年説に対しても否定はしていない。

参考までに以下『中右記』浅間山の噴火に関連した部分を抜粋し紹介しておく「左中辨長忠於陣頭談云、近日上野國司進解狀云、國中有高山稱麻間峯、而從治曆間峯中細煙出来、其後微々也、從今年七月廿一日猛火燒山嶺、其煙屬天沙礫滿國、煨燼積庭、國內田畠依之己以滅亡、一國之災未有如此事、依希有之小在所記置也。』『中右記三』増補史料大成11 1965

- (8) 前掲 (6)
- (9) 前掲 (6)
- (10) 利根川のこの変流についてはいくつかの古文献中に関連記事が見られる。『伊勢崎風土記』中に「比利根川呼広瀬川其源興利根川同(中略)按、今之比利根(現在の広瀬川)、古之利根川、而今之利根、古之比利根也。往時支流為正流、正流反為支流、云々、」とある。また、富田永世『上野名跡志』、及び『上毛伝説雑記』にも関連記事が見られる。後者については本書173頁にて抜粋し紹介している。

なお利根川の交流について検討する際、特に能登健氏より多くの助言があった。

- (11) 前掲 (4)
- (12) 本書次項にてこれについてふれる。

## I 八幡原A遺跡

- (13) 上滝遺跡周辺のボーリング調査柱状図参照(93、94図)
- (14) 前出(7)
- (15) 能登健「浅間山大焼、榛名山爆裂」季刊どるめん No19 1978
- (16) 田島桂男、上原啓己他「高崎市文化財報告書第12集、大八木水田遺跡—高崎市北部第三地区土地区画整理事業に伴う調査報告」高崎市教育委員会 1979
- (17) 能登健、石坂茂「同道遺跡」『新発見の考古資料、発掘された古代の水田』群馬県立博物館 1980
- (18) 巾隆之、真下高幸、佐藤明人「新保遺跡」『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査概報 V』群馬県教育委員会
- (19) 萩原進「天明三年浅間山噴火関係資料目録」上毛及上毛人 270号 1939
- (20) 萩原進「天明三年浅間山大噴火と社会的影響」上毛及上毛人255号 1938
- (21) 伊勢崎藩老、関重嶷遺著(漢文)「沙降記」渡辺敦、訳文『伊勢崎風土記』伊勢崎郷土研究会 1936
- (22) 上毛高崎、羽鳥氏女 一紅述「文月浅間記」『高崎市史』第1巻 1969
- (23) 前掲(20)
- (24) 「天明三年七月、群馬郡西横手村浅間焼被害明細書上」『群馬県史』資料編 10近世2 西毛地域2 1978
- (25) 『群馬県史』資料編 10 近世2 西毛地域2 1978 所収
- (26) 前掲(21)
- (27) 原図は県史編纂室にて所蔵されている。
- (28) 県史編纂室所蔵複写図を使用、原図は社団法人群馬農林統計協会にて、所蔵されている。
- (29) 資料3～6は県史編纂室所蔵のマイクロフィルムを借用した。原本は高崎市八幡原町、田中一三氏により所蔵されている。
- (30) 前掲(20)



## II 八幡原 B 遺跡

## II 八幡原 B 遺跡

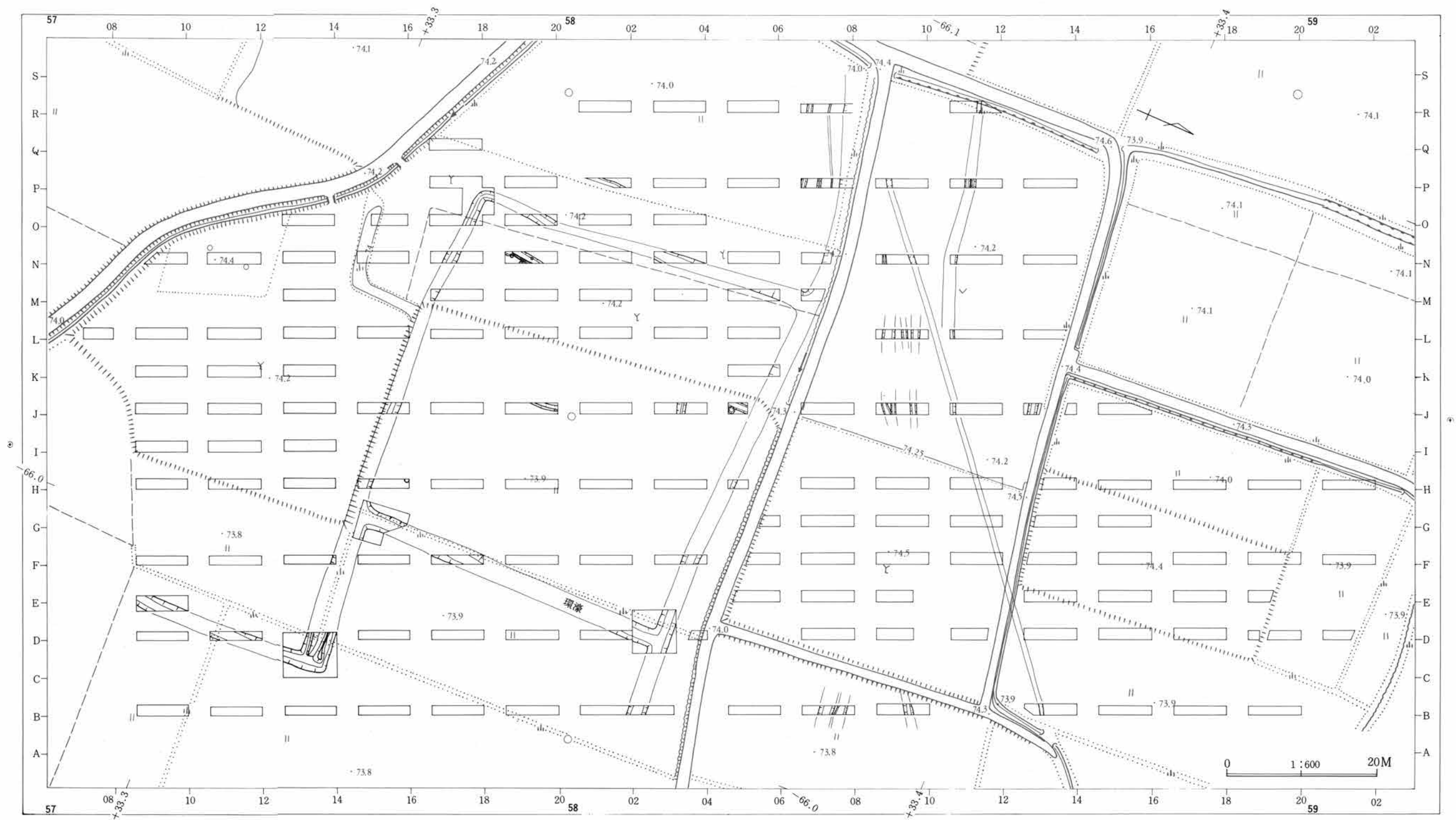
## 1 発掘調査の経過

八幡原B遺跡の発掘調査は八幡原A遺跡の調査が整った後の、昭和49年4月10日より開始した。発掘調査は八幡原A遺跡と同様、当初の計画に基づき、トレンチ方式による遺構の検出に務めた。調査の進行に伴い調査区に多くの溝を検出したが、6月に至り出水の影響を受けて調査の継続が困難となり、作業を中断した。

第二次調査は、昭和49年11月25日より開始し、まず出水の影響を受けた各トレンチの清掃を行ない、遺構の検出に努めた。さらに、遺構相互の関連を把握するため、新たに多くのトレンチを設定し、後述する環濠、溝、井戸状遺構等の存在を追求、明らかにした。翌昭和50年1月25日をもって、約2ヶ月間にわたる本遺跡の調査を終了した。調査経過の概要については以下作業日誌のとおりである。

11表 作業日誌

月 日	調 査 内 容	備 考
昭和49年 4月10日(水)	第1次調査の発掘作業開始。	
4月11日(木)	グリッド設定のため測量を開始する。基本杭の設定を行なう。	
4月12日(金)	水田部分のトレンチの設定作業を行なう。	
4月15日(月)～19日(金)		発掘作業の開始。 水田部分に溝検出。
4月22日(月)～26日(金)	水田部分と合わせ、畑の部分にもトレンチ設定、遺構の検出に努める。調査を一時中断、A遺跡に移動。	畑地部分に大規模な溝を検出。
5月13日(月)～18日(土)	トレンチの拡張を開始する。新たにトレンチを設定する。	
5月20日(月)～21日(火)	トレンチ拡張、A遺跡に主力を移動、調査を中断する。	調査を中断
昭和49年 11月19日(火)～22日(金)	第2次調査の発掘作業開始。トレンチの清掃。新たにトレンチを設定。	第2次調査の開始。
11月25日(月)～30日(土)	トレンチの精査。トレンチの設定。遺構の検出作業。	新たにトレンチを設定する。
12月2日(月)～6日(金)	水田部分トレンチの調査。遺構の検出作業。土層断面の実測を開始する。	
12月9日(月)～14日(土)	トレンチの精査。畑地部分の埋め戻し開始。全景写真のためタワー組立て作業を行なう。	畑地の人力による埋め戻し作業を開始する。
12月16日(月)	調査区全景写真。土層断面の実測。人力による畑地部分の埋め戻し。	
12月20日(金)	トレンチの精査及び遺構の検出作業。遺構の平板実測を開始する。	



17図 八幡原B遺跡全体図



月 日	調 査 内 容	備 考
12月23日(月)～25日(水)	トレンチの精査及び遺構の検出作業。畑地部分埋め戻し作業。	昭和49年の作業終了。
1月9日(木)～11日(土)	B地区の埋め戻し作業開始。	昭和50年の作業開始。
1月13日(月)～18日(土)	溝交点の拡張作業。遺構の平板実測。溝土層断面の実測。水田部分ブルドーザーによる埋め戻し作業を行なう。	ブルドーザー使用。
1月20日(月)～25日(土)	溝交点の拡張作業。遺構の平板実測。水田部分のブルドーザーによる埋め戻し作業。	
1月27日(月)	発掘作業終了。撤収作業。	調査撤収作業を行なう。
1月28日(火)	プレハブの撤去。	

## 2 遺跡の位置

八幡原B遺跡は、高崎市八幡原町字大道端277～302番地にかけて所在する。井野川右岸東方約500mほどの平坦地上に位置し、標高74mほどの独立状の低台地と、周辺に広がる標高73mほどの水田部分からなる。

遺跡地西方に流れる井野川は、その右岸に幅広く微高地を生成、発達させており、八幡原、下斉田、下滝町など近隣の部落は、この微高地上に形成されたものである。この微高地の東端に位置する本遺跡は、その形成の際独立した微高地として取り残されたものと考えられる。その後、長年の開墾、耕作等により現在の地形となったものである。

調査時において微高地は桑畑として土地利用がなされ、その表面には少量の摩滅した土器片が散布する程度で、現状からは遺跡の性格を推察するのは困難な状態にあった。

調査対象区域は、関越道路線内の畑地部分と水田部分を合わせた約12,000m<sup>2</sup>程である。

## 3 調査の方法

本遺跡における調査区の幅、グリッドの方位、設定方法、最小グリッドの大きさ、その呼称方法は八幡原A遺跡と同様である。ただしグリッドの基準杭はB遺跡内中央に設置されている測量杭S T58+00に拠った。

## 4 検出した遺構・遺物

発掘調査によって検出された遺構は、環濠、環濠に伴うと考えられるピット列、溝、井戸状遺構等がある。これら遺構の概要を記すと次のとおりである。

### (1) 環 濠 (図版12)

調査区中央部分に検出された大規模な溝は、調査の進行に伴い相互に連結することが確認され、方形の環濠となった。その規模は内法で、東辺42m、西辺44m、南辺44m、北辺47mで、北辺、西辺がやや長い方形をなしている。東辺の方位は、N-6°-Eの方向を示し、周辺の田畑の地割方向と、ほぼ一致していることがうかがわれる。

## II 八幡原B遺跡

環濠を形成する東辺、西辺の溝は、現農道に沿い、東西方向に流れる北辺の溝と連結し、その交点はTの字状となる。南辺の溝は、その西端で北に向かって直角に曲り西辺の溝となる。また東辺の溝との交点はT字状を呈し、さらに東に向かって20mほど延びた後、南に向う複式の構造を示している。その溝は数次にわたり改修を行なったことを示している。(図版12)

溝断面は東辺、西辺において二重舟底状を呈する。北辺、南辺についても二重舟底状を呈するものと考えられるがトレンチ調査の性格上、不十分な結果となった。

溝断面の規模は、東辺において確認面である第IV層黒色土層、上端幅3.6m、2段目の上端幅2.5m、底部0.8mほどである。

西辺においては、上端幅1.5m、底部幅1mであり、その深さは、確認面より約1.0~1.2mほどである。

環濠内の多くの設定したトレンチでは、掘立遺構等の遺構は確認されず、北西隅に検出された隅丸方形の井戸址、西側57区19、20トレンチ内のピット列のみである。

### (2) 井戸状遺構

J5トレンチの南東側に検出したもので径60cmほどの円形プランを示す。深さは第II層の褐色土層から80cmほどで、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は上部が砂質を帯びる褐色土で、下部に至り粘性のある黒色土の堆積がみられる。調査中は、多量の湧水があった。出土遺物はみられなかったが、環濠に伴う井戸跡の可能性が強いものと考えられている。

### (3) ピット列

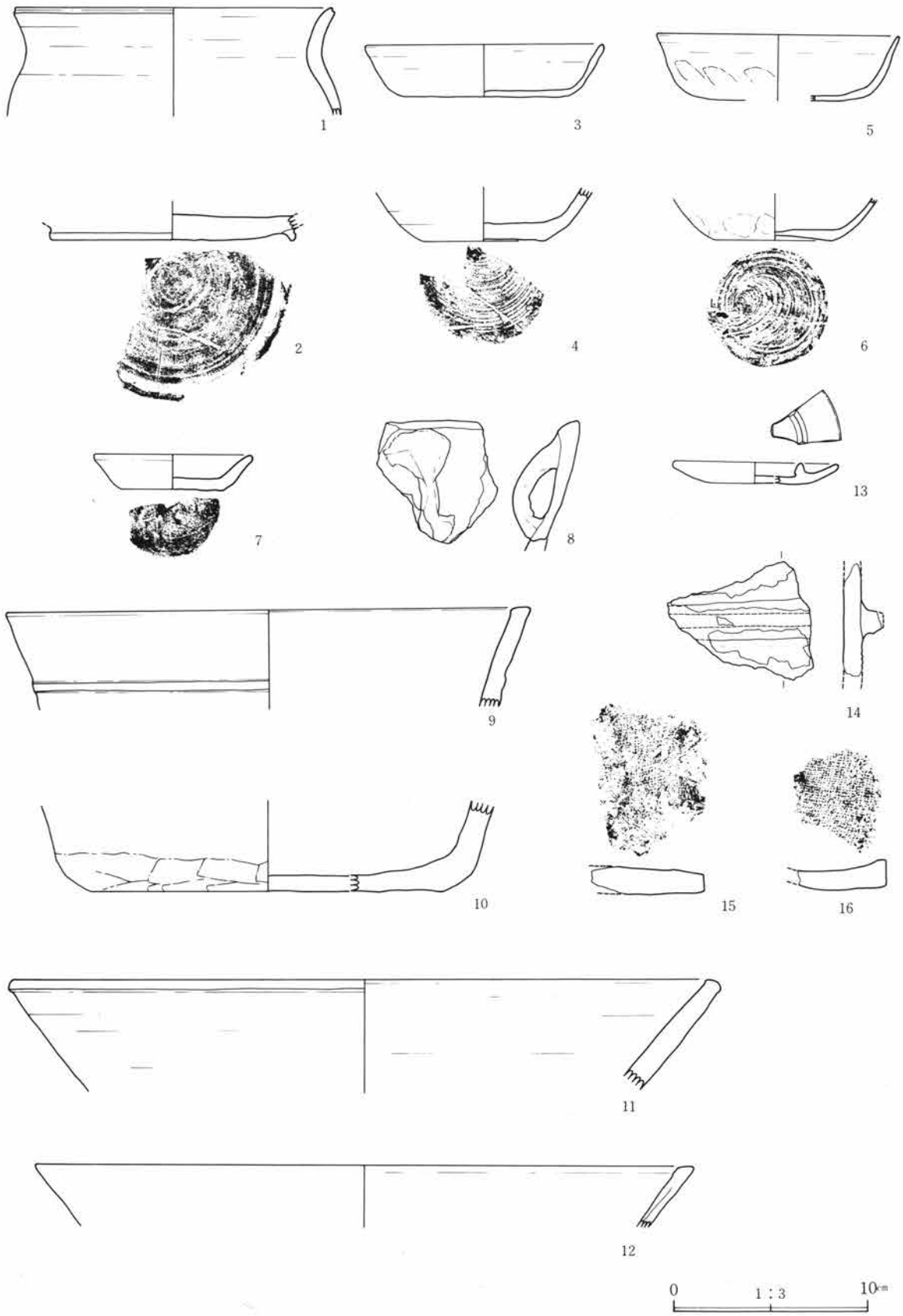
57N19、20トレンチにて検出したもので、トレンチ南側部分において南北方向に走る数個のピットを検出した。ピットは径25~30cmほどで、第IV層黒色土層より30~40cmほどの深さがある。ピット間の距離は40cmほどであり、その西側はゆるやかな傾斜を示し、環濠西区との関連が予想される。その性格については、環濠西区の内側に位置し、その方向を同じくすることからして、環濠に伴う柵の可能性も考慮されるが、本遺跡に対する調査の不十分さを合わせ、想像の域を出ない。

### (4) 溝 (図版12)

環濠を形成する大規模な溝の他に、調査区西側の畑地部分に検出した数本の小規模な溝及び調査区東側の水田部分に検出した2本の中規模な溝がある。これらの溝は、その走行形状、及び水田耕土の堆積からみて水田に伴う水路として利用されたものと判断されるものであり、その覆土から中世~近世の溝と考えられる。

12表 土器観察表 18図 環濠(6、9)、包含層

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口径16.4	細砂を多量に含む。堅緻	橙 色	頸部から口縁部にかけて強く外反する。口縁端部に凹線が1条施される。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部ヘラナデ	肩部以下欠損(8%)
2	壺形	底径12.5	細砂粒、小礫を含む。	灰 色	削り出し高台	外面 底部回転ナデ調整、右回転 内面 底部粗い回転指ナデの後一部指頭ナデ痕を4~5条施す。	底部破片 須恵器、ロクロ使用



18図 環濠(6、9)、包含層出土遺物

II 八幡原B遺跡

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
3	杯形	口径12.4 器高2.7	細砂を多量に含む。堅緻	橙 色	底部から胴部にかけて丸味を持って強く彎曲する。口縁部は直状に外傾し上部がわずかに外反する、平底、器壁が薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、彎曲部指押さえ、ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	(25%)
4	杯形	底径6.5	砂粒の混入少ない。やや軟質	灰 色	底部は平底、底部から口縁部にかけて緩く内彎しながら広がる。器壁は厚い。	外面 口縁部一胴部ヨコナデ、底部右回転糸切り 内面 ヨコナデ	底部一胴下部破片、須恵器、ロクロ使用
5	杯形	口径12.5 器高3.5	細砂を多量に含む。堅緻	鈍い赤褐色	底部から胴部にかけては丸味を持って彎曲し口縁部は直状に外傾し上部がわずかに外反する。平底、器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、彎曲部指押さえ痕がめぐる。底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	(26%)
6	杯形	底径6.1	中、粗砂を多量に含む、堅緻	灰 色	底部はやや上げ底、底部から口縁部にかけて緩く内彎しながら広がる。器壁は薄い。	外面 胴部ナデ、底部右回転糸切り 内面 ヨコナデ	底部一胴下部破片
7	灯明皿	口径8.1 器高1.8	細砂を含む。堅緻	鈍い橙 色	底部から口縁部にかけては強く折れて、口縁部は直状に外傾する。	外面 口縁部ヨコナデ、底部左回転糸切り 内面 ヨコナデ	ロクロ使用 (25%)
8	内耳鍋		細砂、小礫を含む。やや軟質	灰 白 色	口縁部はやや内彎しながら外傾する。内側に耳状の把手が付く。把手付近は器面の起状が目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 ナデ	把手部分の小破片
9	土鍋	口径27.1	微細砂を含む堅緻	褐 灰 色	頸部がやや外方に折れ口縁部は直状に外傾し端部は平坦面を作る。頸部には削り出しの微隆起帯がある。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片 (8%)
10	土鍋	底径18.0	細砂、小礫を含む。堅緻	鈍い黄褐色	底部から胴部にかけて丸味を持って立ち上がる。底部の器壁は胴部に比べ薄い。	外面 胴部粗いナデ、立ち上がり部ヘラケズリ→底面は磨耗しザラザラしている。 内面 ナデ	胴下部一底部破片、胴部はススで黒色をなす。
11	土鍋	口径37.0	砂粒を多量に含む。堅緻	灰 色	口縁部は直状に外傾する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 ヨコナデ	口縁部小破片、瓦質、ロクロ使用
12	土鍋	口径34.0	細砂を多量に含む。	外面鈍い褐色	口縁部直状に外傾し端部に平坦部を作る。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部小片、ロクロ使用

13表

陶器観察表 18図 包含層

No.	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
13	灯明皿	灰褐色で焼締まりがある。		濃茶色の餡釉がかかる。	明治以降



14表 埴輪、瓦観察表 18図 包含層

No	器形	大きさ	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
14	円筒埴輪	基部径 11.0	細砂素地を多量に含む。	浅黄橙色	断面台形のタガをめぐらす、タガの幅1.2cm、高さ1.2cm	外面 タガ及びタガの上下はヨコナデ 内面 粗いナデ	タガを伴う小破片
15	平瓦	厚さ 1.4	細砂を含む。石英、輝石、緑泥片岩混入。堅緻	淡橙色		模骨痕、布の合わせ目痕、粘土接合痕、粘土はぎ取り痕等は認められない。表面は布目。裏面はへら状具により叩きしめを磨り消す。瓦端部の化粧は2面調整	一枚作りの可能性が高い。
16	平瓦	厚さ 1.3	同上	同上		同上	15・16は産地、時期は同一と考えられる。

## 5 考 察

本遺跡の調査によって微高地上には大規模な溝による環濠遺構、水田部分においては多くの中、小規模の溝の検出をみた。またわずかではあるが第18図に示すように古墳、奈良、平安、中、近世の時代にわたる土器片、陶磁器片、埴輪片、布目瓦片等の出土をみた。しかし環濠遺構との関連を考へうる少数の中世遺物類を除いて遺構に伴う遺物の出土はみられなかった。以下、これら遺構、遺物についてその概要を記し、本遺跡のまとめとしたい。

### 環濠遺構

微高地上の畑地部分に検出した大規模な溝は調査の結果、東西42～43m、南北44～47mの方形を呈する環濠遺構であることが明らかとなった。溝はさらに南側に連結し、複式の構造を示している。環濠を構成するこれらの溝は二重舟底状の断面を呈し、部分的には数度の改修を行ったことがうかがわれる。北側の東西に走行する溝は西方からの流水を図っており、環濠に流れた水は東南部分からさらに南流することを示している。環濠内に流入、滞水した水は単に環濠の湛水のみならず、周囲に推定される水田耕土との関連からもおそらく農業用水路と共有した形で利用されたのではなかろうか。

トレンチを中心とした本発掘調査によって環濠内に検出した遺構は井戸址と考えられる土坑、西側の溝に並行するピット列のみであり、掘立柱建築遺構等の建等についてその検出をみなかったが館址としての性格も考慮する必要があるものと思われた。

本遺構の年代については第18図に示すように15～16世紀代と考えられる小皿、内耳付鍋、土鍋類などの出土をみているので室町後半代にその年代をあたえておきたい。

本遺構の立地する井野川右岸八幡地区は特に古墳時代以降多くの遺跡が存在するが、とりわけ本遺構に関連するものとして本遺跡西方約300mに所在する八幡原館址をあげることができよう。山崎一氏の古城壘址の研究によれば東西280m、南北150mほどの二重堀をめぐる大規模な館址であり、『上野誌』において安達盛長の居館と伝えられるものである。本遺構はこの近接する八幡原館址ともっとも深い関連を想起させるものであり、その支館として理解されるかもしれない。しかし八幡原館址が上野国の守護職の任にあったと考えられる建仁3年から弘安4年(1203～1281)にかけての安達盛長の居館とした場合、本遺構の推定される

## II 八幡原B遺跡

年代とかなりの時間的へだたりがある。しかし八幡原館址が安達氏の居館であるということについても伝承の城を出ないのであるから、今後の調査によっては当然その年代を下げなければならないという事態もでてこよう。いずれにしても八幡原館址の存在は本遺構の性格を知る上で注目すべき遺跡であり、今後の調査研究に多いに期待される場所である。中世遺構は本遺構のみならず、同じ関越自動車道にかかる下郷遺跡、八幡原A遺跡においても館址、掘立柱建築遺構等の発見例もあり、今後の調査によっては多数の中世遺構がこの八幡原地区を中心とした地域で発見され得るものと思われる。中世社会の研究において考古学上、注目すべき地にあることは想像にたたくない。

### 水田部分における溝状遺構について

水田部分の調査は八幡原A遺跡と同様、水田遺構の確認、およびその検出を目的として調査を進めたが、東西方向に走る中、小規模の溝を検出したのみで確実な水田遺構は確認し得なかった。しかし水田部分に検出したこれらの溝は中～近世の耕作土と推定される第Ⅱ層の褐色土層から確認され、第Ⅳ層の黒色土層に至り底部としている。その埋土は第Ⅱ層と同質といえる褐色土であり、中、近世と推定される水田耕土と明らかに関連をもつものでその農業水路として利用されたものといえよう。第Ⅳ層の黒色土層は平安以前の堆積土であり八幡原A遺跡と同様、水田耕作土の可能性が考えられた。しかし調査の結果は水路の検出、水田耕土の確認もなし得なかった。したがって本地区において平安以前の水田址の存在は不明である。

### 出土遺物について

次に出土遺物からみた本遺跡の性格についてふれておきたい、第18図1～6の甕、杯、壺破片は奈良、平安時代にあたる真間、国分期にあたるものであるが、これら遺物に関連する遺構は検出されない。したがって近接する他地域から何らかの形でもたらされたものと考えられる。

7～12にみられる灯明皿、内耳付鍋、土鍋類は中世15～16世紀代と考えられる遺物類である。これらの遺物は大規模な溝に区画された環濠遺構と関連するものと考えており、その時期を推定する上で良好な資料といえる。

14の埴輪破片はタガが比較的シャープで外面に横方向の八ヶ目がみられる。円筒埴輪としては5世紀代にみられる特徴がうかがわれよう。おそらく井野川右岸段丘面に多数分布する古墳との関連において理解されるものであろう。15、16の瓦片は、薄手の布目瓦片で平安時代に含まれるものと思われる。井野川右岸八幡原地区において廃寺跡の存在が考えられるのでその瓦片とも思われる。

以上、本調査による遺構、遺物についてその概要を記した。また調査の実施にあたっては八幡原A遺跡と同様、従来、比較的調査の不十分であった平坦地にその主眼をおいた。このことは本遺跡地西方の下郷遺跡、南西方向の鈴ノ宮遺跡に知られるように井野川、烏川左岸段丘へ帯状に広がる多数の古墳、および遺物散布地から多くの集落址の存在が予想され、その生産基盤がこの平坦地に求められるが由である。調査の結果は中～近世にわたる水田遺跡は溝、耕土層等によりその存在が認められたが、それ以前の水田遺構は確認し得なかった。むしろ環濠遺構にみられるように中世遺構について新たな認識を求められるものであったが、調査時においてはその認識が薄く、その追求もはなはだ不十分な結果に終わっている。(平野)

註(1) 山崎一 「八幡原館址」『群馬県古城址の研究』上巻 1971

(2) 巾 隆之 「下郷 —— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集——」群馬県教育委員会 1980

(3) 平野進一 「八幡原A遺跡」『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査概報Ⅲ』群馬県教育委員会 1974

### III 上 滝 遺 跡

## Ⅲ 上 滝 遺 跡

### 1 発掘調査の経過

第一次調査（昭和50年9月22日～昭和51年3月18日）

(1) 調査区の設定 当初の分布調査では遺跡の範囲は、東西（路線幅）80m、南北長350mとかなり広範囲にわたっていた。このため南北に長い地域をまず100m単位で区画し、南から順次A、B、C、D、E区の5つの調査区を設定した。

(2) 試掘調査 A～E地区について遺構の有無を確認するための試掘を実施。試掘は路線幅内に8m間隔に1本ずつのトレンチを入れることを原則として計画し、各トレンチを設定。トレンチの長さは、その場所の状況に応じて考慮し、長いもので50m内外である。遺跡地全域にわたる試掘調査は、9月末日から10月末日まで約1ヶ月間を要したが、その結果、遺構はB地区を中心とした路線内東寄りの微高地上に集中していることが確認された。C地区～E地区にかけては、後述するように榛名山二ツ岳の爆裂に伴う火山噴出物（FA）を主体とする水性堆積層が厚く認められ、同層に先立つ古墳時代の溝、後出する古代以後、中、近世を中心とする時期の溝群が確認された。A地区ではなんらの遺構も出ていない。

(3) 遺構の調査 調査は遺構が集中するB地区を中心として実施することとし、10月末日から微高地上の表土を全面的に取り除き、本格的に着手された。ここで検出された遺構は後述するとおりである。

なおB地区調査対象区域内には民家が1戸、及びこの家で経営するビニールハウスがあり、これらの移転が調査終了予定期日まで完了しないため、この部分については後日第2次調査として実施することとし、54年3月中旬に第1次調査を終了した。

第2次調査（昭和53年4月10日～昭和53年6月15日）

自動車道の本格的な工事がすでに着手され、調査対象地を除いた区域では盛土作業が進行中であったが、日本道路公団及び、この地区の工事を担当した業者の協力を得て、第1次調査で調査未了であった民家及びビニールハウスの跡地部分を対象に調査した。表土の除去作業は昭和52年度末に実施し、53年度当初から着手したもので、その成果は後述のとおりである。（松本）

15表 作 業 日 誌

月 日	調 査 内 容	備 考
昭和50年 9月22日(月)	第1次発掘調査開始	資材搬入
23日(火)	バックフォーにより遺跡地内の桑の抜根。	
25日(木)	グリッド設定、基本測量杭の設置、D地区トレンチ設定。	
26日(金)	D地区試掘を始める。	プレハブ事務所設置。湧水多い。 土器の出土量はごく少ない。
10月3日(金)	20D66トレンチの周囲を拡張し平面発掘調査を実施。	拡張区では土器の出土量は多いが溝1条のみで他の遺構は確認できない。

1 発掘調査の経過

月 日	調 査 内 容	備 考
8日(水)	C地区トレンチ設定、試掘を始める。	表土バックフォーにより除去。
17日(金)	D地区トレンチ断面の実測、写真撮影開始。	
20日(月)	新井房夫群馬大学教授来跡、土層の鑑定を行う。	氾濫層(Ⅲ層)中に榛名山二ツ岳軽石を確認。
22日(水)	B10～C00トレンチの設定、試掘を始める。	
27日(月)	D地区トレンチ内溝の平面、断面実測。	
30日(木)	46～59、B18～B33(B1区)平面発掘調査開始、土壇群を確認。	拡張区内より土壇群を確認。湧水多い。
11月4日(火)	36～50B37～C04(B2区)バックフォーにより表土除去。	
5日(水)	この日より4日間雨天と、その影響により発掘作業中断。	拡張区内満水になる。
10日(月)	B1区(48ライン以南、B30後東)土壇群の精査。	拡張区内の排水作業に難儀する。
11日(火)	C地区、D地区トレンチ内溝の写真撮影、平面実測。	
13日(木)	1号溝、1号井戸の調査開始、土壇群の平面実測を進める。	1号溝中より遺物多出。
17日(月)	B地区54ライン土層断面写真撮影、実測。	
20日(木)	B1区土壇群(Ⅲ層上面)全景写真撮影。	
25日(火)	B1区Ⅲ層の除去、黒色土層(Ⅳ層)の調査。	Ⅳ層は遺物包含層であるが遺物の確認はない。
28日(金)	1号、2号井戸の精査、1号溝写真撮影、実測を進める。	
29日(土)	B1区の調査完了。B3区にトレンチを設定し試掘を進める。	
12月3日(水)	42B11～B13、トレンチより古式土師器群検出。	1号住居址の確認。
4日(木)	1号住居址周辺を拡張、40号土壇の実測、遺物取り上げ。	
5日(金)	雨天、及びその影響により4日間発掘調査を中断。	冷い北風が本格的に吹き始める。
10日(水)	B3区、拡張に先立ち園芸用ビニールハウスを撤去。	
15日(月)	B3区を拡張し全面調査を開始、B1区の埋め戻し。	表土はバックフォーにより除去。
12月18日(木)	2号、3号住居址の精査を進める。	
22日(月)	2号、3号住居址の全景写真撮影、1号住居址の精査。	
23日(火)	2号、3号住居址の実測、5号住居址の精査、21号土壇の精査、写真撮影。	
24日(水)	1号、6号住居址、21号土壇の全景写真撮影、実測、2号溝(環濠)の発掘。	12月25日～1月7日まで調査現場を閉じる。
1月13日(火)	環濠の精査、1号、2号、3号住居址の貼り床の除去。	1号、2号住居址とも柱穴の確認なし。
20日(火)	B3区住居址、溝の精査を進める。22号土壇の精査、実測。	
24日(土)	7号、8号住居址の調査。	
26日(日)	9号住居址、11号住居址の発掘。	
2月2日(月)	B2区、古式土師器土器群の検出を進める。	微高地西縁辺に沿って、土器が多量に出土。
3日(火)	4号、5号溝の発掘、B3区住居址の平面実測を進める。	
14日(土)	B3区、溝、住居址の平面実測を進める。6号溝の精査。	6号溝上部より円礫群、陶磁器多量に出土。
20日(金)	B3区、全景写真撮影、B2区、8号溝の精査。	
25日(水)	元島名A遺跡のトレンチ調査開始。	調査体制の主力と元島名A遺跡に移す。
2月26日(木)	B2区の平面実測を進める。	
3月3日(水)	B2区的全景写真、第一次発掘調査完了。	
8日(月)	埋め戻し。	ブルドーザーの導入。

### III 上滝遺跡

月 日	調 査 内 容	備 考
12日(金)	元島名A遺跡の調査完了。	
13日(土)	元島名B遺跡へ資材の移転、同遺跡のトレンチ調査開始。	
昭和53年 4月10日(月)	第2次発掘調査開始。	資材搬入。
11日(火)	グリッド杭の設置。	
14日(金)	6号、7号、1号溝の発掘。	湧水著しく底面までの掘り下げに難儀する。
17日(月)	1号、10号、18号、19号溝の精査、写真撮影。	1号溝中に土器が多量に出土。
19日(水)	1号溝断面、10号、18号、19号溝の平面実測、2号溝北西コーナーを検出。	
24日(月)	2号、7号溝、5号井戸、1号溝の精査完了。	
25日(火)	5号、6号、7号溝の平面実測完了。	
26日(水)	5号溝、44号、45号、46号土壇の発掘、写真撮影、実測。	
27日(木)	11号溝の検出。1号溝実測終了、49号、50号土壇の発掘。	
28日(金)	12号住居址の検出精査。1号溝最終精査、溝内土器の取り上げ。	
5月2日(火)	12号住居址、49号、50号土壇の平面実測。	
10日(水)	13号住居址、51号、52号、53号土壇の発掘。	
16日(火)	51号～53号土壇、1号ピット群、13号住居址の平面実測。12号～14号溝の検出、50号～53号土壇の写真撮影。	
19日(金)	12号～14号溝の写真撮影。	
22日(月)	2号ピット群、13号住居址の全景写真撮影。	
24日(水)	55号～57号土壇、5号井戸か2号ピット群の精査。	
26日(金)	6号井戸の検出、12号、13号住居址の全景写真撮影。	
29日(月)	5号、6号溝を東に追う。6号溝東コーナー一部を確認。	5号溝、1次調査の遺構との接続を確認。
6月1日(木)	58号、59号土壇の検出、6号井戸、11号溝の実測、写真撮影。	
2日(金)	60号土壇の検出、16号溝の精査。	60号土壇内より木材、古式土師器出土。
5日(月)	58号、59号土壇の平面、断面実測、61号土壇の検出。	
6日(火)	60号、61号土壇の平面、断面実測完了。掘立柱建築遺構の精査、全景写真撮影、58号～61号土壇群の写真撮影。	野村哲群馬大学教授来跡。
8日(木)	実測残部終了、第2次調査終了、埋め戻し。	

## 2 遺跡の立地と環境

本遺跡は高崎市上滝町に所在する。現況は（現在はすでに関越自動車道が開通し、遺跡上を通じている。）  
 一帯に田園地帯で、桑を中心とした畑、及び水田が広く展開し、この間に小村落が散在する。これらは農業村落で、古く近世以前まで跡づけられるものが多い。新興住宅の進出は、この付近ではまだ目立たない。遺跡は小村落に狭まれた、桑園を中心とする畑、水田の他、一部に屋敷を含む地域である。遺跡の北方は小村落、畑地を隔て500m程の所に、日立製作所、古河鋳工といった新興工場地区を見るが、さらに北方はまた田園地帯が続き、前橋方面に至る。遺跡の西端は井野川の支谷、小河川による開析作用により生成された將軍淵と称される、幅25m、深さ5mの溝が南北に走る。この將軍淵の右岸に接し、井野川の左岸段丘上には、

本県における初期古墳、全長75mを測る前方後方墳、將軍塚古墳がある。

遺跡の南西部を、北西—南東に貫流する井野川は、榛名山の南側山腹に水源を有する中級河川で、本遺跡より南方向3.5km付近で烏川に結び、これをさらに5km下り、利根川に合流する。井野川の左右両段丘上には、弥生時代以後の遺跡の分布が濃密に見られる。とくに左岸上位段丘上は、これに沿って带状に洪積微高地が伸びている。この微高地上に所在し、本遺跡に隣接する遺跡の主なところを上げれば、前記將軍塚古墳を始め、上流方面には、中、近世城館址、元島名遺跡、弥生時代から平安時代にわたる大規模な住居址群、方形周溝墓、古墳群が検出された鈴ノ宮遺跡などがあり、下流方面には古刹、滋眼寺付近には、全長径30m、横穴式石室を有する前方後方墳、御伊勢山古墳を始め、10~20mの小円墳が多数見られる。また、さらに下流には古墳時代集落址、灰塚遺跡、井野川が烏川に合流する付近では、径70m、竪穴式石室を有する円墳、若宮北古墳、及び古墳時代後期小円墳、竪穴式小石塚を有する墳墓群が60基以上調査された、若宮古墳群があり、その東方500m付近には下郷遺跡が所在する。下郷遺跡は、烏川左岸段丘上に位置し、古墳時代初頭の方形周溝墓群を始め、前期、後期古墳が、関越自動車道建設に先立って調査された。

本遺跡の東南方面は、広く水田地帯が展開し遺跡の確認は少ない。水田地帯に点在する微高地上には、小規模な集落址の確認がわずかにある程度である。遺跡の北東方面は南東方面と同様、水田地帯であるが、約500m隔てた所には、広域農業用水、天狗岩用水（滝川）が貫流し、さらに500m先は利根川に達する。利根川はここ中島町付近で流路を南方向から南東方向に大きく変える。後述するがこのことは本遺跡にとって大きな意味を持つ。周辺の遺跡については、1図、及び1表にて詳しく掲載したので参照されたい。(佐藤)

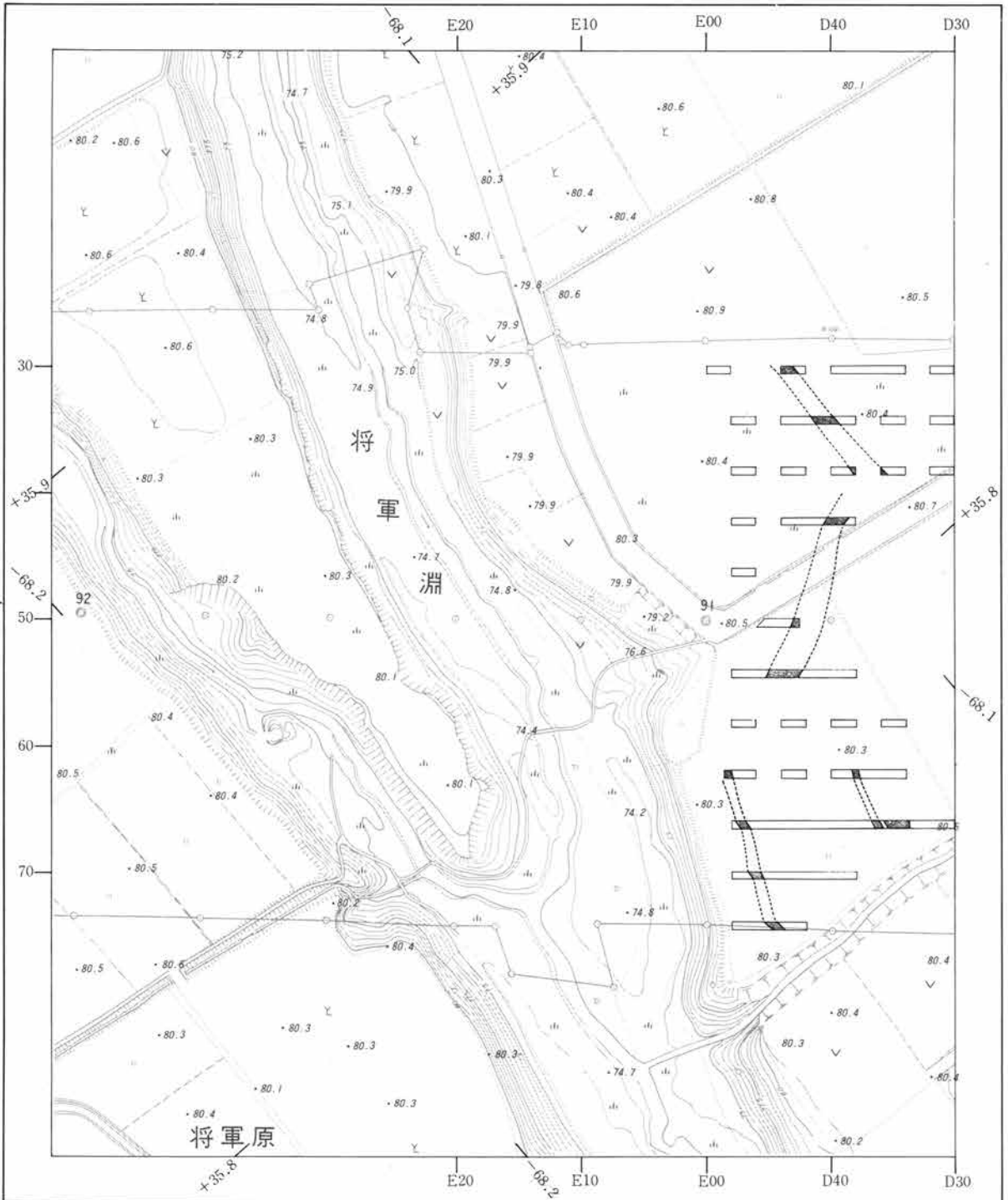
### 3 調査の方法

関越自動車道建設予定区域は幅員約80mを有する。この予定区域は遺跡をN—50°—Wの方向に貫く。発掘調査は、幅80mの区域内を西は井野川の支谷將軍淵から、東は洪積微高地が切れる市道までの範囲内にトレンチを設定し、遺跡の広がり、及びその性格を把握することから始められた。このトレンチ調査によりB地区においては、洪積微高地上に溝や住居址等の遺構を多数検出するに及び、平面発掘調査に移った。しかし、B地区の微高地部の北半部は2年後、昭和53年度の2次調査において、平面発掘調査が行なわれた。

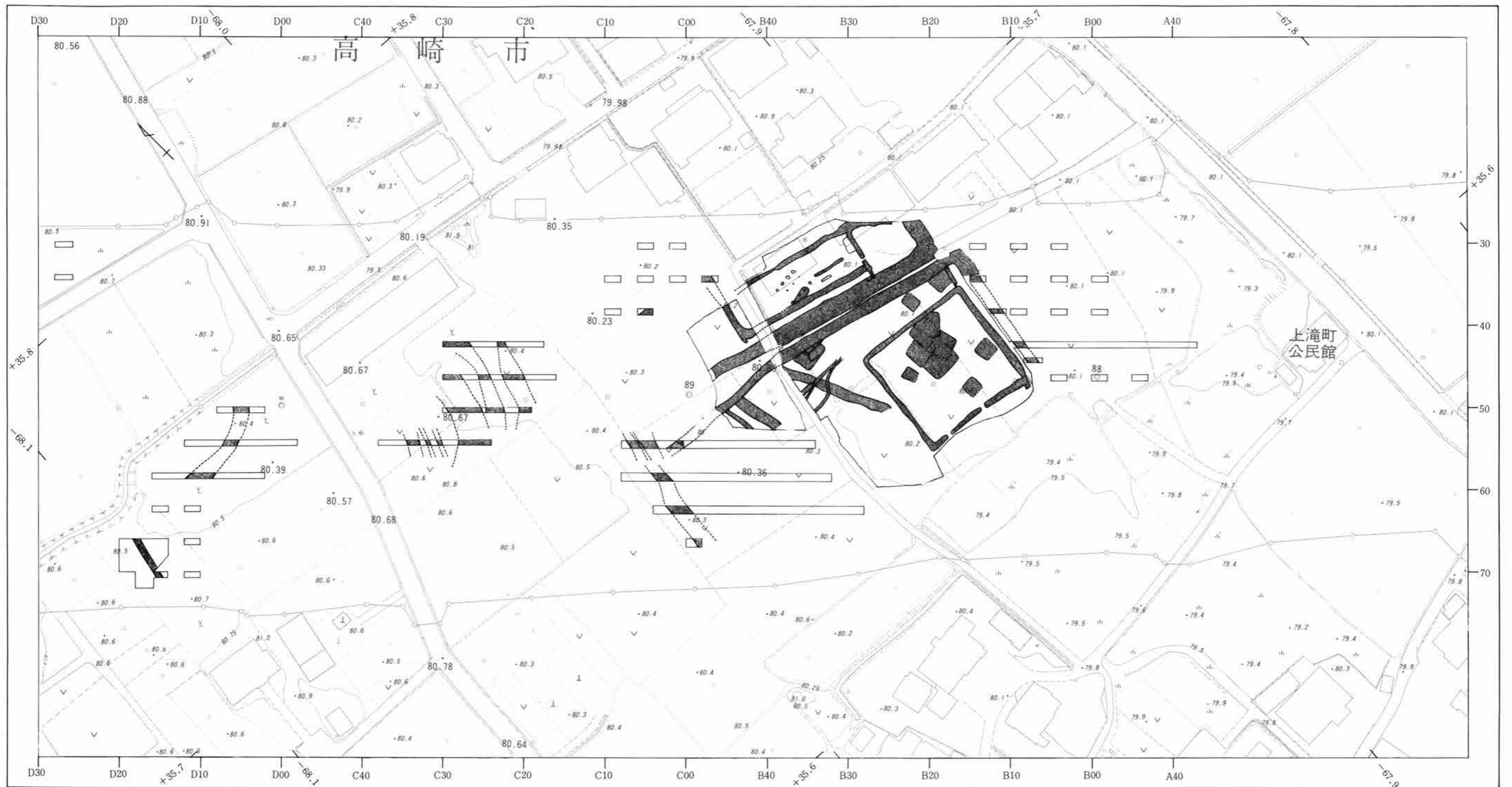
**グリッドの設定法** 路線予定区域内にはその中央に20mごと、建設工事用の測量杭が設けられており、この杭には国家座標値が取り付けられている。グリッドの設定は、この杭を基準にして行なった。つまりこの杭の中のS T89+80及び100m北西方のS T90+80と称される測量杭を結ぶ線を、グリッドのx軸の中心軸とした。(N—50°—W)、x軸、及びこれに直行するy軸を各々2mごとに分割し、これにより設けられる区画を最小グリッドとした。グリッドの呼称法は、x軸はS T88+00からS T89+00の間100m、50グリッドに00~49の数字を配し、100mごと北西方向にA~Eのアルファベットを頭に付し、y軸は北端より中心軸までを2mごとに33~49の数字を、中心軸から南端までを50~68の数字を付した。そして最小グリッドの呼称法は、たとえば51B29、または64D18とした。

**トレンチの配置の方法** 低湿地区では基本的に幅1.5mでx軸方向に、長いトレンチをy軸方向に対して8m間隔に設けた。洪積微高地のA及びB地区では、幅1.5m、長さ4mのトレンチを16グリッド(8×8m)に1本ずつ設定し、遺構面まで掘り下げ、遺構の広がりを把握するに及び平面発掘調査に移行した。またトレンチから拡張に入るトレンチ拡張の方法を取った。この際B地区微高地部分を1~3調査区に分割し、順次調査を進めた。(佐藤)

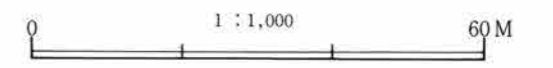
III 上滝遺跡







19図 上滝遺跡全体図





## 4 試掘調査

### B地区東南部のトレンチ調査 (図版14)

B3区の平面発掘調査に先立ち、A48—B20の間に19図のごとく4×1.5mのトレンチを20本、及び42ラインに沿って、幅1.5m、長さ70mのトレンチを1本配置した。この調査の結果、洪積微高地は42ライントレンチにおいてB07あたり、及び30B08トレンチあたりから南東方向に漸次低くなり、黄褐色氾濫層(Ⅲ層)が次第に厚く堆積し始め、低湿地へ移行する。遺構、遺物はほとんど確認できなくなる。B地区南部の一面は、葦が密生し、沼地に近い湿地である。本トレンチ調査により、1号住居址、2号溝の一部が確認されるに及び、B3区の平面発掘調査に移行した。

### B地区北西部のトレンチ調査 (20、22図 図版15)

B1区、B2区の平面調査、A地区トレンチ調査に先立ち、B30—C10の間、路線幅80mにわたって20図のごとく4×1.5mのトレンチ、及び幅1.5m、長さ50m若のトレンチを3本配置した。これらのトレンチ内においては全体的に、水性堆積層が見られ、とくに南西部はレベル的にも低く、旧耕土下に黄褐色氾濫層(Ⅲ層)が50cm前後の厚さで、C、D地区方向に広域に広がっていた。また湧水位も高く11月時点でも、Ⅲ層中位にまで達していた。この地区の調査により、22図に示されるごとくⅢ層を掘り込む、比較的整った南北方向に走る溝(20号溝)が確認された。この20号溝は、幅4.5m、深さ1.2m以上に達する大規模なもので、B地区西南部の各トレンチ内にて、浅間B軽石を含む旧耕土下にて検出された。54B32—C05トレンチにおいては、B1区に近接する付近は微高地の西側縁辺部であるため、黄褐色氾濫層下、黒色粘質土層(Ⅳ層)中には古式土師器の破片が多量に出土した。北東部、4×1.5mのトレンチを配置した地区は、水性堆積層のあり方は西南部に比較し浅く、湧水位も低かったが小規模な溝状遺構が2、3箇所で見られた他は、遺構は認められず、遺物の出土はほとんどなかった。

### C地区西北部のトレンチ調査 (20、22図 図版15)

図のごとくC16—C24間に、幅1.5m、長さ28m前後のトレンチを8m間隔に配置した。これらのトレンチ内における層序は基本的にはB地区、D地区と同様であるが、黄褐色氾濫層(Ⅲ層)の堆積前、または堆積過程において造られたと思われる溝群が見られる。(21号～23号溝)各溝の幅は、5～6mで大規模であるが、平面、断面形状は不整形であり、遺構か否か明確には判断できない。溝内に見られる覆土のあり方は、灰色または黄褐色の細砂層を主体とし、中に榛名山二ツ岳より噴出した角閃石安山岩の小円礫や細かい砂礫を含み、レンズ状、あるいは縞状に堆積している。Ⅲ層中にはその他、遺物や夾雑物はほとんど見られず、またⅢ層に覆われる黒色粘質土層(Ⅳ層)内にも同様に人為の跡は確認できなかった。

### D地区南東部のトレンチ調査 (21、23図 図版16)

図のごとく、20cm間隔に幅1.5m、長さ28m前後のトレンチ及び、1.5×4mのトレンチを配した。この地区においても層序は、基本的にはC地区のあり方と同様であるが、黄褐色氾濫層は全体に薄くなり、D地区方向にさらに薄くなっていく傾向を示す。遺構については東西方向に24号溝が、南北方向に25号溝が見られる。24号溝の覆土は縞状に重層を見る黄褐色氾濫層(Ⅲ層)であり、性格はC地区における21号～23号溝と同じと思われる。本地区の西南部の一角ではトレンチ調査の過程で、自然堆積とするには理解できない状況が見られたため、21図のごとくおよそ一辺12mの範囲の拡張を行なった。この拡張区を南北に貫く25号溝は平面、断面の形状は比較的整っており遺構であることは明らかで、黄褐色氾濫層に覆われている。この溝に先立っ

### Ⅲ 上滝遺跡

てⅤ層、Ⅳ層が砂層を混ぜ攪乱されており、また土器片の出土が多く目立ったが性格を明らかにすることはできなかった。

#### D地区北西部のトレンチ調査 (21、23図 図版16)

この地区は將軍淵により北西部を限られており、層序においても他とは異なるあり方が見られる。旧耕土下の黄褐色氾濫層(Ⅲ層)は、將軍淵に近付くに従ってⅢ層上面は傾斜しながら薄くなり見られなくなる。54E 00~54D38トレンチにおいては、Ⅲ層下部はしだいに砂礫層に移行し、この砂礫層中より磨滅が進んだ須恵器、土師器が出土している。他のトレンチではこのようなあり方は顕著には見られないが、將軍淵に近接する付近は共通してⅢ層が見られない。遺構についてはⅢ層を掘り込み、將軍淵の縁辺部に沿って溝が数条認められた。(26号~29号溝)これらの溝が相互に連続するものかどうか判断出来ないが、時期的にはⅢ層の堆積時より後出することが共通している。

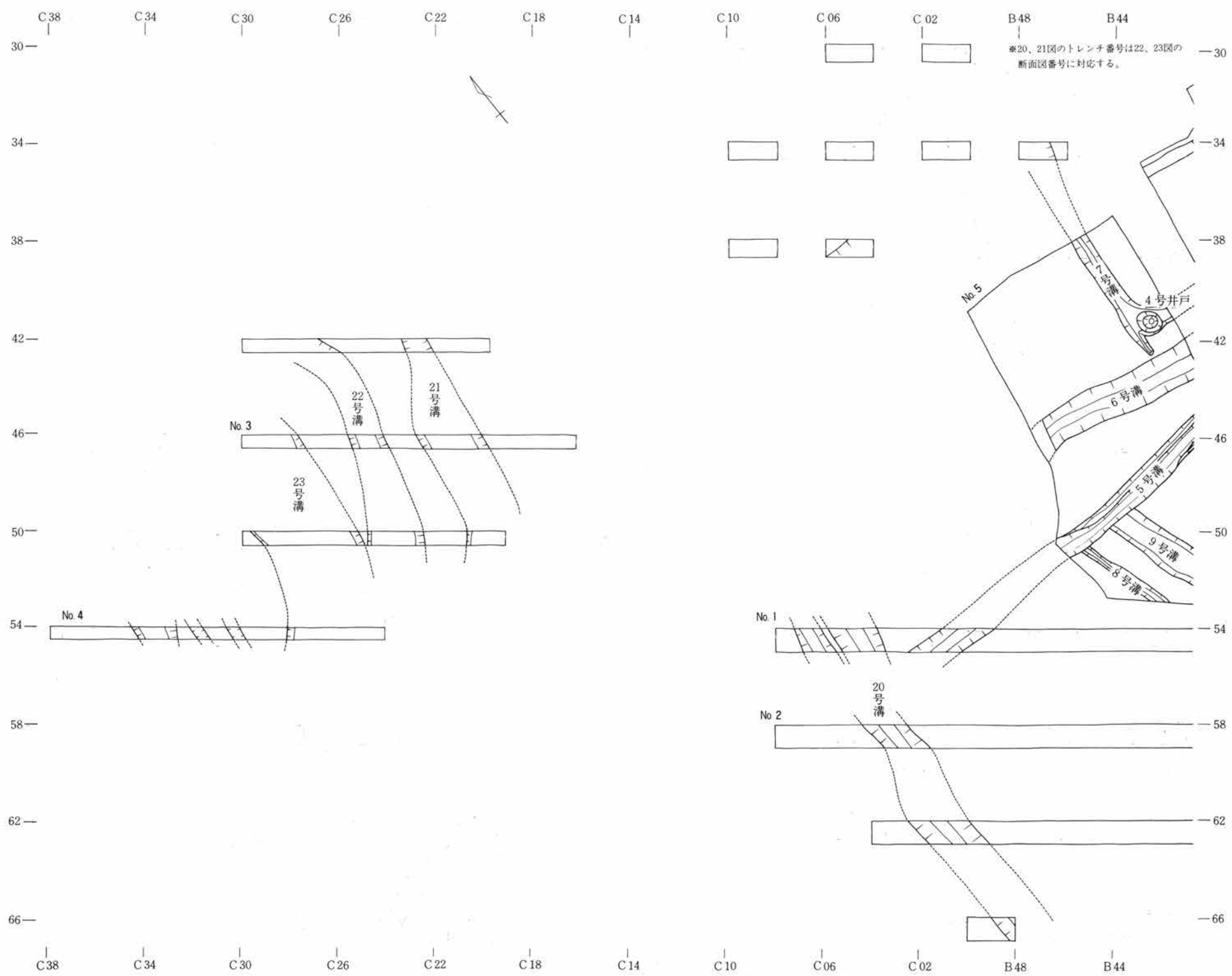
## 5 地 層

### 低湿地区の地層

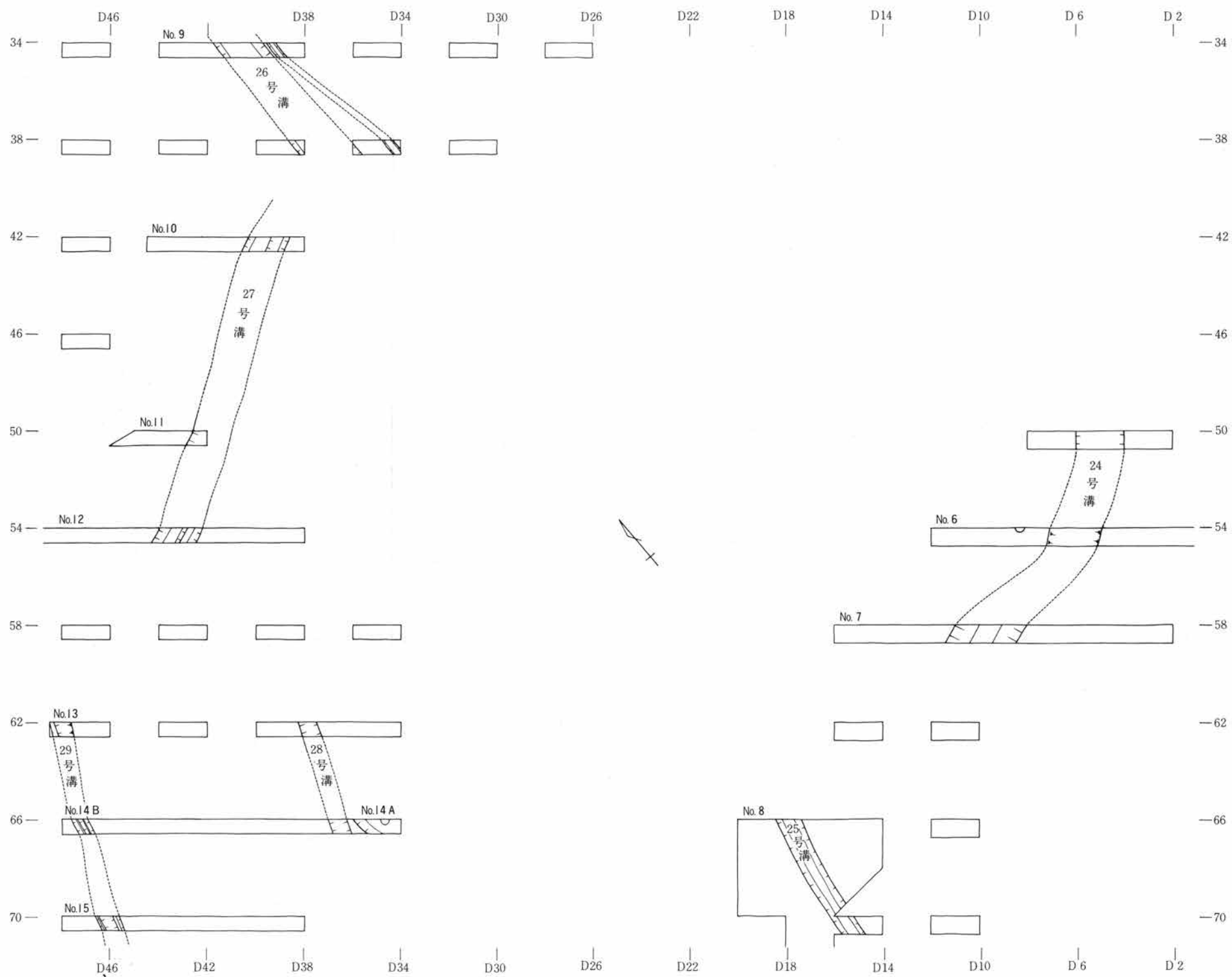
- 第Ⅰ層 暗灰褐色土層やや砂質、浅間B軽石を含み、厚さ20cm前後である。現水田耕土であり、最下部に鉄分沈着層を見る。
- 第Ⅱ層 暗灰褐色土層やや砂質、浅間B軽石を含み、厚さ20cm前後である。最下部に浅間B軽石純層の薄い層を見ることがあるが、全体として少ない。
- 第Ⅲ層 黄褐色の水性堆積層で、大きく3層に分離できる。最上層は有機質の浸透を受け、とくに上部が暗褐色を帯びたところが随所に見られるが、全体的には灰色味が強く、土質は均一で比較的粘質である。浅間B軽石純層が残っているところでは、軽石層は直接この層に乗った状態で見られる。中位層は明黄褐色を呈し、粘性は最上層よりもやや欠けるが土質は均一で、粒子は微細である。最下層の色調は、中位層よりもやや暗く細砂層が目立ち、場所によっては角閃石安山岩の細粒を比較的多く含む。以上のようにⅢ層は大別できるが、実際の状況はこれを基本とするが、場所によっては10層以上に縞状の堆積が見られるところもあり一様ではない。しかし一方、堆積状況、構成物は共通しており、構成物の主体は榛名山二ツ岳の爆裂の際噴出した灰(FA)と細砂であり、夾雑物はほとんど見られない、また、井野川を始め榛名系河川の流域においては、水性堆積層の最下にFAの風性堆積層が一般的に見られるが、本遺跡においては、これがほとんど認められず堆積が水性主因であったと考えられる。
- 第Ⅳ層 黒色粘質土で、B地区微高地縁辺で遺物を多量に包含するが、低湿地では遺物はまったく見られない。厚さは15cm前後である。
- 第Ⅴ層 灰白色を呈し粘質である。場所によっては礫を含み、鉄分の凝集があり固い状態を示す。関東ローム層に比定される。

### 微高地区の地層

- 第Ⅰ層 灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。表土、厚さ20cm前後
- 第Ⅱ層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。厚さ20cm前後
- 第Ⅳ層 黒色土層、粘性に欠ける。
- 第Ⅴ層 黄褐色土層、粘質、関東ローム層



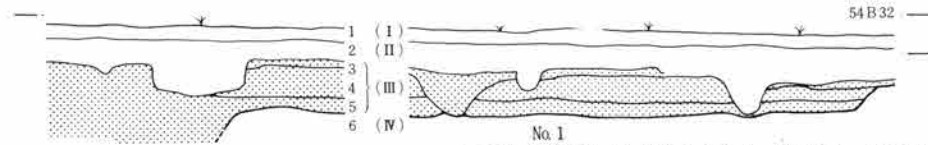
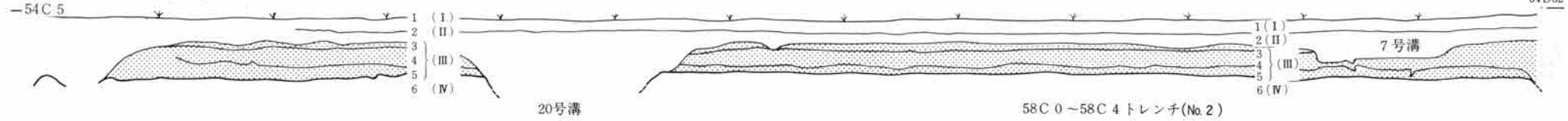
20図 B地区、C地区トレンチ及び5号～9号、20号～23号溝



21図 D地区トレンチ及び24~29号溝

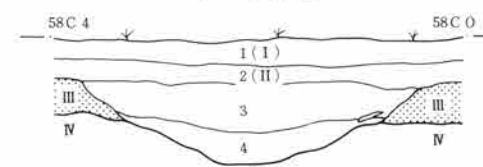
0 1:400 10M

54B32~54C5トレンチ(No.1)



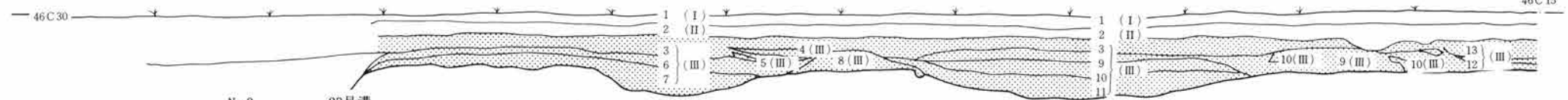
- No. 1
- 1 I層 灰褐色土層 粘性に欠ける、現耕作土、最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 2 II層 灰褐色土層 やや砂質、浅間B軽石を含む。旧耕土
  - 3 III層 暗褐色土層 やや粘質、有機物の沈澱により黒色味を帯びる。
  - 4 III層 黄褐色土層 やや粘質
  - 5 III層 黄褐色土層 やや砂質
  - 6 IV層 黒色土層 粘質

58C0~58C4トレンチ(No.2)



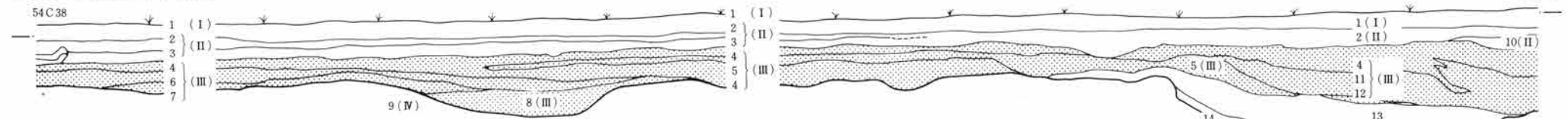
- No. 2
- 1 I層 灰褐色土層 粘性に欠ける。最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 2 II層 灰褐色土層、やや砂質
  - 3 20号溝覆土 灰褐色土層、砂質
  - 4 同上 灰褐色土層、粘質、酸化鉄分の沈着が見られる。

46C15~46C30トレンチ(No.3)



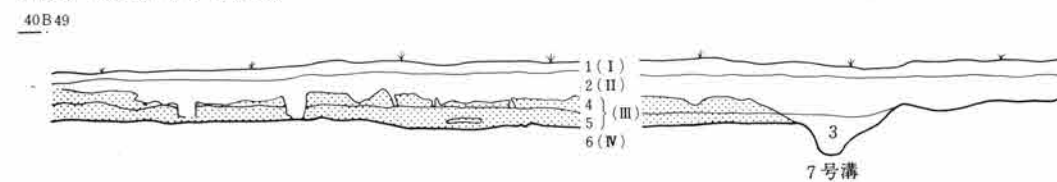
- No. 3
- 1 I層 灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土最下部に赤褐色鉄分沈着が見られる。軽石の混入量により上下2層に分離が可能。
  - 2 II層 灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。旧耕土
  - 3 III層 黄褐色土層、粘性に欠ける。細砂を含む。
  - 4 III層 灰色味を帯びる黄褐色土層。
  - 5 III層 細砂層
  - 6 III層 黄褐色土層、やや粘質、砂の混入が少ない。
  - 7 III層 黄褐色土層、砂質、細砂を多量に含む。21号溝
  - 8 III層 黄褐色土層、下部においてより多く砂を含む。
  - 9 III層 黄褐色土層、砂質
  - 10 III層 灰色細砂層、やや粘質、細砂を含む。
  - 11 III層 灰色土層、やや粘質、細砂を含む。
  - 12 III層 灰色細砂層
  - 13 III層 黄褐色土層、砂質、酸化鉄分の沈着が見られる。
  - 14 III層 黄褐色土層、やや粘質

54C23~54C38トレンチ(No.4)



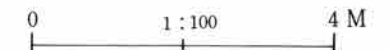
- No. 4
- 1 I層 表土、灰褐色土層、粘性に欠ける。現耕作土、最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 2 II層 灰褐色土層、軽石を多量に含む。旧耕土
  - 3 II層 灰褐色土層、軽石を多量に含む。旧耕土
  - 4 III層 黄褐色土層、部分的に有機物の沈澱でやや黒味を帯びる。
  - 5 III層 青味を帯びる黄褐色土層、粘質
  - 6 III層 黄褐色土層、やや粘質
  - 7 III層 やや灰色味を帯びる黄褐色土層、やや粘質、細砂を含む。
  - 8 III層 青味を帯びる黄褐色土層、粘質、細砂を含む。
  - 9 IV層 青味を帯びる暗灰色土層、粘質
  - 10 II層 暗褐色土層、粘性に欠ける。
  - 11 III層 茶褐色土層、砂質、細砂を多量に含む。酸化鉄分の沈着が目立つ。
  - 12 III層 細砂層、軽石小粒(榛名山二ツ岳噴出)を含む。
  - 13 23号溝覆土 灰褐色土層、粘質、砂の混入少ない。
  - 14 灰色細砂層
  - 15 同上 青灰色土層、砂質

37B43~40B49トレンチ(No.5)

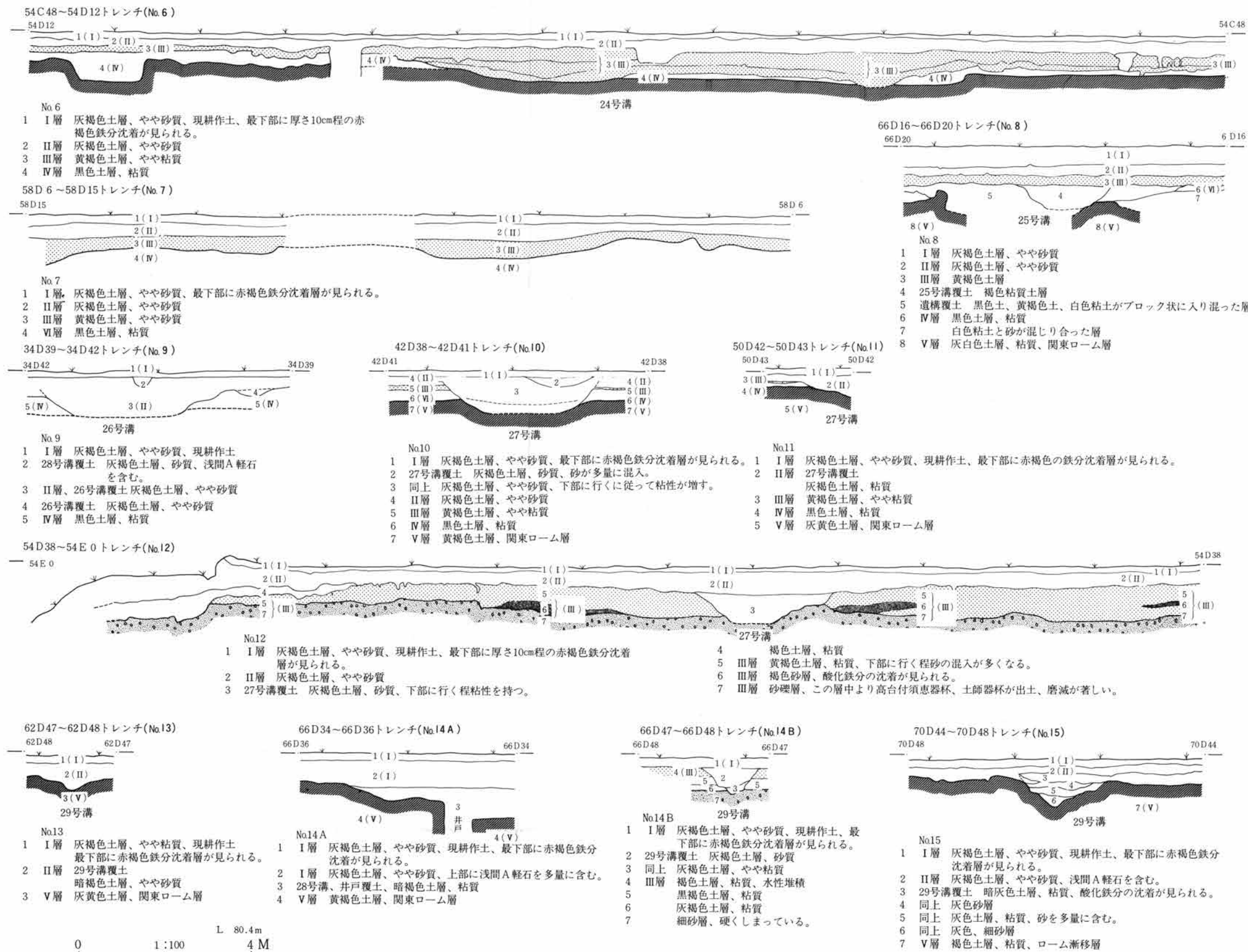


- No. 5
- 1 I層 灰褐色土層、粘性に欠ける現耕作土、最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 2 II層 灰褐色土層、やや砂質
  - 3 7号溝覆土 灰褐色土層、砂質
  - 4 III層 黄褐色土層、やや粘質、氾濫層
  - 5 III層 黄褐色土層、やや砂質、氾濫層
  - 6 IV層 黒色土層、粘質

L. 80.5m

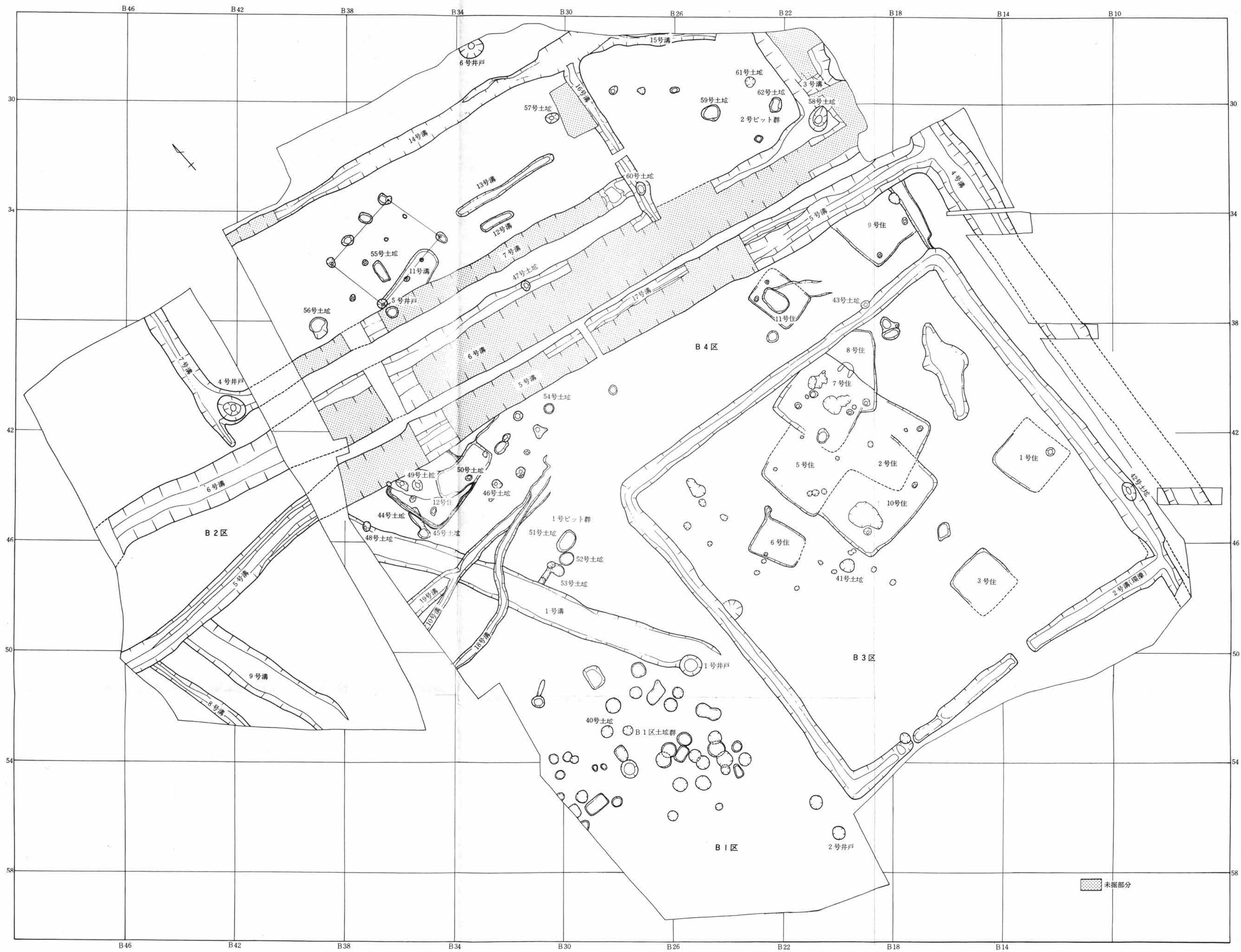


22図 B地区、C地区トレンチ断面図及び、7号、20~23号溝



23図 C地区、D地区トレンチ断面図及び24号~29号溝





24図 B地区全体図

0 1:200 10M



## 6 検出した遺構・遺物

## (1) 住 居 址

## 1 号 住 居 址 (25図 図版20、21)

**位置** B3区東側、南方向へ舌状に張り出した微高地の東端に位置している。他の住居址との重複はない。  
**平面形、規模** 東辺、南辺は不明瞭であるが遺物の出土範囲、貼り床の状態から東西約4m、南北3.6mでやや隅丸長方形を呈するものと推定できる。長軸方向N-85°-E。

**周壁** 周壁は北辺西側から、西辺北側部分にかけてわずかにローム層を掘り込んだ状態で、3~6cmほどの高さで確認されたが、東辺及び南辺は掘り込みがローム層まで達しておらず検出できなかった。

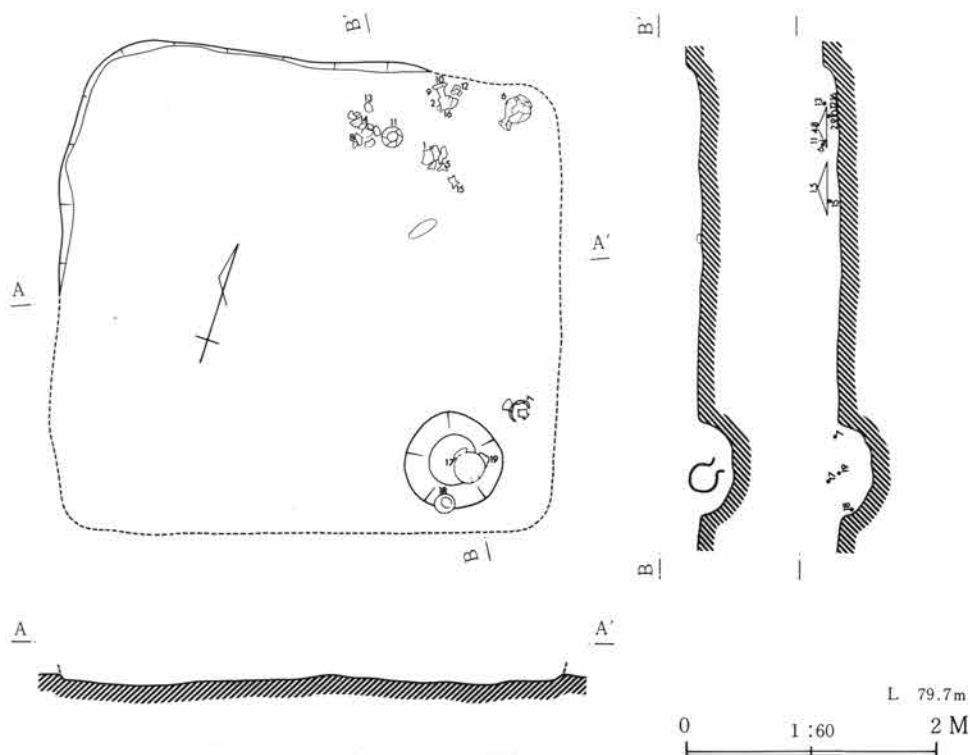
**周溝** なし

**床面** 黒色土とローム土の混土により固められており、7~10cmの貼り床となっている。

**柱穴** 床面、及び掘り方面（ローム面）を入念に精査したが確認できなかった。

**炉址** 炉址の痕跡と認められるような焼土は検出できなかった。

**土坑** 住居址内東南隅には、径約75cm、床面からの深さ35cmを測る円形土坑を検出している。土坑内には口縁部を下位斜めに、 $\frac{2}{3}$ 程床面下に埋没した状態で壺形土器が置かれていた。この土器(27図、17)は完形



25図 1号住居址

III 上滝遺跡

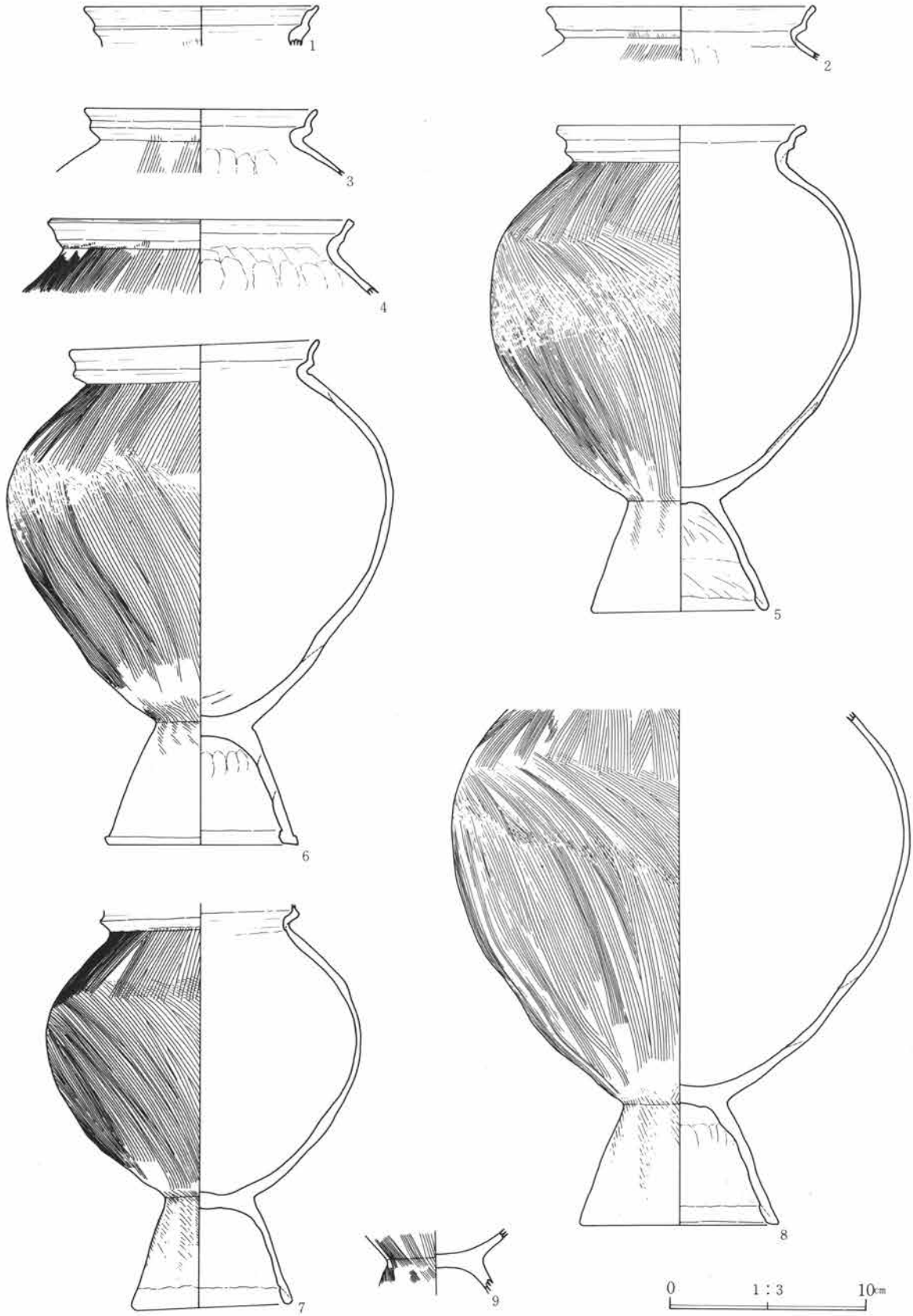
であるが、その上半部には大小2個の穴が焼成後に穿孔されていた。このうち大きな方は6×4cm、不整形をなし、この穴をふさぐように杯形土器が密着していた。こうした状態から、土坑の性格、及び住居址との関係については、住居址に付設された貯蔵穴、または住居址の廃棄後間もなく設けられた墓坑の両者の可能性が考えられる。土坑から出土した2個の杯は、住居址床面上に見られるものと極めて類似しており同時併存の可能性が高い。

出土遺物(26、27図 図版55、56、57) 北東部にまとまる傾向を示し、床面密着または、5cm前後浮いた状態で、完形土器または、大形破片が多数検出された。出土遺物は26、27図に示したが、これ以外は土器細片数点のみである。土器以外では用途不明の長方形の自然石が一点床面より出土している。

16表 土器観察表 26~27図 1号住居址

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 約12	細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色	口縁先端部は内側に明瞭な凹線を施し薄い。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	頸部以下欠損 (7%)
2	甕形	口 12.3	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁端部は肥厚し、内面に弱い凹線を施す。 内折部の外稜は鋭い。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ ✓、1単位12本 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押え痕がめぐる。	(12%)
3	甕形	口 11.9	細砂を含む。 堅緻	にふい橙色	口縁部の屈曲は比較的強い。口唇部は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ ✓、1単位9本 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押え痕がめぐる。	口縁部—肩部のみ遺存 (9.7%)
4	甕形	口 15.2	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁端部は肥厚し、角ばる。口縁部屈曲は緩い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部—肩部ハケメ✓、1単位10本 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラ押え痕がめぐる。肩部指押え痕がめぐる。	肩部以下欠損 (30%)
5	甕形	口 12.4 高 24.6 胴 18.9 底 9.2	細砂を含む。 堅緻	にふい黄橙色	口縁部は強く外反し、端部は比較的肥厚している。口縁部の屈曲は強いが、頸部屈曲は比較的弱い。胴下部接合部の段が目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部3段の肩部ハケメ✓、1単位9本、胴上部へ、胴下部へ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部—肩部指押え、胴部ナデ、脚台部ナデ	(85%)
6	甕形	口 12.8 高 25.3 胴 19.3 底 9.3	細砂を含む。 堅緻	淡橙色 内面、胴下部接合部以下、赤褐色	口縁部、頸部の屈曲は比較的強い。胴部最大径は比較的上にある。胴下部接合部は段が目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ✓、1単位9本、胴下部ハケメへ、脚台部接合部ハケメへ、 内面 口縁部ヨコナデ、頸部—肩部指押え痕がめぐる。胴部ナデ、底部ナデ調整後、接合の際の粘土補充をしている。粗いナデ、脚台部縦方向指頭によるナデ	口縁部から肩部にかけて一部欠損 (82%)
7	小形台付甕形	口 10.5	細砂を含む。 小礫		口縁部内折部は強く「く」の字状に屈曲する。口唇部は薄く直立する。器体は小さい。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、胴部上半部ヘラケズリへ後、ハケメ✓、1単位8本、胴下半部ハケメへ、胴下端部から脚台部にかけてハケメへ、脚部下端部からヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ、胴部ナデ、底部粗いナデ、脚台部内面ナデ、天井部粗いナデ	口縁端部欠損 (57%)

6 検出した遺構・遺物 (1)住居址

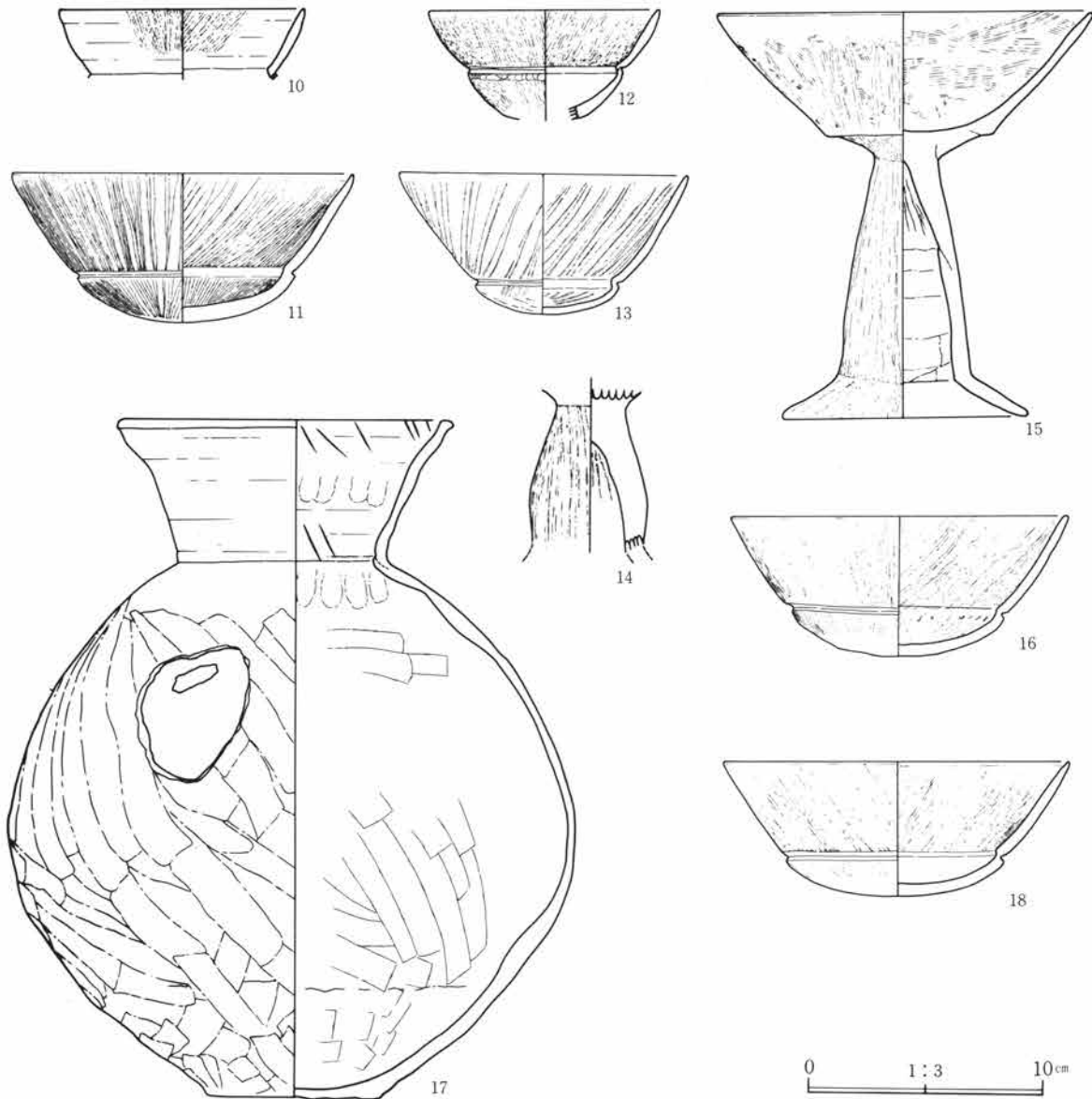


26図 1号住居址出土土器

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
8	甕形	胴 23.4 底 10.3	細砂を含む。 堅緻	褐色	最大径が胴上部にある。胴下部接合部の段が目立つ。脚部内面接合痕が明瞭。	外面 脚部3段にハケメが施される。肩部ハケメ、1単位9本。胴上部ハケメ、胴下部ハケメ 内面 胴部ナデ、所々にへらあて痕が見られる。胴下部接合部横方向のへらナデ、脚台部上部指押え痕がめぐる。全体に弱いハケメが施されている。	肩部以上を欠損
9	甕形		細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色		外面 胴部下端部一脚台部ハケメを一気に施す、1単位13本 内面 底面へらナデ、脚台部天井部粗いナデ	脚台部破片
10	埴形	口 9.5	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙色 一部明褐色	口縁部は比較的短く、内彎する。	外面 ヨコナデ後、へら研磨 内面 ヨコナデ後、へら研磨	胴部欠損 (13%)
11	埴形	口 14.6 高 6.3	細砂の混入少ない。 堅緻	橙色	口縁部はやや内彎気味に外方へ広がる。胴部との間を沈線で画し、外側には段を作らない。内側には弱い段を作る。口縁端部は外側に丸身を持たせ尖らせている。丸底	外面 ヨコナデ後、縦方向へら研磨↑、幅0.5mm、間隔1~2mm。底部中央へらケズリ後、口縁部と同様のへら研磨 内面 口縁部ヨコナデ後、斜行へら研磨、幅0.5mm、間隔2~3mm。底部放射状へら研磨	(100%)
12	埴形	口 9.8	細砂を含む。 堅緻	にぶい橙色	口縁部は比較的短かくわずかに内彎する。丸底。頸部の鋭いくびれ部は接合箇所になっているが十分整形が施されず接合痕が明瞭。	外面 口縁部一底計縦方向へら研磨。幅1mm、緻密、肩部へら押え痕がめぐる。 内面 口縁部縦方向へら研磨。幅1mm、緻密、頸部一底部ナデ	(40%)
13	埴形	口 12.2	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙色	口縁部は長く、下部で内彎が目立つ。端部は薄く尖り気味、頸部にへら状具になる沈線を施す。	外面 口縁部ヨコナデ後、粗い斜行へら研磨、底部へらケズリ 内面 口縁部ヨコナデ後、粗い斜行へら研磨。頸部ヨコナデ、底部へら研磨	(82%)
14	高杯形	柱 5.1	細砂を含む。 堅緻	橙色	杯部との接合部が細く下部がエンタシス状に太い。器壁は厚い。	外面 縦方向へら研磨 内面 上部絞り目痕	杯部、裾部を欠損
15	高杯形	口 16.1	堅緻	橙色	杯部は比較的小さい、底部に明瞭な稜線を作りやや内彎しながら外方へ大きく広がる。脚部は杯部との接合部が細くエンタシス状なし外方へ屈曲して広がる。裾部がつく。	外面 杯部ハケメ後、縦方向へら研磨。脚部縦方向へら研磨 内面 杯部ハケメ後、粗いへら研磨。脚部上部絞り目痕、中部以下へらケズリ、脚部内面に輪積痕が目立つ。裾部ヨコナデ	(100%)
16	埴形	口 14.4 高 5.9	細砂を含む。 堅緻	橙色	口縁部は内彎気味に長く、外方へ広がる。胴部との間を沈線で画し段を作らない。頸部内面明瞭な段を作る。この部位に接合痕あり。	外面 口縁部一胴部ナデ後、縦方向へら研磨。間隔1~3mm、底部へらケズリ 内面 口縁部一底部ナデ後、斜行へら研磨、幅1mm、間隔1~3mm	(100%)

6 検出した遺構・遺物 (I)住居址



27図 1号住居址床面直上(10~15)、住居址内土坑(16~18)出土土器

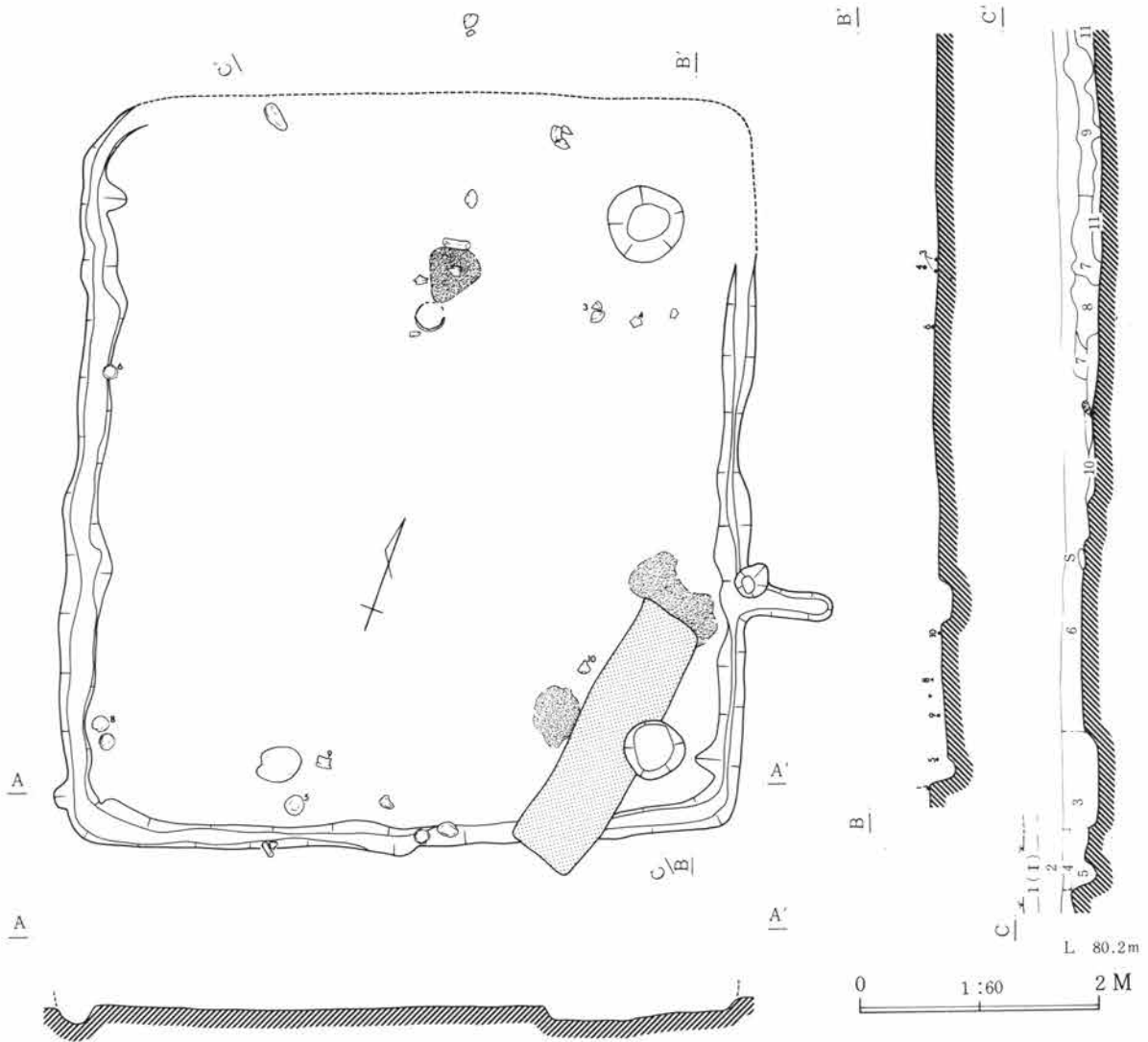
No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
17	壺形	口 13.5 高 28.5 頸 9.0	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し外傾する。口縁部は単口縁で外反する。胴部は球形を呈し中位に最大径がある。平底	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、口縁部下半ヨコナデの前に施したヘラあて痕、指頭痕が目立つ。胴部ハケメ状ヘラナデ、底部ヘラナデ	(100%)
18	埴形	口 14.9 高 5.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部先端は内側にわずかな段を作って薄い。頸部沈線部分に接合痕が見られる。	外面 口縁部ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨。幅1mm、間隔2~4mm、底部ヘラケズリ 内面 口縁部斜行ヘラ研磨。幅1mm、間隔2~3mm、頸部—底部ナデ	(100%)

III 上滝遺跡

2号住居址 (28図、図版22、24)

位置 B3区微高地の中央部に位置し、5号、7号、8号、10号住居址と重複する。

平面形、規模 やや隅の丸い長方形を呈する。長辺6.2m、短辺5.7mを測る。方位は長軸方向はN-20°-Wを示す。



- |    |     |   |                            |
|----|-----|---|----------------------------|
| 1  | I   | 層 | 灰褐色土層、粘性に欠ける、現耕作土          |
| 2  |     |   | やや砂質、最上部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。    |
| 3  | 土   | 壇 | 覆土 灰色土層、粘性を欠く、淡黄色ローム粒を含む。  |
|    |     |   | 暗灰色土層、やや砂質、淡黄色ローム粒を含む。     |
| 5  | 2号  | 住 | 覆土 淡黒色土層、やや砂質。             |
| 6  |     |   | 暗灰色土層、やや砂質、軽石の混入少ない。       |
| 7  | 2号  | 住 | 覆土 黒色土層、ロームブロック、粘土、焼土を含む。  |
| 8  | 同   | 上 | 赤橙色粘土、著しく焼けている。            |
| 9  | 同   | 上 | 黒色土層、粘性に欠ける、軽石、ローム粒を多量に含む。 |
| 10 | 10号 | 住 | 覆土 橙色粘土、焼けている。上面は2号住居址床面   |
| 11 | 同   | 上 | 黒色土層、粘質、ローム粒を含む。上面は2号住居址床面 |

28図 2号住居址



**周壁** 壁が黒色土中に掘り込まれているため検出することができなかった。

**周溝** 北辺部及び北東コーナー部は、7号、8号住居址との重複により不明であるが、これ以外の場所では、幅20cm、深さ10cm前後で明瞭に検出できた。

**床面** 5～10cmの貼り床になっており、北東部ではとくに固い面をなしているところが認められるが7号、8号住居址との重複部では、貼り床は明確ではない。

**柱穴** 床面、掘り方面の精査をしたが、柱穴は確認できなかった。住居址内北東隅に径50cm、深さ30cmほどの円形ピット、南東隅に径50cm、深さ35cmほどの円形ピットを検出したが、柱穴とするには位置的に問題がある。他には認められない。

**かまど、炉** 明確に検出していない、ただ北東隅の床面には、焼土の散布があり、かまどに類する施設の存在が考えられる。他には、かまどまたは炉に関連すると思われる明瞭な痕跡は見られないが、東壁部南寄りに溝状の張り出しがあり、これがかまどの痕跡ではないかとも考えられる。この付近も壁が黒色土中に造られている上、後世の削平が床上10cm前後まで進んでおり、かまどの有無は明確にできなかった。

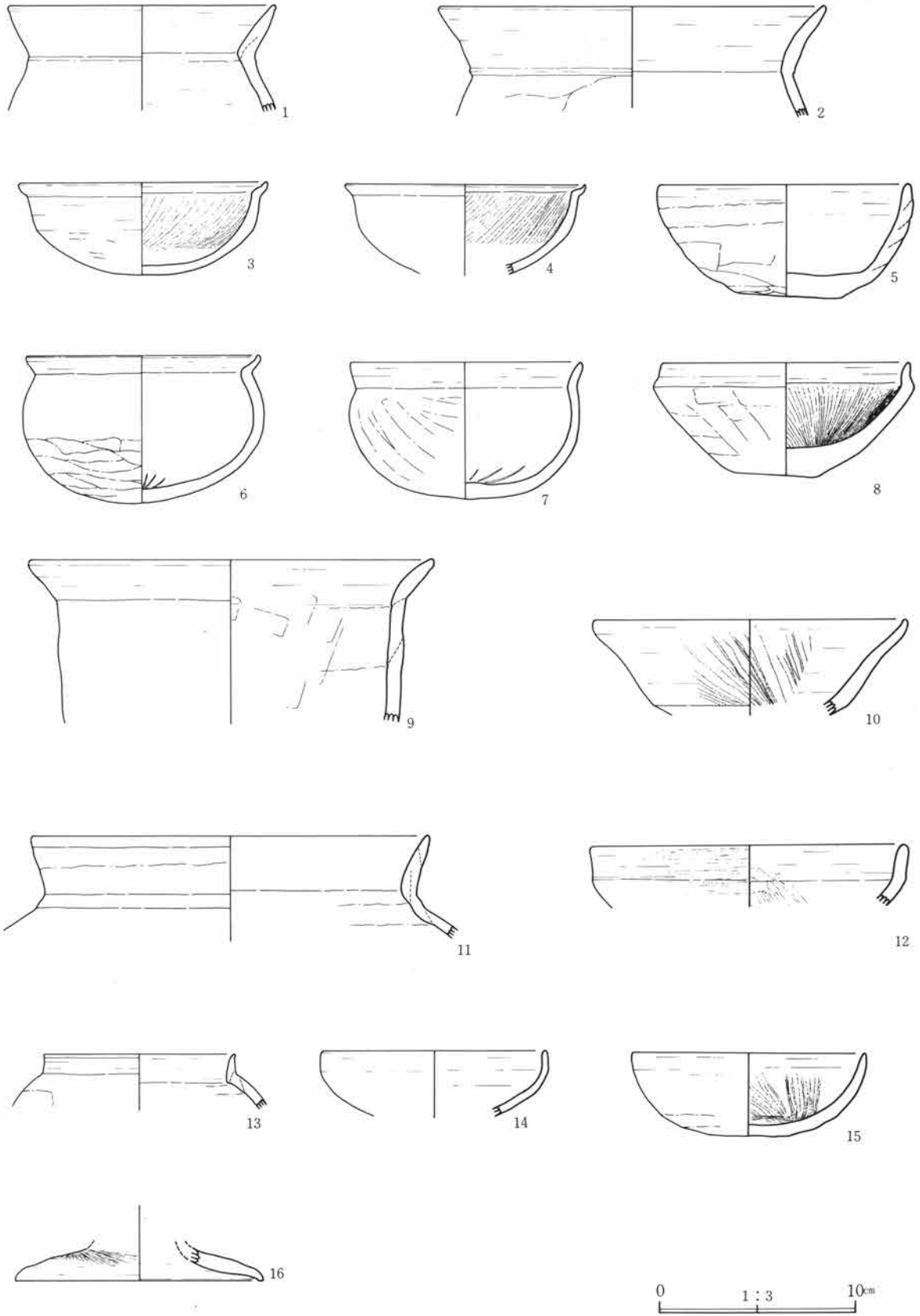
**他の遺構** 住居址内中央東寄り覆土中に焼土帯とこれに伴い石、土器類が見られた。この焼土帯に伴う土器(30図)は2号住居址よりも後出のものである。この他、北壁部分が7号住居址に切れ、北西コーナー部で5号住居址と重複するが、先後関係など詳細なところは不明である。10号住居址との重複は2号住居址の方が新しく、西半部は10号住居址の上に厚く貼り床を施している。

**遺物**(29図 図版58) 西南部、北東部床面上に甕、杯を始めとする土器類、及び南辺周溝の外壁部に密着して、砥石が出土している。(90図、図版83) 土器類は杯の点数が多く、完形土器が目立って見られた。

17表 土器観察表 29図 2号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	小形甕形	口 13.6	細砂を多量に混入。 やや軟質	浅黄橙色	頸部の屈曲は弱い。口縁部は直状に外傾、肩部は膨らまず、比較的長胴となると思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ 内面 口縁部—頸部ヨコナデ	肩部以下欠損 (22%)
2	甕形	口 19.6	細砂を多量に混入。 堅緻	橙色	頸部の屈曲は弱い。口縁部はやや外反しながら外傾。肩部はあまり膨れない。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部—肩部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	肩部以下欠損 (15%)
3	杯形	口 12.6 高 4.7	粗砂を含む。 堅緻	橙色	口縁部内斜面は短く、先端が小さくハネ上る。胴部中位にヘラケズリによる稜を持つ。	外面 口縁部—胴上部ヨコナデ。胴下部—底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨。間隔1～3.5mm	(54%)
4	杯形	口 12.2 高 4.8	粗砂を含む。 堅緻	橙色	口縁部内斜面は短く、先端が小さくハネ上る。頸部の屈曲は強く、内側に鋭い稜を作る。	外面 口縁部—胴上部ヨコナデ。胴下部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ後、斜行ヘラ研磨。非常に縁が弱く観察しにくい。底部ナデ	底部欠損 (28%)
5	杯形	口 12.6 高 5.7	細砂を含む。 やや軟質	赤橙色	肩部に弱い稜を作り、口縁部はほぼ直立する。底部は平底に近い。粘土の合わせ目が良く観察できる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、胴下半部以下ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部内面が非常に荒れている。	(100%)

III 上滝遺跡

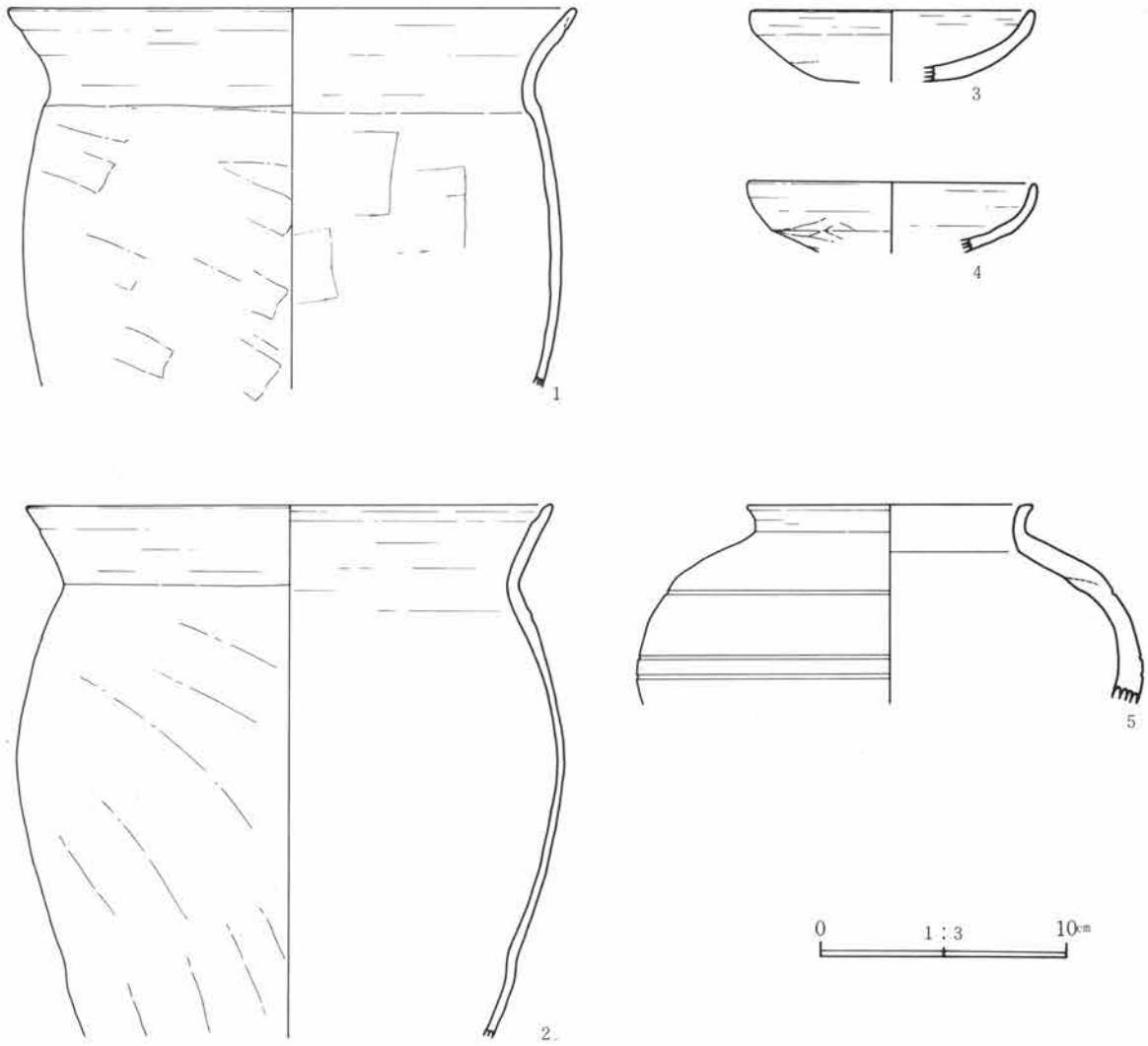


29図 2号住居址貼り床内(1)、床面直上(2~10)、覆土上部(11~16)出土土器

## 6 検出した遺構・遺物 (1)住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
6	椀形	口 12.0 高 7.3	粗砂の混入が目立つ。 やや軟質	にふい赤褐色	口縁部内斜面は短く彎曲し、頸部は強く屈曲し内側に明瞭な稜を作る。丸底	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ胴下部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部横方向の丁寧なナデ	(100%)
7	杯形	口 12.0 高 7.0	あづき大の礫の混入が目立つ 堅緻	にふい橙色	頸部が比較的強くくびれる。内側に弱い稜を作る。口縁部は長く外傾する。胴部は横の膨らみが目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。底部付近放射状のヘラあて痕が見られる。	(58%)
8	杯形	口 12.6 高 5.7	細砂を含む。 (角閃石の混入が目立つ)	橙色	肩部に強い稜を作り、口縁部はやや外反気味に直立する。底部は小さい平底になる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部放射状ヘラ研磨の痕跡わずかに残る。内面が非常に荒れている。	(90%)
9	甌形	口 26.0	細砂を含む。 (角閃石の混入が目立つ)	浅黄褐色	頸部は屈曲し、口縁部は強く外傾する。口縁端部はやや角ばり、外側に稜を作る。胴上部はまったく膨れない。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胴下部以下欠損 (21%)
10	高杯形	口 16.0	砂粒の混入が少ない。 堅緻	明赤褐色	底部からの立ち上り部分の屈曲は稜を作らない。杯部中位でやや外反し、口縁部は小さく内彎する。	外面 杯上部ヨコナデ、下部ナデ後、口縁部一杯部下部斜行ヘラ研磨、幅1mm、間隔1~5mm、底部ヘラナデ 内面 ヨコナデ後、外面と同様の斜行ヘラ研磨	底部一脚部欠損 (10%)
11	甕形	口 25.5	砂粒の混入が少ない。 堅緻	淡橙色	頸部は強く屈曲し、口縁部は短く直状に外傾する。器壁は浅い。	外面 口縁部一頸部粗いヨコナデ、肩部ヘラケズリ 内面 口縁部一肩部ヨコナデ	肩部以下欠損 (9.5%)
12	杯形	口 15.8	中砂多量に混入。 堅緻	橙色	頸部がゆるくくびれる。口縁部はほぼ直立する。器壁は厚い。	外面 口縁部横方向ヘラ研磨。胴上部横方向ヘラ研磨。口縁部に比べ粗い。幅1~2mm 内面 ヨコナデ、胴部ヘラ研磨、幅2mm	胴下部以下欠損 (15%)
13	壺形	口 19.8	細粒の混入が少ない。 堅緻	明赤褐色	頸部は丸味を持ちながら「く」の字状に直立し、口縁部先端は尖り気味	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、肩部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	胴上部以下欠損 (30%)
14	杯形	口 11.5	砂粒の混入が少ない。 堅緻	にふい橙色	胴部は緩く彎曲し、口縁部はやや内彎気味に直立する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ	(12.5%)
15	杯形	口 12.0 高 4.0	砂粒の混入が少ない。 堅緻	明赤褐色	底部から口縁部にかけてゆるく彎曲しながら広がる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ後、斜行ヘラ研磨、幅0.5mm、間隔1~3mm、底部ナデ	(16%)
16	高杯形	底 12.6	砂粒の混入が少ない。 堅緻	橙色	裾端部が小さく下方へ彎曲する。	外面 ヨコナデ後、うず巻様の放射状ヘラ研磨、幅1mm、器面は光沢を持つ。 内面 ヨコナデ、端部粗いナデ	裾部破片 (29%)

III 上滝遺跡



30図 2号住居址覆土中焼土帯出土土器

18表

土器観察表 30図 2号住居址覆土中焼土帯

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 12.3	砂粒を多量に含む。 堅緻	橙 色	最大径が口縁部に位置する。頸部の彎曲は緩く、器壁は薄い。	外面 口縁部—頸部ヨコナデ 内面 口縁部—頸部ヨコナデ	胴下半部以下欠損 (32%)
2	甕形	口 21.2	細砂を多量に含む。	橙 色	頸部は緩くくびれ、口縁部は直状に外傾	外面 口縁部—頸部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	胴下部欠損 (100%)
3	杯形	口 11.4	細砂を含む。 軟質	にふい橙 色	底部はやや平坦な丸底	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	(40%)
4	杯形	口 11.6	細砂を含む。 堅緻	橙 色	器体は比較的浅く、小さい。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 ヨコナデ	底部欠損 (16%)
5	短頸壺 (須恵器)	口径11.7 胴径20.6	焼締りあり、 硬質、細白色 鉱物微	外面、灰 色、器肉 赤褐色	頸部から口縁にかけ、 短い口縁部が外反する。	外面 ロクロによるヨコナデ、自然 釉 内面 外面と同様	ロクロ回転方向は左廻り。

3号住居址 (31図 図版23)

**位置** B3区微高地南端部、ローム面が南に傾斜し始める付近に位置する。他の遺構との重複は見られない。

**平面形、規模** 隅丸方形を呈する。東西3.7m、南北は南辺が不明確であるが、貼り床面や遺物の広がりにより、およそ3.7mと推定できる。方位はN-3°-Wを示す。

**周壁** 周壁は北壁と東、西壁の北半部は明瞭であるが、この南半部、及び南壁は黒色土中に造られているため検出できなかった。北半部の壁高は、7~10cm、黄褐色ローム層を掘り込んだ状態で見られる。

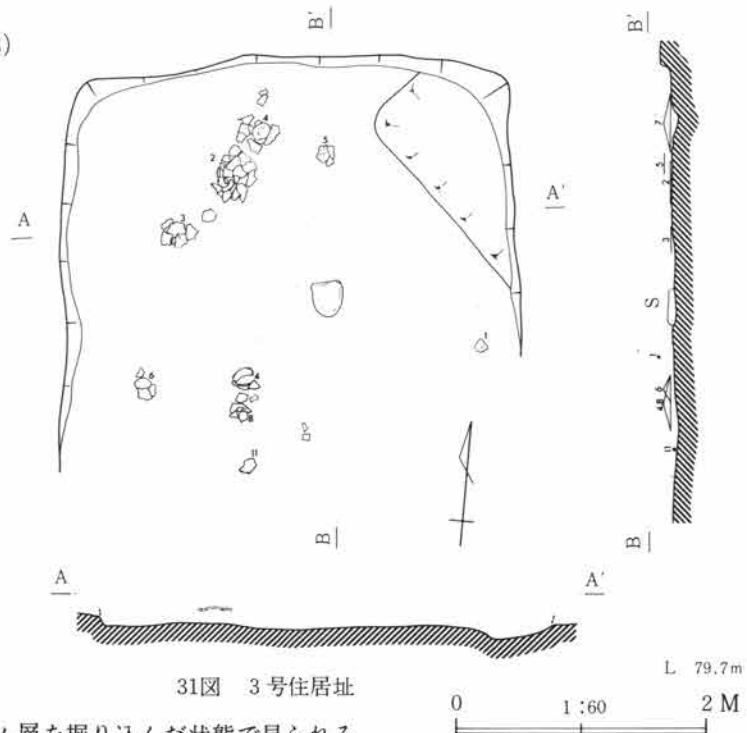
**床面** 床面全体が黒色土とローム土の混土により固められている。

**柱穴** 床面、掘り方面（ローム面）まで入念に精査をしたが確認できなかった。

**炉址** 炉址と考えられるような焼土の痕跡はない。

**他の遺構** 住居址内北東隅に浅い落ち込みを検出したが、本住居址との関係は不明確である。

**遺物** (32図 図版58) 床面上、住居内全体に土器破片が多数出土した。住居址内中央部に25×30cmの扁平な川原石が、床面上に下部が埋った状態で検出された。



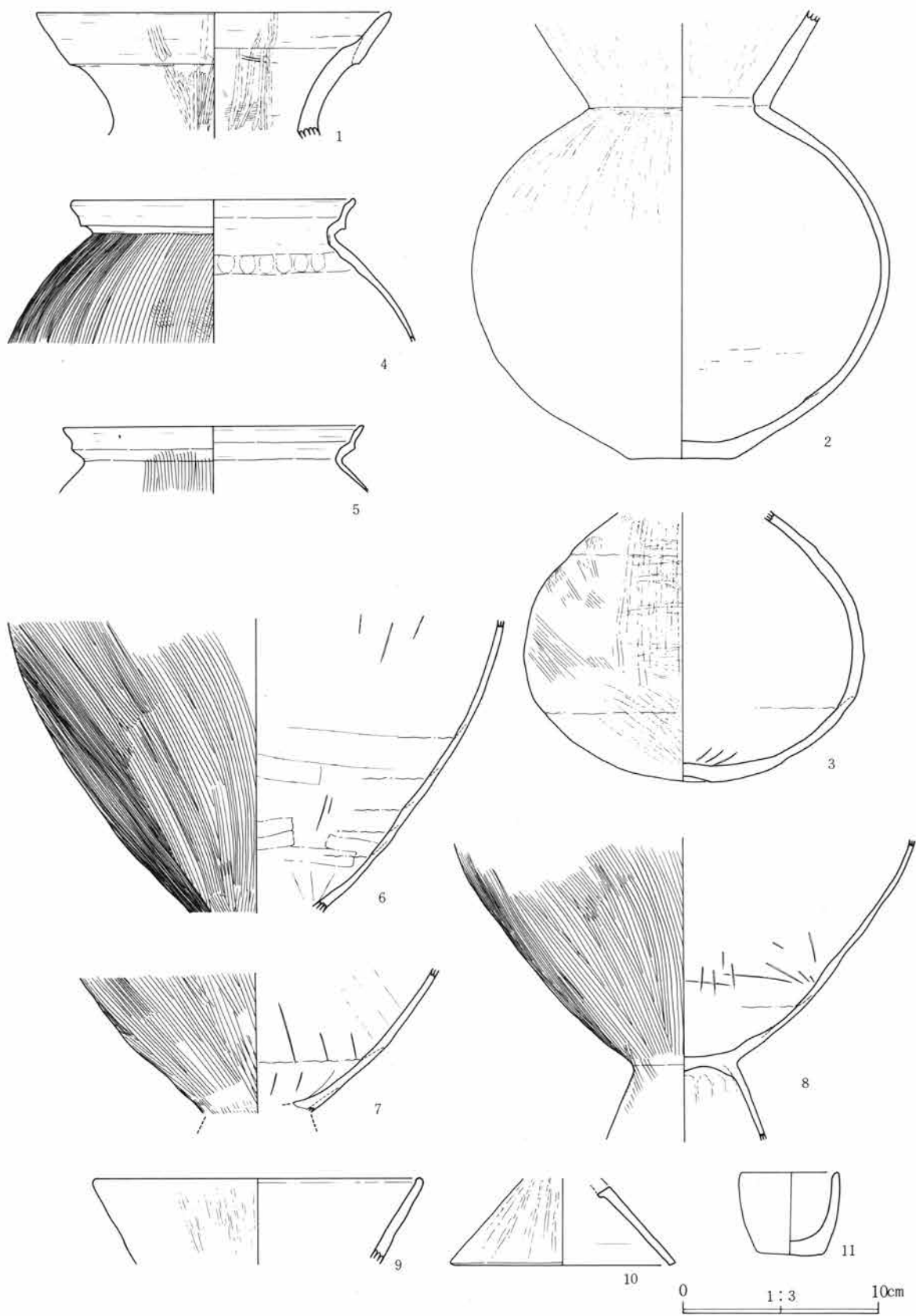
31図 3号住居址

19表

土器観察表 32図 3号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 18.3	細砂を含む。堅緻	浅黄橙色	頸部の屈曲は比較的弱い。口縁部は外側に幅広い粘土帯を継ぎ・段を作る。内側も弱い段を作る。口縁部接合部は明瞭	外面 口縁部ヨコナデ後、縦方向へラ研磨、頸部縦方向ハケメ後、同方向へラ研磨 内面 口縁部ヨコナデ後、縦方向へラ研磨、頸部横方向ハケメ後、縦方向へラ研磨。肩部ナデ	(13%)
2	罎形	胴 14.3×14.6	細砂を多量に含む。堅緻	橙 色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲して大きく外傾する。胴部は最大径が中位よりやや下に位置する球形。平底	外面 口縁部—胴上部縦方向へラ研磨。丁寧で緻密、胴下部は器面が荒れており観察不能 内面 口縁部縦方向へラ研磨。胴部横方向粗いへラナデ、胴下部接合部より下は丁寧なナデ	口縁部欠損
3	罎形	胴 17.5	粗砂を含む。堅緻	橙 色	胴部は最大径が下部に位置する扁球形。胴下部接合痕が明瞭に残り、器面に段ができています。肩部にも同様の段が見られる。凹み底	外面 胴上半部ハケメ後、棒状具による縦方向へラ研磨。胴下半部斜方向へラ研磨 内面 へラナデ後、指頭によるナデ。ハケメ状ナデが部分的に見られる。胴下部接合痕以下ハケメ後、へラナデ。底部放射状へラあて痕	肩部以上欠損

III 上滝遺跡



32図 3号住居址床面直上(1~8)、覆土中(9~11)出土土器

6 検出した遺構・遺物 (1)住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
4	甕形	口 16.0	細砂を含む。	浅黄橙色	口縁内折部外傾は鋭い稜を作る。口縁以上が長いが目立つ。先端内側には緩い凹線ができる。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、1単位8本 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ、肩部指押え痕がめぐる。肩部ナデ	肩部以下欠損(30%)
5	甕形	口 15.4	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部の屈曲は比較的緩く、端部内側に弱い凹線を施す。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指ナデ	(31%)
6	甕形	胴 25.5	細砂を多量に含む。	浅黄橙色		外面 胴下部深いハケメ、下端部は胴下部にハケメが施された後浅く幅広いハケメが施される、 内面 丁寧なヘラナデ	胴上部のみ遺存
7	甕形		細砂を多量に含む。 堅緻	浅黄橙色	脚台部の接合部が剥離している。	外面 胴下部ハケメ、下端部(補充粘土部)ハケメ後、粗いヨコナデ 内面 胴部接合部を境にして上下の整形が著しく異なる。上部ヘラケズリ、下部ナデ	胴下部のみ遺存
8	甕形		細砂を多量に含む。 堅緻	浅黄橙色	胴下部接合部の段が目立つ。特にこの部分における内面の膨れが目立つ。	外面 胴下部ハケメ、脚台部上部ハケメ、 内面 胴下部接合痕は明瞭、この部分を境にして上下の整形が異なる。上下共に丁寧なナデ、底部は脚台部の補充粘土が占め粗いナデが施される。脚台部指頭によるナデ	胴上半部脚台部下端欠損
9	埴形	口 16.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部は長く直状に外傾する。端部内側が小さく丸く膨れる。	外面 口縁部ヨコナデ後、ヘラ研磨。縦方向で緻密に施される。 内面 口縁部ヘラ研磨	(8%) 器面が荒れている
10	器台形	底 11.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	浅黄橙色	脚部は直状に大きく広がる。下端部が角ばる。円孔は鋭くかつ滑らかに穿孔されている。	外面 縦方向ヘラ研磨 内面 ヨコナデ	脚部上部以上欠損
11	ミニチュア	口 5.0	細砂を含む。 堅緻	淡 橙 色	底部はやや丸味を持つ平底。胴部はわずかに膨らむ。	外面 ナデ 内面 粗いナデ	(90%)

5 号 住 居 址 (33図 図版24)

位置 B3区中央に位置し、2号、7号、8号、10号住居址と重複する。

平面形、規模 方形を呈する。南北5.3mを測る。東西については不明である。軸線方向N-8°-W

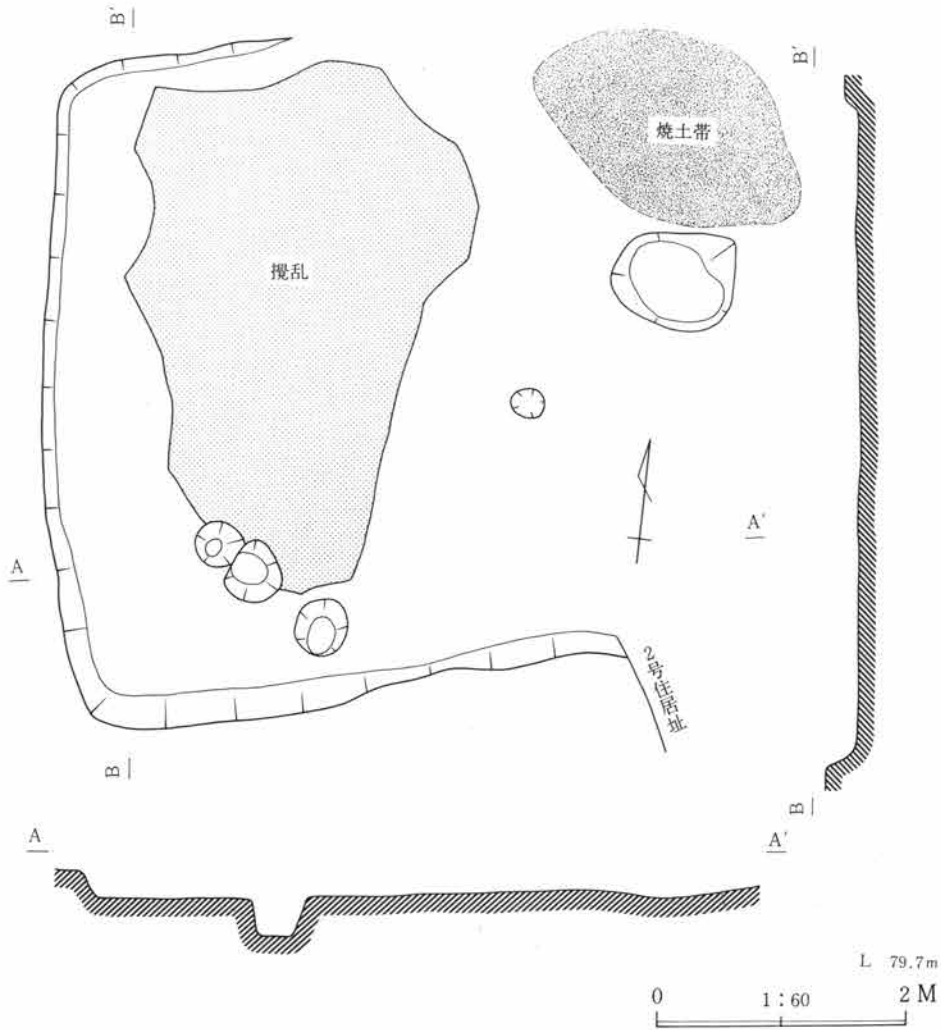
周壁 西側の壁の残存状態は良好で、黄褐色ローム層を掘り込んだ状態で、壁高10cm前後を測る。

周溝 なし

床面 中央部は広範囲に後世の攪乱を受けている。住居址内ほぼ全面にわたり、厚さ5cm前後、ローム土と黒色土の混土からなる貼り床を施す。

かまど 北西コーナー部に厚さ20cm、1.7×1mの広がりをもつ焼土帯が認められた。この焼土帯はかま

III 上滝遺跡



33図 5号住居址

どの構築材と考えられ、北東コーナー付近にかまどが付設されていたのではないと思われる。

**他の遺構** 南辺は10号住居址を切り、東辺で7号住居址と重複するが、5号住居址のカマド構築材と思われる焼土帯が7号住居址内に及んでおり、この焼土帯の上面は著しく踏み固められた状態である。(図版24) 床面は5号住居址よりも7号住居址の方が若干高く、これが7号住居址の床面となっていた可能性も十分考えられる。

6号住居址 (34図 図版25)

**位置** B3区西寄りに位置し、他の住居址との重複はない。

**平面形、規模** 北辺が南辺にくらべ長く、やや梯形を呈する比較的小型の住居址である。東辺3.4m、北辺3.1mを測る。長軸方向はN-25°-W

**周壁** 南壁はほとんど残存しない。東壁の遺存状態も悪い。北壁、西壁は比較的良好な遺存状態であった。この部分の壁高は10cm、ローム層へ掘り込んだ状態で見られる。

**周溝** なし

**床面** 平坦であるが緩い凹凸が目立つローム面である。床面には固い面は認められなかった。貼り床の確

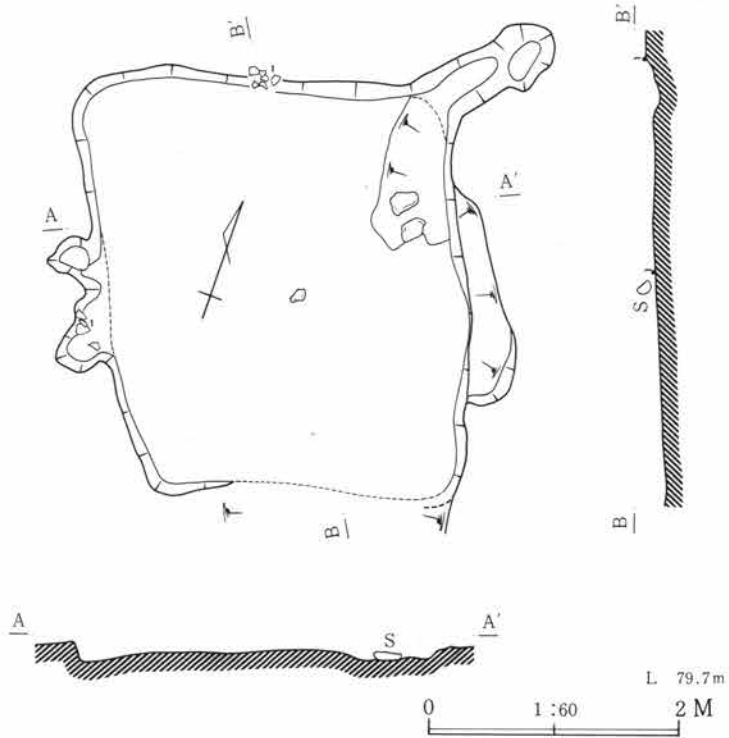


認はない。

**柱穴** 丹念な精査にもかかわらず、柱穴の確認はない。

**かまど** かまど、炉の確認はない。焼土の痕跡も見ない。北東コーナー部に溝状の掘り込みが認められるが、かまどに関わるものとは認められない。

**他の遺構** 南辺部は不整形な溝状の掘り込みと重複している。相互の関係は不明、西壁部に不整形な小さな掘り込みが見られる。掘り込みの底面で検出した壺形土器は、本住居址北壁上部に出土したものと同一個体であり、住居址の廃棄から若干下った時点のものであり、住居址との併存は考えられない。



34図 6号住居址

**遺物** (36図 図版59) 北壁上部に前述の壺形土器片が出土。住

居址が廃棄され埋没が相当進んだ時点での廃棄によると考えられる。この他に出土遺物はない。

### 7号住居址 (35図 図版24、25)

**位置** B3区中央部に位置する。2号、5号、8号住居址と重複する。

**平面形、規模** やや隅丸方形を呈する。南北辺、東西辺ともに同じ5.7mを測る。軸線方向はN-7°-W  
**周壁** 西北コーナー部付近は明瞭に確認できる。東南部は南辺で一部認められる以外は、他の住居址との重複により不明。8号住居址と重複する東壁部はかまどの南側が不規則に崩れており、北側は漸次立ち上がる。

**周溝** 北西コーナー付近の壁に沿って周溝が認められる。幅27cm、深さ8cm、ローム層を掘り込んだ状態で見られる。

**床面** 住居内中央部に不整形な土壇が見られ、この覆土の上にローム土と黒色土の混土による貼り床を作っている。貼り床の上は炭化物、焼土の混じった黒褐色土が厚さ10cm前後堆積して見られる。貼り床面は固められた状態が認められない。

**柱穴** 北西部に径40cm、深さ40cm程のピットを検出した。この他、東南部に不整形な土壇と重複し不明瞭ではあるが、柱穴らしき跡が認められる。これ以外に確認はない。

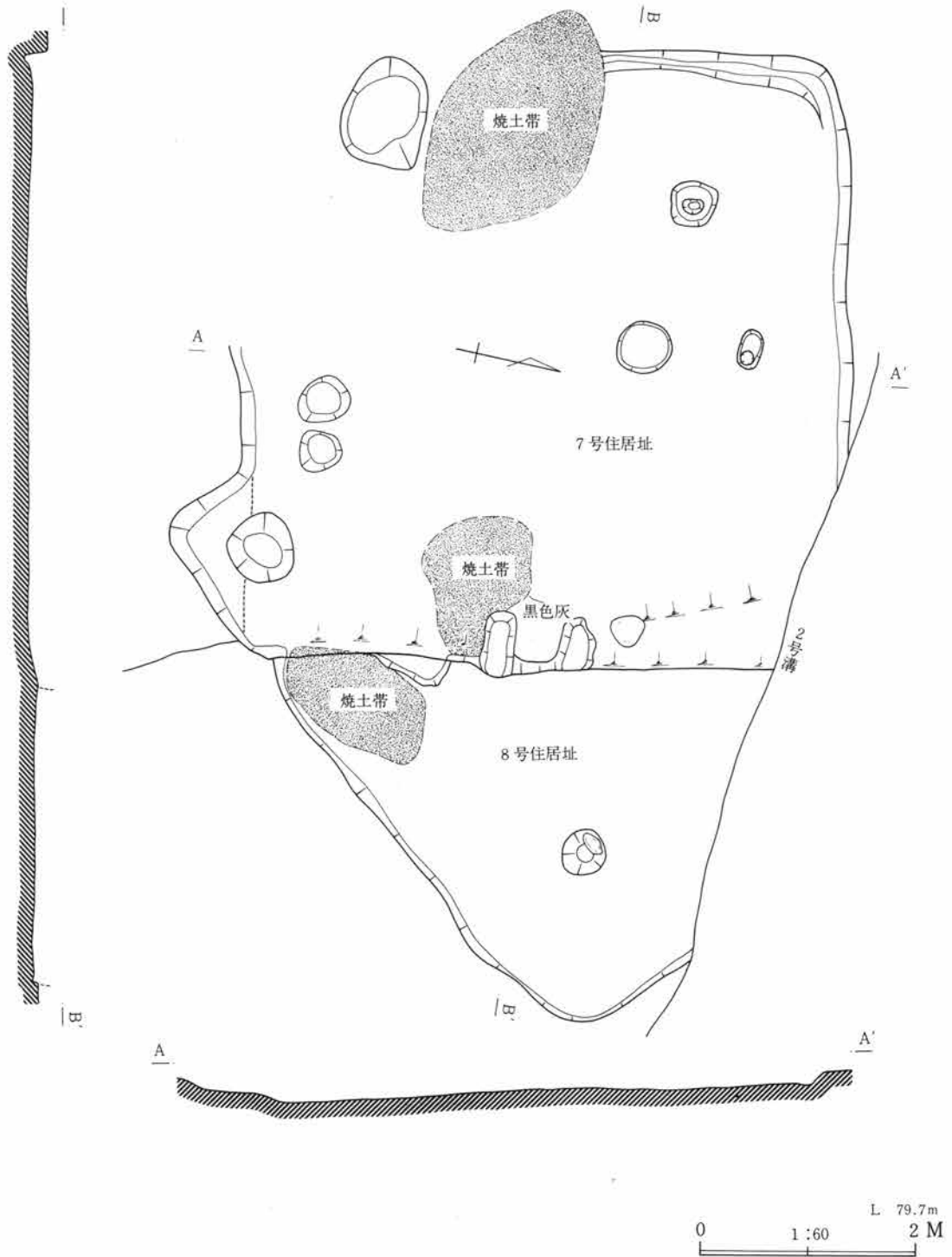
**かまど** 東壁中央部に上部が削平され、下部のみ高さ10cm前後に残存した状態で見られる。火床は黒色焦土、暗青灰色の灰が薄く堆積し、かまどの周辺の床面、とくに南側の袖部にも灰や焼土が広がっている。

**他の遺構** 8号住居址と東部が重複する。床面レベルは8号住居址の方が10cm前後高い。先後関係について

III 上滝遺跡

は明確な断定ができない。7号住居址のかまどは8号住居址の床面より4cm前後高い。7号住居址東壁付近に8号住居址床面の焼土帯が接するが、7号住居址の壁が不明瞭なため決め手にならない。床面下不整形土壇は出土遺物の対比から、時期的に7号住居址よりも大幅に上がると考えられる。

遺物 (36図 図版59) かまど南側袖に接して甕の破片、及び床面上に数片の土器が出土している。



35図 7号、8号住居址

8号住居址(35図 図版24)

位置 B3区中央部に位置する。7号住居址と重複する。

平面形、規模 隅丸方形を呈する。南東辺6mを測る。西半部は7号住、2号溝と重複し不明、軸線方向N-4°-E

周壁 南東辺は6cm前後の高さで認められる。

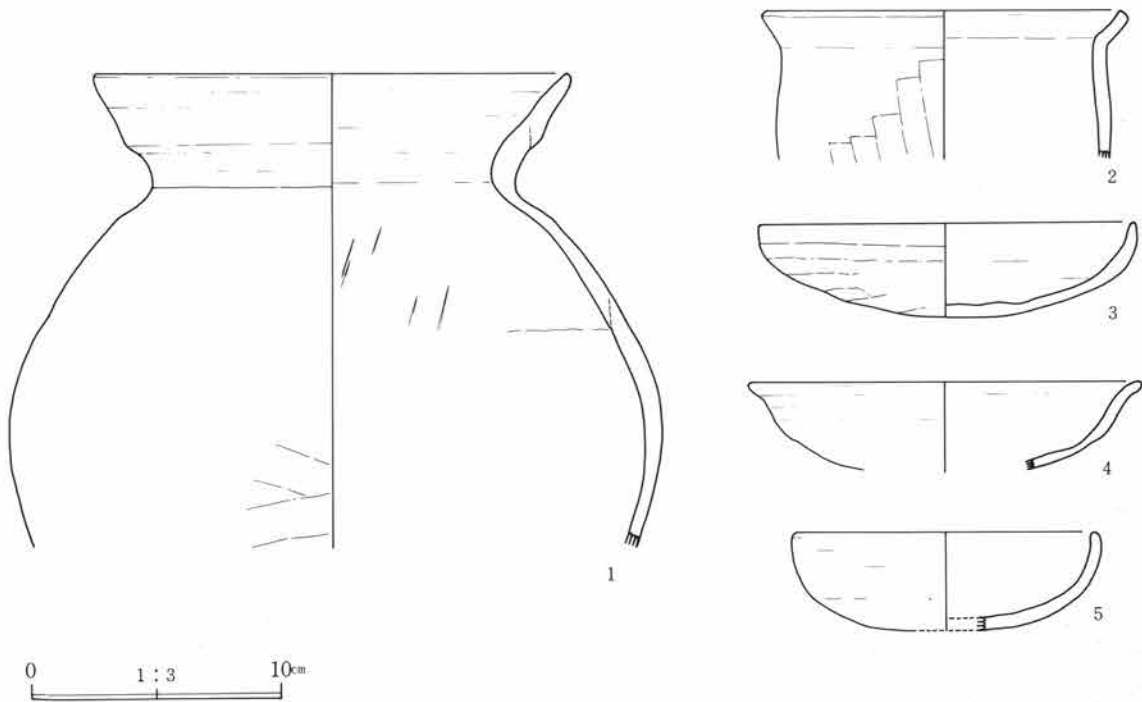
周溝 なし

柱穴 東部に径43cm、深さ50cmのピットが認められる。中位に円礫が見られ、柱穴の可能性はある。この他7号住居址内に本住居址の柱穴と思われるものもある。

かまど 東南辺南寄りに焼土帯がある。また壁も不整形に突出した状態が見られ、ここにかまどが付設されていた可能性がある。

他の遺構 西南部で7号住居址と重複、先後関係不明、北部で2号溝に切られる。

遺物 なし



36図 6号住居址(1)、7号住居址内床面直上(2、3)、焼土中(4)、覆土中(5)出土土器

20表

土器観察表 36図 6号住居址(1)、7号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 18.8	細砂を多量に含む。豆粒大の礫、目立つ堅緻	橙 色	頸部は比較的強く屈曲し、口縁部は下位に明瞭な段を作るが強い稜は持たない。	外面 口縁部—頸部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラナデ、ヘラあて痕が目立つ	胴下部以下欠損(60%) 内面胴中部の器面は荒れる。

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
2	小形甕形	口 14.2	粗砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部やや内彎気味に強く外傾する。口縁端部がやや角ばり先端に平坦面を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ↑ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部粗いヘラナデ	胴下半径以下欠損 (18%)
3	杯 形	口 15.0 高 37.5	粗砂を含む。 堅緻	にぶい橙 色	器体は浅い。丸底の底部から内彎しながら立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ✓ 内面 ナデ	(64%)
4	杯 形	口 15.6	細砂を含む。 堅緻	橙 色	器体は浅い。口縁部は強く外反する。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ← 内面 ナデ	
5	杯 形	口 12.0 高 3.9	粗砂を含む。 堅緻	内面黒色	底部から口縁部にかけて彎曲しながら広がる。口縁部はほぼ直立する。	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ。胴下部一底部ヘラケズリ 内面 ヘラ研磨	底部欠損 (33%)

9号住居址 (37図)

位置 B3区北東部に位置する。5号溝と北部で、東部は性格不明な溝状の掘り込みと重複する。

平面形、規模 西辺、南辺が不明瞭ながら認められる他は不明、規模は計測不能、軸線方向 N-7°-W

周壁 残存状態は悪い。壁高は状態の良い所で10cm前後を測る。

周溝 なし

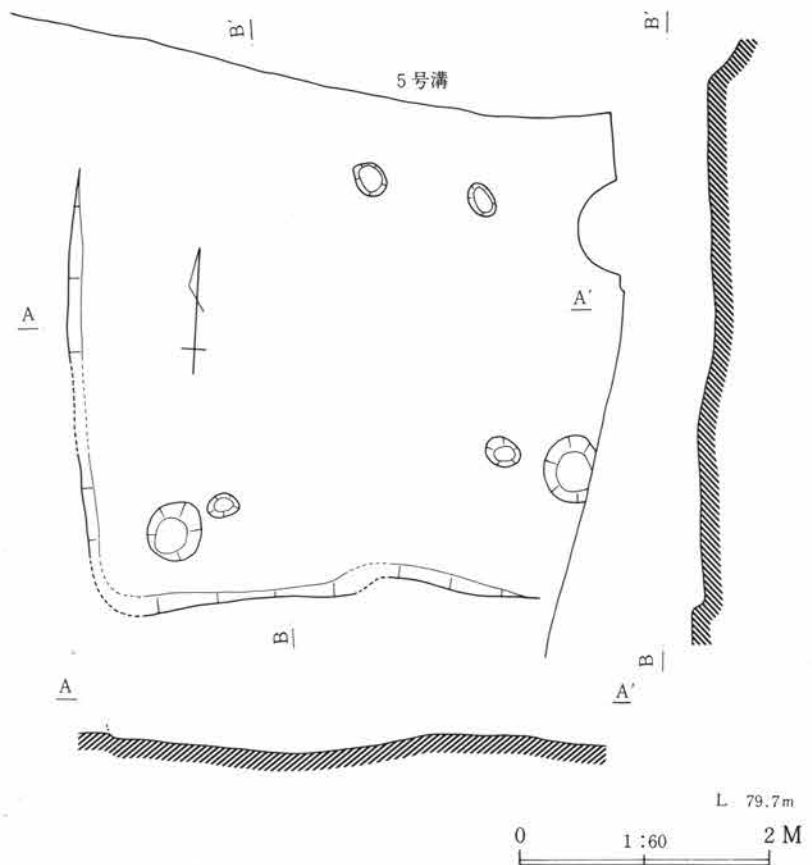
床面 凹凸の目立つローム面で、固い面は検出できない。

柱穴 径45cm、深さ40cm程のピットを西南部、及び東南部にそれぞれ2個ずつ検出した。

かまど 不明

遺物 確認なし。40、57図  
図版59は本住居址に伴う。

残存状態悪く、住居址と認定するには問題がある。



37図 9号住居址

10号住居址 (38図 図版24)

**位置** B3区中央部に位置する。2号、5号住居址と重複する。

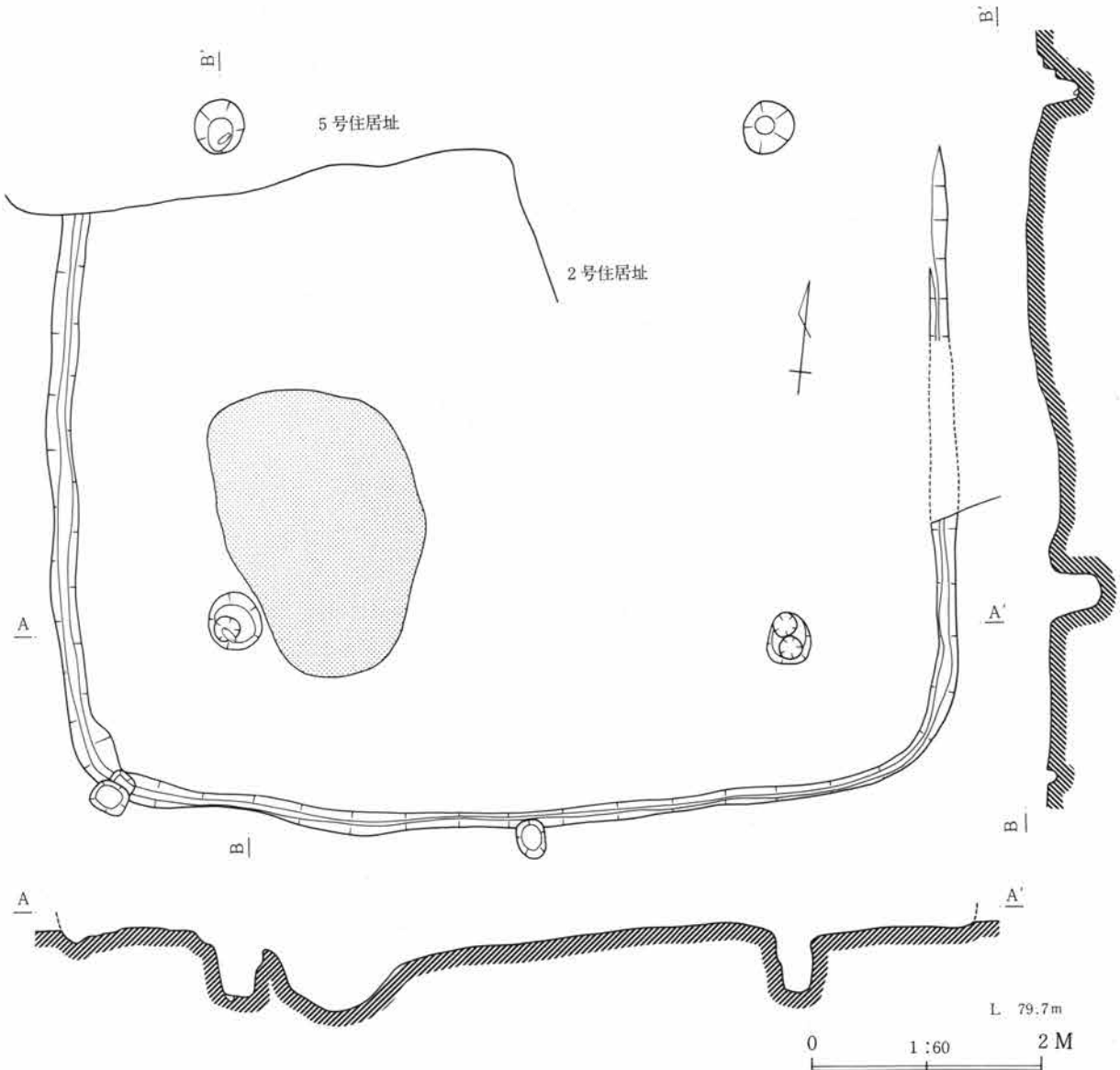
**平面形、規模** 隅丸長方形で辺の中央部がやや膨らむ傾向を示す。東西7.9mを測り、南北7m前後と推定できる。長軸方向はN-85°-Eを測る。

**周壁** 確認なし、黒色土中に造られている上、後世の削平が床面近くに達していることなどにより検出できなかった。

**周溝** 幅20~25cm、周壁に沿って確認できる。全周したと思われる。

**床面** 凹凸の目立つローム面。貼り床や固い平坦な面の確認はない。

**柱穴** 4箇所確認できる。西側の2個は底部に自然石が1個ずつ置かれている。それぞれの規模の口径は40~50cmで円形をなすことは共通している。南東部の柱穴では2個の小穴が複合した状態が見られる。柱穴間の距離は、西側の2個の間隔が4.4m、南側の2個の間隔は4.9mを測る。



38図 10号住居址

### III 上滝遺跡

かまど 確認なし。炉跡と考えられるような焼土の痕跡もない。

他の遺構 北西部で5号住居址と重複するが、先後関係を判断するための資料を検出することはできなかった。2号住居址とは東半部で広範囲に重複するが、2号住居址の方が後出であることは明らかである。

遺物 なし。

#### 11号住居址 (39図 図版26)

位置 B3区北部に位置する。他の住居址との重複はない。

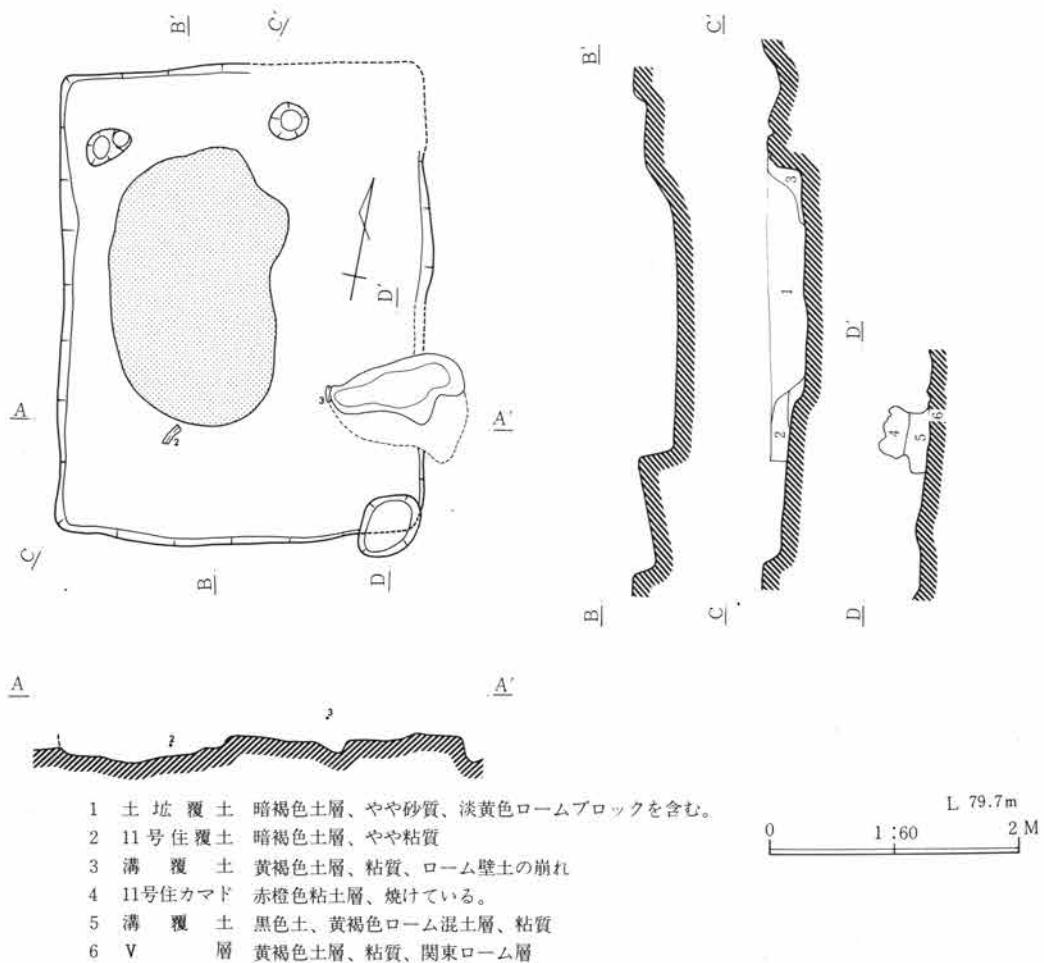
平面形、規模 長方形を呈し、小規模である。南北3.8m、東西3.0m、長軸方向N-11°-Wを測る。

周壁 後世の攪乱により、北東コーナー部分が不明であるが、この部分を除き、他は明瞭に検出することが出来た。ローム層中に掘り込まれた状態で、壁高は15~20cmを確認した。

周溝 なし

床面 固い平坦な面は認められない。凹凸が目立つローム面による確認であった。東南部は住居址に先行する落ち込みの覆土上に黒色土とローム土の混土の貼り床を施している。

柱穴 住居址内北半部に径30cm、深さ40cm程のピットが2個見られるが柱穴とするには位置関係に問題が



39図 11号住居址

ある。この他には認められない。

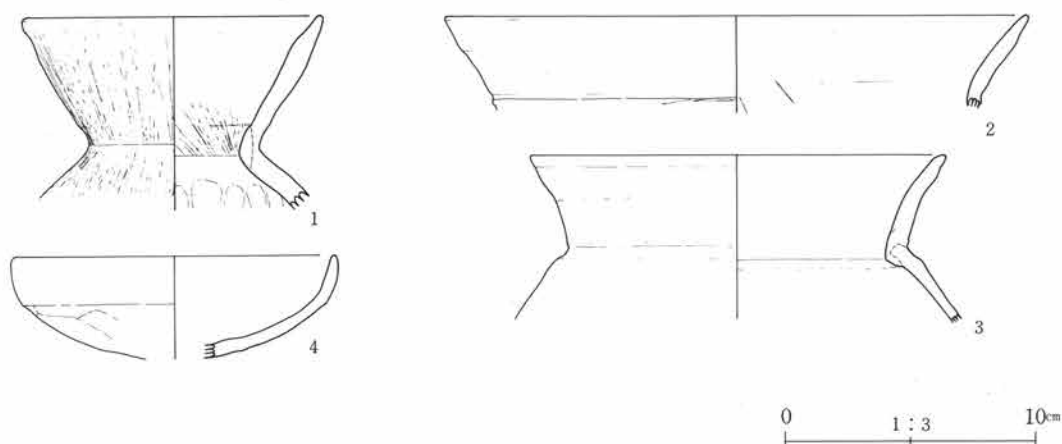
**かまど** 東壁南寄りに部分的に焼土化した粘土塊を検出した。周壁内外にまたがり、東西1m、南北50cm程の大きさで、形状は不整形であるが、かまどの残骸と思われる。

**他の遺構** 住居址の東壁南寄りから中央部にかけて、幅1m程の落ち込みがある。これは住居址に先行するものであることが、覆土の状態やかまどとの関係により判断できる。住居址中央部に後世の攪乱がある。床面が2.2×1.3mにわたり掘り込まれている。

**遺物 (40図 図版59)** かまどと思われる焼土より杯の口縁部破片が、また、貼り床面より甕形土器の口縁部破片が2点出土した。(佐藤)

21表 土器観察表 40図 9号住居址(1)、11号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 11.8	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	頸部はやや丸味を持って屈曲し、口縁部は直状に外傾する。器面は比較的波を打ち、器壁は厚い。	外面 口縁部一肩部ヨコナデ後棒状具による縦方向ヘラ研磨。幅0.5mm、間隔2～5mm 内面 口縁上部ヨコナデ、下部外面と同様に斜行ヘラ研磨、肩部ナデ、指押え痕がめぐる。	(89%)
2	甕形	口 23.2	細砂を多量に含む。 堅緻	にぶい黄 橙色	口縁部はほぼ直状に大きく外反し先端が尖る。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラあて痕が見られる。	頸部以下欠損 (25%)
3	甕形	口 16.1	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は強く屈曲する。口縁部はやや外反しながら外傾する。先端部にわずかな平坦面を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部横方向ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部横方向ヘラケズリ	肩部以上遺存 (24%)
4	杯形	口 12.8 男 4.1	細砂を含む。 (角閃石が目立つ。)	明赤褐色	口縁部はやや外傾気味に内彎する。器体は浅い。丸底。	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ← 内面 口縁部一底部ヨコナデ	底部欠損 (31%)



40図 9号住居址(1)、11号住居址貼り床内(2、3)、焼土中(4)、覆土中(5) 出土土器

### III 上滝遺跡

#### 12号住居址 (41図 図版26、27、33)

**位置** 本遺跡の住居群のなかでは最も西に位置し、5号溝、49、50号土坑と重複する。住居の北辺部は5号溝に、北西隅から南東隅にかけての中央部は49号土坑、50号土坑によって大きく攪乱をうけているため、残存状態はあまり良くない。かろうじて破壊をまぬかれた南西部と北東部で床面と壁とを確認しえた。

**平面形、規模** 原形は南北5m、東西5.2mで隅丸のほぼ正方形を呈していたものと推定される。また、西壁はほぼ磁北に沿っている。

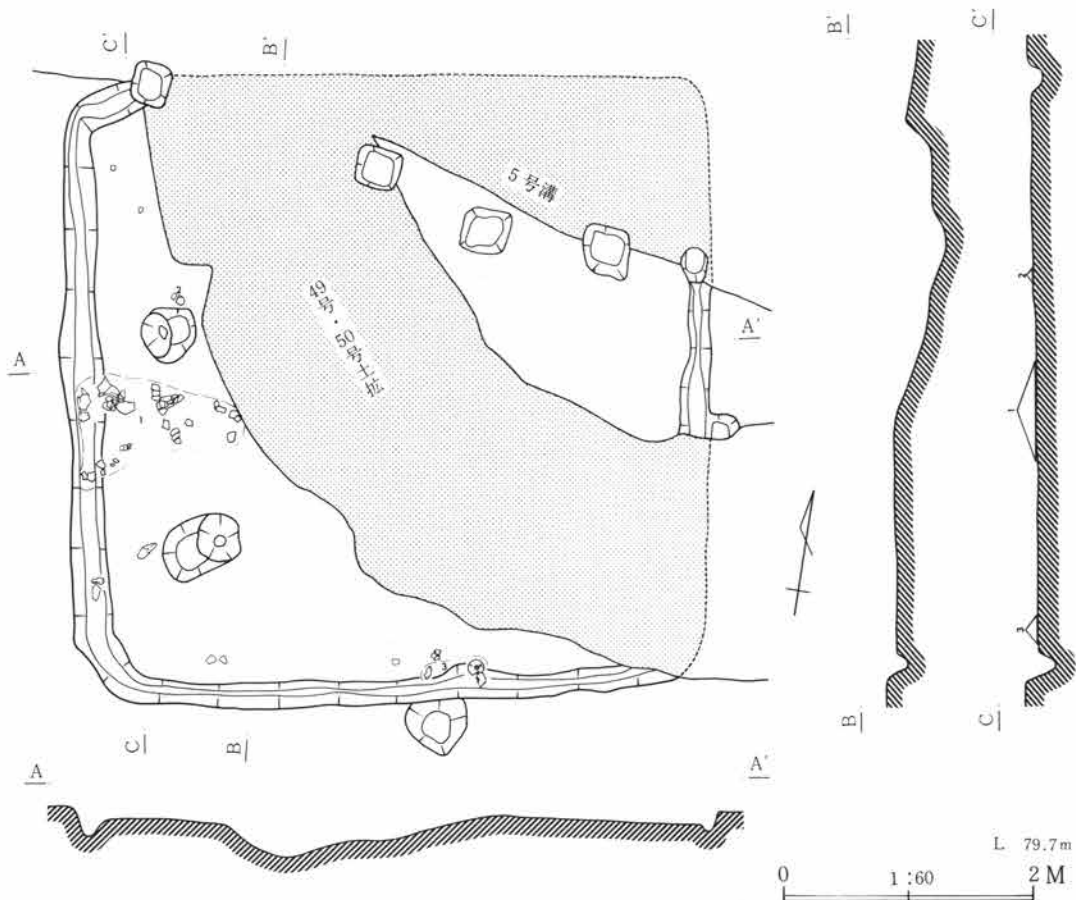
**周溝** 壁下周溝があり、幅20cm、床面からの深さは15cmである。周溝は壁が確認されたところでは必ず認められている。おそらく全周を巡っていたものと思われる。

**床面** プラン確認図の下約20cmのところ検出された。固くしまっており、水平である。

**柱穴** 前述のように住居中央部がかなり破壊をうけているため、南西の一箇所しか検出されなかった。この柱穴は40cm×70cmの半円形を呈し、深さは36cmである。本来は4本柱であったと思われる。

**炉址** 炉に相当する施設も攪乱のため検出し得なかった。

**出土遺物** (42図 図版60) 遺物は少なく南西部から出土している。S字状口縁台付甕は、西壁際中央部に押しつぶされた状態で散乱していた。その一部は壁下周溝内にも落ち込んでいた。器台形土器は南壁下やや東寄りから出土している。脚部と器受部の接合箇所分離し、脚部は正位置ですわった状態であった。以



41図 12号住居址

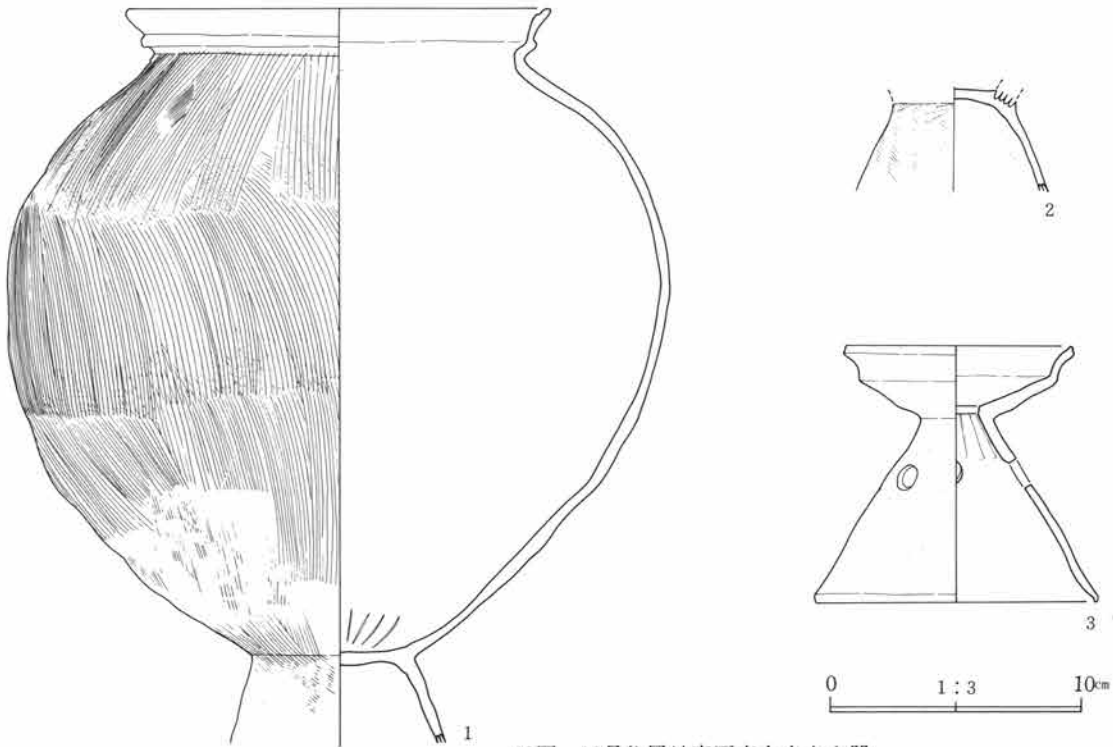


上2点は完形品で、しかも床面直上からの出土である。

この他、49号土坑、50号土坑の覆土中の土器のうち、古手の土器群は、もとは12号住居に伴っていたものと思われる。

22表 土器観察表 42図 12号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 16.8 胴 25.5	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部内側にわずかな段を作って端部を薄くしている。器体は全体的に幅に比べ丈がなく球形に近い。最大径は胴中位よりやや上に位置する。全体的に器壁は薄く、特に口縁部はそれが見立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部ハケメ、1単位9本。胴中部ハケメ、胴下部ハケメ、脚台部ハケメ後、縦方向スリ消し。 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押え痕がめぐる。胴部ヘラナデ、底部指押え痕、ヘラあて痕がめぐる。脚台部ハケメ後、ナデ	脚台部下欠損 (100%)
2	甕形		細砂を多量に含む。	橙 色		外面 脚台部ハケメ 内面 上部指押え痕がめぐる。ナデ	脚台部上部破片
3	器台形	口 9.1 高 10.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	器受部は中位が内折し口縁部は大きく外反す。口縁端部外側に平坦面を作り凹線をめぐる。中央貫通孔は大きくヘラにより穿孔の痕が見られる。脚端部は小さく内側に折れ込む。脚部に3孔を穿つ。	外面 器受部ヨコナデ、脚部ヨコナデ後、縦方向ヘラ研磨 内面 器受部ヨコナデ、中央貫通孔一脚上部ヘラケズリ、以下脚部ハケメ後、ヨコナデ	(100%)



42図 12号住居址床面直上出土土器

III 上滝遺跡

13号住居址(図版27)

**位置** 12号住居址の南東に南北約4m、東西約4mの範囲で黒色土の堆積した部分があった。調査の結果、この部分は一度約10cm落ち込んで平坦面があり、中央部で再度約5cm落ちてまた平坦面があることが判明した。中央部の落ち込み内からは土器片が多量に出土したため住居址と判断したものである。

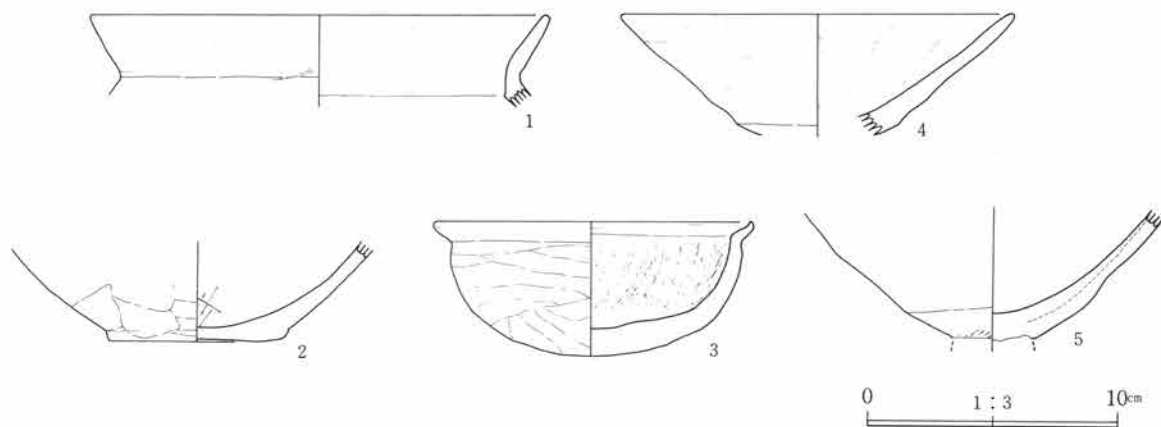
**平面形、規模** 外側の落ち込みは、南北約4m、東西約4mで東側が少しすばまり台形を呈している。北西部分は50号土坑によって完全に壊されてしまっている。南、西、北の三壁は、はっきりと確認できたが、東壁は不明確であった。

中央部の落ち込みは、南北2.5m、東西2.8mの長方形を呈する。東、南、西の壁は、しっかり残っているが、北壁はつかむことができなかった。壁の部分に土坑、ないしピットが数基重複しており、残っている壁もかなり乱されている。

**柱穴** その他施設などピットは、位置から判断して、本住居址の柱穴にはあたらないと思われる。また壁下周溝、炉の施設も認められなかった。

**出土遺物**(43図 図版59) 遺物は土器がほとんどである。ほぼ完形に近い杯形土器が、外側平坦面の直上から出土している。また、中央部落ち込みの北東壁部から高杯形土器の杯部が出土している。その他のものは、中央部の落ち込み内から集中して出土しており、覆土中のものがほとんどである。

本住居址は、南に向かってゆるやかに下がる傾斜面上に位置しており、またプラン確認面が低位なこともあって、正確な住居址の規模を把握することが困難であった。二段の落ち込みは、土層断面の観察結果から、時期を同じくするものであることは確かであるが、その性格については不明な点が多い。(西田)



43図 13号住居址出土土器

23表

土器観察表 43図 13号住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 15.6	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙色		外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片(20%)

## 6 検出した遺構・遺物 (1)住居址

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
2	甕形	底 7.0	細砂を多量に含む。 堅緻	にぶい橙色	やや上り底気味の平底	外面 胴下部ヘラケズリ→底面ヘラケズリ 内面 ヘラナデ、ヘラ押え痕が見られる。	胴下部一底部破片
3	杯形	口 13.0 高 5.6	中砂、粗砂を多量に含む。 堅緻	橙色	頸部は強く屈曲し、口縁部は大きく外傾し、比較的長く伸びる。内面先端がハネ上る。器壁は厚い。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ナデ	(35%)
4	高杯形	口 15.6	砂粒の混入少ない。	橙色	杯部は底部から直状に大きく広がる。底部は段を作って肥厚する。	外面 杯部ヨコナデ 内面 ヨコナデ後、粗いヘラ研磨、 間隔1~2mm	杯底部以下欠損 (20%)
5	高杯形		砂粒の混入少ない。	橙色	杯底部は段を作って肥厚する。杯部の外形線は緩く波打つ。脚部及び杯部の接合部が明瞭に見られる。	外面 杯部ナデ後、ヘラ研磨。斜方向緻密、接合部ハケメ状具による押えが見られる。 内面 ヘラ研磨、器面が荒れている。	口縁端部脚部欠損

24表

住居址観察表

No	形状	規模(m) ( )は推定	方位 (長)は長軸	周溝	柱穴	かまど	時期	他の住居址との関係	備考
1	方形	不明	N-85°-E (長)	なし	なし	不明	古墳時代 前期	なし	東南部円形土坑を付設
2	隅丸 長方形	6.2×5.7	N-20°-W (長)	幅 20cm 全周する	4 本	東南隅にかまどの痕跡らしきものあり不明確。	古墳時代 後期前葉	10号→2号 2号→7号	
3	方形	3.7	N-3°-W	なし	不明	中央に平石が置かれている。	古墳時代 前期	なし	
5	長方形	5.3	N-8°-W	不明	不明確	不明	古墳時代	不明	中央部に攪乱あり。
6	ほぼ 正方形	3.4×3.1	N-25°-W (長)	なし	なし	不明	古墳時代 後期前葉	なし	
7	正方形	5.7×5.7	N-7°-W	西北部で部分的にあり。	不明確	東辺中央部にかまどあり、黄色粘土壁、黒色灰の堆積を確認。	奈良時代	2号→7号	住居址内床面下に不整形なピットがある。
8	方形	6 × ?	N-4°-E	なし	不明確	東南部に焼土帯がある。	不明	不明	
9	方形		N-7°-W	なし	不明	不明	不明	不明	住居址とするには疑問
10	隅丸	7.9×(7)	N-20°-W	南側にて確認。	4 本	不明	古墳時代	10号→2号	
11	長方形	3.9×2.5	N-11°-W	なし	2本の み確認	東辺中央部にあり。	奈良時代	なし	

Ⅲ 上滝遺跡

No.	形状	規模(m) ( )は推定	方位 (長)は長軸	周溝	柱穴	かまど	時期	他の住居址との関係	備考
12	隅丸方形	4.9×(5.1)	N-8°-W	幅 15cm 全周する	不明確	不明	古墳時代 前期	なし	56号土壇より攪乱
13	方形か	外側 4×4 内側 2.5×2.8	N-5°-W	なし	なし	古墳時代 後期前様	なし	50号土壇と重複	

(2) 掘立柱建築遺構 (44図 図版28)

7号溝の北で、総計15個のピットを検出した。検出当初は2号ピット群として調査を進めたが、掘立柱建築遺構としてまとまる事が判明した。一部7号、11号溝と重複するが、新旧関係は不明である。現状で1間×3間の規模が想定でき、棟方向はほぼ東西を示している。個々のピットをみると柱痕が検出されている。P4、P6は11号溝のため柱痕のみ確認できた。各柱穴間の距離は計測表(25表)に示したが、若干の食い違いをみせている。P1、P3、P5、P7の北側桁行柱間は大体において2.1mに統一されているのに対し、P2、P4、P6、P8の南側桁行柱間は2.20m、2.10mと統一されておらず、ばらつきがある。また梁間柱間をみると、P1-P2間が48cmであるのに対し、順次東側にいくにつれ開きぎみとなり、P7-P8間に至っては5.16mを数える。36cmあまり広がる結果となり、全体的にいびつな建て方となっている。また遺構の中には3つのピット、P9、P10、P11が棟方向に平行して並ぶ。直接本遺構に伴うものか不明である。同時に南西部にある61号土壇と本遺構との関連はつかめていない。本遺構の時期については、これに伴う遺物が確認されていないため明確に把握することはできないが、ピットの形状、配置及び覆土の所見から中世、もしくは近世と考えられる。

なお、環濠と考えられる周囲の溝群との関係については、本遺構の棟方向がN-83°-Eを示し、溝群との間に17°前後のズレが認められる。このことから、周囲の溝と本遺構を一体的に結びつけることには問題がある。遺物が確認されていないため本遺構の構築時期は不明である。

1号ピット群 (図版34)

1号溝の南西周辺にあり、同溝より新しい時期のものである。同時に、8号溝とも重複する部分があるが、新旧関係は不明である。またこのピット群の中に、51号~53号土壇が存在する。ピット数は総計25個を検出したが、遺構としてのまとまりは確認できなかった。構築時期は1号溝を切って作られているものも存在することやピットの覆土中に浅間B軽石を含んでいることなどから中世以降に比定されよう。

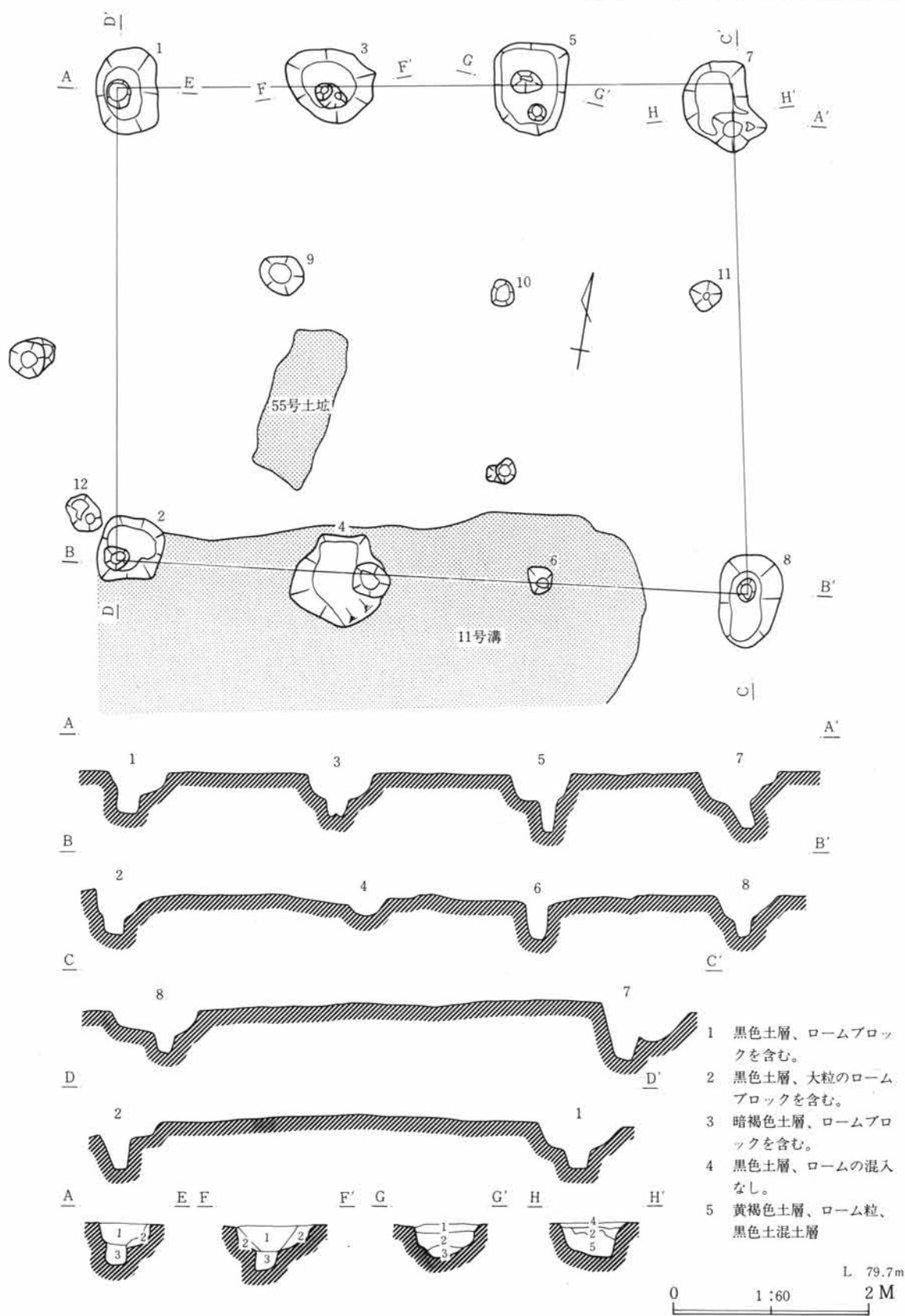
2号ピット群 (図版39)

6号溝と、3号、16号溝に囲まれた部分に存在し、周囲には、58号~62号土壇がある。小ピット状のものが7個検出されている。遺構としてのまとまりはみせない。構築時期は不明である。(巾)

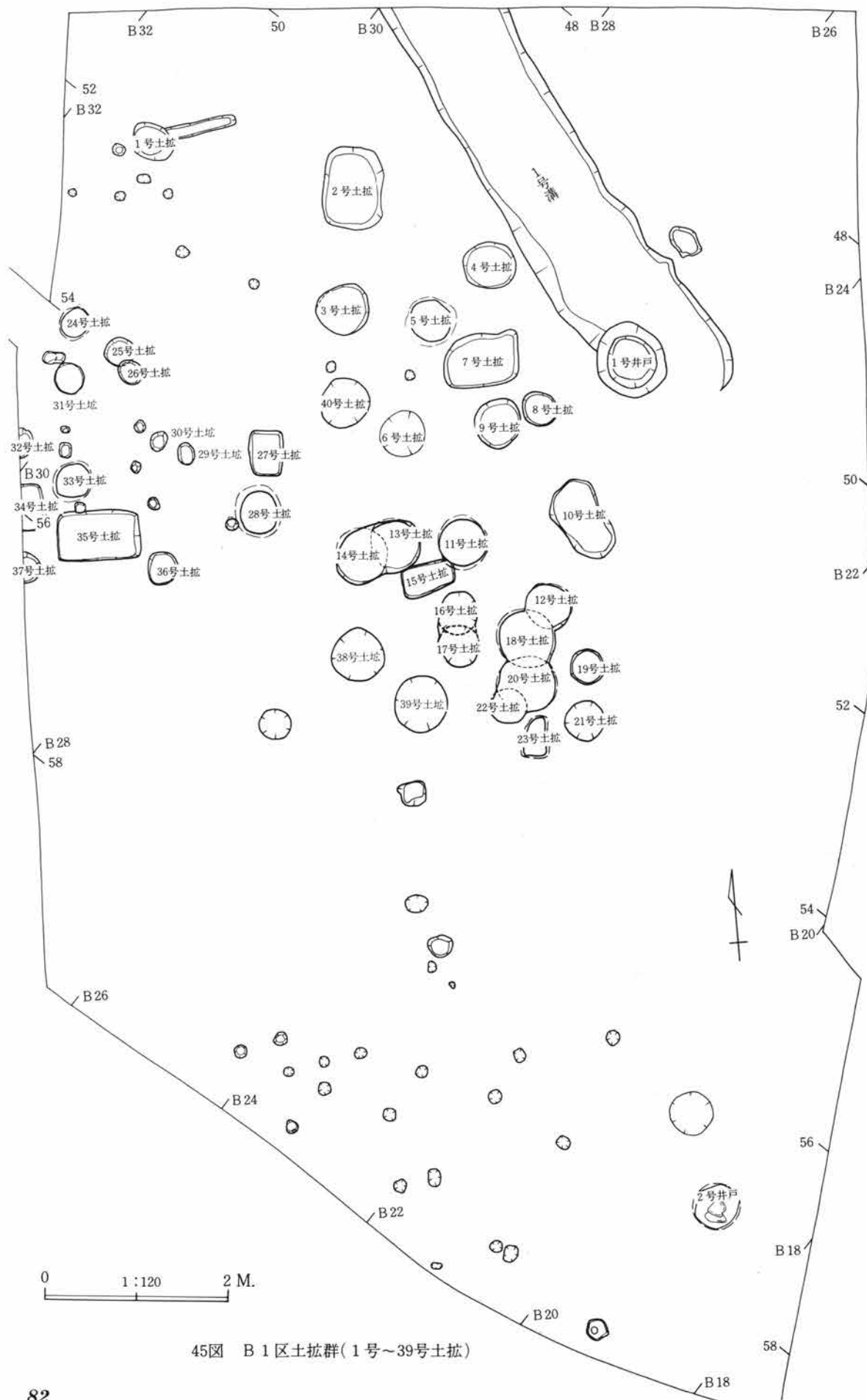
25表 掘立柱建築遺構計測表

(単位 m)

梁間柱間	桁行柱間	桁行間
P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub>	4.80	P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> 2.12
P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub>	4.93	P <sub>3</sub> -P <sub>5</sub> 2.12
P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub>	5.05	P <sub>5</sub> -P <sub>7</sub> 2.12
P <sub>7</sub> -P <sub>8</sub>	5.16	P <sub>2</sub> -P <sub>4</sub> 2.20
		P <sub>4</sub> -P <sub>6</sub> 2.20
		P <sub>6</sub> -P <sub>8</sub> 2.10
平均	4.23	平均 2.14



44図 掘立柱建築遺構



45图 B 1 区土坑群(1号~39号土坑)

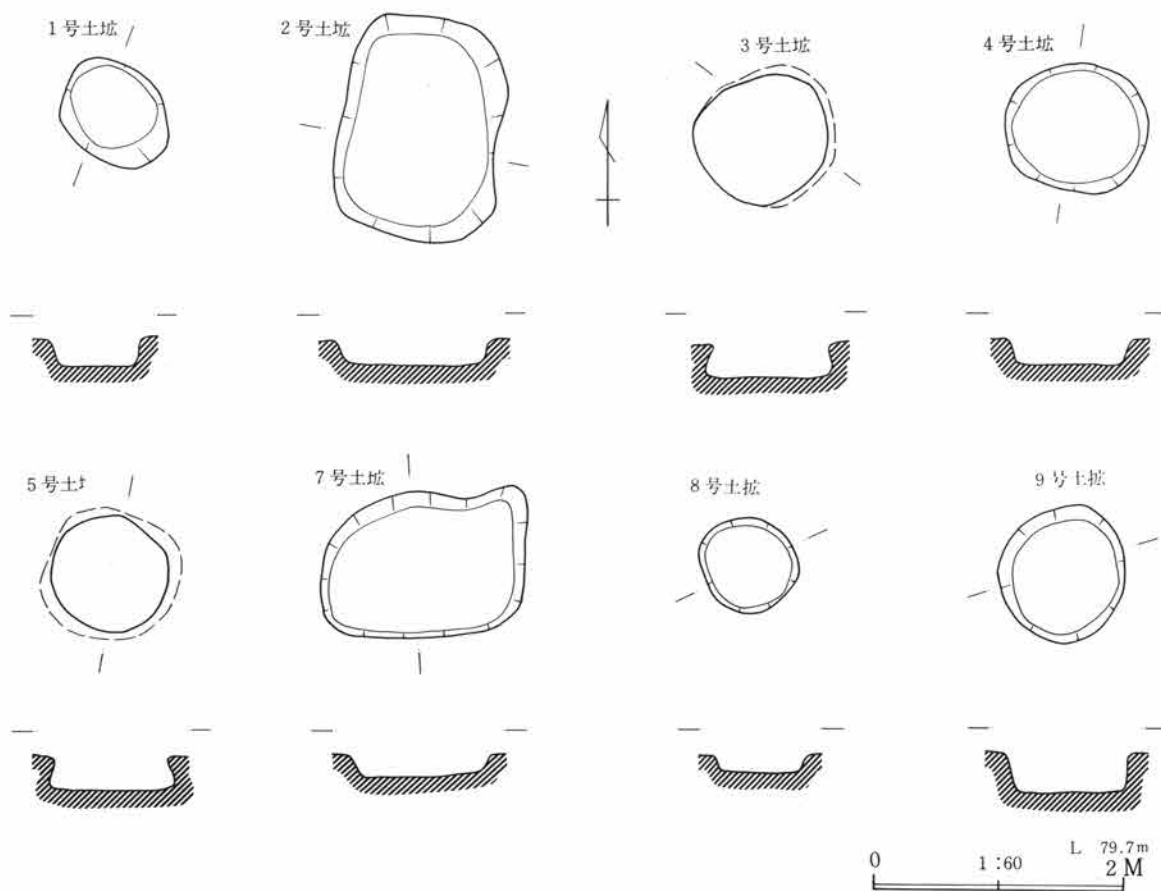
## (3) 土坑

## B1区土坑群 (45、46、47図 図版17、29)

B1区北西部、微高地の西側縁辺部において、38基以上に達する土坑群を検出した。この地域の土層はⅢ層（黄褐色氾濫層）の厚さがおよそ25cmで、土坑はこの層を掘り込んで造られている。

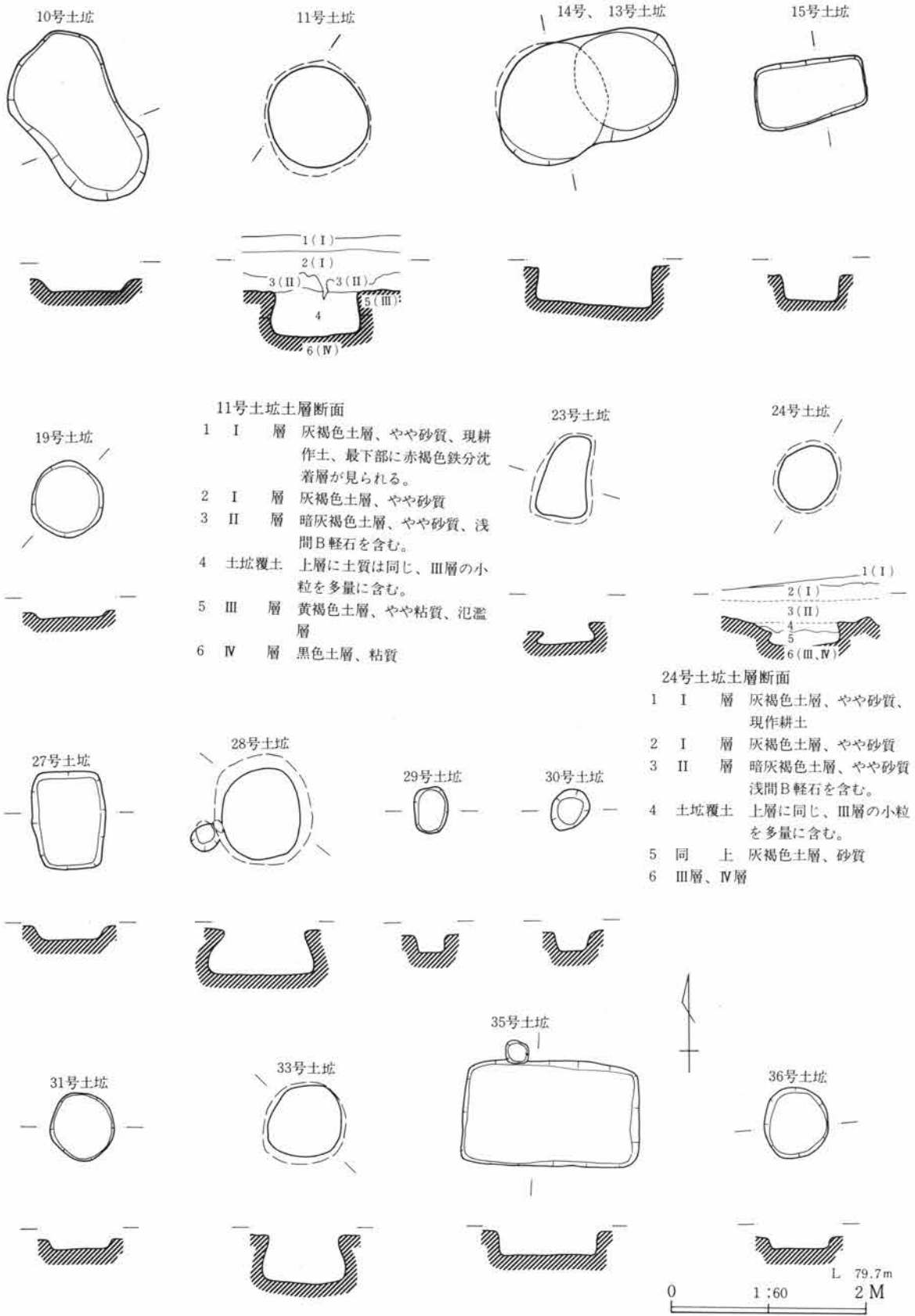
土坑の平面形状はほとんどのものが円形を呈しており、一部に長方形、または隅丸長方形のものが見られる。規模は円形の場合、径が1.3~0.8mで、1m前後のものが大部分を占めている。深さは掘り込み面が不明なため正確には把握できないが、一部では50cmを測っている。(11号、28号、33号土坑) 土坑はⅡ層中より掘り込まれていることは明らかであり、このことから深さは80cm前後であったと推定できる。断面形状は底面が平坦な円筒形、またはやや袋状を呈する。平面形状が長方形、または隅丸長方形を呈するものは2号、7号、15号、23号、27号、35号等6基認められる。規模は1.7~0.8mと一律ではなく、長軸方向については南一北、東一西の2通りを示している。深さは円形土坑に比較して浅く、15cm前後である。断面形状は円形土坑と同様と思われる。覆土は円形土坑、長方形土坑の間に差はなく浅間B軽石を含むやや砂質の暗灰褐色土層中にⅢ層土の小ブロックを含み、一括埋没土の様相を見せている。

土坑群の配置状況は、相互に密集し、東南部においては重複が著しい。また、円形土坑、方形土坑の間に位置関係におけ差は認められない。土坑群の広がりについては南北15m、東西13m以上で調査区域外に若干伸びている。時期、及び性格については、土坑群中に宋銭（景德元宝等）が3枚出土していることや層位との関係から中世~近世の墓坑と思われる。



46図 1号~5号、7号~9号土坑

III 上滝遺跡



11号土坑土層断面

- 1 I 層 灰褐色土層、やや砂質、現耕作土、最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
- 2 I 層 灰褐色土層、やや砂質
- 3 II 層 暗灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
- 4 土坑覆土 上層に土質は同じ、III層の小粒を多量に含む。
- 5 III 層 黄褐色土層、やや粘質、氾濫層
- 6 IV 層 黒色土層、粘質

24号土坑土層断面

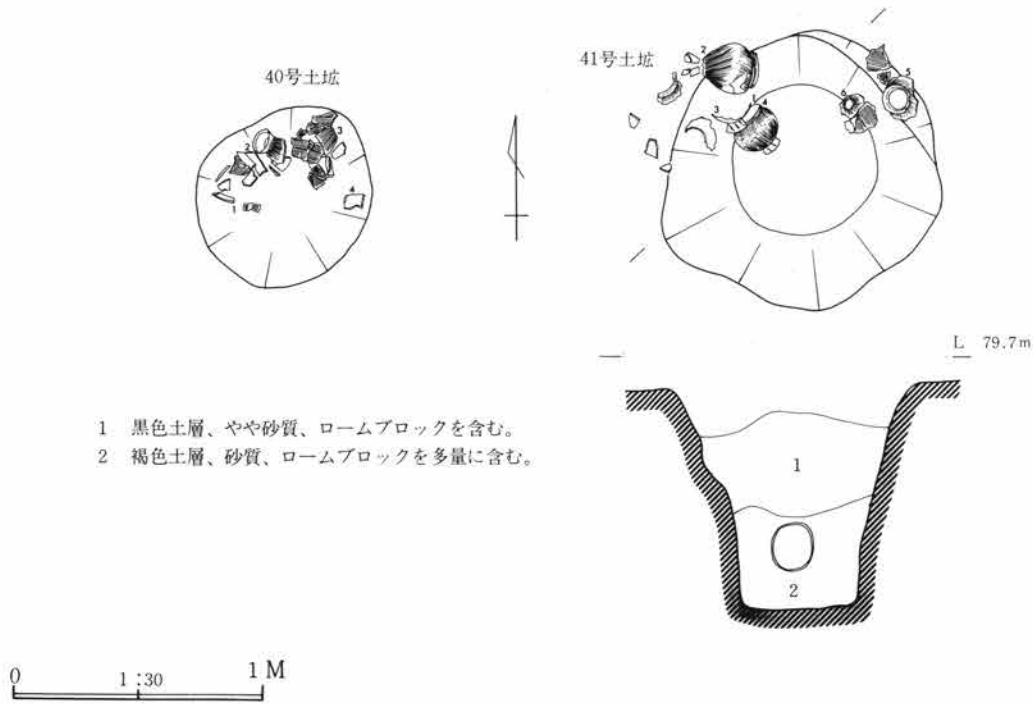
- 1 I 層 灰褐色土層、やや砂質、現作耕土
- 2 I 層 灰褐色土層、やや砂質
- 3 II 層 暗灰褐色土層、やや砂質、浅間B軽石を含む。
- 4 土坑覆土 上層に同じ、III層の小粒を多量に含む。
- 5 同 上 灰褐色土層、砂質
- 6 III層、IV層

47図 10号~36号土坑



40号土坑 (48、49図 図版30、60)

B1区中央部中世以後の土坑群中にただ1基古墳時代前期に位置づけられる土坑が検出された。形状は楕円形で、規模は長径1.5m、短径1.3m、断面はほぼ直状を呈し、深さ40cmを測る。覆土は黒色粘質土である。出土遺物はS字状口縁台付甕形土器、小形甕形土器等、完形土器、大形破片が数個体分出土している。



- 1 黒色土層、やや砂質、ロームブロックを含む。
- 2 褐色土層、砂質、ロームブロックを多量に含む。

48図 40号、41号土坑

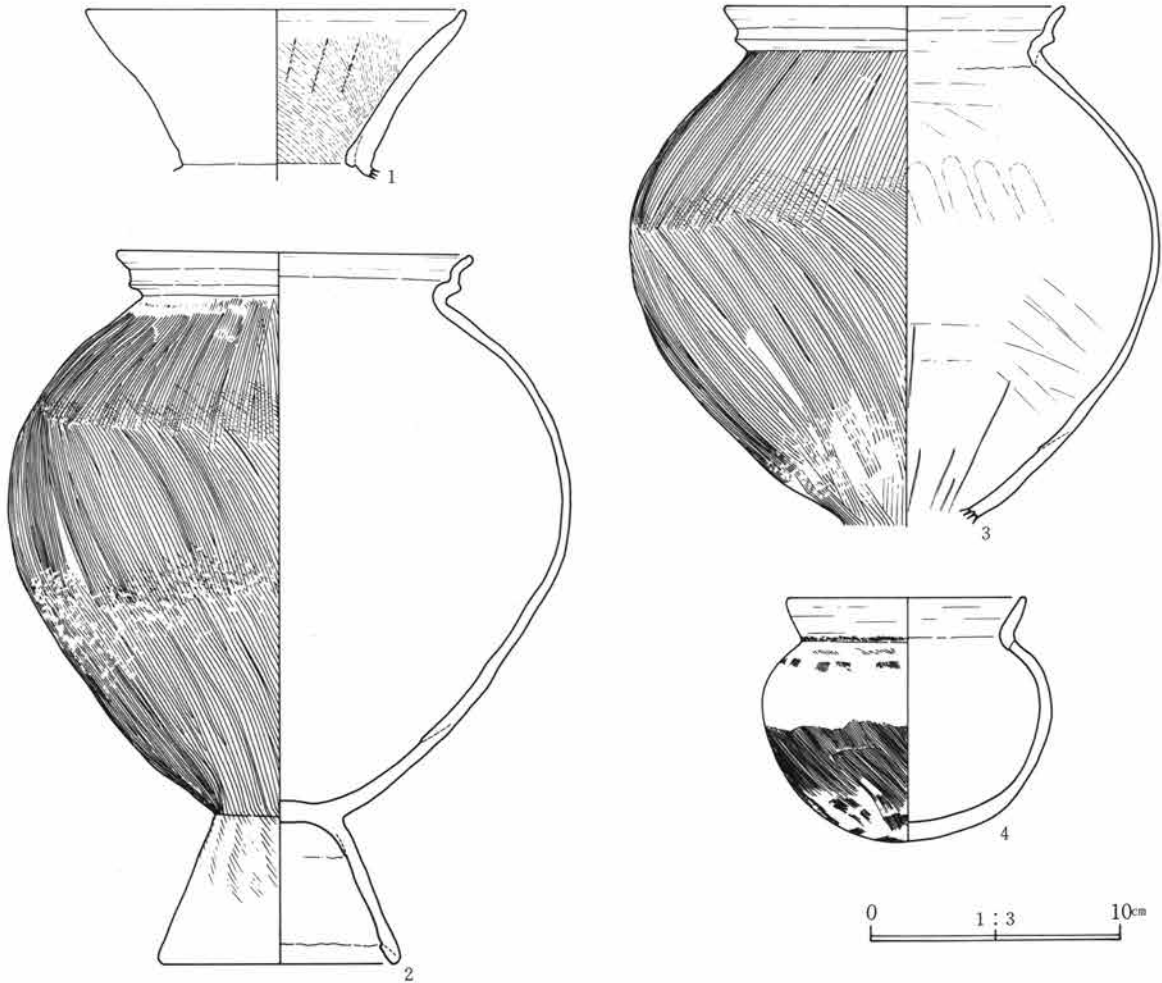
26表

土器観察表 49図 40号土坑

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 15.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し、口縁部にかけて大きく外傾する。口縁部は緩く外反し、端部で短く内彎する。肩部の器壁が著しく薄い。	外面 口縁部—頸部ヨコナデ。頸部ヘラ押え。 内面 口縁上部ヨコナデ、下部ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨。幅3mm。緻密	頸部以下欠損
2	甕形	口 14.2 高 18.9× 16.4	細砂を含む。 堅緻	淡 橙 色	口縁端部内側に凹線を施す。胴部は胴下部に比べ上部の膨れが目立つ。胴下部接合部の起伏は目立たない。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、胴中部—下部にかけて2段にハケメが施される。脚台部ハケメ後、縦方向のスリ消し。 内面 口縁部ヨコナデ。肩部指押え痕がめぐり、ナデ。胴部ナデ。底部放射状ヘラ押え。脚台部指頭による押えのち粗いナデ	(41%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
3	甕形	胴 21.0	細砂を含む。 堅緻		胴やや上部に最大径がある。	<p>外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、やや粗い。胴下半部ハケメへ、肩部のハケメに比べ浅く何度も重ねて施しているためハケメは細かく見える。胴部最下接合部ハケメへ胴下半部のハケメ後に施され、脚台部接合の際、補充粘土が柔らかいうちに施されている。</p> <p>内面 口縁部ヨコナデ、頸部接合部に補充粘土をし、へらによる横方向にナデを行なっている。胴上半部ナデ、中位に指押し痕がめぐる。胴下部接合部へラケズリ←、底部付近ナデ</p>	(7%)
4	小形甕形	口 9.5 高 9.0	砂粒の混入少ない。粗砂をわずかに含む。	淡 橙 色	<p>頸部は強く屈曲し、口縁部はわずかに内彎気味に短く外傾する。</p> <p>胴部は肩部から膨らむ扁球形。丸底</p>	<p>外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ハケメ後、ナデ、下半部細かいハケメへ、幅 9mm、1単位10本</p> <p>内面 口縁部ヨコナデ、胴上部指頭によるヨコナデ、下部へラナデ。底部放射状へラ押し痕が見られる。</p>	(25%)



49図 40号土坑出土土器

## 41号土坑 (48、50図 図版30、31、61)

B 3区中央部やや西寄りに検出された。形状は円形で上端径2m、下端径90cm、深さ2mを測る。覆土は上部がやや砂質の黒色土、下部は褐色土でロームブロックの混入が多く、短期的に埋没した可能性を示す。

出土遺物は数個体の甕形土器が北側より落ち込んだと思われる状態で出土している。その性格については

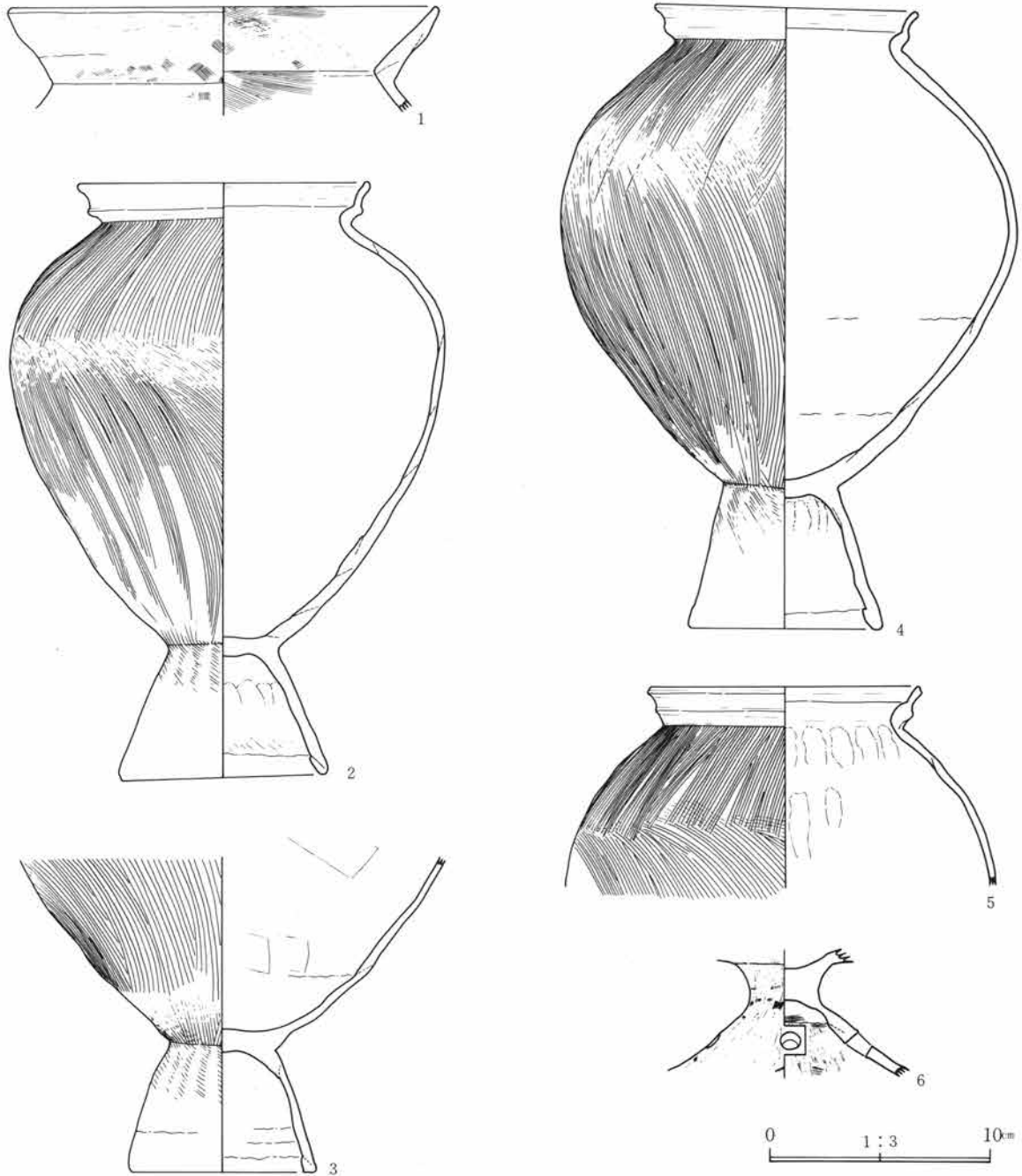
27表

土器観察表 50図 41号土坑

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	広口壺	口 13.9	細砂を含む。	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、口縁部は直状に大きく外傾する。口縁端部は薄くなりやや角ばる。	外面 口縁部一頸部ハケメ後、ヨコ方向へラ研磨。緻密 内面 口縁部ハケメ後、斜方向の緻密なへラ研磨、肩部ハケメ	肩部以下欠損 (25%)
2	甕形	口 13.2 高 26.8	細砂を含む。	浅黄橙色	胴部は縦長で最大径が著しく上位に位置する。胴下部接合痕が明瞭に見られる。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、下半部ハケメ、脚台部上部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押え痕がめぐる。胴中部(下部接合部以上)横方向へラナデ、下部(下部接合部以下)へラナデ、放射状にへらあて痕が見られる。接合部には最終段階に補充粘土が付され粗いへラナデが施されている。脚台部天井部指頭によるナデ、中部指押え、下部斜方向のハケメ	肩部、脚台部の一部欠損 (100%)
3	甕形	底 8.2	細砂を含む。 堅緻	にぶい黄 橙色		外面 胴下部ハケメ、脚台部ナデ後、ハケメ 内面 胴下部へラナデ、底部指頭によるナデ。脚台部、接合部指押え後、ハケメ状ナデ	胴上部以下欠損
4	甕形	口 11.7 高 27.4	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部はやや歪み波を打っているのが目立つ。端部は比較的角ばる。胴下部接合部は段状の起伏が目立つ。胴部最大径は中位よりやや上に位置する。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、幅1.7mm、1単位13本。胴中部一下部ハケメ、脚台部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部部分的にハケメを見るが指頭によるナデが施される。中部へラナデ、下部(接合部以下)ナデ、底部細砂を多量に含む粘土を補充後、粗いナデ、接合部には補充粘土	(100%)
5	甕形	口 12.2	細砂を多量に含む。 堅緻	淡橙色	口唇部が丸く肥厚し、端部外側に弱い凹線を施す。口縁部の屈曲は弱い。口縁下部の器壁の厚いのが目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、1単位15本。胴中部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部指頭痕がめぐる。胴部粗いナデ	胴下半部以下欠損 (100%)
6	高杯形		砂粒の混入少ない。	浅黄橙色	脚部は杯部との接合部が強く外曲し著しく広がる。円孔を4個、鋭く穿っている。径約9mm。脚部内面上端の強い指押えにより、この部分の器面は特に薄い。	外面 全体にハケメ後、縦方向の緻密なへラ研磨、杯、脚部接合にハケメがよく残っている。 内面 杯部へラ研磨、器面が荒れている。脚部上部指押え後、ナデ。下部ハケメ後、縦方向へラ研磨	杯部、脚部下端部欠損

III 上滝遺跡

周囲に同類の土坑が検出されていないこと、煮沸用具の甕形土器類の出土や、湯水期でも微高地上でローム面下30cmに湧水面があること等を考え合わせると古墳時代前期の井戸跡の可能性が高い。



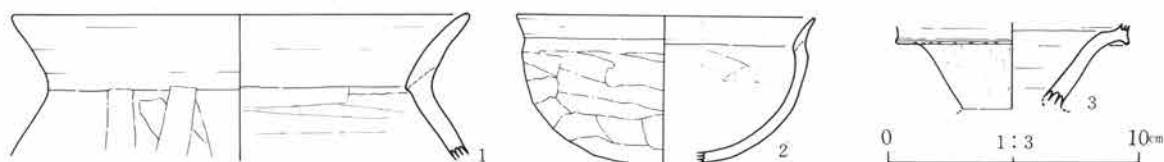
50図 41号土坑出土土器

42号土坑 (51、52図 図版31、61)

B 3区東端部、環濠(2号溝)東側溝に重複している。形状は楕円形で、規模は上端径が長径1.35m、短径95cm、下端径は長径60cm、短径25cm、深さは93cm、断面形状は上部に対し下部で狭まるのが目立つ、覆土は黒色粘質土である、2号溝との関係は覆土の所見より42号土坑が先行することが判明している。出土遺物は古墳時代後期前葉の甕形、杯形土器片(51図 1、2)が見られることからこの時期を上限とすることができる。

28表 土器観察表 51図 42号土坑(1、2)、43号土坑(3)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	甕形	口 18.2	中砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は強く彎曲し、内面に鋭い稜を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリへ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラナデ	(25%)
2	杯形	口 12.0 高 6.2	中砂を多量に混入。 堅緻	にぶい赤褐色	口縁部は外方へ大きく傾斜し、長く伸びる。内斜面はやや丸く膨らむ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ヘラケズリへ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ	底部欠損 (47%)
3	壺形	口 9.5	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は口縁部にかけて大きく外傾する。口縁部は上部で強く外方へ彎曲し、端部は上下に伸び外側に平面を作る。この下端にヘラ状具による刻みを施す。	外面 口縁部平坦面ヨコナデ、口縁外反部—頸部縦方向ヘラ研磨、緻密 内面 ヨコナデ	口縁端部、頸部以下欠損



51図 42号土坑(1、2)43号土坑(3)出土土器

## 43号土坑 (51、52図 図版31)

B 3区北東部環濠(2号溝)北側溝に重複している。形状はほぼ円形で小規模である。上端径58cm、下端径36cm、深さ55cm、覆土は黒色粘質土である。2号溝との関係は覆土の所見から43号土坑が先行することが考えられる。出土遺物は古墳時代前期の壺形土器(51図3)、の小片が1片出土している。(平野、佐藤)

## 44号、45号土坑 (52図、図版31)

1号溝と5号溝にはさまれた場所に位置し、南の部分は1号溝に接している。2基の土坑が重複しており、南が44号土坑、北が45号土坑である。44号土坑は平面形は円形、断面は浅いU字形を呈し、規模は上端幅の長径90cm、短径70cm。下端幅の長径74cm、短径50cm。深さ13cmを測る。45号土坑は平面形は長軸を南北に持つ不整長方形で南が少しすばみ、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は上端幅の短径70cm。下端幅の長径90cm、短径55cm。深さ13cmを測る。両土坑の新旧は不明。遺物は出土していない。

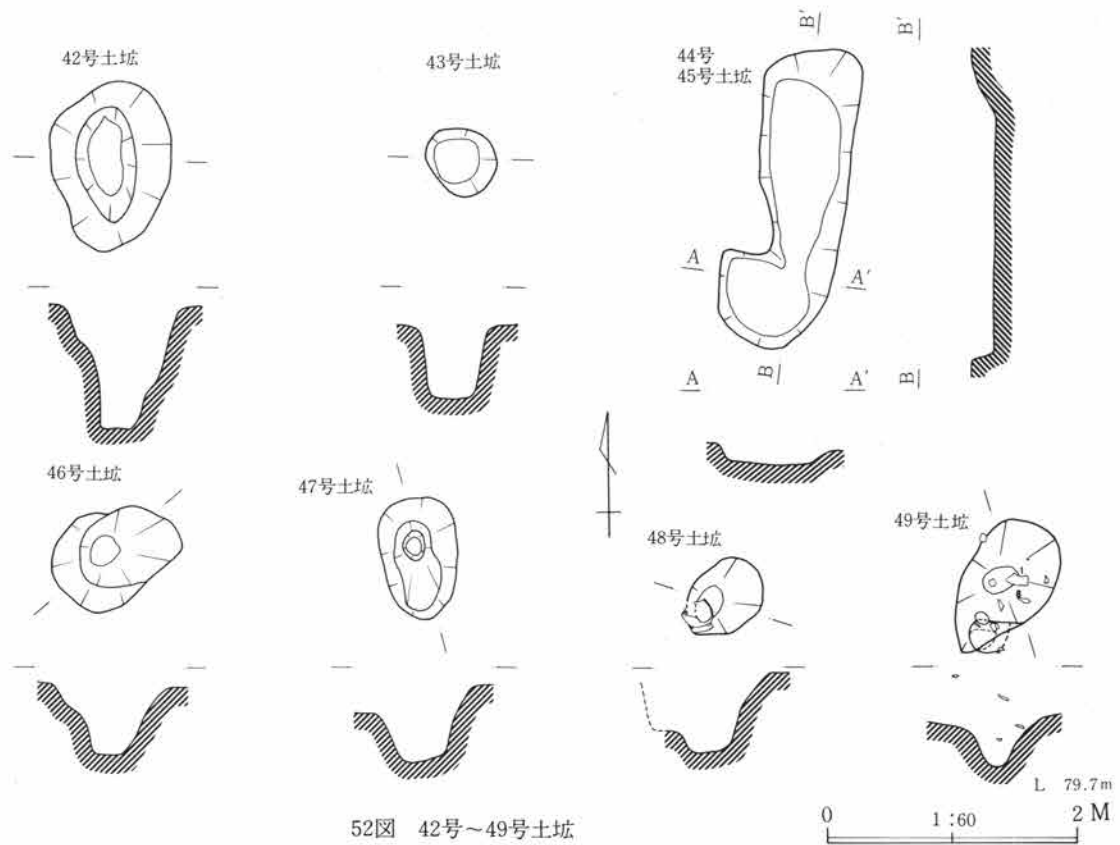
## 46号土坑 (52図 図版32)

44号、45号土坑の東に位置する。2基の土坑が重複。深い土坑が埋った後に、浅い土坑が再度掘り込まれている。平面形は円形、断面はV字形を呈す。規模は上端幅の長径95cm、短径75cm。下端幅の長径12cm、短径12cm。深さ53cmを測る。遺物は出土していない。

## 47号土坑 (52図)

6号溝の北側立ち上り部分と重複する。平面形は楕円形を呈し、規模は上端幅の長径98cm、短径62cm、下端幅の長径72cm、短径30cm、深さ56cmを測る。溝との前後関係は土層断面では不明であったが、土坑内覆土等から推察して、本土坑が古いと思われる。遺構内から遺物は出土せず、構築時期は不明である。

### III 上滝遺跡



52図 42号～49号土坑

#### 48号土坑 (52図)

1号溝の北側にあり、東壁下で同溝と重複する。平面形は円形を呈し、規模は上端幅の長径70cm、短径50cm。下端幅の長径27cm、短径28cmを測る。1号溝の調査過程で検出されたため、新旧関係はつかめていない。しかし、59図7の土器が本土坑にかかっており、その土器が1号溝に所属するものであれば、本土坑の方が古いだろう。

#### 49号土坑 (52、55図 図版32、61、62)

12号住居址内北西部の北西—南東に長い長方形土坑、北西部が5号溝に破壊され原形は不明。不規則な落ち込みが中央部に重複し、覆土中から大型の土器片が出土している。

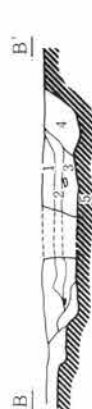
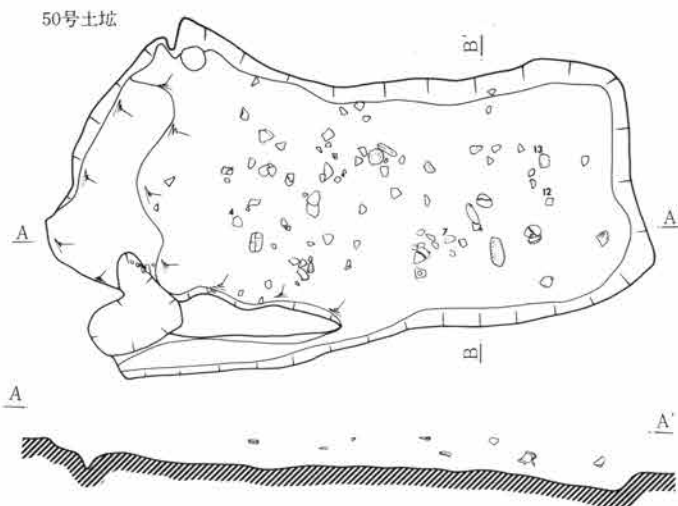
#### 50号土坑 (53、55図 図版33、61、62)

12号住居址の南東隅を東西に横断する溝状の土坑。弧状の長方形を呈し、西は49号土坑と重複する。規模は上端幅の長径5m、短径1.8m。下端幅の短径1.6m。深さ30cmを測る。覆土中の炭化物を含む層を中心に多量の土器が出土し、このうち、古墳時代前期の土器は、本土坑によって床面下まで破壊をうけた12号住居址のものと思われる。

#### 51号土坑 (53図 図版33、34)

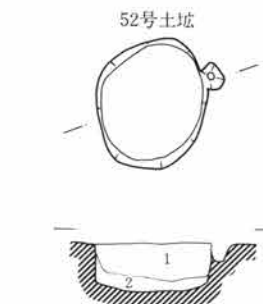
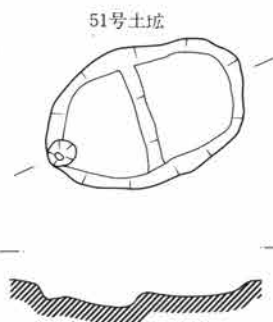
1号ピット群中にあり、東西に長軸をもつ長楕円形を呈する。規模は上端幅の直径1.7m、短径1.1m。下端幅の長径1.42m、短径1.3m。深さ10cmを測る。内部で2段構造を呈し、西側が低くなる。遺物は出土せず構築時期は不明である。

6 検出した遺構・遺物 (3)土坑



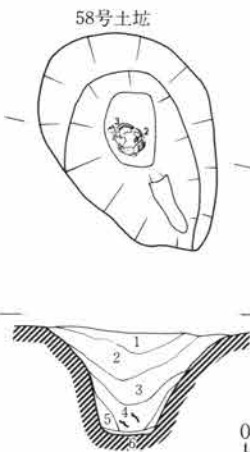
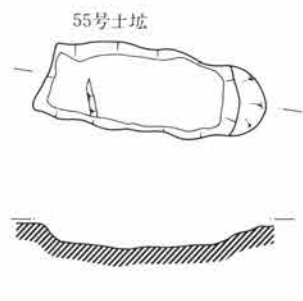
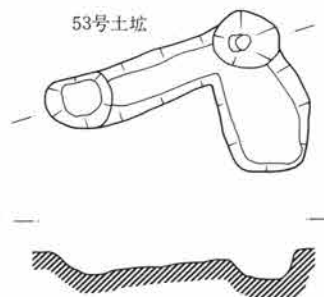
50号土坑土層断面

- 1 土坑覆土 褐色土層、粘性に欠ける。軽石、ローム細粒を含む。
- 2 同 上 褐色土層、炭化物、土器片を多量に含む。
- 3 同 上 褐色土層、炭化物、土器片を部分的に含む。
- 4 同 上 黒褐色土層、粘質、ロームブロックを含む。
- 5 12号住居 黒褐色土層。ロームブロック大粒を含む。



52号土坑土層断面

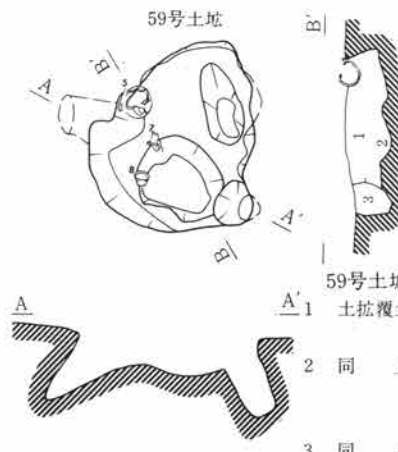
- 1 土坑覆土 黒色土層、砂質、ロームブロックを多量に含む。
- 2 同 上 土質は上に同じロームを斑状に多量に含む。



58号土坑土層断面

- 1 土坑覆土 黒色土層、砂質
- 2 同 上 淡黒色土層、砂質、淡褐色火山灰(F A)の薄いレンズ状の層が見られる。
- 3 同 上 土質は上に同じ。火山灰の混入なし。
- 4 同 上 黒色土層、強粘質
- 5 同 上 土質は上に同じ、ロームブロックを含む。
- 6 同 上 灰色土層、砂質

L 79.7m  
0 1:60 2M



59号土坑土層断面

- A 1 土坑覆土 黒色土層、細軽石ローム粒を含む。
- 2 同 上 黒色土層、ロームブロックを多量に混入。
- 3 同 上 黒色土層、強粘質、狭雑物がない。

53図 50号~59号土坑

III 上滝遺跡

52号土坑 (53図 図版34)

1号ピット群中にあり、東に51号土坑、西に53号土坑が存在し、その中間に位置する。不整形を呈し、規模は上端幅の長径1.1m、短径88cm。下端幅の長径96cm、短径80cm。深さ40cmを測る。北側に小ピットがある。出土遺物はなく構築時期は不明である。

53号土坑 (53図 図版34)

1号ピット群中にあり、東に52号土坑、西に1号溝が存在する。平面形は楕円形を呈し、規模は上端幅の長径1m、短径61cm。下端幅の短径48cm、深さ8cmを測る。本土坑の北側で、1号ピットと重複している。このピットとの新旧関係は本土坑が古い。出土遺物はなく構築時期は不明である。

54号土坑 (53、56図 図版34、62)

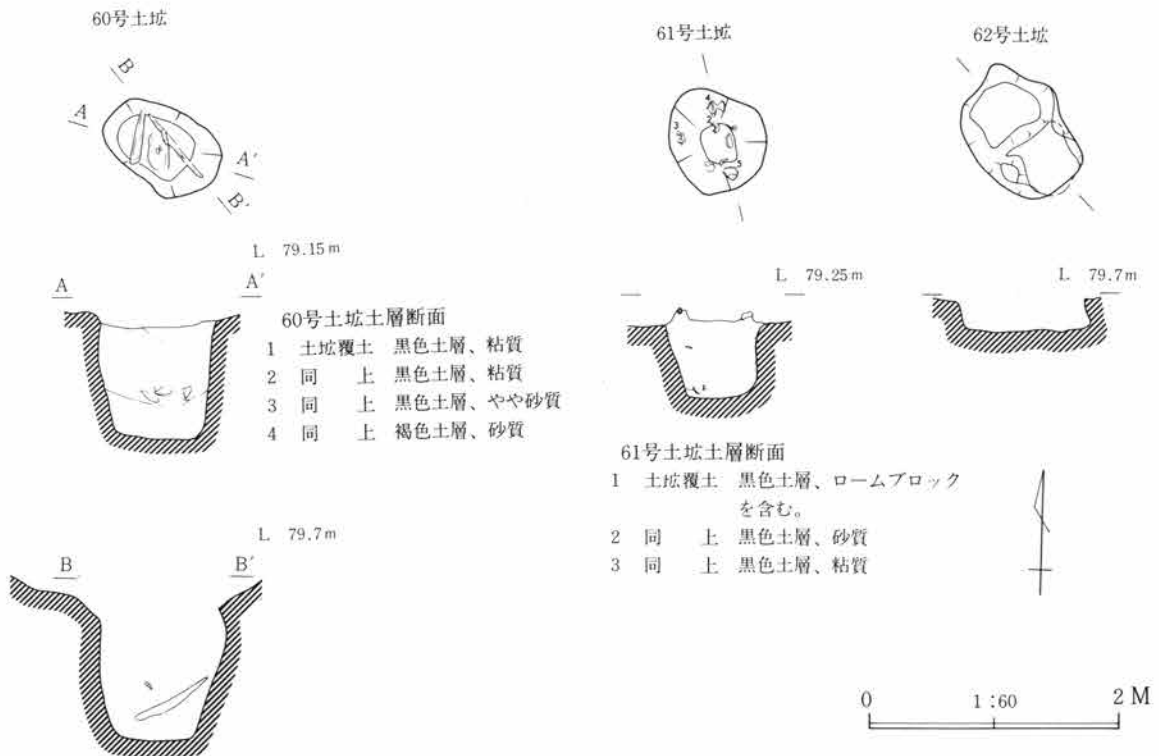
単独に存在する円形の土坑。断面は壁中央が若干ふくらみ袋状を呈す。底面は平坦。規模は上端幅の長径74cm、短径65cm。下端幅の長径65cm、短径50cm。深さ36cmを測る。底面中央部少し南の位置から、わずかに浮いた状態で有段口縁の壺形土器の口縁部が出土。口縁部のみを割りとり、口唇部を下にして置かれていた。

55号土坑 (53図 図版35)

1号掘立柱建築遺構内の長軸を北北東の方向にもつ長方形土坑。断面は長軸方向が浅いU字形、短軸方向の壁は垂直に立ち上がる。規模は上端幅の長径1.56m、短径70cm。下端幅の長径1.36m、短径50cm。深さ15cmを測る。浅間A軽石を覆土中に混入する。遺物なし。

56号土坑 (53図 図版35)

掘立柱建物遺構の西、7号溝の北に位置する。不整形で、底面の南側は一部溝状に深くなっている。規模は上端幅の長径1.26m。下端幅の長径1.12m。深さ12cmを測る。浅間A軽石を覆土中に混入する。遺物は出土していない。



54図 60号～62号土坑



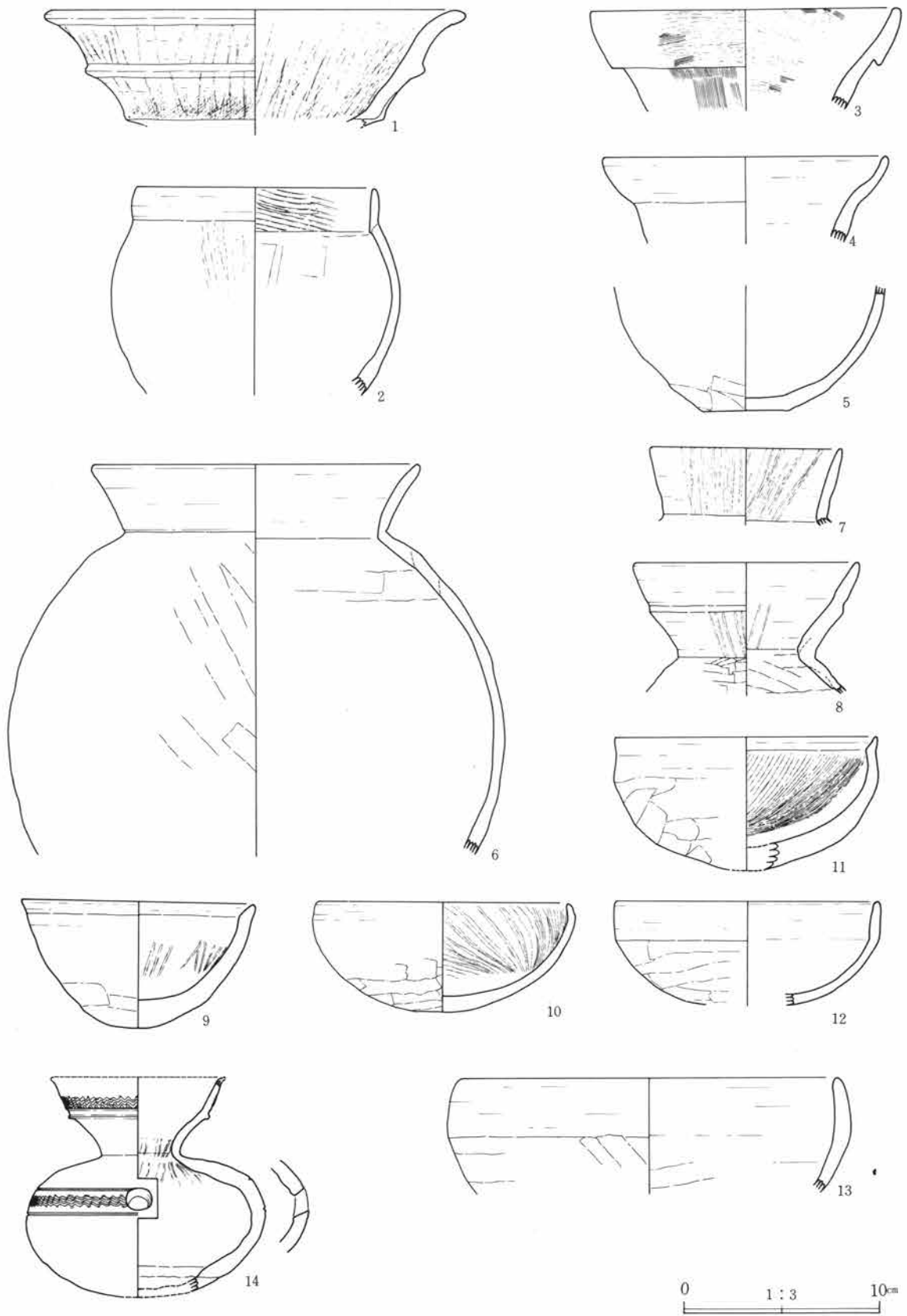
## 57号土坑 (53図 図版35)

16号溝の西にあり、やや東西に長い長方形を呈する。規模は上端幅の長径88cm、短径68cm。下端幅の長径38cm、短径38cm。深さ78cmを測る。遺物は破片であるが、上面より中位かけて、S字状口縁の台付甕を主体として出土している。遺物のあり方と土坑内堆積土等から、古墳時代前期の構築時期が考えられる。

29表 土器観察表 55図 49号土坑(1,3,6,8)、50土坑(2,4,5,7,9,10,11,12,13)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 20.8	細粒の混入少ない。 堅緻	浅黄橙色	口縁部2個所に段を作る。下の段は頸部に対し強く内折する。上の段は突帯を伴い、口縁部はこの段をはさんで大きく外反する。	外面 口縁部突帯の上下ヨコナデ後、縦方向のヘラ研磨。幅1.5cm、間隔0.5~1.5cm 内面 口縁部は横方向ハケメ後ヨコナデ、最後に、縦方向ヘラ研磨。幅1cm、間隔1~2cm	(31%)
2	小形甕形	口 12.0	細砂を含む。 やや軟質	橙 色	頸部わずかにくびれ、口縁部やや内彎気味に直立する。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部縦方向ヘラナデ、幅3~4cm、胴部ナデ 内面 口縁部ハケメ、幅3cm前後で浅い柵目状のハケメ、胴部ナデ	底部欠損 (19.5%)
3	壺形	口 15.9	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部は幅広の粘土帯を外側に重ね、複合口縁をなす。端部は内彎する。	外面 先端部ヨコナデ、口縁部ヨコナデ後、横方向ヘラ研磨。頸部縦方向ハケメ、幅1.5mm 内面 ハケメ後、横方向ヘラ研磨、頸部以下欠損	
4	壺形	口 14.5	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部中位で外方へ強く屈曲し、口縁上部は内彎する。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	頸部以下欠損
5	小形甕形	胴 14.0	細砂を多量に含む。 堅緻	にぶい橙 色	胴部下半部が比較的膨らむ。平底	外面 ヘラケズリ→ 内面 ナデ	胴下半部
6	甕形	口 16.6	粗、中砂の混入目立つ。 堅緻	橙 色	頸部「く」の字状に強く屈曲し、口縁部外反。胴部は球形に近い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラあて痕目立つ。胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ丁寧	胴下部以下欠損 (42%)
7	埴形	口 9.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	頸部は強く屈曲し、口縁部は直状にやや外傾する。	外面 口縁部ヨコナデ後、粗い縦方向ヘラ研磨 内面 口縁部ヨコナデ後、粗い斜行ヘラ研磨、頸部ナデ	頸部以下欠損
8	埴形	口 11.4	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、口縁部は中位で段を作りやや内彎しながら外傾する。口縁部の器壁は厚い。	外面 口縁部上部ヨコナデ、下部ヨコナデ後、縦方向の粗いヘラ研磨。頸部ヘラケズリ↓、肩部ヘラケズリ← 内面 口縁部上部ヨコナデ、下部ヨコナデ後、縦方向ヘラ研磨。頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ↘	肩部以下欠損
9	椀形	口 11.8 高 6.8	細砂を含む。 やや軟質	にぶい橙 色	口縁に内斜部を作る。先端部は厚く丸味を持つ。胴部は膨らまず、丈は長い。丸底、器壁は著しく厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部斜行ヘラ研磨、肩部以下ヘラケズリ後丁寧なナデ 内面 ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、粗いヘラ研磨	(68%)

III 上滝遺跡



55図 49号土坑(1・3・6・8)、50号土坑(2・4・5・7・9~14)出土土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
10	杯形	口高 12.7 5.6	中砂を含む。 堅緻	橙 色	肩部に弱い稜線を作る 口縁部は内彎しながら わずかに内側に傾く。 丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部以上へ ラケズリ→ 内面 胴部以上ヨコナデ後、斜行へ ラ研磨。幅1mm、間隔1~2mm、底部 ナデ	(78%)
11	碗形	口高 13.4 6.7	砂粒の混入少 ない。 軟質	橙 色	肩部が膨み、頸部はゆる くくびれ、内面に明 瞭な稜を作る。口縁部 内側にやや彎曲する内 斜面を持つ。底部が著 しく厚い。丸底	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部 へラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧な ナデ後、斜行へラ研磨。緻密	底部欠損 (22%)
12	杯形	口高 13.3 5.3	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	胴部は丸く膨らみ口縁 部はやや内彎気味に直 立する。胴部との間に 弱い稜を作る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部へラケ ズリ← 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧な ナデ	(25%)
13	鉢形	口 19.3	細砂、中砂を 含む。 堅緻	橙 色	胴部中位最大径が位置 する箇所に稜を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部へラケ ズリ← 内面 口縁部ヨコナデ、胴部へラケ ズリ	
14	罎 (須恵器)	推定器高 11.2 推定口径 8.9 頸部径 4.1 胴部径 12.2	硬さ普通、白 色鉱物微、黒 色鉱物微含	外面、黒 灰色で煙 あり。器 肉色赤褐 色	口縁部下にシャープな 波状文あり。楕目7~ 8本。波状文下方に、 にふい沈線帯あり。胴 部はへラ描による沈線 2条あり。その間に波 状文あり。楕目単位は 7~8本	外面 上半部ロクロによるヨコナ デ、底部、不定方向の削痕 内面 胴部上半頸部にロクロの紋り 目あり、紋り目はロクロ左廻りを示す。 底部に粘土円板接合痕あり。	

58号土坑 (53、56図 図版36、39、62)

3号溝と6号溝が合流するコーナー付近に位置し、遺構の上部と西側の1部を溝により削りとられている。平面形態は確認面で見ると不整ながら長楕円形を呈しているが、底面をみると上部に比べ極端に小さいものとなっている。規模は上端幅の長径1.9m、短径1.3m。下端幅の長径60cm、短径35cm。深さ90cmを測る。遺構の確認面は不明で、土坑内覆土は、自然堆積である。

本土坑からは、S字状口縁台付甕形土器の完形品が1個体出土している。(56図2~4、図版62) 出土状況は、土坑底面より数cm浮いて、口縁部を上、やや横倒しになった状態であった。完形土器を土坑底面に、口縁部を上にして配置したものが、土坑内に流入した土壌によって横倒しになったものであろうと推察できる。構築時期は、古墳時代前期石田川式に伴うものである。

59号土坑 (53、56図 図版36、37、39、62、63)

60号土坑の北に位置する。不整形な楕円形の大型土坑と、西側の小型方形土坑が近接する。大型土坑の規模は上端幅の長径1.62m、短径1.14m。下端幅の長径1.45m、短径83cm。深さ33cmで内に4つのピットがあり、2つは外に向い斜めに掘り下げられている。中央やや南、軽石を含む黒色土中から完形の甕形土器、高杯形土器の脚部、甕形土器が出土。小型方形土坑からは、輪積痕を残す甕形土器の胴部片が出土している。

III 上滝遺跡

60号土坑 (54、57図 図版37、38、39、63)

16号溝内の楕円形の土坑。上部は16号溝により破壊されている。壁は少しふくらみ底面は平坦。規模は上端幅の長径98cm、短径65cm。下端幅の長径62cm、短径45cm。深さ1.3mを測る。底面から少し上がったところから加工材4片と底面に接して古墳時代前期の埴形土器の口縁部が出土している。加工材のうち最大のものは長さ約60cmである。調査中、木材出土の面まで湧水があった。覆土は一時に埋め戻した感がある。

61号土坑 (54、57図 図版38、39、63)

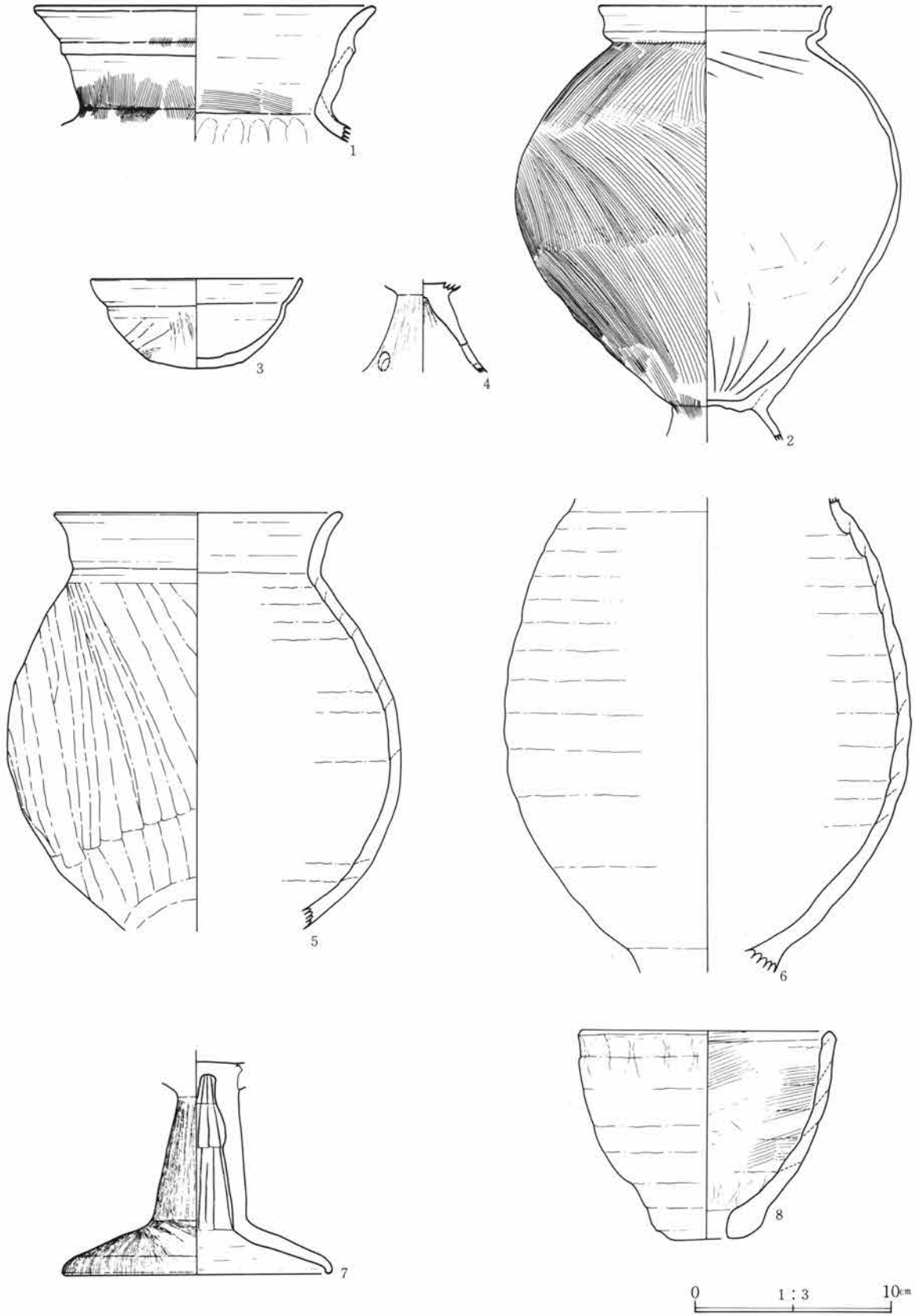
3、16号溝に囲まれた部分に位置する。平面形態は不整形円形を呈し、規模は上端幅の長径87cm、短径78cm。下端幅の長径34cm、短径26cm。深さ60cmを測る。南に58、62号土坑、西に59号土坑が存在する。他の3つの土坑と共に土坑群を形成している。

土坑の構築面は、断面図で示すように黒色土層中である。内部にカヤ状の炭火物を多く含み、遺物を出土している。遺物は、土坑上面から下部にかけて万遍なく出土している。土坑上面からは高杯 (57図5、図版63) 中位から下位にかけて壺の口縁部 (57図2)、甕の口縁部から胴上半部の破片 (57図3)、同底部 (57図4) などで、古墳時代後期前葉に属するものであろう。

30表 土器観察表 56図 54号土坑 (1)、58号土坑 (2~4)、59号土坑 (5~8)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 17.2	粗砂、小礫の混入目立つ。	橙 色	頸部は「く」の字状に屈曲し、やや外傾、口縁部との間に1条の隆起線状の段を作る。口縁部はさらに外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、段の部分ハケメ↓後、ヨコナデ、頸部ハケメ↓、ハケメは浅く弱い。 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一部ハケメ←、頸部一肩部指押え痕がめぐる。	口縁部から頸部まで遺存 (100%)
2	甕形	口 12.3			頸部及び口縁内折部の屈曲が強く、口縁上部は比較的直立気味に外反する。胴部は最大径が上位にあがり、下部が直線的に細まる。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ↙、1単位12本。比較的浅く弱い。中部へ、下部↑とそれぞれハケメが施される。脚台接合部ハケメへ、↘ 内面 口縁部ナデ、頸部一肩部指へラ押え、胴部丁寧なナデ	脚台部を大方欠損 (72%)
3	小形杯形	口 10.7 高 4.6	細砂を含む。堅緻	灰 色	口縁部やや内彎気味に短く広がる。胴部から底部にかけ稜を作る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部へラケズリ←部分的にへラ研磨 内面 粗いヨコナデ、胴部ナデ	(49%)
4	高杯形		砂粒の混入少ない。堅緻	橙 色	脚部に3個の円孔を鋭く穿つ。	外面 脚部縦方向へラ研磨。緻密 内面 脚部上部紋目目痕、下部ヨコナデ、杯部底部は器面が荒れている。	
5	甕形	口 14.5 胴 18.3	中砂を多量に含む。堅緻	橙 色	頸部は比較的強く屈曲し、口縁部はやや外反気味に外傾する。胴部はやや縦長の球形を呈し、中位に最大径が位置する。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、肩部ナデ、胴下部へラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部は輪積痕が明瞭に残る。幅1cm前後、胴部へラナデ↑、へラ幅3cm前後	底部欠損 (100%)

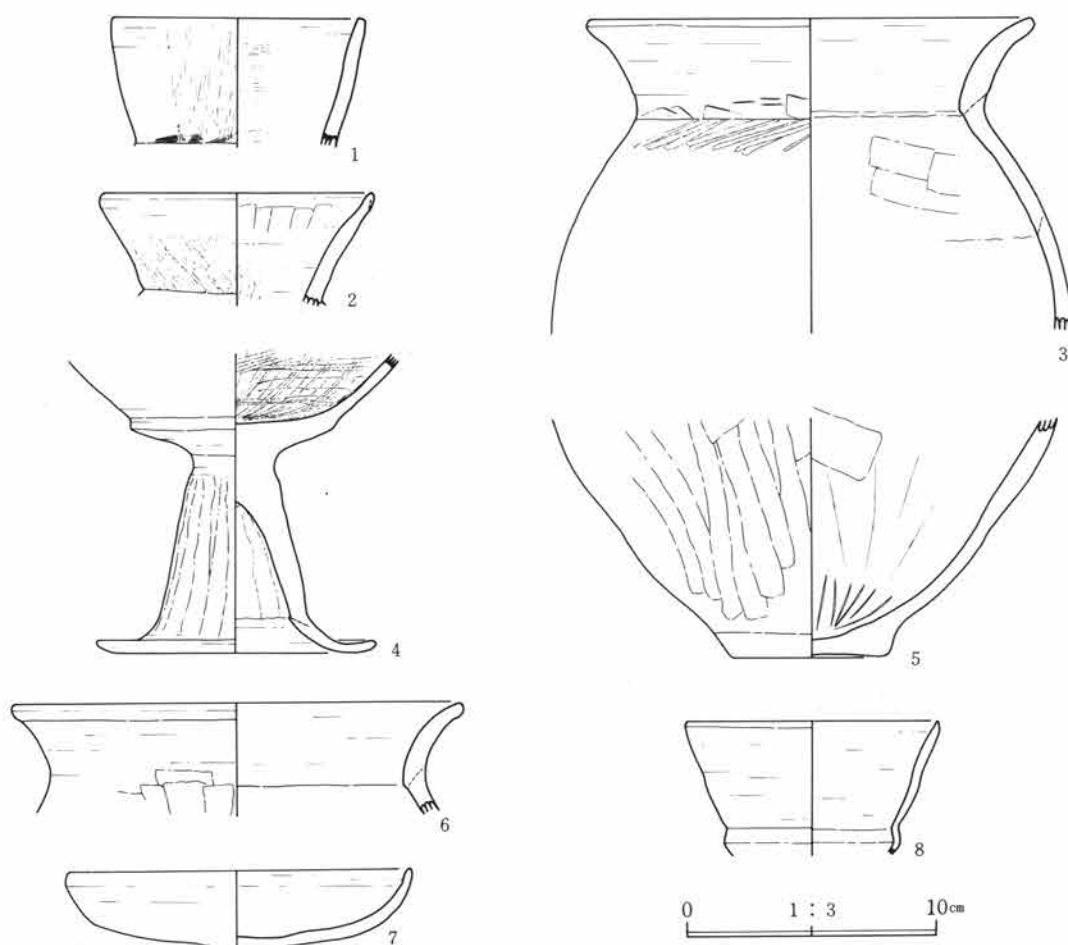
6 検出した遺構・遺物 (3)土坑



56図 54号土坑(1)、58号土坑(2~4)、59号土坑(5~8) 出土土器

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
6	甕形	胴約20.7	粗砂、豆粒大の小礫を多量に含む。 軟質	橙 色	やや縦長の胴部、底部は円盤状の平底をなすと思われる。	外面 凹凸が目立つ、全体にナデへ 内面 粘土合わせ目後、整形が十分に なされていない。下半部へラナデ、 上半部指押え痕のみ。	口縁部、底部欠損
7	高杯形	裾 13.8	細砂の混入少ない。(角閃石の混入目立つ) 堅緻	橙 色	柱状部はわずかに中間が膨み気味のエンタシス状、裾部は内側に明瞭な稜を作って大きく屈曲し、端部は下方に小さく曲げ出されている。	外面 柱状部上端接合部は剥離面が見られる。柱状部は全体に丹念な縦方向へラ研磨、裾部はややうす巻様の放射状へラ研磨 内面 杯部底部ナデ、柱状部へラケズリ←、裾部ナデ	杯部、裾部半分以上を欠損
8	小形甕形	口 13.1 高 10.5	細砂、中砂を多量に含む。 堅緻	明赤褐色	器体は凹凸が目立ち、形も歪みが大きい。輪積痕も十分整形されず器体も厚く成形が粗雑。底部に焼成前に穿たれた円孔がある。	外面 器面全体指押え痕のみ 内面 全体に粗いへラナデへ	口縁部の一部わずかに欠損(100%)



57図 60号土坑(1)、61号土坑(2~5)、36・37B 19不定形土坑(6、7)  
9号住居址内小ピット(8)、出土土器

31表

## 土 器 観 察 表

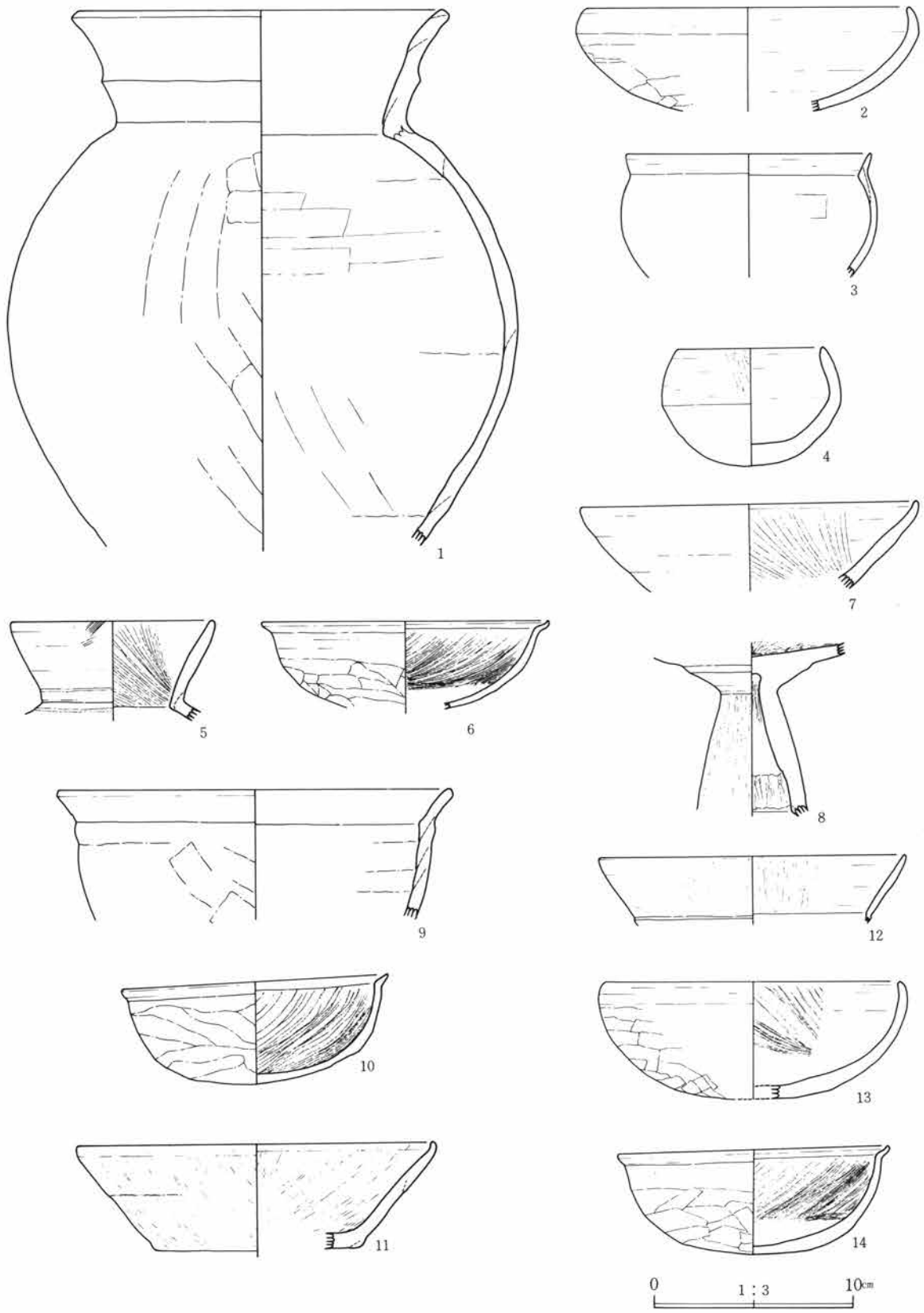
57図 60号土坑(1)、61号土坑(2~5)、36、37B19 不定形土坑(6、7)、  
9号住居址(8)

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	埴形	口 10.1	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部はやや内彎しながらわずかに外傾する。端部が若干角ばる。	外面 口縁端部ヨコナデ後、端部一頭部縦方向ヘラ研磨、緻密、頸部横方向ハケメ 内面 口縁端部ヨコナデ、以下横方向ヘラ研磨	頸部以下欠損
2	埴形	口 10.8	細砂、中砂を含む。 堅緻	明赤褐色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、やや外反する。口縁上部がやや内彎する。口縁部は波うっており歪みが目立つ。器壁は比較的厚い。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部のみ遺存(82%)
3	甕形	口 17.6	細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部は比較的強く屈曲し、口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部斜行ヘラ研磨、肩部以下ヘラケズリ後丁寧なナデ 内面 ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	胴下部以下欠損(28%)
4	高杯形	底 11.2	細砂を含む。	浅黄橙色	杯部はやや内彎気味に外方へ大きく広がる。底部は段を作り肥厚する。脚部は杯部との接合部が細く下方に膨れ裾部わずかにめくれる。	外面 杯部粗雑なナデ、柱状部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ 内面 杯部粗いヘラ研磨、柱状部指頭による縦方向ナデ、裾部ヨコナデ	杯部上半欠損
5	甕形	底 6.0	細砂を多量に含む。	赤褐色	やや上り底気味の平底	外面 胴下部一底面ヘラケズリ↓↑ 内面 胴中部ヘラケズリ、下部ヘラナデ、底部ヘラ押え。	胴下部以下のみ遺存
6	甕形	口 18.0	砂粒を多量に含む。	橙 色	頸部は強く外方へ彎曲し、内側に明瞭な稜線を作る。口縁は大きく外方へ彎曲し、先端部が丸く膨れる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ↑ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	肩部以下欠損
7	杯形	口 13.8 高 3.15	砂粒を多量に含む。(角閃石が目立つ) 堅緻	橙 色	器体が浅い。器壁は厚さが一定せず歪みが目立つ。	外面 口縁部一胴部ヨコナデ、底部ヘラケズリ← 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ナデ	(62.5%)
8	埴形	口 10.0	細砂を多量に含む。 やや軟質	灰白色	頸部は小さく屈曲し、くびれる。口縁部は直状に長く伸び比較的立つ。胴部はわずかに横に膨れるが小さい。器壁は非常に薄い。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部一頸部ヨコナデ、以下ナデ	胴下部以下欠損(25%)

## 62号土坑(54図 図版39)

58号土坑と61号土坑にはさまれた中間に位置する。東西に長軸をもつ長方形を呈し、西側に段をもつ。規模は上端幅の長径1.03m、短径80cm。下端幅の長径1m、短径50cm。深さ28cmを測る。遺構内からは遺物が出土せず構築時期は不明である。

III 上滝遺跡



58図 7号住居址床面下不定形土壇(1~4)、40~41B14・15不定形土壇(5~8)、  
38~40B15~16不定形土壇(9~11)、38B18不定形土壇(12~14)出土土器



32表

## 土器観察表

58図 7号住居址内床面下不定形土坑(1~4)、40~41B14、15不定形土坑(5~8)、38~40  
B15~16不定形土坑(9~11)、38B18不定形土坑(12~14)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 18.3	細砂、中砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は強く屈曲し、口縁部中位に強い稜を持つ段を作る。口縁部先端はやや角ばる。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部ヨコナデ、胴部ナデ	胴下部以下欠損 (38%)
2	杯形	口 約16	細砂を多量に含む。 堅緻	橙 色	口縁部は内側に彎曲し肩部に弱い稜を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、丁寧なナデ	(13%)
3	椀形	口 12.3	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	胴部は丸く膨らみ頸部は強くくびれ、内側に明瞭な稜を作る。口縁部は外傾し、内側はやや丸味を持つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部は器面が荒れ不明 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ	底部欠損 (18%)
4	小形椀形	口 7.5 高 5.9		にぶい橙 色	全体の作りは粗雑。丸底。器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、ナデ、口縁部一胴部粗い縦方向ヘラ研磨。器面が荒れている。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	(42%)
5	埴形	口 10.1	砂粒を含む、 中砂、粗砂も含む。 堅緻	橙 色	口径は小さい。口縁部は上部がわずかに内彎気味、頸部は強く「く」の字状に屈曲する。	外面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、肩部ナデ 内面 口縁部ナデ後、斜行ヘラ研磨、間隔1~2mm、肩部ナデ	肩部以下欠損 (20%)
6	杯形	口 15.0 高 4.7	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部先端が小さくハネ上る。丸底	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨へ、幅1mm、間隔1mm	底部小さく欠損 (58%)
7	高杯形	口 17.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	杯部はほぼ直状に大きく広がり、口縁部は内側に短く彎曲する。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨。間隔2~4mm	底部以下欠損 (20%)
8	高杯形	高 5.8 (柱状部)	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	杯底部は段を作り肥厚する。柱状部は上端接合部が細くエンタシス状に下方に太くなる。裾部は内側に明瞭な稜を作って外へ強く屈曲し広がる。	外面 杯底部ナデ、段部側面ヘラ押え、柱状部上端ヨコナデ、柱状部ナデ後、ヘラ研磨、裾部ヨコナデ 内面 杯底部ナデ後、放射状ヘラ研磨、柱状部上部紋目痕、中部ヨコナデ、下部紋目痕、裾部ヨコナデ	杯部、裾部欠損
9	甕	口 11.8 高 6.8	細砂を含む。 やや軟質	にぶい橙 色	口縁に内斜部を作る。先端部は厚く丸味を持つ。胴部は膨らまず丈が長い。丸底、器面は著しく厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、荒いヘラ研磨、幅1mm、間隔2~10mm	(68%)
10	杯形	口 13.6 高 5.2	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	頸部内側に明瞭な稜線を作り、口縁部は短く内斜部を作り口縁部は小さくハネ上る。丸底。底部のみ若干歪みを持つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ナデ、胴部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ後、斜行ヘラ研磨、幅0.7mm、間隔0.5~4mm	(46%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
11	高杯形	口 17.9	粗砂の混入が見られる。 堅緻	明赤褐色	杯部は底部が平坦で、直線的に外傾し広がる。口縁部先端が短く内側へ折れる。輪積痕が比較的良く残っている。	外面 ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨、幅0.5mm、間隔1～2mm、接合部を特に強くナデる。底部ナデ 内面 ナデ後、外面と同様の斜行ヘラ研磨	脚部欠損 (50%)
12	罎形	口 15.4	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎する。端部は尖り気味である。頸部はほとんどくびれずヘラ状具による沈線がめぐる。	外面 口縁部ヨコナデ後、ヘラ研磨、縦方向、緻密で丁寧 内面 口縁部ヨコナデ後、放射状ヘラ研磨、幅1mm、間隔2～3mm	胴部欠損 (12.5%)
13	杯形	口 14.0 高 5.5	中砂を多量に含む。 堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎する。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、幅1mm、間隔2～5mm	(12.5%)
14	杯形	口 13.5 高 5.1	砂粒の混入少ない。 (角閃石の混入目立つ) 堅緻	橙 色	口縁部内斜面はほぼ平坦。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜方向ヘラ研磨、幅1mm、間隔3～5mm、底部も同様のヘラ研磨⇔	口縁部、底部を部分的に欠損 (46%)

33表

土 塚 計 測 表

(単位 cm)

番号	平面形	長 径 短 径				深さ	時 期	重 複、遺 物、備 考
		上端	下端	上端	下端			
1	円 形	95	72	78	60	22	中 世 ?	東壁部溝状の落ち込みと重複  掘り込みが浅く不明瞭  2個の円形土塚の重複 南壁部が15号土塚と重複 北壁部が18号土塚と重複 西南部が14号土塚と重複 北東部が13号土塚と重複 南壁部が17号土塚と重複  北壁部が16号土塚と重複 北壁部が12号土塚と重複  18号土塚、22号土塚と重複
2	隅丸長方形	180	150	120	110	17	同 上	
3	不整円形	115	110	110	118	23	同 上	
4	円 形	115	100	100	88	20	同 上	
5	円 形	93	107	92	105	26	同 上	
6	円 形						同 上	
7	不整長方形	165	147	116	100	18	同 上	
8	円 形	84	72	73	66	13	同 上	
9	円 形	110	92	100	88	38	同 上	
10	瓢 形	184	166	111	110	10	同 上	
11	円 形	104	116	102	106	36	同 上	
12	円 形	110	114	—	—	29	同 上	
13	円 形	110	100	—	—	32	同 上	
14	円 形	112	120			22	同 上	
15	長 方 形	114	108	68	60	26	同 上	
16	円 形	84				20	同 上	
17	円 形	90				18	同 上	
18	円 形	125	125			27	同 上	
19	円 形	74	65	74	68	32	同 上	
20	円 形	120	130			26	同 上	

## 6 検出した遺構・遺物 (3)土坑

番号	平面形	長 径		短 径		深さ	時 期	重 複、遺 物、備 考
		上端	下端	上端	下端			
21	円 形	83	85			32	中 世	
22	円 形	79	82			12	同 上	20号土坑と北半分が重複
23	不整長方形	92	82	62	48		同 上	
24	円 形	74	64	68	58	20		
25	円 形	67	56			10	同 上	26号土坑と南壁部が重複
26	円 形	58	42	50	42	13	同 上	25号土坑と北壁部が重複
27	長 方 形	100	98	75	62	11	同 上	
28	円 形	90	110	80	102	46	同 上	
29	円 形	45	28	38	25	20	同 上	
30	円 形	48	40	45	28	20	同 上	
31	円 形	70	68	64	60	17	同 上	西南半部は拡張区域外
32	円 形	63	50				同 上	
33	不整円形	80	108	74	85	40	同 上	
34	隅丸長方形	102	98			22	同 上	西南半部は拡張区域外
35	長 方 形	180	170	110	95	22	同 上	
36	円 形	70	64	66	60	16	同 上	
37	円 形	70	50			23	同 上	
38	円 形	121	128	115	120	22	同 上	
39	円 形	112	119	112	119		同 上	
40	円 形						古墳時代前期	S字状口縁甕形土器等出土
41	円 形	205	116	215	118	110	同 上	同 上
42	楕円形	135	60	95	25	93	古墳時代後期前葉	2号溝と重複
43	円 形	58	36	50	36	55	古墳時代前期?	同 上
44	円 形	90	74	70	50	13		45号土坑と重複
45	不整長方形	—	90	70	55	13		44号土坑と重複
46	円 形	95	12	75	12	53		2基の土坑が重複
47	楕円形	98	72	62	30	56		土坑内中央部に小ピットがある
48	円 形	70	27	50	28			1号溝の壁と重複
49		82	45	69	30	38	古墳時代後期前葉	12号住居址、56号土坑と重複
50	隅円方形	500		180	160	30	同 上	
51	楕円形	170	142	110	130	10		
52	円 形	110	96	88	80	40		
53	楕円形	100		61	48	8		北壁部が小ピット、小溝と重複
54	円 形	74	65	65	50	36	古墳時代後期前葉	底部より壺形土器口縁部出土
55	長 方 形	156	136	70	50	15		
56	円 形	126	112			12		南半部は不明確
57	楕円形	88	38	68	38	78	古墳時代前期	下部より古式土師器出土
58	楕円形	190	60	130	35	90	同 上	底部よりS字状口縁甕形土器等出土
59	不整楕円形	162	145	114	83	33	古墳時代後期前葉	甕形、高杯形土器等出土
60	楕円形	98	62	65	45	130	古墳時代前期	16号溝と重複、木材、埴形土器出土
61	不整円形	87	34	78	26	60	古墳時代後期前葉	甕形、高杯形土器出土
62	不整楕円形	103	100	80	50	28		

(4) 溝

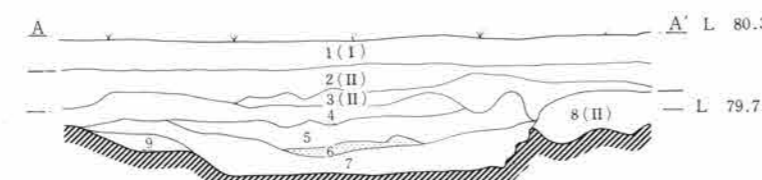
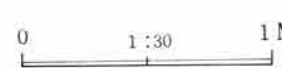
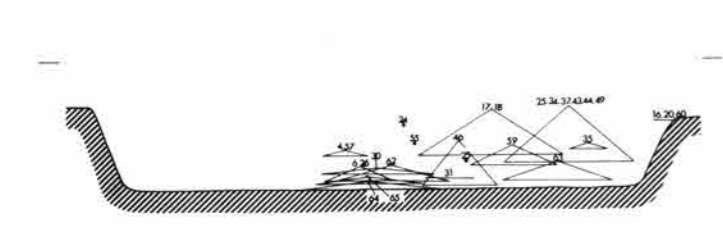
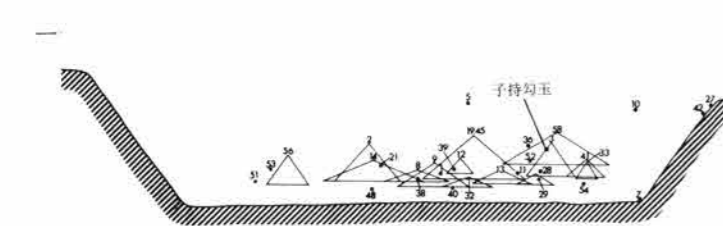
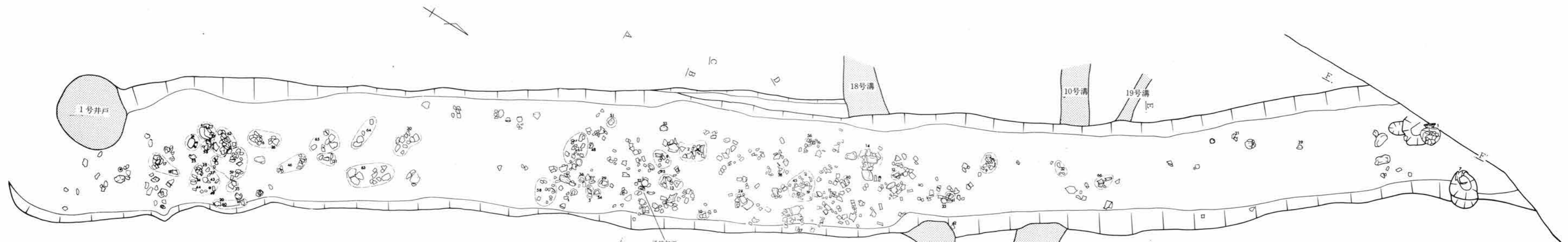
1号溝 (59~66図 図版40、41、64~70)

本溝は第1次、第2次両度の調査にわたって調査された。第1次調査においてはB1区にて、図中に示されているAセクション以南を、第2次においてこの以北が調査された。溝は黒色土層(Ⅳ層)、黄色ローム層(Ⅴ層)が西に傾斜を始める洪積微高地の縁辺部に位置し、ほぼ直状に縁辺に沿い、N-20°-W方向に走る。溝は黒色土層(Ⅳ層)、黄色ローム層(Ⅴ層)を掘り込み、幅2.3m、深さ30cmに及び比較的規模は大きく、形状は整っている。B1区においては、1号井戸付近において緩く立ち上り、B4区においては溝の北端を把握することはできなかった。しかしこの溝の北方への伸びはほぼB2区、B4区間未掘部で限界となることが想定できる。したがって、溝の南北長は約30mである。覆土の状態は下部(溝底より15cm前後)に黄褐色水性堆積層(Ⅲ層)厚さ10~15cmが認められる。下位は、黒褐色土層となり、この層中より図に見るごとく多量の遺物が出土した。遺物の多くは古墳時代後期前葉の土器であるが、その他須恵器、子持勾玉の出土が見られた。これらの遺物は破片、完形の別なく、器種も壺形、甕形、埴形、杯形、高杯形、器種全般にわたっており、そしてこれらの遺物の投棄は明らかにⅢ層の堆積前に行なわれており、しかも、投棄後短期の間に黄褐色泥濘層の堆積があったことが認められる。60図の壺形土器の検出状況は壺の投棄後1/4埋った段階で泥濘層の堆積があったことを示している。他の遺構との関わりについては、10号、18号、19号溝が1号溝上に覆土を切り、交叉して見られる。(佐藤)

34表

土器観察表 60図~66図 1号溝

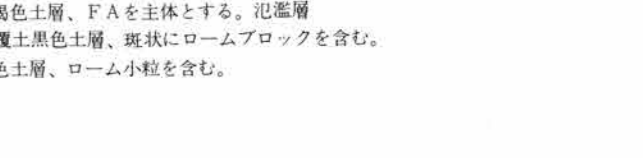
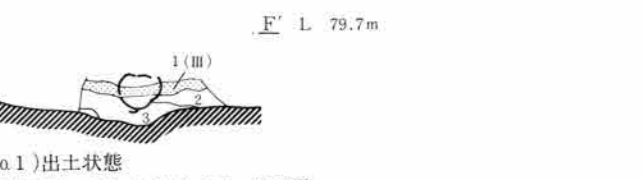
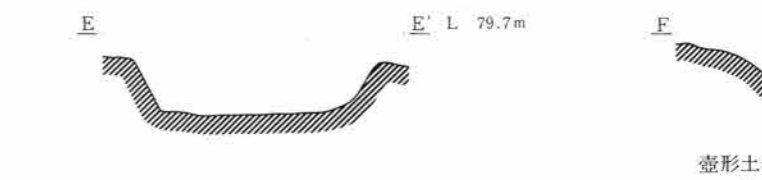
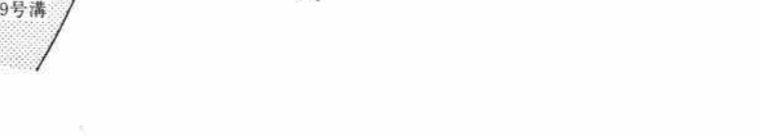
No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 18.9 高 35.7	砂粒を含む。 堅緻	橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、内面に明瞭な稜を作る。口縁部は外側に稜を作って2段に外反する。口縁端部は角ばり内側に浅い凹線を作る。胴部はやや縦長の球形をなす。底部は小さな凹み底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部器面が荒れており観察困難 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	(100%)
2	甕形	口 19.4	粗砂を含む。 堅緻	橙色	頸部は強く屈曲し、内側に鋭い稜を作る。胴部はやや縦長の球形をなす。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ↓ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胴下部以下欠損 (100%)
3	甕形	口 13.1 高 18.8	粗砂を含む。 堅緻	橙色	口縁部はやや外反しながら外傾。先端外寄りに凹線が施される。平底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ、粗くヘラケズリに近い。胴下部ヘラケズリ↓・底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ後、指頭によるナデ、下部ヘラケズリ後、ヘラナデ、底部ヘラケズリ	(46.5%)
4	甕形	口 17.4 高 28.6	細砂、中砂を多量に含む。 堅緻	橙色	口縁端部外側寄りに平坦面がわずかに見られる。底部はわずかに丸味を持つ小さな平底をなす。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部粗いヨコナデ、胴下半部一底部ナデ	口縁部一胴上半部



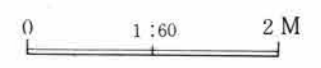
- 1号溝A
- 1 I層 灰褐色土層、やや破質、現耕作土最下部に赤褐色鉄分沈着層が見られる。
  - 2 II層 灰褐色土層、やや砂質
  - 3 II層 暗灰褐色土層、やや砂質
  - 4 1号溝覆土 褐色粘質土層
  - 5 同上 褐色粘質土層、軽石はほとんど含まない。
  - 6 同上 黄褐色土層、榛名山二ツ岳火山灰を主体とする層
  - 7 同上 暗灰色土層、粘質、ロームブロックを多量に含む。
  - 8 II層 暗灰褐色土層、やや粘質、細かい軽石を含む。
  - 9 1号溝覆土 暗褐色土層、粘質



- 1号溝C
- 1 I層 灰褐色土層、やや砂質、表土
  - 2 I層 暗灰褐色土層、やや砂質、浅間A軽石を含む。
  - 3 1号溝覆土 黄褐色土層、榛名山、二ツ岳火山灰(FA)を主体とする層
  - 4 同上 黄褐色土層、榛名山二ツ岳火山灰を主体とする。中心部は純層に近い。
  - 5 同上 黒褐色土層、FAをブロック状に含む。焼土、炭化物をブロック状に含む。
  - 6 同上 黒色土層、砂質、FAを含まない。
  - 7 同上 黒色土層、砂質、ロームブロックを含む。
  - 8 同上 褐色土層、酸化鉄分の凝集が見られる。

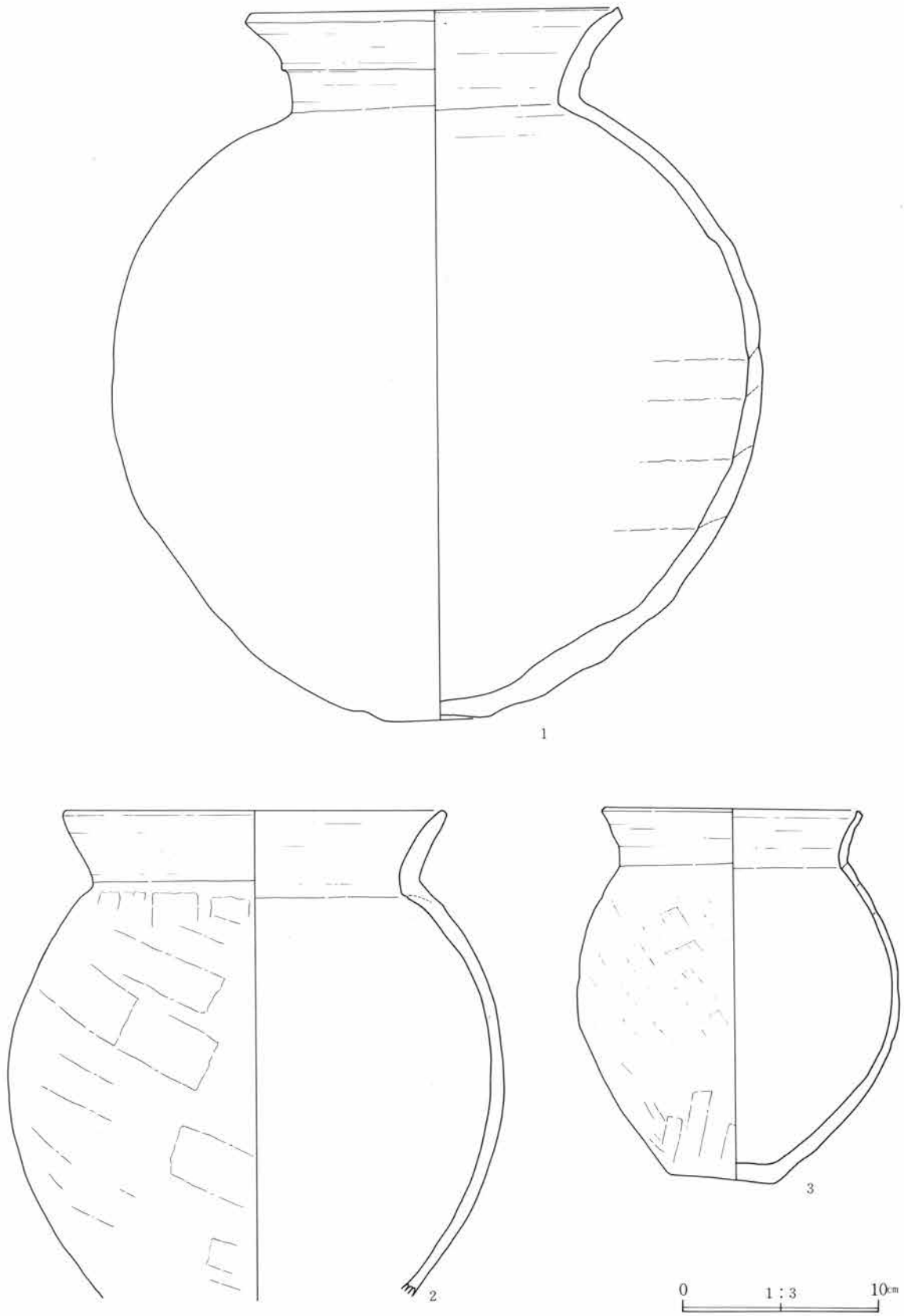


- 壺形土器(No.1)出土状態
- 1 III層 黄褐色土層、FAを主体とする。氾濫層
  - 2 1号溝 覆土黒色土層、斑状にロームブロックを含む。
  - 3 同上 黒色土層、ローム小粒を含む。



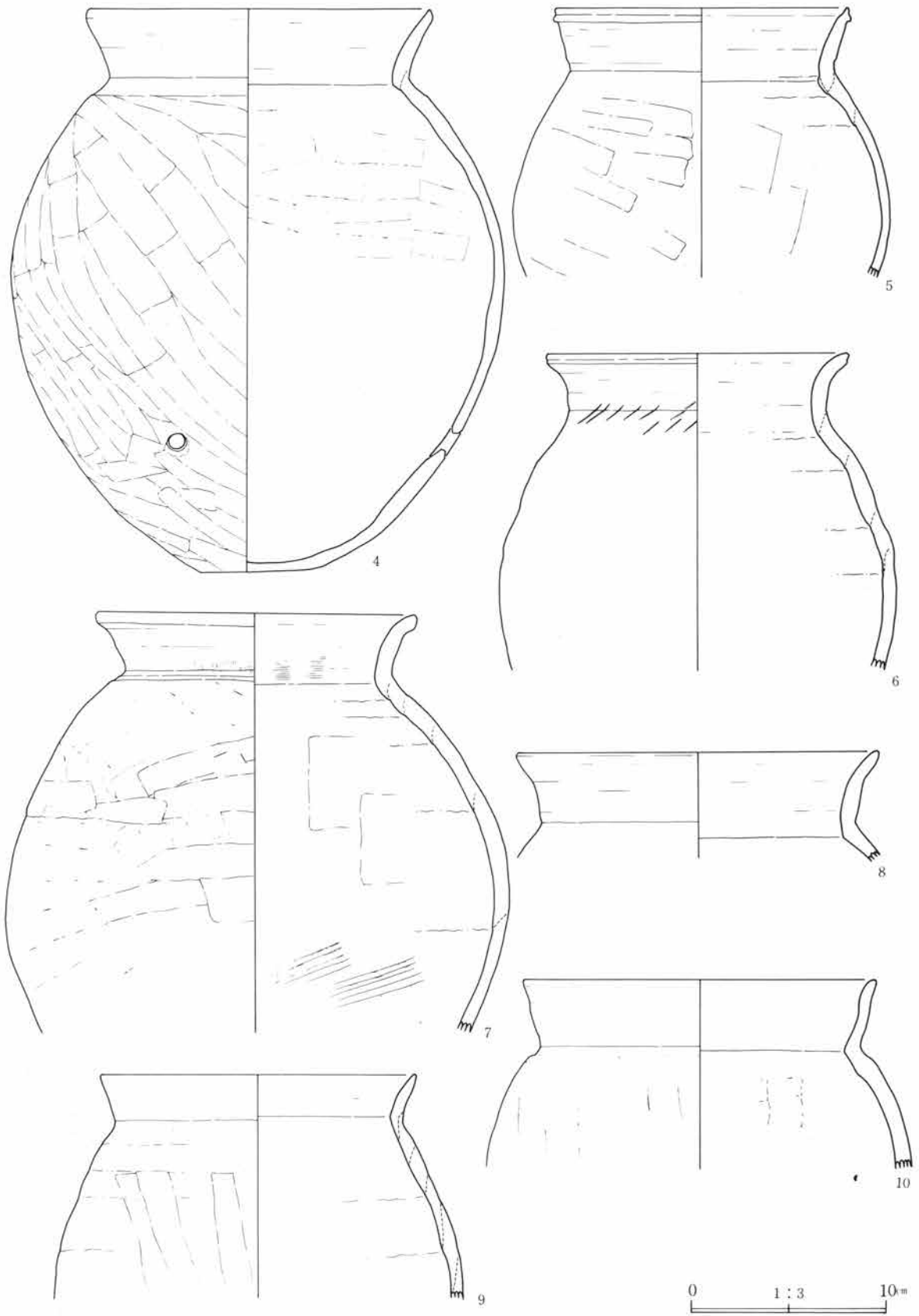
59図 1号溝





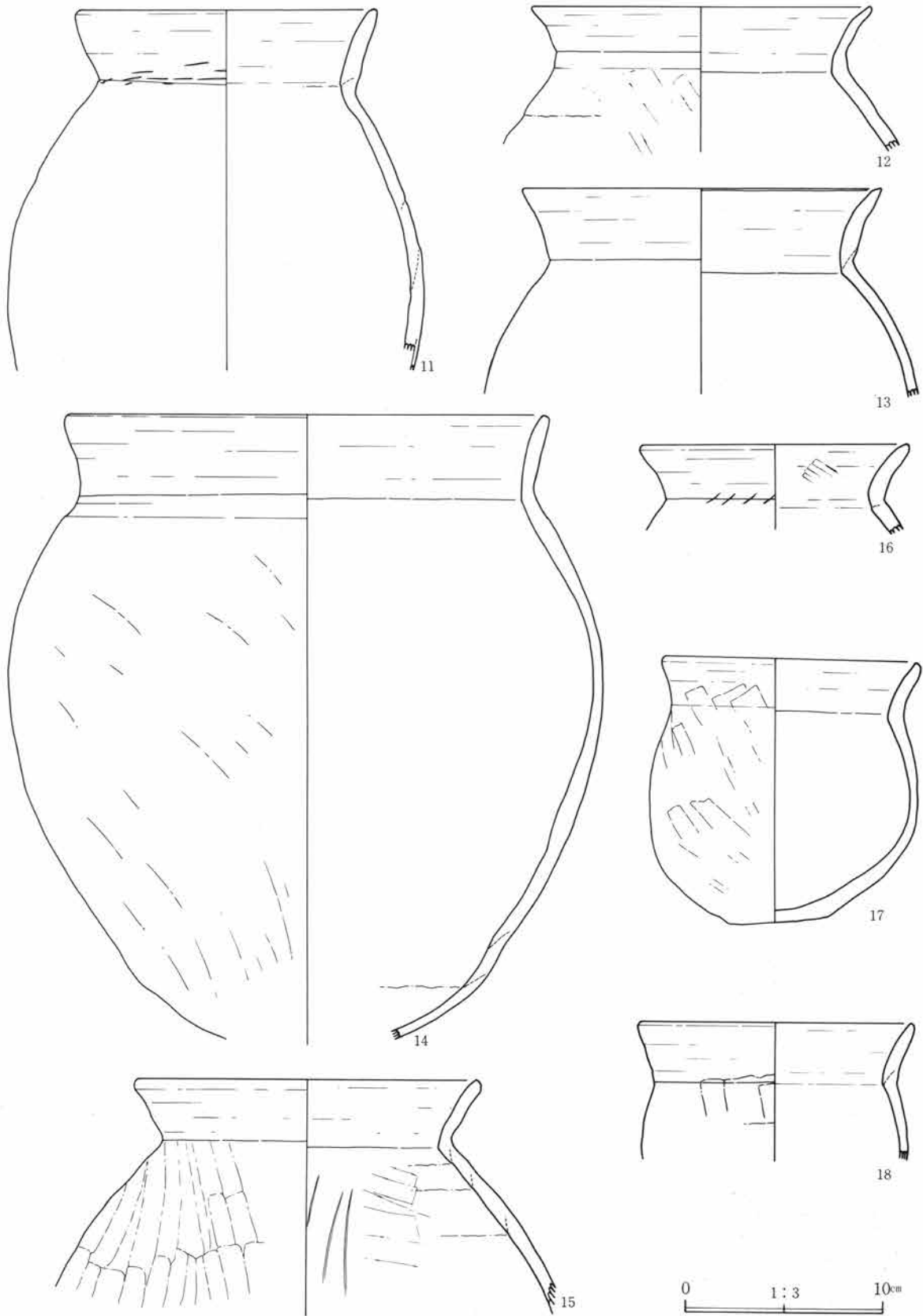
60図 1号溝出土土器(1)

III 上滝遺跡



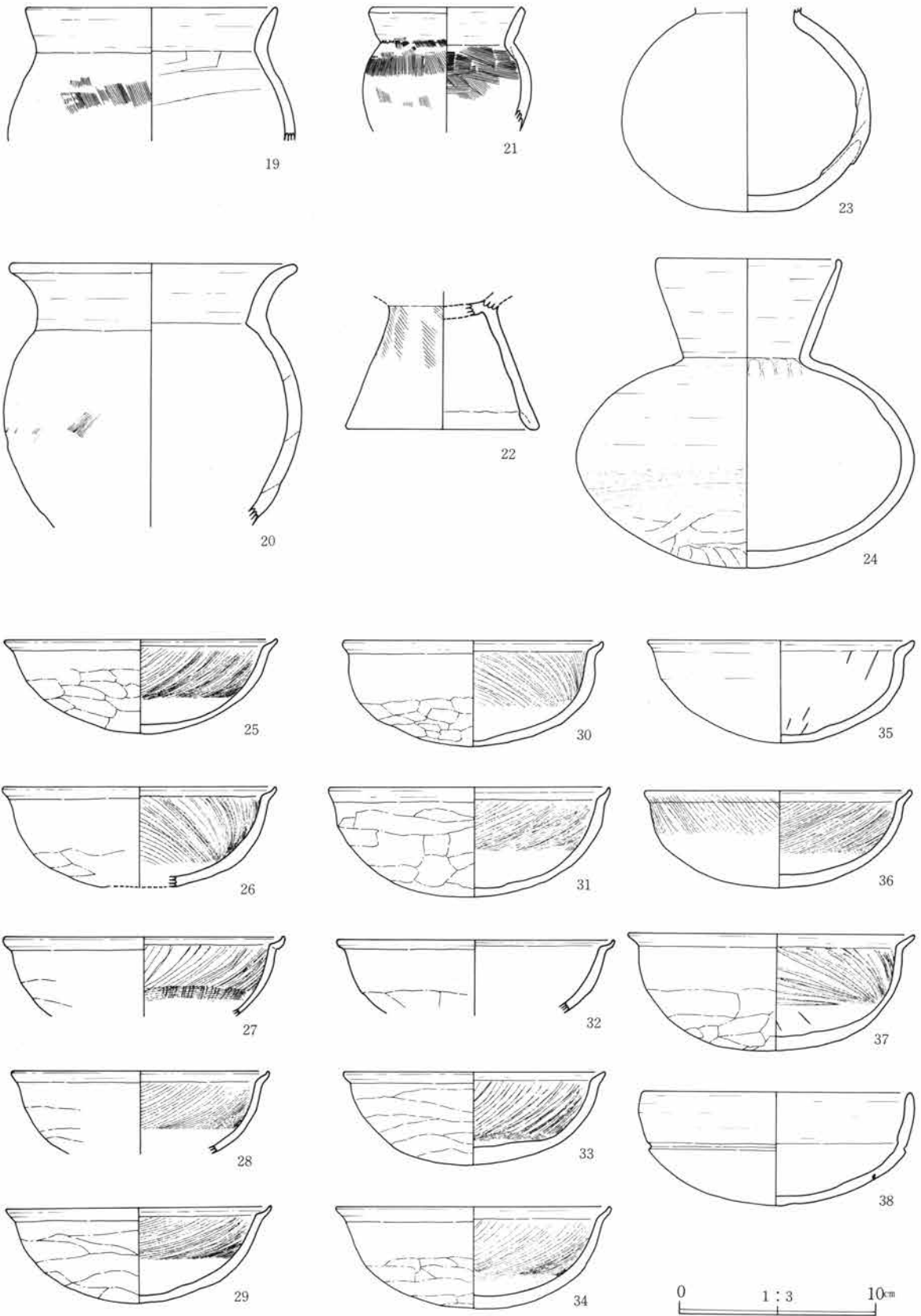
61図 1号溝出土土器(2)





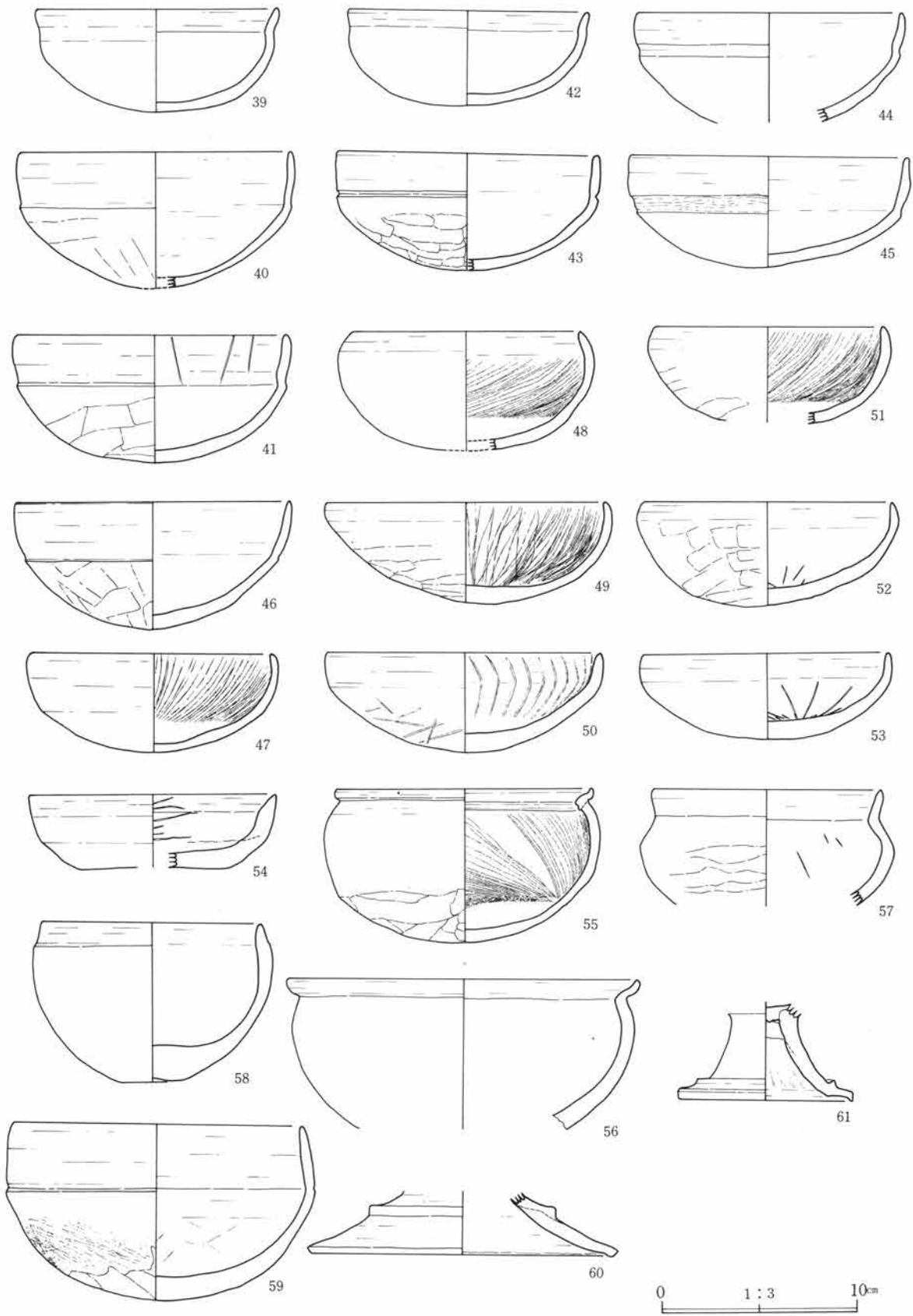
62図 1号溝出土土器(3)

III 上滝遺跡



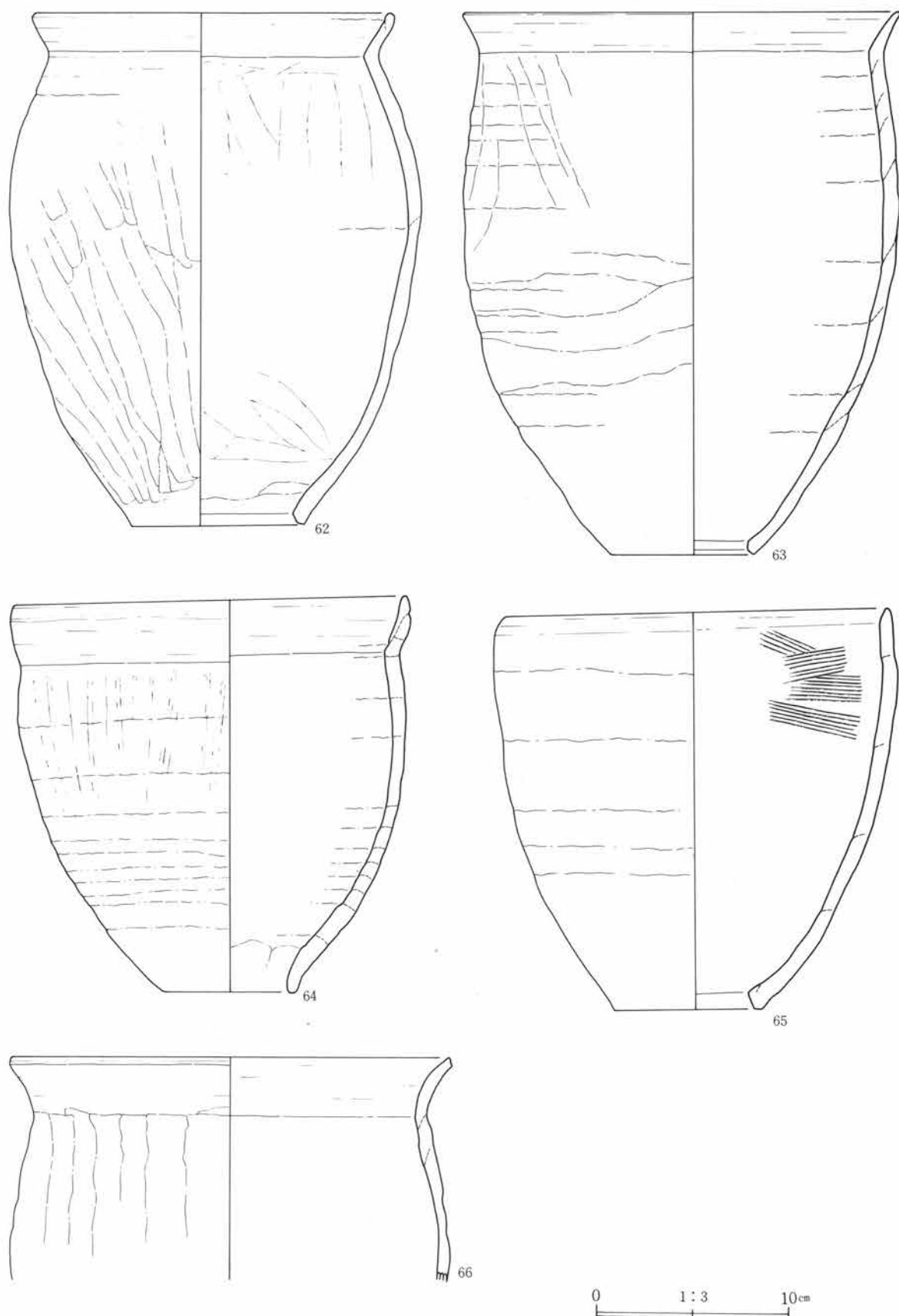
63図 1号溝出土土器(4)

6 検出した遺構・遺物 (4)溝

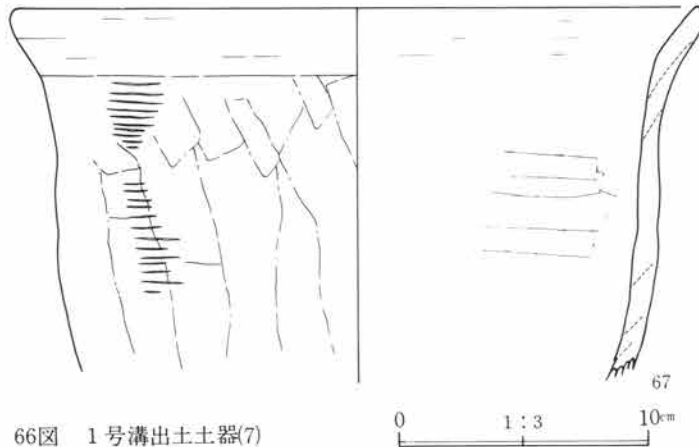


64図 1号溝出土土器(5)

III 上滝遺跡



65図 1号溝出土土器(6)



66図 1号溝出土土器(7)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
5	甕形	口 15.0	粗砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は強く屈曲。口縁部は弱く外傾し端部が尖り、外側にヨコナデにより造り出された細い突帯を持つ。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリへ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胴下部以下欠損 (35%)
6	甕形	口 15.4	粗砂、豆粒大の小礫を含む 堅緻	橙 色	口縁端部ヨコナデの際一条の凹線を施す。頸部から口縁部にかけて比較的緩く外反する。胴部は肩が膨らまずやや縦長になる。接合痕が明瞭に残り、接合の際の緩に段状の起伏が目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一胴部ハケメ後、縦方向ヘラナデ(研磨に近い)頸部斜位ヘラあて痕がめぐる。 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部接合箇所指押え痕がめぐる。胴部ヘラナデ	胴下部以下欠損 (50.5%)
7	甕形	口 16.4	砂粒を多量に含む。粗砂も目立つ。	橙 色	頸部は強く屈曲する。口縁部は先端で短く外方へ曲がる。胴部は最大径が中位に位置するやや縦長の球形をなす	外面 口縁部ヨコナデ、頸部凹線状のヘラナデ後、ハケメ、肩部ヘラケズリへ、下半部ヘラケズリ、ヘラナデ状でもある。 内面 口縁部ヨコナデ、下部にハケメが残って見られる。胴上半部ヘラケズリへ、下半部(接合部以下)ハケメ、胴下部のハケメ整形は上部の成形に先立って施されている。	胴下部以下欠損 (100%)
8	甕形	口 18.2	粗砂を多量に混入、豆粒大の小礫を含む	明赤褐色	頸部は強く屈曲し、内側に明瞭な稜を作る。口縁部は強く外反する	外面 口縁部ヨコナデ、肩部は器面が荒れていて不明瞭 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	肩部以下欠損 (37.5%)
9	甕形	口 16.1	粗砂、あずき大の礫の混入目立つ。 堅緻	明赤褐色	口縁部は短く外傾する。頸部の屈曲は強く、胴部肩部が膨らまずやや縦長になると思われる	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後、ヘラナデ。胴部縦方向ヘラケズリへ 内面 口縁部ヨコナデ。頸部一肩部丁寧な指押え。胴部ヘラナデ	胴下部欠損 (32%)
10	甕形	口 18.1	細砂、中砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部はやや直立気味で歪みが目立つ。肩部は膨らまず、胴部は比較的縦長になると思われる。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、屈曲部は弱い凹線状をなす。胴部縦方向ヘラナデ 内面 口縁部一頸部ヨコナデ、肩部粗いヘラナデへ	胴中部以下欠損 (47%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
11	甕形	口 15.0	砂粒を多量に含む。あずき大の礫を含む	橙 色	頸部は弱く屈曲し、内側に稜線を作らない。口縁部は直状に外傾する。肩部は膨らまず、胴部は縦長になる。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後、ヘラナデ。頸部に横位のヘラ押し痕がめぐる。 内面 口縁部一頸部ヨコナデ。肩部ヘラナデ、ヘラあて痕が目立つ。胴下部ヘラナデ	胴下部以下欠損 (100%)
12	甕形	口 17.1	粗砂を含む。堅緻	橙 色	頸部は強く彎曲し、口縁部は大きく外傾する。胴部は横に膨れる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部横方向ヘラナデ	肩部以下欠損 (28%)
13	甕形	口 18.2	豆粒大の小礫を多量に含む	明赤褐色	頸部が強く屈曲し、口縁部はやや外反気味に外傾し、先端が尖る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、器面が荒れている。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胴下部欠損 (42%)
14	甕形	口 24.0	細砂を多量に含む。あずき大の小礫を含む。	橙 色	頸部は緩くくびれ、口縁部はわずかに外傾する。胴部は最大径が上位に位置する。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、ヘラナデ	底部欠損 (68%)
15	甕形	口 13.0	細砂、中砂を多量に含む。	橙 色	器体がひどく歪んでいる。正確な形が把握しにくい。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部粗いヘラナデ	胴下部欠損 (25%)
16	小形甕形	口 13.5	細砂を含む。堅緻	明赤褐色	頸部は「く」の字状に強く屈曲する。内側の稜は弱い。口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一胴部ヘラケズリ、頸部ヘラあて痕がめぐる。 内面 口縁部ヨコナデ、部分的にハケメ状ナデ痕が見られる。胴部ヘラナデ	(49%)
17	小形甕形	口 12.8	細砂を多量に混入。粗砂の混入も目立つ。堅緻	にぶい橙 色	頸部は緩く彎曲する。底部は丸味を持った平底。全体に器体が歪んでいる。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。底部指頭によるナデ	(44%)
18	小形甕形	口 13.7	粗砂、中砂を多量に含む。堅緻		頸部は緩く彎曲し、肩部は横に膨らまない。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	
19	小形甕形	口 12.6	砂粒の混入少ない。	橙 色	頸部の彎曲比較的弱い	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ヨコナデ	胴下部以下欠損 (33%)
20	小形甕形	口 14.7	砂粒の混入少ない。堅緻	橙 色	頸部から口縁部にかけて強く外反し胴部は球形を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ、ハケメ調整の後、ヘラ研磨 内面 口縁部ヨコナデ、胴部横ハケメ	
21	小形甕形	口 7.7	砂粒の混入は少ない。堅緻	浅黄橙色	頸部は強く屈曲し、口縁部は直状に外傾し、端部は角ばる。胴部は球形を呈し、中位に最大径がある。脚台が付くと思われる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部横方向のハケメ、口縁部内側に赤色塗彩が見られる。	胴下部以下欠損

## 6 検出した遺構・遺物 (4)溝

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
22	甕形	底 9.8	細砂を多量に含む。 堅緻	浅黄橙色	外面 脚部上部ハケメ整形の後接合部に粘土の付着が見られる。 内面 指押さえ、粗いナデ		脚台部のみ遺存
23	埴形	頸 5.4 胴 12.7	粗砂の混を含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲する。胴部は最大径が下部に位置する扁球形。胴下部における接合痕が明瞭。平底に近い丸底	外面 胴上部は器面が荒れている。胴下部粗いヘラナデに近い研磨痕がかるうじて観察できる。 内面 頸部指押さえ、胴上部指ナデ、底部一胴下部ヘラナデ、胴上部の成形に先行して施されている。	口縁部欠損
24	埴形	口 9.5 器 15.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲する。口縁部は上部で短く内彎し、器壁が薄くなる。胴部は扁球形。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、ハケメ状の弱い細線が見られる。胴上半部丁寧な研磨、胴下半部横方向ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、外面に比べ粗い。頸部一肩部指押さえ。	口縁端部が部分的に欠損 (100%)
25	杯形	口 14.0 高 4.8	中砂を含む。 軟質	橙 色	口縁部先端が小さくハネ上る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ、胴下半部以下ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、底部ナデ	(90%)
26	杯形	口 13.8 高 5.0	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部先端は小さくハネ上る。底部ヘラケズリにより胴下半部に弱い稜が見られる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨	底部大方欠損 (44%)
27	杯形	口 14.2	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部先端は小さくハネ上る。胴下半部の器壁目立って薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴下半部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜方向ヘラ研磨、幅1mm、間隔2~4mm	底部欠損 (46%)
28	杯形	口 13.1	細砂を含む。 やや軟質。	橙 色	口縁部先端が小さくハネ上る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部粗いナデ、胴下半部以下ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、器面が荒れ詳細に観察できない。	底部欠損 (33%)
29	杯形	口 13.6 高 4.8	粗砂の混入目立つ。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面は短く、内彎が目立ち、先端が尖る。丸底	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、底部ナデ	(82%)
30	杯形	口 13.1 高 5.4	中砂を含む。 豆粒大の軽石の混入あり。 (FP) 堅緻	橙 色	口縁部内斜面はやや内彎し、端部のハネ上り目立たない。底部内側に凹みが見られる。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ、下半部以下ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、幅1.5mm、間隔1~2mm、底部ナデ	(78%)
31	杯形	口 14.0 高 5.7	細砂、中砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面内彎し、比較的急傾斜。丸底	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ後、斜行ヘラ研磨	(51%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
32	杯形	口 14.0 高 4.7	細砂を含む。 やや軟質	橙 色	口縁内斜面は短く、先端部は小さくハネ上る。成形は丁寧である。	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ナデ、 底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	底部欠損 (22%)
33	杯形	口 13.4 高 4.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面は比較的短く、やや膨らみを持ち胴部との境の稜は弱い。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、頸部屈曲部 指頭痕がめぐる。胴部一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、 斜行ヘラ研磨、幅0.5mm、間隔2~5 mm、底部付近弱く不規則な研磨痕が見られる。底部中央はナデ	(86%)
34	杯形	口 14.0 高 4.8	細砂を含む。 (角閃石の混入目立つ)	橙 色	口縁部内斜面はわずかに内彎し比較的傾斜が急。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ナデ、 胴下半以下ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、 斜行ヘラ研磨、幅1mm、間隔2~3mm	(67%)
35	杯形	口 13.6 高 5.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面はわずかに内彎する。胴部から屈曲部にかけての稜は弱い。底部内面わずかに凹む。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ、ヘラあて痕が目立つ。	(100%)
36	杯形	口 13.6 高 4.9	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面は短く、内彎する。胴部との境に明瞭な稜線を作る。丸底	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ後、 斜行ヘラ研磨、間隔1~2.5mm。内面の 研磨より粗い。胴下部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧な ナデ後、斜行ヘラ研磨、間隔は細かい。 底部ナデ	(44%)
37	杯形	口 14.0 高 6.2	砂粒の混入少ない。 堅緻	明赤褐色	口縁部は比較的長く、内斜面はわずかに丸味を持つ。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ナデ、 胴部以下ヘラケズリ←、底部不定方向 ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、 斜行ヘラ研磨、幅1.5mm、間隔4mm、 底部ヘラナデ	(42%)
38	杯形	口 13.7 高 5.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	頸部には段を作らず凹線が施される。口縁部はやや内彎気味に直立丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、 底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ	(67%)
39	杯形	口 12.5 高 5.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部がくびれ、内側に稜線を作る。口縁部は比較的長く外傾する。丸底	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ胴下 部一底部ヘラケズリ後、ヘラ研磨 内面 口縁部一胴上部ヨコナデ。胴 下部一底部ヘラケズリ後、ナデ	(79%)
40	杯形	口 14.0 高 7.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎し、直立、頸部はわずかにくびれ稜を作る。成形は丁寧	外面 口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部一胴上部ヨコナデ。胴 下部一底部ナデ	(25%)
41	杯形	口 14.0 高 6.5	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	口縁部はやや内彎し、直立、頸部はわずかに段を作ってくびれる。胴部はほとんど横に張らない。丸底	外面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、ヘラあて痕が目立つ。胴部一底部ナデ	(50%)



## 6 検出した遺構・遺物 (4)溝

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
42	杯形	口 12.4 高 4.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	頸部がわずかにくびれ 口縁部は短く外傾し、 外折部内面の稜は不明 瞭。丸底	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部 一底部ヘラケズリ後、ナデ 内面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部 一底部ナデ	(64%)
43	杯形	口 13.5 高 6.0	細砂を多量に 含む。 堅緻	橙 色	頸部は凹線を施し段を 作らない。口縁部はや や内彎気味に直立する	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ。胴 下部一底部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ	(45%)
44	杯形	口 13.5	砂粒の混入少 ない。 焼成は比較的 柔らかい。	橙 色	口縁部はわずかに内彎 し、頸部は段に太い凹 線を施す。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	底部欠損 (25%)
45	杯形	口 12.4 高 4.7	砂粒の混入少 ない。 堅緻	橙 色	頸部をハケメ状のヘラ で一周させ、口縁端部 もわずかに段を作って 薄くしている。	外面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケ ズリ後、ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ナデ	(80%)
46	杯形	口 14.0	砂粒の混入少 ない。 堅緻	橙 色	器体は全体に浅い半球 形を呈し、頸部に1条 の凹線を施す。凹線は 弱い段状をなす。	外面 口縁部ヨコナデ、胴上部ナデ、 底部ヘラケズリ 内面 口縁部一胴上部ヨコナデ、底 部、ナデ	(45%)
47	杯形	口 12.2 高 4.8	細砂、中砂を 含む。 堅緻	橙 色	口縁部は強く内彎し、 器体は比較的浅い。丸 底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ナデ後、口縁部一胴部斜行ヘラ研磨	(45%)
48	杯形	口 11.8 高 6.1	細砂を含む。 (角閃石の混 入が見られる) 堅緻	橙 色	胴部は丸く膨らみ、口 縁部は内側へ緩く彎曲 する。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラケズリ後、ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、 斜行ヘラ研磨、胴部ナデは丁寧で滑ら か。底部ナデ	(44%)
49	杯形	口 14.3 高 5.1	細砂を多量に 含む。 (角閃石の混 入目立つ) 堅緻	橙 色	口縁部は内側へゆるく 彎曲する。丸底。器壁 は厚い。器形の歪みが 目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ヘ ラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナ デ、口縁部一底部粗い方射状ヘラ研磨、 幅1mm、間隔5~2mm	(29%)
50	杯形	口 14.2 高 5.1	粗砂、豆粒大 の礫の混入目 立つ。 堅緻	橙 色	口縁部が比較的長くや や外傾気味ではあるが ほぼ直立する。胴部の 膨らみは弱い。丸底。 全体に器壁が厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラケズリ後、粗い横方向の研磨 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラナデ後、口縁部一底部縦方向ヘラ 研磨、間隔は粗い。	(56%)
51	杯形	口 11.8 高 4.9	砂粒の混入少 ない。 堅緻	明赤褐色	胴部は丸く膨らみ、肩 部に弱い稜を作り、口 縁部わずかに内傾す る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、 口縁部一胴部斜行ヘラ研磨、底部ナデ	底部欠損 (54%)
52	杯形	口 12.8 高 5.3	粗砂を含む。 堅緻	橙 色	胴部は丸く膨らみ、肩 部に弱い稜線を作って 口縁部は内傾する。 丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部 ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧な ナデ、ナデに先行するヘラあて痕が底 部付近に見られる。	(100%)

III 上滝遺跡

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
53	杯形	口 13.0 高 4.4	粗砂、あずき大の礫の混入目立つ。 堅緻	明赤褐色	胴部の膨らみは弱く、口縁部は胴部との境で強く曲がり直立する。底部は丸底で器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部研磨、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ヘラナデ、底部を中心にヘラあて痕が放射状に見られる。	(86%)
54	杯形	口 12.7 高 3.7	粗砂の混入目立つ。豆粒大の礫を含む。 堅緻	明赤褐色	口縁部は外傾気味に直立し、先端は尖る。平底。器壁は厚い、成形は粗雑	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ハケメ後、ナデ、横位ヘラあて痕が見られる。	(46%)
55	碗形	口 13.2 高 17.8	細砂を含む。 堅緻	橙 色	胴部は丸く膨らみ頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は先端が小さくハネ上る。丸底	外面 口縁部、肩部ヨコナデ、胴下半部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨、幅1.5mm、間隔2mm。底部ナデ	(90%)
56	碗形	口 18.0	砂粒の混入ほとんど見られない。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面は小さく内彎する。胴部との境に明瞭な稜を作る。頸部は鋭く屈曲し、胴部は横に膨らむ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ	胴下部接合部より下が剝離し、欠損 (49%)
57	碗形	口 11.9 胴 13.0	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は強く屈曲し、内側に強い稜線を作る。口縁部は直状に長い。胴部は上位が強く張り最大径をなす。	外面 口縁部一肩部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ	胴下部以下欠損 (20%)
58	碗形	口 11.3 高 7.9	細砂を多量に含む。 軟質	灰白色	口縁部はヨコナデが施される際、わずかに薄くされ胴部との境に小さな稜を作る。口縁部は短くやや外反する。底部は器壁が厚く凹み底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部、指押えによる凹み底 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ	(56%)
59	碗形	口 14.8 高 9.0	細粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	頸部は段を作らず凹線が施され、口縁部はやや内傾気味に直立する。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ、胴下半部ヘラ磨き、底部ヘラケズリ 内面 口縁部、胴上半部ヨコナデ、胴下半部一底部ヘラナデ	(83%)
60	高杯形	底 16.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	裾部は大きく広がり、中位に突帯状の段をめぐらす。下端部は角ばり、内側に余剰粘土がわずかに付着する。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	裾部破片
61	脚部片 (須恵器)	脚端径 9.0	焼締りあり。硬質。外面に自然釉および白色鉱物をわずかに含むが胎土は精選されている。	外面、灰色、器肉色、にぶい赤褐色	脚部外面下半に隆帯あり。脚端部内面に浅いかえりあり。端部は尖る。	外面 ロクロに伴うヨコナデ 内面 ロクロに伴うヨコナデ、脚部接合面あり、脚部紐作り痕あり。下半部に絞り痕あり。	

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
62	甌形	口 18.6 高 26.5	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	頸部は強く屈曲し、口縁部は直状に短く外傾する。胴部は中位よりやや上が膨らむ縦長をなす。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、肩部ヘラナデ、胴部ヘラケズリ、 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ヘラケズリ→	(100%)
63	甌形	口 21.9 高 18.8	砂粒を含む。 堅緻	橙 色	頸部は緩く外方へ彎曲し、口縁部は短く外反する。器壁は端部に漸次薄くなる。胴部の接合痕が著しく目立つ。底部はいわゆる底抜け	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→、下部ヘラケズリ後、ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	(25%)
64	甌形	口 20.7 高 20.5	細砂を含む。 堅緻	浅黄褐色	頸部はわずかにくびれ口縁部は中位で強く内彎し、上部が直立する。端部は尖り気味。底部はいわゆる底抜けで、器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、ハケメ状の弱い細線が目立つ。胴上半部ナデ後、縦方向のヘラナデ、胴下半部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ状ヘラナデ、底部円孔ヘラナデ	口縁部部分的に欠損。(42%)
65	甌形	口 20.0 高 20.5	細砂を多量に含む。 (角閃石の混入目立つ) やや軟質	浅黄褐色	器体はやや縦長の砲弾状となす。口縁部は尖り気味。底部はいわゆる底抜けで器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ状ヘラナデ、胴下部接合痕が目立つ。	口縁部一部欠損(90%)
66	甌形	口 32.0	粗砂を含む。 (角閃石の混入目立つ)	橙 色	頸部が緩く彎曲し、口縁部はわずかに外反しながら大きく外傾する。端部に凹線が施される。胴部は横に膨れず縦長になる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ↑ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部横方向ヘラケズリ	胴下部以下欠損(60%)
67	甌形	口 28.0	中砂を多量に含む。	にぶい橙 色	頸部は緩くくびれ胴部はわずかに膨れるが、著しく縦に長い、器壁は比較的厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ↑ 内面 口縁部一胴上部ヨコナデ、胴中部以下粗いナデ	

## 2号溝(環濠)(67、70図 図版42、71)

B3区を中心に、ローム層の堆積した微高地が北から南に向かって台状に張り出している(先端近くの幅は約17m)。ローム層は、東・西・南の三方で次第に下り、この部分では上に黒色土が堆積している。この黒色土も10m前後いったところで下りはじめ、この上に黄褐色層(Ⅲ層)が堆積している。Ⅲ層上面と、高所の黒色土層上面とは同一レベルとなり、平坦化している。

環濠は、この舌状の微高地先端にあり、その中心部を微高地中央に位置させ、東・西・南の濠は、黒色土の堆積した区域におよんでいる。

主軸の方向はほぼ南北であり、(N-7°-E)その規模は、濠の外側で南北27.5m、東西29.6m、内法で南北25.7m、東西27.1mである。濠は北・東・西の三方は連続しているが、南辺のほぼ中央において途切れている。その幅は1.3mあり、ここが入口であったものと考えられる。

濠の幅は一様ではないが、東辺の幅が最も広く上幅1.3~2m、下幅0.6~0.8mで舟底形をしている。他の部分では上部1.2m前後のところが多く(狭いところで0.8m)、下幅も0.6m前後である。深さは確認面より

### Ⅲ 上滝遺跡

50~70cm。

濠の南東隅では、東辺の濠の延長がそのまま外側（南）に延び、3本の溝がT字形に交差する形をとっている。南へ延びた溝は、上幅1.1m、下幅0.3mで、東辺のものに比較して細くなっている。南は次第に低地になるところであり、環濠内の排水の機能をもたせたものと考えられる。濠内の覆土を見ても底部に灰褐色粘質土が堆積し、滞水のあった様子がうかがわれる。

現在確認できる溝の掘り込み面は、北辺はローム層、他は黒色土層からであるが、東西隅の近くでは、前述のⅢ層の上から掘り込んでおり、環濠内にある住居跡群とは明らかな時代差を示している。

濠内からの遺物の出土数はわずかであるが、中世のものと考えられる土器片（70図1 図版71）の出土があり、構築は中世の頃になるものであろう。

なお、環濠内における建築遺構については柱列も検出できず、どのような遺構があったか明らかでない。

他の遺構との関わりについては、環濠東側の濠の外側に1.5~3mの間隔を持って4号溝が沿う。この溝は環濠北東角の外側で東西方向に走る5号溝とT字状に接続する。5号溝は環濠の北側の濠の外側に位置し環濠の北東コーナー部で5m、北西コーナー部で9m隔っており、両者の方向には若干のズレが見られる。（松本）

#### 3号溝（67図 図版43）

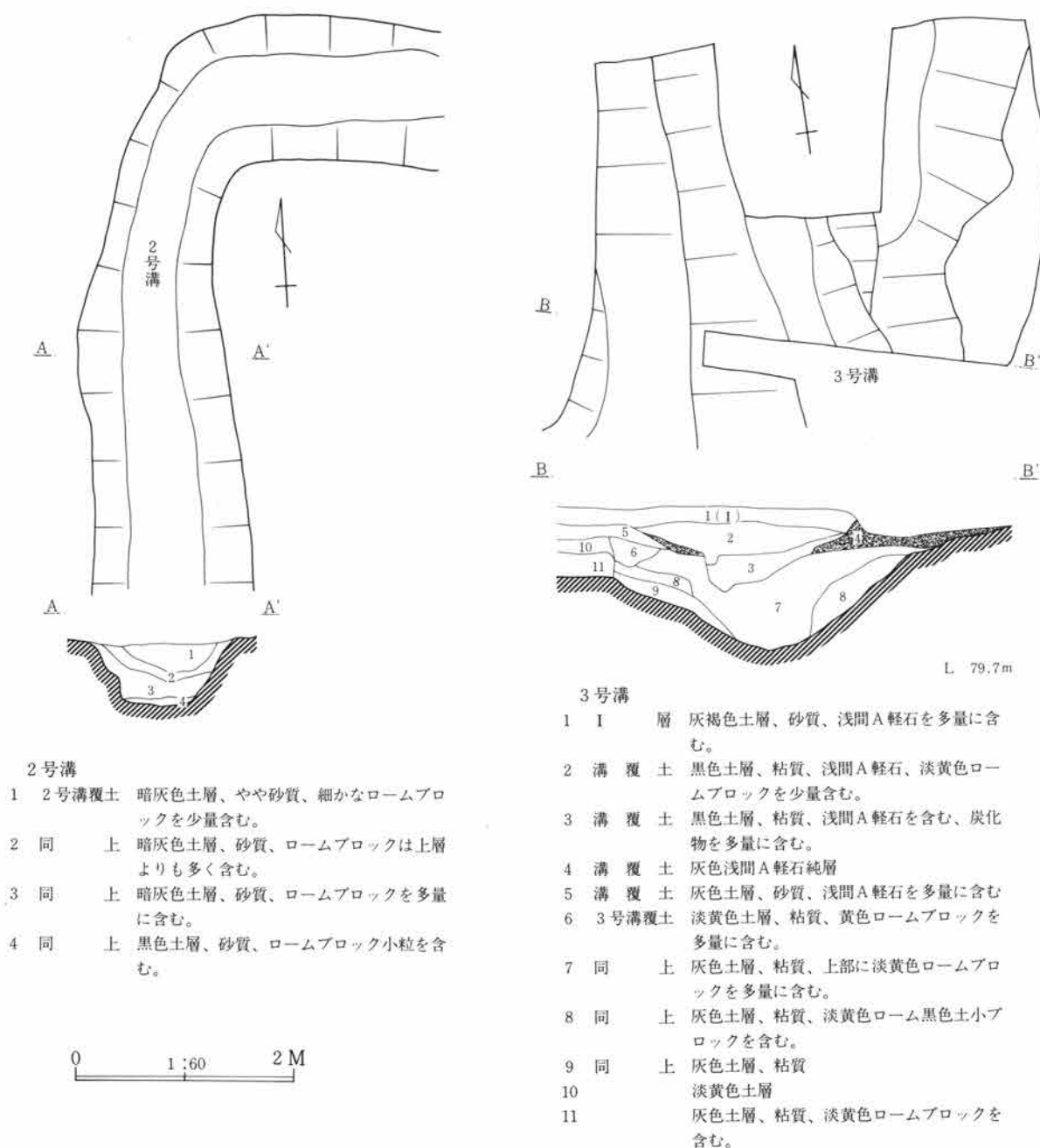
B4区の東端に位置する。6号溝の東端にほぼ直角に接続するこの溝はこのコーナー部より、北へほぼ7m直進し、調査区域外へ伸びている。規模は上端幅4m、下端幅1.5m、深さはローム面より1mを測り、ほぼ6号溝と同様である。覆土は上部に浅間A軽石の純層を見る。遺物は陶磁器片を少量見る程度である。本溝は多くの点で6号溝と類似するところから、6号溝と合わせ、環濠を構成し、東側の溝を構成していたと思われる。

#### 4号溝（68図 図版42、43）

B3区東端部、微高地の縁辺部に位置し環濠の東側濠にはほぼ沿っている。南方向は環濠の南東コーナー付近まで伸びることがトレンチにより確認出来たが、より以南については不明である。北方向は調査区域外に達し、これより先は不明である。溝は上端幅3m、下端幅1.5m、深さ96cm、中段を持ち2段に造られている。黄褐色泥濘層の上から掘り込み、ローム層以下70cmに達している。覆土は上面に浅間A軽石混土層が見られ、下部は細砂を含む灰色土層が堆積し、鉄分凝集も目立ち滞水のあったことが伺われる。他の遺構との関係については、5号溝がB3区北東部で4号溝にT字状に接続するが、形状及び覆土の共通性から両者は並存関係にあったと思われる。出土遺物については、これに伴うと思われる遺物は認められなかった。

#### 5号溝（20、68、69、78図 図版42、43、44、46）

B3区の北東隅で4号溝に接続しB2区を南北に貫き、54B32~54C5トレンチに達する溝である。上端幅はB3区で2.4m、下端幅60cm、深さは確認面より70cm、中段を持ち2段に造られている。覆土は灰褐色粘質土で、赤褐色鉄分凝集が見られることから滞水があったことが伺われる。溝はB4区でN-77°-E方向をとる。直線状に6号溝と並行し、B2区で緩く蛇行しながら6号溝と間隔を開き、さらに西に伸びる。4号溝より東へおよそ80m確認している。他の遺構との関わりは4号溝に接続し、17号溝と部分的には重複または並行し、B4区東部で12号住居址を切っている。出土遺物については、これに伴うと思われる遺物は認められなかった。

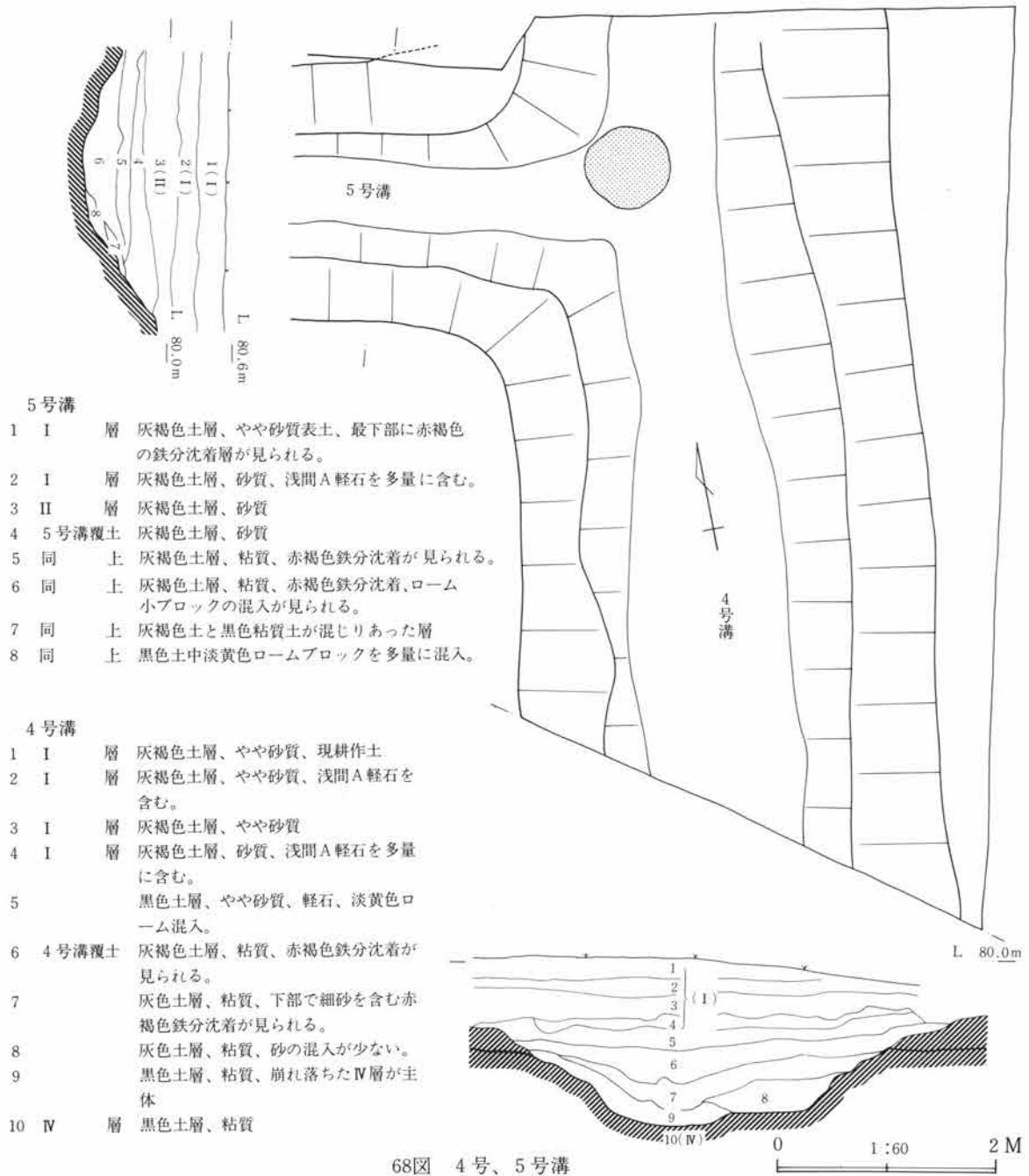


67図 2号、3号溝

## 6号溝 (20、69~71、78図 図版43、44、71~73)

B 2区を東西に貫き5号溝と直状に並行し、3号溝と接続する。方向は5号溝と同様N-77°-Eをとる。規模は上端幅が3m、下端幅1m、深さは確認面から80cm、形状はB 4区では北側に明瞭な中段を持つが、南側は持たない。覆土は上面に浅間A軽石純層が15cmの厚さでレンズ状に堆積して見られる。下部覆土は灰褐色粘質土が堆積しており滞水があったことが伺われる。B 2区においては、溝内からは大量の陶磁器が出土し(70図)、これに伴い漆塗りの碗、木製俵編み台が溝内底面付近から出土した。また、溝上部には河原石が多量に投棄され面的に広がっており、これに伴い染付茶碗、内耳土鍋、灯明皿等が見られた。東方向は北方向に直状に転じ3号溝につながる。西方向についてはB 2区外に抜け、不明確になる。

III 上滝遺跡

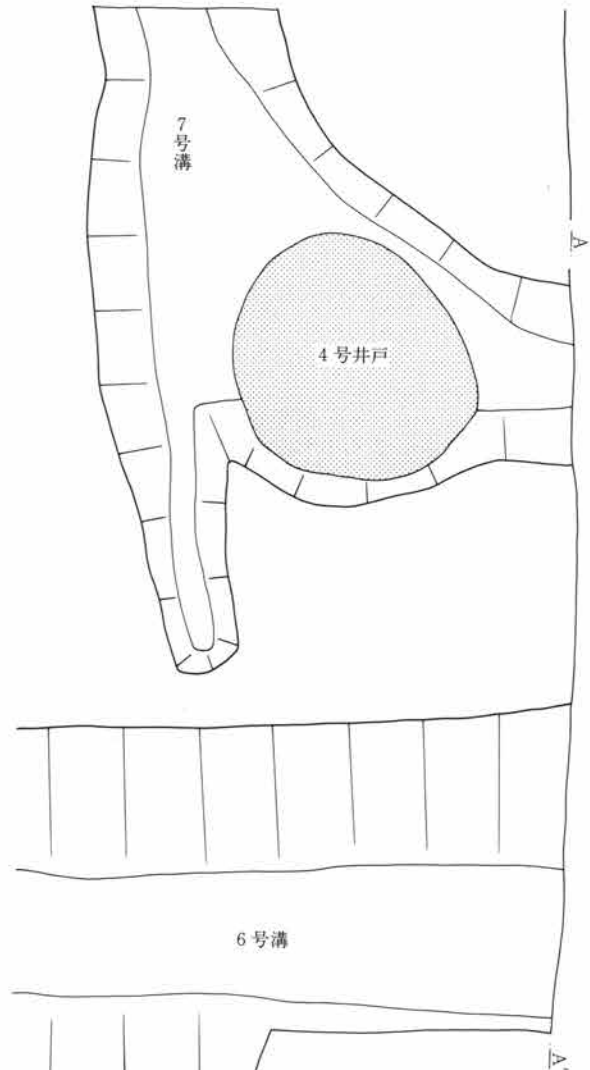
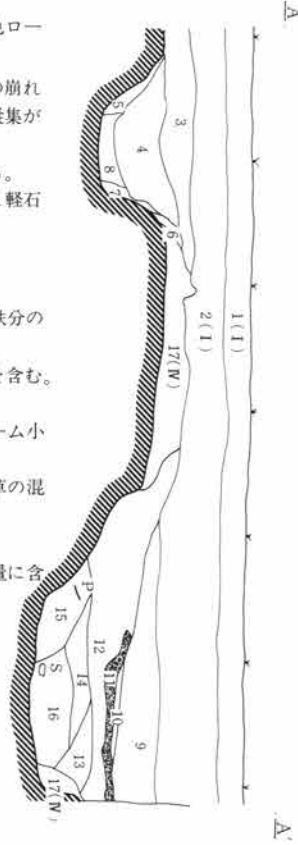


7号溝 (22、69、77図 図版43、44)

B2区北部においてはほぼ直状に屈曲し、東はB4区において16号溝に接する。方向はB4区では6号溝に同じN-77°-W。B2区のコーナー部では南北方向の溝が細く、短く延長する。16号溝に接触するところでは、緩く段状に立ち上っている。規模はB2区南北方向の溝が上端幅1.4m、下端幅40cm、確認面からの深さ26cm、B4区では上端幅1.7m、下端幅1.2m、深さは確認面から60cmを測る。断面形状はB2区、4区とも中段を持たない。覆土は黒色粘質土で底部付近では、淡黄色ロームが多量に混入している。滞水の影響が顕著に見られない。出土遺物についてはこれに伴うと思われる遺物は認められない。他の遺物との関係は、B2区で4号井戸とB4区で11号溝、5号井戸と重複する。11号溝との関係は5号溝の方が後出すると考えられる。

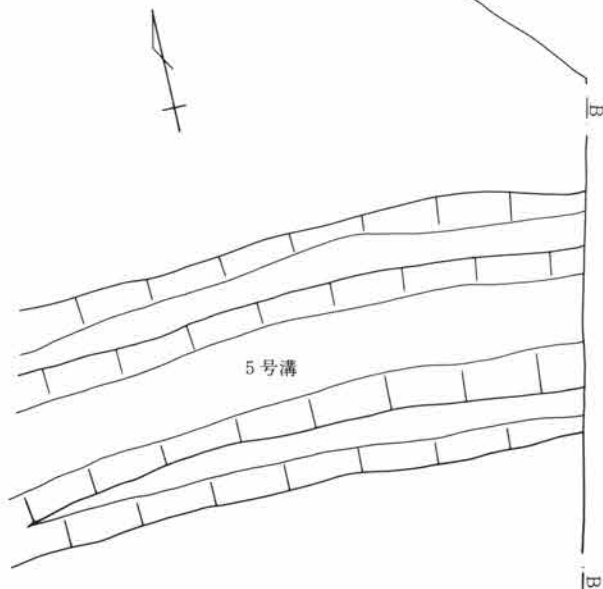
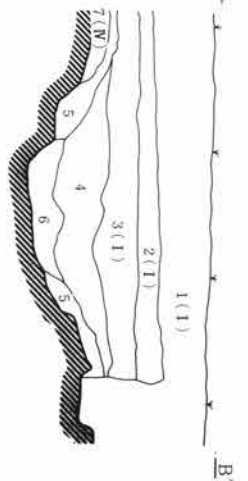
6号、7号溝

- 1 I層 灰褐色土層、やや砂質、現耕作土
- 2 I層 褐色土層、酸化鉄分凝集がブロック状に見られる。
- 3 7号溝覆土 褐色土層、浅間A軽石を多量に含む。
- 4 同上 褐色土層、酸化鉄分凝集がブロック状に見られる。
- 5 同上 黒色土層、粘質、淡黄色ローム細粒、細砂を含む。
- 6 同上 黒色土層、粘質、壁土の崩れ
- 7 同上 褐色土層、酸化鉄分の凝集が著しい。
- 8 同上 褐色土層、粘性に欠ける。
- 9 6号溝覆土 褐色土層、浅間A軽石を多量に含む。
- 10 同上 灰褐色土、粘質
- 11 同上 灰色浅間A軽石純層
- 12 同上 褐色土層、粘質、酸化鉄分の沈着が見られる。
- 13 同上 灰色土層、粘質、軽石を含む。
- 14 同上 灰褐色土層、粘質
- 15 同上 灰褐色土層、淡黄色ローム小礫混入。
- 16 同上 灰色土層、粘質、木、草の混入が見られる。
- 17 IV層 黒色土層、粘質
- 18 溝覆土 灰黒色土層、砂を多量に含む。



5号溝

- 1 I層 灰褐色土層、やや砂質
- 2 I層 灰褐色土層、やや粘質、浅間A軽石を含む。
- 3 I層 灰褐色土層、やや粘質。
- 4 5号溝覆土 灰褐色土層、粘質、細砂を含む。
- 5 同上 黒色土層、粘質、淡黄色ローム細粒、細砂を含む。
- 6 同上 灰褐色土層、粘質、酸化鉄分の沈着あり。
- 7 IV層 黒色土層、粘質

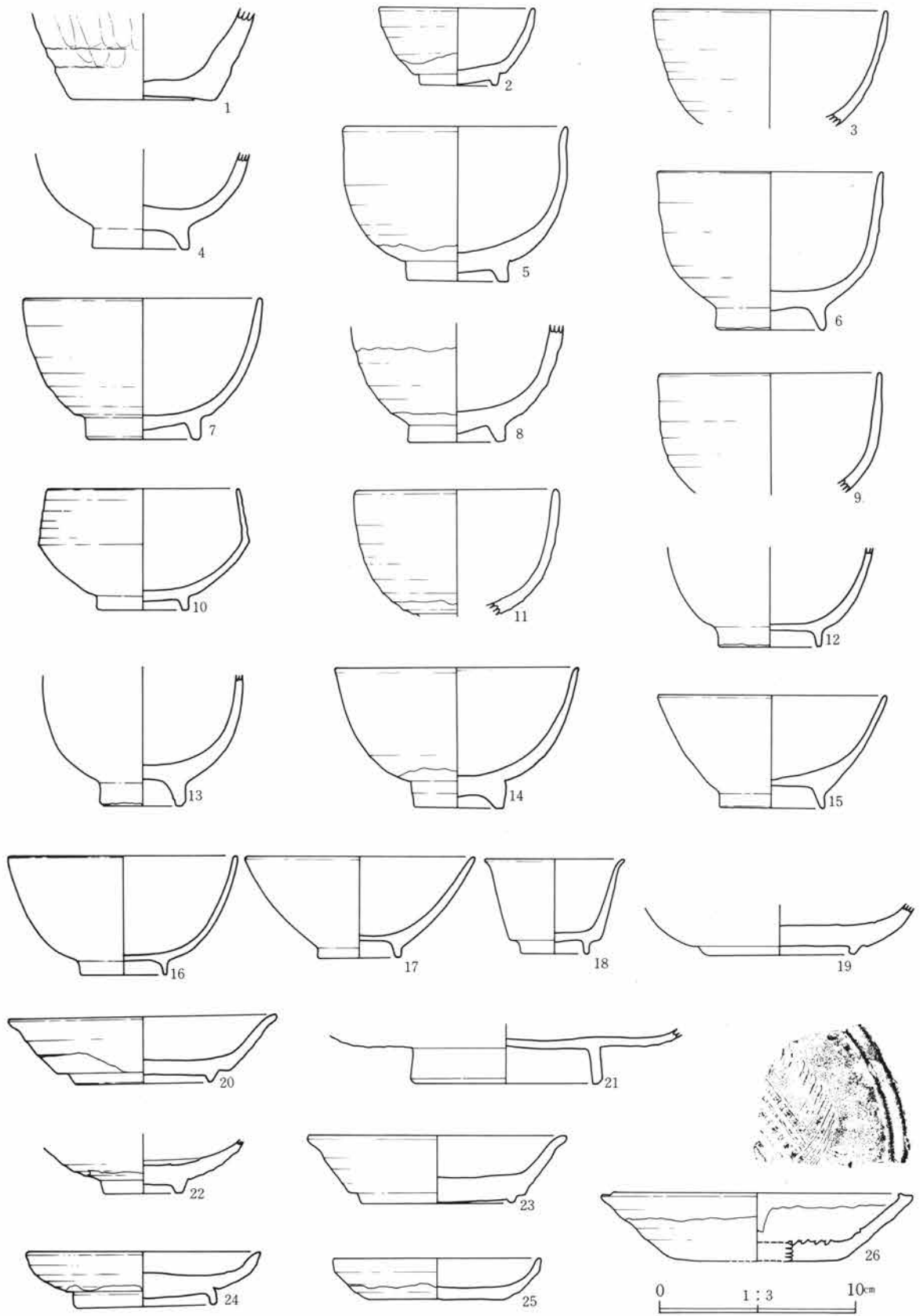


0 1:60 2 M

L 80.4m

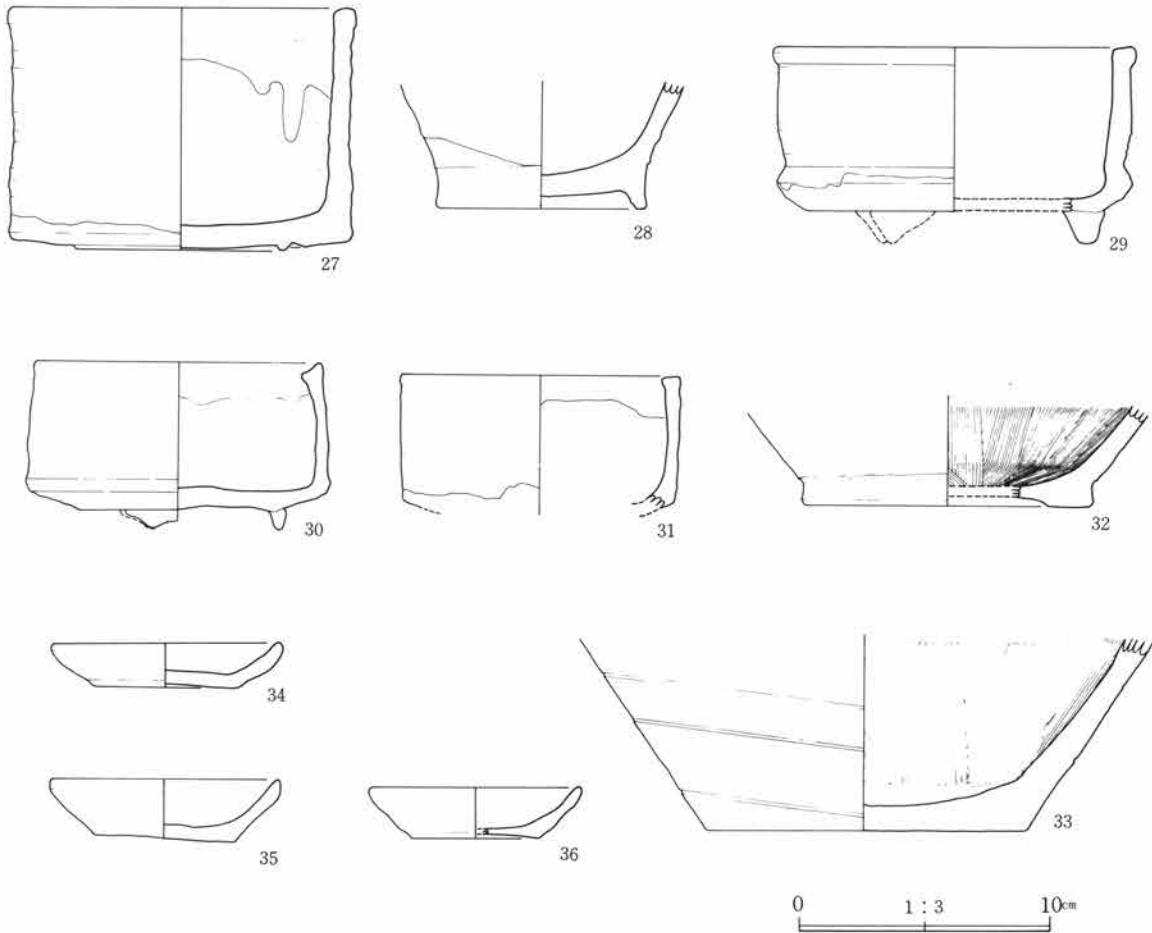
69図 5号、6号、7号溝

III 上滝遺跡



70図 2号溝(1)、6号溝(2~26) 出土陶磁器





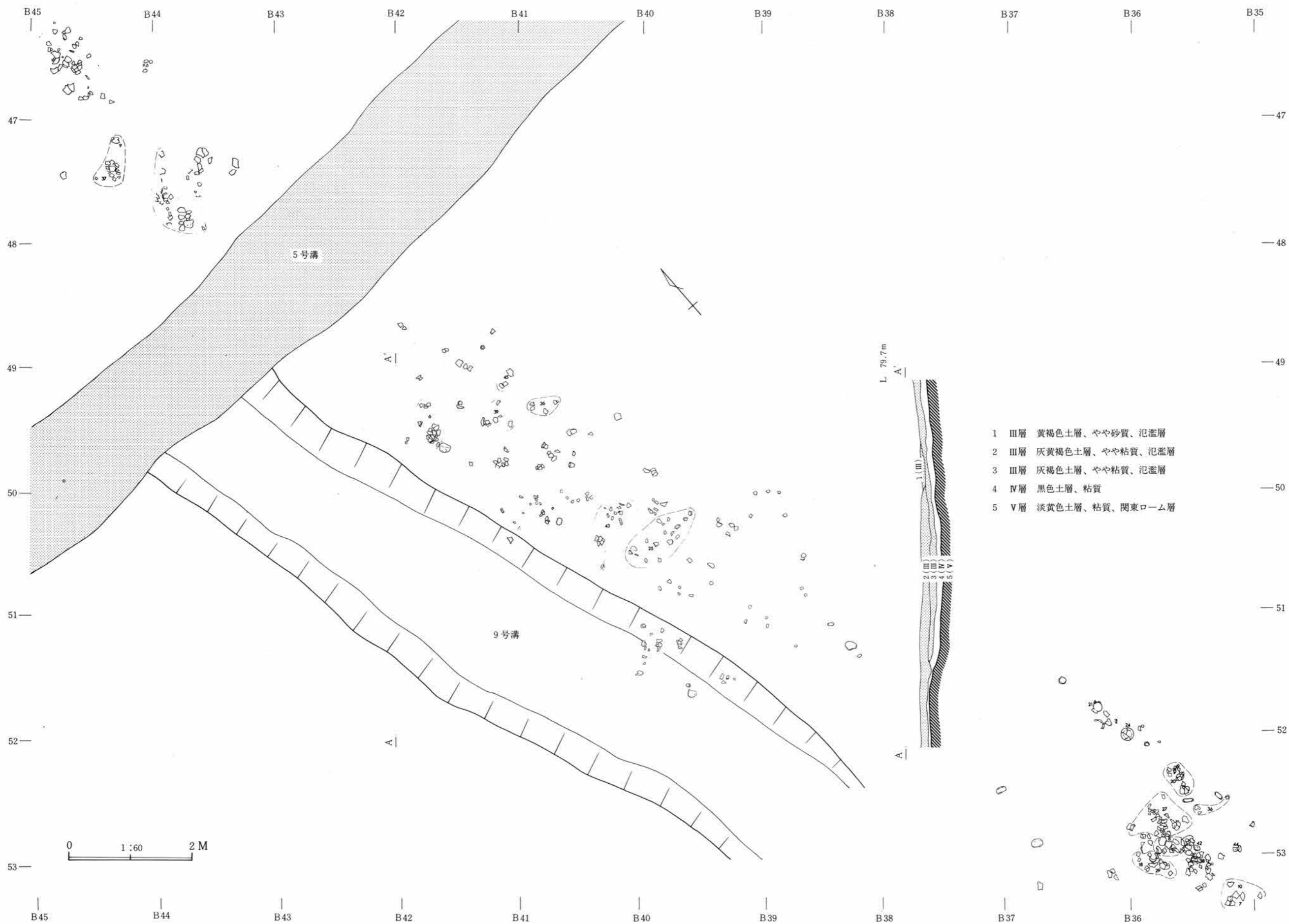
71図 6号溝出土陶器

35表 陶磁器、土器観察表 70~71図 2号溝(1)、6号溝(2~33)

No	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
1	小形壺 (三筋壺か)	陶器	紐作りで内面には指頭圧痕あり 外面にはへう削り調整痕あり。	底面にわずか砂の付着あり。	常滑焼、そのⅡ、Ⅲ期に類される。
2	小碗	陶器	削り出し高台	鉄釉の天目で若干カセる。	江戸前期
3	茶碗	陶器		鉛釉	美濃焼か、江戸中期
4	茶碗	陶器	削り出し高台	灰釉	江戸中期
5	茶碗	陶器	削り出し高台、体部下半に削り 出し著しい。	鉛釉(口縁がコバルト発色)で 淡い天目	江戸中期
6	茶碗	陶器	削り出し高台	内外釉かけ	美濃焼か
7	茶碗	陶器	付け高台、削り調整	銅を発色材としたような緑色	江戸中期
8	茶碗	陶器	削り出し高台	鉛釉	美濃焼風、江戸中期

### III 上滝遺跡

No	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
9	茶碗	陶器		長石釉に似た透明釉、内外釉がけ	
10	茶碗	陶器	削り出し高台	鉄釉中に、白色細斑あり、体部上方に条線の文様あり。	時期不詳
11	茶碗	陶器		飴釉後口縁にコバルト発色、外面下方に釉がけの境目あり。	瀬戸焼か
12	茶碗	陶器	削り出し高台で高台端部に鉄足あり。	釉は酸化した透明釉で鉄絵あり。	江戸初期
13	茶碗	陶器	削り出し高台	青磁釉っぽい灰釉、胎土は萩焼風	
14	茶碗	陶器	削り出し高台	銅の基調釉で緑色	
15	飯茶碗	磁器		呉須と銅と鉄の絵付あり。	幕末～明治
16	茶碗か湯呑	磁器		染付、呉須は淡いブルー	明治以降
17	飯茶碗	磁器		印判染付、呉須と緑の2色、恵比寿大黒の文様あり。	昭和頃
18	猪口	磁器		印判染付	大正頃
19	皿	磁器	見込みにカマ印あり、削り出し高台	染付見込が蛇の目	江戸中期、クラワシカ皿
20	皿	陶器	削り出し高台	青磁風で内面釉薬なし、外面底部は釉瀬戸焼か。	江戸初期
21	大皿	陶器	付け高台の削り出し高台	灰釉、鉄釉、灰釉調やや青磁気味	
22	皿	陶器	見込に蛇の目の削り出しあり。生がけ後削り出している。削り出し高台でロクロが左回り。	銅釉で淡い青色と、幾分コバルト色を帯びる。	九州窯か舶載、江戸初期
23	皿	陶器	削り出し高台	灰釉っぽい長石釉	江戸初期
24	皿	陶器	付け高台で削り調整	鉄すり絵、乳白濁した志野釉	志野焼風で秋草絵、江戸初期
25	小皿	陶器	高台なし	飴釉でコバルト色入る	時期不明
26	おろし皿	陶器	底面は、糸切りの切り離し痕あり。内面にはへらがきによるおろし目がある。口縁は折り口をなす。		瀬戸焼、施釉II期に相当し15C前半位に相当する。
27	水指し	陶器	削り出し高台あり。	長石釉、美濃焼風、体部下半に釉がけの境目あり。	
28	底部片	陶器	付け高台	鉄釉	時期不明
29	香炉	陶器	三脚あり。	鉄釉	美濃焼風
30	香炉	陶器	三脚あり、口縁にハゼが著しい。	飴釉	



72図 9号溝及び包含層上出土土器群



No	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
31	小型香炉	陶器	へら状工具による劃花文あり。	飴釉	
32	すり鉢	陶器	おろし目は、見込中心部のみ螺旋状に別の条痕が施されている。	鉄釉	美濃焼風、江戸前半
33	すり鉢	陶器	おろし目が細かく、見込中央に向かって条痕が走る	柿色の鉄釉	江戸前期

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
34	灯明皿	口 8.4 高 2.0	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎気味に大きく広がる。平底	外面 ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	(40%)
35	灯明皿	口 9.0 高 2.2	細砂を多量に含む。やや軟質	浅黄棕色 やや軟質	器壁は厚く、口縁端部はやや尖っている。	外面 ヨコナデ、底面糸切り 内面 ヨコナデ	ロクロは右回転
36	灯明皿	口 9.0 高 1.75	細砂を含む。やや軟質	浅黄棕色	口縁部はやや内彎し、底部は上げ底	外面 ヨコナデ、底面糸切り 内面 ヨコナデ	ロクロは右回転

#### 8号溝 (20図 図版44)

B2区西端部、微高地の西側傾斜面に位置する。方向はN-10°-W、傾斜面の等高線に並行する。規模は上端幅1m、下端幅50cm、深さは黄褐色氾濫層を掘り込んで見られる。覆土は暗灰褐色粘質土で出土遺物については、これに伴うと思われる遺物は認められない。

#### 9号溝 (20、72~76図 図版44、74~77)

B2区の西部微高地の西側傾斜面に位置する。方向はN-10°-Wで傾斜面の等高線に並行し、北は5号溝に切れ、南はB2区外に及ぶ。規模は上端幅2.6m、下端幅1.6m、深さはローム面下13cm前後で幅に較べ浅く、底面は平坦であるが不規則に起伏し、壁も整っていない。覆土は黒色粘質土で、IV層と同質である。9号溝の東、微高地の縁辺に沿って、古式土師器片が密集し、緩斜面に帯状に多量に出土した。この土器分布の一部は9号溝の覆土中にまで及んでいる。これら土器群の包含層はIV層上部であり、土質は9号溝覆土と同質であり9号溝と土器群の投棄の時期は相互に接近しているか、または併存関係にあったと思われる。時期的にはこれらの土器は、古墳時代前期に属すものに限られ他の時期の遺物の混在はまったく見られない。(70~73図) また、土器群を器種から見ると壺形、埴形、杯形、高杯形、器台形と多種に及ぶが甕形土器の占める割合が少く、大形破片が見られないことが注意される。(佐藤)

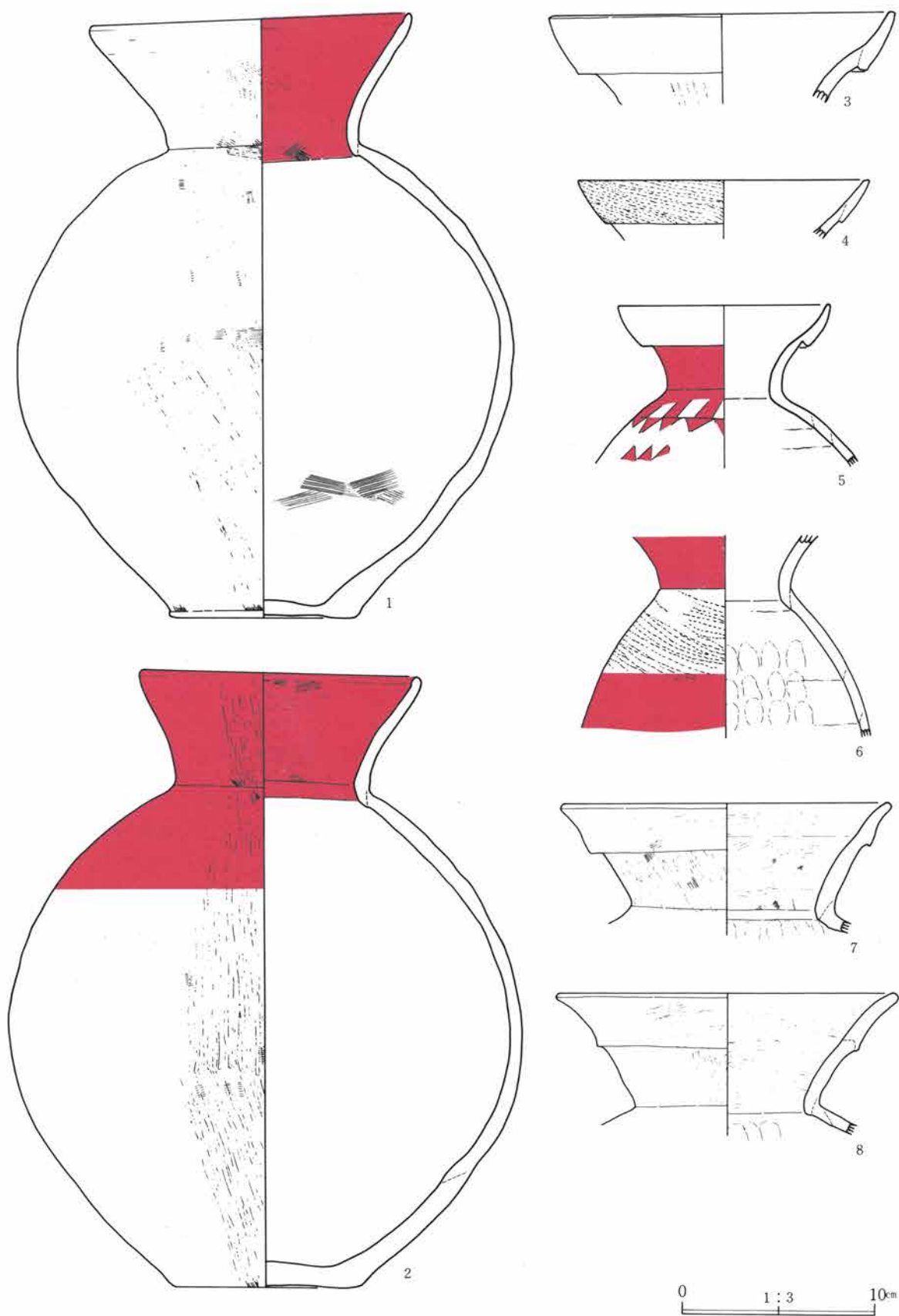
#### 10号、18号、19号溝 (77図 図版45、47)

遺跡の東側でまとまって検出された、黒色土層中での発見のため、東側の発掘区では検出できず、同様に西側の末端部も消滅してしまうため、両側に対する溝の伸びは不明である。規模は19号溝が特に大規模で上端幅1.2m 下端幅80cm、深さ40cmを測り、10号、18号の両溝は上端幅が70cm前後で比較的小規模である。1号溝の上に構築されていることからかなり新しい時期のものであろう。なお10号溝と19号溝の切り合いはセクションで新旧関係が判明しており、10号溝の方が古い。

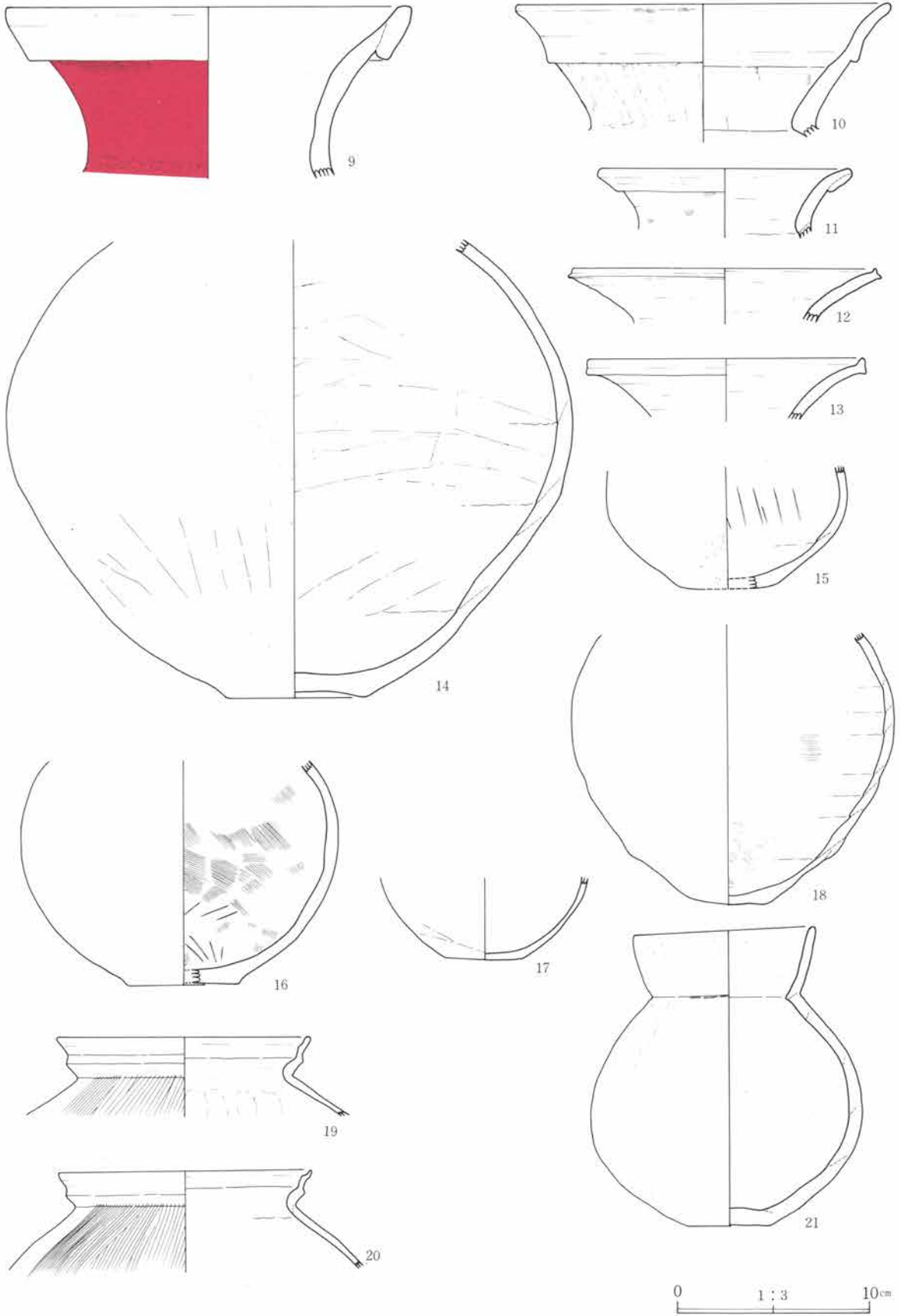
#### 11号溝 (77、79図 図版45)

7号溝の北にあり、1部同溝及び掘立柱建築遺構と重複する。新旧関係は、7号溝より本溝が古い。掘立柱建築遺構との関係は不明である。溝の走行はほぼ東西であるが、西側の掘立柱建築遺構のP2との関係を

III 上滝遺跡

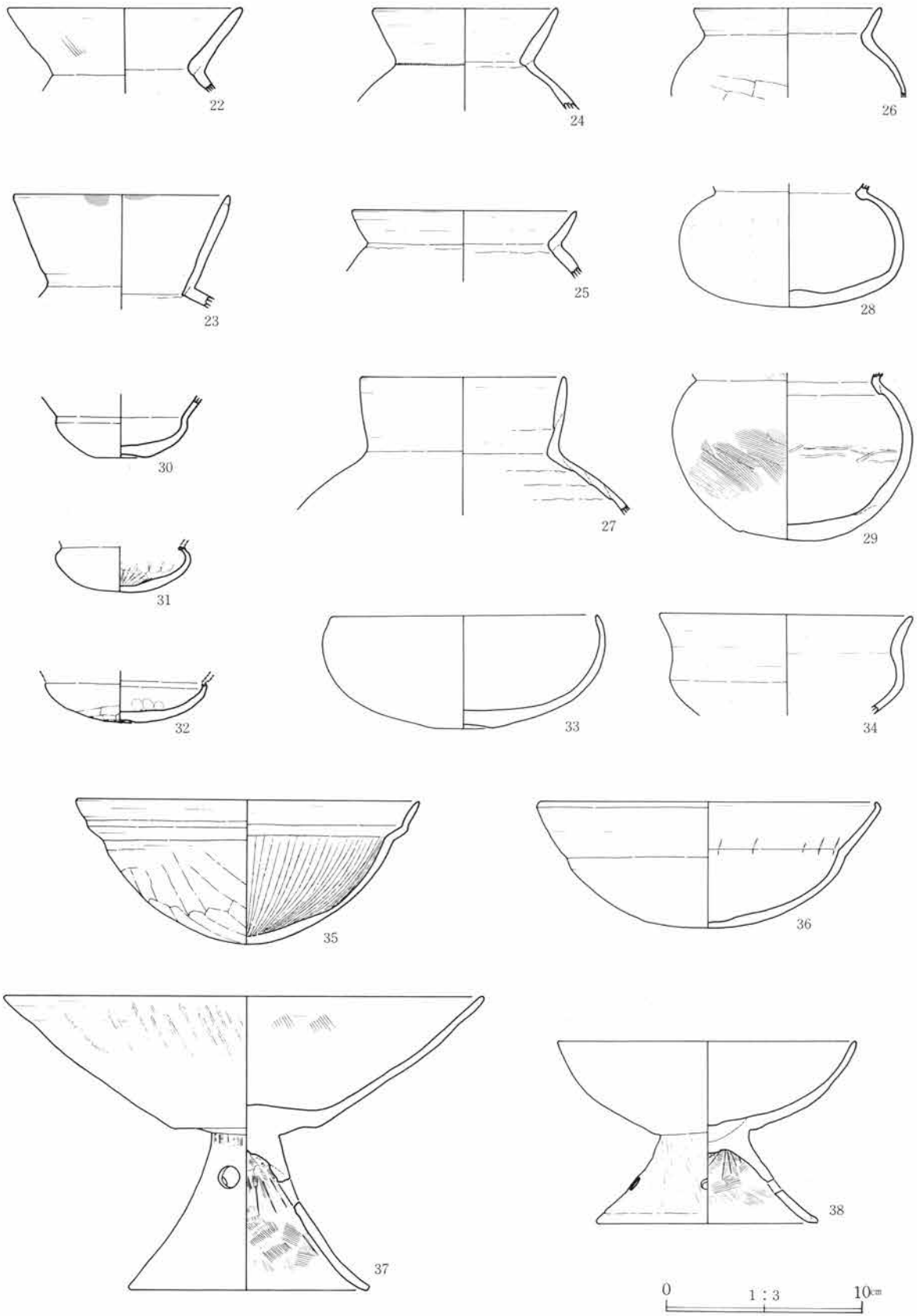


73図 9号溝付近包含層出土土器(1)



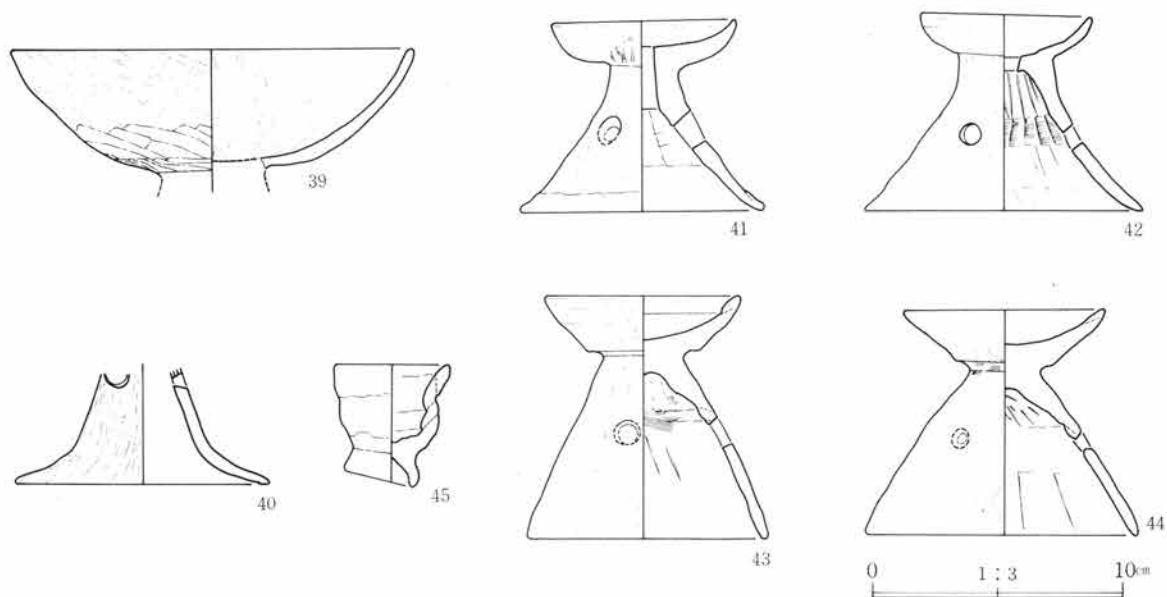
74図 9号溝付近包含層出土土器 (2)

III 上滝遺跡



75図 9号溝付近包含層出土土器(3)





76図 9号溝付近包含層出土土器(4)

36表

土器観察表 73~76図 9号溝付近包含層

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 16.5 高 30.8 頭 10.0	細砂を含む。 やや軟質	浅黄棕色	口縁部は単口縁でやや内彎する。頸部は強く「く」の字状に屈曲し外反する。胴部はほぼ球形を呈し、中位に最大径がある。底部はやや上げ底をなす平底	<b>外面</b> 口縁部ハケメ後、上部ヨコナデ、頸部ハケメ後、ナデ、最後に頸部一口縁部縦方向へラ研磨、幅5mm、間隔5~10mm、胴部横方向胴下部ハケメ後、縦方向へラ研磨幅3~5mm、緻密、底部木葉痕 <b>内面</b> 口縁部ハケメ後へラ研磨	胴部わずかに欠損(100%) 外面肩部以上、内面口縁部に赤色塗彩
2	壺形	口 14.2 高 31.8	細砂を多量に含む。	浅黄棕色	頸部は強く屈曲し、口縁部は単口縁で上部がやや内彎する。胴部は中位から長い球形を呈する。底部はやや上げ底をなす。	<b>外面</b> 口縁部一胴部ハケメ後、縦方向へラ研磨 <b>内面</b> 口縁部横方向へラ研磨、胴部ナデ、下部にハケメ痕が残る。外面肩部以上、内面口縁部一頸部赤色塗彩が施されている。	(30%) 内面は比較的荒れている。
3	壺形	口 17.4	細砂を多量に含む。 軟質	橙 色	口縁部は外側に幅広の粘土帯を継ぎ合わせ、複合口縁をなす。内側は彎曲する。器体は比較的大形で器壁は厚い。	<b>外面</b> 口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ後、縦方向へラ研磨、幅1.5mm間隔2~3mm <b>内面</b> 口縁部一頸部ヨコナデ	頸部上半部以上の破片(44%)
4	壺形	口 15.2	細砂を含む。 軟質	浅黄棕色	口縁部はわずかに内彎外面に幅広の粘土帯を付し、段を作る。	<b>外面</b> 口縁部付加条 <b>内面</b> 器面が荒れ観察困難	(32%)
5	壺形	口 11.0 頭 6.0	細砂を含む。 やや軟質	浅黄棕色	頸部の屈曲は緩い。口縁部は外側に幅広の粘土帯を継ぎ合わせ、複合口縁をなす。内側は彎曲する。口縁端部は比較的器壁が薄い。	<b>外面</b> 口縁部付加条を施す。彩色があったと思われるが器面が荒れており不明。頸部縦方向に浅いハケメが確認できる。肩部は付加条を地文とし(器面が荒れており不明確)方形区画帯と鋸歯文帯をめぐらす。 <b>内面</b> 口縁部ヨコナデ	胴部下半以下、欠損(24%) 区画帯の中に交互に赤色塗彩が施されている。 内面は荒れている。

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
6	壺形	頸 7.3	細砂を多量に含む。 軟質	浅黄褐色	頸部は比較的緩くくびれ、口縁部は強く外反する。胴部は比較的縦長になる。	外面 頸部ナデ、肩部は付加条を施す。肩部施文後、胴部縦方向ヘラ研磨 内面 頸部器面が荒れている。胴部ヘラケズリ→後、縦方向指ナデ肩部施文部を除き赤色塗彩を施す。	口縁部、胴下部欠損
7	壺形	口 16.9	細砂を含む。	橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、大きく外傾する。口縁部は外側に粘土帯を重ね有段口縁をなし、外反する。	外面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ後、横方向ヘラ研磨、頸部斜方向ハケメ後、縦方向ヘラ研磨、肩部ヘラケズリ← 内面 口縁部—頸部横方向ハケメ後、横方向ヘラ研磨、肩部指押え痕がめぐり、粗いナデを施す。	肩部以下欠損 (93%)
8	壺形	口 17.3	砂粒の混入少ない。	にぶい橙色	頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し、強く外傾する。口縁部にかけて鋭い稜を作り口縁部は大きく外反する。	外面 口縁部ヨコナデ後、横方向ヘラ研磨、緻密、頸部ハケメ、ヨコナデ後、ヘラ研磨、肩部ハケメ後粗いナデ 内面 口縁部ヨコナデ、口縁部—頸部ヘラケズリ→後、横方向ヘラ研磨、緻密。	肩部以下欠損 (100%)
9	壺形	口 21.3	粗砂を含む。	浅黄橙色	頸部は強く彎曲し、口縁部は外側に幅広い粘土帯を重ねる。口縁端部はやや内彎する。器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後、縦方向ヘラナデ、この後赤色塗彩される。頸部押圧痕がめぐる。 内面 口縁部ヨコナデ	頸部以下欠損 (16%)
10	壺形	口 19.5	細砂を含む。 堅緻	にぶい橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲外傾し、口縁部にかけて鋭い稜を作って2段にゆるく外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部縦方向ヘラ研磨 内面 口縁部ヨコナデ、口縁下部—頸部ハケメ後、横方向ヘラ研磨頸部屈曲部—肩部指押え痕	頸部以下欠損 (35%)
11	壺形	口 13.2	中砂を多量に含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部は短く、口縁部はいわゆる折り返し口縁をなす。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面 ナデ	頸部以下欠損 (26%)
12	壺形	口 12.6	細砂を含む。 堅緻	橙色	頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は短かくハネ上る。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	頸部以下欠損
13	壺形	口 16.0	細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は小さく直立する。	外面 口縁部—頸部ヨコナデ 内面 口縁部—頸部ヨコナデ	頸部以下欠損
14	壺形	胴 29.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	浅黄橙色	胴中位が比較的強く張り出す。胴下部接合はやや膨らみ、内側の膨らみ目立つ。胴中位最大径部分の接合痕も明瞭である。上げ底	外面 胴上半部ヘラケズリ後、斜方向ヘラ研磨、幅3mm、緻密、下半分ヘラケズリ後、縦方向に上半部と同様ヘラ研磨 内面 胴中部やや粗いナデ、胴下半部接合部以下、比較的丁寧なナデ、胴上部ヘラナデ←、幅2.5cm	肩部以上欠損
15	壺形	胴約12.5	細砂を含む。 やや軟質	灰白色	胴下部に最大径が位置し、胴下部に明瞭な接合痕を残す。底部は小さな平底	外面 胴下部縦方向ヘラ研磨 内面 胴下部接合部以上指押え後、部分的にヘラ痕、以下は丁寧なヘラナデ	胴上部以上欠損

## 6 検出した遺構・遺物 (4)溝

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
16	壺形	胴 16.5	細砂、中砂を多量に含む。 やや軟質	にぶい橙色	胴部は球形をなす、平底	外面 ナデ、器面がやや荒れている。  内面 胴部全体ハケメ、下半部はナデが主体的である。	肩部以上欠損
17	壺形	胴約11.0	細砂を多量に含む。 軟質	灰白色	胴下部が比較的膨らむ。小さな平底、器壁は薄い。	内外面とも器面が荒れており観察困難	胴上部以上欠損
18	壺形	胴約16.5	細砂を多量に含む。 やや軟質	浅黄橙色	胴部は比較的縦長。底部は小さくやや膨む平底、胴下部接合部外面に粘土補充による段が見られる。	外面 胴部ナデ、器面が荒れており詳細な観察はむずかしい。 内面 ナデ	肩部以上欠損
19	甕形	口 13.0	細砂を多量に含む。	にぶい橙色	口縁部上部が比較的長く、内側に太い明瞭な凹線を作る。頸部の屈曲が比較的弱い。	外面 口縁部ヨコナデ、ハケメ状の細線が残る。肩部ハケメ後、ハケメ間隔が粗い。幅1~2mm、肩部ハケメ後、頸部ハケ押し、この後口縁下半部ヨコナデを施す。 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押し、ナデ	肩部以下欠損 (100%)
20	甕形	口 13.1	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部内折部は外側に比較的鋭い稜を持つ。口縁端部内側に明瞭な凹線を施す。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後、1単位10本。比較的浅い。 内面 口縁部ヨコナデ、頸部一肩部ナデ、頸部接合痕が明瞭。	肩部以下欠損 (90%)
21	卮形	口 9.5 高 15.1 胴 11.0	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し、口縁部は内彎気味に外傾する。胴部は最大径が下部に位置する。扁球形をなす。平底、胴下部接合痕が明瞭に残る。	外面 口縁部ヨコナデ後、縦方向ヘラ研磨、頸部横位ヘラあて痕が見られる。胴部ナデ後、縦方向ヘラ研磨 内面 口縁部ヨコナデ後、縦方向ヘラ研磨、肩部指押し、胴部指頭による縦方向ナデ	口縁端部が部分的に破損 (100%)
22	卮形	口 11.8	細砂を多量に含む。 堅緻	灰白色	口縁部は直状で外方へ大きく開く。頸部は鋭く「く」の字状に屈曲する。	外面 口縁部一頸部ハケメ後、ヨコナデ 内面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ。頸部一肩部指押し痕がめぐる。	肩部以下欠損 (79%)
23	壺形	口 11.1	砂粒の混入少ない。	赤橙色	頸部は強く「く」字状に屈曲し、直状に外傾する。頸部内側には鋭い稜を作る。	外面 口縁部ナデ 内面 口縁部ナデ、ヘラあて痕が見られる。	(71%)
24	卮形	口 9.5	細砂、中砂を多量に含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、口縁部は直状に外傾する。	外面 頸部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、内外面とも荒れており観察不能	肩部以下欠損 (25%)
25	卮形	口 11.5	砂粒の混入少ない。	浅黄橙色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、口縁部は短くやや内彎気味に外傾する。	外面 口縁部一肩部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	肩部以下欠損 (12.5%)
26	卮形	口 9.5	細砂を多量に含む。 堅緻	灰色 一部赤色をなす。	頸部は強く屈曲し、口縁部は短く外傾する。器壁は非常に薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	口縁部一肩部遺存。(17%)
27	甕形	口 11.5	細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色	頸部は「く」の字状に屈曲する。	外面 器面が荒れている。 内面 胴部ナデ	胴下半以上欠損。(32%)

III 上滝遺跡

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
28	埴形	頸 7.8 胴 10.6		浅黄棕色	頸部は強く「く」の字状に屈曲。胴部は著しく横に長い長円形。下部で比較的強い屈曲がある。	外面 頸部横方向へラ研磨、胴上部縦方向へラ研磨、胴下部一底部ナデ 内面 頸部一肩部指押え、胴部一底部ハケメ後、指頭によるナデ	口縁部欠損
29	埴形	頸 9.5 胴 12.5	細砂を含む。 堅緻	にぶい棕色	頸部は強く「く」の字状に屈曲。胴部は最大径がやや上位に位置する扁球形をなす。丸底。胴下部の接合痕が目立つ。	外面 頸部ハケメ、肩部ナデ、胴部一底部ナデ後、ハケメ、ケズリに近い。 内面 頸部ナデ、肩部へラ押え痕、粗いへラナデ、中位に沈線状横方向へラ痕が見られる。下部丁寧なへラナデ、へラ押え。	口縁部欠損 (0%)
30	埴形	胴 6.6	細砂を多量に含む。 やや軟質	浅黄棕色	頸部は強く屈曲し、胴部はやや膨らみ、窪み底をなす。	外面 口縁部ナデ、胴部へラケズリ 内面 ナデ、底部は特に粗雑	口縁部欠損
31	埴形		細砂を含む。 堅緻	浅黄棕色	胴部が膨れ頸部が強くくびれる。丸底	外面 へラケズリ 内面 ナデ	口縁部欠損
32	埴形	胴 8.2	細砂を含む。 やや軟質	浅黄棕色	粗雑な凹み底。内側に指押え痕残る。	外面 へラケズリ 内面 ナデ	くびれ部以上欠損。 (0%)
33	杯形	口 約13.7 高 5.5	砂粒の混入少ない。 堅緻	明赤褐色 内面 黒褐色	口縁部内彎する。底部は凹み底。器壁は比較的薄い。	外面 ヨコナデが十分施されていない。胴部以下ナデ 内面 ナデ。器面は内外面とも荒れている。	胴部以下遺存 (60%)
34	杯形	口 13.0	細砂を含む。 やや軟質	にぶい棕色	頸部は大きく、緩くくびれ、口縁は長く外反する。胴部はわずかに膨らみ弱い稜を作る。器壁は比較的薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部指押え後、ナデ	底部欠損 (60%)
35	杯形	口 17.5 高 7.3	砂粒の混入少ない。 堅緻	棕色	半球形に近く胴部は外傾する。有段口縁が付く、口縁上部は比較的長く伸びる。肩部は膨らまない。丸底。器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ後、放射状へラ研磨、幅1mm、間隔8mm	(32%)
36	杯形	口 17.4 高 6.4	細砂を含む。 堅緻	棕色	胴部は浅い円弧状をなす。頸部はわずかにくびれ内面の稜は明瞭でない。口縁部先端が小さくハネ上る。器壁は非常に薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部へラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部縦位のへラあて痕が見られる。胴部一底部へラケズリ	(100%)
37	高杯形	口 24.5 高 14.8	細砂を含む。 粗砂も目立つ 堅緻	浅黄棕色	杯部は底部に稜を作り大きくやや内彎気味に直線的に広がる。底面の膨らみが目立つ。脚部は杯部との接合部が細く下方へ緩く彎曲しながら広がる。円孔を3孔穿つ。	外面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、杯中部ハケメ後、ナデの後、口縁部一杯中部縦方向へラ研磨、幅2mm、杯下部一底部ハケメ後、ナデ、脚部上部ハケメ後、縦方向へラ研磨中部ハケメ後、ナデ、下部ハケメ後、ヨコナデ 内面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、杯中部ハケメ後、ナデの後、口縁部一杯中部へラ研磨。杯下部一底部ハケメ後、ナデ、脚部ハケメ後、へラ調整、端部ハケメ後、ヨコナデ	(68%)

## 6 検出した遺構・遺物 (4)溝

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
38	高杯形	口 15.2	細粒の混入少ない。 比較的軟質 (角閃石の混入あり)	浅黄橙色	杯部は底部から口縁部までゆるく彎曲しながら大きく広がる。脚部は接合部が太く全体がずんぐりしている。径6mmの円孔が片半に寄って3個穿たれている	外面 杯部口縁部ヨコナデ、中部へラ研磨、下部へラケズリ→、接合部粗いナデ、脚部へラナデ、端部ヨコナデ 内面 杯部ヨコナデ以下へラ研磨、丹念にくまなく施す。脚部ハケメ、端部ヨコナデ	(86%)
39	高杯形	口 16.0	細砂を含む。 (角閃石を含む)	浅黄橙色	底部から口縁部までゆるく彎曲しながら大きく広がる。	外面 杯部上半へラ研磨、幅2mm、くまなく施される。下半部へラケズリ 内面 へラ研磨、丹念に施される。	脚部欠損 (50%)
40	高杯形	底 10.3	砂粒の混入少ない。	赤褐色	柱状部はほぼ直状に広がり裾部は外方へ強く外反する。円孔を穿つ。器壁は薄い。	外面 柱状部一裾部縦方向の緻密なへラ研磨 内面 柱状部粗いへラケズリ、裾部ヨコナデ、下端部は余剰粘土が付着する。	脚部上部以上欠損
41	器台形	口 7.5 高 7.5	細砂の混入少ない。 やや軟質	浅黄橙色	器受け部は円弧状をなし、段を作らない。中央貫通孔は9mm	外面 器受け部はヨコナデの後へラ研磨。脚部ハケメの後縦方の研磨 内面 器受け部ナデ後へラ研磨、脚部上部へラケズリ	(65%) 脚部にタール状の付着物あり。
42	器台形	口 7.8 器 6.8	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	器受け部は円弧状をなし、段を作らない。径1cmの中央貫通孔を持つ。脚部上端部は比較的太く下方へ緩く外反しながら広がる。3個の円孔を持つ。円孔はへラ状具で穿孔する。	外面 器受け部口縁部ヨコナデ、下部へラケズリ、脚部へラケズリ後縦方向の粗いへラ研磨。下端部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、器受け部底部へラケズリ、脚部上部へラあて痕、中部ハケメ、下部ナデ、下端部ヨコナデ	(100%)
43	器台形	口 8.0 器 9.0	砂粒の混入少ない。 やや軟質	浅黄橙色	器受け部底部外側に強い稜線が作られる。脚部はやや内彎気味に直状に下部に広がる。円孔は径4mmで小さい。	外面 器受け部横方向ハケメ後縦方向へラ研磨、器受け部脚部接合部ハケメ、脚部縦方向へラ研磨 内面 器受け部口縁部横方向へラ研磨、底部放射方向の緻密なへラ研磨、脚部上部へラあて痕、脚部下部ハケメ、下端部ヨコナデ	
44	器台形	口 7.7 器 9.7 底 約9.1	砂粒の混入少ない。やや軟質	浅黄橙色	器受け部底部外側に強い稜線が作られる。脚部はやや膨れ気味に広がる。脚部円孔3~4個	外面 器受け部口縁部ヨコナデ、下部縦方向へラ研磨、脚部縦方向へラ研磨 内面 器受け部ナデ、脚部上部指押え、中部へラナデ、下部ヨコナデ	(25%)
45	ミニチュア	口 4.6	細砂を多量に含む。 堅緻	浅黄橙色	成形は粗雑、接合痕が未調成のまま見られる。	内外面とも指頭による押えのみ。	(100%)

みると、同ピットの西側には本溝の続きがみあたらない。7号溝によって切られた部分でどの様に変化するかわからないが、溝というよりも長楕円形を呈する土坑ではないかとも考えられる。長さは5.6m前後と思われる。溝の規模は上端幅1m、下端幅95cm、深さ15cmを測る。

遺物は破片の状態でも溝内に散乱していた。1部復元可能な土器がある。(79図) 甕形土器で古墳時代後期前

### Ⅲ 上滝遺跡

葉の時期に比定されよう。

#### 12号溝 (図版45)

7号溝の北にあり、13号溝と平行して走る。掘り込み面も浅い。規模は上端幅70cm、下端幅48cm、深さ18cmを測る。溝内堆積土もかなり新しい時期のものと考えられる。溝内からの遺物の出土はなく構築時期は不明である。

#### 13号溝 (図版45)

7号溝の北で、12号溝と平行する。溝の走行方向は12号溝と同一で、形態等も類似しているが、規模をみるとかなり長いものとなっている。長さ8.3m、上端幅78cm、下端幅58cm、深さ52cmを測る。出土遺物はなく構築時期は不明である。

#### 14号溝 (77、79図 図版46、77)

遺跡の北側に位置し、走行は東西方向である。西側は未掘であるが、7号溝と接続するものと思われる。規模は上端幅1.4m、下端幅58cm、深さ52cmを測る。溝は榛名FA層の上部の層を切って構築されていることから、かなり新しい時期のものであろう。付近にある溝群とつながりをもつものといえよう。

#### 15号溝 (図版46)

遺跡の北側を南北に走る溝で、14号溝と重複するが、新旧関係は不明である。規模は上端幅90cm、下端幅28cm、深さ30cmを測る。溝内堆積土は、砂利等を中心とするもので、水の影響を受けているものと思われる。14号溝との関係は不明であるが、溝内堆積土などの関係を見ると、それほど差がないところから構築時期も近いことが想定される。遺物は出土していない。

#### 16号溝 (78図 図版46)

6、7号と14号溝を結ぶ形で存在する。規模は上端幅1m、下端幅32cm、深さ40cmを測る。重複する溝との新旧関係をみると、6号溝とでは本溝が古く、他の溝との関係は不明である。しかし、溝内堆積土が類似していることや、7号溝が本溝のところで終了することなどを考えあわせれば、それ程時間があるとは思えない。中世から近世にかけての館址に伴うものであろう。遺物の出土はない。

#### 17号溝 (78図 図版46)

5号溝の北側立ち上り部分で、同溝と重複する形で検出された。規模は上端幅70cm、下端幅35、深さ15cmを測る。同溝とは東西に平行する走行を示すが、各方向で消滅してしまう。先後関係は本溝が新しい。遺物の出土はない。(巾)

#### 20号溝 (20、21図 図版15)

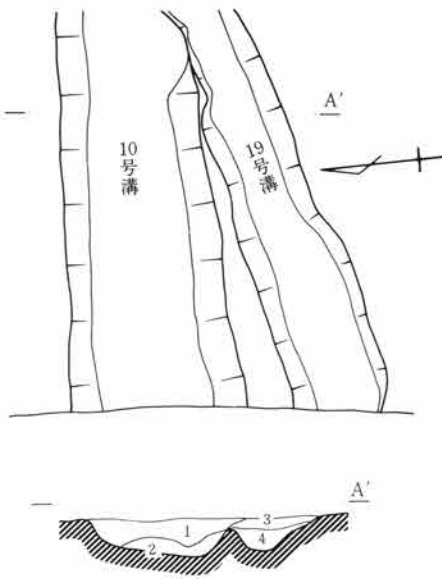
C地区、南東端、トレンチ内において検出した。南北にほぼ直状に走り、比較的大規模で、幅4.5m深さ1.2mを測る。断面形状は端正な逆アーチ状をなす。黄褐色泥濘層(Ⅲ層)を切り、覆土は灰褐色砂質土で、上部を浅間B軽石混土層が覆っている。時期、及び性格については、古代～中世の幹線水路と考えられる。

#### 21号～25号溝 (20、21、22、23図 図版)

C地区、及びD地区東南部、トレンチ内にて検出した。各溝の方向性については若干異なるところはあるが、おおむね北東～南西方向に走っている。平面、及び断面形状についてはやや不整形であり、この中には人為によらないものもあるかもしれない。覆土は黄褐色砂質土(Ⅲ層)で、薄い砂層を含み、幾重にも瓦層をなしている。時期は古墳時代と考えられる。

#### 26号～29号溝 (21、23図 図版15)

ほぼ將軍淵に治う大小の溝群であり、中、近世の水路と考えられる。



10号・19号溝

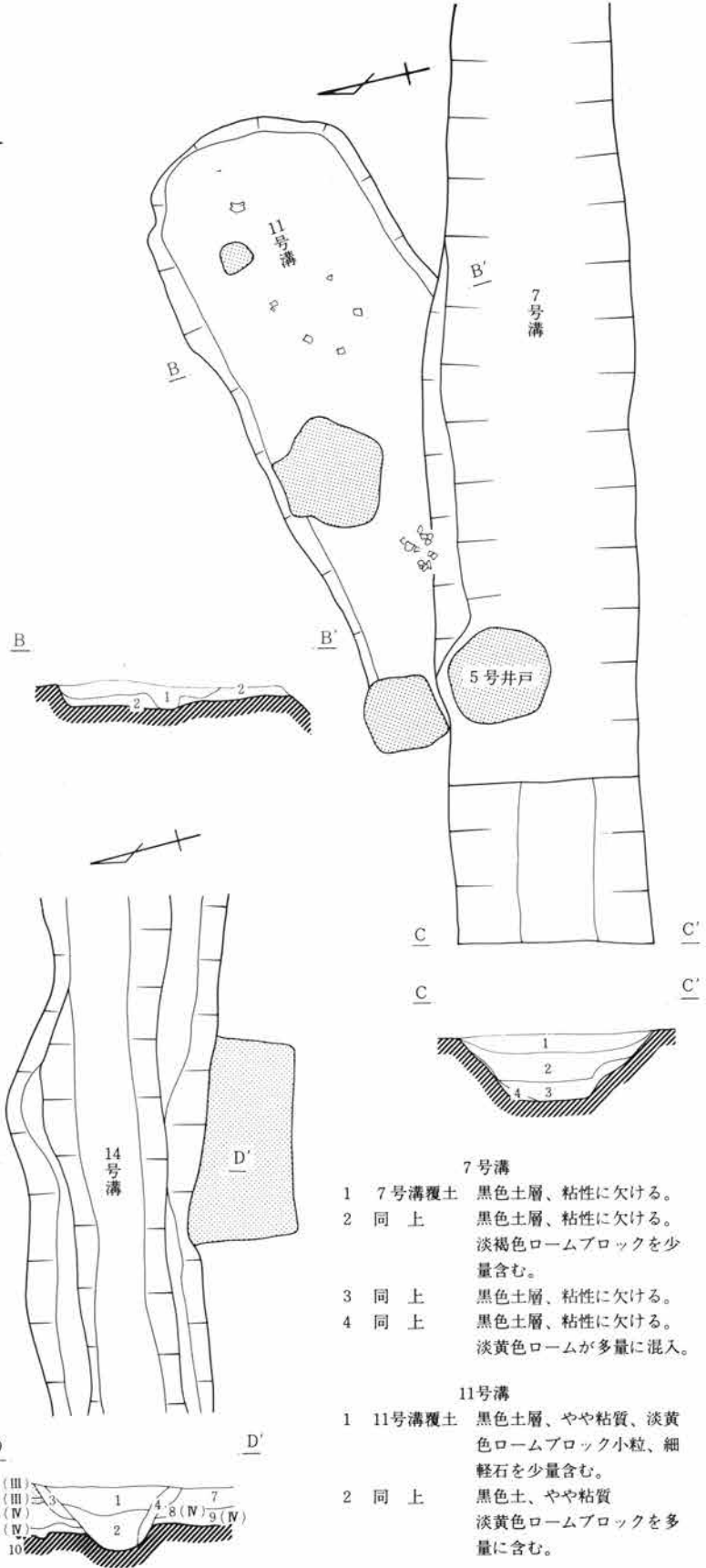
- 1 19号溝覆土 暗灰色土層、砂質、軽石を比較的多く含む。
- 2 同上 黒色土層、やや粘質、淡黄色ロームブロックを含む。
- 3 10号溝覆土 暗灰色土層、淡黄色ローム小ブロック、軽石細粒を含む。
- 4 同上 黒色土層、砂質、淡黄色ロームブロック、軽石細粒を含む。

L. 79.7m

14号溝

- 1 14号溝覆土 灰色土層
- 2 同上 灰色土層、水性堆積
- 3 同上 灰色土層、黄褐色榛名山二ツ岳噴出物(F A)を含む。
- 4 同上 灰色土層、黄色ローム小ブロックを混じえる。
- 5 III層 黄褐色土層、やや粘質 氾濫層
- 6 III層 黄褐色砂層、氾濫層
- 7 覆土 灰色土層
- 8 IV層 黒色土層、粘質、上部に榛名山二ツ岳噴出物(F A)層がブロック状に見られる。
- 9 IV層 黒色土層、淡黄色ロームブロックを含む。
- 10 V層 黄色土層、粘質、関東ローム層

0 1:60 2 M



7号溝

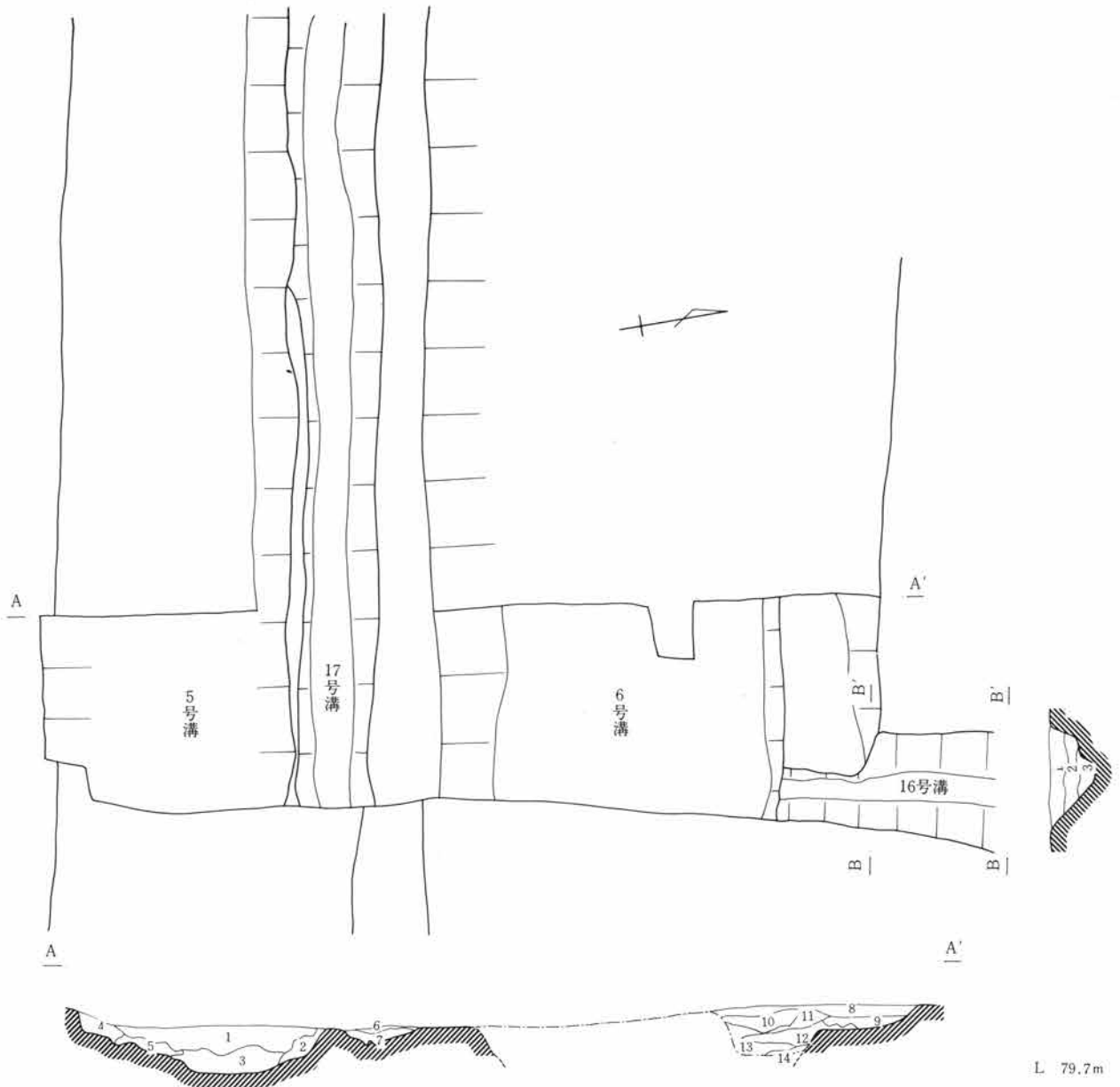
- 1 7号溝覆土 黒色土層、粘性に欠ける。
- 2 同上 黒色土層、粘性に欠ける。淡褐色ロームブロックを少量含む。
- 3 同上 黒色土層、粘性に欠ける。
- 4 同上 黒色土層、粘性に欠ける。淡黄色ロームが多量に混入。

11号溝

- 1 11号溝覆土 黒色土層、やや粘質、淡黄色ロームブロック小粒、軽石を少量含む。
- 2 同上 黒色土、やや粘質 淡黄色ロームブロックを多量に含む。

77図 7号、10号、11号、14号、19号溝

III 上滝遺跡



5号、6号、16号、17号溝

- |    |        |                      |
|----|--------|----------------------|
| 1  | 5号溝覆土  | 灰褐色土層、粘質             |
| 2  | 同 上    | 淡黄灰色土層、淡黄色ロームを多量に含む。 |
| 3  | 同 上    | 灰色土層、粘質              |
| 4  | 同 上    | 黒褐色土層、淡黄色ロームを含む。     |
| 5  | 同 上    | 褐色土層、淡黄色ロームを含む。      |
| 6  | 17号溝覆土 | 褐色土層、軽石細粒を含む。        |
| 7  | 同 上    | 褐色土層、淡黄色ローム粒を含む。     |
| 8  | 6号溝覆土  | 褐色土層、軽石細粒を多量に含む。     |
| 9  | 同 上    | 褐色土層、軽石細粒を多量に含む。     |
| 10 | 同 上    | 灰色土層、粘質、土器、板切れ等を含む。  |
| 11 | 同 上    | 褐色土層、粘質、軽石細粒、炭化物を含む。 |
| 12 | 同 上    | 灰色土層、粘質、下部に炭化物を含む。   |
| 13 | 同 上    | 灰色土層、粘質              |
| 14 | 同 上    | 黄灰色土層、粘質             |

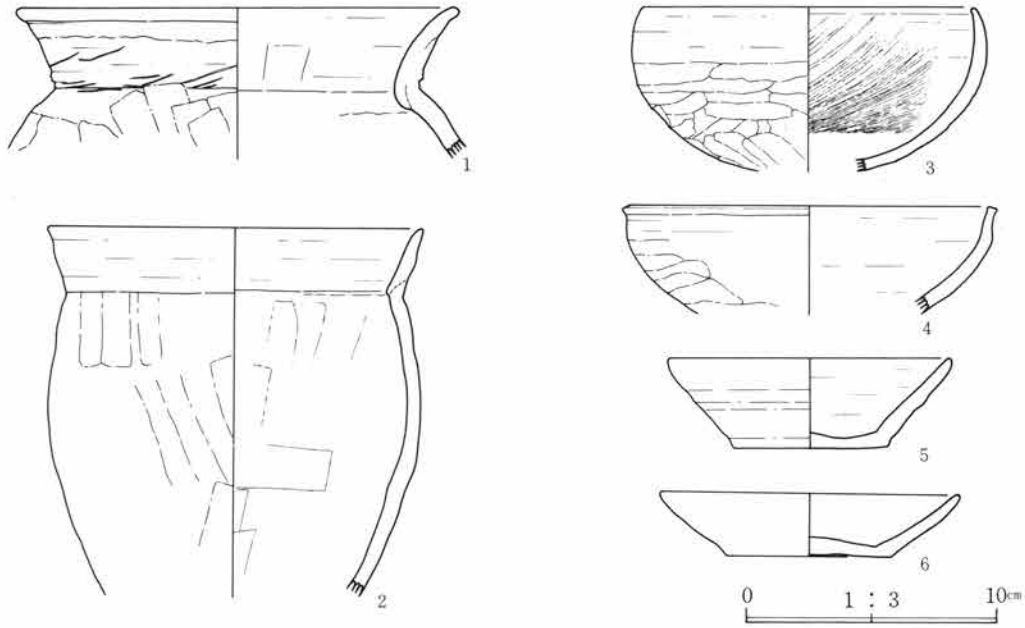
16号溝

- |   |        |                       |
|---|--------|-----------------------|
| 1 | 16号溝覆土 | 褐色土層、淡黄色ローム粒、軽石細粒を含む。 |
| 2 | 同 上    | 褐色土層、淡黄色ローム粒を含む。      |
| 3 | 同 上    | 褐色土層、粘質、淡黄色ローム粒を含む。   |

0 1:60 2M

78図 5号、6号、16号、17号溝





79図 11号溝(1~4)、14号溝(5、6)出土土器

37表 土器観察表 79図 11号溝(1~4)、14号溝(5、6)

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	鉢形	口 17.2	細砂を含む。 堅緻	にぶい橙 色	頸部は強く「く」の字 状に屈曲する。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケ ズリ、頸部横位にヘラあて痕がめぐる。 内面 口縁部一頸部ヨコナデ、肩部 ヘラナデ	肩部以下欠損 (25%)
2	小形鉢形	口 14.9 胴 15.0	細砂を多量に 混入。 堅緻	にぶい黄 橙色	頸部の屈曲は緩い。口 縁部は直状に外傾し、 胴部は上部がやや膨ら む縦長、歪みがある。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部丁寧な ナデ	(25%)
3	杯形	口 13.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部は緩く内彎し、 器壁は端部へ漸次薄く なる。最大径胴上位に 位置する。	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ胴中 部一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ後斜行 ヘラ研磨、間隔2~5mm	底部欠損 (25%)
4	杯形	口 14.4	砂粒の混入少 ない。 堅緻	橙 色	口縁部がややくびれ、 先端が小さく肥厚し、 平坦面に浅い凹線を持 つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ→ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ	底部欠損 (12.5%)
5	灯明皿	口 11.9 高 3.6	砂粒の混入少 ない。	灰白色	口縁部はわずかに内彎 する。底部は平底で、 外反気味に立ち上り外 側に鋭い稜を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、底部糸切り 痕 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	(13.5%)
6	灯明皿	口 11.4 高 3.2	細砂を多量に 含む。 やや軟質	淡橙 色	底部から口縁部につ けてやや波を打ちなが ら直状に外傾する。底 部は平底	外面 口縁部ヨコナデ、底部糸切り 底 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	(40%)

III 上滝遺跡

38表

溝 計 測 表

(単位 cm)

溝番号	上端幅	下端幅	深 さ	方 向	時 期
1	230	200	30	N-30°-W	古 墳 時 代
2	(北側) 115 (西側) 140 (南側) 148 (東側) 158	53 42 75 65	48 47 66 45	N-3°-E を主軸とし、 方形にめぐる。	南 北 朝 期 以 後
3	380	50	100	N-10°-E	近 世
4	375	100	73	N-80°-W	中、近 世
5	200	60	53	N-80°-W	中、近 世
6	300	100	80	N-80°-W	近 世 以 後
7	140	40	26	N-8°-E N-80°-W	中 近 世
8	100	50	17	N-15°-W	古 代 以 後
9	260	160	13	N-15°-W	古 墳 時 代
10	84	50	20	N-70°-E	中、近 世
11	100	95	15	N-75°-E	古 墳 時 代
12	70	48	18	N-85°-W	近 世 以 後
13	78	48	20	N-85°-W	同 上
14	140	58	52	N-85°-W	中、近 世
15	90	28	30	N-55°-W	近 世 以 後
16	100	32	40	N-10°-E	中、近 世
17	70	35	15	N-80°-W	中、近 世
18	60	40	33	N-80°-E	古 代 以 後
19	120	80	40	N-90°-E	同 上
20	420	80	100	N-0°	同 上
21	700	200	400	N-15°-E	古 墳 時 代
22	400	100	70	N-15°-E	同 上
23	600	420	140	N-20°-E	同 上
24	500	260	40	N-65°-E	同 上
25	200	80	60	N-10°-E	同 上
26	420	220	60	N-0°	古 代 以 後
27	340	180	60	N-60°-E	同 上
28				N-20°-E	同 上
29	200	20	60	N-25°-E	同 上

(5) 井 戸 址

1号井戸址(80図 図版48)

B1区、中央部東寄り土壇群の東に隣接して位置する。平面形状は円形、断面形は下半部がU字状で上半部がロート状に広がっている。規模は上端径が1.64m、下端径が90cm、深さ1.6m、覆土はやや砂質の灰褐色

土層であった。遺物の出土はない。時期は形状、及び覆土の所見より中世以後のものと思われる。

#### 2号井戸址 (80図 図版48)

B1区、南部に位置する。平面形状は円形、断面形はU字状で、規模は上端径98cm、下端径84cm、深さ1.45mである。覆土は白色粘質土を含む粘質土。遺物は、径40前後の扁平な角閃石安山岩の円礫2個の出土を見るだけで他にはない。時期は覆土の所見から古代以後と思われる。

#### 4号井戸址 (80図 図版48)

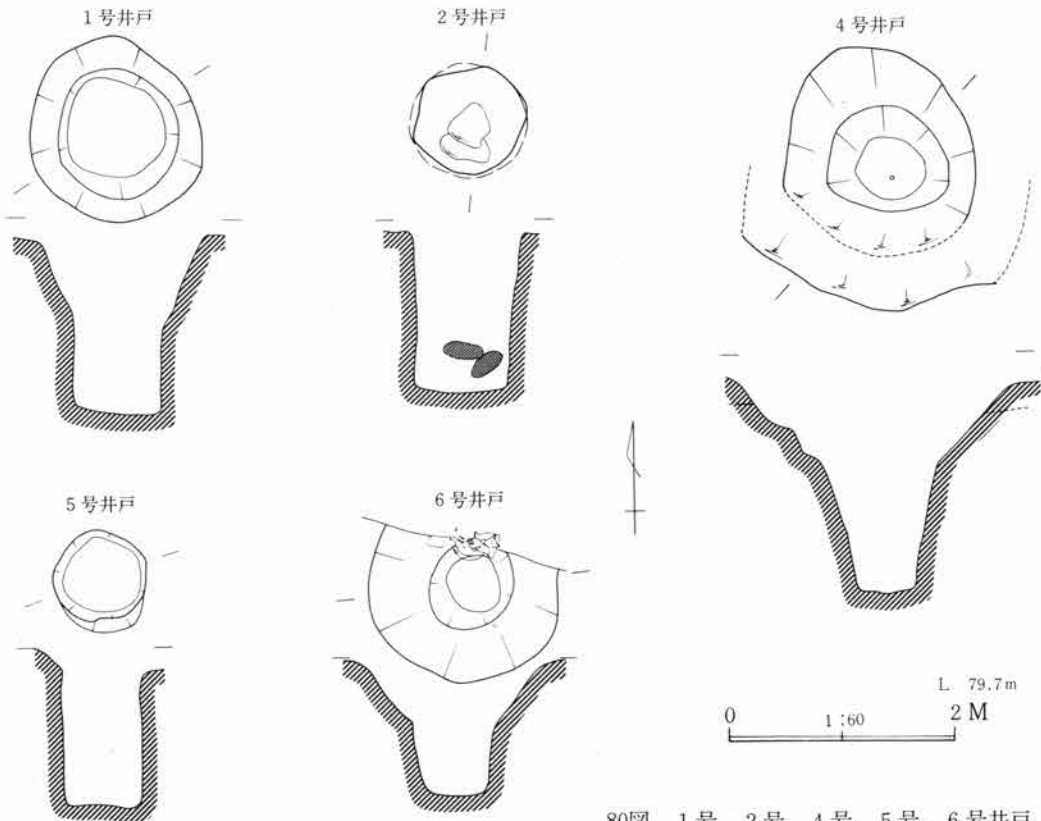
B2区、北東部7号溝の南東コーナー部に重複して位置する。平面形状は円形、断面形は上半部がロート状に広がる。規模は上端径1.7m、下端径62cm、深さ1.9m。遺物は検出されず、時期は不明。(佐藤)

#### 5号井戸址 (80図 図版49)

7号溝と重複する。同溝の調査中に発見されたものと、湧水が激しかったため、土層断面の実測ができなかったが、7号溝より新しい時期の構築であることが判明している。形状は、現状をみると垂直に落ちる状態を示すが、上部形態は7号溝のため不明である。おそらくロート状に開く形態をとるものであろう。規模は、上端径82cm、下端径66cm、深さ1.4m。井戸内からの遺物は出土せず、礫が数個出土したのみである。構築時期は不明である。

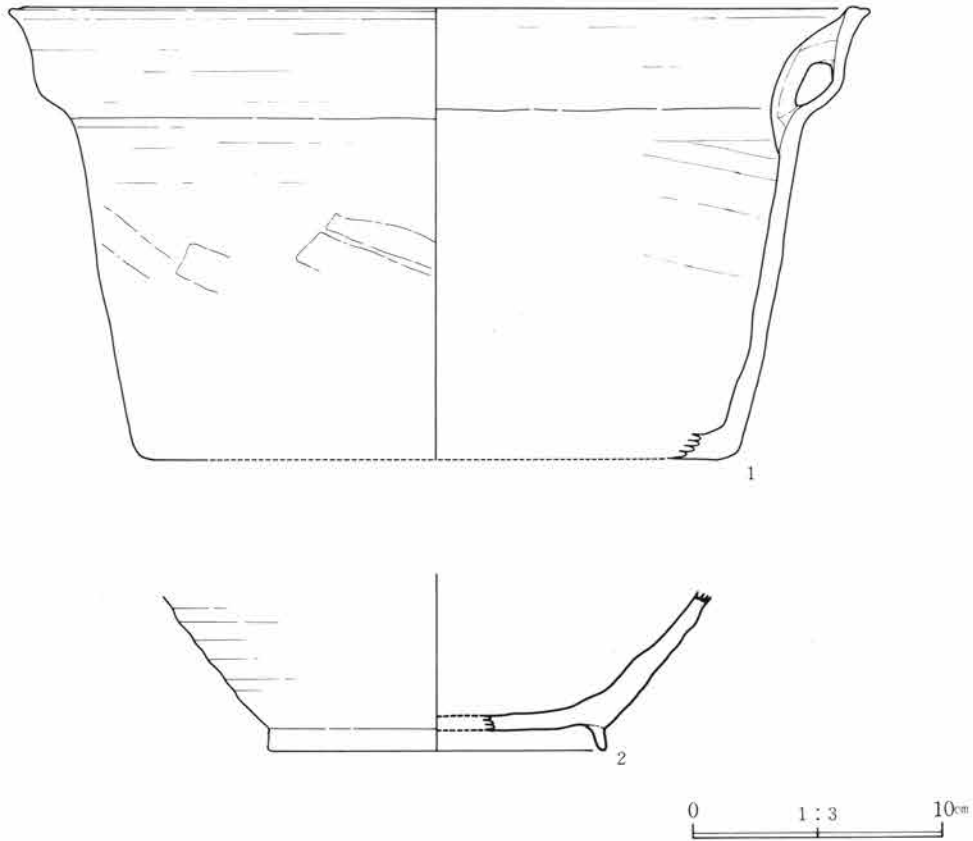
#### 6号井戸址 (80、81図 図版49、77)

14号溝の東側、調査区域の東端に位置する。平面形は円形を呈し、断面は上半部が大きく広がり漏斗状である。規模は上端径1.08m、下端径45cm、深さ1.26mを測る。漏斗の皿の部分には、大小の礫が多量に投げ棄てられた状態で堆積しており、その上に軟質陶器製内耳鍋の破片が出土している。土器片は一ヶ所に集中している。おそらく、破損して使用不能のものを、埋まりつつあった井戸内に、石とともに廃棄したものであろう。調査中底部は湧水した。(巾)



80図 1号、2号、4号、5号、6号井戸

III 上滝遺跡



81図 6号井戸上面出土土器

39表

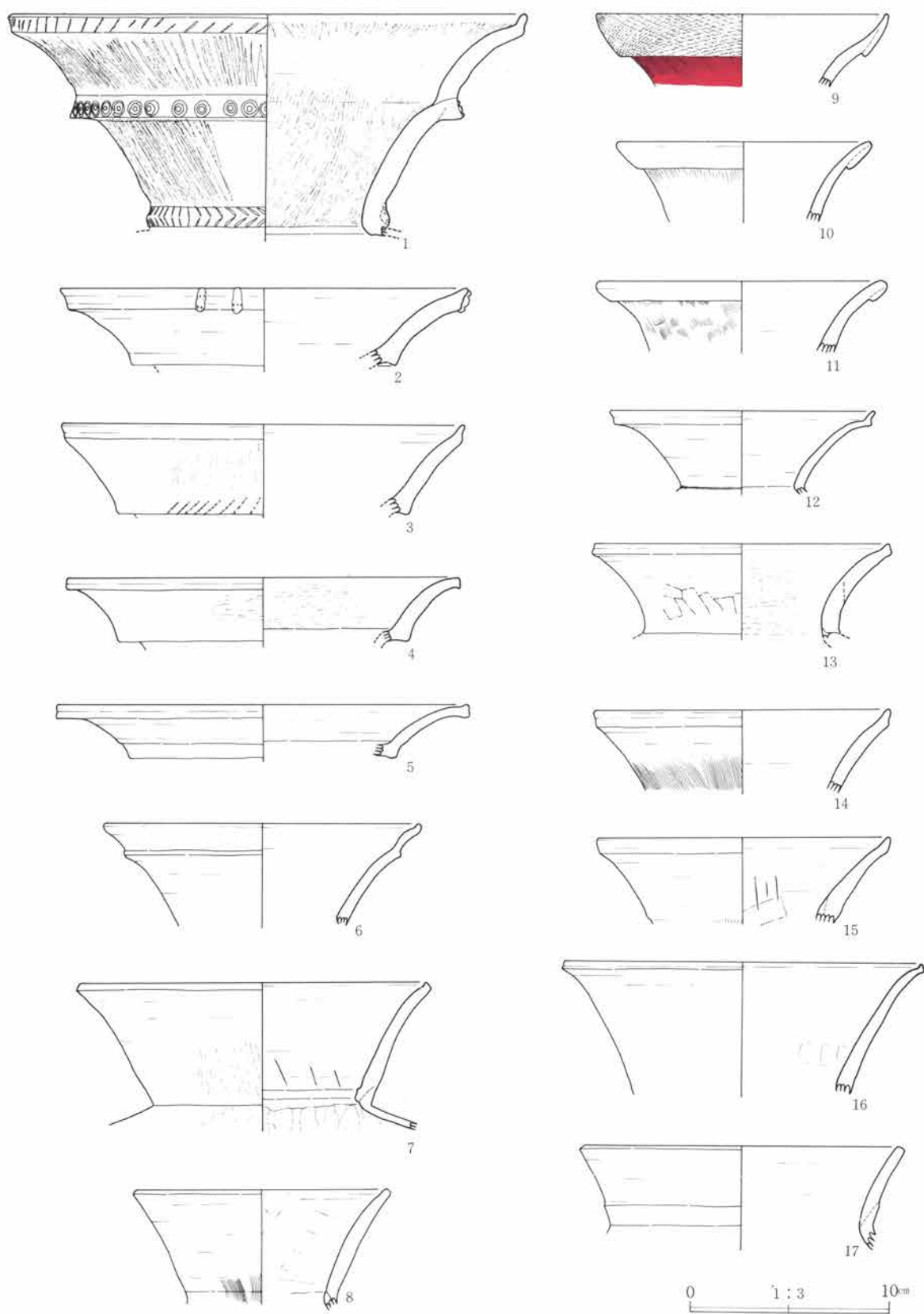
土器観察表 81図 6号井戸上面

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	内耳付土鍋	口 34.6 高 18.0	細砂を含む。 堅緻	灰色	口縁部はやや内彎しながら外傾し、口縁端部に平坦部を作り弱い凹線がめぐる。端部外側はわずかに膨れ平底をなす。内面に把手が2個付く。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部ナデ、胴下半部は器面が荒れている。底面の荒れはとくに著しい。 内面 口縁部一胴部ヨコナデ、底部は荒れている。	16世紀
2	鉢 焼きしめ陶器		生地には白色 鉾物、黒色鉾物を含む。			内面の磨耗が著しい。	常滑II期

(6) 包含層出土土器

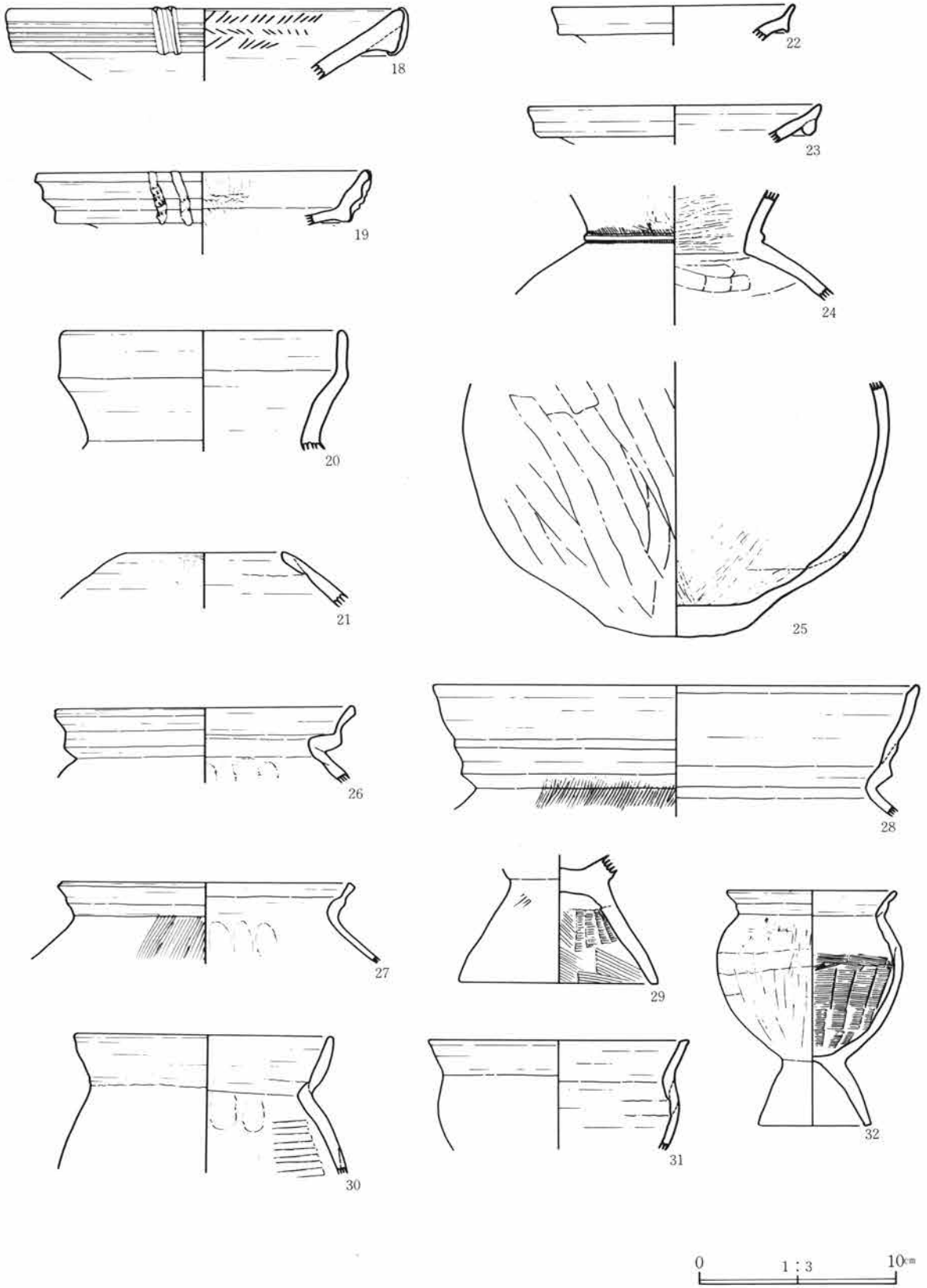
遺構外、または住居址覆土上部などより多量の土器が出土している。このうち完形に近いものや遺構に伴う土器の中になく類形、重要な意味を有していると考えられる土器をここに取り上げた。

なお、ここには9号溝付近包含層出土土器は含まれていない。

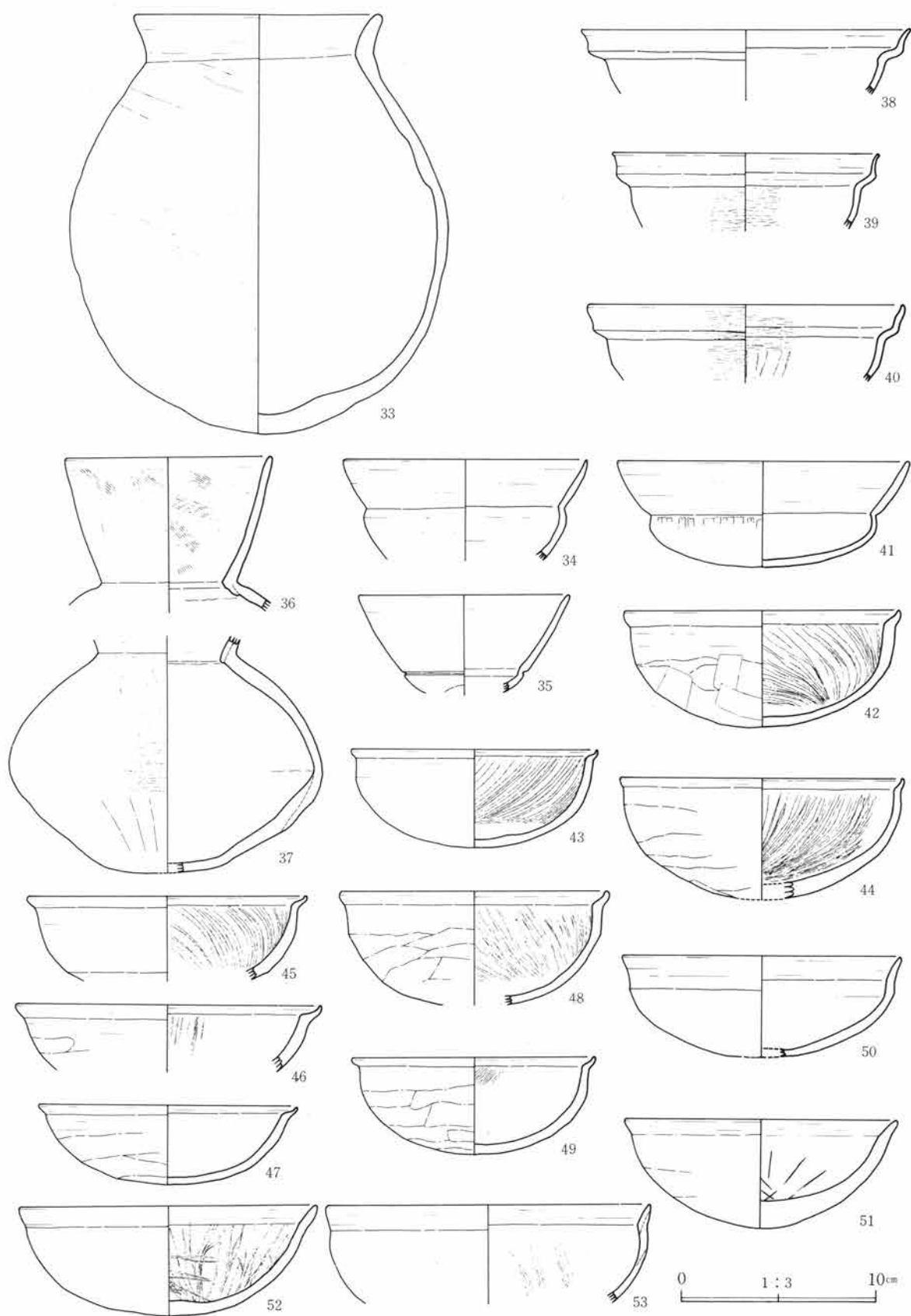


82図 包含層出土土器 (1)

III 上滝遺跡

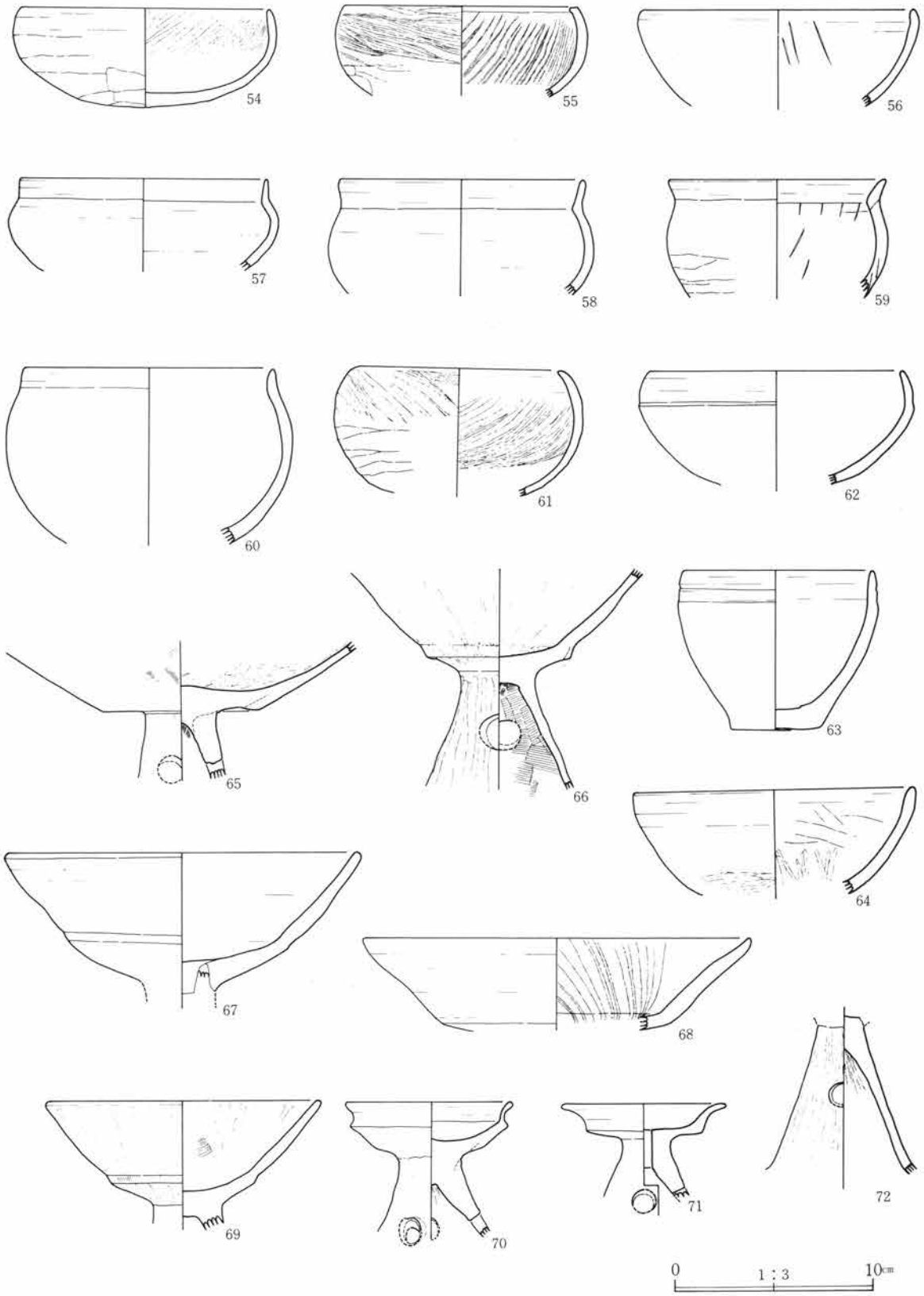


83図 包含層出土土器 (2)



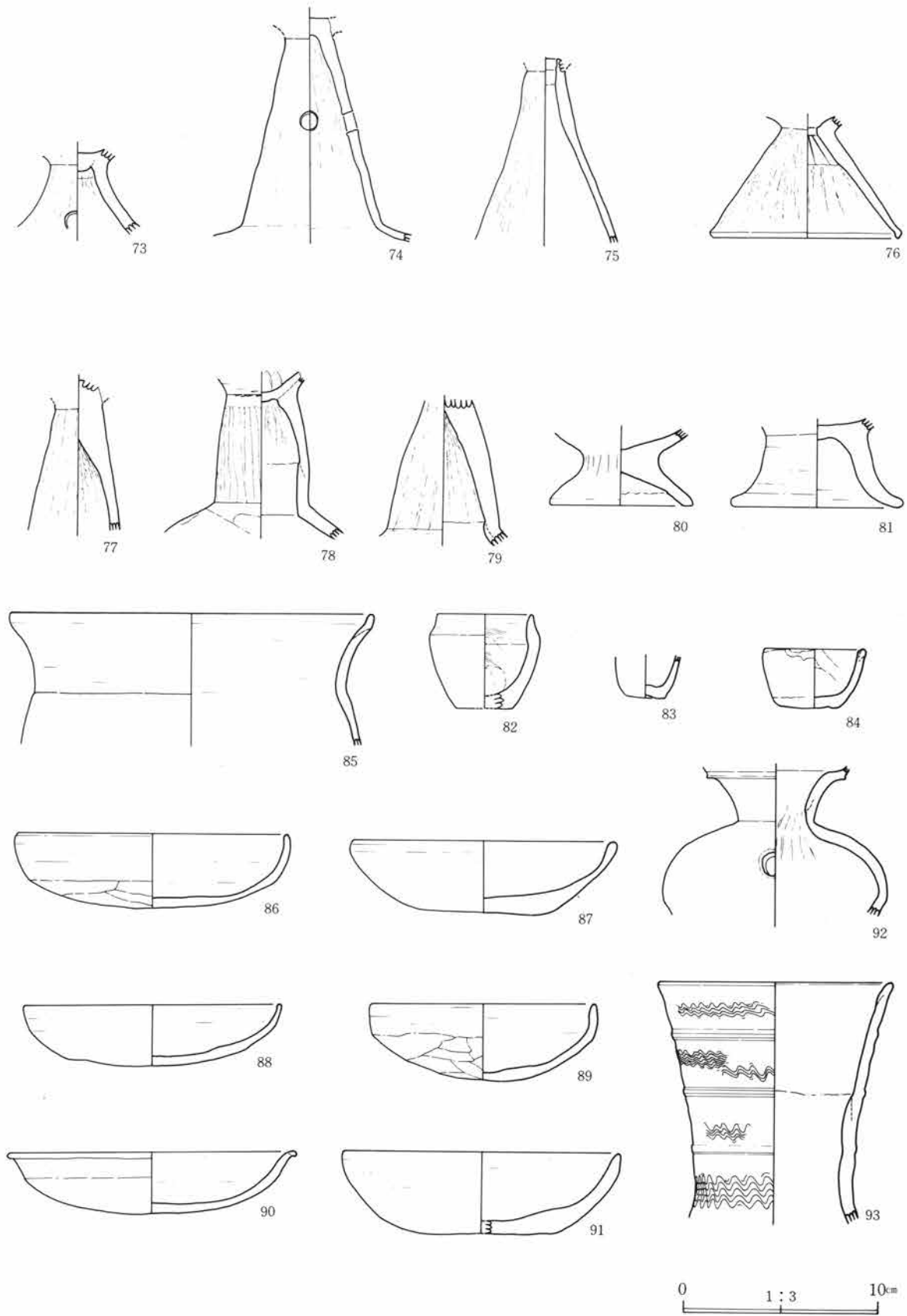
84図 包含層出土土器 (3)

III 上滝遺跡

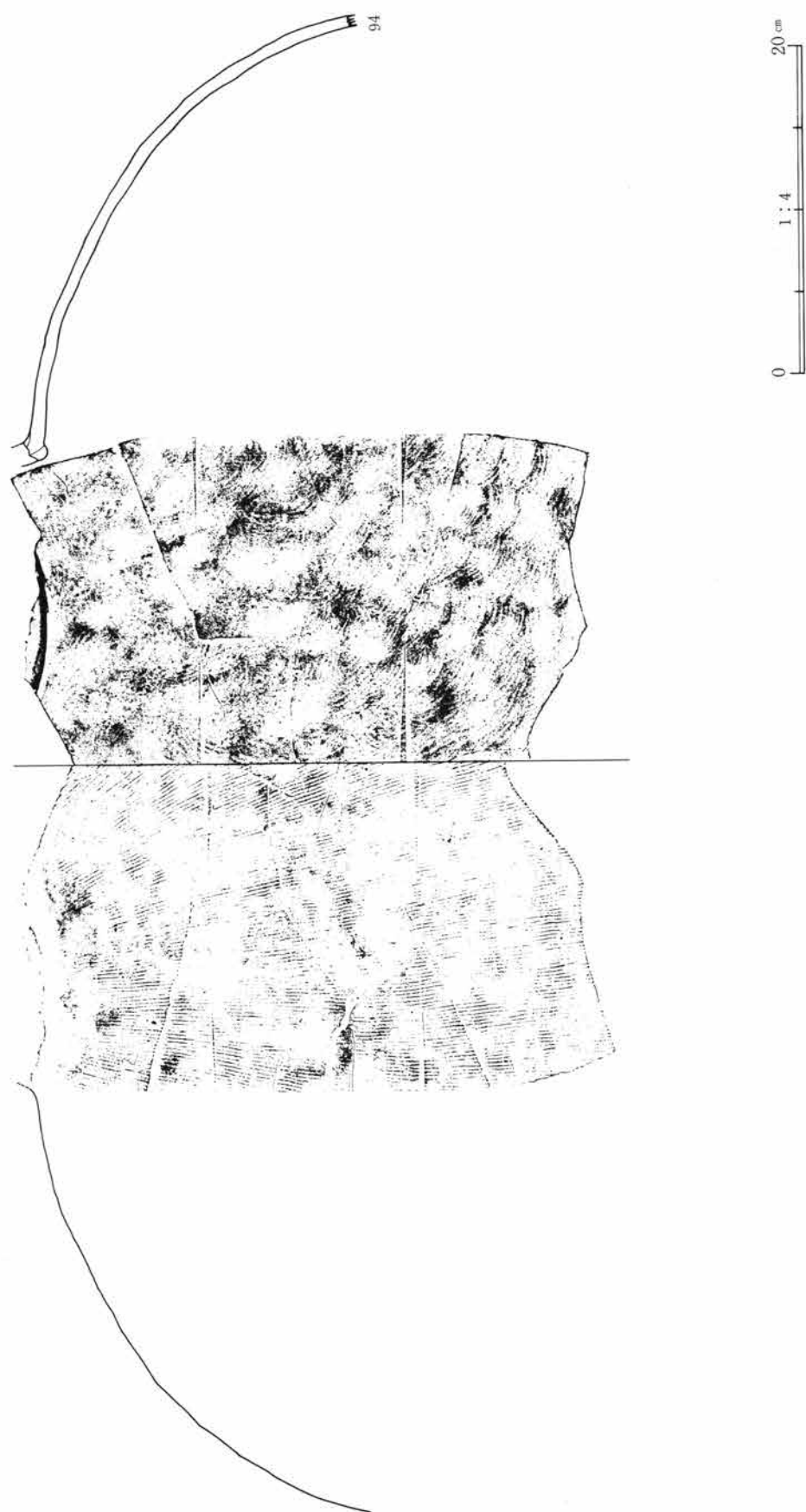


85図 包含層出土土器(4)

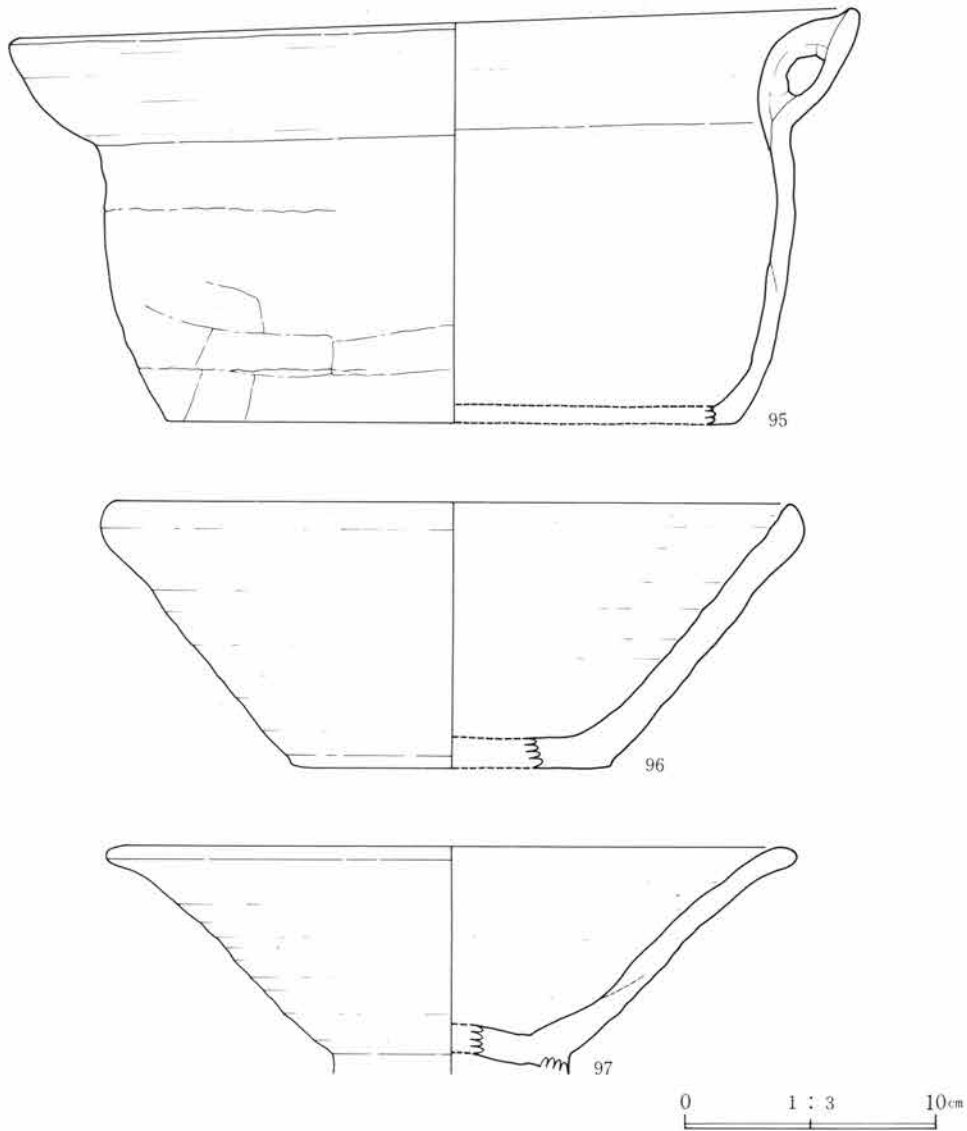




86図 包含層出土土器 (5)



87図 包含層出土土器(6)



88図 包含層出土土器(7)

40表

土器観察表 82~88図 包含層

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
1	壺形	口 25.9	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は「く」の字状に強く屈曲し、大きく外反する。口縁部は頸部に対し一旦内折し外側に突帯を作り大きく外反する。頸部屈曲部にも突帯をめぐらす。口縁端部は外側に平坦面を作り小さく直立する。	<p><b>外面</b> 口縁部平端面ヨコナデ後柄状具により斜位刺突をめぐらす。口縁部ハケメ状ヨコナデ後、縦方向ヘラ研磨。幅2mm、間隔2~4mm、口縁部突帯部、円形浮文に竹管を刺突し、重円形浮文をめぐらす。頸部ヨコナデ状ハケメ、ヨコナデ後縦方向暗文状研磨、幅2mm、間隔3mm頸部屈曲部の突帯上にはヘラ状具刺尖による羽状刻目を施す。</p> <p><b>内面</b> 口縁端部ヨコナデ、口縁上部縦方向暗文状研磨、幅1.5mm、間隔2~3mm、下部ナデ、頸部ナデ後、ヘラ研磨、緻密</p>	頸部以下欠損 (25%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
2	壺形	口 25.0	砂粒の混入少ない。やや軟質	橙 色	口縁部は頸部に対し、明瞭な稜を持つ段を作り、いわゆる複合口縁をなす。口縁部は外反気味に大きく外傾し、端部がわずかに直立しながら尖り外側に面を作る。この部分には2条の縦位の棒状浮文を貼付し上に櫛状具による刺突をする。	外面 口縁部ヨコナデ後、棒状浮文を施す。 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片 (10%)
3	壺形	口 23.0	細砂を含む。やや軟質	橙 色	頸部から口縁部にかけて外側に強い稜を作って内折し、口縁部は外傾する。端部はわずかに直立し、外側にやや彎曲平坦面を作る。	外面 口縁部ヨコナデ、口縁下端内折部は斜位の櫛状具による刺突がめぐる。	口縁部破片 (9%)
4	壺形	口 20.0	細砂、中砂を含む。やや軟質	橙 色	頸部から口縁部にかけて明瞭な稜を作り強く内折する。口縁部はそこから大きく外反する。端部外面に狭い平坦面を作る。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	頸部以下欠損 (18%)
5	壺形	口 21.0	細砂を含む。堅緻	浅黄橙色	複合口縁部は平坦面から鋭い稜を作って著しく広がる。端部は肥厚し、角ばり外面に1条の弱い凹線を作る。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	口縁部上部破片 (7.6%)
6	壺形	口 14.0	細砂を含む。堅緻	淡 橙 色	口縁部はいわゆる複合口縁をなす。外側に強い稜を作り2段に外反する。端部はわずかに内彎する。	外面 口縁部—頸部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	頸部以下欠損 (13%)
7	壺形	口約17.1	細砂を含む。堅緻	浅黄橙色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲する。口縁部はゆるく外反する。口縁部内側が小さく突出する。	外面 口縁部上半ヨコナデ、下半縦方向ヘラ研磨、肩部粗いヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、肩部指押え痕がめぐる。	頸部は全周する (8.3%)
8	壺形	口約13.0	細砂を多量に含む。やや軟質	淡 橙 色	口縁部は大きく外反する。	外面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、頸部ハケメ↓をめぐらす。 内面 口縁部ハケメ後、ヘラナデ	頸部以下欠損 (13%)
9	壺形	口 14.8	細砂を含む。やや軟質	淡黄橙色	頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁部は幅広の粘土帯を外側より継ぎ重ね合わせる。外側に段を作り内側は内彎する。	外面 口縁部網目状付加条、間隔5mm、頸部ハケメが浅く細かい。口縁部粘土帯貼り合わせる前の段階で施される。頸部にはハケメ後、丹彩が施されている。 内面 口縁部—頸部ナデ	頸部下半以下欠損 (43%)
10	壺形	口 12.8	細砂を含む。やや軟質	浅黄橙色	頸部から口縁部にかけてゆるく外反する。口縁部はいわゆる折り返し口縁をなす。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後、ナデ 内面 ナデ	頸部以下欠損 (22%)

## 6 検出した遺構・遺物 (6)包含層出土土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
11	壺形	口 14.5	細砂を含む。 堅緻	にぶい橙 色	口縁部は大きく外反し いわゆる折り返し口縁 をなす。	外面 口縁折り返し部ヨコナデ以下 ハケメ後、ナデ 内面 器面が荒れている。	口縁部破片 (13%)
12	壺形	口 13.3	砂粒の混入少 ない。 堅緻	にぶい橙 色	頸部は鋭く「く」の字 状に屈曲し、口縁部は さらに強く外反し、端 部が短く外反気味に直 立する。器壁は薄い。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、頸部 ハケメ 内面 口縁部一頸部ヨコナデ	頸部以下欠損 (13%)
13	壺形	口 18.0	砂粒を含む。 堅緻	灰黄褐色	頸部から口縁部につ けて著しく外反する。口 縁端部はわずかに立ち 上り外側に平坦面を作 り、浅い凹線を施す。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナ デ	頸部以下欠損 (10%)
14	壺形	口 15.0	細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	口縁部は強く外反し、 端部は外側に平坦面を 作りやや立ち上る。	外面 口縁部ヨコナデ、口縁下部 一頸部ハケメ 内面 ヨコナデ	口縁部破片 (7%)
15	壺形	口 14.7	細砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部は大きく外反 し、端部が短く内折し 立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、下部一頸部 ヘラケズリ後、ヨコナデ	
16	壺形	口 16.5	細砂の混入少 ない。 堅緻	淡 橙 色	頸部から口縁部につ けてほぼ直状に大きく外 傾し、口縁上部が強く 外反する。端部が小さ く直立し、外側に幅の 狭い平坦面を作り1条 の浅い凹線を施す。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、口縁下部 一頸部ナデ、一部にヘラあて痕がめぐ る。	頸部以下欠損 (10%)
17	壺形	口 15.8	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部は「く」の字状に 屈曲し、口縁部は外側 に強い稜を持つ段を作 る。	内外面ともに荒れており観察困難。	頸部以下欠損 (33%)
18	壺形	口 22.0	細砂を多量に 含む。 やや軟質	浅黄橙色	口縁部は大きく外傾し 口縁端部は著しく肥厚 して外面に幅広の面を 作る。この部分に平行 する3本の凹線をめぐ らし、縦位に2~3本 の棒状浮文を付す。	外面 口縁部3条の平行する凹線 文、この後、縦位2本の棒状浮文を貼 付する。 内面 口縁部3列にヘラ状具による 刺突を斜位に、羽状にめぐらす。	口縁部破片 (11%)
19	壺形	口 17.0	砂粒の混入少 ない。 堅緻	浅黄橙色	口縁部は大きく外傾 し、上部で強く内折し て直立する。外面には 2条の太い凹線を施 し、この後、2本の棒 状浮文を貼付して上に 櫛状具による刺突を施 す。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片 (10%)
20	壺形	口 14.0	細砂を含む。 堅緻	にぶい橙 色	頸部は強く屈曲し、比 較的強く外反する。口 縁部との境で稜線を作 り内折し、口縁部は直 立気味になる。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	頸部以下欠損 (13%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
21	無頸壺形	口 8.0	砂粒の混入少ない。堅緻	橙 色	頸部を持たない。胴部はほぼ球形をなすと思われる。	外面 口縁部→胴上部ヨコナデ後、斜方向の緻密なヘラ研磨 内面 ヨコナデ	肩部破片 (16%)
22	壺 形	口 12.6	砂粒の混入少ない。堅緻	赤 褐色	口縁端部は短く直立し、外側に幅広い平坦面を作る。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部破片 (20%)
23	壺 形	口 15.0	細砂を多量に含む。やや軟質	浅黄橙色	頸部が大きく外傾し、断面三角形の折り返し口縁をなす。	外面 口縁折り返し部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ後、ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	口縁部以下欠損 (20%)
24	壺 形	頸 9.0	細砂を含む。堅緻	にぶい橙 色	頸部は強く屈曲し、細い突帯をめぐらす。	外面 頸部→肩部ハケメ後、縦方向ヘラ研磨 内面 頸部ヘラナデ、肩部指押え後、ヘラケズリ	頸部破片
25	壺 形	胴 21.7	細砂を含む。やや軟質	浅黄橙色	胴部は球形に近い。下部接合部で弱い段を作る。底部は丸い膨らみを持つ平底	外面 胴下半部ヘラケズリ、上半部ナデ 内面 胴部→底部ヘラナデ	胴上半部以上欠損
26	甕 形	口 14.9	細砂を含む。やや軟質	灰 白色	頸部は鋭く屈曲し、口縁部内面に著しく幅広い平坦部を作る。器壁は厚く丹念でない。	外面 口縁部ヨコナデ、肩部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部→肩部指押え	肩部以下欠損 (87%) 歪みが目立つ
27	甕 形	口 12.3	細砂を含む。堅緻	浅黄橙色	口縁端部は丸く肥厚し先端に凹線がめぐる。段の屈折は弱い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ状具によるおさえ痕が目立つ。肩部ハケメ、1単位11本前後 内面 口縁部ヨコナデ、頸部→肩部指押え痕がめぐる。	口縁部、肩部破片。(2片) (44%)
28	甕 形	口 24.5 口縁部 5.6	細砂を含む。堅緻	にぶい黄 橙色	口縁部が著しく長く伸びる。口縁部下半の段は比較的屈折が強い。器体は大きく器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケメ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部指押え痕、口縁内接部に接合痕が見られる。	(24%)
29	小形甕形	口 8.7 高 11.9	細砂を含む。(角閃石の混入目立つ) 堅緻	にぶい橙 色	口縁部外側にわずかに段が見られる。胴部は上部に最大径を持ち、比較的形は整っている。脚台部は端部内側に余剰粘土のみ出しはあるが、折り返しはない。	外面 口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ、胴上部←方向後、↓方向、胴下部↑方向、脚台部縦方向のナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部は胴中位に明瞭な接合痕あり、これより上ナデ、下ハケメ←、底部ナデ、脚台部ナデ	(60%)
30	小形甕形	口 13.3	細砂を多量に含む。やや軟質	灰 色	頸部はゆるくくびれ、口縁部は直状に外傾する。	外面 器面が荒れている。 内面 口縁部ヨコナデ、頸部から胴部粗いナデ	胴下部以下欠損 (21%)
31	小形甕形	口 13.1	細砂を多量に含む。堅緻	明赤褐色	口縁部やや内彎気味に外傾し、頸部の屈曲は弱い成形が粗雑	外面 口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ、頸部接合部の整形が粗雑 内面 口縁部ヨコナデ、頸部指押え、胴部粗いハケメ←	肩部以下欠損 (64%)
32	甕 形		細砂を含む。堅緻	にぶい橙 色	脚の開きは大きく器壁は厚い。	外面 ハケメ後、ナデ 内面 底部ヘラナデ、脚部天井部ヘラナデ、以外は横方向ハケメ	脚部のみ

## 6 検出した遺構・遺物 (6)包含層出土土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
33	甕形	口 12.5 高 21.4 胴 19.5	細砂を多量に含む。 堅緻	橙 色	頸部は弱く彎曲し、口縁部はやや外反する。胴部は口縁部より径が大きくやや下膨らみである。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ヘラナデ、下半部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部丁寧なナデ	(85%)
34	埴形	口 12.7	細砂を多量に含む。 堅緻	橙 色	頸部は鋭く屈曲し、口縁部はやや短く内彎気味に大きく広がる。器壁は非常にうすい。	外面 ヨコナデ、胴部ヘラ研磨 内面 口縁部器面が荒れ観察困難、胴部ハケメ後、ナデ	底部欠損 (12%)
35	埴形	口 10.9	細砂を含む。 やや軟質	浅黄橙色	口縁部内彎気味。胴部との間をヘラ状具による沈線で画しくびれを持たない。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラ状具による沈線、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ	底部欠損 (32%)
36	埴形	口 10.6	細砂を含む。 堅緻	灰 白 色	頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し、口縁部は内彎気味に長く、やや外傾する。器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、口縁部一肩部ハケメ後、縦方向ヘラ研磨。間隔2~5mm 内面 ハケメ後、ヨコ方向の粗いヘラ研磨、肩部指押え痕、ナデ	肩部以下欠損 (20%)
37	埴形	胴 7.2	粗砂、中砂を多量に含む。	赤 褐 色	頸部は強く「く」の字状に屈曲し、胴部は算盤玉状の扁球形をなす。上半部の器形は端正であるが下半部は歪みが目立つ。器壁は厚い。	外面 胴上半部丁寧な研磨、胴下半部不定方向ヘラケズリ、粗い研磨 内面 肩部指押え、胴部ヘラナデ	口縁部、底部、欠損
38	杯形		砂粒の混入少ない。 堅緻	赤 褐 色	口縁部はS字状の段を作る。器体は比較的浅く、器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胴下部以下欠損 (10%)
39	杯形	口 13.7	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部は緩いS字状の段を作る。屈曲部の稜線はいずれも弱い。器壁は非常に薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部平滑なナデ	口縁部破片 (83%)
40	杯形	口 16.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	赤 褐 色	口縁部は緩いS字状の段を作る。口縁端部は外反しない。器壁は非常に薄い。	外面 口縁部一胴上部棒状具による横方向の緻密な研磨 内面 口縁部一胴上部棒状具による横ナデ後、胴部放射状ヘラ研磨、幅1mm間隔3~5mm	胴下部以下欠損 (8%)
41	杯形	口 14.9 高 5.4	細砂を多量に含む。	浅黄橙色	胴部は浅く、肩部は弱く膨らみ、頸部は鋭くくびれる。口縁部は内彎気味に大きく外傾し、丸底。器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、頸部一底部ヘラケズリ後、ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ヘラナデ、ヘラあて痕目立つ。	(29%)
42	杯形	口 14.0 高 6.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	明赤褐色	口縁部内斜面は内彎し端部で口縁先端がハネ上る。	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ、胴部以下ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨。幅0.5mm	(37%)

III 上滝遺跡

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
43	杯形	口 12.7 高 5.1	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	口縁部内斜面は短く先端が小さくハネ上る。胴部は上部が直立気味になり比較的深い。丸底	外面 口縁部→胴上部ヨコナデ、胴部→底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨。幅1mm、間隔3.5~1mm、底部ナデ	(100%)
44	杯形		細砂を含む。 堅緻	橙 色		外面 口縁部ヨコナデ、胴部→底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、口縁部→底部放射状ヘラ研磨	
45	杯形	口 14.3	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	口縁部内側に短く内斜面を作り、先端部は小さくハネ上る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨	底部欠損 (33%)
46	杯形	口 10.5	砂粒の混入少ない。 堅緻	明赤褐色	口縁内斜部はやや内傾し、端部は小さくハネ上る。	外面 口縁部→頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ← 内面 口縁部ヨコナデ、胴上部ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨	底部欠損 (8%)
47	杯形	口 13.3 高 4.1	粗砂を含む。 堅緻	橙 色	口縁部内斜面は内傾が目立ち頸部内側の稜は強い。	外面 口縁部→頸部ヨコナデ、胴部→底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部→底部丁寧なナデ	(12%)
48	杯形	口 13.7 高 6.0	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部は小さくハネ上る。	外面 口縁部→胴上部ヨコナデ、胴部不定方向ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴上半部ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨。幅1mm、間隔4mm	(30%)
49	杯形	口 12.5 高 5.5	細砂を含む。 軟質	橙 色	口縁先端部が小さくハネ上る。丸底	外面 口縁部→胴上部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行ヘラ研磨。器面が荒れている。	(72%)
50	杯形	口 14.3 高 15.2	細砂を含む。 堅緻	橙 色	頸部がゆるくくびれ、内側に稜を作らない。外側は肩部に弱い稜を作る。丸底	外面 口縁部→頸部ヨコナデ、胴部→底部ヘラケズリ後、ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部以下ナデ	底部欠損 (7%)
51	杯形	口 13.9 高 5.6	細砂を含む。 (角閃石の混入目立つ)	橙 色	口縁部はわずかに外傾し、頸部内側の稜は弱い。丸底。器壁は厚い特に底部の肥厚が目立つ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部→底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部→底部ヘラナデ、ヘラあて痕が残っている。	(28%)
52	杯形	口 14.5 高 5.6	粗砂、中砂を多量に含む。	橙 色	口縁部はわずかに外傾する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、粗い縦方向のヘラ研磨、幅2mm、間隔5mm前後	(24%)
53	杯形	高 16.0	砂粒の混入少ない。	橙 色	頸部がゆるくくびれ、内面の稜は弱い。口縁部は比較的長く内斜面は、やや膨らむ。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ← 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、胴部斜行ヘラ研磨、幅3mm、間隔1cm	底部欠損 (33%)



## 6 検出した遺構・遺物 (6)包含層出土土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
54	杯形	口 12.6 高 5.0	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	器体は比較的浅く胴部から口縁部にかけて強く内側へ彎曲し、口縁部はほぼ直状に内傾する。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部へラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ後、斜行へラ研磨、胴部ナデ	(100%)
55	杯形	口 11.3	砂粒の混入少ない。 堅緻	明赤褐色	胴部から口縁部にかけて強く内側へ彎曲する。口縁端部に平面を作る。胴下部以下の器壁が薄い。成形は端正である。	外面 口縁部ヨコナデ後、口縁部一胴上部横方向の緻密な研磨、胴下部以下へラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ後、斜行へラ研磨	底部欠損 (35%)
56	杯形	口 13.7	細砂を含む。 やや軟質	橙 色	胴部は底部からゆるく膨らみながら広がる。口縁部は短く強く内彎し弱い稜線を作る。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ、両面とも器面が荒れており詳しい観察困難	底部欠損 (40%)
57	杯形	口 12.6	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	胴部は横に膨れ、口縁部は小さく直状に直立する。頸部内側には明瞭な稜を作る。	外面 口縁部一肩部ヨコナデ、胴下部ナデ 内面 ヨコナデ	底部欠損 (22%)
58	杯形	口 12.5	中砂を多量に含む。 堅緻	橙 色	口縁部は比較的長く直状にやや外傾する。頸部は内側に明瞭な稜を作るが、外側は緩くくびれる。	外面 口縁部一胴上部ヨコナデ、胴下部へラケズリ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ	底部欠損 (13%)
59	碗形	口 10.9	細砂を含む。 堅緻	明赤褐色	頸部は比較的強くくびれ口縁部は外反し、内側が丸く膨らむ。胴部は中位が張り最大径が位置する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部へラケズリ、ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、部分的にへラ痕が見られる。	底部欠損 (20%)
60	碗形	口 12.6	細砂を多量に含む。 軟質	明赤褐色	胴部は丸く膨らみ、頸部はややくびれるが内外面に稜を作らない。口縁部は直立する。	外面 口縁部ヨコナデ、他の部位については器面が荒れており観察困難	底部欠損 (17%)
61	碗形	口 5.0 高 6.5	砂粒の混入少ない。 堅緻	橙 色	口縁部は著しく内彎する。胴部は大きく膨れる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴上半部粗いナデ、胴下部へラケズリ→。口縁部一胴上半部斜行へラ研磨、幅1mm、間隔5mm 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後、斜行へラ研磨、幅1mm、間隔3~2mm	底部欠損 (35%)
62	杯形	口 12.8 高 6.0	細砂、中砂を含む。 軟質	橙 色	口縁部は彎曲し、頸部に凹線をめぐらす。胴下半部は膨らまず、底部は小さな平底状	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 ナデと見られるが器面が荒れていて観察困難	底部大方欠損 (15%)
63	小形碗形	口 9.5	細砂を多量に含む。	浅黄棕色	口縁部はほぼ直立し、外側に浅い凹線が2条見られる。平底	外面 口縁部ヨコナデ、胴部粗いナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部へラナデ	(72%)
64	杯形	口 14.3	砂粒を含む。 やや軟質	浅黄棕色	底部から口縁部にかけてゆるく内彎しながら立ち上る。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部へラナデ	底部欠損 (26%)

III 上滝遺跡

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
65	高杯形		細砂を含む。 堅緻	橙 色	底部に明瞭な稜を作る	外面 杯部、脚部ハケメ後、ヘラ研磨 内面 外面に同じ。	杯部底から脚部 遺存
66	高杯形		中砂、細砂を 含む。 堅緻	橙 色	杯部はやや内彎気味。 底部は段を作り肥厚す る。脚部は上端から下 方へ直線的に広がる。 円孔を2個所穿つ。径 1.5cm	外面 杯部一脚部縦方向丁寧なヘラ 研磨。幅1mm 内面 杯部、放射状ヘラ研磨、幅1 mm、緻密、底部横方向ヘラ研磨脚部ハ ケメ→、幅2mm	杯部上部、脚部、 下端部欠損
67	高杯形	口 17.7	細砂を混入、 粗砂も見られ る。	橙 色	杯部はやや内彎気味に 外方へ大きく広がる。 底部は段を作り肥厚す る。	外面 杯上部ヨコナデ、下部一底部 ナデ 内面 杯部ヨコナデ、底部は荒れが 著しく観察困難。脚部と杯部の接合の 際杯部から充填した粘土の剥離面が良 好に観察できる。	杯部のみ遺存 (100%)
68	高杯形	口 19.5	砂粒の混入少 ない。 堅緻	橙 色	底部は平川で、やや外 反気味に立ち上り、口 縁部がやや内彎する。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ後、斜行ヘラ研磨、 間隔1～5mm	杯部、底部以上 遺存(18%)
69	高杯形	口 13.6	細砂を含む。	浅黄橙色	杯底部は段を作り肥厚 する。杯上部はほぼ直 状に外方へ大きく広が る。	外面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、 この後縦方向ヘラ研磨。杯下部の段以 下ハケメ後、ヘラ研磨。幅1mm、間隔 3mm前後 内面 杯部ハケメ後、ヘラ研磨外面 と同様	脚部欠損
70	器台形	口 8.5	中細砂を含 む。 やや軟質	浅黄橙色	器受け部は中位に強く 稜を作り口縁部は短く 彎曲する。	外面 口縁部ヨコナデ、器受け部下 半ナデ後、縦方向ヘラ研磨、脚接合部 付近ヘラ押え、以下縦方向ヘラナデ 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ、 脚部粗いナデ、指押え	脚部下半欠損 (7%)
71	器台形	口 8.5	細砂を含む。 軟質	橙 色	器受け部は強く屈曲し 口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、器面が荒れ ており観察困難	脚部下半欠損 (100%)
72	高杯形		細砂を含む。	赤 褐色	杯部との接合部は細く 下へ直線的に広がり、 裾部は強く外反する。 円孔を3個穿つ。	外面 縦方向の緻密なヘラ研磨 内面 脚上部絞り目痕、以下粗いナ デ	杯部、裾部欠損
73	高杯形		細砂を含む。	浅黄橙色	杯部との接合部より、 裾部へやや彎曲しなが ら大きく広がる。円孔 を3個穿つ。	外面 脚部はハケメ後、縦方向の緻 密なヘラ研磨 内面 杯底部研磨、胴上部弱い絞り 目痕、以下粗いナデ	杯部、裾部欠損
74	高杯形		砂粒の混入少 ない。 堅緻	赤 褐色	杯部との接合部は細く 下部に直線的に広が る。裾部は柱状部から 強く外方へ屈曲する。 脚部に円孔を2個穿 つ。	外面 ハケメ後、縦方向の緻密なヘ ラ研磨 内面 上部縦方向ヘラナデ、下部ナ デ	杯部、裾端部欠 損
75	高杯形 又は器台		細砂を含む。 堅緻	浅黄橙色	全体に細長く、円孔を 持たない。	外面 縦方向ヘラ研磨、緻密 内面 粗いナデ	脚上部破片

## 6 検出した遺構・遺物 (6)包含層出土土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
76	器台形	底 9.5	砂粒の混入少ない。やや軟質	浅黄橙色	器受け部との接合部は比較的細く、直線の下方に広がる。下端部は内側に丸く肥厚する。	外面 脚部縦方向のヘラ研磨、幅1.5mm、緻密 内面 器受け部底部剥離が著しく不明。中央貫通孔横方向擦痕、脚部上部ヘラケズリ←、中部指押え痕下部ヨコナデ	(42%)脚部
77	高杯形		細砂を含む。	浅黄橙色	杯部との接合部は細く全体に細長い。	外面 縦方向の緻密なヘラ研磨 内面 上部絞り目痕	脚上部破片
78	高杯形	柱高 5.5 柱径 4.9	細砂を含む。堅緻	浅黄橙色	柱状部は太く、中位が膨らむ。下端が強く外方へ屈曲し、裾部が付く。器壁が薄いのが目立つ。	外面 杯部との接合部ヨコナデ柱状部縦方向ヘラナデ、裾部ヘラケズリ← 内面 杯底部剥離面、柱状部上部絞り目痕、下部ヘラナデ、裾部ナデ	杯部、裾端部欠損
79	高杯形	柱高 6.6	細砂を含む。堅緻	橙 色	接合部が細く下方に膨らみ、エンタシス状の柱状部をなす。器壁が厚い。	外面 縦方向のヘラナデ 内面 絞り目痕、下部屈折部はナデ	杯部、裾部欠損
80	台付甕形	底 7.5	砂粒を多量に含む。	灰褐色	丈が短く、×字状をなし、成形は粗雑	外面 粗いナデ 内面 器部ナデ、脚台部粗いナデ	脚台部のみ遺存
81	(脚台部)	底 8.8	砂粒を含む。	橙 色	全体に丈が短く、裾部が強く彎曲し、器壁は厚い。	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	脚部破片
82	ミニチュア	口 4.9 高 4.9	中砂を含む。やや軟質	橙 色	肩部に稜線を作り、口縁部はやや外反しながら内傾する。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面 口縁部ハケメ後、ヨコナデ、胴下部指押え、上部ハケメ	(30%)
83	ミニチュア	底 2.0	細砂を含む。	浅黄橙色	底部は凹凸のある平底成形は粗雑	外面 ナデ 内面 ナデ	口縁部欠損
84	ミニチュア	口約 5.0 高 3.0	細砂を含む。	浅黄橙色	平底。胴部はやや膨らむ。成形は粗雑	外面 粗いナデ 内面 粗いナデ	口縁部大方欠損
85	甕 形	口 18.1	細砂を含む。(角閃石を含む)堅緻	にぶい橙 色	頸部はゆるく外方へ彎曲する。口縁端部が鋭く内彎し、直立気味になる。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	肩部以下欠損 (18%)
86	杯 形	口 13.8 高 3.8	細砂を混入(角閃石の混入あり)堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎する。器体は浅く底部はほぼ平坦	外面 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ヘラケズリ 内面 口縁部一胴部ヨコナデ、底部ナデ	(31%)
87	杯 形	口 14.2 高 4.2	粗砂の混入目立つ。堅緻	橙 色	口縁部はやや内彎しながら外傾する。平底。器壁は厚い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴下部縦方向のナデ 内面 胴部一底部ナデ	底部中央部欠損 (28%)
88	杯 形	口 13.3 高 3.1	砂粒を多量に含む。(角閃石が目立つ)	橙 色	器体は浅く、器壁も薄い。	外面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ、胴部一底部ナデ	(37.5%)
89	杯 形	口 11.5 高 3.9		橙 色	口縁部は直立し、器体は浅く、中位に明瞭な稜を作る。丸底	外面 口縁部ヨコナデ、中位稜線一底部ヘラケズリ→ 内面 口縁部ヨコナデ、底部ナデ	(25%)

III 上滝遺跡

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存状態・備考
90	杯形	口 14.8	細砂を含む。 (角閃石の混入目立つ) やや軟質	橙 色	底部は平坦な丸底、内 壁しつつ立ち上り、口 縁部は強く外反し、先 端部はわずかにめくれ る。	外面 口縁部ヨコナデ、指頭痕わず か認められる。底部ヘラケズリ 内面 ナデ。器面が荒れており観察 しにくい。	(40%)
91	杯形	口 13.4 高 3.7	細砂を含む。 軟質	にふい橙 色	肩部に弱い稜を作り、 口縁は内傾する。底部 の器壁は厚い。平底	器面が柔らかく荒れているため、観察 困難	(70%)
92	椀 (須恵器)	頸部径 3.9 胴部径 11.5	硬質、大粒な 白色鉱物多く 含む。黒色鉱 物は少ない。	外面、黒 灰色、器 肉色にふ い赤褐色	口縁と頸部との間に稜 が付き、浅い沈線がめ ぐる。体部は素文	外面 ロクロに伴うヨコナデ 内面 ロクロに伴うヨコナデ、体部 上半に絞り痕あり。ロクロ方向は左廻 り。	口縁部、底部欠 損
93	長頸埴 (須恵器)	口径12.2	焼締りあり。 硬質。自然釉 およぶ。白色 鉱物多い。黒 色鉱物少ない	外面、黒 褐色、器 肉色にふ い赤褐色	長頸埴の一部と考えら れる。外面ににふい波 状が4段、面する低い 隆線が3条めぐる。波 状の柵目は4～5本が 単位、口縁部尖る。	外面 ロクロに伴うヨコナデ 内面 ロクロに伴うヨコナデ、体部 に紐作りの凹凸あり。	頸下端部以下欠 損
94	大 甕	頸部径	焼締りあり。 自然釉およぶ 硬質、白色鉱 物含む。黒色 鉱物少ない。	黒 灰色 器 肉 色 赤 褐 色	肩部は丸みを持つ。	外面 平行状の叩きが2回以上くり 返されている。 内面 あて目が2度以上くり返さ れ、さらにその後を擦り消されている。 頸部と胴部の間に接合痕あり。	肩部破片
95	内耳付土 鍋	口径34.6 高 18.0	細砂を含む。 堅緻	灰 色	口縁部はやや内彎しな がら短く外傾、口縁端 部に平凹部を作り弱凹 線がめぐる。端部外側 は鋭い角をなす。胴部 はわずかに膨れ平底、 内面把手2個付く。	外面 口縁部一頸部ヨコナデ、胴部 ナデ、胴下半部は器面が荒れている。 底部は著しく荒れている。 内面 口縁部一胴部ヨコナデ、底部 は荒れている。	底部欠損

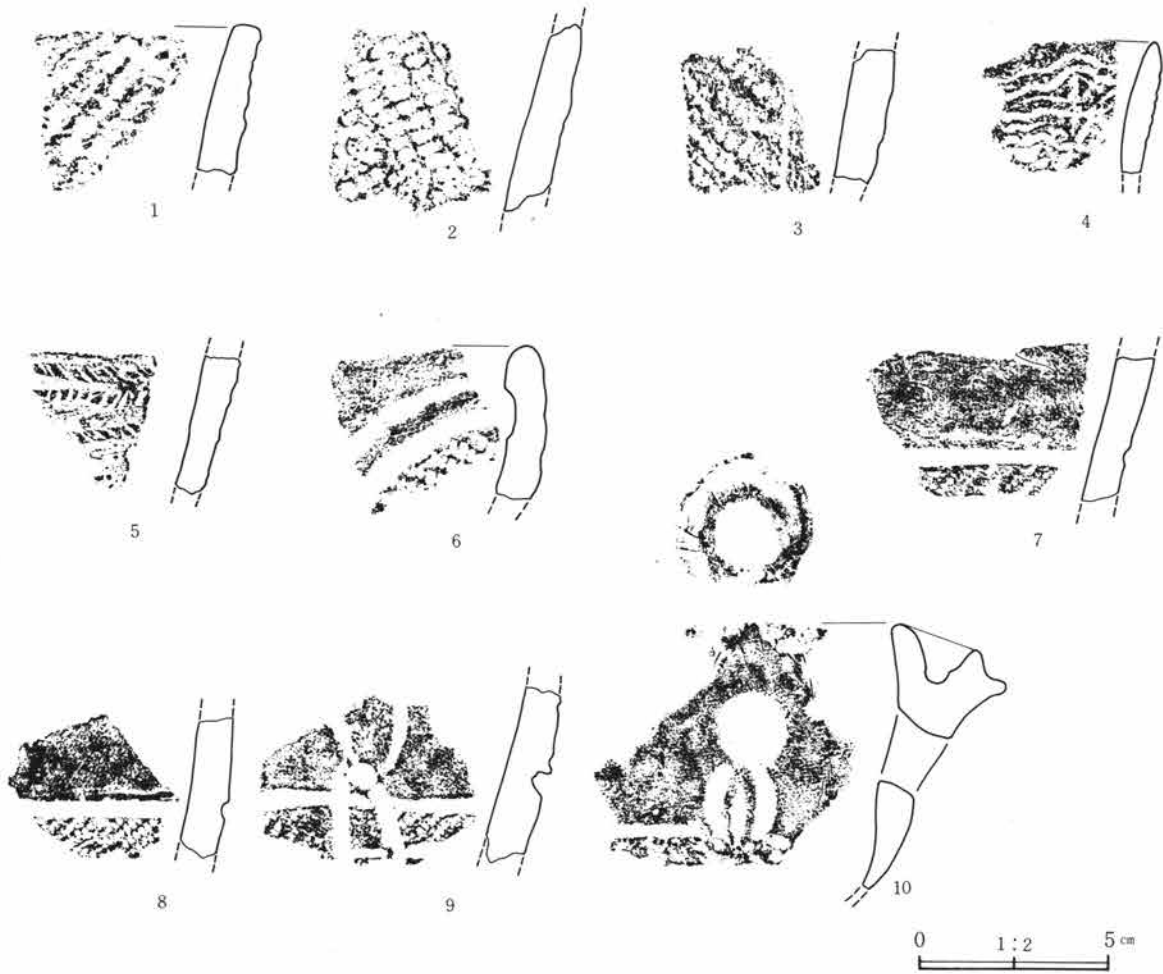
41表 陶器観察表 88図 包含層

No.	器形	胎土・焼成	器形の特徴	表面調整	産地、時期、備考
96	高台鉢 (焼きしめ 陶器)	生地には白色鉱 物、黒色鉱物含 む。		外面 ロクロ条痕あり。 内面 すりおろしの為非常に 磨減している。	常滑と即断はできないが東海地 方一円の生産と考え、それに準 ずると常滑焼II期に類され、13 C前半に相当するだろう。
97	鉢 (軟質陶器)			底面に糸切り痕あり。	14C代、在地製品で太田金山産 ものに似る。

42表 縄文土器観察表 89図 包含層

No.	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	文様の特徴	遺存状態・備考
1	深鉢	口径22.0	砂粒の混入少 ない。繊維の 混入がある、 ふつう	明灰褐色	口縁部は直状をなす	外面 無節の縄文を施す(L) 内面 丁寧な研磨	口縁部破片

6 検出した遺構・遺物 (6)包含層出土土器



89図 包含層出土縄文土器

No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	文様の特徴	遺存状態・備考
2	深鉢		砂粒の混入少ない。繊維の混入がある、ふつう	明灰褐色		外面 単節R及びLの縄文を横方向へ上下に羽状に施す 内面 丁寧な研磨	胴部破片
3	深鉢		砂粒の混入少ない。繊維を含む。ふつう	明灰褐色		外面 単節Rの縄文を施す。 内面 丁寧な研磨	胴部破片
4	深鉢		細砂を含む。やや軟質	鈍い橙色	口縁部は直状で、器壁は薄い。	外面 半裁竹管による平行沈線を施す 内面 器面が荒れている	口縁部破片
5	深鉢		砂粒を含む	淡橙色		外面 削り出し、紐線文の上にへら状具による刻み目を施す	胴部破片
6	深鉢		砂粒を含む、ふつう	浅黄橙色	口縁部は、やや内彎し端部は若干肥厚して丸味を持つ。	外面 口縁部は無文帯を持ち、口縁部以下は懸垂文に続くと思われる孤状の凹線が2条見られる。凹線区画内には凹線に先立って施行されたRLの縄文が見られる。	口縁部破片

### III 上滝遺跡

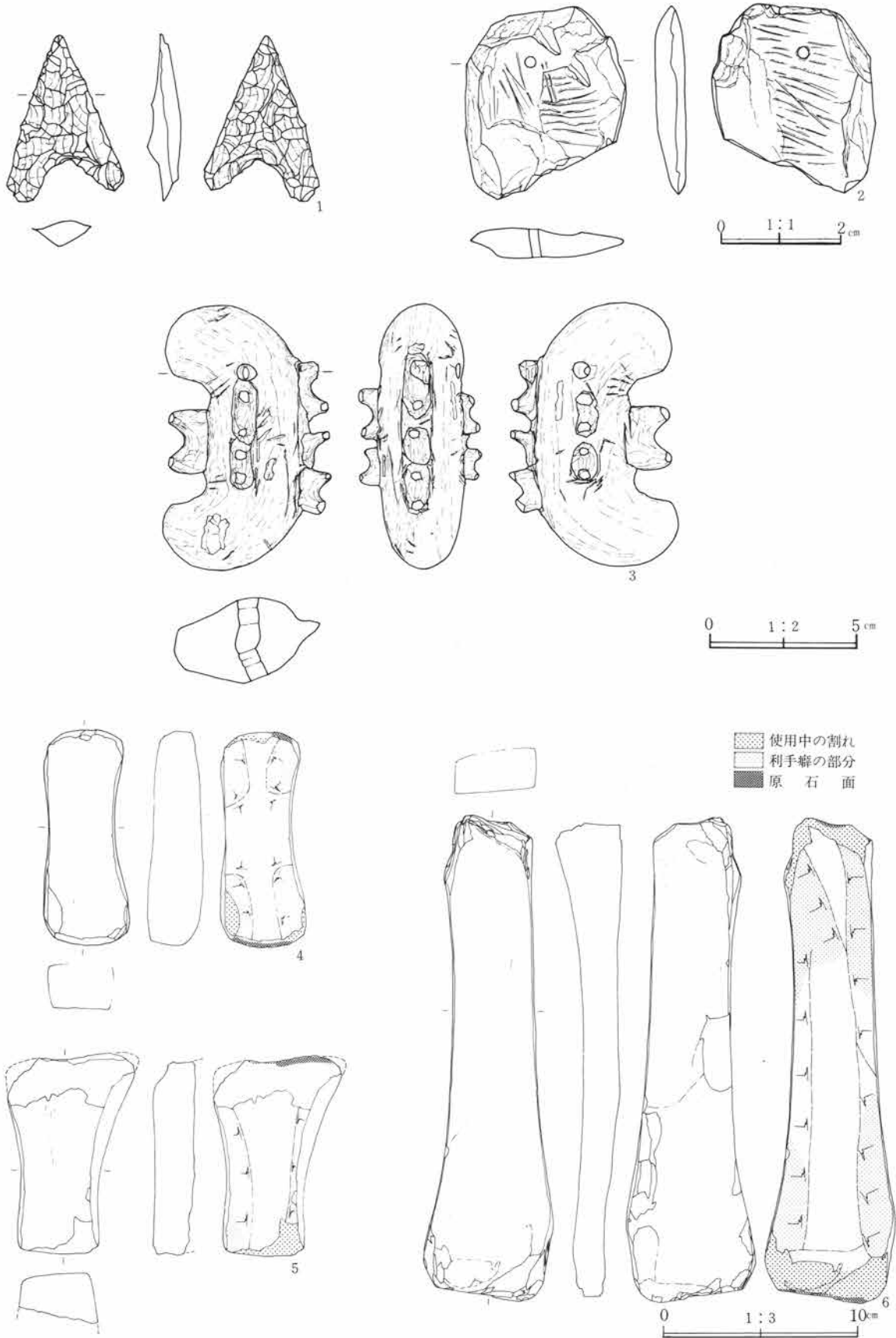
No	器形	法量	胎土・焼成	色調	器形の特徴	文様の特徴	遺存状態・備考
7	深鉢		細砂を含む	灰白色		外面 沈線区画に縄文を施す 内面 丁寧な研磨	胴部破片
8	深鉢		細砂を含む、 堅緻	褐色		外面 沈線区画内にLRの縄文を施す 内面 丁寧な研磨	胴部破片
9	深鉢		砂粒を多量に 含む	浅黄棕色		外面 横帯沈線区画内にLRの縄文を施した後、縦位に連弧状の帯状区画文を交叉させ区画内の弧の連結部に円形沈刻文を施す。	胴部破片
10	深鉢	口径18.0	細砂を多量に 含む。堅緻	暗褐色	波状に縁をなし、中央に円孔を有し頂部に渦状の隆線を持つ把手が付く、渦状部の中心は円形沈刻を施す、把手両側には1個ずつ円形沈刻を施す。	外面 外面把手部円孔の下に短い縦位沈線をはさみ、弧状沈線による区画を施す。口縁下には横方向の沈線と列点文がめぐる。 内面 丁寧な研磨	口縁部破片

### (7) 石製品

本遺跡より縄文時代～中近世に属する各種の石製品が出土している。縄文時代は石鏃(90図1)打製石斧が各1点、包含層中より、古墳時代では手持勾玉、砥石がそれぞれ1号溝、2号住居址に伴って見られる他、この時期のものと考えられる石製模造品が2点包含層中より出土している。この他、砥石10点の出土がある。これらは遺構に伴うものでないため時期は明確でないが形状、石材などからおよそ中・近世の所産と思われる。

44表 90図 1号溝(3)、包含層(1、2、4、5、6) 石製品観察表

No	種類	大きさ	形状・調整の特徴	遺存状態・備考
1	石 鏃	長さ 2.6 幅 1.9	チャート、無茎で基部は著しくえぐれている。	完形
2	有孔方板	長さ 幅 2.6 厚さ 5.0	滑石、両面とも平坦面に削り痕が残り、側縁部は打ち欠いたまま未調整、径1.5mmの端正に穿たれた小円孔がある。研磨されていない。	剣形模造品の未製品と思われる半欠品
3	小持勾玉	長さ 6.0 幅(本体) 3.2 厚さ 2.7	蛇紋岩、全体に丹念に削り、未調整部を残さない。突起は背面、3個並ぶが、中央の突起は他と形状が異なる。腹部は大きな突起を1個付け、両側面には2個づつ付く、円孔は1個、穿たれている径は5.1前後、両方向からの穿孔が行なわれているが貫通まで1度失敗し、穿孔しなおしている。磨き調整はなし。	相伴した土器から、古墳時代後期前葉と考えられる。背部の突起、体部の一部に欠損がある。
4	砥 石		凝灰岩、4面使用され糸巻状の形を呈す。小口面も若干擦痕あり。砥面に利き手側の片減りが顕著でない。小口に一部、原石面あり。	県内凝灰岩産出地域か。
5	砥 石		凝灰岩質砂岩、3面擦り減り、裏面を欠き、二半分の片側である。半欠は使用時にあり、剥離面に条痕あり。小口面には原石面あり、利き手側の片減りが顕著でない。表、裏に条痕あり側面になし。	県内凝灰岩質砂岩産出地域か
6	砥 石		粘板岩、4面擦り減り、裏面に砥石取り時の剥離がある。小口面には原石面と見られる面があるが砥石取り時に生じた面が不詳、利き手側の片減りある。	県内、外不詳、搬入砥石の可能性あり。



90図 1号溝(3)、2号住居跡(4)、包含層出土石製品

(8) 甕形土器 1 類 (S 字状口縁甕形土器) 観察表 45表

番号項目中 ( ) 内は図番号

口縁部遺存率 口縁部が全周遺存しているものを1とした場合の比率

口縁部外傾度 右図①に示す角度

口唇部の厚さ 右図②に示す厚さ

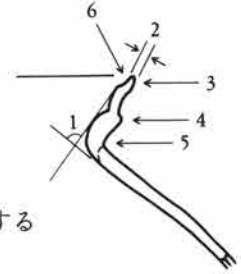
口縁部の長さ 細目、上部は③、④間の長さであり、下部は④、⑤間の長さ

口唇内面の凹線 右図⑥に示す凹線を指す

ハケメの状態 100図(拓本図) 1・2—粗、3—中、4—細をおよその基準とする

色 調 B=茶褐色、O=橙色、G=浅黄橙または灰色を示す

胎 土 多=多量、少=少量、L=粗砂、M=中砂、S=細砂を意味する



番 号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部 のS字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
1	0.38	12.4	80°	0.4	0.6	0.7	やや強	無	中	B	少MS	無
2	0.26	14.8	94°	0.3	0.8	1.0	やや強	無	中	B	少MS	有
3	0.1	14.8	94°	0.3	0.8	1.2	強	無	中	O	少 S	レ
4	0.13	13.6	91°	0.3	0.5	1.3	強	無	中	B	少 S	レ
5	0.13	15.6	89°	0.3	0.5	1.3	強	無	中	B	多 S	レ
6	0.18	12.8	85°	0.4	0.5	1.3	やや強	無	中	B	少MS	レ
7	0.1	14.2	88°	0.3	0.7	1.3	強	無	中	B	少LS	レ
8	0.14	12.0	89°	0.3	0.8	1.3	強	無	中	B	多 S	レ
9	0.15	12.0	90°	0.3	0.9	1.3	弱	無	中	B	多MS	無
10	0.1	15.6	100°	0.3	0.7	1.2	やや強	無	中	B	少 S	レ
11	0.17	12.6	89°	0.35	1.0	1.1	やや強	無	中	B	少 S	レ
12	0.18	12.8	93°	0.3	0.8	1.2	強	無	中	G	少MS	レ
13	0.11	10.0	93°	0.25	0.5	1.2	やや強	無	中	O	少 S	レ
14	0.06	13.0	86°	0.3	0.4	1.1	弱	無	やや細	B	少 S	レ
15	0.14	10.6	87°	0.3	0.6	1.1	やや強	無	中	B	少 S	レ
16	0.13	12.4	97°	0.3	0.7	1.1	弱	無	中	B	多MS	レ
17	0.22	12.4	89°	0.3	0.6	1.1	やや強	無	やや細	B	少 S	レ
18	0.11	13.8	87°	0.3	0.6	1.3	強	無	やや細	B	少MS	レ
19	0.14	15.8	98°	0.2	0.7	1.2	やや強	無	中	B	少 S	レ
20	0.1	13.6	81°	0.3	0.4	1.2	弱	無	レ	B	少MS	レ
21	0.15	17.6	87°	0.3	0.8	1.4	強	無	やや細	G	多MS	レ
22	0.1	12.8	80°	0.3	0.5	1.1	弱	無	中	B	少 S	レ
23	0.3	13.0	90°	0.3	0.9	1.3	やや強	有	中	G	少 S	レ
24	0.19	14.4	92°	0.4	0.8	1.1	やや強	無	中	B	少 S	レ
25	0.5	15.2	100°	0.3	1.0	1.1	やや強	無	中	B	多MS	有
26	0.25	11.6	88°	0.35	0.6	1.2	強	無	やや細	G	少 S	レ
27	0.22	12.8	85°	0.3	0.9	1.25	強	無	中	G	少 S	レ
28	0.22	14.4	80°	0.35~ 0.4	0.7	1.2	強	無	細	G	少MS	レ
29	0.19	14.8	102°	0.3	0.9	1.2	やや強	無	中	G	少 S	レ
30	0.18	12.0	87°	0.3	0.7	1.2	やや強	無	やや細	G	少 S	レ
31	0.15	15.8	90°	0.3	0.8	1.2	強	有	中	G	少 S	レ



## 6 検出した遺構・遺物 (8)甕形土器1類観察表

番号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部 のS字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
32	0.17	14.2	96°	0.35	0.5	1.2	強	有	細	G	多 S	✓
33	0.19	11.2	87°	0.35	0.5	1.0	やや強	無	やや細	G	少 S	✓
34	0.17	15.0	94°	0.3	0.6	1.4	強	無	中	G	少 S	✓
35	0.14	11.6	90°	0.4	0.7	1.3	やや強	無	やや細	G	少 M	✓
36	0.14	11.0	83°	0.25	0.6	1.3	強	無	やや細	G	少MS	✓
37	0.14	12.0	97°	0.4	0.5	1.2	やや強	無	中	G	少 S	✓
38	0.07	15.2	79°	0.4	0.5	1.1	やや強	無	中	O	少 S	✓
39	0.1	16.8	78°	0.3	0.5	1.3	弱	無	やや細	G	多MS	✓
40	0.09	15.2	93°	0.3	0.7	1.4	強	無	やや細	O	少 S	✓
41	0.13	12.4	93°	0.3	0.6	1.1	弱	無	中	G	多MS	✓
42	0.24	13.0	86°	0.3	0.6	1.3	強	無	やや細	G	少 S	✓
43	0.22	13.0	90°	0.25~ 0.3	0.6	1.1	強	無	中	G	多MS	✓
44	0.2	10.6	93°	0.3	0.6	1.1	強	無	中	G	少 S	✓
45	0.18	14.0	91°	0.4	0.9	1.3	強	無	やや細	G	少MS	✓
46	0.19	14.1	90°	0.3	0.7	1.3	強	無	中	G	多MS	✓
47	0.14	11.6	84°	0.35~ 0.4	0.5	1.1	弱	無	中	G	少 S	✓
48	0.17	11.6	89°	0.3	0.6	1.3	やや強	無	やや細	G	多 S	✓
49	0.18	11.8	86°	0.4	0.6	1.5	強	無	細	O?	多MS	✓
50	0.15	10.2	81°	0.3	0.5	0.9	弱	無	中	G	少MS	✓
51	0.19	8.8	100°	0.4	0.6	1.2	弱	無	中	G	多MS	✓
52	0.19	12.6	73°	0.3~ 0.35	0.7	1.4	強	無	やや細	B	少 S	✓
53	0.14	11.2	84°	0.4	0.5	1.3	やや強	無	中	G	少 S	✓
54	0.18	10.8	72°	0.3	0.6	1.1	やや強	無	中	B	少MS	✓
55	0.11	12.6	89°	0.4	0.5	1.1	弱	無	粗	G	多MS	✓
56	0.1	11.6	96°	0.4	0.7	1.1	弱	無	中	G	少MS	✓
57	0.13	11.4	81°	0.4	0.7	1.3	やや強	無	やや細	G	多MS	✓
58	0.13	10.0	104°	0.3	1.0	1.0	強	無	やや細?	G	多MS	✓
59	0.19	14.0	88°	0.4	0.8	1.2	強	無	粗	O	多ML・S	有
60	0.18	15.6	97°	0.3	0.6	1.1	強	無	中	O	少 S	有
61	0.19	11.0	90°	0.35	0.6	1.3	強	口縁裏下半 に刻目あり	中	O?	少 S	✓
62	0.14	12.6	79°	0.35	0.6	1.0	弱	無	中	B	少MS	✓
63	0.17	14.4	82°	0.3	0.5	1.3	やや強	無	中	B?	少 S	✓
64	0.14	15.2	80°	0.3	0.7	1.5	やや強	無	中	B	少 S	✓
65	0.22	14.1	97°	0.3	0.6	1.1	強	無	中	B	少 S	✓
66	0.17	15.2	82°	0.5	0.8	1.4	強	無	やや細	O	少MS	✓
67	0.18	14.0	83°	0.3	0.5	1.1	やや強	無	やや細	O	少 S	✓
68	0.13	12.4	90°	0.4	0.7	1.1	強	無	やや細	O	少MS	✓
69	0.08	12.6	95°	0.5	0.7	1.2	やや強	無	中	B	多MS	✓
70	0.19	11.6	83°	0.35	0.7	1.1	強	無	中	B	多MS	✓
71	0.17	11.0	89°	0.3	0.7	1.4	強	無	中	O	多MS	✓
72	0.13	11.0	96°	0.3	0.6	0.9	弱	無	中	B	少MS	✓
73	0.32	11.8	83°	0.3	0.5	1.0	強	有?	中	G	少MS	✓
74	0.28	12.0	105°	0.5	1.8		単口縁	無	中	G	少 S	✓
75	0.17	14.4	89°	0.4	0.6	1.1	弱	無	中	B	多MS	✓

III 上滝遺跡

番号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部 のS字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
76	0.15	12.4	96°	0.3	0.7	1.3	強	斜位、連続 刻目あり	やや細	B	少 S	レ
77	0.19	11.2	88°	0.3	0.6	0.9	弱	無	やや細	O	少 S	レ
78	0.25	14.6	91°	0.5	0.8	1.1	やや弱	無	中	B	少 S	レ
79	0.25	11.8	99°	0.4	0.6	0.9	弱	無	粗	B	多MS	有
80	0.08	12.4	94°	0.45	0.8	1.2	やや強	無	中	B	少 S	レ
81	0.18	13.6	82°	0.35	0.8	1.4	やや弱	無	やや細	G	少 S	無
82	0.11	15.0	94°	0.4	レ	1.1	きわめて強	無	中	B	多MS	レ
83	0.22	13.0	86°	0.45	1.0	1.0	やや弱	無	中	B	少MS	レ
84	0.18	13.0	93°	0.45	0.7	1.5	きわめて強	無	細	G	少MS	有
85	0.15	13.8	93°	0.35	0.8	1.0	弱	無	中	O	多MS	レ
86	0.1	12.0	87°	0.2	0.5	1.0	強	無	レ	G	少S	レ
87	0.1	15.2	91°	0.4	0.5	1.3	やや弱	無	やや細	O	多MS	レ
88	0.13	15.4	93°	0.35	0.7	1.5	やや強	有	粗	O	多MS	レ
89	0.29	14.8	86°	0.4	0.7	1.4	きわめて強	有	細	B	多MS	レ
90	0.22	12.6	85°	0.3	0.5	1.2	きわめて強	有	中	O	多MS	レ
91	0.19	12.2	90°	0.3	0.5	1.2	強	有	中	G	少MS	レ
92	0.15	15.8	99°	0.3	0.7	1.2	強	無	やや細	B	多MS	レ
93	0.21	15.8	88°	0.5	1.0	1.1	弱	無	中	G	少MS	レ
94	0.19	14.0	96°	0.3	0.6~ 0.9	1.3	きわめて強	有	中	B	少S	レ
95	0.19	14.0	94°	0.4	0.5	1.4	強	有	やや細	B	少S	レ
96	0.17	12.6	94°	0.3	0.7	1.2	やや強	有	細	G	少MS	レ
97	0.18	13.2	93°	0.4	0.6	1.5	強	有	やや粗	G	少MS	レ
98	0.21	13.4	94°	0.4	0.4	1.5	強	無	中	B	多MS・L	レ
99	0.17	13.4	92°	0.4	0.7	1.3	強	有	やや細	B	少S	レ
100	0.22	14.2	95°	0.3	0.5	1.2	強	無	中	B	少MS	有
101	0.18	12.8	97°	0.3	0.7	1.3	強	有	やや粗	B	多MS	レ
102	0.1	15.6	87°	0.5	0.7	1.4	強	有	中	G	少MS	レ
103	0.13	0.6	94°	0.3	0.6	1.3	強	無	中	B	多MS	レ
104	0.15	12.2	92°	0.3	0.5	1.2	やや強	無	中	G	多S	レ
105	0.13	13.8	91°	0.25~ 0.3	0.9	1.5	強	有	中	B	少MS	レ
106	0.21	14.4	85°	0.4	0.6	1.3	強	無	中	B	少S	レ
107	0.17	13.4	92°	0.3	0.6	1.2	強	有	中	G	少S	レ
108	0.19	12.4	87°	0.4	0.7	1.2	やや強	レ	細	B	少MS	レ
109	0.22	11.8	91°	0.3	0.5	1.3	やや強	有	中	B	少S	レ
110	0.22	12.2	92°	0.3	0.6	1.2	強	有	中	B	少MS	レ
111	0.18	13.4	90°	0.5	0.8	1.4	強	有	中	G	少S	レ
112	0.14	10.6	95°	0.3	0.7	1.1	強	有	中	G	多MS	レ
113	0.13	14.2	88°	0.35	0.7	1.3	強	有	中	B	少S	レ
114	0.14	11.8	95°	0.35	0.4	1.2	やや強	レ	中	G	多S	レ
115	0.11	11.0	95°	0.3	0.5	1.0	強	有	レ	O	少S	レ
116	0.17	13.0	89°	0.3	0.7	1.1	強	有	細	G	少MS	有
117	0.17	13.8	95°	0.4	0.6	1.5	強	有	中	B	少S	レ
118	0.18	11.8	85°	0.3	0.7	1.5	強	有	やや細	G	少S	レ
119	0.25	13.8	94°	0.3	0.9	1.2	やや強	有?	中	G	少S	レ

## 6 検出した遺構・遺物 (8)甕形土器1類観察表

番号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部の S字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
120	0.4	12.0	86°	0.4	0.6	1.0	弱	有	中	G	多MS	✓
121	0.17	13.8	93°	0.35	0.8	1.4	強	有	中	G	多S	✓
122	0.1	12.2	80°	0.3	0.9	1.2	強	有	中	B	少S	✓
123	0.6	16.8	94°	0.3	0.9	1.0	強	無	中	G	多MS	✓
124	0.25	16.8	96°	0.3~ 0.35	0.9	1.0	強	無	中	G	多MS	✓
125	0.25	12.6	85°	0.3	0.5	1.0	強	無	やや粗	B	少S	✓
126	0.21	14.0	98°	0.3	0.7	1.0	やや弱	無	中	B	少S	✓
127	0.46	15.4	97°	0.25	0.7	1.2	強	無	中	B	少S	✓
128 (26-3)	0.4	13.2	103°	0.3	0.6	1.1	きわめて強	無	中	B	少S	✓
129	0.31	10.0	87°	0.4	0.6	1.2	やや強	有	中	G	多MS	✓
130	0.13	13.4	91°	0.3	0.5	0.8	弱	無	✓	O	少MS	✓
131	0.11	16.2	90°	0.35	0.5	0.9	強	無	細	O	少MS	✓
132	0.18	11.8	81°	0.3	0.6	1.1	強	無	✓	B	少S	✓
133	0.17	11.4	80°	0.3	0.4	1.0	弱	無	中	O	多MS	✓
134	0.29	9.6	59°	0.3	0.5	1.0	やや強	無	中	G	少S	✓
135	0.25	11.0	92°	0.25~ 0.2	0.5	1.0	強	無	中	B	多MS	✓
136	0.31	12.0	86°	0.25	0.5	1.1	強	有	中	G	多MS	✓
137	0.33	9.2	77°	0.3	0.3	0.9	強	無	細	O	多S	有
138	0.4	11.0	79°	0.3	0.6	1.1	弱	無	中	B	少S	無
139	0.35	11.2	75°	0.25	0.5	1.0	やや強	無	中	B	少S	無
140	0.36	9.4	75°	0.3~ 0.35	0.4	0.7	やや強	無	中	G	少S	無
141	0.17	12.0	94°	0.3	0.3	1.0	弱	無	中	O	多MS	無
142	0.21	9.4	94°	0.25	0.4	0.7	やや強	無	やや細	G	少MS	無
143	0.19	11.8	75°	0.4	0.6	1.2	強	無	やや細	G	少S	無
144	0.26	12.2	89°	0.4	0.7	0.8	弱	有	やや粗	B	少LS	有
145	0.25	10.8	105°	0.3	0.4	1.0	強	無	やや粗	G	多MS	✓
146	0.14	12.4	101°	0.3	0.3	0.7	弱	無	中	G	少S	有
147	0.36	11.2	100°	0.3	0.4	1.0	強	無	やや細	B	多S	✓
148	0.18	12.2	90°	0.3	0.5	1.0	やや強	無	中	B	少MS	✓
149	0.25	7.4	75°	0.3	0.3	0.8	きわめて弱	無	やや細	G	少S	有
150	0.19	10.8	82°	0.3~ 0.4	0.3	0.9	きわめて弱	無	中	G	多MS	✓
151	0.33	11.6	96°	0.3	0.5	1.0	強	無	中	B	多S	✓
152	0.22	11.4	94°	0.3	0.4	0.9	やや強	無	細	G	少MS	✓
153	0.21	11.6	86°	0.3	0.4	1.1	きわめて強	無	中	B	少S	✓
154	0.19	9.0	80°	0.4	0.4	0.9	やや強	無	やや粗	B	多MS	✓
155	0.21	11.8	84°	0.3	0.5	1.1	弱	無	中	G	多S	✓
156	0.24	11.4	94°	0.3	0.3	0.8	弱	無	細	B	多S	✓
157	0.22	9.4	72°	0.5	0.4	1.1	きわめて弱	無	きわめて細	B	少MS	有
158	0.19	11.6	101°	0.3	0.4	0.9	やや強	無	中	B	少S	✓
159	0.15	10.2	81°	0.3	0.5	1.1	強	無	やや細	B	少S	✓
160	0.17	9.0	78°	0.3	0.3	0.8	弱	無	中	G	多MS	✓
161	0.18	10.6	92°	0.3	0.4	0.8	弱	無	細	B	多MS	✓
162	0.24	14.8	95°	0.4	0.8	1.4	強	有	中	B	少MS	✓
163	0.24	12.0	97°	0.35	0.5	1.1	やや強	有	中	B	少S	✓

III 上滝遺跡

番号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部 のS字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
164	0.38	14.6	87°	0.35	0.6	1.3	きわめて強	有	中	B	少MS	✓
165	0.18	12.4	89°	0.3	1.0	1.1	きわめて強	有	やや粗	B	少S	✓
166	0.19	14.4	89°	0.4	0.8	1.4	強	有	中	B	少S	✓
167	0.15	13.4	93°	0.3	0.8	1.0	強	有	中	B	多MS	有
168	0.17	14.8	87°	0.4	0.8	1.4	強	有	粗	B	少SL	✓
169	0.18	11.8	79°	0.35	0.6	1.5	きわめて強	有	細	B	少S	✓
170	0.17	10.2	89°	0.3	0.5~ 0.7	1.3	きわめて強	有3本	細	B	少S	✓
171	0.1	13.4	85°	0.35	0.7	1.2	強	有	やや細	B	少S	✓
172 (74-20)	1.0	13.4	91°	0.3	0.7	1.2	強	有	やや粗	B	少S	✓
173 (74-19)	1.0	15.0	89°	0.35~ 0.4	0.9	1.4	強	有	中 やや粗	B	多MS	✓
174	0.24	12.6	93°	0.3	0.7	1.2	弱	有	中	B	少S	✓
175	0.14	12.0	85°	0.35	0.9	1.3	やや強	無	中	B	多MS	✓
176	0.14	11.4	84°	0.3	0.5	1.1	強	無	✓	B	多MS	✓
177	0.15	12.2	105°	0.3	0.6	1.2	強	有	中	B	多MS	✓
178	0.15	13.6	88°	0.4	0.8	1.3	強	有	中	O	少S	✓
179	0.21	11.4	93°	0.3	0.5	1.2	強	有	中	B	少S	✓
180	0.13	12.8	90°	0.3~ 0.35	0.7	1.4	強	有	中	B	少S	✓
181	0.13	11.0	84°	0.4	0.8	1.2	強	有	中	B	少S	✓
182	0.19	11.8	84°	0.3	0.5	1.1	やや強	有	やや細	B	多S	✓
183	0.15	10.6	96°	0.3	0.6	1.2	やや強	有	中	O	少MS	✓
184	0.11	12.2	99°	0.35	1.2	1.2	強	有	中	O	少S	✓
185	0.17	9.6	94°	0.3	0.7	1.1	やや強	有	中	B	多S	✓
186	0.11	14.8	87°	0.4	0.8	1.2	弱	無	中	G	少S	✓
187	0.21	13.0	79°	0.35~ 0.4	0.5	1.2	やや弱	無	中	G	少MS	✓
188	0.15	14.2	80°	0.4	0.6~ 0.7	1.2	弱	✓	中	G	少S	✓
189	0.13	10.0	94°	0.3	0.6	1.5	強	有	中	B	少S	✓
190	0.32	13.4	91°	0.25~ 0.3	0.6	1.0	強	無	中	G	多少	✓
191	0.19	13.8	87°	0.35	0.5	1.2	やや強	無	中	B	少S	有
192	0.15	15.4	100°	0.3	0.7	1.1	強	有	やや細	O	少S	✓
193	0.13	13.2	92°	0.3	0.5	1.3	強	無	中	B	少S	✓
194	0.19	13.6	83°	0.4	0.6	1.3	強	有	中	B	多MS	✓
195	0.22	11.2	78°	0.3~ 0.35	0.7	1.0	やや強	無	細	O	少S	✓
196	0.17	8.8	94°	0.25	0.3	1.0	強	✓	やや細	B	少S	✓
197	0.15	11.2	93°	0.25	0.5	1.3	やや弱	無	中	B	少S	✓
198	0.13	9.6	100°	0.3	0.5	0.9	弱	無	中	B	少S	✓
199	0.15	17.6	85°	0.4	0.8	1.2	強	有	中	B	少S	✓
200	0.18	12.0	78°	0.3	0.5	1.2	やや強	無	中	G	多MS	✓
201	0.15	14.0	81°	0.4	0.9	1.5	強	有	中	B	少S	✓
202	0.18	11.6	71°	0.4	0.9	1.5	強	有	細	B	少S	✓
203	0.14	12.6	85°	0.4	1.0	1.6	強	有	中	G	少S	✓
204	0.13	11.0	101°	0.35	0.5	1.5	弱	無	中	BG	少S	✓
205	0.17	12.4	95°	0.3	0.8	1.0	強	無	中	B	少S	✓
206	0.13	12.0	93°	0.3	0.9	1.2	強	無	中	B	少S	✓
207	0.29	13.0	88°	0.3	0.7	1.3	強	有	中	B	少S	✓

## 6 検出した遺構・遺物 (8)甕形土器1類観察表

番号	口縁部 遺存率	口 径	口縁部 外傾度	口唇部 の厚さ	口縁部の長さ		口縁部 のS字 状屈曲	口唇内 面凹線	ハケメ の状態	色 調	胎 土	肩部横 ハケメ
					下 部	上 部						
208	0.56	13.0	88°	0.3	0.7	1.3	強	有	中	B	少S	レ
209	0.38	13.8	85°	0.35~ 0.4	0.5	1.5	強	有	細	B	少S	レ
210	0.25	12.4	84°	0.4	0.6	1.2	強	無	中	B	少S	有
211	0.22	15.6	91°	0.4	0.9	1.3	やや強	無	細	GB	少S	レ
212	0.24	13.6	91°	0.3	0.5	1.4	きわめて強	無	やや細	B	少S	有
213	0.31	9.6	80°	0.4	0.3	1.0	弱	無	やや粗	B	少S	レ
214	0.32	15.0	87°	0.4	0.8	1.3	きわめて強	無	やや細	B	少MS	レ
215	0.15	12.4	87°	0.35	0.7	1.4	きわめて強	有	細	B	少S	レ
216	0.25	12.4	95°	0.3	0.7	1.2	強	有	中	G	多MS	レ
217	0.22	12.4	90°	0.3	0.5	1.2	やや弱	無	中	O	多MS	レ
218	0.15	11.4	79°	0.3	0.9	1.2	弱	無	レ	B	少S	レ
219	0.36	14.0	98°	0.3	0.7	1.1	強	無	中	B	少S	レ
220 (32-4)	1.0	14.4	95°	0.35	0.7	1.3	強	有	中	G	少MS	レ
221	0.13	9.6	85°	0.3	0.5	1.5	やや強	有	細	O	少S	レ
222	0.1	11.4	85°	0.3	0.6	0.9	弱	無	中	G	少S	レ
223	0.15	9.4	81°	0.3~ 0.35	0.5	1.1	弱	有?	中	G	多S	レ
224 (56-2)	0.72	12.8	90°	0.3~ 0.35	0.8	1.3	強	無	中	B	少S	無
225 (49-3)	0.18	11.4	87°	0.3~ 0.35	0.8	1.3	強	無	中	OB	少S	無
226 (83-26)	0.88	15.4	98°	0.6	0.8	1.9	強	無	レ	B	子MS	レ
227	0.22	12.2	83°	0.4	0.8	1.2	強	無	細	B	少M	レ
228	0.15	11.2	92°	0.4	0.6	1.4	強	有	中	G	少S	レ
229	0.25	23.6	81°	0.5	1.1	4.6	強	無	やや細	B	少S	レ
230 (32-5)	0.18	13.4	85°	0.3	1.0	1.1	やや強	有	中	B	少S	無
231 (42-1)	1.0	16.8	83°	0.3	0.6	1.5	強	有	中	B	少S	無
232 (50-4)	1.0	12.0	85°	0.3	0.6~ 0.8	1.2~ 1.3	やや強	無	やや細	G	少S	無
233 (83-27)	0.32	15.6	92°	0.45~ 0.5	0.8	1.1	弱	無	中	O	少S	レ
	0.15	12.8	91°	0.35	0.6	1.2	強	有?	細	B	少S	レ
	1.0	12.4	94°	0.4	0.7	1.1	強	無	やや細	O	多MS	レ
	1.0	13.0	91°	0.3	0.6	1.2	強	無	中	O	多LS	レ
237	0.19	13.2	94°	0.3	0.6	1.1	強	有	中	G	多S	レ
238 (26-5)	1.0	12.6	92°	0.4	0.7	1.3	強	無	中	B	多S	レ
239 (49-2)	1.0	14.2	88°	0.35	0.8	1.3	強	有	やや細	O	少S	レ
240 (50-2)	1.0	13.2	91°	0.35	0.7	1.3	強	無	中	O	多S	レ
241	0.17	14.2	88°	0.3	1.0	1.0	弱	有	粗	B	多S	有
242	0.8	11.0	88°	0.3	0.5	1.0	強	無	粗	B	少S	無
243	0.43	15.0	103°	0.4	0.7	0.8	弱	無	中	G	多LM・S	レ

## 7 考 察

### (1) 榛名山二ツ岳の爆裂に伴う氾濫層の規模、及び経路

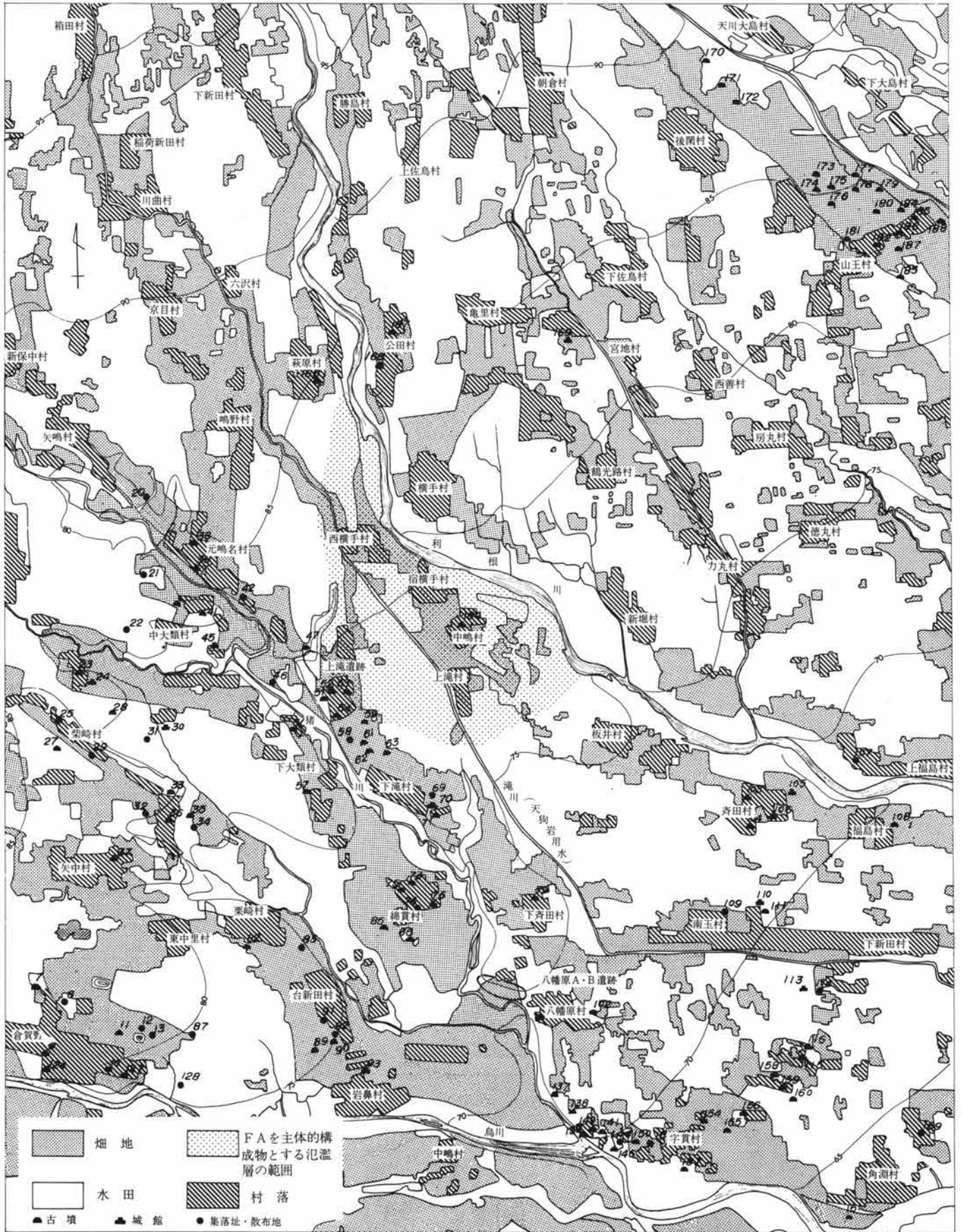
—中世以前の水系について—

トレンチ調査により住居址、環濠などを始めとする集落関連遺構が検出されたB区洪積微高地の、東、南、西の三方は洪積層（Ⅴ層）、黒色土層（Ⅳ層）のレベルが微高地に比べ、低く、一連に黄褐色氾濫層（Ⅲ層）に厚く覆われていることが認められた。この氾濫層は洪積微高地の周辺では、微高地中央部までは達していないが、東西、南側の傾斜部は一帯に覆われており、氾濫層の上面レベルは微高地のⅣ層上面レベルと、ほとんど差を見ない程である。また、この層の及ぶ範囲を見ると、西方については將軍淵の西、元島名A遺跡のトレンチ調査の際、この層の及んでいないことが確認できたが（112、113図）、東方、南方、北方については発掘調査時、その範囲は把握できず、その経路も含めて以後の課題であった。給源については発掘調査時点から、この層中の鉱物組成の地学的分析により、榛名山二ツ岳の爆裂に伴う噴出物を主体とするものであることが判明していた<sup>(9)</sup>。

Ⅲ層の堆積した時期については、第1次調査の概報に記されているように「この水性堆積層中には角閃石安山岩の他に、奈良時代の土器小片が含まれている。」「これらのことから、この水性堆積層は、奈良時代以後、中世までの間に形成されたものと考えることができる。したがって、微高地上にある竪穴住居址は、この層が形成される以前のものと考えられる。」というのが第1次発掘調査終了時点（昭和50年度）の見解であった<sup>(10)</sup>。その後第2次調査（昭和53年度）により、前述のごとく1号溝北半部の調査において、Ⅲ層の堆積と遺物投棄の期間が短期であることが判明し、また出土土器や遺構等の観察によって、微高地上の集落の途絶の期間が、古墳時代後期より奈良時代の間と認められた。これらのことから、この遺跡は榛名山二ツ岳の爆裂に伴う泥流により低湿地区の耕地が壊滅し、生産基盤が失われ、その後も大小の規模で氾濫がくり返される不安定な状態が続き、この間は少なくとも遺跡地内においては、集落を営む上で適当でなかったという認識となった。この泥流（Ⅲ層）の経路については、前述のごとく、將軍淵の西に及んでいないことは元島名A遺跡の調査で確かめられており、また遺跡内B～D地区において検出された氾濫層下の溝の方向は南一北、あるいは北東一南西を示し、「西からの流れ（井野川関連）によるものでなく、北からの流れによるものと推察される」といった見解が調査終了時点に示されていた<sup>(11)</sup>。これが以後、原始、古代水田をめぐる発掘調査の成果に立って、一步視点が進められ、泥流の経路とこの溝群を遡上するところは一致するのではないかという考え方が強まることによって、経路の問題はこの周辺地域における中世以前の農業用水の給水源に関わる重要な内容を含んでいるという認識に立つに至った。以下、こういった視点に従って氾濫層の規模、経路の問題について考察を進めていきたい。

#### 滝 川

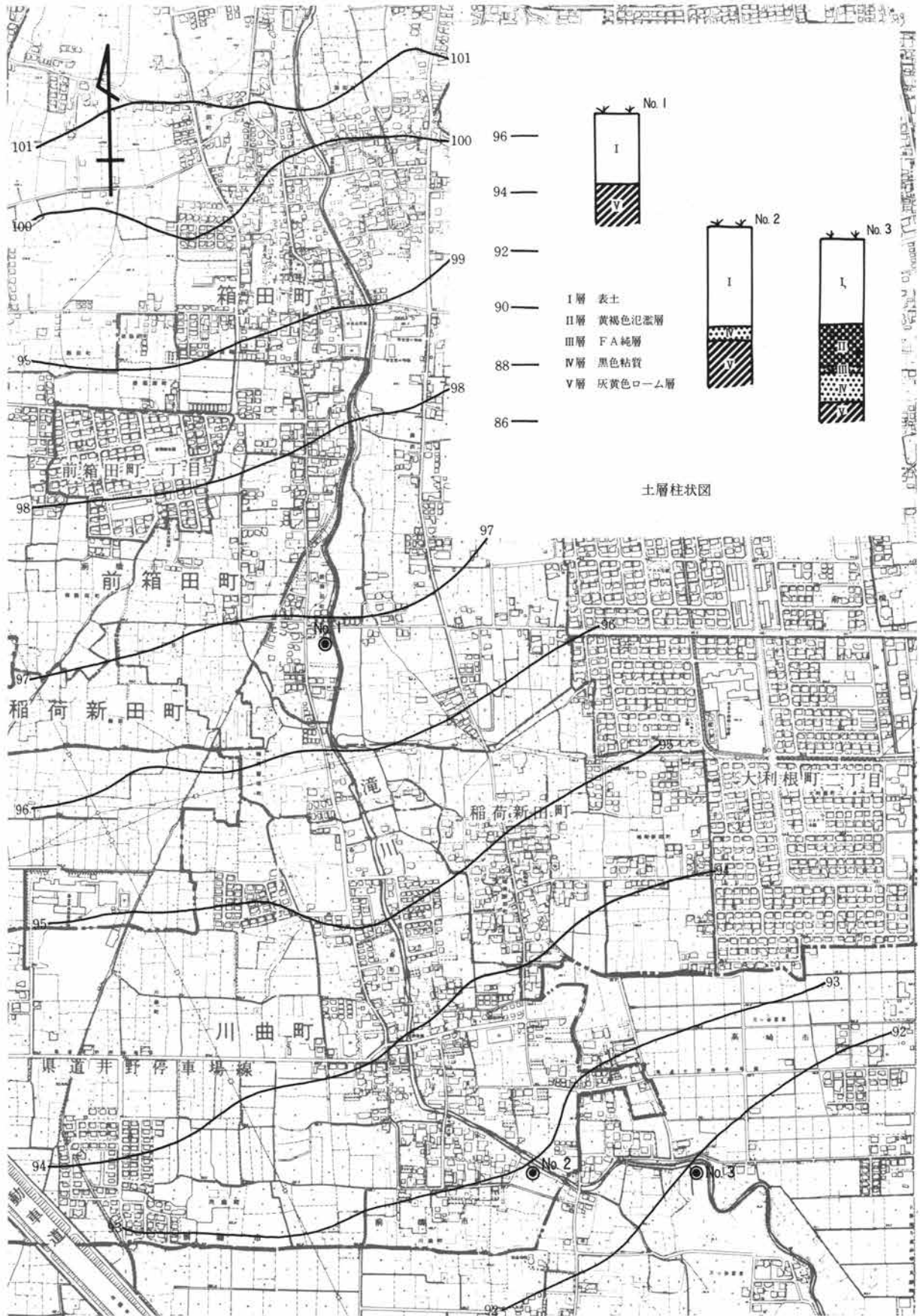
本遺跡の北東方向500m付近には、現在広域農業用水、滝川＝天狗岩用水が北西一南東方向に貫流している。天狗岩用水については、前記八幡原遺跡の考察で若干ふれたが、特にここではこの用水路の中世以前の旧状について考えてみたい。この用水の経緯については、都丸十九一氏の一連の論稿に文献史の方向から詳しく述べられている<sup>(12)</sup>。これら一連の論稿は、現在天狗岩用水についてこれを凌駕する研究論稿は見ないと言われている。まずは「天狗岩堰開鑿史」に従って、その概要なりとも紹介したい。



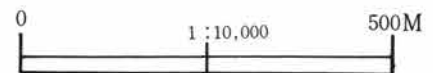
※遺跡番号は2表に対応

91図 周辺の遺跡と地形

0 1:40,000 2,000M



92図 前箱田町、川曲町地域  
 滝川周辺の地形及び土層図





天狗岩用水は、慶長6年、秋元長朝が惣社、蒼海城に封ぜられた翌年、同7年に開発に着手し、3年後の慶長9年に、上滝付近の井野川に至るまで一応の完成を見たという。これは天狗岩用水の北半をなすもので秋元氏によるところから、越中堀と称されている。

この越中堀の開削は「観音沢方面より流れる枯川が当時あって、之はほぼ染谷川と同方向に流れてみたであらうがこれを利用して、ここに流しこむ別の掘割をつくるのがその大事な作業であったらうと思われる。何故かといふと以前の観音沢流入点以北においては掘り上げられたる堆土が堰の両側にみられ、且つ立石橋以北には2ヶ所に落差がきつてあるのに、それ以南においては少しも堆土はみられず、自然河川と見られ得るであらう。尚自然河川を利用したと考へられる理由に専門家はあれだけの全工事を仕上げるのに当時の技術によって3年はやや短きに失すると考察してゐるやうである。(中略)問題は大利根と比の自然河川とを連結する水路の掘鑿である」と述べ、さらに当時の取入れ口については利根川の流路が大久保付近で「最大の右曲」があることから、この辺であったと推定している。そしてこの秋元氏により開削された越中堀、すなわち天狗岩用水の北半部の末端部については、「第一に開鑿後秋元氏より(普請中人足3人出したことによつて)30石支給せられたる江原氏の居が上滝村であり、第二に西横手村・宿横手村2村は秋元領であった事、第三に横手村・上滝村より水上には古田があつたが、それ以南にはなかつたといふ説によつて、その末端をこの付近とみる。私案を示せば5万分の1地形図の西横手と上滝とを連ねた線の西方、滝川村と京ヶ島村との村界に副うて井野川に注ぐ一の水路が之に当るのではないかと考えられる」としている。ここに言う水路とは將軍淵のことである。これ以南の用水の開削については、翌年、初代関東郡代に就いた伊奈忠次が、慶長13年までの間に越中堀の取り入れ口、水路を拡張して水量を増加させ「滝川村、玉村町、芝根村のほぼ中央を貫くように」新流路を設けた。これを通称備前堀、または代官堀という。この用水の完成により新開発、再整備され、これに依拠する水田は「惣社町、元総社町、新高尾村、中川村、東村、京ヶ島村、滝川村、玉村町、芝根村、高崎市(貝沢)」の町村一帯、「1953町2反2畝17歩」、総石高、およそ27000石に達するといふ。

以上、都丸十九一氏の「天狗岩堰開削史」に従つて天狗岩用水の概要を紹介したが、ここに述べられた氏の見解を肯定させる事実が周辺の現地踏査等によりいくつか確認されている。第一にまず上滝以北の流路の形状を観察すると(91図)以南と比べ全体的に蛇行が目立ち、随所でこれが著しい。この流路の形成は人為よりも自然の営力によると考える方が妥当である。第二にこれも91図に示されているが河川沿いの土地利用状況が以南と以北では異なる。ここに示されている地目の状況は明治前期のものである。<sup>(13)</sup>現在は工業団地、宅地造成、土地改良などにより、当時に比べ、大きく変貌しているが旧状を良く残している地域もある。92図は川曲町付近の地形図である。この地図によれば滝川(天狗岩用水)の河川沿いは微高地になっていることが、等高線により示されている。しかもほとんどの地点でこの微高地は沖積層によるものでなく、洪積層の上面が高いことが河川の岸壁や、道路沿いの側溝の壁面などで確認された。その一部を示したのが92図右上の柱状図である。このことはこの滝川(天狗岩用水)にのみ認められるものでなく、前橋台地を貫流する河川、井野川、利根川、染谷川、広瀬川にも共通して見られるあり方であり、中でも井野川、91図右上に示される広瀬川においては特に顕著である。井野川については左岸段丘上に沿う、八幡原遺跡<sup>(14)</sup>、鈴の宮遺跡<sup>(15)</sup>を始めとする一連の遺跡における発掘調査、また93図におけるNo23地点でも洪積微高地の存在が確かめられている。背後の低湿地の比高差は0.5~1mであり、広瀬川、染谷川においても同様の状態が確かめられている。このことの意味するところは、これらの微高地が洪積世にすでに形成されたということ、さらに付け加えるならば滝川を始めとする前橋台地における現河川の流路は、基本的には洪積世に形成されたと言えるのではない

### Ⅲ 上滝遺跡

だろうか。しかしこの微高地の生成要因については、洪積世における自然堤防形成作用等の2次堆積になるものか、あるいは背後の低湿地が浸蝕作用により低地化したのか、今後の研究を待ちたいところである。ともかくこのような洪積微高地が上滝以北の滝川に沿って見られる。しかもこの微高地の帯は、91図においては「嶋野村」付近で分岐し、一方は「元嶋名村」付近で井野川に達し、他方は上滝方向へ將軍淵に連なって見られる。これも滝川の旧流路であったろうと思われる。

第三に榛名山二ツ岳の噴出物を主体的構成物とする氾濫層については、遺跡地付近では天狗岩用水の川の兩岸壁に50cm前後の厚さで確認することができるが、その北限は800m程で認められなくなる。これより上流においては93図中Na3地点にて東岸壁に認められる他は、光ヶ丘付近まで丹念に踏査したが認められていない。このことから上滝遺跡一帯に認められる氾濫層の経路を天狗岩用水の前身河川とするにはやや無理が生じるようである。しかし、榛名山二ツ岳の爆裂時この河川が榛名系の小河川として存在していたことは十分考えられる。このこともまた、都丸氏が示した見解に合致するところである。

#### 遺跡周辺のボーリング調査

以上述べたように氾濫層の給源は滝川に求めることはむずかしい。そこでこの問題の解決方法として遺跡の周辺、28の地点にボーリング調査を実施した。(93図) この調査により得られた柱状図は94図に示す。この調査の結果、現在利根川が大きく東方へ転じる中島町を中心に、およそ南北3km、東西1.5kmの範囲に氾濫層の広がりが見られた。そして利根川に近接するNa9、Na13、Na14の地点では、この氾濫層は細砂の含有が増し、厚くなり、2mの長さの簡易ボーリング(図版51)では、その下底面まで届かなかった。北の限界はNa1地点で20cm前後と薄く、Na3、Na6と南下するに従って漸次厚くなることから、Na1がおよそ北限と考えられる。西への広がりについてはNa2、Na7地点以西には調査地点を設けることはできなかったが漸次薄くなる傾向は見られる。Na7地点は天狗岩用水の改修工事の際確認した層序である。Na7地点以南の西の限界については將軍淵以西で認められないことが判明しており、このことからNa7以北についても同じ状況が予想される。南への広がりについてはNa24、Na25地点が限界点で、この付近では氾濫層は灰色を帯びた薄い粘質土である。Na27地点以南は不明瞭になる。Na24地点であるがここは井野川の左岸段丘上で黄褐色ロームが発達した洪積微高地であり、氾濫層の確認はない。

#### 井野川

井野川は91図において、等高線に顕著に示されているように、新保町から以南、烏川に結ぶまで右岸に比べ左岸が著しく高く、右岸は芝崎町、栗崎町の河岸段丘下を流れる粕川間に広い谷状の地形を作っている。この地形の形成期は井野川右岸に位置する<sup>(18)</sup> 観音山古墳、<sup>(19)</sup> 不動山古墳などの調査の際、洪積層の確認がなされていることから、少なくとも洪積世以前に形成されていたことは明らかである。上滝遺跡と井野川の比高差は現在5m近くあるが、古墳時代においても大きく変わることはないと思われる。また井野川流域における榛名山二ツ岳の爆裂に伴う泥流の状況は未だ十分な把握が進んでいないが高崎北部においては、その左岸段丘上に<sup>(20)</sup> 熊野堂遺跡、<sup>(21)</sup> 同道遺跡、右岸では下流から<sup>(22)</sup> 融通寺、<sup>(23)</sup> 芦田貝戸、<sup>(24)</sup> 御布呂の各遺跡にて厚さ1.5m前後、広域な広がりが確認されている。この泥流は当然この際相当の規模で上滝遺跡周辺地域に押し寄せたに違いない。しかしこの地域では右岸に占地する<sup>(25)</sup> 不動山古墳、<sup>(26)</sup> 昭和病院遺跡、左岸では<sup>(27)</sup> 灰塚遺跡の調査があるが、泥流の確認はない。左岸段丘上においては<sup>(28)</sup> 鈴の宮、<sup>(29)</sup> 元島名両遺跡、將軍塚古墳の周堀調査においてもまったく検出されていない。こうしたことから地形的にも井野川流域における泥流のあり方を見ても上滝遺跡周辺の氾濫層の経路を井野川方面に向けることはできない。

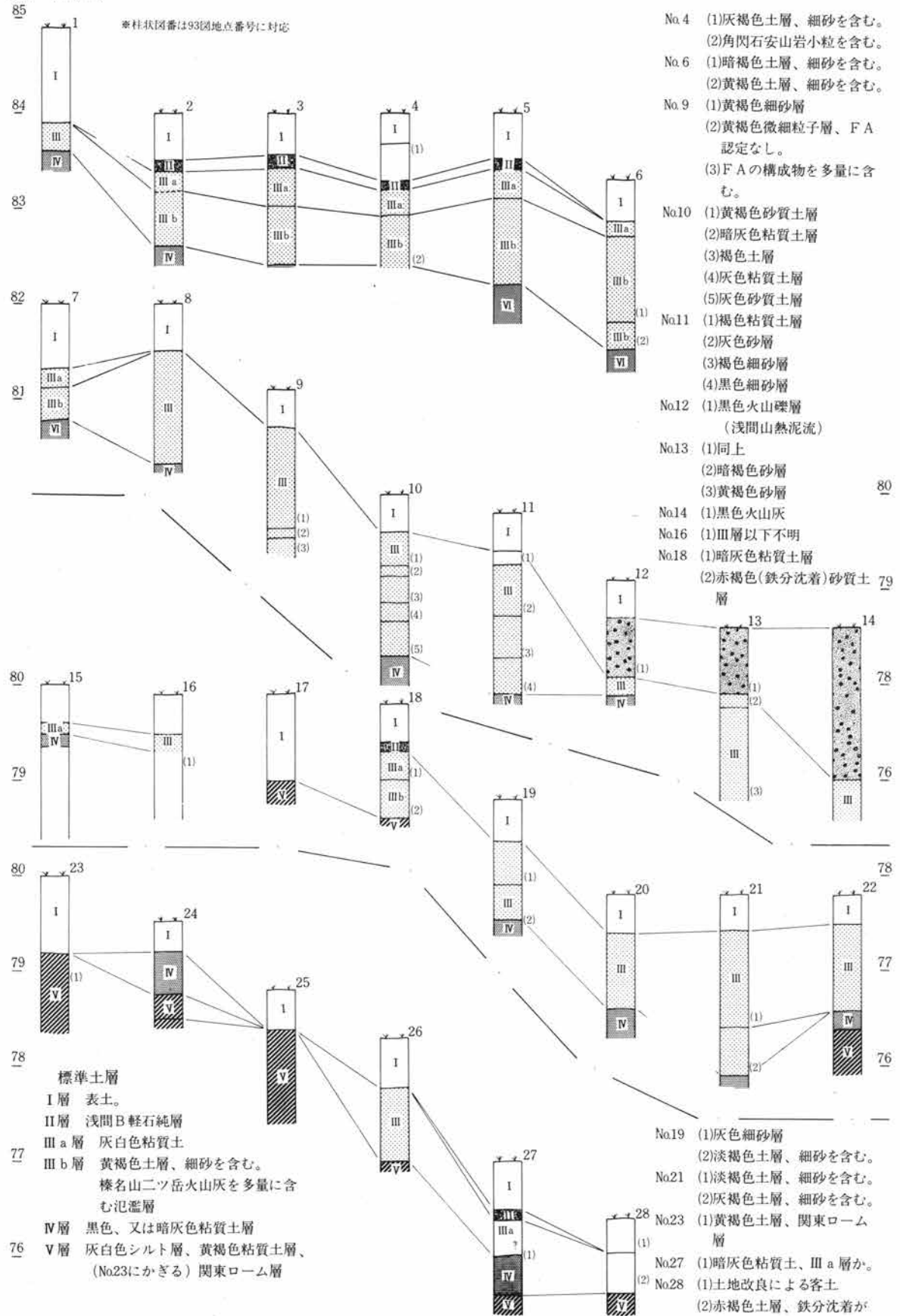
#### 利根川



93図 上滝遺跡周辺のボーリング調査

### III 上滝遺跡

標高 単位(m)



94図 上滝遺跡周辺のボーリング調査柱状図

結局のところ、以上に示した事実により、泥流の経路として最も妥当と思われる方向は利根川のものである。そうなると中島町の南隣接地におけるNa13地点、14地点におけるあり方は興味深い。榛名山二ツ岳の火山泥流層の上に表土下1.8mの厚さで熔岩礫層が見られるが、これは天明3年の鎌原火砕流が吾妻川を経て利根川を流下した際、河川周辺に泥流による大洪水を起こした、その際の堆積物である。この時の状況が『沙降記』中に見えるので紹介しておく。天明3年7月8日のこととして「今夕灑河洪水し、民屋、巨木、人畜の漂流する者許多あり。泥土の其のうしろに在る有りて、蕩々として山の如く侵し<sup>お</sup>圧す。風の如くに奄い来<sup>か</sup>って柴街と中街とを埋む。且水中に烈火あり。泥汁は熱湯となりて邀へ近く可らず。」

利根川が現在の流路に定まったのは、中世後期の変流以後だと言われている。前橋付近における利根川の変流について書かれた文献はいくつか残っているが、変流以前の現利根川の旧状については詳しく示しているものがなく、また変流の時期についても応永説、嘉吉説、天文説に分れ、いまだにいずれが正しいのか明確な論拠を持ち得ないところである。この問題についていち早く注意を向けたのは佐藤錠太郎氏である。氏は『利根川の変流に就いて』と題する小論稿の中で「利根川の本支を全く変じたるは、実に天文8年より同12年に涉れるものとして殆んど誤まらざるに近からんか」との見解を示し、文中その経緯について『上毛伝説雑記』に求め、その論拠を示している。現在利根川が位置する前橋の西に、「車川」と称する一条の細流があったこと、そして「利根川がその昔、群馬、那波の二郡を西岸として、勢多、佐位の二郡を東岸として流れていた」ことは明らかであるとし、それが『上毛伝説雑記』によれば、「永享の頃より蒼海に用水不足是非なく城を石倉に移し橘山の麓より利根川を引き入れ（中略）然るに享禄、天文両度の洪水に城中散々に押崩され大河と成る……」とあり、そしてこの内容は『長尾家伝利根川由来』と題する古記、また、『二子山考』とも一致することを上げて、これを上記の見解の論拠としている。

前橋以南の現利根川の流路については上記の文中で引用されている『二子山考』にも「されば今の大渡より六、七里が間は元の車川にて云々」とあり、中世以前に小河川が存在していたことが肯定されている。この「車川」と称する現利根川の前身は『上毛伝説雑記』の内容からすれば水量も少ない小河川であったようであるが、この上流は総社、吉岡村間の榛名系河川に結んでいたことが考えられる。上滝遺跡周辺に見られる氾濫層＝泥流はこの「車川」と称された小河川をその経路として運ばれて来たとするのが、いま最も妥当だと思われる。

#### 農業用水としての「車川」

本地域においては、91図にも見られるごとく、井野川左岸微高地上、または背後の低湿地区内に点在する微高地上には古墳、集落址の農密な分布が見られる。これらを支える生産基盤は背後の低湿地に求められたであろう。上滝遺跡におけるB、C、D地区の、北一南、あるいは北東一南西に走る溝は周辺の灌漑に供した用水路であったろう。低湿地の発掘調査において水田址の確認ができず、本地域における水田の構造把握がなかったのは残念なことであるが、上滝遺跡と同時期の水田址は高崎北部の一連の遺跡で調査され、本遺跡の4.7km北西の新保遺跡でも同様の調査が行なわれ、この時期の水田址の構造は様々な問題を投げかけながらも詳細に把握されてきている。これらの遺跡の水田に関わる調査で特に焦点が当てられて来ているのは小区画畦畔の灌漑方法上の意味と水利、すなわち用水の供給源の問題である。本遺跡の低湿地区の土壌条件（氾濫層の及ぶ範囲外）は、『群馬県耕地土壌図』によれば新保遺跡の低湿地区と同じ類型に属し「表土、有効土層は厚く、自然肥沃度は比較的高い。表土は粘～強粘質で40～80cm湧水面があり、グライ層の出現する場合が多い……」と説明されている。このことから上滝遺跡の低湿地にも新保遺跡と同様の水田址の存在が予想される。新保遺跡においても大小の灌漑用水路の存在が確認されており、これらの水路はその給水源を染谷

川に求めていたと想定される。これと同様に上滝遺跡に見られる数条の溝も、その給水源を利根川の前身である「車川」と称された小河川、場合によっては旧滝川に求めたと思われる。中世以前、本地域においてこの両河川の持つ意味は、相当大きなものであったと言い得る。(佐藤)

## (2) 遺跡の構成とその変遷

上滝遺跡は微高地上に形成された遺跡である。出土遺物でみると、古くは縄文時代前期までさかのぼることが判明した。しかし、主体は古墳時代前期から奈良時代までの住居址・土壇・溝等であり、中・近世の館址である。

本遺跡の変遷を各時代ごとに分析してみたい。

### 1 縄文・弥生時代

縄文時代の遺構は検出されていないが、微量ではあるものの縄文前期から後期に至る土器を出土している。周辺の地域をみると、滝川<sup>(34)</sup>・下齊田<sup>(35)</sup>・八幡原A遺跡で各々縄文前期が、下郷<sup>(36)</sup>・高崎市八幡原遺跡で縄文前・中期が、井野川段丘上の元島名遺跡で縄文後期の遺構・遺物が、数量的にはそれ程多くはないもの出土している。この様相は前橋台地全体に波及しているとみて間違いのないところであろう。縄文時代における同台地の微高地上に展開する様相と、微高地の使い方を検討する必要がある。

弥生時代になると遺構・遺物とも検出されていない。周辺の地域をみると鈴ノ宮遺跡<sup>(39)</sup>がある。鈴ノ宮遺跡は井野川段丘上にあり、弥生時代後期樽式を中心とする方形周溝墓と住居址群から成り、1部弥生中期にさかのぼる土器も出土している。

上滝遺跡に弥生時代の遺構・遺物が出土していないことから、微高地と周辺に広がる低湿地が、弥生時代の生産形態・集落形態からはずれていたことが指摘できる。と同時に古墳時代前期の時代に使用供給が開始された状況を見ると、両者の間に“質的”な差があったことも考えておかなければならない。

### 2 古墳時代前期 (96図1)

古墳時代前期に属する遺構は、1・3・12号住居址、40・41・43・57～60号土壇、9号溝である。微高地の西側では、東より西にかけて同時期の土器の散布がみられ、9号溝内にも流入している。従ってこの9号溝が西の限界を示すものとして理解できる。住居址は3軒のみであるが、この微高地の縁辺に展開している。土壇は住居址の近くにも存在するが、北側にまとまる傾向をみせ、墓域を形成している。

本地域の古墳時代前期の遺構群をみると、墳墓関係ではまず將軍塚古墳<sup>(40)</sup>をあげることができる。本遺跡の西側0.4kmにあり、將軍淵とよばれる井野川の支谷をはさんで対峙する。全長75mの前方後方墳で仿製四獣鏡を出土している。また近在には三角縁神獣鏡と内行花文鏡を出土した蟹沢古墳<sup>(41)</sup>や、方形周溝墓(前方後方型を含む)を集落と共に検出した鈴ノ宮<sup>(42)</sup>・元島名<sup>(43)</sup>両遺跡がある。

梅沢重昭氏は、群馬県内の初期古墳<sup>(44)</sup>の考察の中で、將軍塚古墳、蟹沢古墳等を含めた当地域を井野川下流域とし、「弥生時代の伝統を引く豪族層の具体的発展としての將軍塚古墳の構築」とする見解を発表した。また下郷遺跡<sup>(45)</sup>の報告の中で、筆者は將軍塚古墳を中心とする古墳群の変遷を「鈴ノ宮遺跡の弥生時代の方形周溝墓群→蟹沢古墳→將軍塚古墳→不動山古墳」として論じた。鈴ノ宮遺跡では弥生時代の遺構と重複して、古墳時代前期の方形周溝墓4基と、住居址51軒が検出されている。井野川段丘上に沿った形で墓域を設定し、集落は墓域の内側に展開している。反対に下郷遺跡をみると、方形周溝墓群、前方後方墳、前方後円墳等で

墓域を形成しているが、集落を伴っていない。鈴ノ宮遺跡は集落と墓域が同一地区で伴う形態として、下郷遺跡は集落と墓域が隔絶する形態として理解できる。

上滝遺跡の場合、遺跡から土壇の検出はあるものの、方形周溝墓等の特定墳墓は構築されていない。將軍塚古墳の母村となる集落がこの上滝遺跡であるとする積極的な根拠はないものの、下郷遺跡の例と同じく集落と隔絶する位置に墓域を形成しているものとするならば、その可能性も考えておく必要がある。

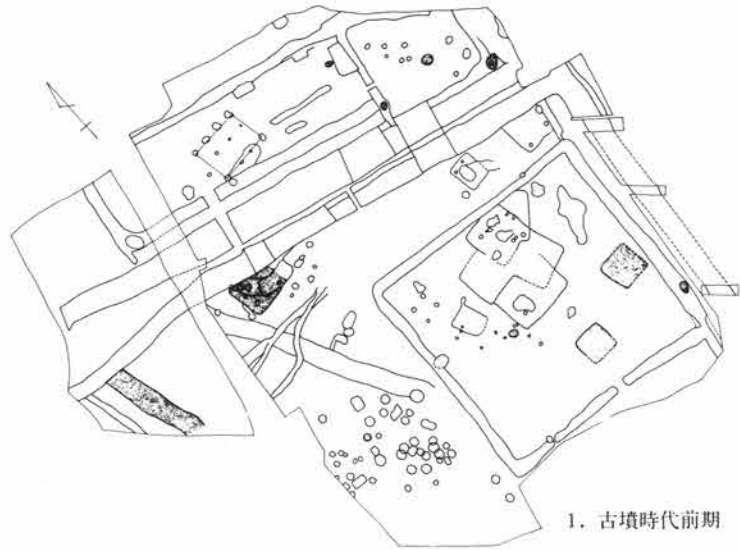
### 3 古墳時代後期前葉

(第95図2)

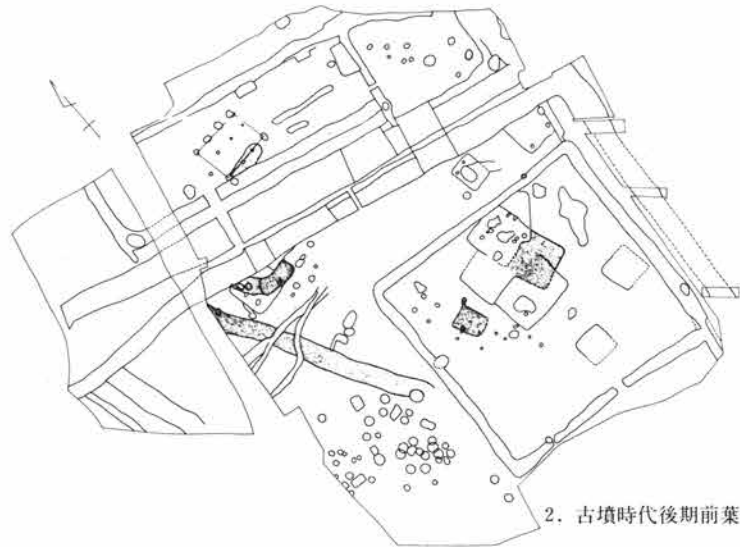
古墳時代後期前葉(鬼高Ⅰ式)の遺構は、2・6号住居址、42・49・54・61号土壇、1・11号溝等があげられる。

古墳時代前期に比べると、まず1号溝が9号溝よりかなり東側に移動していることと、住居址もそれに関連するかのように、かなり微高地の内側に移動していることがわかる。これは微高地の使い方が古墳時代前期よりせばまったことを意味しよう。

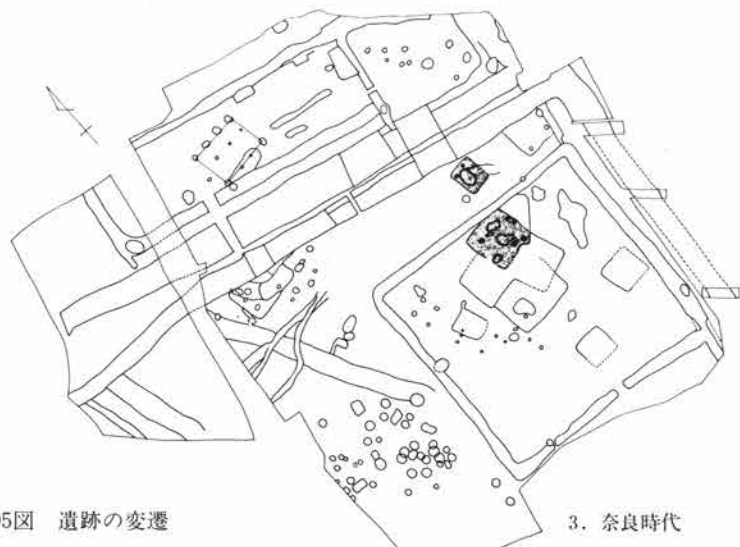
土壇はかなりばらつきがあるものの、古墳時代前期に比べると住居址より離れた位置に構築されている。問題となるのは1号溝の存在である。基本的には9号溝と同様微高地の西限を示すものとして理解できるが、溝



1. 古墳時代前期



2. 古墳時代後期前葉



3. 奈良時代

95図 遺跡の変遷

### III 上滝遺跡

内出土の遺物を見ると、かなりの完形土器が無傷の状態で見出されたり、子持勾玉が存在するなど特異な状況を示す。この時期の祭祀的な傾向をもつものとして注目されよう。

## 4 奈良時代

(第95図3)

奈良時代(真間式)の遺構は、7・11号住居址の2軒にすぎない。古墳時代前期や古墳時代後期前葉の時期に比べると、遺構

数の減少と、住居址の微高地上の占地のあり方に大きな差があることに気付く。住居址の位置をみると、微高地の更に内側に構築され、土壇・溝等は存在しない。この微高地を使用するメリットがかなり薄まったとみることができよう。

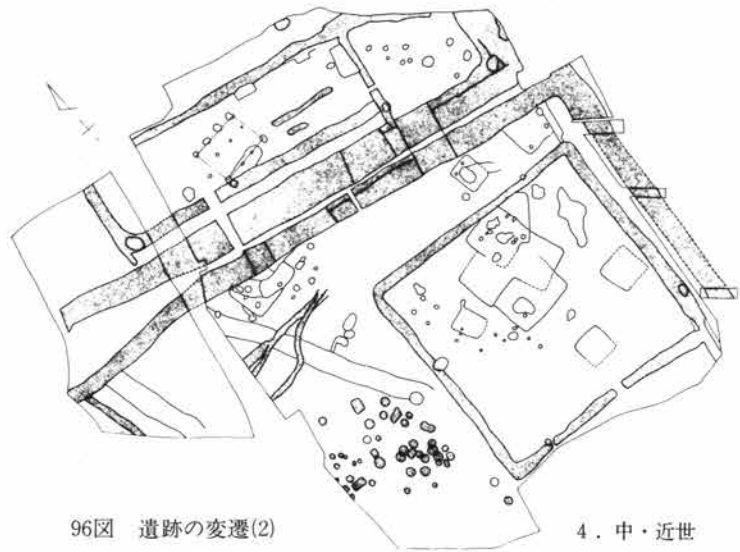
次に問題となるのは榛名二ツ岳墳出のFA層の存在である。FA層は上滝遺跡のみならず、周辺地域を広い範囲に泥流層としておおっている。(前項参照)遺跡内で見ると、1号溝のかなり下位で純堆積層として検出されている。1号溝の構築は鬼高I式であり、FA層の堆積状態からみて同時期の直後に流入したことは間違いない。近年『考古学ジャーナル』で、浅間・榛名両火山による火山堆積物を、14遺跡の事例をもとに分析し、その内容と墳出年代を考察している。榛名FA層については、寺内遺跡<sup>(47)</sup>・保渡田遺跡<sup>(48)</sup>・島海戸遺跡<sup>(49)</sup>等で、住居址の床面近くに純堆積しており、古墳関係では、行幸田古墳群の中に葺石をおおう形で検出している。<sup>(50)</sup>遺物はすべて鬼高I式であり、上滝遺跡と共通している。降下年代では、考古学側の6世紀前半とするものと、地質学側の6世紀中～末とする見解に若干差はあるが、上滝遺跡でみる限りでは、やはり6世紀前半もしくはやや遡る時期とみるのが妥当である。

ともあれ、鬼高I式の直後に降下した火山灰は泥流層として上滝遺跡の周囲で猛威をふるい、奈良時代までの、実年代で考えれば約200年あまり無人となった訳である。広範囲での古利根川による泥流層の様相は不明であるが、少なくとも遺跡の周囲では、生産と生活の基盤が壊滅状態になったことは間違いない。古利根川に点在する同様の遺跡を子細に検討することによって、その実体はより鮮明になってくるであろう。

## 5 中・近世(第96図)

奈良時代が過ぎると、この微高地の利用は完全に終止符がうたれる。再度利用されるのは、中世の環濠をめぐらす館址としてである。2号溝によって区画された部分のみが復元できるが、その他の溝もあわせるとかなりの館址が想定できる。特に北側に延びる部分については、かなりの規模が推定される。時期については近世のものが多いと思われるが、6号井戸や2号溝から出土する陶磁器などを検討すると、南北朝時代までさかのぼる可能性がある。

近在の中・近世の城址・館址については山崎一氏の研究がある。<sup>(51)</sup>それによると玉村町周辺には、玉村館をはじめとする多くの城址と館址が、また近接する地域では、南2kmに八幡原館、北西1.5kmに元島名城などが



96図 遺跡の変遷(2)

4. 中・近世



存在する。また関越自動車道の下郷遺跡でも環濠をめぐる館址を検出している。八幡原館は安達盛長(1135～1200)の代官館址とも考えられている。この地域は建仁3年(1201)に安達盛長が上野国奉行人(後の守護に当たる)となってから、引安8年(1285)の霜月騒動で北条氏管領平頼綱に滅ぼされるまで上野国の中心となったところである。また元島名城は応永年間(1400年頃)に島名伊豆守が築城したもので、関越自動車道<sup>52)</sup>や圃場整備の発掘<sup>53)</sup>で一部が明らかになってきた。

上滝遺跡における一連の館址は、周囲の中・近世に関する遺跡群と無縁とはいえない。特に八幡原館とは地理的にも近く、玉村町周辺の城址・館址群とも密接に連繋しているものと思える。本遺跡も含めた形で、この地域の中・近世社会の展開を考える必要があろう。

(巾)

### (3) 出土土器の構成

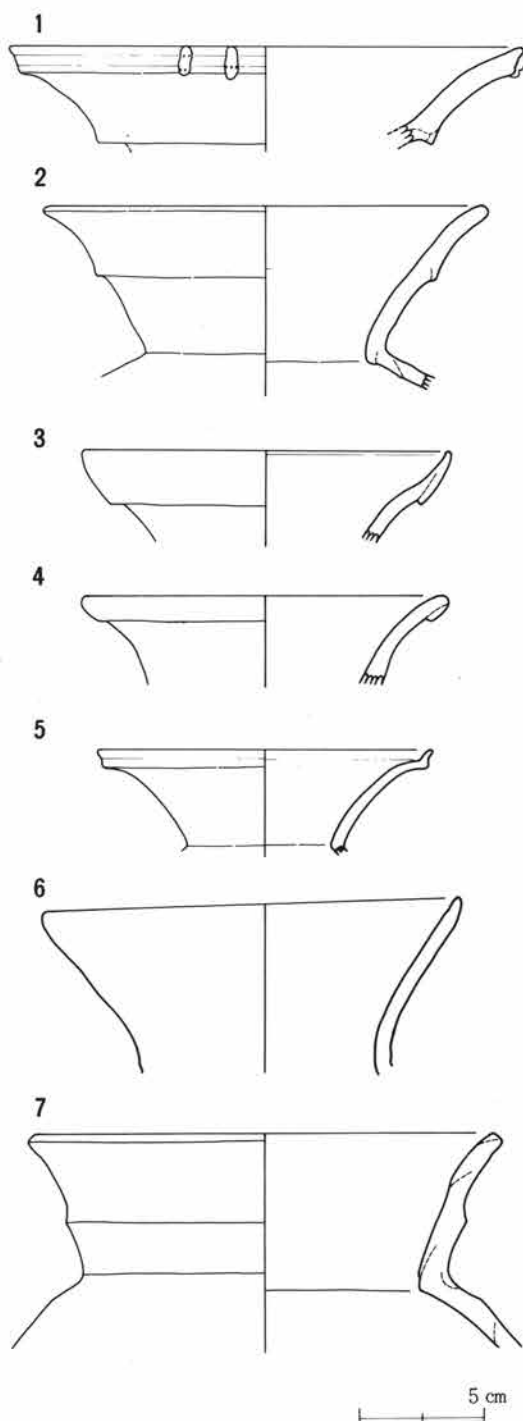
本遺跡の出土土器の考察を進めるに際し、以下のような分類を試み、順次記述を進める。

#### 1 群土器 (89図)

縄文土器を1群土器とする。土器の量は極めて少なく、いずれも小破片で、磨滅が進んでいる。出土状況は遺構に伴わず、混入または自然堆積層中より出土したものである。時期は前期(1～5)、中期(6)、後期(7～10)にわたっている。

#### 2 群土器

古墳時代の土器を2群土器とする。本遺跡の出土土器の大部分を占め、壺形、甕形、埴形、杯形、高杯形、器台形、甑形等、器種は多様である。時期的には古墳時代前期、及び後期前葉に大別できる。出土状況は前期の土器が1号・3号・12号住居址、40号・41号・55号・56号・57号土坑、及び微高地の西斜面に密集して出土したもの等がほとんどを占める。後期前葉の土器は2号・6号・13号住居址、42号・43号・59号・67号土坑、及び1号溝より出土したものがほとんどを占めている。ここでは2群土器を以下のごとく分類を試み、これに従って、順次本遺跡におけるあり方について紹介したい。



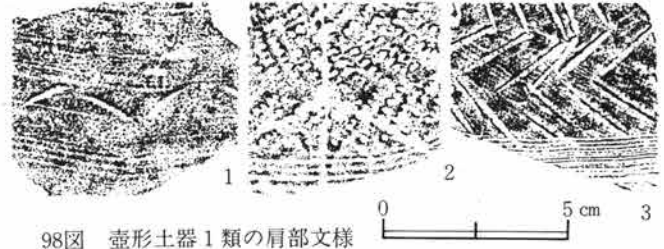
97図 壺形土器の分類

### III 上滝遺跡

#### 壺形土器

本遺跡において比較的多く見られ、主体をなすと思われるのは以下、7類形であり、これらを合わせると壺形土器全体の90%以上を占めている。(97図)

1類(82図1~5) いわゆる複合口縁をなすものである。頸部が大きく外反し、口縁部は頸部に対し一旦内折し、大きく外反する。口縁部内折部の外側に突帯を持つものが多く、また82図1は口縁部外側、内折部外側に櫛状具による刺突や円形浮文を付し、頸部には突帯をめぐらす。98図1~3の櫛状具による



98図 壺形土器1類の肩部文様

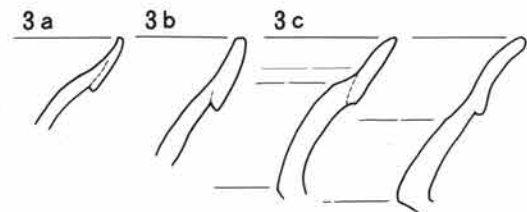
文様のある肩部破片は本類に属すると思われる。口縁複合部の接合方法は必ず下位の器体に上から継ぎ合わせているのが注意される。出土状況については遺構に伴うものではなく、出土量は少ない。口縁部破片は大小12点を数える。

2類 頸部から口縁部にかけては外側、中位に強い稜を作って2段に大きく外反する。

口縁部から頸部にかけての整形は横方向のヘラ研磨が施されるもの(73図7)があるが、ほとんどのものは口縁部ヨコナデ、頸部は縦方向のヘラ研磨を施している。口縁部破片は大小8点を数える。

3類(73図3~5、74図9・10、82図9) いわゆる複合口縁をなすものである。口縁部は外側から幅広いの粘土帯を重ね、段を作ることを特徴とする。この類はさらに3細分が可能と思われる。(99図) a類(73図3~5)は胴部から頸部にかけて比較的緩く彎曲し、器体は小さく、器壁は薄く、口縁部はやや内彎する。色調は灰色味が強く、焼成は軟質であり、口縁部、肩部に網目状、または斜状の付加条を施す。また頸部から肩部にかけて赤色塗彩されているものが多い。

これらは南関東の弥生式土器の伝統を強く残している。b類(55図3)器形はa類に同じであるが器体が比較的大きく、器壁は厚い。整形はヘラ研磨が目立ち、焼成は堅緻で橙色味が強い。c類(32図1・74図10)口縁部が内彎せずやや外反気味になり、頸部の屈曲が強くなる。その他の成整形の特徴はb類に共通している。本遺跡における



99図 壺形土器3類の細分

2類の出土量は比較的多く壺形土器全体の16%を占める。口縁部破片は半ば近く遺存するものが多く、8点を数える。

4類(82図10 11) 口縁部はいわゆる折り返し口縁で、折り返し部の幅は比較的狭い。頸部以上の整形は研磨は行なわれずヨコナデが一般的である。壺形土器全体の中での比率は9%程である。

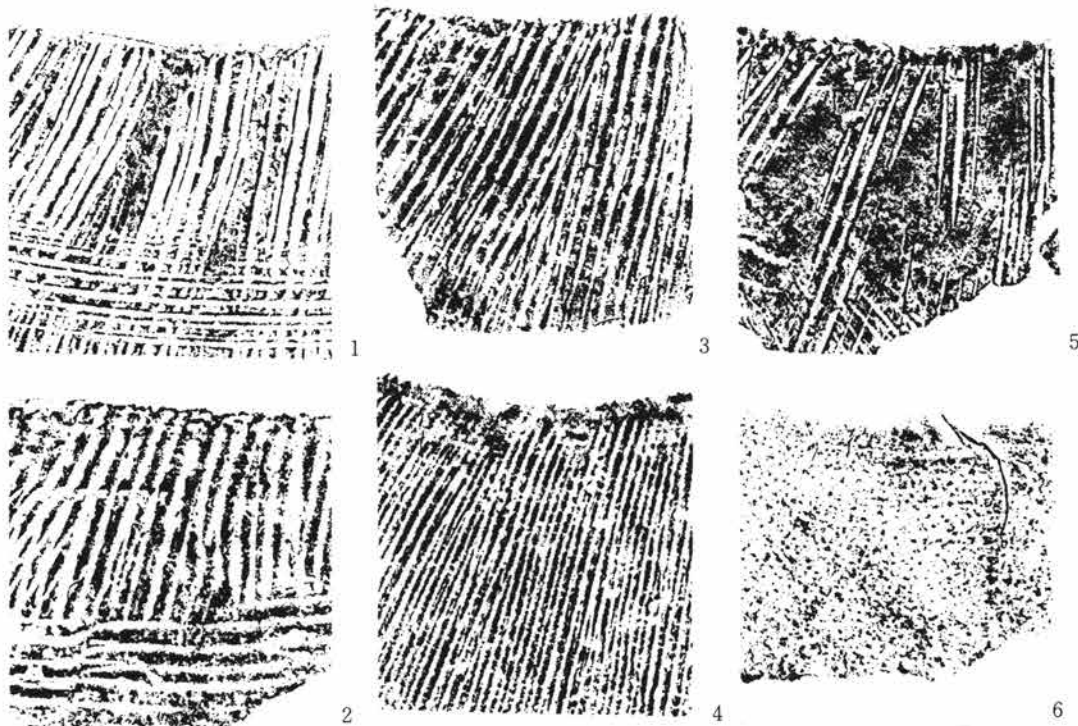
5類(74図12、13、82図12~16) 頸部は鋭く「く」の字状に屈曲し大きく外反する。口縁部は外側に稜を作って小さく直立する。成整形は丁寧で、頸部以上の整形はハケメや研磨は見られずヨコナデが施されている。壺形土器全体の中での比率は16%を占めている。口縁部破片20点を数える。

6類(27図17、49図1、73図1、2) 頸部は緩く外反し、口縁部は単口縁でわずかに内彎気味になるものが多い。口縁部整形はヨコナデを施すものがほとんどで、内面に赤色塗彩を施すものも見られる。出土量は壺形土器全体の中での比率は高く16%を占める。口縁部破片は完形土器も含め16点を数える。

7類 頸部は「く」の字状に屈曲し外傾する。頸部から口縁部にかけては外側、中位に稜を作る。器体は大きく、器壁は厚い。整形はハケメや研磨は見られず、口縁部から頸部にかけてはヨコナデが施されている。焼成は堅緻で、橙色をおびている。本類は1～6類に比べ成整形が全体的に後出的である。出土状況は後期前葉の土器と伴出し、出土量は図に示したものの他に口縁部小破片が数点認められる。

### 甕形土器

1類 いわゆるS字口縁甕形土器である。この種の土器は西は畿内から東は南東北まで分布し、非常に斉一性が強い。本遺跡におけるこの土器の形状も基本的には広域に認識されている斉一的なあり方と、大きく変わるところはない。すなわち口縁部はS字状の段を作り、胴部は無花果形をなし、底部には円錐台状の脚台が付き、下端が折り返し状になる。整形は口縁部がヨコナデ、胴部は2～3段にハケメが施され、また脚部上部にも縦方向のスリ消しを伴うハケメが施される。器壁は非常に薄い。基本的には以上のような特徴を示す。しかしながら詳細に観察すると器体の大きさ、口縁部の外反度、口縁部の長さ上下比、口縁部の屈曲の強さ、ハケメの粗さ、肩部の横ハケメの有無等において、少なからず差異が認められる。口径、器体が小さいものでは、26図7、大きいものでは26図8、口縁端部が丸く肥厚するものでは26図2・5、83図27、内側に凹線状の段を作るなどして端部を薄く尖り気味にしているものでは32図5、74図20等がある。S字状口縁の形状については、中位の内接部以下頸部の間と以上口縁部までの間の長さがほぼ等しいものや、上部が著しく長いもの(56図2)などがあり、口縁部の屈曲の程度についても強いものや弱いもの(26図4)などがある。胴部整形について見ると櫛状具によるハケメの状態にも若干の差が見られる。(図版84、85)深く粗いもの(100図1・2)細かいもの(100図4)等がある。肩部横ハケメについてもこれが有るもの(100図1・2)



100図 S字状口縁甕形土器(甕1類)の肩部ハケメ

縮尺1:1

### III 上滝遺跡

無いもの(100図3・4)がある。この他色調、胎土にも若干の差が認められる。胎土については他地域で指摘されているような雲母の混入は見ない。

この他出土量は極少なく、定形に欠けるあり方を示すものが見られる。83図28は器体がきわめて大きく、口縁部が著しく厚く、長いが、形状、整形、焼成はこの類に共通する。83図26はS字状口縁の形状の屈曲が著しく強く、特に内側に幅広のテラスを作っている。胴部にハケメは見られずナデを施す。胴部にナデのみ施す例としては100図6も同じであるがこの方は口縁部のS字状の屈曲が内側にわずかに認められる程度でほとんど単口縁に近い。100図5はハケメが疎に施されているが口縁部の形状は45表No242に示されるように定形化段階において多く認められるものである。またヘラケズリ等新しい手法は認められない。

本遺跡において検出されたS字状口縁甕形土器の量は完形になし得るものは18個体を数えるが、この他口縁部破片に至っては総数550片を数え、本遺跡における古墳時代前期の甕形土器の83%以上を占めている。このうち口縁部形状の観察ができる完形土器、及び大小の破片合せて243個の観察結果を44表に示す。またこの表に示された観察、計測結果を整理し、項目ごとの傾向を全体に対する百分率により46、47表、及び101図の折れ線グラフに示す。

S字状口縁甕形土器の本遺跡におけるあり方は以上に紹介したように大きさ、口縁部の形状、整形上に少なからぬ差が認められる。しかし一方、特に口縁部形状については数値に限られた範囲に集中する傾向が指摘できるようであり、このことは本遺跡におけるS字状口縁甕形土器が比較的定形化が進んだ段階にあることを伺わせる。以下この各部位に見られるあり方について、ここに有意な背景に基づく差異があるのか否かという問題について検討したい。

これまでS字状口縁甕形土器の系統的分類の試はいくつかある。群馬県地域においても石田川式土器の設定以後、藤岡市塚原遺跡、太田市五反田遺跡、玉村町下郷遺跡の報告者により2～3期に時代性を有する細分が試られている。これらの分類に共通して指摘できることは、その時間的推移に対する視点の持ち方であろう。それは東海西部におけるS字状口縁甕形土器の発生、及び推移を論じた大参義一氏の論考の中で指摘されている元屋敷期甕形土器(b)類の群馬県地域への移入、定着と退化、消滅過程をこの土器の本地域における推移形態としていることである。そして分類上の着眼点としては塚原遺跡においては口縁部形状と「胴部楯目整形」、五反田遺跡においては肩部の「楯目状文」下郷遺跡においては肩部の「ヨコハケ」についてそれぞれの原型の遺存と退化を中心にする、これに付随して一定の変化を見る各部位の形状を基としている。

本遺跡においてはS字状口縁甕形土器の口縁部の資料が比較的多く得られており、45表に示すところである。以下ではこの資料にもとずき、上記の視点を踏まえ口縁部形状、及び胴部整形の相互関連について分析し、本遺跡における有様について検討を進める。101図はこの関係をグラフにより示したものである。

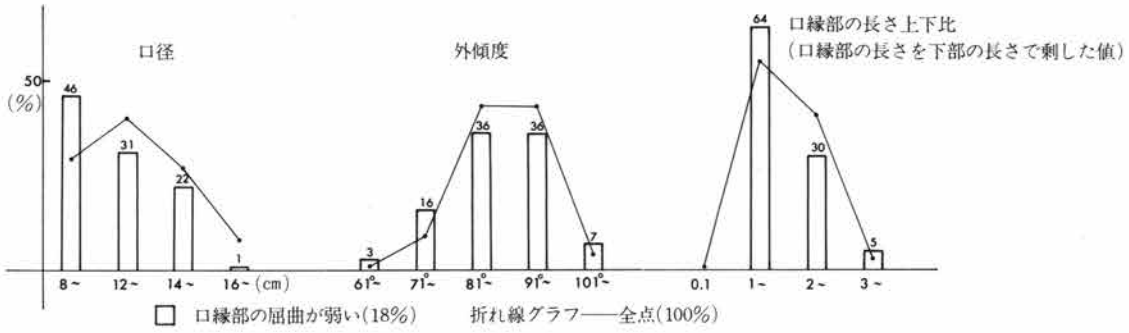
グラフIは口縁部屈曲の弱い個体(全体の18%)の口径、外傾度、口縁の長さ上下比の計測値と全体の計測値の分布を対照させたものであるが、次のような内容がこの表から読み取れると思われる。

- (1) 口径は8～14cmのものが多いが特に8～10cmといった口径の小さいものが46%と特に高率を占めている。
- (2) 外傾度は81°～100°に集中するが、全体傾向と比べ集中度は低く、ばらつく傾向が認められる。
- (3) 口縁部長さ上下比については1～1.9の値を示すものへの集中度が高い。

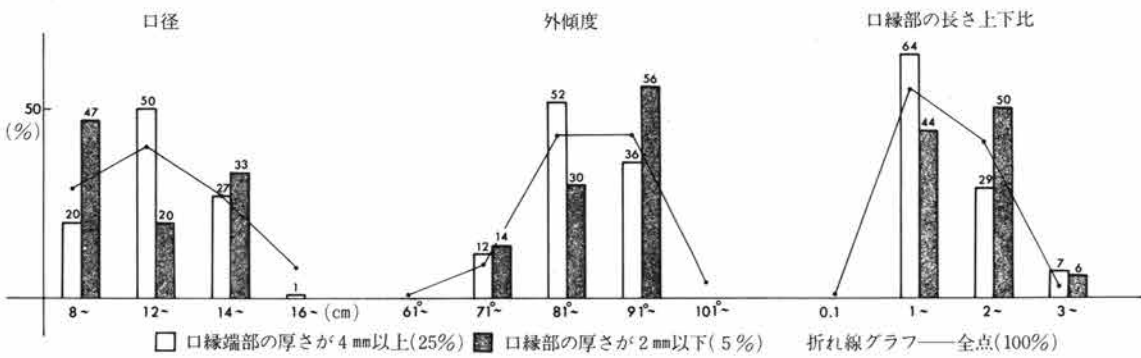
次に口唇部が肥厚するもの4mm以上と、薄く尖り気味のもの2mm以下について比較したのが、グラフIIである。

- (1) 口唇部が肥厚するものは口径12～13cmの間に多く見られ、これが薄いものは8～11cmに目立ち、径が

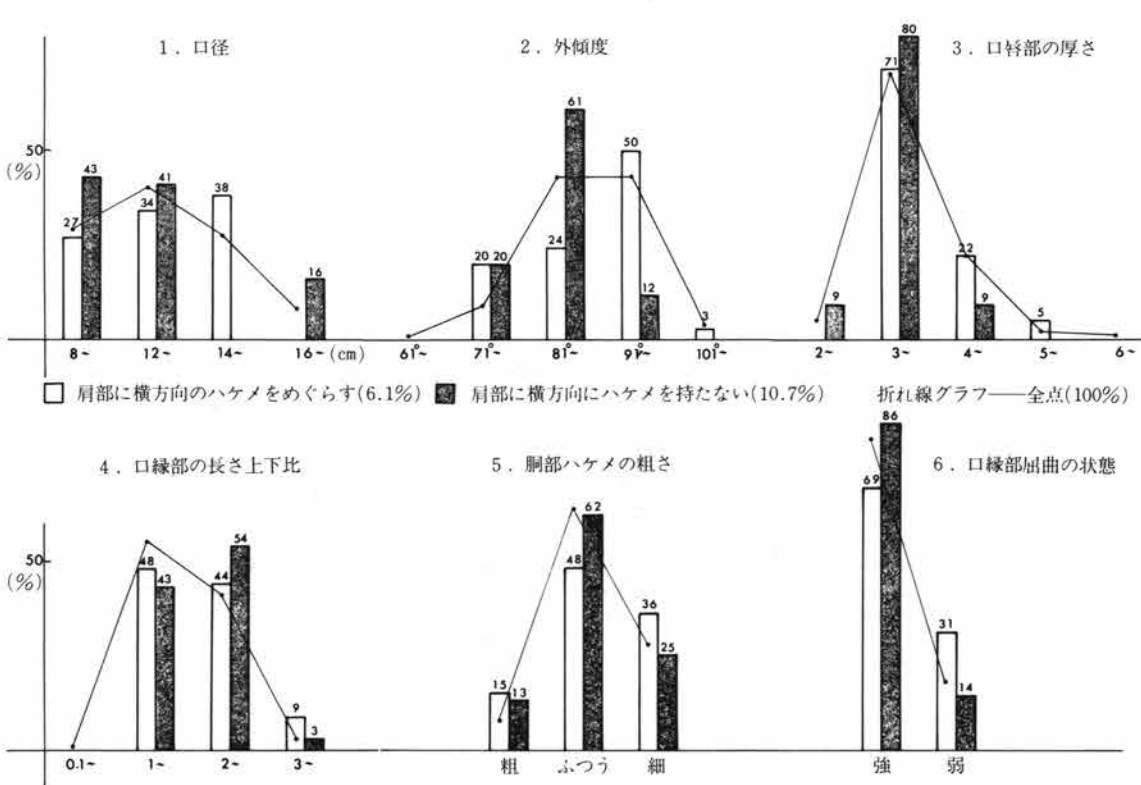
I 口縁部屈曲の状態と口径、外傾度、口縁部の長さ上下比、相互関連グラフ



II 口縁部の厚さと口径、外傾度、口縁部の長さ上下比相互関連グラフ



III 肩部横ハケメの有無と口縁部形状、胸部ハケメ相互関連グラフ



101図 S字状口縁甕形土器(甕1類)口縁部形状、胸部整形相互関連グラフ

### III 上滝遺跡

小さいものは口唇部が薄いといった傾向が認められるが、その一方、口径が大きいものでは両者の出現頻度は変わらない。

- (2) 外傾度については、両者とも81°~100°の間に目立って集中するが、このうち口唇部が厚いものは直立、薄いものは外傾度が大きい傾向が見られる。しかし特に直立に近い71°~80°では頻度は低く、差はない。
- (3) 口縁部長さ上下比については、口唇部が厚いものは上部が短かく1~1.9の頻度が高く64%を示し、反対に薄いものは上部が下部より2倍以上長いものが半数に達している。

グラフⅢは肩部の横ハケメの有無についての比較である。

- (1) 口径については、横ハケメの無いものは径が小さく、反対にこれを有するものは径が大きい傾向が見られる。ただし、口径が特に大きく16cmに達するものは16%であるが、この中には横ハケメを有するものは見られない。
- (2) 外傾度については、横ハケメの有無によって大きな差が見られる。81°以上の外傾度を示すものにおいては横ハケメを有するものは外傾度が大きく、反対に無いものではこれが小さいといった現れ方が顕著である。(ただし口唇部が4mm以上のものは外傾度は小さい傾向が見られる。)
- (3) 口唇部の厚さについては両者の傾向に大きな差はないが著しく薄いものには横ハケメは無く、反対に著しく厚いものには横ハケメを持つもののみ見られる。
- (4) 口縁部長さ上下比では、両者に目立った差はないが強いて言えば横ハケメの無いものに上部が長い傾向が認められる。
- (5) 胴部ハケメの粗さとの相互関係については横ハケメの有無により頻度に大きな差は認められないが、肩部横ハケメの無いものに“中”としたものの頻度が高く“細”では反対に横ハケメを持つものが多いといった傾向を示している。
- (6) 口縁部の屈曲については横ハケメを有するものは屈曲が弱い傾向を示している。

46表は外傾度と口径の相互関係をそれぞれ百分率により示している。外傾度が特に直立に近い71°~80°のものは口径は小さく、12~12.9cmのものが多いといった傾向が見られる。

47表は口縁部長さ上下比と外傾度の相互関係であるが、この場合両者相互に大きく影響を与える動きは認められないが、上部が長くなるに従って外傾度が小さくなる傾向が若干認められる。

46表 口径、外傾度の相互関係 56個分

口径(cm)	外傾度			
	71°~	81°~	91°~	101°~
8 ~	6 %	11 %	11 %	1 %
12 ~	2	19	17	1
14 ~	0.8	11	15	1
16 ~	—	2	2	—

47表 口縁部長さ上下比、外傾度の相互関係 56個分

口縁比率	外傾度			
	71°~	81°~	91°~	101°~
1 未満	— %	— %	0.5 %	— %
1 ~	6	22	26	1
2 ~	4	18	16	4
3 ~	1	1	0.8	0.2
4 ~	—	0.3	—	—

S字状口縁甕形土器の分類について、これまでいくつかの試みがなされてきており、この中で原形退化、消滅過程を肩部ヨコハケメ、または胴部ハケメに認め、これを軸に分類が試みられてきたことについては前にふれた。グラフⅢはこのこと、特に前者に関連したものである。つまりこのグラフにより示された内容は横ハケメの有→無を退化過程とするならば他の部位、特に口縁部の形状、胴部ハケメにもこれに応じた一定の変化が認められないかということである。グラフⅢはこの検討資料となり得ると思われる。

なおグラフⅢに示された前述の結果を導き出す過程において若干問題点が含まれているので言及しおきた

い。このグラフⅢに表わされた数値は、口縁部遺存率に基づく百分率であり、肩部横ハケメの有無が確認できる破片のみをその資料としている。完形土器口縁部破片総点数243片中31片、口縁部遺存率ではこの全片の総和56個分中9.4個分、17%である。この限られた点数によって算出した結果を本遺跡における一般性となし得るだろうか。このことについては、グラフⅢ1～4に全片、243片に基づいている折れ線グラフを付記し、これに示された数値と横ハケメの有無により対をなす棒状グラフの平均値とを比較することにより、その一応の目安とした。この両数値の差を統計誤差として認識し、1～4の各グラフについて各々最大値を示すと、1（口径）・12%、2（外傾度）・12%、3（口唇部の厚さ）・6.5%、4（口縁部長さ上下比）・9.5%となる。この数値を最大誤差として考慮してもグラフⅢに示された前述の内容に変わるところはないと思われる。

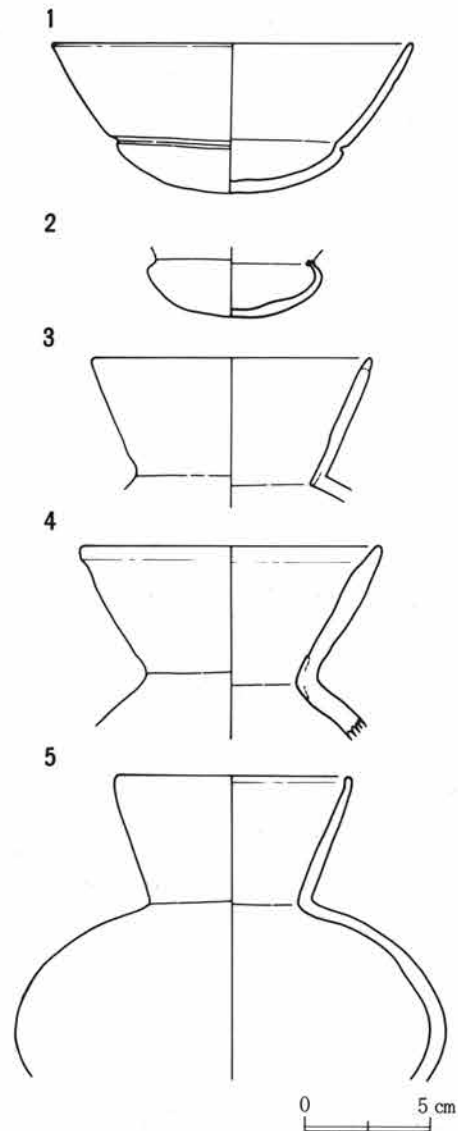
本遺跡の甕形土器の口縁部、各部位の形状とその相互関連、及び肩部横ハケメの有無に応じて各部位に現われる差異の有様については以上のごとくである。このうち特に肩部横ハケメの有無により、口縁部形状を中心に相互に一定の差異が認められることから、この間に若干、成作意識の違いが予想される。しかしここに認められる有様はこれまで前記五反田遺跡、下郷遺跡においてこれと同様の事柄について、背景に時間的推移を肯定する視点に立っての指摘があるが、本遺跡の場合と著しく異ったあり方が認められるようである。また一方、本遺跡におけるこの土器の全般的様相は前述のように強い斉一性を示しており、定形化が進んだ段階の中にあることが認められる。これらのことから、ここに認められる成作意識の差異には時間的推移も予想されるが、基本的には定形化段階の中にあつての2態と考えられるのではないだろうか。

**2類** (83図32) 口縁部はやや外反し、平縁をなす甕形土器である。胴部はほぼ球形を呈し、脚台部を持つと思われる。口径は6～8cmで、整形については口縁部はヨコナデ、頸部はハケメを斜方向に施すものが一般的である。胴部は明らかでないが、脚台部は1類に比べ開きの角度が大きく、器壁が厚い。出土量は少なく脚台部20個体が認められる。

**3類** (60図2・3、61図4～19) 胴部はやや縦長ではあるが球形に近い。頸部は比較的強く屈曲、外傾する。器壁は厚い。整形は胴上部ヘラナデ、下部はヘラケズリが一般的である。本類は1号溝を中心に出土し、古墳時代後期前葉に属する。この時期の甕形土器としては本類がそのほとんどを占め(85%)、口縁部破片数52点を教える。いわゆる長胴と言い得る甕形土器はほとんど見られないが62図11がややこの傾向を見せてはいる。

#### 埴形土器

**1類** (27図11～18) 口縁部はやや内彎気味に長く外方へ



102図 埴形土器の分類

### III 上滝遺跡

広がり、胴部との間を凹線で画し、くびれや段を作らない。丸底をなし、器壁は薄く端正に作られている。整形は棒状具による放射状へら研磨を施し、ハケメの痕は認められない。色調は橙色を帯びるものがほとんどである。47表は口縁部整形と色調の関係について口縁部遺存率を基に示したものである。( )内は完形土器、及び口縁部破片点数である。

48表 埴形土器1類 色調、口縁部整形の相互関係

整形 \ 色調	橙 色	浅黄橙色
暗文状へら研磨	83%(15)	0%
ヨコナデ	7%(4)	9%(3)

2類 (75図31、84図34) 口縁部が1a類より短く、胴部が横に膨らむ。口縁部整形はヨコナデのみである。色調は浅黄橙色を呈するものが多い。出土量は口縁部小破片11点を数える。

3類 (74図21、75図22~27) 口縁部は球形、または扁球形をなし、頸部は強く屈曲し、口縁部は直状に外傾し、長く伸びるものと短かいものがある。整形は研磨、またはハケメが施され色調は浅黄橙色、焼成は比較的軟質である。微高地西側斜面の一群中に多く見る遺構に伴うものとしては40号土坑中に1個体出土している。口縁破片の出土点数は図示している8点である。

4類 (40図1) 頸部は「く」の字状に強く屈曲し、外傾する。口縁部の器壁は厚く、口縁部整形はほとんどのものが粗い縦方向の暗文状へら研磨を施す。色調は橙色、または赤褐色を呈する。

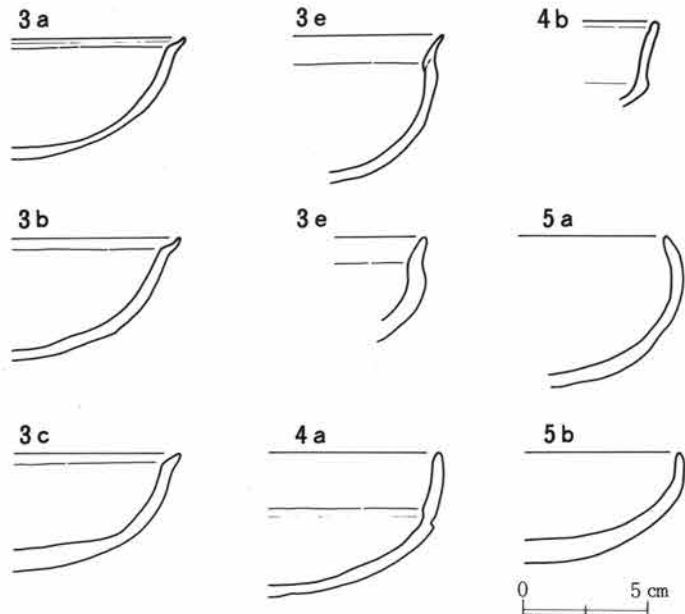
5類 (63図24) 器体は比較的大きく、胴部は端正な扁球形をなし、口縁部は口径が比較的小さく、やや内彎する。出土量は1号溝中より出土した完形土器の他、口縁部小破片が7点認められた。

### 杯形土器

1類 (75図35、84図38~40) 丸底、半球形に近い胴部に外傾する有段口縁が付く。口縁上部は比較的長く伸びるが外反しない。口径は13cm前後である。胴部は肩部が膨らまない。器壁は薄い。整形は口縁部から胴部にかけて横方向の緻密なへら研磨が施されるのが一般的であり、75図35は内面に放射状へら研磨が見られる。器壁は薄く焼成は堅緻である。色調は茶褐色、または橙色を呈する。出土量は9号溝付近土器中において完形に近い個体が出土している他口縁部小破片が4点出土している。

2類 2a類 (75図41) は胴部は浅く、肩部は膨らみ頸部は「く」の字状に鋭くくびれる。内面には強い稜が作られ、口縁部はやや内彎気味に大きく外傾する。2b類は頸部の屈曲は2a類に比べ緩い。(75図36) 口縁部の整形は縦方向のへら研磨、またはヨコナデが施される。色調は橙色をなすものがほとんどである。出土量は図示した完形土器2個体の他口縁部小破片が4点見られる。

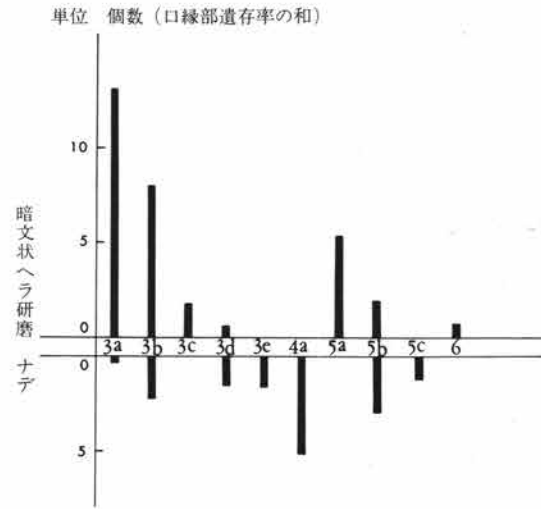
3類 (29図3・4、63図25~37) いわゆる内斜口縁をなすものであ



103図 杯形土器の分類



る。口縁部の形状により a～e 類に 6 細分できる。3 a 類 (63 図 25・26・27) は頸部の屈曲がとくに強く、内側に明瞭な角を作る。内斜面は短く、先端は小さくハネ上る。内斜面、口縁端部外側はヘラ状具によるヨコナデにより、内斜面は平滑で、口縁部の形状は端正である。3 b 類 (63 図 29～31) は口縁部内斜面はやや内彎するか平坦で、端部はハネ上らない。3 c 類 (63 図 28・33・35・37) は口縁部内斜面が丸身を持つものである。3 d 類 (51 図 2) は内斜口縁というよりむしろ頸部が緩くくびれるものである。3 e 類は口縁部が外方へ長く伸びるものであり、多くの場合頸部内側に稜を持っている。3 類の整形は、表面は口縁部がヨコナデ、頸部から胴上部にかけてナデ、胴下部から底部にかけてヘ



104 図 杯形土器の内面整形

ラケズリというのが一般的である。内面は口縁部がヨコナデ、胴部は丁寧なナデを施し 3 a～3 c 類ではほとんどのものがその後斜行ヘラ研磨を施している。(101 図) 研磨は棒状具により、幅 1.5mm、2～4mm の間隔をもって平行させている。出土点数は 3 a、3 b 類が圧倒的に多い。

**4 類** (64 図 40～45) 4 a 類は頸部に凹線かまたは、浅く幅広の凹線により弱い段を作るものである。口縁部はやや内彎気味に直立するか、外傾する。整形は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデが施され以下はヘラケズリである。内面は暗文状ヘラ研磨を施さないのが特徴である。(101 図) 出土状況は 1 号溝に伴ったものがほとんどで、他の出土はない。4 b 類は須恵器模倣と言われるものであるが、この種の土器は小破が 2 点認められるにすぎない。

**5 類** 胴部が丸く膨らみ、口縁部がやや内彎するものをこの類とする。胴部及び底部の差異により 5 a～5 e 類に細分できる。5 a 類は胴部から口縁部にかけて緩く内側へ彎曲するものである。(64 図 46～49) 5 b 類外面胴部のヘラケズリに伴い肩部に弱い稜を作る。(29 図 14・15、64 図 51～53) 5 c 類は肩部に弱い稜を作り、口縁部は内傾し小さい平底をなし器壁は厚い。(29 図 5)

整形については、5 a 類は外面胴部にヘラケズリが施されるが粗い研磨、あるいはナデが見られることがあり、内面胴部には必ず斜行ヘラ研磨が施される。5 b 類は外面胴部が粗くヘラケズリされ、内面はナデのみ施されるものが多い。出土量は 5 c 類は 2 号住居址出土の 1 点の他は僅かであるが 5 a、5 b 類は 1 号溝その他より多量に出土している。

### 椀形土器

**1 類** いわゆる内斜口縁をなすもので、口縁部形態は杯形 3 類にまったく同じであるが胴部が丸く膨らみ器体は深く丸底をなす。口縁部の形状により杯形 3 類に対応させ 1 a～1 e 類に細分できる。1 a 類は内斜部の先端がハネ上るもので (29 図 6、64 図 55)、1 b 類は内斜部が内彎し (64 図 56)、1 c 類は内斜部がやや丸身を持つものである。(29 図 6) 整形は口縁部が横ナデ、胴上部がヨコナデ、またはナデ、底部はヘラケズリが施されるのが一般的である。内面整形は 1 a 類では必ず杯形に見られると同様の斜行ヘラ研磨が施され、

### III 上滝遺跡

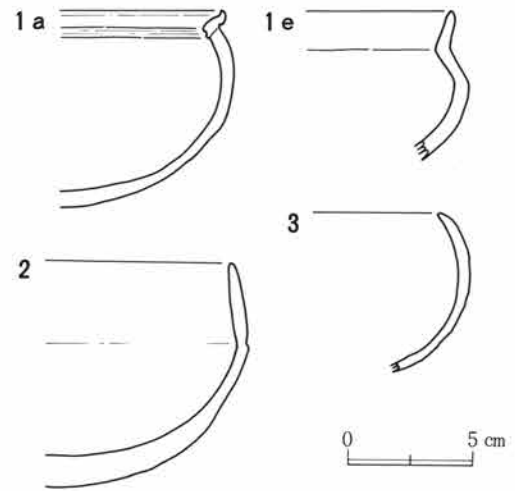
1 b、1 c類は杯形3 b、3 cに較べナデの占める割合が多い。1 e類は口縁部が外傾気味に長く伸び、胴部が膨らむもので杯形3 e類に対応するものである。(64図57、85図57~59) 内面整形は杯形と同様暗文状へら研磨をまったく見ない。出土量は1 b類に次いで多い。(102図)

2類 頸部に凹線、または弱い段を作るもので杯形4類に対応するものである。杯形に較べ器体が深い。整形は内面に暗文状へら研磨は見られずナデのみ施されることは杯形4類と共通している。出土点数は1号溝の1点(64図59)の他はわずかである。

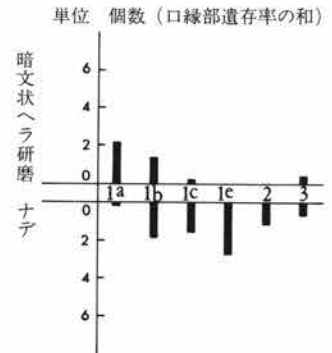
3類 胴部から口縁部にかけて丸く彎曲するもので杯形5類に対応するものであるが、これに比べ口縁部の彎曲が強く、器体は深い。整形は外面口縁部から胴上部にかけてナデを施す。また斜行へら研磨が施されるものもある。(85図61) 内面は杯形と同じ斜行へら研磨を施すものとナデのみのものがある。出土点数は少ない。

椀形1~3類は杯形に比べ胴部が膨らみ、器体が深くなるものをこれにあてたがその基準は任意のものであり、中にはいずれともなし難い中間的なものもある。内外面の整形についても各類型とも丹念であることは杯形と同様である。特に内面の斜行へら研磨の類型別の現われ方も基本的には同様で、しかも各類型の出現率も杯形に準じているというのも興味深い。

(102図)



105図 椀形土器の分類



106図 椀形土器の内面整形

#### 高杯形土器 (杯部)

ほとんどの器体が杯部、あるいは脚部を欠損しており両者の形状ごとの相互関係を示す資料は少ない。ここでは一応杯部、脚部ごとに類型化する。杯部はその形状により1~6類に類別する。

1類 杯底部に明瞭な稜を作るものであるが、杯部の大きさにより1 a、1 bの2つに細分できる。1 a類(75図37、85図65)は杯部の器体は大きく底部に明瞭な稜を作り、やや内彎気味に広がる。脚部は杯部との接合部が細く下へ緩く彎曲しながら大きく広がる。(脚1類) 1 b類の杯部の形状は1 a類にほぼ同じであるが器体は1まわり小さい。(27図15) 脚部は1 a類とまったく異なり、エンタシス状の柱状部に外方へ強く屈曲する裾部が付く。(脚3類) 整形は1 a、1 b類両者ともにハケメ後粗いへら研磨を施している。出土状況は1 a類が微高地西斜面からの完形に近い1個体の他、破片4点の出土を見る。1 b類については1号住居址から出土した完形に近い1個体の他破片1点のみである。

2類(75図38、76図39) 杯部は比較的深く、底部から口縁部まで彎曲しながら広がる。脚部は杯部との接合部が太く全体にずんぐりしている。整形は75図38では杯部は内外面ともナデ後へら研磨が施され、特に内面は緻密に施されている。脚部においては内面にハケメが施される。出土点数は図示した2点の他は口縁部破片1点のみである。

3類(58図7・11、85図68) 杯部は底部が平坦で、外面に強い稜線を作りやや外傾しながら直状に立ち

上る。脚部は不明確であるが58図8の杯部はこの類形になるかと思われる。整形はいずれも丁寧なナデの後、斜行へら研磨が施され、とくに58図11は外面にも内面と同様の研磨が見られる。出土量は前掲2点の他、口縁部破片の点数は多く、23点を数える。

4類 (57図4、85図66・67・69) 杯部はやや内彎気味に外方へ大きく広がる。裾部は段を作り肥厚する。脚部の形状については57図4、85図66で見ることができる。しかし後者は古い様相を残すもので特異な例である。整形は85図66・69についてはハケメの後へら研磨が施されているが全体的にナデ、またはへら研磨が多く、研磨に先立ってハケメを施すものは少ない。出土量は図示したものの外、口縁部破片が19点認められる。

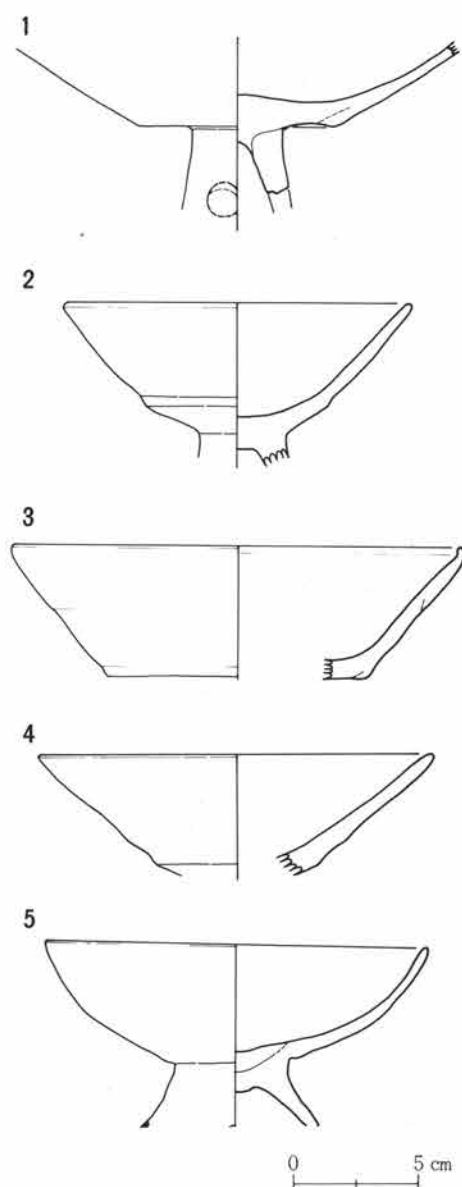
5類 (43図4・5) 底部の段は不明瞭で脚部との接合部から口縁部まで緩く内彎しながら杯部を形成するものである。整形は外面はヨコナデまたは緻密なへら研磨、内面は同様のへら研磨が行なわれるのが一般的である。出土量は図示した2点の他口縁部小破片6点を見る。

#### 高杯形土器(脚部)

1類 (75図37) 杯部との接合部は細く下方へゆるく彎曲しながら大きく広がる。円孔を3個穿ち、器壁は薄い、裾部径はおよそ12cm前後のものが多い。整形は外面はほとんどハケメ後縦方向の緻密なへら研磨を施している。内面は横方向のハケメ、または75図37に見られるごとくハケメの後へらナデまたはへらケズリが施されている。出土量はこのうち一部は器台の脚になる可能性もあるが裾部破片、接合部付近破片とも25点認められる。

2類 柱状部は全体に細長く、杯部との接合部は細く、下方へ直状に太くなり、外方へ強く屈曲し大きく広がる裾部が付く。器壁は薄い。円孔を有するもの(76図40、85図72)と、これを持たないもの(86図75・77)のがある。円孔は2孔を穿っている。整形は外面はへら研磨され、内面はナデを施すものが一般的であるがハケメを施すものも一部に見られる。出土量は図示したものの以外の出土はほとんど見られない。

3類 (27図14・15、56図7、57図4、58図8、86図78・79) 杯部との接合部が細く、下方に膨らむエンタシス状の柱状部に外方へ折れ曲がり、大きく円盤状に広がる裾部が付く。器形、及び成整形において若干の差異が認められる。一つは杯部との接合方法であるが、2通りの方法が見られる。一方はいわゆる巻き上げ式と称されている方法で、柱状部は杯部との接合に先立って強く絞り込まれたため脚部の天井部は完全に閉塞した状態にあり、杯部は脚部上部の側面から上端部にかけて粘土を貼付することから作り始められる。このためこの部位の破損状態は27図14に示されている接合面に沿って剥離している場合が多い。後者は脚部天井部は、上部の絞り込みが弱く、開孔した状態で杯部との接合を行なっている。この場合この孔はホゾ穴



107図 高杯形土器(杯部)の分類

### III 上滝遺跡

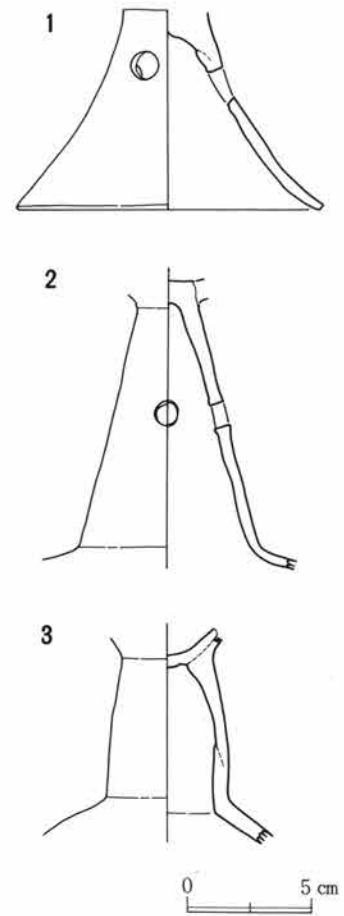
状になり、上部から充填した粘土が脚部内に押し出されてきている。85図67は杯部であるが、この接合状態を良く示している。しかし86図78の場合は杯部の接合の際、天井部に粘土片を当て閉塞した状態で行なわれ、また他にも接合の際天井部が孔があるにもかかわらずほとんど上からの粘土の押し込みが見られない例もあり、成形の際ホゾ穴として意識されていたとは思われない。両者の出土量を比較すると、巻き上げ式のものが脚部个体数で80%に達している。

次に柱状部の成形方法について若干ふれておく。一部、内面に残る粘土の合わせ目痕を観察すると、粘土幅は1.5cm単位で積み上げられている。破片が小さいため、巻き上げか、または輪積みによるものか不明であるが、成形順序は裾部方向に向って積みあげ、しかも内側から粘土紐を重ねるようにし、一単位ごとに指で押しえながら、成形されたことが観察できる。脚部上部の絞り込みはこの粘土の積み上げの後に行なわれるがこれにより上部の径は著しく小さくなるが、器壁はこれに応じて厚くなっており、粘土積み上げの際内側からの指押しえの必要から、当初から脚上部を細く作ることにはなかつたことが伺える。

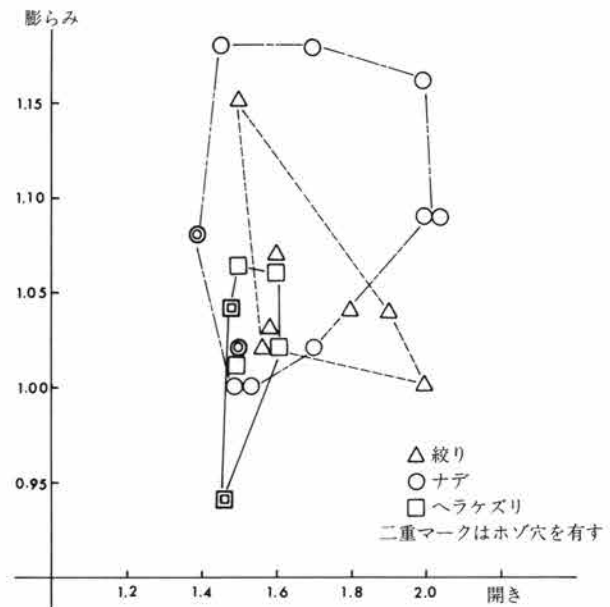
柱状部の粘土帯の合わせ目痕は、ほとんどのものが内面でもまったく観察できない。絞り込みに先立って丹念に面調整がされているようである。また内面にできた絞り目痕は多くの場合、そのまま残っており、後の調整は行なわれていない。絞りの後内面調整が行なわれる場合はナデ、またはヘラケズリである。量的にはヘラケズリが行なわれているものはわずかで、

指頭による縦、または横方向のナデが行なわれている場合が多い。両者を形状との関連で見ると、一定の傾向を示す。(107図) 絞り目のままか、この後にナデを施しているものは上部に対し下部が太く、しかも中位の膨らみの強いものが目立つ、一方ヘラケズリを施しているものは上部、下部の差は比較的少なく、中位の膨らみが目立たないものが多い。この他後者の場合注意されるのは器壁が前者に比べ薄いことである。このことはヘラケズリの主目的とするところは器壁を薄くすることにあり、この作業を容易にするために、前段階の成形過程で若干器形を直状気味にしたことが伺える。

整成形の順序はまず粘土の積み上げより始められ、器面調整→上部絞り込み→杯部及び裾部の接合→器面調整の順で行なわれていると思われる。



108図 高杯形土器(脚部)の分類



109図 高杯形土器(脚部)3類柱状部形状と内面整形

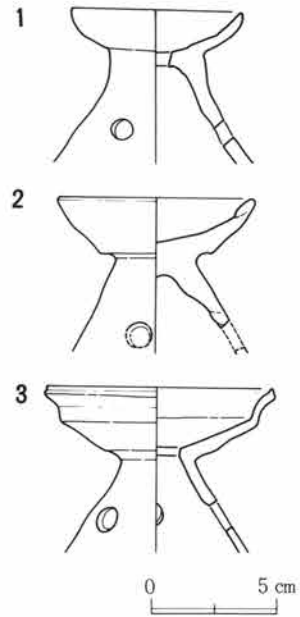
器台形土器

1類 (76図41・42) 器受け部は円弧状をなし、段を作らない。脚部はやや反りながら広がり、3孔を穿つ。

2類 (76図43・44) 器受け部底部外側に強い稜が作られ、脚部は直状またはやや膨らみながら開く。2ないし3個の円孔を穿つ。

3類 (42図3、85図70・71) 器受け部中位に稜を作り、口縁部は短かく外反する。脚部はやや反るか、または直状に広がり、2ないし3個の円孔を穿つ。

整形については1～3類とも共通しており、器受け部内外面はヨコナデ、またはハケメ後ヘラ研磨されており、脚部外面は縦方向のヘラナデ、または研磨が施されている。脚部内面はヨコナデ、またはヘラナデを施し、天井部は中央の上下孔の周囲を指押えの後、ヘラケズリ、またはヘラナデをしている場合(42図2)が多いが、76図41ではヘラ押え痕が強くめぐっている。器受部、脚部接合部破片の出土量は3類が多く6個体を数え、1類、2類は少なく図に示した各2点のみである。出土点数は脚天井部を遺存しているもののみで24点を数える。



110図 器台形土器の分類

甗形土器

1類 底部中央に1孔を穿つものである。本遺跡においては59号土坑出土の他、底部破片2点を見る。

2類 いわゆる底抜け状で、孔の径は大きく、5cm前後を計る。器体は大きく、縦に長いのが目立つ。口縁部形状は、外反するもの、頸部がくびれ直立するもの、直状で器体が砲弾形をなすもの等およそ3種のあり方を示す。整形については甗形土器と大きく変わらないが内面整形は、甗形土器よりもいく分粗いように見える。外面の色調は甗に比べ灰色味が強い。出土量は1号溝出土の6点の他、底部破片、10点を見る。

第49表 2群土器器種別による出土量の百分率(口縁部遺存率に基づく)

壺形土器……………8%	埴形土器……………11%	高杯形土器(杯部)……………6%
1 類 11%	1 類 35%	1 類 10%
2 類 19%	2 類 5%	2 類 46%
3 類 16%	1または2類 13%	3 類 17%
4 類 9%	3 類 15%	4 類 9%
5 類 16%	4 類 19%	5 類 6%
6 類 13%	5 類 12%	その他 12%
7 類 10%	杯形土器……………24%	高杯形土器(脚部)……………1%
その他 6%	1 類 2%	1 類 28%
甗形土器……………47%	2 類 3%	2 類 18%
1 類 70%	3 類 55%	3 類 49%
2 類 15%	42 類 11%	その他 4%
3 類 13%	46 類 1%	器台形土器……………4%
その他 2%	5 類 19%	1 類 25%
	その他 9%	2 類 10%
		3 類 64%

※ 本表は同一時期の器種、類型の構成を示すものではない。

### III 上滝遺跡

#### 第3群土器

古墳時代より後の土器がこれに含まれる。奈良時代を中心とした時期のものがこの主体をなす。器種は甕形土器、杯形土器である。出土状況は、2号住居址覆土上部焼土帯の周囲からのものと、7号、11号住居址出土のものであるが、出土量としては少ない。30図、36図2～5、40図4、86図85～91に図示したものの以外では小破片が若干見られるのみである。(佐藤)

#### (4) 2群土器をめぐる問題点 (1)

##### ——石田川期の土器を中心として——

前項においても古墳時代の土器を2群土器として一括したが、これらはさらに古墳時代前期、及び古墳時代後期前葉の2時期に大別できる。前者は群馬県地域においては石田川遺跡の調査報告の際、この遺跡の出土土器を代表的遺物として松島栄治氏により提唱された石田川式<sup>59</sup>に該当する。後者は千葉県市川市鬼高遺跡<sup>60</sup>を標式遺跡とし、早くから認められている鬼高式土器に該当する。

前項において2類土器を器種に従って類別したがこれを上記の2大別に従って記すと次のようである。

##### 古墳時代前期(石田川式)

壺形土器1～6類、甕形土器1～2類、埴形土器1～3類、杯形土器1～2類、高杯形土器(杯部)1・5類、高杯形土器(脚部)1・2類、器台形土器1～3類

##### 古墳時代後期前葉(鬼高I式)

壺形土器7類、甕形土器3類、埴形土器4・5類、杯形土器3～6類、碗形土器、高杯形土器(杯部)2～4類、高杯形土器(脚部)3類

#### 組成と系譜

古墳時代前期及び後期の土器を出土する遺構については、前掲の各遺構表(24表、33表、38表)に示す。これら遺構において一括出土を示す土器群の各類型相互の組成は数量的差異は目立つが上記2時期の土器の混在はほとんど認められない。このことに関し49号、50号土坑のあり方は両者の混在状況を示すが、これは土坑が石田川期に属する12号住居址を切り、重複していることにより土坑内に12号住居址の遺物が混入していると考えられる。

1号住居址からは床面直上より甕形土器、埴形土器、高杯形土器、住居址に伴う土坑からは壺形土器、及び埴形土器の出土がある。これらの土器について見ると、壺形土器は6類の系譜上に置けるものであるが、40号土坑、50号土坑(12号住居址)、9号溝付近包含層出土土器群中に見られるものに比べやや様相を異にする。1号住居址出土の壺形土器は口縁部の凹凸が目立つことや、胴部の器壁の厚さが不均一であることなど成形が全体に粗雑であり、定形からやや崩れたむきがある一方、整形についてもハケメが施されていないことや胴部のへラケズリが著しいことなど後出的特徴が目立つ。

埴形土器は6個体の出土を見るが、これらはすべて1類である。本遺跡における埴形1類の出土状況は数量的には埴形土器中最も多いが、これを伴う遺構は1号住居址のみである。この土器の特徴は口縁部が大きく広がり、頸部はくびれず、太い沈線を施す。そしてこの土器の特に際立った特徴は器面の表裏に丹念に施される暗文状へら研磨である。石田川期にあってこれらの特徴を持つ埴形土器の類例は県内においては、ほとんど知られていない。しかし器形のみについて見るなら、これは比較的斉一性が強く、下郷遺跡SK70、

S Z04、<sup>61)</sup>鈴ノ宮遺跡7号住居址、<sup>62)</sup>高林遺跡において見られるところである。この埴形1類に見る暗文状ヘラ研磨については、この整形技法が石田川期の土器に施される例は少なく、その盛行が1段階下った古墳時代中期（和泉式）～後期（鬼高式）の初期にあることから、石田川期にあっては新技法の導入と理解できるだろう。

高杯形土器は完形のものと同脚部破片が共に床面直上より出土しているが、これらもまた後出的特徴を強く持っている。完形土器の方は杯部と脚部の組み合わせが特異である。すなわち、杯部は石田川期の定形化段階に特有の形状を示しているが小形化が進んでいる。その上、脚部は柱状部がエンターシス状で裾部は円盤状に広がるものである。これは前項で3類としたものであり、この種の脚は古墳時代中期、及び後期において主体的に見られるものであり、石田川期にあってはほとんど類例を見ない。本遺跡においてはこれと同様な意味で注意される例がある。85図66である。これは1号住居址出土の例とは反対に脚部は1類、杯部は2類の特徴を示すものである。これらはともに新しい手法の導入という方向でこれまでの定形性を失ったあり方として考えることができるだろう。

この他高杯形土器の脚部が1点出土しているがこれは明らかに1段階降った時期に属すると考えられるものであり同一視点で取り上げることには若干問題がある。

組成の問題として、埴形土器の多さにもかかわらず器台形土器が認められない。このことは石田川式土器の組成の消長の問題を考える上に興味深い。

本遺跡において石田川期の一括土器はこの他に3号住居址、12号住居址、土塚等で認められる。これ等の間には相互に共通した特徴を保有しており、様相を同じくするものとして、以下一括して言及したい。

壺形土器では3類がこれらの土器群中主体的に認められる。壺形3類は口縁部外側に幅広の粘土帯を重ね複合口縁を形づくることを成形上の特徴とし、本遺跡では3号住居址、50号土塚（12号住居址）の他9号溝付近包含層出土土器群中に見られるが、その個体間には99図に示すような差異が認められる。この中で特に注目されるのは3 a類の存在である。これは網目状、または斜状の付加条を口縁部あるいは肩部に施し、中には肩部に鋸歯状の沈線区画帯を残すものも見られ、これらは南関東の弥生式土器、久ヶ原式、弥生町式の伝統的意匠を強く受け継いだものである。

本遺跡においてはこの種の文様を施す土器が9号溝付近包含層出土土器群を中心に比較的多く認められるが、本県においては他にこの種の文様を施す類例はほとんど見ない。しかし、関東近県においては出土例は多く、茨城県三反田遺跡<sup>64)</sup>、千葉県諏訪原遺跡<sup>65)</sup>、埼玉県下加遺跡<sup>66)</sup>において五領期の一括土器群中での出土が認められている。このうち諏訪原遺跡においては五領期の土器群が時間的先後関係を示す「A系」及び「B系」に分離され、壺形土器における「縄文、網目状文」の施文はより古い「A系」の中に認められ、「B系」においてはこれはほとんど姿を消すという。またこの「B系」について「特徴ある小形丸底土器が現れたり…S字口縁甕が出土」という指摘は興味深い。

3号住居址、50号土塚出土の壺形土器3類は3 a類に比べ整形上に新たな手法が加わってはいるがこれらの土器の原形は壺形3 a類に求められるか、または同系譜上に置かれるものである。これに類する土器は群馬県地域においては類例は多く、高崎市鈴ノ宮遺跡48号住居址<sup>67)</sup>、同下齊田遺跡方形周溝墓<sup>68)</sup>、太田市五反田遺跡<sup>69)</sup>、同高林遺跡出土土器<sup>70)</sup>の中に見ることができる。これらは本遺跡における壺形土器3 b、3 c類に比定し得るものである。3類を特徴づける成形手法は群馬県地域にあっては独自の定形化が進み比較的根強く定着し、石田川期の後葉まで認められるようである。

この他壺形土器で、一括出土土器中において目立つ存在は6類である。40号土塚、50号土塚、12号住居址、

### III 上滝遺跡

61号土塚の他9号溝付近包含層出土土器群中に見られるが、これらの土器については共に整形が端正で、しかも共通した特徴が目立つ。口縁上部がやや内湾することやハケメ後へラ調整が行なわれることなど単口縁でありながらも強い規格性が認められる。この点前述した1号住居址の土器は単口縁でありながらも後出的特徴が強い。

甕形土器については各一括出土土器群中にS字状口縁甕形土器が複数個体認められる。これらは個体間に若干の整形上の差異は認められるが、これについて遺構に基づいた一定の傾向は伺えない。ただし遺構に伴うものの中には肩部横ハケメを施す例は見られない。またこの他に甕形2類の脚の出土が数点あるが、この土器については本地域における下限の問題として、壺形3a類とともに今後の課題としたい。

この他に遺構に伴わないが注意すべき土器がある。壺形土器5類は9号溝付近包含層出土土器群中に出土量は多く、本遺跡における石田川期の土器組成中、主体的な位置にあったと思われる。本類を特徴づけるところは口縁部が大きく外反し端部外側に平坦面を作ることである。この特徴を持つ土器の広がりには県内外に広く認められるが、系譜については先行形態を東海地方西部の弥生式土器に求めることができ、愛知県元屋敷遺跡出土土器中にその好例を見ることができる。<sup>(71)</sup>

この種の土器は近年良好な出土例が少なくない。玉村町下郷遺跡S Z26、<sup>(72)</sup>高崎市鈴ノ宮遺跡48号住居址、<sup>(73)</sup>赤堀村鹿島遺跡6号住居址、<sup>(74)</sup>太田市五反田2号住居址、<sup>(75)</sup>また古墳に伴う例として前橋市朝倉2号墳出土の壺形土器がこれに類するかと思われる。これらの類例はそれぞれ移入土器の群馬県地域における定着過程の様相を見せるが、このうち下郷、鈴ノ宮両遺跡においては小形丸底埴を含む齊一的セットの確立段階の器種組成の内にある。

壺形土器1類は頸部突帯と肩部櫛状具による施文を施すことを特徴とする複合口縁壺形土器であり、これらの特徴は東海西部にその系譜を求めることができる。本遺跡では量的には比較的少なく遺構に伴っていないが、近隣において高崎市八幡原遺跡、<sup>(77)</sup>同元島名遺跡<sup>(78)</sup>等でも認められ、本地域において根強く定着していることが伺われる一方、他県においては古墳に伴う例や、小形埴形土器を含む齊一性の強い土器セット中にも認められる例も増えつつある。また特に本遺跡に隣接する高崎市將軍塚古墳の周堀中よりこの種の土器が複数個体一括出土しており、<sup>(79)</sup>このことは当古墳と本遺跡の関連を考える上に興味深い。

以上の他にこれもまた東海西部の土器で、搬入品と考えられる壺形土器の口縁部破片が2点認められる。(83図18、19) この中でも83図18は古くからパーレススタイルの異名で呼ばれている土器で、弥生時代終末期、欠山期において盛行を見る。この種の土器の類例は本県においては他に見ないが、埼玉県五領遺跡B区C-6号住居址出土土器の中にやや類似した例が見られる。この土器群について金井塚良氏は「土器の齊一化の傾向が進展し始める」時期、「五領前半の土器群」とする考え方を示している。

壺形土器以外では埴形、杯形、高杯形、器台形等の各土器を9号溝付近包含層出土土器群中に集中して見られるがこれらは大方齊一性の強いセット構成を示す段階に、頻繁に見られる類であると言い得る。

#### 石田川期における位置

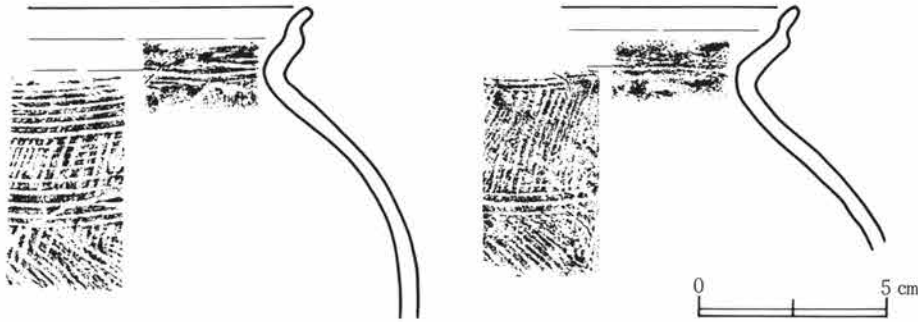
本遺跡の石田川期の一括土器群中、1号住居址の土器群を除いては、器種、類形、整形上の諸特徴において共通性が強い。またこれら土器群の様相は定形化、齊一性が進んだ段階のものであることを示しており、群馬県地域における石田川式土器が外来因子を中軸に成立したという視点に立つなら、その定着段階と考えられる。様式構造上の段階にあっては小林行雄氏の「齊一性の持続」<sup>(81)</sup>段階として認識できるだろう。これに対し、1号住居址出土土器群は本遺跡にあっても特異な様相を示し、後出的な要素が全般的に見られる。こ



れは「<sup>(81)</sup>齊一性の変改」の段階にあてることができるだろう。なお壺形3a類、甕形2類など1部に古い意匠を強く残す土器の問題については今後の検討課題としたい。

次に石田川式の推移過程に関連し、最古段階の様相について言及しておきたい。この段階の出土例は乏しいが、高崎市新保遺跡141号住居址一括出土土器はこの段階にあたると思われる<sup>(82)</sup>。この土器群は伴出住居址の覆土上部に浅間C軽石層が認められ、火山灰による年代所見上でも石田川期の古いあり方を示し、土器組成は壺形、甕形、鉢形の他に小形壺形土器が数量的に目立つ。土器群全体を通じて南関東、東海西部の様相が強い。壺形土器は頸部のくびれが緩く、胴下半部が膨らみ弱い稜を作るもので、従来より前野町式土器に指摘された<sup>(83)</sup>特徴が大方の壺形土器に見られる。

甕形土器はS字状口縁甕形土器の完形3個体、平縁の台付甕を1個体見るが、前者に注意すべき特徴が共通して見られる。(111図)すなわち、頸部のくびれは緩く指頭による成形痕を良く残し、口縁部形状は内接部以上が以下よりも短い、つまり前掲の口縁部上下比が1未満を示す。整形については胴部ハケメは比較的粗く、肩部には横ハケメを施し、しかもこれは幅が広く頸部まで達するものもある。また頸部内側に横ハケメを施すものも一つの特徴である。こういった特徴を有する土器は上滝遺跡に見ることはできない。



111図 新保遺跡141号住居址出土S字状口縁甕形土器

新保遺跡141号住居址の土器にあつては以上の特徴が各個体それぞれに安定した状態で見られることから、一つの典型的な様相として理解して良いと思われる。S字状口縁甕形土器に見られる上記の特徴は大参義一氏により元屋敷(a)類の特徴として指摘されているが、成整形全体の特徴は(b)類に一致している。大参氏は「(b)類にいたってはじめて西は近畿から関東までひろがる広大な分布圏をもつ」と指摘している<sup>(84)</sup>。新保遺跡の一括土器は東海西部、及び南関東の土器文化の初源的波及を受けた時期の姿として認められる。外来文化の波及とその定着をその様式構造の基本的推移形態とする石田川式土器にあつてはその初源期、すなわち、「<sup>(81)</sup>齊一性の成長」の段階に当てて良いと思われる。

以上、組成、系譜、様式上の位置について若干の指摘を行ったが、最後に編年上の位置について南関東地域における古墳時代前期の様式、五領式との関連の中で、言及しておきたい。

南関東を中心に「和泉式土器に先んじ、前野町式土器より後にくる型式<sup>(85)</sup>」として、五領式と呼ばれる土器群の存在が提唱されて久しいが以来これをめぐって多くの議論が交わされてきている。その中心は、前野町式との区別、すなわち「弥生式土器と土師式土器の境界」の問題、及び細分についてである。前者については「<sup>(86)</sup>画一的統一性」または「<sup>(87)</sup>全国的齊一性」が土師式土器の特徴として認識され、この具体的あらわれとして小出義治氏は器種の規格化について小形丸底埴の存在を重要視し、「小形丸底埴を加えたセットの確立期こそ、弥生式土器と土師器を両分するキーポイントとなるであろう<sup>(88)</sup>」という考え方を示している。そして、同時に静岡県内野町遺跡出土の土器群に対し、壺形土器に見られる文様の遺制や小形丸底埴が伴っていないこ

### III 上滝遺跡

などにより「弥生式最末期の一グループ」、「転換期的様相を示す」ものとする一方、これを五領(1)の段階に位置付けている<sup>(88)</sup>。その後岩崎卓也氏はこれを受け、古墳の生成や祭祀と関係付け、小形丸底土器群の母体となるセットの成立をもって土師器の成立期としている<sup>(89)</sup>。また梅沢重昭氏はこのことに関し、五反田遺跡2号住居址における小形平底の土師器を埴形土器の伝播する以前にありながら、これと「同一範疇の器形」とする考えを示し、この土器群を「各器種に地方的特色を混在し発達する第1期」に位置付けている。そして「第二期」に「地方的特色が薄れ齊一性が認められるようになる」とし、それぞれ「石田川I式」、「石田川II式」に当てた型式分類を行っている<sup>(90)</sup>。

本遺跡の土器群及び新保遺跡の土器群の石田川期における位置について、これらの視点との関連でとらえるならば3号、12号住居址出土の一括土器を中心とする土器群は小出氏、岩崎氏の言う「成立期」に当り、梅沢氏の石田川II式に該当し、1号住居址出土の土器群はこれよりも後出すると思われる。新保遺跡の土器群は小出氏の「転換期的様相を示す時代」に当り、梅沢氏の石田川I式にあたり、五反田遺跡2号住居址の土器群に先んじる段階に位置すると思われる。(佐藤)

#### (5) 2群土器をめぐる問題点 (2)

##### — 鬼高期の土器を中心として —

古墳時代後期前葉に位置づけた2群土器を出土する遺構として2号、6号、13号住居址、55、56、57号土坑、および住居址等の遺構群を検出した微高地西側の1号溝がある。

これら2群土器は住居址の重複にみられるとおりの若干の時間的幅をもつものであるが、古墳時代後期鬼高期の古い段階を主体とするものである。2群土器はすでに分類したとおり壺形7類、甕形3類、埴形4、5類、杯形3、4、5類、椀形1、2、3類、高杯形(杯部)2、3、4類、高杯形(脚部)3類、および甌形1、2類があり、細部の特徴、整形技法によりさらに数種に細分される。これらは前型式和泉期の特徴をより強く留める1群と新たに成立する鬼高期の特徴を示す1群とがあり、本群が鬼高期の中において最も古い様相を示すことがうかがわれる。以下これら2群土器についての特徴を記し、本群のまとめとしたい。

壺形土器、後期前葉においてすでに壺形土器はその主体的役割が薄れ、その出土例もわずかである。本遺跡においても同様に数例の出土があるにすぎない。7類とした丸味のある壺形土器はその口縁部中位置に段を有し、いわゆる古式土師器壺にみられる複合口縁の系譜を引くものと思われる。群馬郡八幡塚古墳中島出土<sup>(91)</sup>、佐波郡境町下淵名9号墳出土等、県内においても若干の出土例がある。

甕形土器、3類としたやや縦長の胴部をもつ甕形土器はこの時期最も主体的に見られる1群である。鬼高期における長胴化傾向の中で本類は丸味のある胴部は前型式の特徴を留めるものの、やや大形化すること、胴下半部にみられるヘラケズリ手法はすでに鬼高期の段階にあることを示している。

埴形土器、扁球形に近い胴部に外傾する細い口縁部をもつ埴5類はその祖形を古式土師器に求められるものであり、この時期わずかではあるが出土例を見る。

杯形土器、内斜口縁をもつ浅い杯3類は、浅く椀状を呈する杯5類と同様に前型式和泉期の特徴を良好に留め、その後出形態と考えられるものである。杯形4a類は口縁の幅が厚く深みのある杯で口縁と体部に段をもち、口縁がやや内湾気味であることに特徴がある。b種と同様須恵器坏の影響を強く受けており鬼高期のメルクマール器形である。

椀形土器、内斜口縁の椀1類は、内彎し深みのある椀3類と合わせ、和泉式そのものの特徴を示している。

内面には杯類と同様斜走する暗文状研磨が施されるものが多い。段をもつ杯形4類を大形化した椀形3類はこの時期わずかな出土例が知られる。

高杯形土器、杯部は底部が平坦で外面に強い陵をもち、大きく開き、直線的に外傾する3類と内彎気味に外傾する4類がある。内面には3、4類とも暗文状研磨がみられるものが多い。器形的には本来和泉式に含まれるものと思われる。

甌形土器、やや小さく底部に1孔をもつ1類といわゆる底抜け状を呈し、大形化の傾向にある2類がある。1類は前型式の特徴を示し、2類は鬼高期の特徴がうかがわれる。

以上、2群土器についてその特徴を簡略に述べた。口縁に段をもつ壺7類、深みのある内斜口縁の椀1類、3類、その後出形態といえる杯形3、5類、高杯々部3、4類、甌形1類にみられるように和泉式の特徴を留める1群とやや大形、長胴化の傾向にある甕3類、段を有する杯形4類、椀形2類、いわゆる底抜け状の甌形2類にみられるように、すでに鬼高期の特徴を示す1群と共伴して出土している。このようにみると2群土器はわずかではあるが、古墳時代中期の和泉期そのものと思われる土器類、後述する1号溝出土の土器群のように和泉期の影響を留めながらもすでに古墳時代後期前葉鬼高期の段階にある土器群があることが知られる。

次に2群土器を多量に出土した1号溝についてふれておきたい。1号溝出土の土器群はその出土状態から短時期に投棄された1括遺物として把握し得るものである。また溝上部には第Ⅲ層とした榛名二ツ岳火山爆裂<sup>93</sup>に伴う黄褐色氾濫層が10~15cmほどの厚さで堆積を示し、その直下の土器群でもある。

この2群土器は1括遺物として鬼高期の古い段階にあり、内斜口縁の椀形、杯形土器にみられるように和泉期の特徴を留める榛名二ツ岳FA降下以前の勢多郡赤城村寺内遺跡6号住居址<sup>94</sup>、内斜口縁の杯形、椀形、稜のあるシャープな杯形土器を出土するFA直下の群馬郡群馬町保渡田5号住居址土器群<sup>95</sup>とほぼ並行関係にあると思われる。また稜をもち深みのある杯形土器にみられるように明らかに鬼高期の段階に入ったと考えられる佐波郡境町伊与久遺跡住居址<sup>96</sup>、多野郡吉井町東吹上遺跡住居址土器群<sup>97</sup>よりも先行する様相がうかがわれる。以上、1号溝出土の2群土器は鬼高期の段階において前型式の特徴を留める本県の最も古い部分に位置するものといえよう。

次に須恵器との関連をふれておきたい。この2群土器に伴い、甕、短脚部須恵器の出土がある。他地域からの搬入品と考えられるもので地方において最も古い須恵器である。本遺跡のみならず鬼高期の古い段階に共伴する須恵器類は笹遺跡Ⅷ~Ⅲ号住居址<sup>98</sup>、伊与久遺跡住居址出土の甕、温井遺跡住居址出土の樽形甕、耳付高坏等にもるように陶邑編年による第1型式1~3段階の須恵器類の存在が知られ、少なくとも5C中~後半代には搬入されていたものと思われる。鬼高期初源の段階において須恵器の希少性に基づく伝世等の問題を考慮にいれても、5C末、あるいは6C初頭と考えられる鬼高期の初源期の年代もさらに古く考える必要が出てこようし、それに伴い土師器の編年観を考慮し、6C前半代に位置づけた榛名二ツ岳FA層、およびその氾濫層である二ツ岳第1軽石流堆積物の年代もさらに古く位置づける段階にきていると思われるのである。(平野)

## (6) 上滝遺跡出土の古式須恵器について

本遺跡からは、図93の長頸壺の上半部、図59の短頸壺の上半部などのほか3点の古式須恵器(55図14、64図、61、86図92)の出土がある。特に古式須恵器の製作年代はいずれも最古の一群に類され、存在に重要な問題点が内包されている。ここではその問題点をめぐり若干の考察を加えたい。

### III 上滝遺跡

まず3点の須恵器に年代的な位置をあたえる必要から既存の編年序列に拠所を求めると、現況では中村浩<sup>(99~102)</sup>ほか『陶邑』I~IV大阪府教育委員会1976~1979が適切かと考えられる。理由は上滝遺跡の古式須恵器と対比しうる並行期の須恵器群が豊富であること、編年序列の背景となった陶邑古窯址群は我国、最古、最大の窯跡群として成立し、終末の平安時代に至る過程に膨大な窯跡群が形成されている。このため通史的な編年序列が可能な条件にあり、それに立脚した編年序列であることなどがあげられる。この編年序列は客観視しようとする作業姿勢に基づき、操業床面に伴う重複関係を新古の根拠にし、新器種の出現・消滅・盛・退期など先学から注目されていた編年指標のいくつかを組み入れ5型式からなる序列を構成している。ここで言うI式とはその最初の型式名称である。上滝遺跡出土の古式須恵器の編年の位置はI型式にあるが、陶邑のI型式と比較、対照して得た所見は下記のとおりである。

甕(55図14) 体部に最大幅があり、細い頸部から大きく外傾する上方までの特徴はTK85・87・303など小形甕の形態に近似している。またTK73の樽形甕の頸部から上方の形態にも共通する。これらの体部中央には波状施文が多く見られるが口縁部直下に施文する場合はTK303など割合に少例である。この甕にある波状文を除外すると稜、波線、各部の端などはシャープでなく、やや丸みをおびている。この作行は波状文がシャープなことと相反するが、I型式第1・2段階の製作法が各個体に要する製作労力が多いとされる丁寧製作と考えれば相通するであろう。形態と製作法から編年の位置を見るとTK73・85・87などのI型式第1段階に含まれるか近接してあると考えられる。

甕(86図92) 器形の製作傾向は前例とほぼ同様に、稜部が丸みをおびI型式前半の所要労力の多い丁寧製作の一群に含まれると考えられる。胴部の最大幅がやや下半に寄る形態や素文となる特徴はTK73・85などI型式第一段階に見られ、編年の位置もそれに近接してあると考えられる。

高杯脚部(64図61) 短脚の高杯の脚部の形態はI型式の全般を通じ、ふんばりの強い直線的な形態をとり、中でも前半の頃に、いく分外反し、ふんばりの弱い傾向が認められ、この高杯脚部と共通性がある。しかし、陶邑の場合、脚部の端に接近する凸帯は少例で、多くがやや高い位置にあり、これほど下部にある類似例は報告図中に乏しかった。あえて凸帯の位置と脚端部内面の顕著な返りを除外すればTK85やTK305などI型式第1・2段階の所産に近似する。

以上、編年上に3個体を位置づけるとI型式第1・2段階に含まれるかあるいは近接した頃に考えられたのである。次にどこで製作された須恵器かを検討したい。東日本でI型式の須恵器を生産した窯跡および周辺に窯跡の存在が示唆される遺跡は知るかぎりでは下記のとおりである。

大阪府南河内郡・和泉市——陶邑古窯址群<sup>(99~103)</sup> 三重県四日市市——久居古窯跡群<sup>(104)</sup> 愛知県名古屋市中区——東山窯跡<sup>(105)</sup> 長野県長野市——松の山古窯址<sup>(106)</sup> 埼玉県児玉町——ミカド遺跡<sup>(107)</sup> 宮城県仙台市——大蓮寺窯跡、金山窯跡<sup>(108)</sup>

この中で埼玉県児玉町ミカド遺跡出土の古式須恵器群は、現在までのところ関東地方で最古の窯跡の存在が周辺に示唆され注目すべき須恵器群であるが、それらは粗質な関東産須恵器の胎土と考えられるから、この3点の須恵器の精選された胎土と異ると考えられ、編年の位置もミカド遺跡の古式須恵器の方が後出様相にある。長野県松の山古窯址の須恵器に関しても同様である。宮城県大蓮寺窯跡・金山窯跡の場合、東北地方から関東に製品が搬入されたとは流通上、考えがたい。このように考えると大阪府陶邑古窯址群か、東海地方の須恵器窯跡群に可能性がもたれる。特に、I型式の初期の段階は陶邑窯が各地に対し、一元的供給をなしていた頃であり、この概念を受け入れるなら陶邑窯製品である可能性は高い。しかし64図61の高杯脚部の凸帯位置、脚端部内面の反りの形状などは陶邑窯の膨大な既報告図中を捜すと酷似する例は乏しい。この

ことがI型式前半の<sup>(101)</sup>揺籃期(形の定まらない段階)とされる未熟な製品製作状況を反映するのであれば解説は付合するのであるが膨大な実測図に類似が求められないのであるから一抹の疑問が残る。二点目の疑問として須恵器の胎土に問題がある。胎土傾向は細い素地に白色の細鉱粒をわずか混え3点ともに共通しており、同一生産地域であった可能性は高い。また本年度、上滝遺跡と同時に整理を実施した、同じく関越自動車道用地内、藤岡市温井遺跡からも近接期の古式須恵器が存在し同質の胎土傾向にあった。温井遺跡出土の古式須恵器は群馬県工業試験場で継続実施され<sup>(110)</sup>つつあるケイ光X線による胎土分析に試された結果、Sr/Rbなどの原素比および諸元素が、常滑、濃美焼など東海地方製品と同じか近接した領域内にまとまる傾向があった。<sup>(111)</sup>この2点の一抹の疑問を換言すれば陶邑窯跡群のI型式初期の段階の生産ははたして一元的であったのか、あるいは一元的であったとされる幅がさらに短期であったのかとすることになろう。この問題は須恵器生産に伴う流通現象をとらえ、地域動向を知ろうとする場合に直接的な問題点となる。たとえば古墳時代終末期の当地域では東海地方的特色のある一群が多量に搬入されており、前代に陶邑製品が流通されていたのであれば、陶邑製須恵器から東海地方製須恵器への転換がなされたはずであり、須恵器に対する在り方の変貌となる。つまり陶邑製品が畿内より直接搬入された場合は、少なくとも畿内勢力と当地域にいた在地勢力との交渉の結果であり、それが畿内からではなく、東海地方やその周辺の地方からもたらされた場合には当時の流通の在り方を含め広範な背景の中から考えなければならず、供給源の差はおのづと意味あい異ってくるのである。したがい、この3点の須恵器から得られる流通上の意味は、上滝遺跡の村落共同体の掌握者かその影響力保持者は、当時、須恵器が東国社会にほとんど搬入されていない段階に、宝器財的な須恵器を得られる立場にあったと解釈することができるのである。この在り方は本遺跡、単独に解説しただけではほとんど無意味とも言え、今後、県下の各遺跡出土の古式須恵器を扱い、その傾向を知ることにより、地域勢力の構造、把握にも発展的なアプローチができると考えている。

I型式の初頭の須恵器は関東地方の土師器編年と対比させた場合、いつに相当するのかが問題となろう。3点の須恵器は近接した頃の製作であり、そのうち土師器と共伴関係にあるのは1号溝出土の64図61である。1号溝出土の土師器は、和泉期に趨勢のある内斜口縁の杯類が主体を占めるが、須恵器杯の影響と考えられる杯類に、須恵器杯の忠実な模倣と言えらる杯類が顕著でなく1号溝出土の土師器の趨勢は前項のとおり鬼高期成立の初源の段階に置かれる。鬼高期初頭の須恵器の杯の模倣化の定着は、当地域の杯形態からすれば陶邑I型式3・4段階にあるやや扁平な形状の杯蓋に近似し、仮に、それが当を得ているとすれば、64図61は陶邑I型式1・2段階と考えられるから、1号溝出土の鬼高期成立の初源段階にある土師器群と共存関係にあった可能性は高いと類推される。この場合、64図61の須恵器は伝世性があったとしても短期と見なされる。いっぽう年代対比のうえからは、須恵器年産の開始、つまり陶邑I型式I段階は、5世紀代に置かれている。このことをふまれば、鬼高期初頭の年代観は遡らせる必要があると考えられるのであり、今回の検討から得た大きな問題提起である。(大江)

## (7) 中 世 陶 器

中世遺物は主に陶器類と軟質陶器類がある。ここでは当遺跡から出土した中世遺物が、文化層分離および一括性をかなえない状態で出土、しかも少量であるので、その中から形状の知れる個体を抽出し、検討を加えたい。陶器類は、いずれも素地の特徴から東海地方で生産された搬入製品と見られる。種類には台付鉢と筋壺形の小壺、おろし皿などがある。(70図1、81図2、88図25・26)

台付鉢は58～62B22～26と2号溝の埋没土から出土した2個体があり、両側は形態、素地、焼成が還元気

### III 上滝遺跡

味の灰色をおびる点で共通している。その色調と素地の緻密さにおいて常滑焼と切りきれない点があり、山茶碗窯製品の可能性もある。その年代観は常滑焼の近年の編年<sup>(112)</sup>にしたがえば、丸みをおびる体部下半、やや尖り気味の高台端部などから、ほぼⅡ期に類され、鎌倉時代頃と類推される。筋壺形の小形壺は2号溝から出土した細片である。(70図1) その外面は酸化気味の暗赤褐色をおび、内面は暗緑色の自然釉が溜り、底面には細砂の付着がある。素地は渥美焼とした場合、砂粒状でなく、緻密でありむしろ常滑焼の質感に近似する。その年代観は常滑焼の近年の編年観にしたがえばⅡ期かⅢ期と考えられ、鎌倉、南北朝期にその年代があたえられよう。おろし皿は6号溝より出土している。外面上半には灰釉による暗緑色の安定した釉がほどこされ、内面の一部におよんでいる。口辺は折り口状となり、内面底にへら状工具により荒い格子状のおろし目が刻まれている。素地は緻密な鉛色をおび瀬戸焼と考えられる。その年代観は編年<sup>(113)</sup>にしたがえば施釉Ⅱ期頃に類され、15世紀前半頃と考えられる。

軟質陶器には47B16から出土した鉢がある。(88図95) この鉢は体部外面に浅い轆轤目があり口辺には轆轤によるナデがきいている。底面には糸切痕があり、内面は摺鉢として使用したらしく磨耗が著しい。この鉢のおよその年代観は新田郡尾島町に所在の東照宮古墓群から「元應二年 庚申」(1320)と墨書された在地製品<sup>(114)</sup>と考えられる、同形、同類の鉢があり、およそ14世紀前半頃があたえられる。

これらの出土遺物の存在から次のことが考えられる。

① 上滝遺跡における中世遺物の傾向は単次元ではなく長期にわたる所産が考えられる。

このことは台付鉢から鎌倉時代が、瀬戸焼のおろし皿から15世紀代が考えられ、実に200年強の製作年代の巾が存在している。この中に遺物の持つ伝世性等の不確定な要素が加われば単次元における遺物の共存もあり得よう。

② 搬入の小形陶器類は在地生産による軟質陶器類の生産形態の一端を示唆している。

上滝遺跡では、搬入と見られる台付鉢、小形壺が出土しており、県内における中世遺構の調査において搬入による小型製品の出土する例はそう多くない。それは中世の比較的遡る段階において、軟質陶器の生産・需要の関係がこの地域で成立していたため必然的に搬入の小形器種に対する依存度は減少せざるを得なかったからと考えられている<sup>(115)</sup>。たとえば県内出土の摺鉢類を見ると搬入製品は極めて少なく、在地の軟質陶器の鉢が主体を占めている。一方大形製品は常滑焼と見える大甕類が主をなし、在地製品はほとんど出土しない。それが存地製品と搬入製品との存在傾向である。この中で上滝遺跡から出土した小形製品である搬入の台付鉢と小形壺は、鎌倉時代頃に製作年代が考えられ、地域における軟質陶器焼造の初源、つまり当地域窯業の開始が問われる段階に相当しているため、軟質陶器生産の確立に先立つ段階か、その初期の過程において、小形の搬入陶器類が地域で多用された段階があった可能性を示唆することとなろう。

以上、中世陶器類の年代観とその若干の地域傾向に触れた。(大江)

### (8) 子持勾玉

1号溝底部、榛名山二ツ岳火山灰層(F A)下から多量の土師器と伴に出土した。黒色を呈する流紋岩製で、背部に3個、側面に2個ずつ、腹部に1個、合計8個の子勾玉を持っている。本体の勾玉の大きさは、長さ9cm、高さ5cm、厚さ3cmで、背部はゆるやかに彎曲し、腹部はやや長めのコの字型を呈する。子勾玉の大きさは、背部及び側面のものが、長さ1.1cm~1.9cm、高さ0.5cm~0.8cm、厚さ0.6cm~0.8cm、腹部のものが若干大きめで、長さ2.2cm、高さ1.2cm、厚さ1cmを測る。子勾玉を含めた全体の大きさは、長さ9.9cm、

50表 群馬県内子持勾玉出土遺跡一覧

No	所在地	出土地概要	子持勾玉出土数	伴出遺物	参考文献
1	太田市呑竜神社境内		1 個	勾玉、白玉、手捏土器	117、118
2	北群馬郡子持村大字中郷字館野	丘陵東斜面 方形基壇あり?	2 個	白玉、石製模造品、土師器、須恵器	118、121、122
3	群馬郡箕郷町箕輪		1 個		118、123
4	伊勢崎市八寸城山小斉	丘上畑地	不明	白玉、石屑、弥生式土器、土師器、須恵器	118、120
5	佐波郡赤堀村		1 個		116、118
6	佐波郡赤堀村大字下触		1 個		116、118
7	邑楽郡邑楽町篠塚八丁		3 個	勾玉、白玉、石製円板、石製刀子、須恵器	118、121
8	邑楽郡大泉町小泉相ノ原		1 個		117、118
9	高崎市町屋		1 個		118
10	新田郡藪塚本町藪塚	藪塚神社末社三島神社付近	1 個	勾玉	117、118
11	勢多郡新里村武井内出東		1 個	土師器?	116、118
12	前橋市鳥取字北口		1 個	白玉、石製剣	119
13	前橋市下大屋字八光		1 個	埴、手捏土器	119
14	前橋市二之宮字谷地		1 個		119

\*参考文献の( )内の数字は章末の註番号を示す。

高さ6cm、厚さ4.3cmとなる。子勾玉は、左右対称の位置にけずり出されており、均整がとれている。けずり痕が全面に残っているほかには、特殊な文様も施されておらず、鼻孔、口等を表わすものもない。頭部の屈曲部中央に孔がある。孔は径0.6cmで、両側面部から下向きに穿たれている。紐ずれの痕跡は認められない。

8個の子勾玉の形をみると、各々が独立しており、腹部側の彎曲も表現されている。単なる小突起となってしまうものや波状化してしまったものと比べ、勾玉本来の形態を保っているといえるが、背部中央の子勾玉は他と異った形状を持っている。この子勾玉には頭部はあるが尾部がない。これは欠損してしまったのではなく、もともと備わっていなかったように見られる。意図的にこのような不完全の子勾玉としたのか、それとも玉製作中の誤ちといった偶然の結果そうってしまったのか興味のあるところであるが筆者は製作時の失敗によるものと考えたい。それは問題のこの1個が頭部寄りの子勾玉との間に0.4cmの間隙があり、尾部寄りの子勾玉とは接して位置している。しかも、その空間は1.6cmで小勾玉ひとつが充分おさまる長さを持つからである。偶然の結果とはいえ、一部に不完全な子勾玉を持っているということは、子勾玉が形態化し始めていることを示しているのではあるまいか。子持勾玉を型式分類してその年代設定を考えると子勾玉の形態に着目すれば、普通の勾玉形に近いものが最も古く、簡単な突起状に作ったものや突起が連続して波形になったものは新しいとされている。このように見ると、上滝遺跡出土の子持勾玉は比較的古い形態に属するものであるということができよう。

### III 上滝遺跡

群馬県下でこれまでに発見されたとする子持勾玉は、第50表に示したとおり14箇所16例余りである。このうち、発掘調査等により発見され、出土状況の詳細が判明しているものは全くないといってよい。このことは群馬県に限ったことではなく、全国的なものである。そのような傾向のもと、本遺跡の子持勾玉は、出土状態を知ることのできる好資料といえる。

一般に子持勾玉は、儀式用品、呪物、豊穰祈願等の機能を有し、祭祀用、信仰上に使用されたものと推定されている。上滝遺跡では、溝内から多量の土師器とともに発見されており、その出土状況は特異なものである。出土状況の概要を列記すると、

- ①微高地の西斜面を走る幅2.3m、深さ0.3mの溝からの出土。榛名山二ツ岳火山灰層（FA）に覆われる。
- ②溝の東には住居跡が存在する。
- ③伴出遺物は、すべて土師器で、初源期の鬼高式土器である。これらは一括遺物として扱えられる。
- ④基壇、石組等の施設は存在しない。

以上のうち、伴出土器のあり方からみて、子持勾玉を出土した溝は祭祀を行なった場であったろうと推定されるが、その祭祀の内容については言及できる資料を持ちあわせていない。また、溝の全貌も判明していないことから、ここでは、調査区域内の事実報告にとどめておくこととする。（西田）

#### (9) 砥石 (90図、図版83)

本遺跡出土の砥石は総数11点である。90図4は2号住居址の床面に伴って出土し、ほかはI、II層の出土である。90図の3点は、遺構に伴うものと砥石機能を反映する例を掲げた。

砥石は研主体（研磨を要する刃物）の大きさに比例して砥石の大・小が決まり、砥石の硬さと密度から研主体に適した砥石が決まる。また研主体の種類によって数回の研磨工程をへなければ利器の要をなさない場合もあり、それらが砥石観察の基礎的な視点となる。

また鉄器を研ぐ砥石の減り方には一定の法則性がある。置き砥石の場合は手の送りにより、右利なら砥石の軸に合わせ奥側左肩から手前右肩にかけて研磨減りを生じる。手持の砥石ならばその傾向はさらに顕著となる。手入れの良い砥石は、たえず当り面が平滑か、やや凸状態に仕立てられており、悪い場合には中央部分の凹みと利手側の癖による研減りが生じ、いわば糸巻形の形状となる。

90図4は、原材が凝灰岩である。組成鉱物には大・小と軟・硬があるように見え、現存の砥石の性質に比べ研ムラと、砥石当りの悪い砥石とすることができる。従って、鉄器研磨の場合には、適正な平滑面の砥ぎ出しは得られず、またヒケ傷も多く生じたであろうため、日常的に用いる利器類に当てられたと考えられる。しかも最大巾が小口端部よりやや内側にあるため研主体は小形の鉄器であったと類推される。研磨痕状態は、四面の中央部がやや凹み、糸巻状となっている。

90図5は石材がやや軟質で、き目の細かい砂岩であるため、鉄器であるなら焼入処理の利きの少ない軟鉄質の研主体が適しているが、実際の研主体はその限りではないと思われる。この砥石の性質は、90図4よりも精研磨が可能である。研石減りの状態は顕著な糸巻状態となり、最大幅が小口端部にあるため、90図4よりも大形の研主体であったと考えられる。

90図6は粘板岩製の砥石で県内・外のいずれに産するか明瞭でない。その長さ減り状態から典型的な置砥である。原材の組成は細く、目がつみ均質であり、現在の砥石では名倉砥石から内雲砥石との間に類すると考えられる。このことは、砥主体に砥石当りの良さとヒケ傷の少なさをもたらす性質を持っているので、鉄製の研主体であるなら焼入処理が軟～硬の鉄であっても使用し易いであろう。研の工程では精仕上げに使



用されたと考えられる。砥石減りは大形砥石でありながら平面、糸巻状を呈するものの、一端の最大幅は小口より手前にあり、いく分砥石の合せを施した結果があらわれている。利き手の減りは砥石奥左側から手前右側にかけてやや凹んでいることから右利きの人間が使用したと考えられる。側面は一方が直線的で、他方が内彎した凹みとなり対照的である。このことから置砥石として機能していたことが示唆されよう。また側面には細い条痕が軸に合った方向で見られ、研主体の刃部調整が細部調整にあてられていたことがわかる。小口面には原石面があるが整形された形跡はない。この砥石は出土例の中では精仕上げが可能で、しかも大ききから一般的な農事・雑事に用いる大ききではなく、長身・大形の特殊な研主体であったと考えられる。例えば刀・雑用刀の山刀などの研磨である。研主体が長身であるとする理由は、砥石の凹面スロープが長く取られ、利き手の減りもそれほど顕著でないため、それは水平性が保たれていたことになり、水平性があることは両手で支持されなければならない研主体の長さが相当に長かったことを表わすと理解されるのである。

砥石類の多くは、鉄生産に伴う各種鉄製品の普及に対応し、存在している。鉄は再生され次期に受け継ぐ場合が多いが、砥石は腐蝕、再生されることがないため、旧時にあった鉄の普及状況を反映しているのである。この意味から出土砥石の存在と鉄とのかかわりは大きいとしなければならないであろう。(大江)

## (10) ま と め

本遺跡では、遺構は当初の予想に反して、B区の洪積微高地上という、ごく限定された区域に確認されたにとどまった。しかし、このことは、群馬県の平地における古代集落の立地条件を如実に示しているのであり、今後この点を究明していく上での好資料の一つが得られたものと言えよう。これらを含め、本遺跡の調査で明らかとなったことは、次の諸点である。

- 1 遺構は洪積微高地上に集中していた。今回の調査はこの微高地上の南端部分に限定されたが、微高地はさらに北へひろがり、人々の場もまた北へのひろがりを持っていたと考えられる。
- 2 住居址、土坑（墓坑か）等の遺構は古墳時代前期以後のものが確認されたが、古い時期（古墳時代前期）の住居址が微高地縁辺に営まれる傾向を示すのに対し、時代が下るにつれて微高地中央に立地する傾向が認められた。
- 3 弥生時代の遺構、遺物は一切認められない。したがって、微高地周辺の低地帯の開発は、古墳時代前期以降と考えられる。
- 4 古墳時代後期にいたって、集落は一時途絶する。その要因として榛名山二ツ岳の爆裂に伴う泥流の流下による周辺低地帯の埋没が考えられる。
- 5 奈良時代にいたって、微高地上への人々の復帰が認められる。この時期には、周辺低地帯は泥流の堆積が厚く、その上面は微高地上面とほぼ同レベルに達し、現在の地形に変化していた。遺構数も減少する傾向が見られるが、集落立地としての微高地の意味が薄まった結果であろうか。ともあれ、この時期に泥流堆積地の再開発がなされ始めたことは明らかである。
- 6 微高地上の集落の生産基盤である低湿地帯が、榛名山二ツ岳の爆裂に伴う厚い泥流層によりおおわれ、集落の存続が不可能となった。
- 7 この泥流層は遺跡地から見ると、北及び西の地域にその堆積が見られるのに対し、本遺跡の北西を限定する將軍淵以西にあっては堆積が見られない。また、泥流層は北の利根川近接地に厚く堆積し、本遺跡地のあたりが南限となっている。
- 8 これらのことから、この泥流は遺跡地の北から流下してきたと考えられ、現在の利根川の前身と見られ

### III 上滝遺跡

る小河川（「車川」か）にその供給源が求められる。

- 9 この災害の原因となった小河川は、また遺跡地周辺の生産地域の給水源でもあり、農業生産上かなり重要な水路であったものと考えられる。
- 10 出土遺物についてみると、古墳時代にあつては大別して古墳時代前期の石田川式、同後期前葉の鬼高Ⅰ式の各種土器が出土し、これら土器群の編年上に新たな資料を加えた。しかし、1号溝出土の土師器と共伴した古式須恵器の検討から、鬼高期初頭の年代観を遡らせる必要があるかという問題も提起された。これは、土器編年上の基本的問題にかかわることであり、今回の調査結果から得た大きな成果の一つであるとともに、重要な問題提起である。

本遺跡の西を流れる井野川流域の段丘上には、数多くの遺跡が確認されている。特に本遺跡より下流、烏川との合流点までの間にあつては、その左岸段丘上に帯上に遺跡が分布している。本遺跡の位置をみると、この帯状分布の東端にあつている。この濃密分布地帯の東側一帯は一段低くなり、現在も水田地帯がひろがり、遺跡の分布も薄い。しかしこの低地帯周辺には、本遺跡に隣接してある將軍塚古墳の他、井野川と烏川合流点に近接した下郷遺跡の天神塚古墳、さらに低地帯東側にある箱石浅間山古墳、南の軍配山古墳等、その周辺に前期古墳が多く分布する。これら古墳築造の基盤をなしたのが、井野川、利根川、烏川の三河川に挟まれた低地帯であったことは明らかであり、これら諸墳の存在はここが古墳時代前期以来急速に開発されていったことを物語っている。

本遺跡で確認された遺構の中には弥生時代のもものが全くない。南の下郷遺跡にあつても、古墳時代前期の数多くの方形周溝墓があるにもかかわらず、弥生時代の遺構は確認されず、本遺跡と同様の傾向を示している。少なくとも本遺跡周辺より南の地域にあつては、その開発が古墳時代に入ってから始められ、急速にその生産力をあげていったものと考えられる。

本遺跡における遺構の時代的変遷と、周辺に厚く堆積した泥流層との関係は、古代における人と自然との拘わり合いを如実に物語るものである。また、本遺跡の調査を契機とし、この地域での泥流層堆積範囲の追確認と、これが供給源、すなわち、この地域の古式水系の追求がなされたことは、本遺跡のみならず、周辺地域の遺跡の性格を解明する上での一つの手がかりとを得たものであり、本調査の大きな成果の一つであると考えている。（松本）

- 註(1) 梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立」群馬県史研究第2号 1975 京ヶ島村誌 1957
- (2) 1山崎一「群馬県古城址の研究」上巻 1971 2五十嵐至、五十嵐信、白石修「元島名遺跡——圃場整備事業に伴う元島名遺跡群の調査報告(2)——」高崎市教育委員会 1979
- (3) 飯塚恵子、五十嵐至、田口一郎「鈴ノ宮遺跡——圃場整備事業に伴う元島名遺跡群の調査報告(1)——」高崎市教育委員会 1978
- (4) 「群馬県遺跡台帳Ⅱ 両毛編」群馬県教育委員会 1972
- (5) 田島桂男、鬼形芳夫、他「八幡原遺跡——高崎市下滝南部圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告——」高崎市教育委員会 1974
- (6) 田島桂男「八幡原、灰塚遺跡」『日本考古学年報』28号 1975
- (7) 巾隆之、松本浩一「下郷——関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集——」群馬県教育委員会 1980
- (8) 関越自動車道新潟線建設に伴い下斎田遺跡では古墳時代前期住居址、方形周溝墓等が調査された。横倉興一、巾隆之「下斎田遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』群馬県教育委員

- 会 1975
- (9) 群馬大学教授新井房夫氏の鑑定による。新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以後の示標テフラ層」考古学ジャーナル No157 1979
- (10) 松本浩一、平野進一、佐藤明人「上滝遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』群馬県教育委員会 1975  
松本浩一、巾隆之「上滝遺跡（第Ⅱ次）」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』群馬県教育委員会 1978
- (11) 松本浩一「元島名A遺跡」(10)と同書
- (12) 都丸十九一「伊那備前守忠次の玉村地方開発」上毛及上毛人 第280～282号 1940「天狗岩堰開鑿史」1947
- (13) 「第一軍管地方迅測図」（明治18年測量）参謀本部陸軍部測量局、大日本測量(株) 資料調査部複製
- (14) 前掲(5)
- (15) 前掲(3)
- (16) 新井房夫「前橋市の自然、地理的環境」『前橋市史』第1巻 1971
- (17) 新保遺跡の発掘調査により確められている。
- (18) 梅沢重昭「高崎市線貫町観音山古墳調査概報—昭和43年度調査概報」群馬県教育委員会 1968
- (19) 前掲(4)
- (20) 細野雅男「高崎市熊野堂遺跡の水田址」月刊文化財10 1978
- (21) 能登健、石坂茂「同道遺跡」『発掘された古代の水田』群馬県立歴史博物館 1980
- (22) 石川正之助、長谷部達雄他「融通寺遺跡（24、25地区）」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』群馬県教育委員会 1975
- (23) 田村孝、小野和之「芦田貝戸遺跡Ⅱ—火山灰に埋没した古代水田址と畝状遺構の調査概報」高崎市教育委員会 1980
- (24) 神戸聖語、上原啓巳、中沢幹夫「御布呂遺跡——浜川運動公園建設に伴う古代水田址の調査概報——」高崎市教育委員会 1980
- (25) 松本浩一氏より教示、昭和54年道路拡張工事に伴い周堀確認のための調査が群馬県教育委員会により実施された。
- (26) 田口一郎氏より教示、昭和54年病院建設工事に先だって高崎市教育委員会により事前調査される。
- (27) 前掲(6)
- (28) 前掲(2)、(3)
- (29) 田口一郎氏より教示、昭和55年高崎市教育委員会により周堀の調査が行なわれた。
- (30) 伊勢崎藩老、関重嶽遺著（漢文）「沙降記」渡辺敦、訳文『伊勢崎風土紀』伊勢崎郷土研究会 1936
- (31) 佐藤錠太郎「利根川の変流に就いて」上毛及上毛人 第78号 1923
- (32) 真下高幸、佐藤明人「新保遺跡」『発掘された古代の水田』群馬県立博物館 1980
- (33) 「(土壌的に見た)群馬県要土地改良対策図」『群馬県耕地土壌図』1979
- (34) 巾 隆之「滝川B・C遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ昭和51年度』群馬県教育委員会 1978年
- (35) 巾 隆之「下斉田・滝川、遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ昭和49年度』群馬県教育委員会 1975年  
横倉興一・巾 隆之「下斉田・滝川A遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ昭和50年度』群馬県教育委員会 1976
- (36) 前掲(7)
- (37) 前掲(5)

### III 上滝遺跡

- (38) 前掲(2)―2
- (39) 前掲(3)
- (40) 関 亀文「彦狭島王御陵と称する古墳及発掘遺物」上毛及上毛人第59号 1922
- (41) 森本六爾「上野に於ける国始元年鏡出土古墳」考古学研究 第2巻第4号 1931  
相川竜雄「国始元年鏡と出土古墳に就いて」上毛及上毛人 第253号 1938
- (42) 前掲(3)
- (43) 前掲(2)―2
- (44) 梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立」群馬県史研究 2・3 1975—1976
- (45) 前掲(7)
- (46) 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編「特集・火山堆積物と遺跡Ⅰ」考古学ジャーナル No.157 1979
- (47) 井上唯雄・都丸肇「寺内遺跡」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』赤城村教育委員会 1975
- (48) 須田 茂「保渡田遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』群馬県教育委員会 1980
- (49) 小林敏夫・坂爪久純「土橋・三ツ古屋・出口・島海戸遺跡発掘調査概報」境町教育委員会 1977
- (50) 松本浩一・井上唯雄・桜場一寿・原雅信・石坂茂・大塚昌彦・石北直樹「空沢遺跡」『渋川市発掘調査報告書Ⅲ』渋川市教育委員会 1979
- (51) 山崎 一「群馬県古城墨址の研究」1971  
「同上補遺編」1979
- (52) 大江正行「元島名B遺跡」『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ昭和51年度』群馬県教育委員会 1978
- (53) 前掲(2)―2
- (54) 本遺跡におけるこの種の施文について、原雅信氏より付加条2種及び3種であるとの教示があった。
- (55) 田口一郎「塚原遺跡—古式土師器を出土する—遺跡」『いぶき』6、7号 1972
- (56) 梅沢重昭・平野進一「群馬県太田市五反田・諏訪下遺跡」太田市教育委員会 1978
- (57) 前掲(7)
- (58) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』47 1968
- (59) 今井新次・松島栄治「石田川」1968
- (60) 杉原荘介・佐藤吉彦「下総鬼高遺跡調査概報」人類学雑誌第53巻第11号 1938 杉原荘介・中山淳子「土師器」『日本考古学講座 5 古墳文化』1956
- (61) 前掲(7)
- (62) 前掲(3)
- (63) 大塚初重・小林三郎「群馬県高林遺跡の調査」考古学集刊 第3巻第4号 1967
- (64) 川崎純徳「三反田遺跡1、2次」1978
- (65) 関根孝夫「諏訪原遺跡—松戸市文化財報告第5集—」1974
- (66) 「下加遺跡Ⅱ」『大宮市史』第1巻考古編 1968
- (67) 前掲(3)
- (68) 前掲(8)
- (69) 前掲(56)
- (70) 前掲(63)
- (71) 澄田正一他『新編一ノ宮市史 資料編』1967
- (72) 前掲(7)
- (73) 前掲(3)
- (74) 松村一昭「赤堀村鹿村島遺跡—大正用水東部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告—」赤堀村教育委

- 員会 1977
- (75) 前掲(56)
- (76) 尾崎喜左雄「朝倉Ⅱ号古墳」『前橋市史』第1巻 1971
- (77) 前掲(5)
- (78) 前掲(2)―2
- (79) 田口一郎氏より教示、筆者も現地にて拝見する。
- (80) 「特集シンポジウム五領式土器について」台地研究 No.19 1971
- (81) 小林行雄「弥生式土器の様式構造」考古学評論第1巻第2号 1935
- (82) 群馬県考古学会第1回遺跡報告会配布資料 1954
- (83) 杉原荘介「武蔵前野町遺跡調査概報」考古学 第11巻第1号 1940
- (84) 前掲(58)
- (85) 杉原荘介「五領遺跡の出土土器」『土師式土器集成 本編1 前期』1971
- (86) 小出義治「土師器雑考」国学院雑誌60―11 1959
- (87) 杉原荘介「弥生式土器と土師式土器の境界」駿台史学34号 1974
- (88) 前掲(80)及び(86)
- (89) 岩崎卓也「古式土師器考」考古学雑誌第48巻第3号 1963
- (90) 前掲(56)
- (91) 福島武雄、岩沢正作 八幡塚古墳 群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第2輯 1934
- (92) 右島和夫「下洲名古墳群」『特集火山堆積物と遺物Ⅰ』考古学ジャーナル No.157 1979
- (93) 前掲(46)
- (94) 前掲(47)
- (95) 井上唯雄、都丸肇、「保渡田遺跡」『特集火山堆積物と遺物Ⅰ』考古学ジャーナル No.157 1979
- (96) 井上唯雄「伊与久遺跡」境町教育委員会 1973
- (97) 外山和夫「東吹上遺跡」『群馬県立博物館研究報告』第8集 1973
- (98) 梅沢重昭「笹遺跡——鎗川流域における滑石製品出土遺跡の研究——遺物編」群馬県立博物館 1966
- (99) 中村 浩ほか「陶邑Ⅰ」大阪府教育委員会 1976
- (100) 中村 浩ほか「陶邑Ⅱ」大阪府教育委員会 1980
- (101) 中村 浩ほか「陶邑Ⅲ」大阪府教育委員会 1980
- (102) 中村 浩ほか「陶邑Ⅳ」大阪府教育委員会 1979
- (103) 田辺昭三ほか「陶邑古窯址群」平安学園考古学クラブ 1966
- (104) 久居古窯址群発掘調査団「久居古窯址群発掘調査報告2、4号窯」 1968
- (105) 檜崎彰一「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』1959  
荒木 実「東山古窯址11号窯の須恵器」古代人No.21 名古屋考古学会 1971  
荒木 実・増子康真・大井智晴「東山218号窯の古式須恵器について」古代人No.33 名古屋考古学会 1978
- (106) 笹沢 浩・原田勝美「長野県下の須恵器(上)」信濃 第26巻第9号 1974  
笹沢 浩・原田勝美「長野県下の須恵器(下)」信濃 第26巻第11号 1974
- (107) 坂本和俊「ミカド遺跡の調査」『第12回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会 1979
- (108) 渡辺泰伸ほか 仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告 古窯研究会 1976  
渡辺泰伸「東北古墳時代須恵器の様相と編年」考古学雑誌第65巻第4号 1980
- (109) 田辺昭三「須恵器の誕生」日本美術工芸 第390号 1971  
中村 浩「陶邑・深田」大阪府教育委員会 1973
- (110) 既成果に花岡紘一「土器の胎土分析について」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会 1980  
花岡紘一・大江正行「瓦類の胎土分析」『天代瓦窯跡』中之条町教育委員会 1981などがある。

### III 上滝遺跡

- (111) 花岡紘一（群馬県工業試験場）氏による分析結果を真下高幸・大木紳一郎両氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）の好意により教示いただいた。
- (112) 赤羽一郎「常滑」『世界陶磁全集』3 日本中世 1978
- (113) 榑崎彰一「美濃古陶のながれ」『美濃の古陶』1977
- (114) 倉田芳郎「関東」『世界陶磁全集』3 日本中世 1978
- (115) 大江正行「軟質陶器について」『月報鳥羽遺跡』No.14 1980
- (116) 太場磐雄「神道考古学論攷」1937
- (117) 同上「祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究」1970
- (118) 杉山林継「祭祀関係の遺跡」『神道考古学講座』第2巻 1972
- (119) 勢多郡編纂委員会「勢多郡誌」1957
- (120) 岩沢正作「群馬県に於ける祭祀関係遺跡概観」毛野5号 1919
- (121) 尾崎喜左雄「館野遺跡」『北群馬・渋川の歴史』1966
- (122) 山本良知「子持村中郷館野遺跡」コイノス21号 1962
- (123) 「帝室博物館年報」 1925

## IV 元島名A遺跡

## IV 元島名A遺跡

### 1 発掘調査の経過

本遺跡の調査は、上滝遺跡第1次調査が終了段階に入った、昭和51年2月20日に開始され、基本杭、トレンチ設定が行なわれ、引き続いて、2月25日から試掘調査が実施された。この調査では、いずれの場所においても、遺構はほとんど認められず、調査区域内で検出された遺構は、溝1本のみであった。このため、調査は平面発掘を実施することなく、3月12日完了した。

### 2 遺跡の位置

本遺跡の東方に隣接する上滝遺跡とは、井野川の小支谷將軍淵により隔てられている。遺跡の西方は県道、前橋—長瀨線を狭み、中、近世にわたる居館址を中心とする元島名B遺跡になる（元島A遺跡の調査終了に引き続き、昭和54年3月より、同年6月まで発掘調査が実施された。）遺跡の南には、本県における初期古墳、全長75m、前方後方墳、將軍塚古墳が近接する。この古墳を隔てさらに南方向には、榛名山南中復を水源とする中級河川、井野川が、北西—南東に貫流している。（95図）

### 3 調査の方法

調査予定区域内、南北幅180m、東西長200mの中央に設置された自動車道建設用測量杭（S T93—S T94）の2点間を見透し、中軸線を設け、10m四方の大グリッド、2m四方の小グリッドを設定し、これに従ってトレンチを配置した。トレンチの大きさは2×4m、東西、南北とも24m間隔（144グリッド1本）全体で24本設けた。この他に、南端には長さ150m、幅2mの遺跡を縦に貫くトレンチを設けた。（95図）

### 4 地 層

トレンチ調査においては、ほとんど遺構の確認はなかったが、各トレンチごとに柱状図を作成した。標準土層、及び各土層の状況については次の通りである。

標準土層		
I a 層	灰褐色土層、やや砂質、水田耕土	下部がやや砂質になる箇所もある。上滝遺跡のⅢ層に対応するものか、ロームの2次堆積か不明。
I b 層	赤褐色土層、砂質、浅間A軽石を多量に含む。酸化鉄分の沈着が見られる。	Ⅳ 層 暗灰色土層、砂質。
Ⅱ a 層	浅間B軽石純層	Ⅴ 層 灰白色土層、粘質、関東ローム層
Ⅱ b 層	暗青灰色土層、粘質、粒子は細かく均一。	個別土層説明
Ⅲ a 層	暗青灰褐色土層、粘質、酸化鉄分の凝集が目立つ。	(1) 暗灰色土層、粘質
Ⅲ b 層	黄白色土層、強粘質、斑点状に見られたり、	(2) 赤褐色土層、軽石を多量に含む。
		(3) (2)に同じであるが鉄分の沈着が見られる。



- |                           |                                |
|---------------------------|--------------------------------|
| (4) III b層とIV層の中間層        | (9) 細砂層                        |
| (5) 灰褐色土層、砂質              | (10) 軽石純層、浅間A軽石                |
| (6) 暗灰色土層、遺構覆土            | (11) (8)に同じ。                   |
| (7) 暗褐色土層、粘質              | (12) 黒色土層、粘質、下半部は酸化、鉄分の凝集が目立つ。 |
| (8) 暗灰色土層、砂質、浅間B軽石を多量に含む。 |                                |

## 5 遺構・遺物

トレンチ調査においては、明確に遺構と判断できるものは検出できなかった。また遺物についても、トレンチ内より土器小破片が少量見られる程度であった。しかし、ただ1ヶ所、遺跡地西端において現在の水路に平行して、南北に調査区域を貫く溝を確認した。溝の規模は上端幅1.6m、下端幅1m、深さ60cmで、覆土は灰褐色である。時期は明確に判定できないが、現水路の前身的な水路であると思われる。

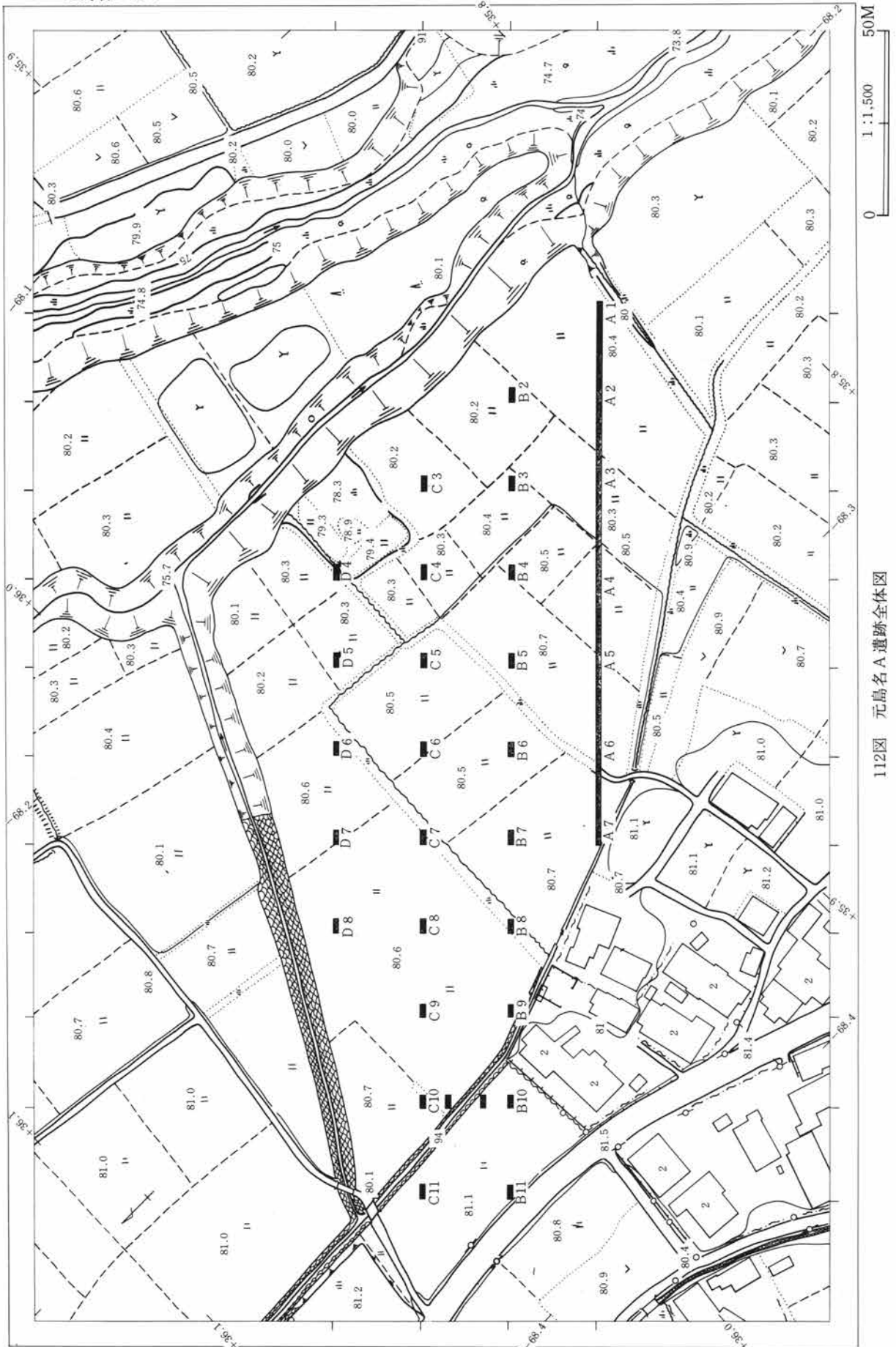
## 6 まとめ

本遺跡では、居住の跡は見られない。しかしその地層を見ると、浅間B軽石層直下に粘性の強い黒色土の堆積が見られる。この層は耕作土の可能性もあり、本遺跡地が古代において生産の地として活用されたことも考えられるが、その確証はつかめなかった。

また地層を見ると、上滝遺跡とは將軍淵を隔て西に隣接するが著しく異なる。上滝遺跡で広範囲に認められた榛名山二ツ岳の爆裂に伴う噴出物（FA）を主体とする。角閃石安山岩を含む水成堆積層は、西方（井野川方向）からの流れによるものではないことが、ここにおける土層の観察により判断することができる。

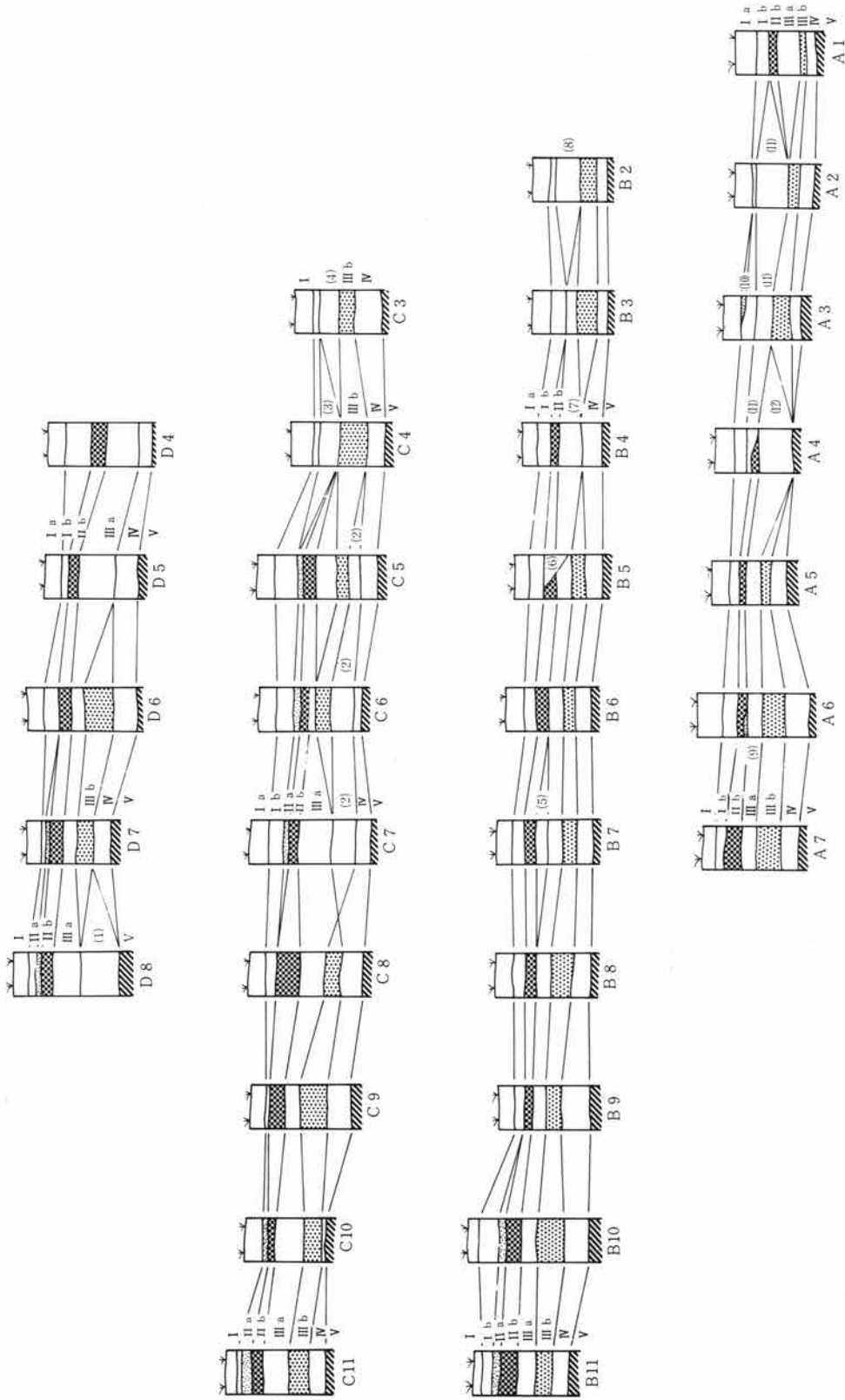
（松本）

IV 元島名A遺跡



112図 元島名A遺跡全体図

※柱状図番号は95図トレンチ番号に対応



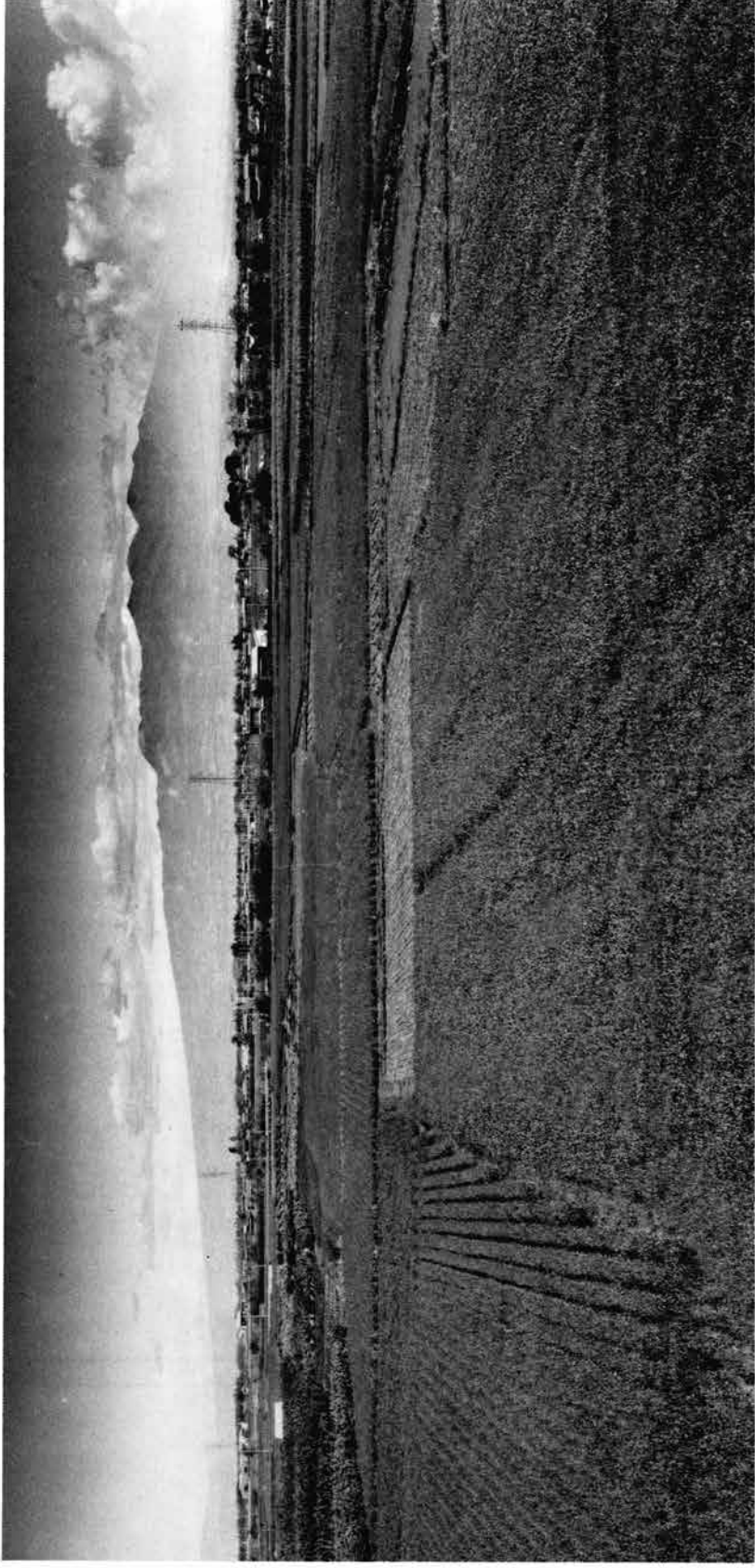
113 図 元島名A遺跡土層柱状図



# 図 版



図版 1



八幡原A、B遺跡付近全景 南より  
左上テラント辺りがB遺跡  
背後の木立の並びが滝川  
遠方の山は赤城山

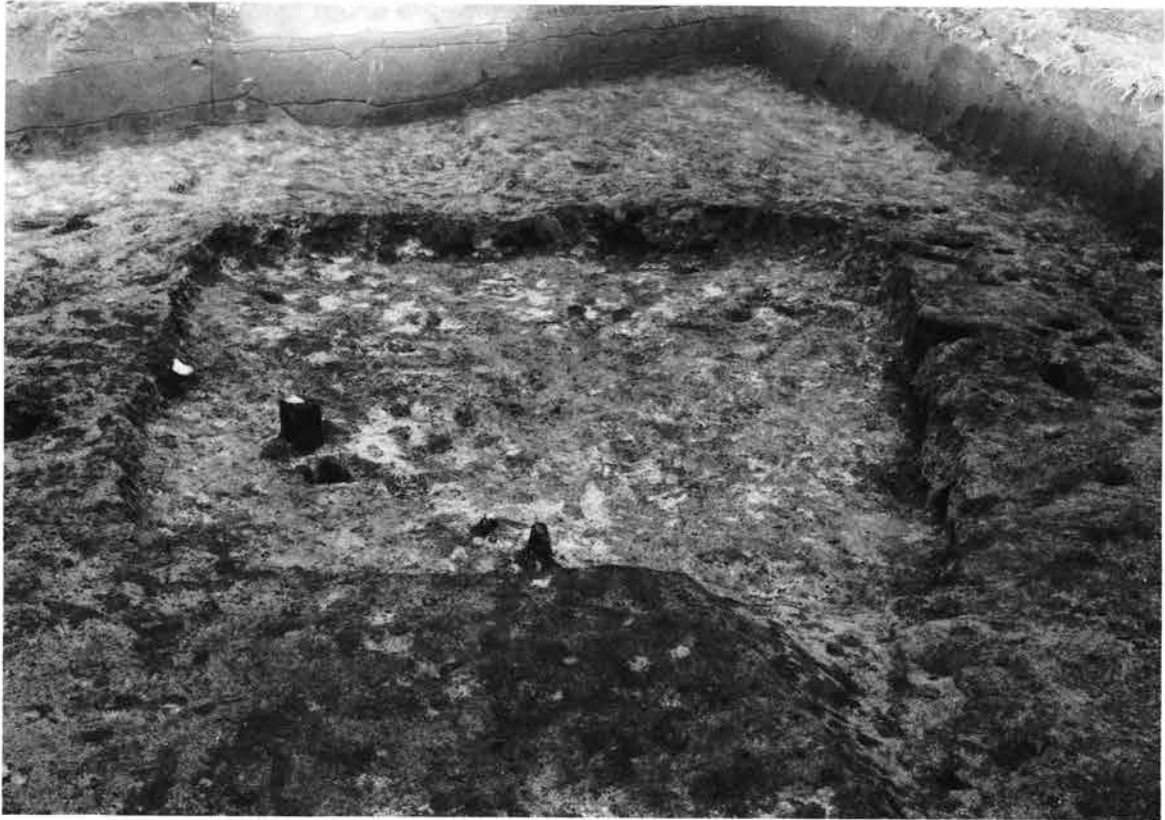


八幡原A遺跡全景 南より

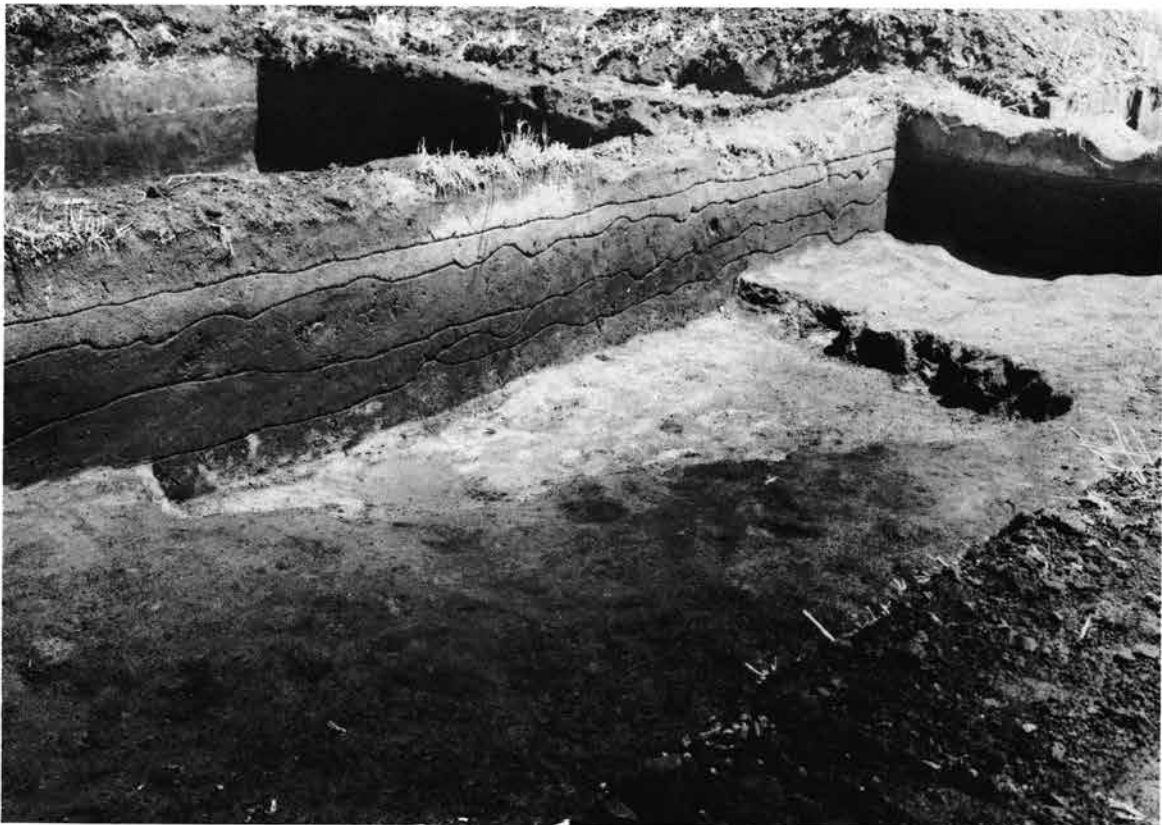


八幡原B遺跡全景 南より





堅穴住居址全景 北より 54MN 4、5



堅穴住居址土層断面図 西より 54MNS 3、4



掘立柱建築遺構 南より



東微高地区柱穴断面 54E16



左同 54E15



左同 54E14



同上 54E14



同上 54F16



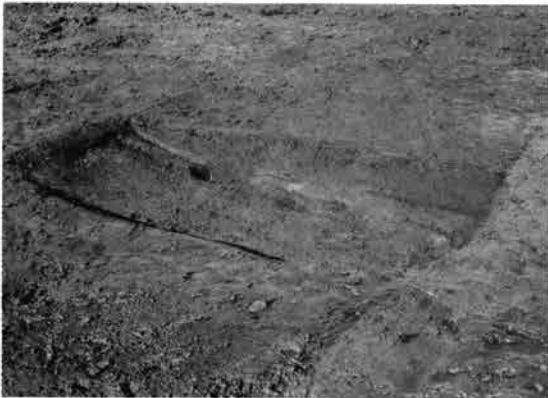
井土址 54D10



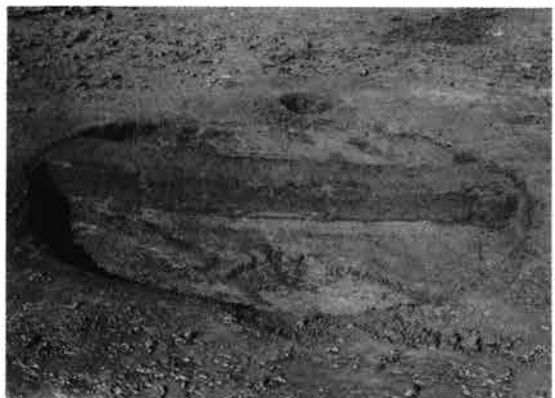
井戸址 54N15



土坑 54O12



土坑 54P10



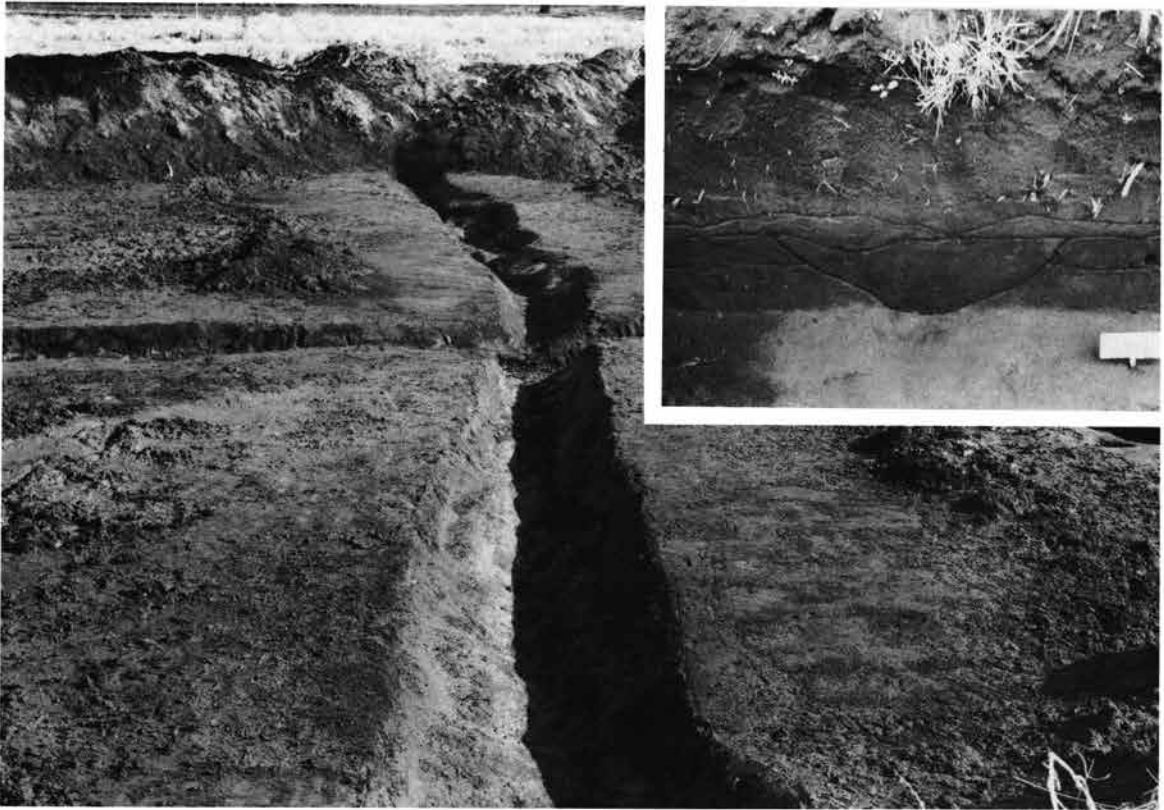
土坑 54Q11



土坑 54O11



土坑 54H13



1号溝、同土層断面(右上) 東より 54O10



4号(左)13号溝(右) 南より 54J14



6号、17号溝 54K15



6号、17号溝 54K13



6号溝 54N18



11号溝 54M8



14号溝 西より



14号溝 54J15トレンチ



14号溝 54K16トレンチ



14号溝 54L16



18号、21号溝交叉部 55I03



18号溝 18号、22号溝交叉部 55 I 06



18号(左)27号(右)溝 55 I 05





19号溝 54LN19



19号、25号、26号溝 54Q20



20号、23号溝交叉部 55O02



左に同じ



21号溝 55N05



21号溝 55Q06



22号溝 55Q09



溝 54K18



環濠南側溝東延長部コーナー 西より 57C14トレンチ



環濠南西コーナー 東より 57O18トレンチ



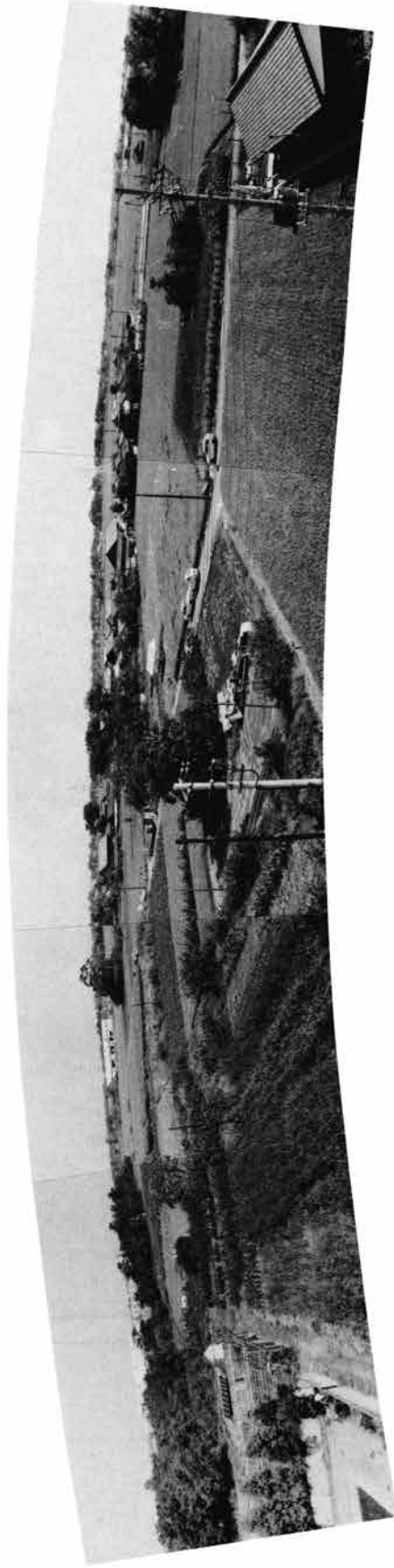
57N18トレンチ



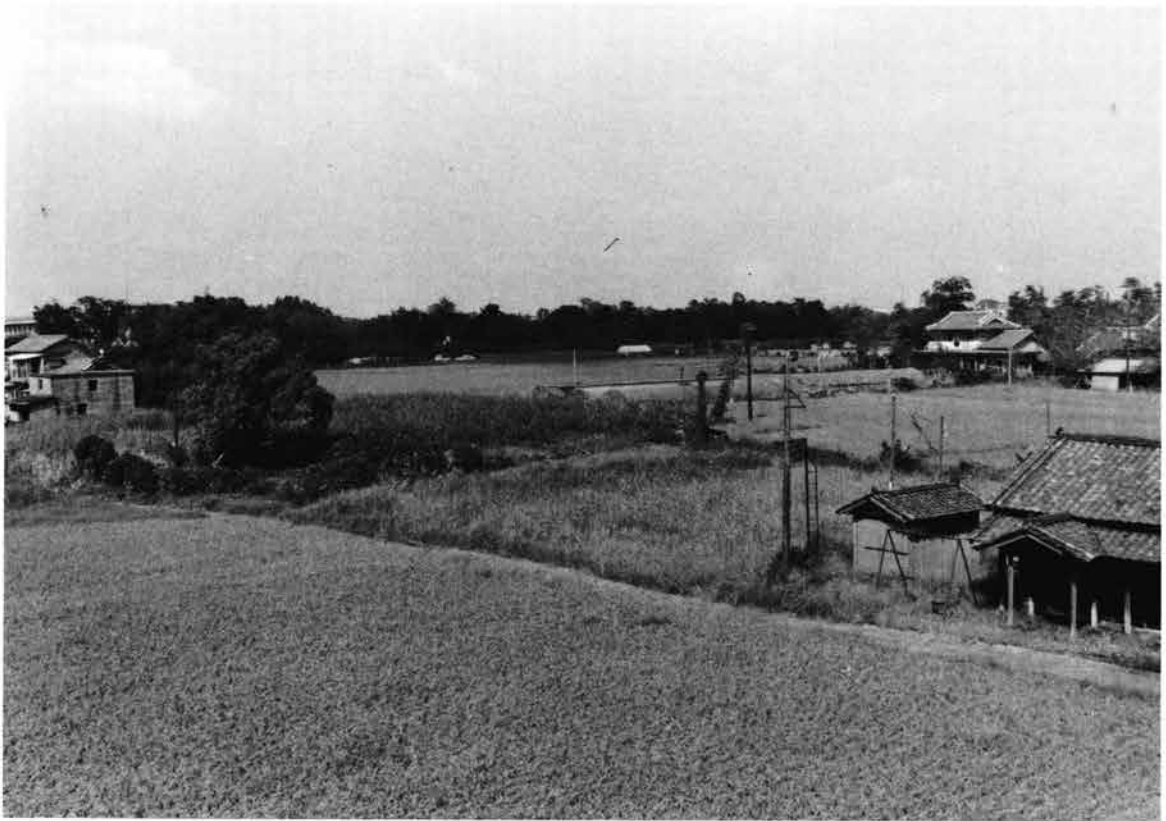
57F~G15トレンチ



58P08トレンチ



上滝遺跡全景 西南より



上滝遺跡全景 南より



B地区東南部トレンチ調査 南より



54B32～C05トレンチ 南より



50C16～C30トレンチ



54C24～C30トレンチ



46C24～C30トレンチ



20号溝 58C00～C04トレンチ



D地区全景 木立の向こうは元島名A遺跡



54C48~54D12トレンチ



同 左



54D12~54C48トレンチ



66D34~D48トレンチ



B 1 区全景、土坑群 南より



B 2 区全景、南より、左隅は 7 号溝、中央部は 6 号溝



B3区全景環濠、住居址群 東より





B 2 区東南隅土器群



B 2 区中央部土器群



B 2 区土器群全景 北より



B 2 区北面土層断面 南より



1号住居址全景 西より



1号住居址遺物出土状態 北西より



1号住居址遺物出土状態



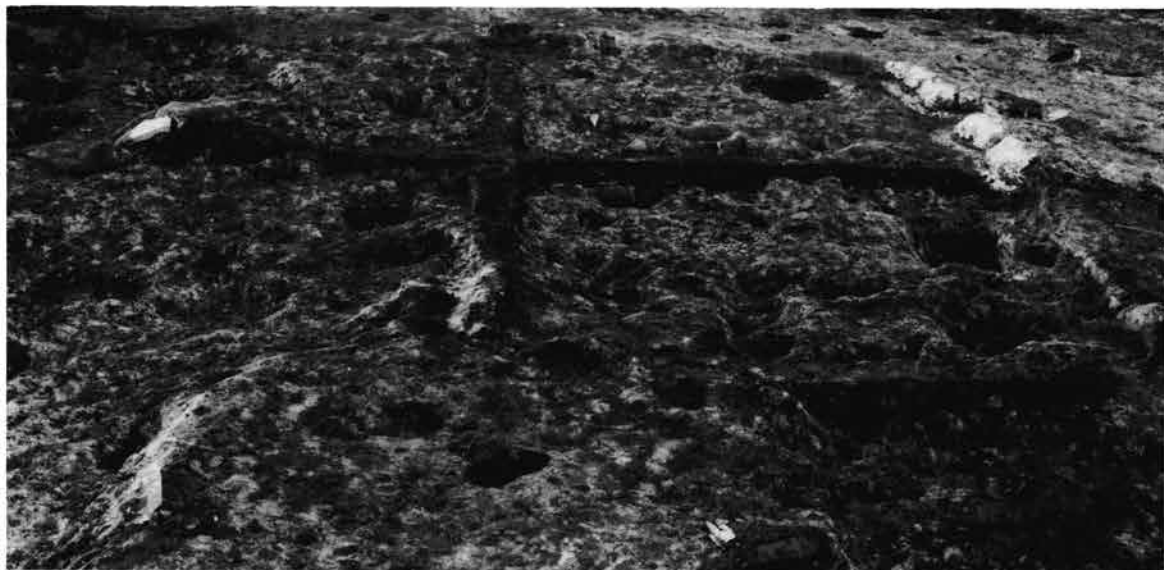
同 左



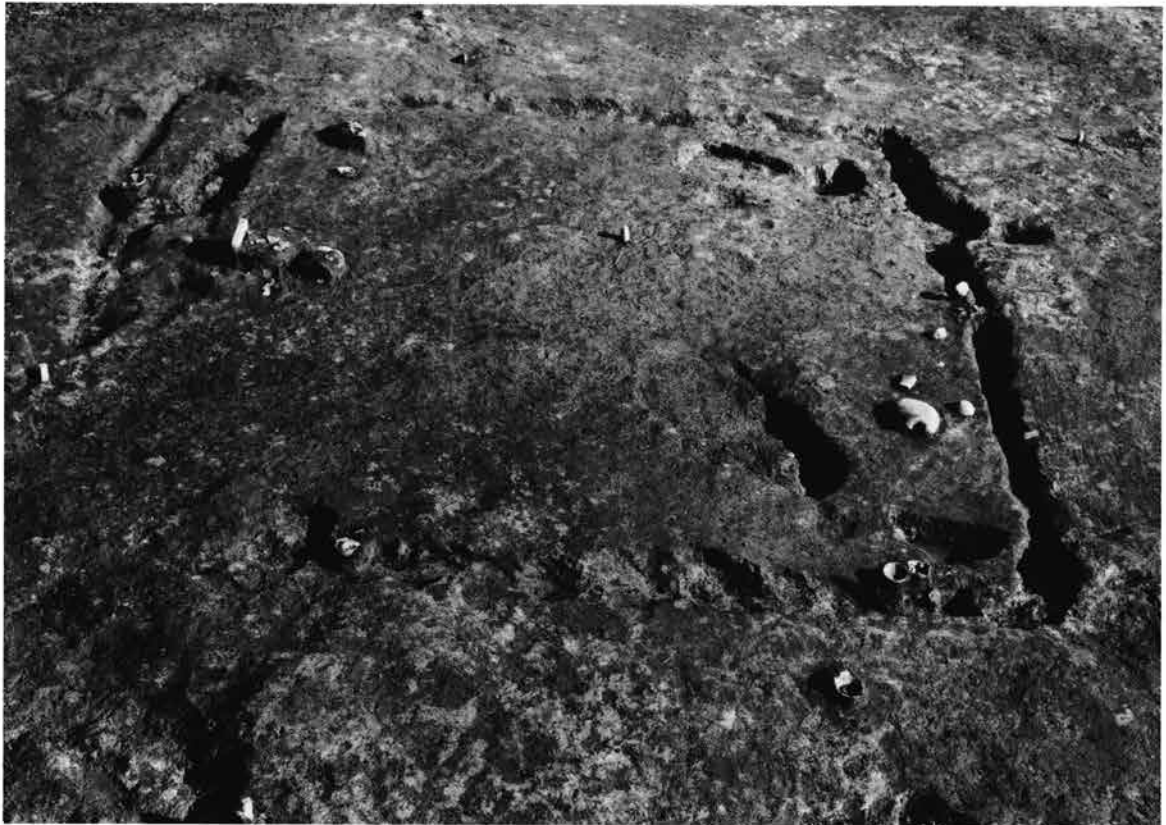
同 上



1号住居址内土坑



1号住居址堀方面



2号住居址 遺物出土状態全景 西より



2号住居址遺物出土状態



同 左



同 上



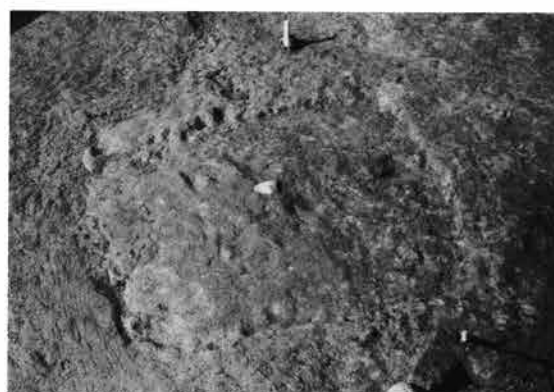
2号住居址覆土中焼土帯



3号住居址遺物 南より



3号住居址遺物出土状態



3号住居址全景



同 上



3号住居址堀方面



2号、5号、7号、8号住居址全景 西より



2号、10号住居址全景 西より



7号住居跡かまど跡



7号住居址床面下不定形土坑



7号住居址南辺焼土帯



7号住居址床面及び土坑



6号住居址 南より



11号住居址全景 西より  
同住居址かまど跡（左）



12号住居址 西より





12号住居址、50号土壇遺物出土状態全景 北より



12号住居址遺物出土状態



同 左



同 上



同 上



13号住居址遺物出土状態



掘立柱建築遺構全景 西より



柱 穴 No.1



柱 穴 No.3



柱 穴 No.7



柱 穴 No.5



16号、17号土坑



25号、26号土坑



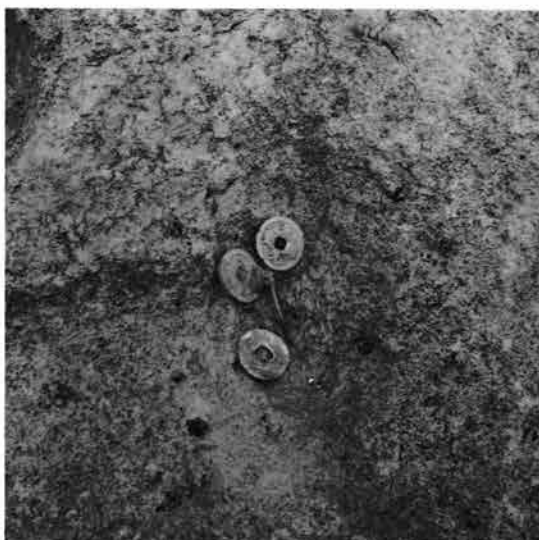
14号土坑



20号土坑



11号土坑



B 1 区宋钱出土状态



40号土坑



40号土坑遺物出土状態



41号土坑



41号土坑遺物出土状態



41号土坑



42号土坑



43号土坑



43号土坑土層断面



44号、45号土坑



45号土坑土層断面



46号土坑



46号土坑土層断面



49号土坑



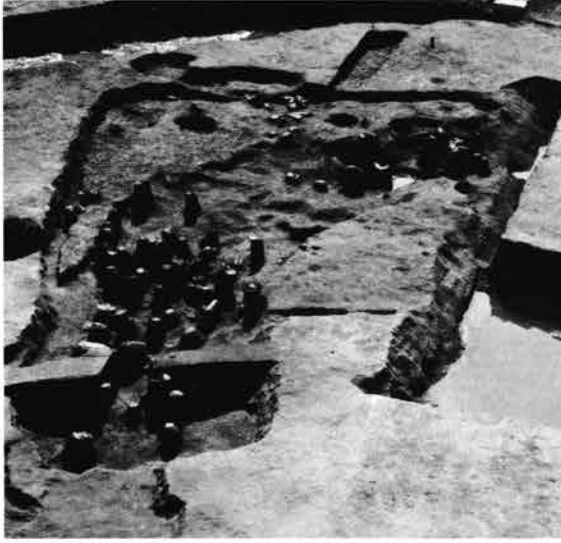
49号土坑遺物出土状態



同上



同上



12号住居址、50号土塚遺物出土状態



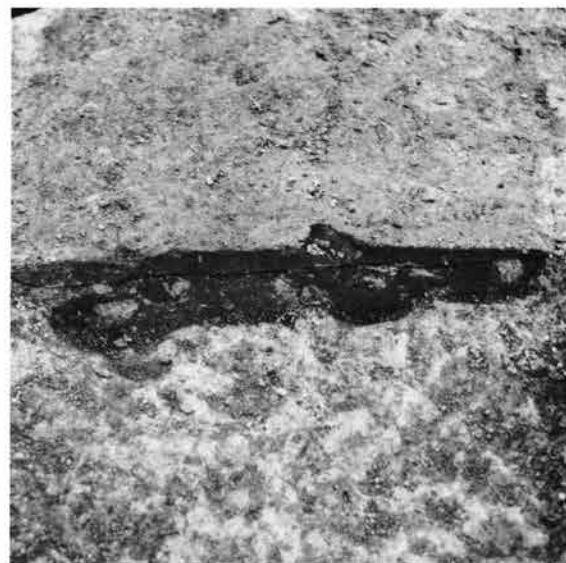
同 左



50号土塚土層断面



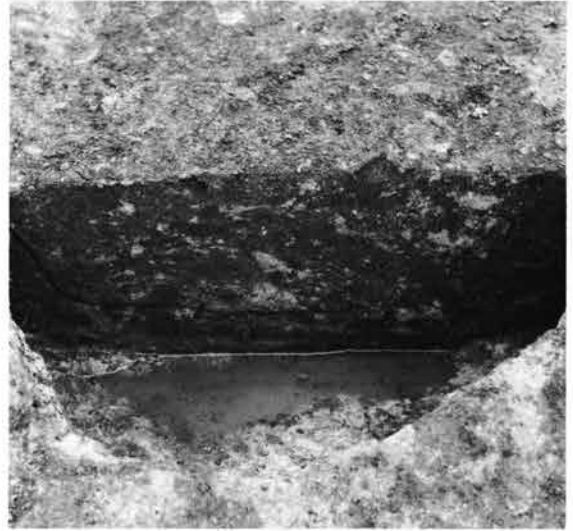
51号土塚



51号土塚土層断面



52号土坑



52号土坑土層断面



51号~53号土坑 (1号ピット群) 東より



54号土坑





55号土坑



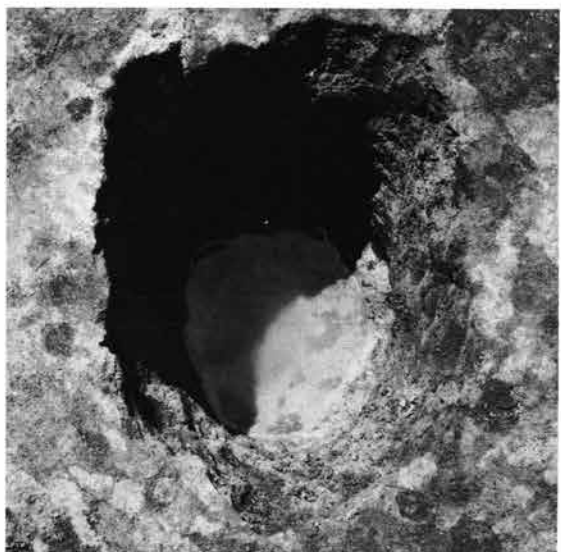
55号土坑土层断面



56号土坑



56号土坑土层断面



57号土坑



57号土坑土层断面



58号土坑



58号土坑遺物出土状態



58号土坑土層断面



59号土坑



59号土塚遺物出土状態



60号土塚



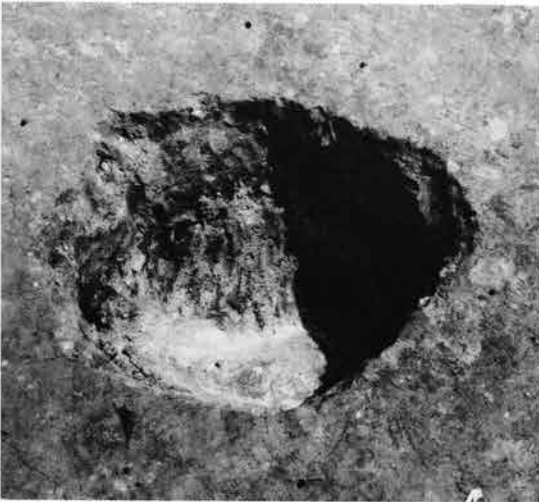
60号土塚土層断面



60号土塚出土木材



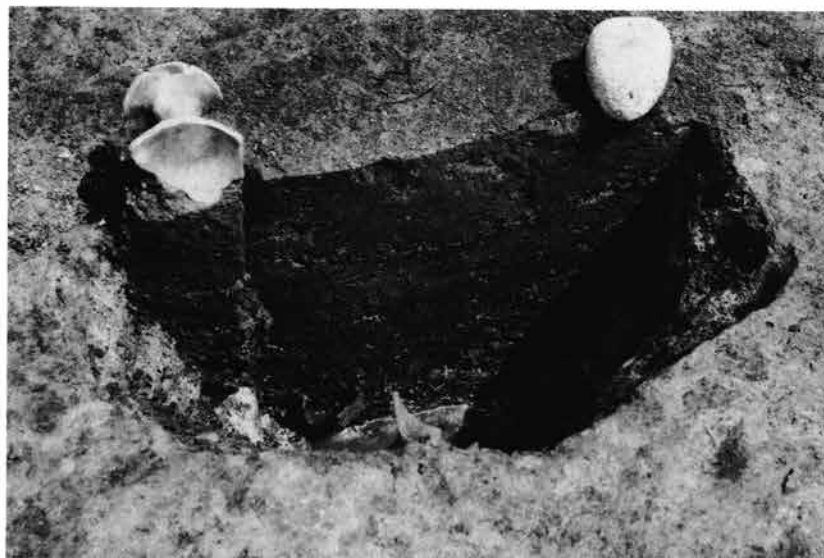
60号土坑出土木材



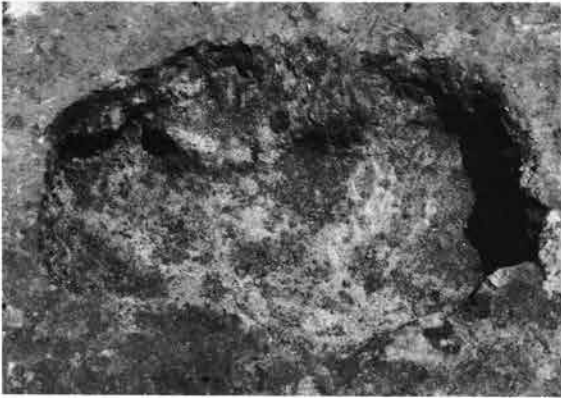
61号土坑



61号土坑遺物出土状態



61号土坑土層セクション



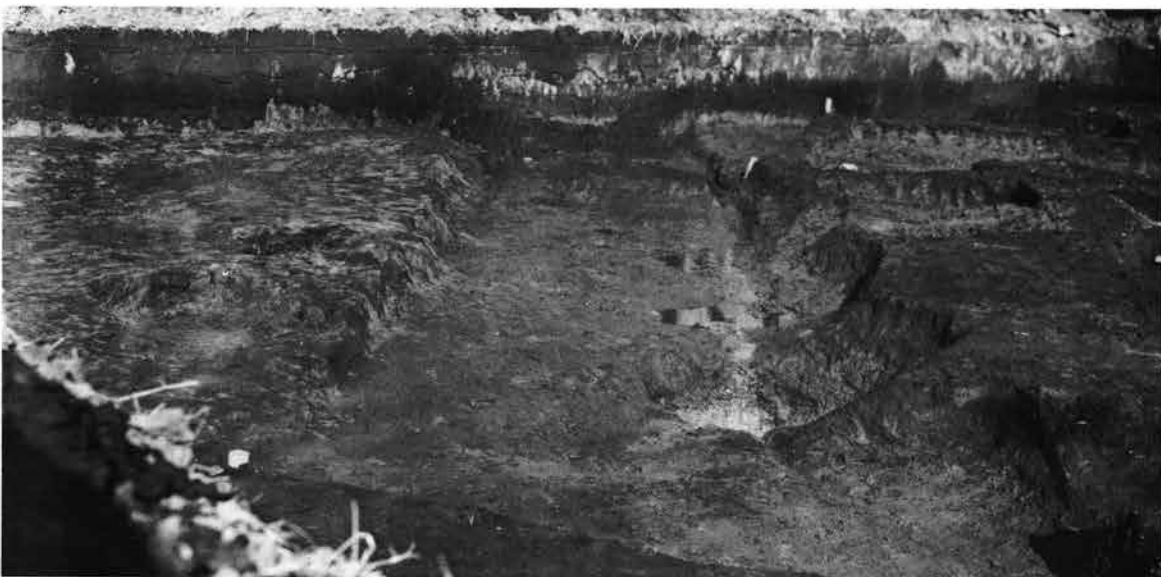
62号土坑



62号土坑土層断面



58～62号土坑2号ピット群 北より



1号溝B1区 南より



1号溝遺物出土状態B 1区 南より



1号溝遺物出土状態B 4区 南より



1号溝遺物出土状態B1区



同 左



1号溝子持勾玉出土状態



同 左



1号溝土層断面



1号溝遺物、土層断面



1号溝遺物出土状態



同 左



環濠(2号溝)北東コーナー部



環濠南東コーナー



環濠南西コーナー



環濠北西コーナー



環濠東側溝陶器出土状態



環濠東側溝土層断面



環濠西側溝土層断面



環濠、4号、5号溝 北西より





4号溝土層断面 北より



3号溝 北より



5号溝B2区 西より



5号溝B4区 東より



6号溝B2区 西より



6号溝B2区 東より



6号溝B4区 東より



7号溝B2区 南より



7号溝B2区 西より



7号溝B4区 東より



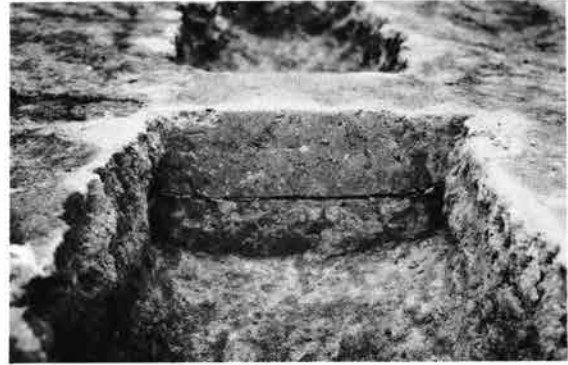
B2区南部左端から6号、5号、9号、8号溝



9号溝(左)8号溝(右)



10号、19号溝土層断面



12号溝土層断面



12号(右)、13号溝



13号溝土層断面



11号溝 西より



14号溝 西より



同 左 西より



15号溝 北西より



15号溝土層断面



16号溝土層断面



同 左



5号溝17号溝土層断面



同 左



10号、18号、19号溝 東より



19号溝 西より



18号溝 西より



19号溝土層断面



18号溝遺物出土状態



1号井戸



2号井戸



2号井戸礫出土状態



4号井戸



5号井戸



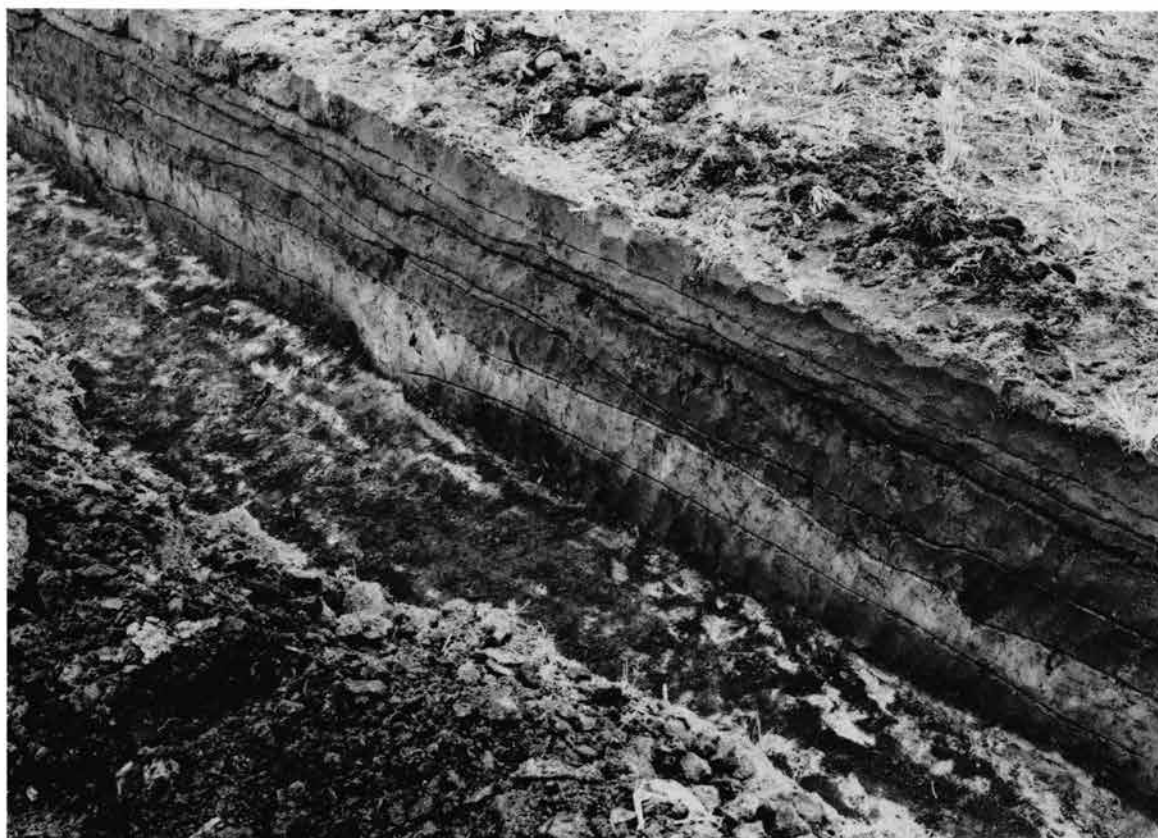
6号井戸



6号井戸

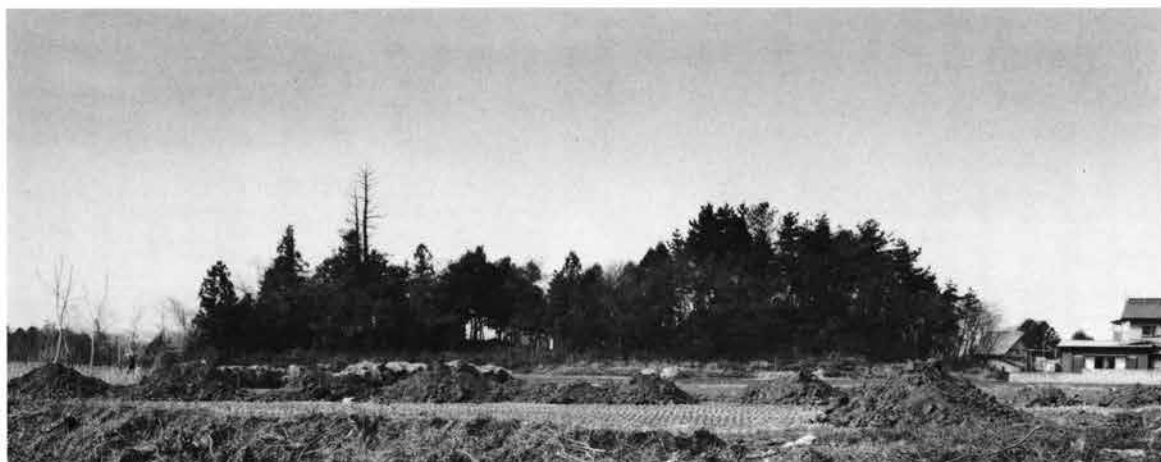


東西通しトレンチ全景



東西通しトレンチ土層近接





元島名A遺跡及び將軍塚古墳 北より



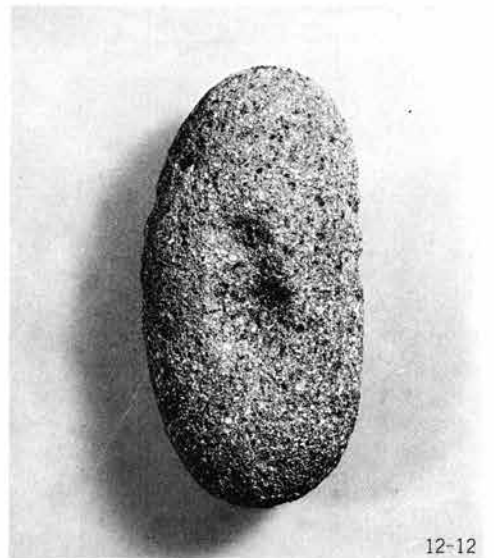
遺跡付近(93図No.7地点)滝川右岸土層断面

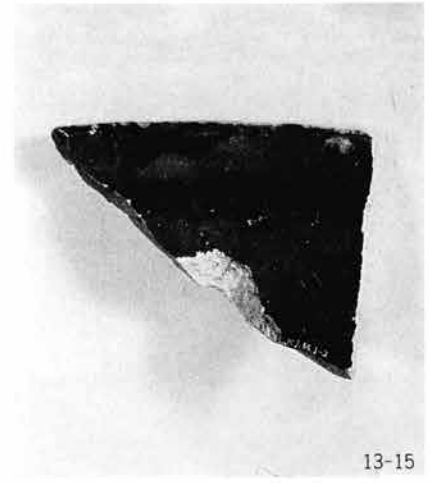
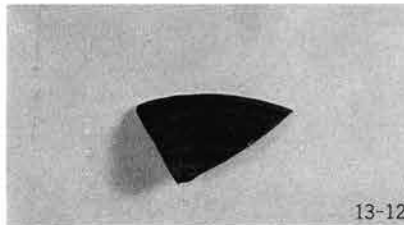
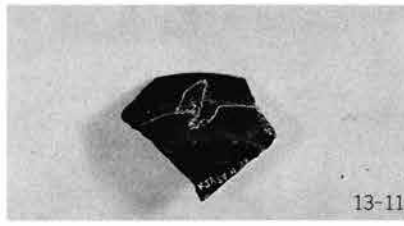
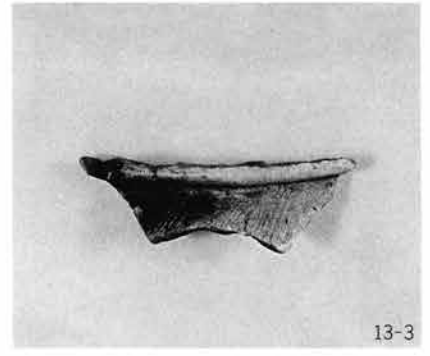
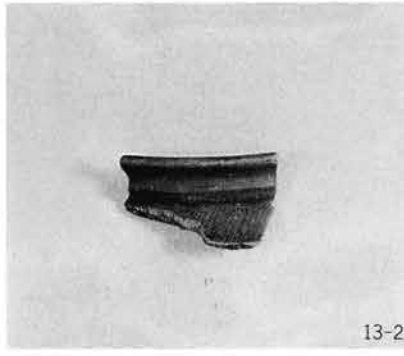


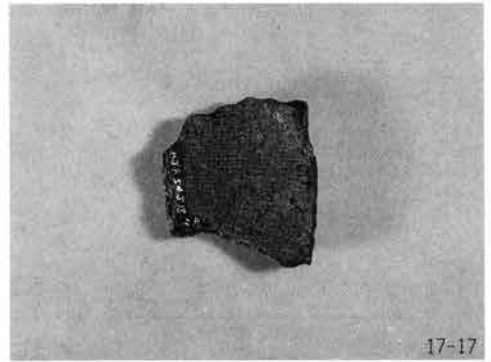
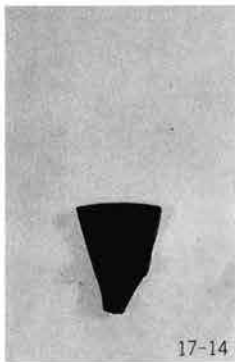
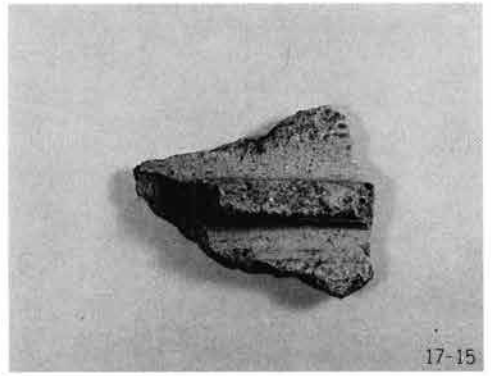
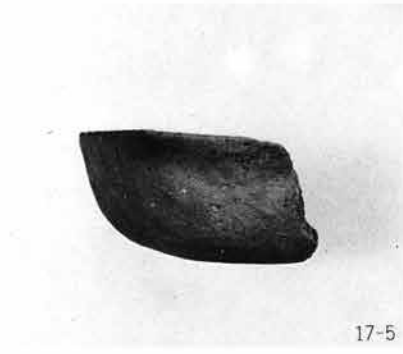
川曲付近(92図No.3地点)滝川左岸土層断面



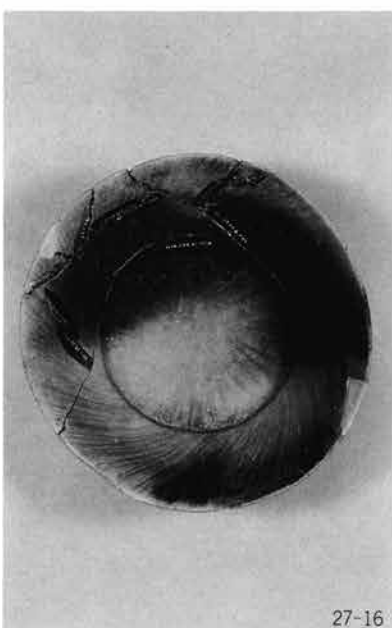
簡易ボーリング調査スナップ

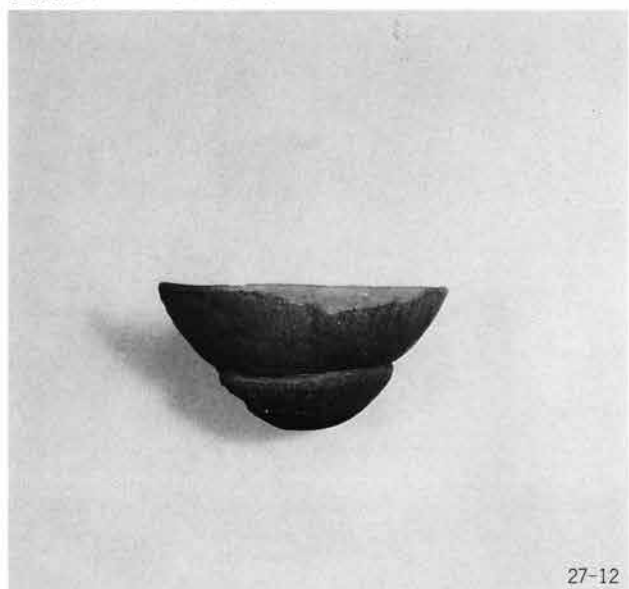






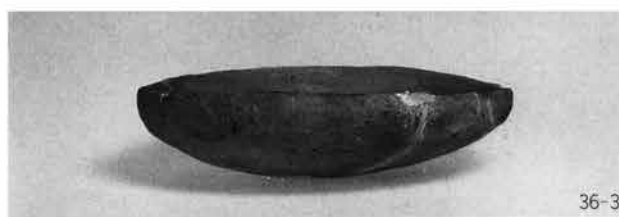
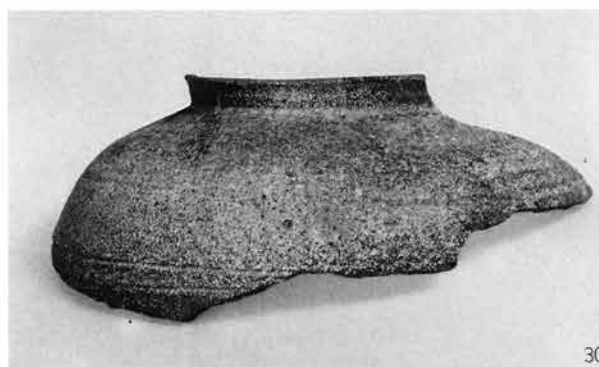














42-1



42-3



49-4

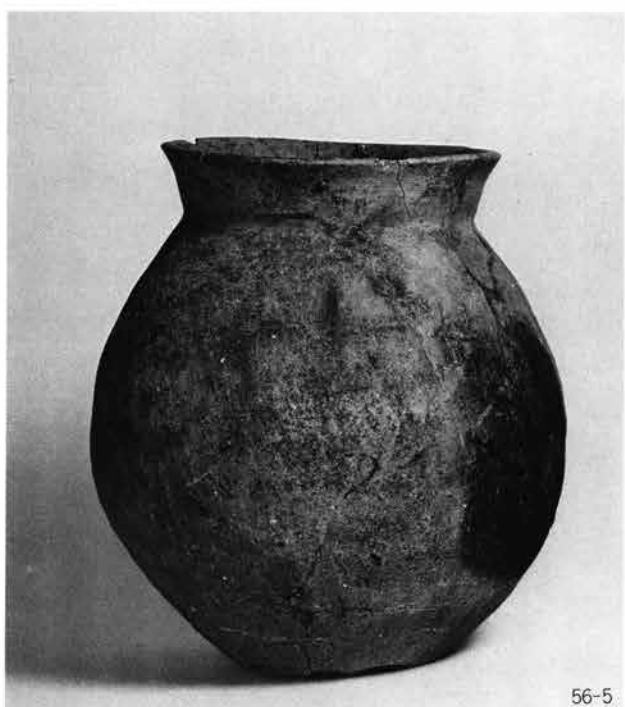


49-2



49-3









58-4



58-10



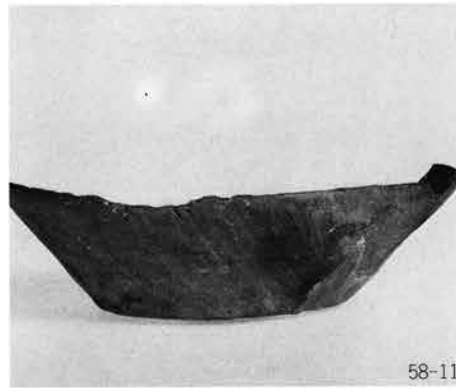
58-11



58-6



58-10



58-11



60-1



58-14



60-3





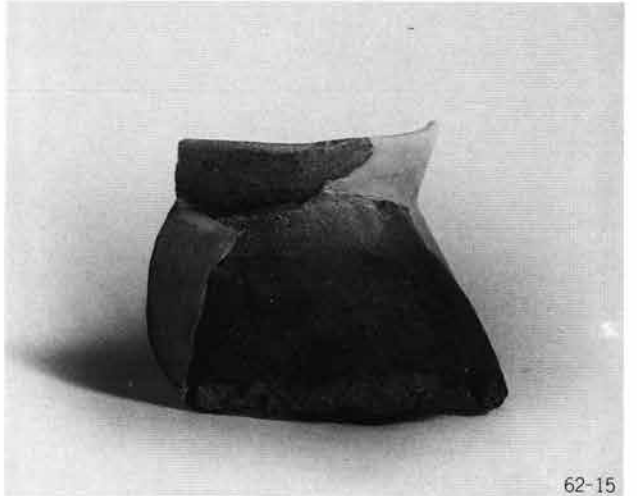
61-10



62-13



62-11



62-15



62-14



62-16



62-17

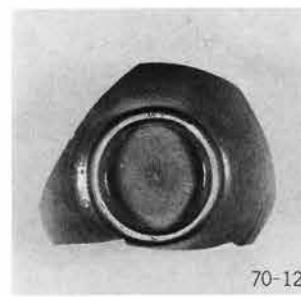
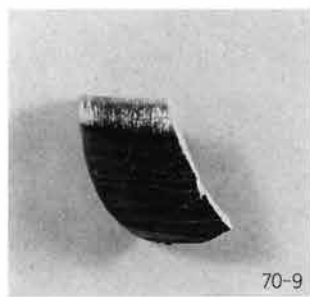
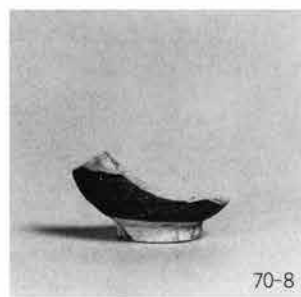
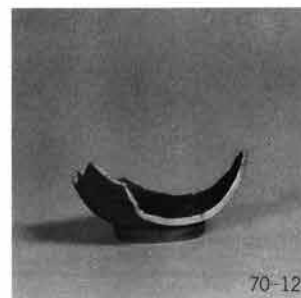
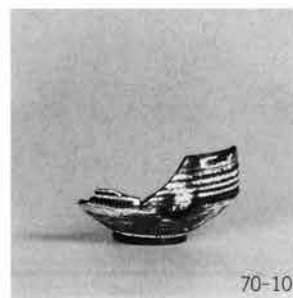
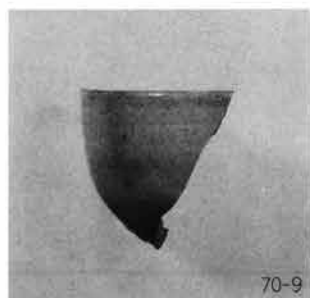
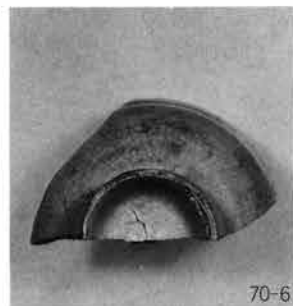
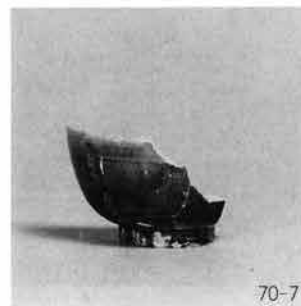


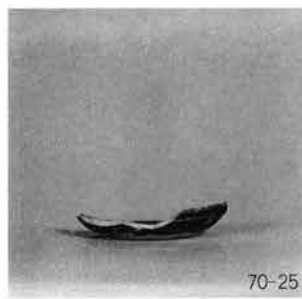
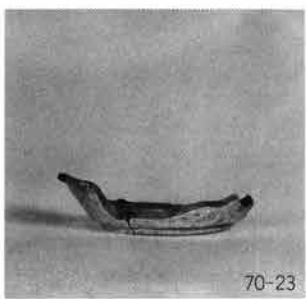
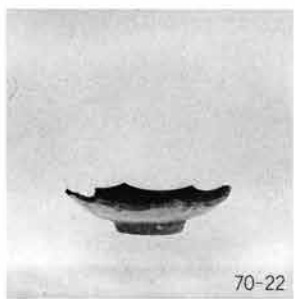
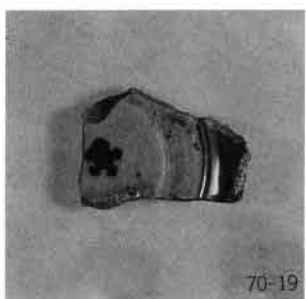


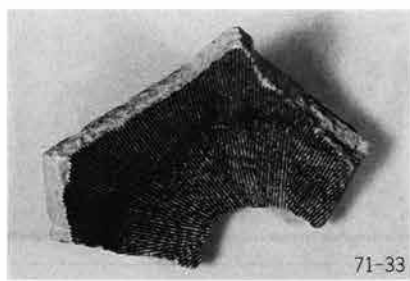
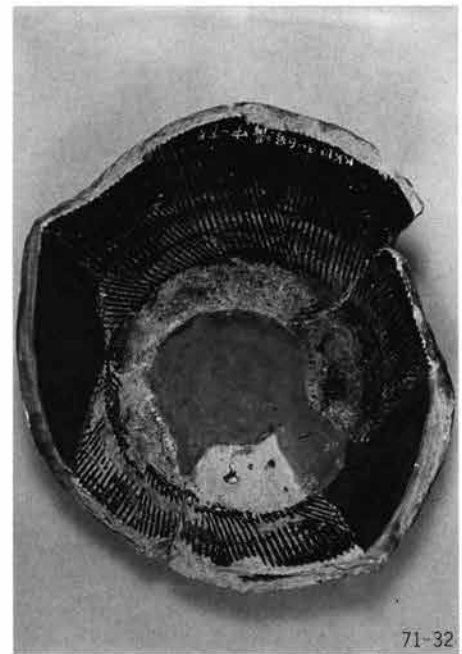
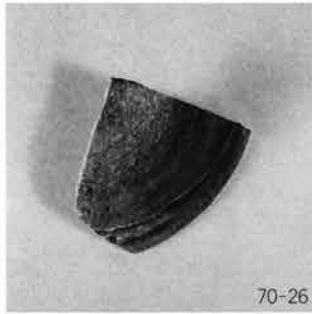
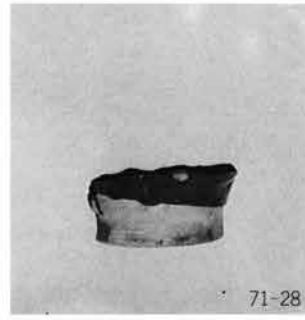


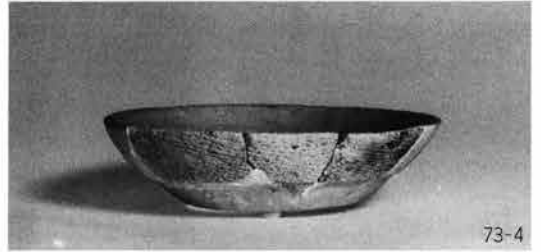




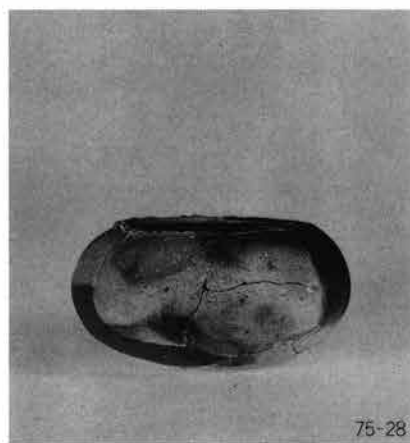
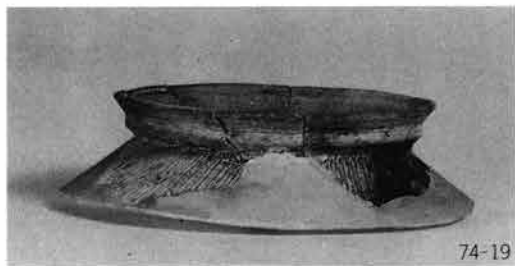


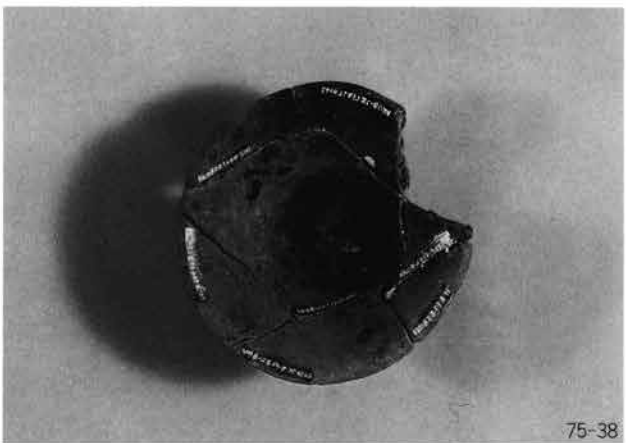
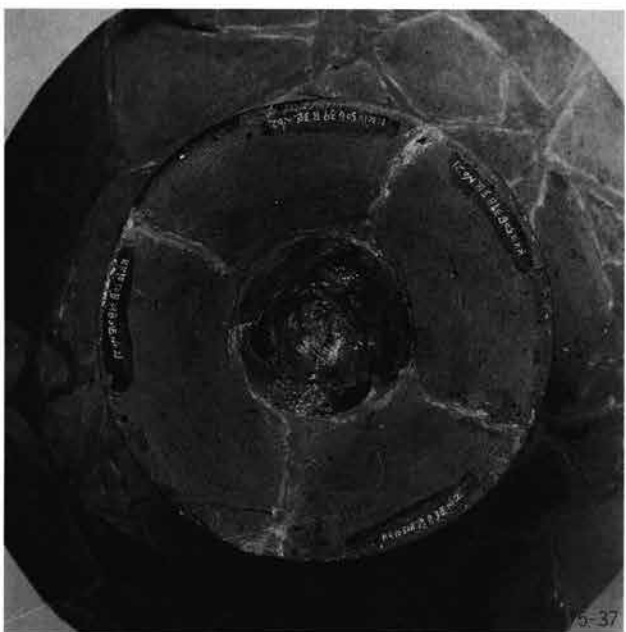




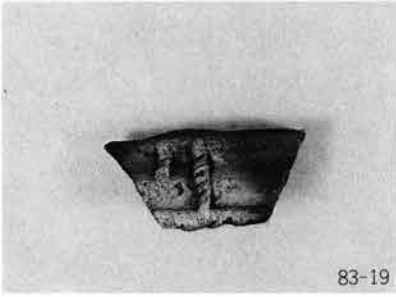
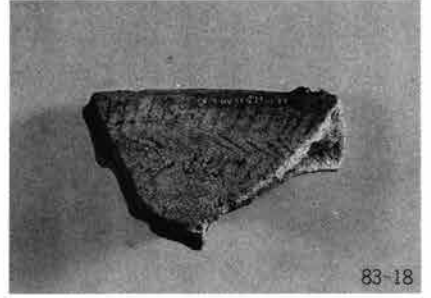
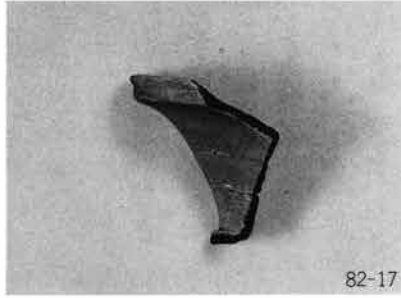
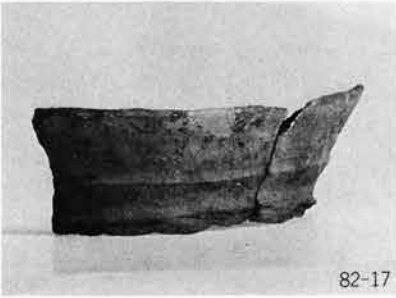
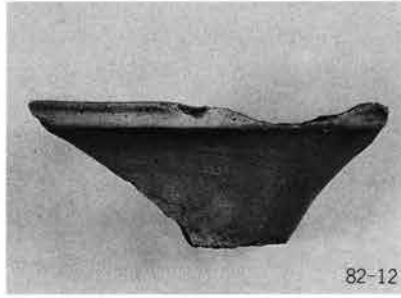


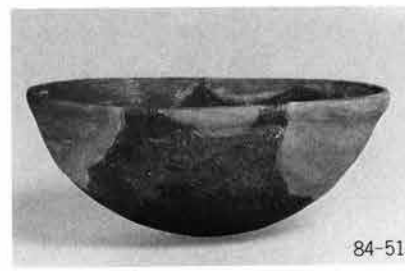


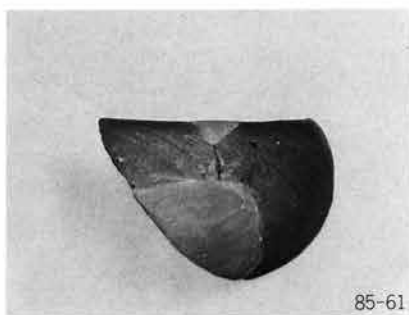


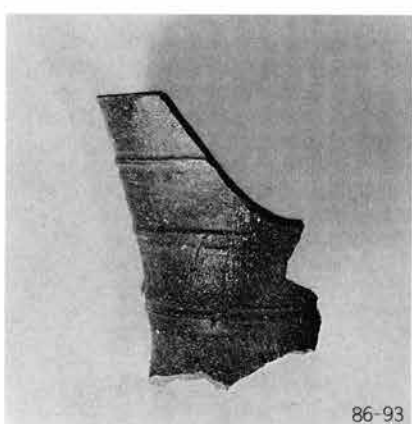
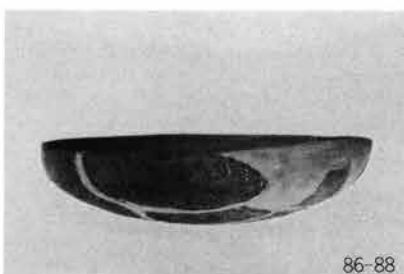


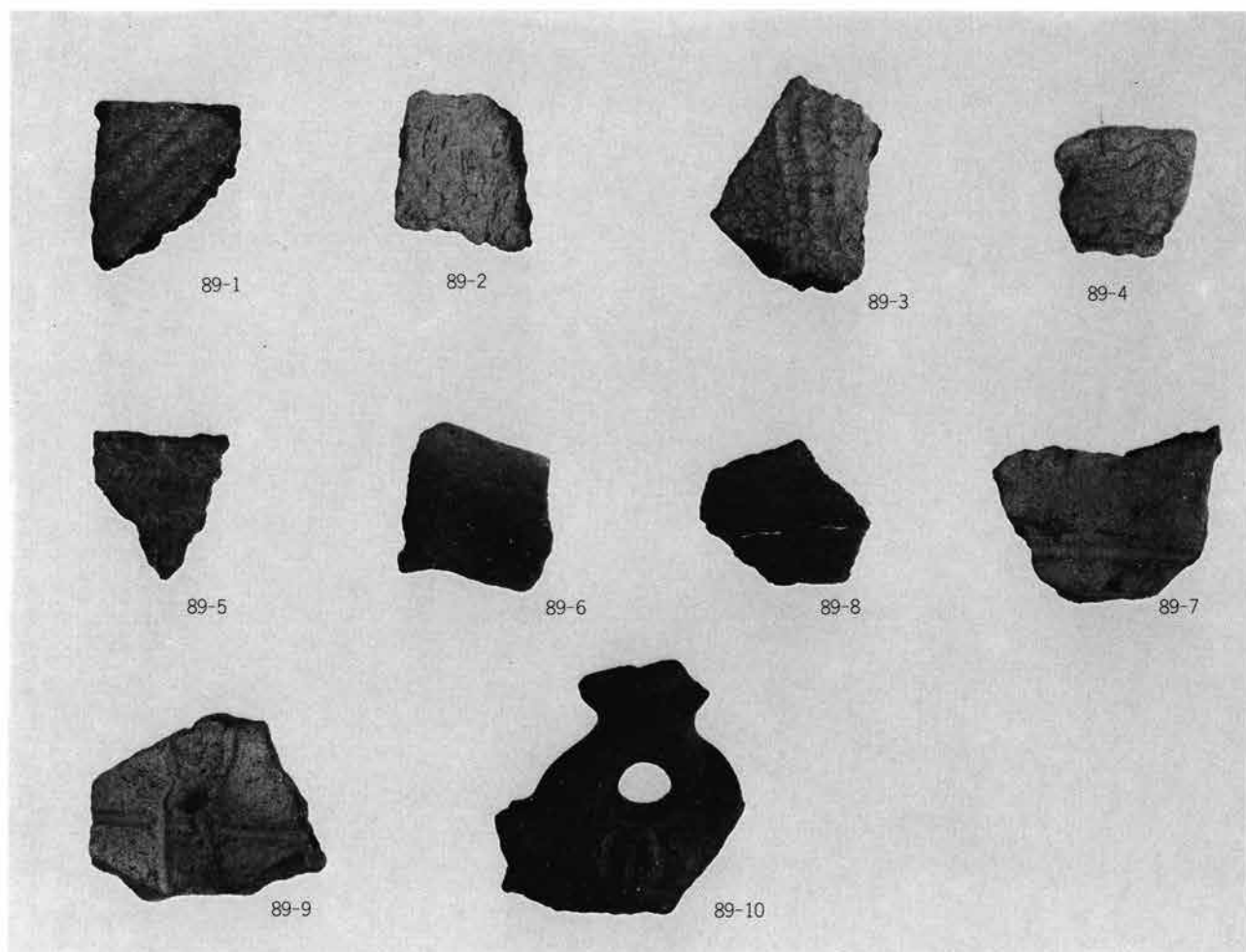
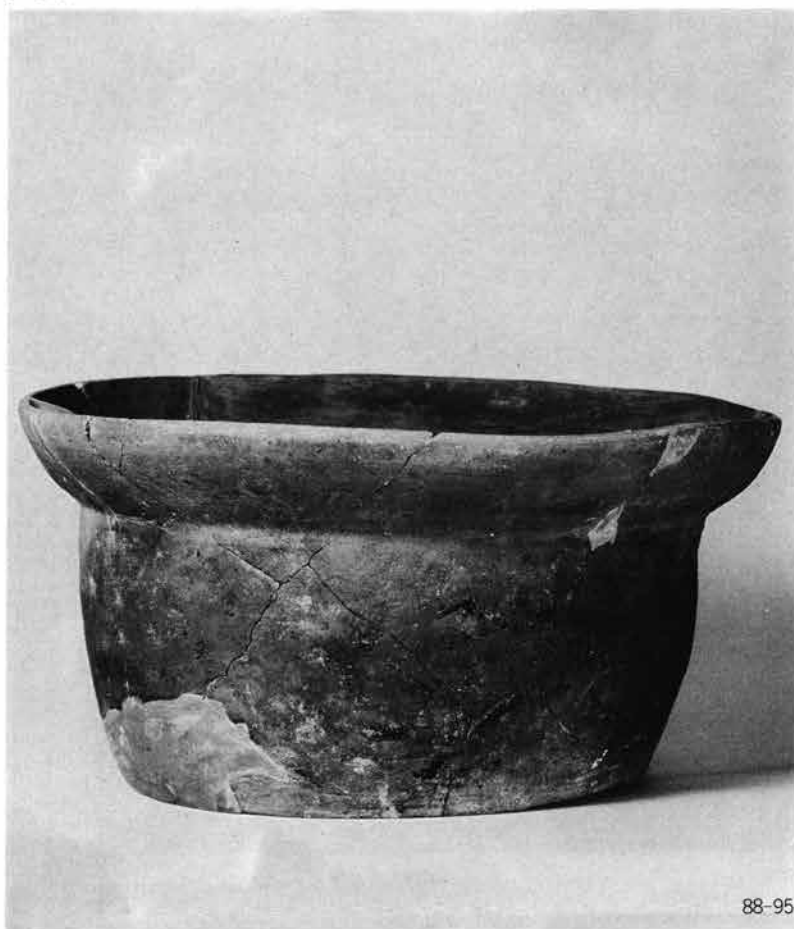


















1 壺形土器(3類)口縁部文様



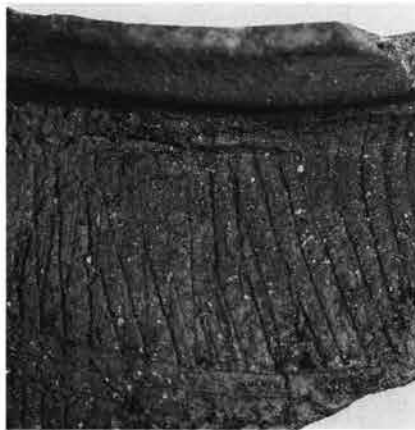
2 同 左



3 壺形土器(3類)胴上部文様



4 壺形土器(3類)胴上部文様



5 S字状口縁甕形土器肩部ハケメ



6 同 左



7 S字状口縁甕形土器肩部ハケメ



8 同 上



9 同 上



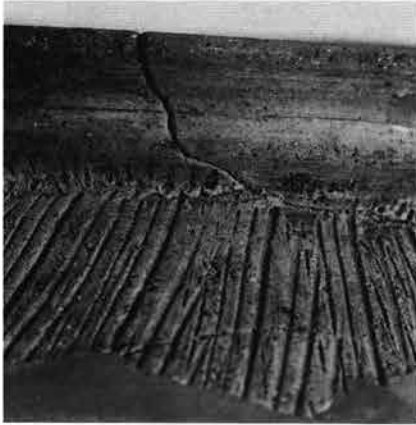
10 同 上



11 同 上



12 同上(ハケメ欠除)



1 S字状口縁甕形土器頸部整形



2 S字状口縁甕形土器頸部内側ヘラナデ



3 S字状口縁甕形土器胴部内側指押しえ痕



4 S字状口縁甕形土器胴下部接合痕



5 S字状口縁甕形土器脚台部内側天井部補充粘土剝離痕



6 S字状口縁甕形土器脚台部内側天井部補充粘土



7 S字状口縁甕形土器底部内側補充粘土



7 S字状口縁甕形土器底部内側ヘラあて痕



9 高杯形土器接合部断面



10 高杯形土器脚部内側絞り目



11 高杯形土器脚部内側ヨコナデ



12 高杯形土器脚部内側ヘラケズリ



八幡原A・B 一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
上滝、元島名A 文化財発掘調査報告書第3集一

印刷 昭和56年3月26日

発行 昭和56年3月31日

編集・発行 群馬県教育委員会文化財保護課  
群馬県前橋市大手町1丁目1番1号  
(0272) 23-1111

群馬県埋蔵文化財調査事業団  
群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
(027952) - 2511

印刷 朝日印刷工業株式会社